
刹那の愛の反逆

煌星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

刹那の愛の反逆

【Nコード】

N8027L

【作者名】

煌星

【あらすじ】

第一部

魔神大戦終結後の横島忠夫を主人公にした物語です。
美神の許から離れた先にあるものは……。

第二部

未来の記憶と因子を受け継いだ横島忠夫？の物語です。
思わぬ結果になった忠夫の今後は如何に？

処女作ですので見苦しい点が多々あるかもしれませんが読んで貰

えたら幸いです。

第二部からTS要素を含みますので注意！

（11/14 第一部修正完了？

序章〈旅立ちは慟哭を超えて（前書き）

序章です

誤字脱字、文章の構成で可笑しな所があれば指摘下さると嬉しいです

6/7サブタイトルに第一部と追加

序章 旅立ちは無涙を超えて

魔界の大公爵である恐怖公アシユタロスが起こした人界への侵攻はアシユタロスの死という結末で幕を閉じた。

魔神の反抗に対処していたGS達もやれ一段落だと日常に戻っている。

ただ一人、真の功労者と呼べる横島忠夫を除いて。

彼は事件の終結後上司である美神令子から掛けられた言葉が受け入れられず、心境の変化を理由に事務所を退社すると宣言する。当然、美神や氷室は猛反発したが……横島は聞き入れなかった。横島は癩癩を起こす美神や泣き喚くおキ又の声を背にその場を後にした。

SIDE 忠夫

『とりあえず…これでハッピーエンドってことにしない?』

靄の掛かった頭の中で美神さんの言葉が思い起こされる。

その言葉を聞いたとき俺は頭が真っ白になった。

結局何も失っていないどころか新しい命も手に入れた美神さん達親子。

アシユタロスの思いに翻弄されて何もかもバラバラになっちゃったルシオラたち姉妹。

そして誓いを口にして大口叩いて結局何も果たせなかった俺。

最後に残ったのは一欠けらの思い出と、永劫に続く無涙の軋み。

『いつか将来、生まれてくるあんたの子供に愛情を注いでやれば…』

…』

いつかっていつだ？

生まれてくる子供って誰が生むって言うんだ？

ルシオラのことを受け入れてくれる人がいたとして生まれてきたルシオラとどういふ顔して会えばいいんだよ？

愛情を注いでやればだつて？

子供に注ぐ愛情と連れ合いに注ぐ愛情の違いも判らないのか？

『ルシオラもしあわせになるんだし……ね！？』

ルシオラがしあわせになる？

何処をどう採ればそういえるんだ？

生きたいと願ったあいつは死んだ。

また一緒に夕焼けを見て、と願ったあいつは死んだ！

一欠片の思い出を大事にして俺を護る事に全霊を掛けたルシオラは死んだんだ！！

気が付けば俺はアパートに戻ってきていた。

扉を開ける時向こうからルシオラが飛び出してくるかも、と期待し然しそんな事は在る筈もなく目に映るのは汚れ散らかった室内だけ。掌で光るルシオラの霊破片を眺めながら俺は一人呟いた。

「……………結局大事なものが護れなかったのは俺だけか。……………情けないよな」

誓いは護れず、護るべき女に命を貰って最後の選択でも愛した女に辛い事言わせて。

「俺はこれから如何すればいいんだ？……………このまま流されて生きて

「いくなんて出来やしない」

ルシオラに貰ったこの命を無駄に消費なんて出来るわけがない。

「何をすれば償える？」

ツ！違うツ！そんな事じゃ駄目だ！」

あいつは俺を苦しめたくて俺を救ったわけじゃない。

俺に出来る事、俺が成せる事……。

S I D E O U T

込み上げてくる思いと現実には打ちのめされ沈む横島。

少しして息子が心配で尋ねてきた母親に縋り付いて泣いてしまった。余りの焦燥振りの息子に事情を尋ねる百合子。

聞き出した事実には呆然とし、今にも己の命を絶ちそうなほど苦しんでいる息子と周りの対応の温度差に腸が煮えくり返る。

百合子が息子の仇を取るのだ、とでも言いそうな様子で行動に移そうとした時それを止める者がいた。

他でもない息子本人だ。

『今更何をしようとルシオラが帰ってくる事はない……それにルシオラの事は俺とルシオラ達姉妹だけの問題だよ、いくらお袋でも口出しはさせない』

そんな事を言い、百合子のする事に歯止めを掛けた。

『それに、今更あの人達に関わる気は一切ないからお袋も手を出さないでくれ……正直あの人らが何考えているのか理解できないから』

続けて語られた言葉に、 ああ、あいつらとの絆は完全に切れてい

るのか　と心中で呟いた。

『もし何かするならばあの人達から俺のGS仮免許を無効にしておいてくれ……まあ、もう捨てているかもしれないけど』

どうやら既に息子の中ではGSというものは何の価値もないものになっっているようだ。

思えばこの子は痛がりで怖がりだ、GSという職業は肌に合わなくて当然かもしれない。

……例え才能が有ろうとも。

何よりその才能のせいで矢面に立たされたのだ。

ルシオラさんの件は別にしても親としても赦せる事ではない。

だから百合子は報復攻撃から抑制攻撃に切り替えることにした。(

……内容は対して変わらないけど)

少なくともこれ以上息子にあいつらが接触することは見過ごせへんと。

忠夫も母親が気持ち切り替えたことに気付き、心配する人がいるのにこの様じゃいけないと奮起。

『……お袋、このまま塞いでいても前には進めないし俺の中にあるルシオラにも申し訳が立たないから……叩き直されに行ってくるよ』

立ち直ったとは言えないが、少なくともさっきまでの悲壮感は消えたようなので一安心する百合子。

聞けば師匠である猿神八又マンと竜神小竜姫のいる妙神山という所に行くそうだ。

『人よりも長い観念で物事を見ることが出来る老師達ならきっと素晴らしい導き手になってくれる』

そう溢す息子の目には信頼の輝きがあった。
百合子も今回役に立てなかつた神族達なら功労者である息子に親身
になってくれるだろうと推測し、

「ならばばらく籠ってきなさい。学校の方には休学する旨を伝えて
おくから」

と、忠夫を送り出した。

今のこの子には何より心の休息と充実感が必要だと判断した為だ。

忠夫はそんな母親に照れたように礼を返すと着替えとルシオラの霊
破片だけを持って飛び出して行った。

残された百合子は息子の照れた顔に衝撃を受けていた。

あの子は馬鹿やつたりするけど、結局人の温もりが恋しかつただ
けなんやなあ

自身の突き放し方針が息子に与えた結果を思い泣きたくなった。

その後、夫・大樹と連絡を取り同じく息子の現状に腸を滾らせ……

然し百合子の語る息子の願いを叶えるべく動き出した。

経済界に多大なる影響力を持つ横島夫婦が本気で立ち上がった以上、
その思いは確実に実を結ぶであろうことは間違いない。

何より子を思ふ気持ちで相手に負けている気はないのだから……。

序章 旅立ちは慟哭を超えて（後書き）

10/24 修正

第一章↳立ち上がりし愛の道化師（前書き）

第一章です

誤字脱字、文章の構成に可笑しな所があれば指摘して下さいと嬉し
いです

第一章 立ち上がりし愛の道化師

妙神山、其処は神族の人界における拠点の一つであり修行場でもある。

最上級神族であり斉天大聖の名を冠する猿神・八又マン、中級神族であり武神として名高い竜神族の小竜姫。

この二柱によつて運営されているこの霊山は霊能者の修行場として最高峰とされている。

……最も今は魔人大戦の最中逆天号の断末魔砲により破壊され再建中であるが。

そんな妙神山の最高難易度の試練を修めたことがある人間は設立以来三人のみである。

その一人である横島忠夫は今、管理人である小竜姫と面会していた。

『横島さん？今日はいかがなされたのですか？』

「……、実は事務所を辞めました。それで今日来たのは小竜姫様と老師にお願いがありました」

『……は？……つて、ええ！？』

突然の予想もしない発言に一瞬頭の中が真っ白になった小竜姫。直ぐ再起動したが驚きを隠せなかった。

二人に出会つて以来妙神山での生活は退屈とは無縁になり、そして少なからず精神的未熟な所も改善できた。

そのある意味小竜姫にとつて思い入れのある二人が絶縁する。はつきり言つて小竜姫にとつて途轍もない衝撃だった。

『い、一体何があつたのですか？』

「…………。俺は……俺自身の事ならどんな理不尽な事でも受け入れますよ。……まあ、抵抗はしますけど」

『……………』
「でも、あの人は言った。……………これでハッピーエンドにしないかって……………子供として生まれてくるルシオラを愛せばそれが彼女にとつて幸せになるって！」

『！そ、それは！？』

その言葉を聴いて小竜姫は悟った。

例え何があるうと少なくとも美神がその言葉を口にする事は絶対在ってはならない事だと。

あの選択を横島に全て任せ、結局何も失っていない美神が口にしていい事ではない。

「別に選択の時のことはいいんです。……………何だかんだ言ってもルシオラにアシユタロスを倒すと誓ったのは俺です。……………けじめは自分の手でつけないと駄目ですしね」

『横島さん……………』

「でも！あの言葉だけは絶対受け入れられない！何があっても絶対……………！」

激昂する横島の心の痛みに苦しむ横顔に言葉が出ない小竜姫。

嘗て素質を見出して以来情けない所は多々あったが、重要な所では光るものを見せた横島。

何だかんだ言いながら身を削って事を成してきた横島。

そして護ると誓った恋人と己の心を犠牲にして世界を救った横島。

『……………私達神魔は今回の戦いで何も成せませんでした。不甲斐ない事この上ありません。貴方がもしこんな私達でも頼ってくれと申されるのでしたら喜んで手を貸しましょう』

「小竜姫様。……………俺は自分の弱さが許せない。でもだからといって強さを求めたい訳ではないんです」

『つまり己の欠点を克服したいということですね？』

『はい、……今まで流されて生きてきた俺だけど、ルシオラの……最高の女の命をこの身に宿す以上無様な事は出来ない。……どうか未熟なこの精神共々鍛え直して下さい！』

先ほどの激しすぎる感情の隆起とは打って変わって静かなその佇まいに、今の横島がどれだけ危ういか察した小竜姫は慎重に事に当たらなければならぬと身を引き締めた。

痛みで怖がり、面度臭がりで自信など皆無に等しく何かあれば馬鹿をやらすには居られない。

あらゆる意味で欠点だらけの横島だが、成し遂げてきた戦果は神魔から見ても素晴らしいものだ。

魔族正規兵の手に負えなかったデミアンを倒す要因になったし、因縁の女蜷叉に決着をつけ拳句の果てに絶対的な存在の魔神相手に認めさせ最終的には倒したのだから。

……無論そんなこと横島にとってしてみればどうでもいい事なのだろうが。

確かに横島にとって重要なのは力云々ではなく精神的なものだろう。

『分かりました。この小竜姫の全霊を持って貴方を鍛え直しませう。老師は今神界の方に行っていますから戻り次第取り次ぎませう』

『はい！』

『小竜姫！自分の部屋の片付け終わったでちゅよー！』

横島と小竜姫が今後のことを話し合っていると奥から少女の呼ぶ声が響いた。

ルシオラの妹・パピリオである。

妙神山の再建の手伝いと精神鍛錬の為に滞在する事になったのだ。

『って、ヨコシマー!? どうして此処にいるでちゆか?』

「パピリオ! …… 精神的に鍛えてもらおうと思っただけだ。ルシオラの惚れた男がいつまでも腐っていちゃ申し訳が立たないからな」

『……ヨコシマ』

まるでルシオラのような儂さを感じさせる微笑を浮かべて話す横島に胸が詰まるパピリオ。

そんなパピリオの頭を撫でながら呟くように囁く。

「……ルシオラを理由にして悲劇の主人公を気取る気はないよ。俺を信じてくれたあいつに申し訳ないからな。俺は俺らしく女好きなまま更にでかい男に成ってみせるさ」

『……女好きなどころは直さないのですね』

「そりゃそうっすよ! 其処が無くなっちゃ俺じゃない別の存在になっってしまうじゃないですか!」

横島が言った事に若干ジト目で聞き返す小竜姫だが、横島は平然と返した。

怒った風に聞いた小竜姫だが、いつもの調子が出てきた横島に内心胸を撫で下ろす。

パピリオは勿論のこと小竜姫にしても横島には笑っていてほしいのだから。

『そうでちゆか……。じゃあ私と一緒にちゆね。小竜姫は小うるさいでちゆが二人で頑張っただけよ!』

『パ・ピ・リ・オ? 修行内容、もう少しきつめにしてくださいませよるか?』

『鬼婆が怒ったでちゆー!』

『誰が鬼婆ですか! お仕置きしますよー!』

じゃれあう様に追いかけてこを開始した二人に乾いた笑いを漏らす横島。

二人が自分に気を使っているのは直ぐに分かったが遠慮せず受け取ることにした。

妹のように思っているパピリオはもちろんだが、師匠であり敬愛の念を持っている姉のような小竜姫も自分にとって身内なのだから。

「いつまでもこのままじゃいけないよな……、しっかりしないと」

気を抜けば直ぐに落ち込んでしまいそうになる自分の有様に叱咤の念を持ち気合を入れようとする横島。

自分のキャラじゃない事は分かっているが、それでもやらずにいる訳にはいかなかった。

鍛え直すと決めたのは他でもない自分自身だ。

流されて生きるのもうやめると決めたのも自分だ。ならば今までの自分を一新するのは当然の事なのだ。

「俺は負けねー！自分なんかに負けてたまるかあー！！」

突然叫んだ横島に驚き追いかけてこをしていた二人はびっくりして立ち止まり横島を見た。

夕陽を眺めるその佇まいはひどく儂げだが必死に立ち上がるような様は雄雄しく見えた。

『……小竜姫』

『分かっていますよ、絶対立ち直らせてみせます』

『ヨコシマは……お兄ちゃんは幸せになれまちゅよね？』

『当たり前です！あの人が幸せになれないなんて事は絶対あってはならない事なのですから！』

氣勢を上げ全身に活を入れる横島、その彼を見守る蝶と竜。
そして横島の懐で彼を励ますかのようにほのかに光を強める蛍の欠
片。

時代の主流に飲まれる筈の思いは今、反逆の狼煙を上げた。

第一章↳立ち上がりし愛の道化師（後書き）

10/24 修正

第二章くいと小さき命に救いあれ（前書き）

第二章です

誤字脱字、文章の構成で可笑しな所があれば指摘下さると嬉しいです

第二章 ぐいと小さき命に救いあれ

金毛白面九尾の妖狐。

一般的には傾国の怪物として恐れられているが、実際は違う。九尾の妖狐は安全を求めて権力者に取り入っただけで、国が災いに侵されたのも取り入る前からその前兆はあったとされている。ましてや神族の調査書には平穏と人界を愛する穏やかな妖怪の女王と記されていたりするのだ。

『どうにもその九尾がそろそろ転生しそうなのね』

「九尾の狐か……確か玉藻の前とかいったっけ？」

横島が妙神山に来て早三ヶ月が経った。

今日は朝からヒヤクメが来ており人界観察の検分を披露している。彼女も横島の精神鍛錬には手を貸しており、細かな調査の仕方や霊視の仕方を伝授していた。

『そうなのね。それでその転生は問題ないのだけど、どうにも政府が過敏な行動を取ったみたいで気になって調べているのね』

「どういう事だ？」

『九尾の狐は今まで人間に追われ続けているから、これ以上変にちよつかい掛けると要らぬ災いを生む事になりかねないの』

「……殺すって言うのか？でもそいつ生まれたばかりなんだから？」

話がきな臭くなってきて眉間にしわを寄せる横島。

ルシオラを失ってから以前よりも更に命の尊さを考えるようになってたのだ。

彼女の命をもって護られた世界で命を軽視する行為が行われようとしている……横島にとって絶対見逃せない事だった。

無論、世界全て綺麗事で治められるなんて思ってもいないが、今回のこれは人間の過剰反応だ。

『そうなのね。転生したてはまだ小さいし力もないし、記憶の方も前世を覚えている程じゃないのね』

「何だよ、それ？傾国云々は人間の捏造で退治するのも人間の都合だと?!ふざけんな!」

『わ、私に当たらないでほしいのね』

話を聞いてく内に激昂しだす横島。

目の前で怒鳴られたヒヤクメはとんだとばっちりだ。

しかも横島の表情は真剣そのものだから当然怒りの表情は恐ろしいものだった。

涙目交じりで抗議するも当の横島は政府の対応に腹を立てており聞く耳を持たない。

『はあ、横島さん。頭にくるのは理解できますが、そのように感情を高ぶらせていては対処の仕様もありませんよ?』

「つつ!」

横島の怒鳴り声を聞いてやってきた小竜姫の忠告により頂垂れる横島……どのような状態であろうと師の言葉には反応するようだ。

精神鍛錬に取り組んでいる横島であるが、まだまだ自制が行えるほど効果は出てないようである。

霊力の制御や新たに覚えた術の制御は上手くいっているのだが……肝心の精神の制御がこれでは話にならない。

『助かったのね。と、とにかく今から再度政府の動向を探るから待ってほしいのね』

「わ、分かった」

それから暫く事の詳細を調べていたヒヤクメだが、ある特記事項を目にして慌てた。

『こ、これは！？政府が美神さんに九尾の抹殺依頼を出して受理されているのねー！』

「『！？』」

果たして告げられた内容に横島と小竜姫は絶句した。

小竜姫は仮にも最高のGSとして名高い美神がそんな依頼を受けた事に、横島は生まれて間もない命を殺す依頼を受けた事に。

そして、ほんの……ほんの僅かに残っていた美神への心残りは今、完全に切れた。

「……ヒヤクメ、あの女はどういう工程で受けたんだ？」

『政府から来た依頼っていうのと、莫大な報酬金が貰えるっていうので受けたみたいねー』

「……依頼の詳細を確認せず？」

『全くしてないのねー』

能面のような表情で聞く横島にヒヤクメは美神に対しての呆れた感情を隠しもしないで告げた。

優れたGSなら依頼内容の詳細確認は当たり前であり、命を扱う職業である故にどんな事態であつても慎重に行かなければならないからだ。

そして依頼主が例え政府であろうと、いや政府だからこそ屈して良い筈がないのである。

『オカルトGメンはどうしたのですか？いくら政府の直轄であろうとより詳しい者の言動なら通る筈ですが？』

『美神美智恵さんが政府に進言しているけど取り合っただけ貰えてないのねー……大戦で無茶したから政府の人達は余りいい感情を持ってないみたいなの』

『……身から出た錆でしょうか？まあ、役に立たないなら期待するだけ無駄でしょうね』

小竜姫がこういう事例の専門であるオカルトGメンの動向を聞くが芳しくないようだ。

成果がないならと直ぐに思考を切り替えどうするかと考える。

人界に余り率先して干渉できない身としてはやれる事など高が知れているのだが……消されそうな命を護りたいと心を奮わせている弟子を思うと、何とかしてやりたい。

「……もし俺が行って、横から搔っ攫ったらどうなりますか？」

『……政府が九尾を抹殺する気である以上、対象の消失は更なる混乱を生むでしょうね』

「混乱させちゃ不味いですかね？」

政府なんかどうでもいいと思っっている横島は割りとマジに聞いた。無能で派閥争いしか出来ない政治家など如何でも良いと言わんばかりに。

『……政府が混乱するのは良くても、九尾が安全に暮らせる確率が更に下がりますよ？ただでさえ人外への認識は良くないのですから』
「あ……そうか九尾が安心して暮らせない世界になっちゃったら駄目っすよね」

『それなら身代わりを用意すればいいのね。GSでも見破れないほど精密な写し身を変わりに置いておけば安心して攫ってこられる筈なのね』

「それだ！」

『それです!』

天命を得たとばかりに立ち上がり叫ぶ横島と小竜姫。
やる事が決まったら行動は早い横島。

直ぐヒヤクメに九尾の詳細と画像を見せてもらい、文珠で写し身を作る。

その写し身に式神操作の要領で操れるように細工を施す。

「よし、これでOKだ。妖力も似せたから完璧だろう」

『流石なのね。私の目でも見分けつかないのね』

『では次に、九尾の彼女に念話で写し身と入れ替わらせる旨を伝えて、上手く人の目の届かない所に移動して貰わないといけませんね』

今回の作戦で肝心なのは政府や美神に見付からないと言う事と、九尾に敵ではないと信じて貰う事である。

なお小竜姫は人界の事に余り干渉できないので直接行く訳にはいかない。

「俺が気配と霊力を極力消した状態で傍に転移して、素早く写し身と入れ替わらせそれを操作する。それが仕留められたら直ぐに帰還する。この手順でいいっすよね」

『はい、十分です。ではヒヤクメ、九尾と会話できるように波長を合わせて下さい』

『了解なのね。ばちっとな』

ヒヤクメがパソコンを操作し、九尾の波長を掴み会話可能状態にする。

九尾の周囲に居る霊能者はどれも感覚の鋭い連中ばかりなので慎重に事を進めるヒヤクメ。

同時に美神が追跡を開始したという情報を掴むが焦らずに対処する

事に成功した。

奇跡である（ひどいのね）

『ん、繋がったのね。美神さんが追跡開始したから急いでね』

『分かりました！……聞こえますか？私は妙神山の竜神小竜姫と申します。時間がないので手短に申し上げます。いいですね？』

！……わかった

『有難う御座います。今からそちらにある男の人が転移しますから人目のつかない木の茂った所に隠れて下さい。身代わりの精巧な式神で誤魔化しますから安心するように』

………。わかった。いまはほかにたすかるてだてもないししんじる

『はい、話は此方に合流した後にしましょう。では、いきますよ！りょうかい！』

何とか了承が取れたので早速行動に移る。

素早く気配遮断と霊力隠蔽の術を自身に掛け、転移する為にヒヤクメから行き先のイメージを送って貰う……そして考える事はただ一つ。

「待っているよ。絶対助けて見せる！」

転 移

文珠が発動した瞬間、横島は九尾の目の前にいた。

その見事な転移に目を見張る九尾。

そんな彼女を他所に素早く写し身を取り出し、九尾に霊波を遮る術を掛ける横島。

そして写し身を操り自分達の所に辿り着かないように飛び出させ、霊波を辿ってきた美神の近くに行かせる。

「！見つけたわよ！莫大な違約金を払わない為にもあんたには死んでもらうわ！」

その言葉を聴いた瞬間、横島は目の前が真っ赤になる。

傍で横島に寄り添っていた九尾はその様子に不思議な感覚に囚われていた。

そんな横島達を他所に美神は逃げ惑う九尾の写し身を結界に追い込み仕留める……ただ一片たりとも躊躇いなど見せずに。

「ふー！何とか逃がさずにすんだわね、政府に恩も売れたし違約金も払わずにすんだし、万事OKね」

「でも、美神さん……聞いた話が本当なら殺さなくても良かったんじゃない」

「うっ！し、仕方ないじゃない！あそこまでやって殺さずにいたらどうせ私たちを目の仇にして襲い掛かってくるんだし！いいじゃない！」

横島は齒を軋ませながらも、もう此処に用はないとばかりに素早く文珠を発動させ妙神山に帰った。

無論、霊力を探知されない為に細心の注意と隠蔽に次ぐ隠蔽を施した上でだが。

「……ただいま戻りました」

『！お帰りなさい、横島さん』

『お帰りなのね』

小竜姫達は状況把握の為に横島達の様子をリアルタイムで見ている。その為、今横島の腸が煮えくり返っているのも把握していたが……取り敢えず九尾に状況把握をさせる事にする。

『ようこそ、此処が妙神山。神族の拠点の一つです。今から貴女の質問にお答えしますがよろしいですか？』

「うん、まさか神族が私を助けてくれるなんて思ってもいなかったわ」

辺りに満ちている神聖な空気が彼女に相手を信じさせる一つの要因になっていた。

最も目の前にいる竜神が放つ圧倒的な竜氣を目にしたら疑う筈もないのだが。

ただ一つだけ聞いておかねばならない事がある。

「ところで、この男は何者なの？助けてくれたから信頼は出来るけど、人間よね？」

『はい、人間ですよ。更に言うなら貴女を助けようと実行に移したのも彼ですよ』

「へ？貴女がこの男に指示を出してさせたわけじゃないの？」

まさか人間が率先して自分を助けるとは思わなかったので意表を突かれる。

そんな様子の彼女に苦笑を漏らすしかない横島。

『彼はある意味この世界を救った英雄です。そして今回の一件は命に隔たりを持たない彼にしてみればとても見逃せなかった事なので』

「小竜姫様！……俺は英雄なんかじゃありません。誓いを護れなかった惨めで情けない男ですよ」

「英雄？」

小竜姫の語った言葉に反応する横島と九尾。

横島はその前半の言葉を絶対認められず、九尾は目の前の男が英雄と呼ばれるほどの存在という事に驚いた。未だ自身を認める事が出来ない横島に、なんともいえない表情になる小竜姫。

横島にとつてあの戦いは己の未熟さが徹底的に露呈しただけだろうが、世界を救ったのも紛れもない事実なのだ。

『横島さん。貴方が恋人を救えなかったのを断罪するのは構いません。結局自分を認めるのも許すのも自分にしか出来ないのですから』でも、貴方が世界を救ったのも紛れもない事実なのね。ルシオラさんの為にも認めるべき所は認めるべきだと思っけど？』

「俺は……、俺は」

自分の内面と向き合うのは此処に来た時からしてきた事だが、これに対する回答は未だ出ていない。

無論、早々結論を出せるほど簡単な問題でもないのだが。

小竜姫達が語る事が紛れもない事実だと判った九尾は、同時にこの横島という男が途轍もない傷を抱えている事にも気付いた。

そして一つの考えが浮かぶ。

自分は九尾の妖狐である。

この事実は変わらないし、変えるつもりもない。

そして妖狐は強い力に惹かれるものである。

目の前の男は上手く隠しているが、今まで見てきた霊能者の中でも抜きん出ていた……正に類を見ないほどに。

また、この男からはとても暖かで心地よい霊力が発せられている。

「ねえ、横島って言ったわよね？貴方に聴きたい事があるのだけど？」

「なんだ？俺に答えられる事なら構わないが」

「簡単よ、何で私を助けようとしたの？私は傾国の魔物なんて呼ば

れたぐらいよ？貴方に得になるような事はないと思うのだけど」

小竜姫が言うにはこの男の意思によって今回の救出作戦が発動したとの事。

少なくとも今の私は匿っても碌に力の行使も出来ないし、子どもなりだから術が満足に揮えない以上女としても色々足りない。

何がこの男を動かしたのか？

それが知りたい。

横島を見れば『何言っているんだ？』見たいな顔をしていた。

「傾国の魔物ね。俺なんか一時は人類の敵にされた事もあるんだぜ？そんな事周りが言うほど気にする事じゃないな」

「じ、人類の敵?!」

「おうよ！で、さつき小竜姫様もチラツと言ったけど、少し前にこの世界の存亡が掛かった戦いがあったんだ」

「世界の存亡？さつき貴方が救ったって言うていたけど」

「俺じゃねえよ。俺が惚れた一人の魔族の女さ。ルシオラって言うてさ、最高の女だぜ。あいつは死に掛けた俺に自分の命を与えて、復活の機会を破棄してまで世界を救ったんだ」

横島の語る内容は凄まじいものだった。

私は国から国賊として追われた事はあったけど、流石に世界中から目の仇にされた事はなかったからだ。

そして横島が惚れた女と語るその時の顔は途轍もない優しさと魅力に溢れていた。

だから理解する……横島がどうしてあそこまで自身を英雄視できないのか。

例え結果がそうでも助ける筈の恋人に護られ、その復活の機会を自身で潰してはとても認める事など出来ないだろう。

「……だから私を救ったの？最愛の恋人の命で護られた世界で命を軽視する所業が許せないから？」

「ああ。それにさ、無垢なお前が汚れきっている人間に殺されるのなんて間違っているだろ？命の価値に神魔も妖も人も変わりなんてないんだから」

ああ、この人には本当に種族の垣根なんかないんだ。

それがはつきりと分かった。

やはりさつき思いついた事は間違ってたなかつた。

この人しか居ない……この人の許でなら私でも本当の幸せを手に入れる事が出来るかもしれない。

例えそうでなくともこの人の許にいたい……そう願った。

「……お願いがあるのだけど、聞いてくれるかな？」

「ああ、俺で出来る事なら何でもいいぞ？……あ、でも金関係は勘弁な。俺、貧乏だから」

『横島さん。何も其処で落とす事ないでしょうに。それに貴方の実力なら直ぐに莫大な富を得る事も可能でしょう』

『まあ、でも横島さんの事だから大金なんて手にしたらエッチな事につぎ込むと思うのね』

「何言うのじゃ！……って、小竜姫様〜そんな 然もあり得ますね 見たいな顔しないで下さいよ〜」

なんていうかさつきの悲壮感溢れる会話や優しさに満ちた会話とはかけ離れてしまったけど。

でも、こういう空気もいいかも。

「お願いって言うのは、他でもない貴方に私の主になって欲しいの」「ん？主？」

『なるほど、確かに横島さんなら適任ですね。丁度横島さんの属性

は土属性ですし、金属性の貴方とは相性もよろしいでしょう』

属性とは存在する者の主体となる性質の事である。

金を生む性質を持つ土属性であり、種族の垣根がなく、優しさに溢れる横島はまさに傷ついた九尾にとって相応しいだろう。

「えっと？」

『主って言うのは庇護して欲しいって事なのね。横島さんは陽の気質だから九尾にとってもいい影響を与える事が出来るのね』

「なるほど……まあ、俺でよければ別に構わないけど……それならしなければならぬ事があるだろ？」

「？」

「名前だよ、名前。呼び名も分からない相手に返事は出来んぞ？」

ずっと九尾だの妖狐だの言っていた事に妙に違和感があった横島。養うにしてもやはり相手の名も知らなければならぬと思うのであった。

「……そういえば名乗っていなかったわ。……それじゃ改めて、私の名は玉藻よ。よろしく、横島」

「こつちこそよろしく。俺の名は横島忠夫。玉藻の主になるのはいいけど俺なんかでいいのか？此方におられる小竜姫様の方が頼りになるぞ？」

『……まあ、そういわれるのは嬉しいのですが』

何処までいっても自分に自信を持ってない横島に苦笑する小竜姫。

玉藻はそんな横島の目を見ながらはつきりと言った。

「確かに小竜姫様は強いのだろうけど、女性だし神族よ？人界を寝床にする私にはやはり人間の方が良いし、男性の方がいいのよ」

『確かにそうなのね〜 小竜姫はそこらの男より強いし、胸も薄いけど、所詮女である事に違いはないのね〜』

『ヒヤクメ！だ、誰の胸が何ですって〜！』

『あ、口が滑ったなのね〜』

始まるは恒例の追いかけっ。

よく飽きないな〜、と呟きながらそれを眺める横島。

玉藻はそんな彼に近寄り再度御願いする。

「ねえ、横島。私の主様になってくれるよね？」

「あ？ああ、俺は構わないよ、って主様あ〜？様はよしてくれ、変な気分になる」

「うん、わかった。……じゃあ、横島。これからよろしくね」

「おう、此方こそよろしくな……玉藻」

こうして本流から外れた物語は新たな配役を加えて加速していく事になった。

流れ着く先はいずこか？

『助けてなのね〜、横島さは〜ん！』

『仏罰です！』

『ひ〜ん！胸が小さいと度量も狭いのね〜！小隆起の馬鹿〜！』

『き〜！まだ言いますか！一度その口縫い付けてあげます！』

『お助け〜！』

「「「やれやれ」

どっとはらい

第二章 ついと小さき命に救いあれ（後書き）

11/13 修正

第三章↳傷つきし者達にしばしの休息を（前書き）

第三章です

誤字脱字、文章の構成で可笑しな所があれば指摘下さると嬉しいで
す

第三章 傷つきし者達にしばしの休息を

横島が妙神山に来てから既に半年が過ぎていた。

この間老師は一度も現れず、小竜姫の指導の下タマモ・パピリオと共に精神鍛錬を中心に組み組んでいる。

ついでにヒヤクメも（……どうやらお仕置きの一環らしい）

そんなある日の朝、何時ものように精神を落ち着ける瞑想をしている頃、神界へのゲートから老師が現れた。

手に書簡を持ち、こちらに向かつてくる様子は焦燥を隠しきれていない。

其処にゲート通過を感知した小竜姫が近づく。

『老師様、お帰りなさいませ』

『うむ』

『今回は随分長期に亘り向こうに御滞在でしたけど、何かありましたか？』

『……デタントを進めるに当たって、現在の神魔バランスをどうやって均等に持っていくかを論議しておった……のじゃがな』

『？神魔間で何か重大な問題でも？』

老師を出迎えた小竜姫。

問いに返す彼の難しげな表情に何かあったのかと問いかけるも、首を振って否定の意を告げる老師。

話によると過激派の連中が動き出す前に神魔バランスを戻す為、熾天使の一柱であるナタナエルが自ら覚めない眠りについたとの事だ。アシユタロスとは少なからぬ因縁があった故の行動だと目されている。

これにより神魔間の緊張状態は表面上、だいぶ薄まったのだが……

別の問題が浮かび上がってきた。

『デタント以外での問題ですか？』

『うむ、我々最上級神魔が世界の霊的守護を担っているのはお主も知ってしよう。だが今回の事でその内の二柱分エネルギーが護りに廻っておらんのじゃよ』

霊的守護に就いている存在は、その者が担う分のエネルギーを護る力へと変換するインバーターのような役割を果たしている。

今回の件で間違えてはならない事が一つある。

それは、二柱は居なくなつたがその存在エネルギーそのものは無くなつてはいないという事だ。

『エネルギーそのものが健在じゃつた為、それ程問題視されてなかつたのじゃが……な』

『……つまり、神魔間でのある意味自滅とも言える問題は回避出来ました。世界が薄くなつてしまつた？』

『そうじゃ、外世界との衝突や融合事故を防ぐべく我々は防護幕ともいえる物の要を担っているが、二柱が居なくなつて、そのエネルギーを支える存在が必要になつてきたのじゃ』

『では、僭越ながらもナタナエル様が永遠の眠りに就かなければ、少なくとも一柱分の代役を立てるだけだよかつたのでは？』

そう、同じ代役を立てるという意味では二つより一つの方が容易の筈である。

確かにデタント崩壊を防ぐのは急務だつたかもしれないが、これでは本末転倒ではないだろうか？

だが、老師は先ほど以上に首を振って否定した。

『駄目じゃよ。神魔間の緊張具合はお主の想像を遥かに超えて危う』

いものじゃった』

『其処まで』

『ナタナエル殿はまず間違いない、神魔間の緊迫具合から逸早く回避しなければならぬ問題を優先したのじゃろう』

『其処までの決意をさせる程でしたか』

『嘆かわしい事じゃがな……、それで今までどう対処すべきか議論しておったのじゃ』

高次元の存在でありながら互いの滅亡を積極的に行おうとする様に、何時もは飄々としている老師もうんざりしているようだ。

話し合いながらも居間に辿り着いた時、ふと見知った気配がある事に気付く老師。

『ところで、この気配は横島とか言う者の気配じゃが……どうかしたのか？後見知らぬ気配もするが？』

『あ……、はい。ルシオラさんに誇れる者に成る為、欠点克服の修行をしています。もう一人は九尾の妖狐である玉藻ちゃんです』

『欠点克服か……だいたい悩んだようじゃの。……然し九尾とは、如何なる工程で此処に来るようになったのじゃ？』

老師もヒヤクメからの報告で魔神反乱の件は聞き及んでいる。

そして、横島の身に起こり為し遂げた事も。

それを聞き、実際記録として残されていた映像を見た時、久方ぶりに己の平和ボケ具合を忌々しく思った。

人界の拠点の一つ妙神山の責任者でありながら、事前に異常を察知できず現場を離れてしまうとは情けない、と嘆いたものだ。

神族は決して人間の上位者ではないが、それでも遥かに優れている事は事実だ。

それが横島のような若者に全て片付けて貰っては立つ瀬がない。

替わって九尾の事だが、近々転生するだろう事は把握していた。

……が、如何な要素が絡んで此処にいるのか？

見当も付かなかった。

そんな老師に横島が来てからの事を粒さに述べてゆく小竜姫。

『……………。ふむ、人界も混迷としておるのう。まあ、九尾の件に
関しては横島が居って好都合だったようじゃが』

『はい、我々だけだったら例え感知しても介入できなかつたですか
ら』

『これもめぐり合わせかのう。……む？そういえば九尾は遙か昔神
族へと勧誘された事もあつたの？』

『……そういえば、そんな事もあつたようですね。私がまだ幼い頃
の事ですけど』

遙か昔、九尾がまだ傾国の魔物と呼ばれていなかった頃、その類稀
な清んだ靈力は神族の目に留まるほどであった。

人界を愛し平穩を求める九尾は神族からの勧誘を断つたが、それ以
後何の因果かその身に暗雲が立ち込める。

人を愛し地上に残つた故に、人から災いの烙印を押された悲しき妖
狐。

『うむ、人類から敵と呼ばれた者と災いを齎す魔物と呼ばれた者が
手を取り合つた訳じゃな。混迷の最中にありながらよく巡り合えた
ものじゃ』

『……思えば、今に限つて言えばこの妙神山が最も平穩に近い場所
なのかもしれませんね。……まあ、今の彼らに要らぬ手を出すよう
な輩がいるなら、許すつもりありませんが』

『確かに、この清涼とした空気を乱す者がいるのならその者は赦さ
れざる罪人じゃな。神も魔も人もあの二人の邪魔をするようなら、
な』

二柱が見詰める先で、共に手を取り合いながら準備体操をしている横島と玉藻がいる。

傍には同じように準備体操をしているパピリオとヒヤクメがいた。どちらとも互いを思い合っているのがよく伝わってくる様である（ヒヤクメは涙目だが）

それを見て、先ほど頭に浮かんだ代案をなかった事にする老師。否、思い浮かべた自分を愚かと内心で罵った。

【代案】：世界の護りに足りない二柱分のエネルギーを支える存在の確保について。

片や恐怖公の代役、これに最も近いのが他でもない横島だ。

かの魔神を模し記憶野の奥深くにその情報を持ち倒した者であり、その娘とも言える存在を身に宿している者。

対してもう片方、熾天使の代役。

実は先ほどタマモの経歴を思い出したのは、その可能性がある故。

その身は神族に成りえる程であり、神族でない者だからだ。

現存する神族では、熾天使の代役を勤められるほどの者がいないからという情けない理由故だが。

ある意味、変化に乏しい神魔故に現段階からその位階までに存在レベルを上げる事が不可能なのである。

だが、それに対して玉藻は優れた素養を開花しつつあり、ある可能性を持つているが故に候補者になれる存在であると気付いたのだ。

ある可能性とは、横島の庇護下にいるが故に彼の莫大な恩恵を受け、飛躍的に位階を上げられるかもしれないという事である。

それは念密な契約を結べば更に高まる可能性である。

とは言え……あの頬が緩みそうになるほど微笑ましい様を見てしまつては、先にあげた代案など在于てはならないものだが。

『……しかし、パピリオも玉藻の嬢ちゃんも清んだ良い気を身に纏っておるのう。横島も前とは比べ物にならないほど平静としておる』
『はい、当初は人間に追われていた事もあってか、精神を落ち着ける事にすら難儀していましたか』

『で、あるうな。身についた恐怖というものは中々削げないものじや』

『ですが、あのように横島さんが手を取って優しく靈氣を送って差し上げると、不思議なくらい玉藻ちゃんの靈氣が清んで落ち着いてゆくのです……私も最初見た時啞然としました』

『……ううむ、普段の落ち着きのなさの底に隠されていた、真の素養が目覚めつつあるのやもしれんな』

小竜姫やヒヤクメが時折語る横島の経歴から鑑みても、体と精神のバランスがちぐはぐの様に思えていた。

基礎を身につけていないにも係わらず、開花する才能はどれも群を抜いているものばかり。

文珠はいうに及ばず、栄光の手や靈波刀も途轍もない物である。

老師は思う。

恐らく才能を支える為に精神の大半を割っていたから、落ち着きがなかったのだと。

また、その才能は現代の英雄を生み出す為に宇宙意思が与えたのは、と。

事実、彼はそれに相応しい偉業を為し、計り知れない悲劇に見舞われた。

そして現在、精神の成長が肉体に追いついて来たから、このような結果が生まれているのはある意味当然だとも。

『なんにしても、横島達が此処で己の在り方を鍛え直すと言つなら、我らが全力を持って支えてやれば良いだけじゃ』

『はい、もちろん私はそのつもりですけど……老師様は先の件があ

るのでは？』

小竜姫は老師が持つ書簡から恐らく何らかの任を承ってきたのでは、と考えていた。

然し、そんな小竜姫に老師はニツと笑って言い切る。

『そんなもの上の連中に任せておけばよい。そんな事よりあの三人を助けてやる方が断然、有意義じゃ』

『老師様……例え事実でも、そうはつきり言うものでは有りませんよ？』

呆れたようにそれでいて『確かにそうでしょうねえ』といった風な小竜姫に老師は更に笑う。

思えば横島が来てからというものの小竜姫も柔らかな物腰になった、と感慨深く思った。

急激な変化が起こりえない我々神魔にこれだけ影響を及ぼす横島という少年に改めて興味を持つ老師。

『……で、横島はいつまで此処におられるのじゃ？』

『基本、何かを掴むまで滞在するようです。先日、親御さんが訪れて息子さんの様子を見て、学校を辞めてでも此処で過ごした方がいいだろうと判断されたようです』

『ほう、思い切ったものじゃな。人の身ならば他人との交流は優先すべき事柄じゃと思うが……それ程あの者の有様に感銘を受けたという事かの』

母親である百合子がこの地に赴いた当初は、そろそろ学校に復学した方が周りとのすれ違いがそれ程起きないだろう、という思いで来た。

然し、いざ来て秘密裏に様子を窺えば、其処に佇んでいたのはまる

で別人のように成長した息子。

その様はとても肅然としており、繰り出される動きは一つ一つが芸術のようであった。

最初はそれを見て唾然としていたが、落ち着いてくるとこれまでの自分の教育が如何に偏っていたかを思い知らされる。

悄然としながらも息子と対面した百合子だったが、忠夫はいきなり現れた母親に驚きはしたものの、さして取り乱しもせず態々此処まで来た事に感激していたぐらいだ。

これに止めを刺された感じになった百合子は、忠夫に一応これからの予定を聞くも既に下界させる気はなくなっていた。

此処に居れば余計ないざごさに巻き込まれずに済むし、より一層素晴らしい成長を遂げるのではという思いが強くなっていったからだ。

「……忠夫、そろそろ学校に復学した方がすれ違いもそれ程起きなくていいと思うけど……如何する？」

「うーん、出来れば何かを掴むまでは此処に居たいけど。お袋がそう言うならそうした方がいいかな？」

自分の思いをはっきり口にする息子だが、母親である自分の考えを優先した方がいいかと考える様に改めて自分の考えを取りやめた。

そのかわりと、一つの事柄の確認と許可を取る。

その際、忠夫は百合子はかなり強引な手段に出る事を察したが、此方を氣遣う母親の姿に折れた。

「……ルシオラの事を世界中の人達が認知してくれるのは嬉しいけどさ、ぜってー荒れるだろ？」

「それも必然だよ。人の手に負えない事を代わりに為して貰ったのだから、自粛し黙祷を捧げる事ぐらい実行すべきでしょ？」

「……やっぱおっかねーな、お袋は。……分かったよ、ヒヤクメに言えばほぼ完璧に近い資料が貰える筈だ」

「分かったわ。……人界の事はきちんと整理付けとくからあんたは安心して己を磨きなさい」

母親のルシオラに対する思いが暖かく、故に彼女を紹介できなかつた事が殊更悔しく思える忠夫。

百合子はヒヤクメや小竜姫に詳細をまとめた資料と共に資料では伝わり難い事柄を確認した後、見送る息子の視線を受けながら下山していった……此方を思いやる愛する息子の視線をくすぐったく思いながら。

ちなみに、玉藻が百合子に興味を持ち、忠夫が自分を助けた件を話すと、その息子の行為を褒め美神の行いに益々憤りを奮い立たせたきつと人界では大きな動きが起こるのでしよう、と小竜姫は思ったものだ。

あの覇気はそれだけ事の成熟を容易に想像させるものだった。思い出した小竜姫は思わず身震いする。

『はい、とても。それでどうしますか？これまでは精神鍛錬と細かな知識の補填や術の習得などをしてきましたが』

『そうじゃのう、あれ程の才気持つ二人じゃ。パピリオは魔族故に早々急激な変化は起こり得ないじゃろうが』

『ええ、おかげで一時剥れていましたが、今は玉藻さんと同じようにして貰う事で精神的にはだいぶ落ち着いてきました』

横島が譲渡する霊力は相手を労わり癒す性質を持っている。

相手に安らぎと幸福感を与える事が出来る規格外の霊力を持つに至った経緯は、玉藻の毛換わりを病気と勘違いした横島の暴走の末路に開花したというものだが。

なんにしても又とんでもない才能が一つ開花したという事である。

『如何したのか……、そういえばチャクラ開眼の行は行ったか？
最近の人界では自然に開く以外にはしておらんようじゃが』

『あ、そういえばその修行がありましたね。此処に来る靈能者は誰も少なからず開いた方ばかりなので気にしていませんでしたか』

基本七つあるとされるチャクラを開けば其処で靈力を廻す事により瞬時に靈力を回復出来たり、膨大な靈力を物に出来るだけでなく、それぞれのチャクラが司る感情や性質を制御するのが容易になる。正に今の横島が求める物であろう。

そうと決まれば早速という事で二人は横島達の許へと赴いた。

「？あ、小竜姫様と老師。やっと人界に戻ってきたんすか」

「？小竜姫様と……猿？」

『猿爺でちゆか。こうして対面するのは初めてでちゆね』

『……小竜姫？』

『あ、いえ、これは、その、ですね』

『まあ、いいがの。初めまして玉藻の嬢ちゃんと蝶の化身パピリオ、
わしは猿神の斉天大聖を名乗っている者じゃ。よろしくの』

「へ?!……ほ、本物!？」

『流石にアシユ様が警戒していただけあって、途轍もない存在感で
ちゆね』

事前に教えていなかった事を指摘されうるたえる小竜姫と、予想していなかった大物について確認をとってしまう玉藻……そして一人感心するパピリオ。

ちよつとしたカオスが生まれたが、何とか收拾すると先ほどの事を告げる老師。

それに喜んだのは他でもない横島。

何せ明確な結果として形になって現れるのだからその嬉しさは一樣だ。

……最もチャクラそのものは霊視以外では目に出来るものではないのだが。

『それで、横島さんの現在における霊体の状態を確認する事から始めましょうか』

「はい、……でどうすればいいんですか？」

『体全体の霊力を均等に張り巡らし、その状態で霊力を練ってみるのじゃ。そうすれば何処のチャクラが開いておるか、又開きかけておるかが分かる』

「私もするの？」

『玉藻の嬢ちゃんはまだ少し霊体が安定してからの方がいいのう。』

『霊力自体は落ち着いているが……、もう少し間を置いた方がよかる』

『私は関係ありませんね。神魔にはチャクラがありませんから。引き続き瞑想でもしているでちゅ』

『そうですね、パピリオは自身の内面を拡げる事に従事した方がいいでしょう』

老師の指示の下、霊力を張り巡らし練る横島。

まだその時期ではないといわれた玉藻はそんな横島を見守っている。そしてチャクラを持たない魔族のパピリオは自身の存在を高める為、瞑想を開始した。

横島の人間にしては規格外の霊力が全身を拳大ほどの大きさで安定する。

そこから凝縮する感じで体内に収納されてゆく霊力。

目に見えて高まる部位は、眉間と陰部と会陰の三つであつた……後、心臓部も若干高まっている。

『ほう、既に三つが完全に開いておるのう。惜しくも精神に深く関与しておるチャクラはそれほど開いておらんが……それもこれから

の修行しだいじゃしな』

『第一、二、六チャクラが開いていますね。若干第四チャクラも開きかかっていますが……これは最近の霊力譲渡によるものでしょうね』

『他に精神に深く関与しているのは第三と五のチャクラじゃからまずそれを開くように心がけよ。場所は臍と喉じゃ』

ここで軽くチャクラの説明をしよう。

会陰部から頭頂部まで合計七つのチャクラ。

それぞれの名と性質を簡単に纏めると次のようになる。

第1チャクラ：ムーラーダーラ……安定感や力の根源などの性質を持つ。

自制心の性質も持つからこのチャクラは最近に開花したものと思われる。

第2チャクラ：スヴァーディシュターナ……創造性や生命に関する性質を持つ。

感情表現も司る事からこれも最近だろう。

第3チャクラ：マニプーラ……自尊心や判断力の性質を持つ。

霊能力や先に述べた判断力から考えて既に開花していても可笑しくない筈だが、今は閉じているようだ。

第4チャクラ：アナールハタ……感覚や癒しの性質を持つ。

玉藻やパピリオに対する保護精神や家族愛に似た感情によって促されつつあるチャクラ。

第5チャクラ：ヴィシュダ……表現力や理解力の性質を持つ。

一見開いても可笑しくないチャクラだが開いていない……歪んだ愛情表現しか出来ない故だろうか？

第6チャクラ：アージュニヤー……集中力や直観力の性質を持つ。

心眼により目覚め、煩惱全開により開くチャクラ……最近はやくメとの修行で普通に関けるようだ。

第7チャクラ：サハスラーラ……自由意志や高次元へと至る性質を持つ。

実はこのチャクラ一時開いた事がある……今は閉じているが。

元が霊的なものだからどのチャクラもそれなりに精神には関係してくるが、とりあえず残されたチャクラを開く事が優先された。

第七チャクラは特別なチャクラなので他が優先されたのだ。

「でも、改めて確認するとんでもないわね？忠夫って此処で修行した以外は特に何もしてないのでしょ？」

「まあ、そうだけどさ」

本来チャクラとは数十年からなる鍛錬の末に開かれるものである。自然かどうかはともかく、この年齢で既に三つも開いているのはある意味異常である。

『横島さんが非常識なのは今に始まった事ではありませんが……確かに』

「しょ、小竜姫様?!そりゃ無いっすよ」

淡々とこなしつつも時折賑やかに談笑する横島達。

いつの間にか居なくなっていたヒヤクメが昼餉の時刻を告げに来るまで修行は続けられた。

こうして彼らはより一層密度の濃い鍛錬に身を置く事になる。

約束の時までまだ少なからず猶予があった。

それが訪れる時、彼らは如何なる決断を下すのか？

その答えを知る者はまだ居ない。

ちなみにヒヤクメにはきっちりお仕置きという名の苦行が科せられた。

『あ、あれ？（汗）何でなのね〜！』

『一人修行をサボったからです！』

『私は才チ担当じゃないのね〜！こういうのは横島さんの担当なのね〜！若しくは作者の技量不足のせいなのね〜！』

『……ともかく仏罰です！』

『ひ〜ん！理不尽なのね〜！』

どっどはらい

第三章「傷つきし者達にしばしの休息を」(後書き)

11/13 修正

幕間く断罪の時は来たりて（前書き）

幕間です

今回は横島百合子が主人公です

誤字脱字、文章の構成で可笑しな所があれば指摘下さると嬉しいで
す

幕間／断罪の時は来たりて

【横島百合子】

横島忠夫の母親にして、村枝の紅ユリとして世界に名を馳せたスーパーOLである。

常識外の直感力と行動力を持ち、為すべきと見定めた事は悉く成立させていく恐るべき女性。

出産を機に現役を退いたが、その手腕は衰える事を知らず未だ健在。夫の失敗を機にナルニアへと夫婦のみで飛んだが、ある意味それが彼女の失敗の第一手だったのかもしれない。

横島忠夫が人類の敵と一時報道され、その後それを撤回する旨が流された。

戦いが終結し東京への便が再開した時、真つ先に息子の下へ向かった百合子は憔悴した彼と出会う。

そして息子より聞いた真相は百合子の胸中に言いようのない怒りを掻き立てた。

一時とはいえ未成年であり護るべき子ども忠夫をスパイに仕立て上げ、あまつさえ人類の敵などという消せない烙印を押したのだ。どれだけの事情が在ろうと許せる訳がない。

それに事態が終結したにもかかわらず、被害者の親である自分に何の連絡もない。

やっていた事は旦那と乳繰り合い、娘との再会を喜んでいただけ。そんな中息子は恋人を自らの手で殺し、上司にハッピーエンドなどと言われていた。

ふざけるな

マグマでさえいっそ清々しいと言えるほどの怒りが身を滾る。

だが、息子は自分に手を汚すなど言った。

自分にとってあの者達は最早理解の外にいる真の意味での怪物だと。

情けなかった

息子があの名を呼ぶ事すら憚られる女どもを案じているのではない事ははつきり分かる。

だが、此処まで人に対して無感動になるまでに手を打てなかった自分が愚かしく思えた。

同時に母親である私を案じているのだというのが身に沁みて伝わってくる。

嬉しかった

あれだけの事があつたにもかかわらず、人を思いやる気持ちを捨てずに持ち続けていた事が。

悲しかった

あれほどの事があつたのだ、周りなど気にせずもつと自分を労わって欲しかった。

息子が私に手を汚して欲しくないというなら、汚さないように正當な面から叩きに行く事にしよう。

幸い息子から仮免を無効にして欲しいという願がある。

これ関連から突ける所は全て突っ込んで痛みを知って貰おう。

特に同じ母親という立場にいる方には。

資料集めに奔走する彼女は一切の油断もしないと心に誓う。

この時、百合子の心の中に赦されざる敵として美神美智恵・美神令

子の名が刻まれた。

数カ月後に訪れた妙神山で再会した息子は素晴らしい佇まいでそこにいた。

これまでの様相は何だったのだと言いたいほど、落ち着いた物腰だ。だが、息子は更なる成長を欲した。

まだ足りない……己を断罪する顎に身を晒しながら、傷ついたその身を鍛え続ける。

なれば不甲斐ない我らはそれを許し、自らに出来る事をするのみ。幸い更なる一手を打つ為の許可は取れた。

忠夫に止められているから命を狙うような事はせえへん。でもな、社会的には死んで貰うで？

なんとも物騒な誓いを胸に百合子は行動に移った。

無論夫である大樹もそれを察しているが、気にも留めていない。

流石に今回の事は彼も腹に来ているので止める気など起きないのだ。少し前に、美神家の活躍で世界の危機を未然に防いだという報道が流される旨を事前に感知した時、その思いは最高潮となった。

ちなみにその行いは横島家が握りつぶしている。

そのふざけた情報操作には反吐が出たが、とりあえずそれを為そうとした者達には誠心誠意を持って真実を教え、今後この様な事がないように切実に御願いした。

彼らのその時の様相は揃って蒼白だったが気にするような事でもない。

横島が妙神山に籠って半年後。

【美神除霊事務所】

今此処は混沌となっていた。

この事務所に宿っている人工幽霊一号が心労で昇天してしまいかねないほど。

それは現在訪れている検察官や国税庁直々の指示で税務署員が押しかけている事だけが理由ではない。

無論それも理由の一つだが、それ以上に同伴した横島百合子の存在が大きかった。

次々と暴かれる脱税や隠し資金、違法所持品を横目に百合子の語った横島忠夫に関する一切の権限の破棄。

美神令子にとってそれは認められないものだった。

例え半年という永きに亘る彼の不在を過ぎても、彼自身から事務所を去る事を告げられていても、だ。

「美神令子さん？例え貴女が認めなくとも、あの子の親である私も、そしてあの子自身も既に貴女とは関係を持ちたくないと断言しているのです」

「ですが！私は彼の師匠であり、GS仮免許を発行する義務があります。到底それは認められません！」

「仮免は破棄して貰って結構です。既に協会の方には受理するように申し出て、目の前でさせました。六道などの横槍が入る前に、ね」
「なっ！？し、しかしこの仮免は彼が命がけで取ったもの。親が勝手に如何こうしていいものでは！」

「ご心配いりません。息子自身が私に申し出た事です。あの子は既にGSに成る気はございませんから」

「ッ！……しかしそれでは師匠たる私の立場が！」

「師匠といっても碌に指導した訳でもなし、いくらあの子から行動しなかったとはいえ、身を護る術すら渡さず便利な霊能に目覚めれば寄生虫の如く採取するだけ」

「き、寄生虫?!」

「否定はさせませんよ？例えどのような理由があろうとも、貴女は息子に正当な報酬も与えず、公表には数億円渡している事にしてい

る始末……同じ大人として恥ずかしいわ」

税務署員が提示する違法書類を片手に見下す百合子。

傍で作業や報告をしている者は一様に百合子に対し同情していた。探せば探すほど沸いて出てくる劇物に検察官もノイローゼになりかかっている。

「今あの子は過去の不甲斐なく真つ当な矜持も根性もなかった自分に見切りをつけるべく行動を開始しました。今回の事で周りの大人が如何に頼りにならないか思い知った故に、ね」

「……………」

「それには私自身も含まれてはいるけど、当然だと思っているわ」

「……………」

「……やれやれ、今度はだんまりかい？　まあ、ある意味貴女も被害者だとは思っているけどね……美神美智恵の」

「な？！ママを悪く言わないで！」

次々に暴かれる違法書類や百合子の物言いに、だんまりに移行していた令子だが、百合子の紡いだ母親の名に反応した。

それを見て取り百合子は苦虫を噛みつぶしたような顔になる。思っていたよりも精神が幼い事に気付いたからだが。

「……貴女があの子を如何思おうが勝手だけどね、私にしてみれば貴女があの子を庇うのが信じられないわ……例え親だとしてもね」
「……………」

「あの女は過去に魔族の襲来から逃れる為、そして対策を練る為に未来へ飛んだらしいけど……私からしてみればそれはただの現実逃避よ」

「……魔族は貴女が思っているほど軽いものではないわよ。ママが未来へと飛ぶ事で、私への魔族から注意が逸れたわ」

「重さの問題じゃないわよ？あの女は中学生とはいえ幼い貴女を置き去りにしたのよ。荷が重いなら神族に頼って匿って貰えばよかったのだから」

「そんなの美神の矜持じゃないわ！誰にも負けないからこそ美神の女なのよ！」

「……貴女言っていて気づかないの？貴女を置き去りにした時点で、あの女は自分に負けているのよ？しかも矜持って言うほどの物じゃないでしょ……それ？」

「ぐ？！」

「しかも誰にも頼らないくせに世界を巻き込んで、戦いの最中は旦那さんと乳繰り合っていたのでしょ？私にはあれの神経が信じられないわ」

「そ、それは……確かにそうかもしれないけど」

自分が苦しんでいる時に父親と愛し合っていたのは事実だけに言い返せない令子。

実際、自分もあの事には思うところがあつたのは事実だ。

いくら人目を憚るにしても世界の危機を目の前にする事ではない……事の張本人の一人であるからには尚更。

「これで自分達の間だけで被害を食い止めたって言うなら私も何も言わないわ……でも、実際は如何？」

「……それは」

「自分達には結果的に何の被害もなく、未成年の息子にスパイはさせるわ……身の安全を護るにしても殺しかけるわ……息子に可能性があると分かれば掌をひっくり返すわ」

「……う、うう」

全て事実だけになんとも言えない令子。

しかも目の前にいるのは被害者の母親なのだ。

「あの女が未来に来て為し遂げた事は何かあるのかしら？碌に娘にフオロもせず居なくなり、お蔭で娘は捻くれて守銭奴を地でいく素直になれない天邪鬼に育ったし」

「お、大きなお世話よ！」

「先の戦いで真に功績をあげたのは文珠を身につけていた忠夫とそんな忠夫に真の成長を促したルシオラさんでしょ？」

「……………」

「未来に備えて一体どれだけの事を為したのだけか？肝心な時には寝込んでいただけじゃない…………よくそれで司令官が務まるわね」

「…………貴女は何処まで知っているのですか？」

「無論全てよ？息子からの口頭だけじゃなく、神魔族からの情報提供と唐巢神父より極秘事項まで網羅しています」

「ッ！……………そうですか」

令子是一般人が知る由もない事まで把握している事実にも動揺する。

あの選択や慟哭まで知られているのでは自分に贖う術はないと分かっってしまったから。

百合子はそんな令子を見て溜め息を吐いた。

何も分かっていないと気付いたから。

「言っておきますが…………、あの選択に関しては特に言う事はありません。少なくとも息子自身は周りに然程言いたい事はないらしいですし…………私はそうでもないけどね」

「え？ど、どうしてですか？！」

「あの選択はあくまで忠夫とルシオラさんだけの神聖なもの。他の輩の意思なんて一欠けらも介入していませんから…………いえ、する事は許されないというべきね」

「……………」

告げられた事実にも令子は呆然とした。

あれだけ悩んでいた選択の際のやり取りが、実は横島にとっては自分達だけの問題だったなんて思わなかったからだ。

同時に疑問が出来た。

では一体何が原因で事務所を辞めたのか？

未だ答えに気づかない事に気付いた百合子が答える。

「どうやら本当に気付いてないようやね、とことん自分第一主義な
んやねえ……呆れるわ」

「……どういう事？」

「忠夫があんたの元を離れる切欠というか止めになったんはな、大
戦後に埠頭であんたが忠夫に言った事や」

「……埠頭で？」

思い返されるあの時の会話。

……だが分からない、何がいけなかったというのか。

「あんたは言ったそうやね、ハッピーエンドにしないかって。子ども
もとして生まれてきたルシオラさんを愛せば彼女の幸せだと！……
ふざけんなよ？」

「な、何が悪いって言うのです？その通りじゃないですか？」

ここまで言っても未だ分からないでいる令子に百合子は脳裏で思っ
た。

あかん、余りの愚かさ加減に脳の血管がぶち切れそう
やわ

だが、これだけは言っておかなければならない。

「ルシオラさんは死んだ……この事實は変わらん。例えどんな腹案があるうが、これは替えようのない事實や。そしてあんたは何も失つてない、少なくとも人員的にはな」

「で、ですから子どもとして」

「アホ抜かせ！誰に産んで貰うつもりや？！それに忠夫はルシオラさんを失った矢先や！それなのに子どもやと？ふざけんな！」

「……そ、それは」

「忠夫とルシオラさんの幸せはあの二人だけが決められる事や。それにもかかわらずお前は我が物顔でのたまつたらしいな……何様や……！」

百合子の語る言葉に頂垂れることでしか返事を返す事が出来ない令子。

それは、少なからず忠夫の気持ちがよくやく分かったからだ
自分は知っていた筈だ、己にとって絶対的なものを失うという事が
どれほどのものか。

分かってしまつてはもう反論する気力さえ湧かない。

己は絶対的に間違つてしまつたのだから。

顔面蒼白なまま黙つてしまつた令子に、百合子は少しばかり溜飲を
下げ落ち着く為に一息ついた。

これで少なくとも娘の方はいいだろう。

己の馬鹿さ加減を自覚したなら、これから身を正すようになる可能性も出てくるだろうから……確定的には言えないけど。

「少しは理解したようなのでこれでお暇するわ……貴女が自分を最高の女だと自負するなら、もっとマシな言動と行動を取るのね。少なくとも金に括つているようじゃあ半人前以下よ」

それじゃあ失礼するわね、と出して出てゆく百合子。

そして調査を終え、後日正式に辞令等を発行しますと告げ退出する
検察官と税務署員達。

残った令子はただ茫然自失としていた。
ちなみにおキ又も傍に居たがこちらは百合子の語る内容に、早々に
己の失態に気付き、自身の行動力の無さと優しさと履き違えた優柔
不断振りに自己嫌悪に陥っている……此処からどういつ行動に出る
かは知る由もないが。

百合子の指摘と先導の下行った検察はこの上なく見事にはまった。
彼女に礼を言つて去っていく検察官達を背に後は大元や、と隣のオ
カルトGメンのビルを見上げる。

既に旦那が乗り込んでいたので、暫らくすれば全て終わる筈だと予
測しながら。

其処まで思つて百合子は思い出した。

確かに私がこつちを担当して良かったようね。娘でこれだけ心が
掻き乱されるようでは、あの女を前にしたらどんだけや

何時もは軟派な大樹だが、この時ばかりは違った。

美人に目の無いあの男が、あの女には微塵にも動じないのだ。
名の通り大樹の如く。

最もこつちという所があるから惚れたのだらうけど、と思ひ彼の言つと
おり娘の方を担当する事にしたのだ。

「さて、そろそろ決着ついた頃かしら……あれもそろそろ報道され
る筈だし」

そう言いビルを見上げる百合子の顔は肅然としていた。

此処で話は少し時間を遡る。

オカルトGメンの前に来た横島大樹は先ほど美神令子の方に行かせた百合子を見送った所だ。

ビルを見上げる大樹の表情は今までになく渋いものだった。

百合子に対象の写真を見せられ、その行いを聴いた時、大樹は思ったものだ。

まさか俺の食指が全く疼かない美女がいるとはな、と。

「とにかく行くか、相手は世界を騙した世紀の悪女だ。気を締めていかんとな」

大樹は事前に揃えた膨大な資料をもう一度反芻しながらビルへと踏み入れた。

直ぐに受付に美智恵の所在を確認すると通すように掛け合う。

流石にアポが無いのでそれに渋る受付嬢だが、其処に西条が現れた。既にその登場を予期していた大樹は直ぐに矛先を彼へと変え、対面する。

「失礼、西条輝彦君だね？」

「え？はい、そうですけど……。貴方は？」

困っている受付嬢を助けようとした所に逆に此方に向かってきたので出鼻を挫かれる西条。

それを察してニヤリと笑う大樹。

「私は横島大樹と申します。忠夫の父親ですよ」

「！？よ、横島君の親御さんですか！失礼しました、美神支部長に何か用件が？」

「うむ、少しばかり話があつてね。無論、通してくれるだろう？」

有無を言わせないだけの迫力ある表情で問いかける大樹。

それなりに修羅場をくぐってきた西条だが、彼の醸し出すオーラには贖えなかった。

若干憔悴しながらも御案内をしますと言い先導する西条。

……その背中は哀愁が漂っていた。

「こ、こちらです。支部長、お客様がお見えです」

『はい、お通しになって』

「では、どうぞ」

「ありがとう、西条君。ああ、もしかしたら後でうちの家内が来るかもしれないが、その時は下で待つように言っておいてくれ給え」

「わ、分かりました……では」

中から聞こえてきたのんきな声に大樹のオーラが一瞬増したように感じた西条だが、触らぬ神になんとやらの精神で早期撤退を図る。

返される台詞に頂垂れながらもその場を後にする。

今からここで行われる会話の内容を予想もせずに。

大樹は己の放つ気配を何時ものそれに切り替えると中へと入っていた。

「えーと？どちら様ですか？」

……最も入った瞬間、返ってきた台詞にぶりかえしそうになったが、気を静めて自己紹介をする大樹。

「初めまして、横島大樹と申します。貴女に殺されかけ、利用されつくした横島忠夫の父親ですよ」

「！！？」

気は静めたがどうやら台詞までは落ち着けなかったようだ。

それでも大樹は気にせず会話することにした。

どの道避けては通れぬ道。

目の前で顔面蒼白で立ち尽くしている間抜け面を見つつ再度語りかけた。

「さて、今回訪問したのは貴女に今後家の息子に関与しない事を誓って貰う為に来ました。これが今回の最重要命令です」

未だ呆然としている美智恵を他所に淡々と紡いでいく大樹。

「色々言いたい事はあるのですけどね、余りにもアレな貴女の行いに何処から突っ込めばいいのか迷ってしまってますね」

「……アレですか？」

やっとの事で返した台詞にピクリと眉を動かす大樹。

「ええ、まあ大抵の事は家内が貴女の娘さんに零しているでしょうけど。貴女の愚かで自己中心的な行いをね」

「ッ！……令子に何をする気でしょうか？」

「別に何もしませんよ？彼女が家の息子に関与しないように釘を打つだけです。これ以上貴女方が傍にいられると悪影響が酷くなり過ぎますからね」

「どつという意味ですか？」

顔に嫌悪を浮かべながら問う美智恵に対し、如何なる感情も浮かべずただ淡々と台詞を零す大樹。

「言った所で貴女が理解できるとは思っていませんよ。……誰も信用せず頼らず全てを巻き込み他人を犠牲にする貴女にはね」

「！……貴方に何が分かると！人の手には負えない超存在に狙われってきた私達の気持ちか！？」

「分かりませんな。護るべき子どもから逃げ、大した手も打てないくせに未来へと逃避し、土壇場で寝込んでいた貴女の気持ちなんて」「わ、私がいつ令子から逃げたと!」

「逃げたではないか、精神的に未熟すぎる彼女を放って、碌にフオロもせず自己中心的に物事を断定し娘は安心などとの給う……逃げでなく何だというのだ?」

「……………」

「真に考えて行動を起こすのなら神族にでも頼って匿って貰えばよかったのだ……例えどの様な事実を含んでいようとな。そして其処で対策を練るなりすれば今回のような大事件までなる事は……なかつたかもしれん」

黙ってしまった美智恵を気にせず駄目だしをする大樹。

「無論、過ぎてしまった事を言っても仕方ないし、最早どうでもいい事だ。既に断罪は始まっているのだからな」

「?どういう意味です、それは?」

「なに、簡単な事だ……いや、忠夫にしてみれば苦汁の決断だろうな。世界中に向けて大戦の情報余す事なく報道したのだよ」

「なあ!?そ、そんな事したら!?!」

「さて、どうなるかな?ま、潔く世間の荒波に飲まれるのだな」

今度こそ美智恵は全身塩の柱の如く真っ白になった。

語られた事が事実ならば当然である。

これは令子にしても同じだろう。

もつとも戦力の一端を担った事は事実なので令子はまだマシかもしれないが。

大樹はそんな美智恵を特に気に止めず、やるべき事は全てやったといわんばかりにその場を後にした。

後に残るのは一気に老けた様相で呆然とする美智恵だけだった。

後に報道された事実は世界中に波紋を呼びこんだ。

内容は真実だが、ある程度は編集されたものだったので尚更厳粛な気持ちにさせられる報道だった。

しかし明かされた真実の余りの重さに人々はただルシオラの冥福を祈り、横島の傷が癒える事を願うに留めた。

……美神家への追求は苛烈を極めたが。

もとより息子らの事に関しては騒がれたくて公表した訳ではないのでこれには横島夫婦も安堵した。

人界が嘗てないほど厳粛な黙禱に満たされている頃、妙神山では一つの転機が訪れようとしていた。

然し、それは横島にとってある意味別れを意味する事件でもあった。悲劇に見舞われそれでも立ち上がるうとする横島に更なる暗雲が立ち込めようとしている。

悲しみは終わらない……その先にあるのは光か闇か。

幕間く断罪の時は来たりて（後書き）

11/13 修正

第四章↳祈りが届けしは永遠の別離と永久の愛の調べ（前書き）

第四章です

誤字脱字、文章の構成等で可笑しな所があれば指摘下さると嬉しい
です

第四章　祈りが届けしは永遠の別離と永久の愛の調べ

今日は横島が妙神山に来て一年。

また大戦が終結して一年でもある日。

そして、世界に大戦の真実が公表され、今日が終結より丁度一年という事でルシオラを悼んでこれまでにない厳粛な黙禱が捧げられた日。

この日、横島の中である一つの異変が起こった。

世界にルシオラを悼む祈りが満ちる時、横島の体内に融合していたルシオラの霊其構造が活性化しだしたのだ。瞑想をしていた横島はそれに気づき慌てる。

「な、何だ、この内から溢れる霊圧は？！ツ！か、体がもたねえっ
！」

何せ体内で人の身ではありえない霊圧が感じられるのだ。流石にあの合体技ほどではないが、人の身には過ぎたる波動だ。

『これは！？一体何事ですか？！』

『むう、これは人界より横島に力が供給されておるのか？！』

『そんな事よりお兄ちゃんをどうにかしてあげるでちゅ！』

「そうよ！このままじゃ忠夫が参っちゃうよ！」

当然、他の者も気づき駆け寄るが、それよりも更に速く横島に辿り着くものがいた。

いや、正確にいうなら横島の体内に溶け込んだというのが正しいか。何よりも速く溶け込んだそれ【ルシオラの霊破片】は、横島の体内

で活性化した霊其構造と交わる。

誰よりもそれを深く感じた横島は もしやルシオラが復活するの
か？！ と淡い期待を抱いたが、残念ながらそんな事はなかった。

「こ、これは！？ルシオラが蘇るのか？！……ッ！？い、いや……
これは……ぐっ……あぁっ！！」

「忠夫ー！？しっかりしてー！」

荒れ狂う霊力の波動と霊破片が融合した事により、内から膨れ上が
る魔の因子に横島は今までにない痛みを感じた。

それは物理的な痛みではなく、心を引き裂くような……かつて己が
叫んだ慟哭以上の痛みが襲い掛かる。

しかし、横島は耐えた。

そして朦朧とする意識の中で、横島は一つの可能性に辿り着く。

これは……儀式だ。来世があるかどうかも判らない俺と離れない
為の

横島は妙神山で過ごし始めて少し経ったある日、ヒヤクメに頼んで
自身の霊其構造を診察して貰った。

……体内に残る自分自身の霊其構造がどれぐらいの割合なのかを。

横島は自分の残りの霊其構造が死んだのではなく、消滅したという
事を既に把握していた。

妖毒による侵食は人間の霊其構造を根本から破壊するという事を認
識済みだったからだ。

ただ死んだのならともかく、既に存在しないという事は自分の霊体
が不完全だという事に他ならない。

生きている限りはルシオラの霊其構造で補完されているから自分と
して存在できるが……死ねば融合しているルシオラの霊其構造は自
然と剥離される。

つまり自分という存在を完全に維持する事が困難になるのだ。結果、自分には来世が限りなく存在しないという事になる。

そして、検査の結果……自身の霊其構造は三割程度、輪廻転生など不可能だろう。

その事を思い出し、今の状況を鑑みるに……恐らく自分は魔族へと変貌しかけているのでは？と思いついたのだ。

多分……世界の後押しを受けたルシオラの霊破片と俺の中の霊其構造が、俺と共にある為だけに……賭けに出たんだ

其処まで考えが至った時、既に横島は霊力と魔力の膜に蔽われており、老師でさえ迂闊に手を出せない状態になっていた。

『ぬう！これでは迂闊に手を出せば横島自体が危うい！しかもこの波動は?!』

『こ、これって……、ルシオラちゃん?!』

動けなくなってしまった老師は横島から感じる気配に目を見張る。パピリオも霊破片からのみ僅かにしか感じられなくなっていた姉の気配を、目の前の横島からはつきりと感じ驚愕する。

「ねえ!?一体どうなっているの?!忠夫は無事なの?!」

『わ、分かりません……どうやらルシオラさんの霊破片が横島さんと融合したようですが』

小竜姫と玉藻は何が起きているのか全く理解できなかった。

ただ横島の無事を祈り見詰める事しかできない現状を悔やんだ。

そんな彼女らを他所に、横島は既に今の状況を受け入れていた。

うねり狂う霊気と魔力は未だこの身を犯し痛めつけているが、彼は

それすらルシオラの思いの強さからくる現象だと確信すると嬉しく思う。

痛みはある、ルシオラにもう対面できないという恐れや不安もある。でも、これから永遠に近い生涯を今まで以上にほつきりと感じるルシオラの気配と共に過ごして行けるなら……悔いはない！

狂おしいまでのルシオラへの愛をその身に抱き、痛みを甘受する横島に荒れ狂う波動は遂に弾け横島を開放した。

老師や玉藻らが駆け寄る中、横島は己の内に感じるルシオラの気配に意識を手放す。

「忠夫ーっ!?!」

『しつかりするでちゅよ！お兄ちゃん！』

『老師様……これは』

『ぬうっ！これは……どうやら単なる魔族化ではないようじゃが』

周りが横島を介護する傍ら、横島は己の内面世界で愛おしき者と再会を果たす。

辺り一面真っ白で、方向感覚もないその世界の中……彼女・ルシオラはいた。

その背中をこちらに向け、頭を頂垂れて……静かに涙を零している。

「……ルシオラ」

『ごめんなさい……ヨコシマ』

こちらを向かず、擦れる声で謝罪するルシオラ。

何に対して謝っているのか見当の付いている横島は苦笑して彼女の前に腰を下ろした。

「何謝っているんだよ、らしくない……それより顔を見せてくれ」

『お願い見ないで、今とつても情けない顔しているから』
「だが断る！」
『あ?!』

余りの焦燥振りに焦れた横島は強制的に顔を上げさせた。
うるたえるルシオラを他所に、彼女の顔をやっと思れた横島は微笑んだ。

「やっぱ綺麗だよ、ルシオラは。」

最高の女だ」

『 バカ』

涙を零している彼女にキスをし、似合わない台詞を零す横島。
そんな彼に苦笑しつつも嬉しそうに微笑むルシオラ。

忘れもしない彼女の一挙一動に涙が零れそうになる横島。
だが、今は涙で彼女の顔を見られなくするのはナンセンスだ。

『ごめんさない、ヨコシマ。私の我が儘のせいで人間じゃなくなっ
てしまつて……赦してなんて言えないけど』

「かまわねえよ、気にするな！お前が俺をそれだけ愛してくれてい
るって言う証拠なんだからな！」

『もう、茶化さないで。……お前が気にしないというのはなんと
く分かつていたけど、人の身でなくなるって言うのは途轍もない事
なのよ?』

自身のあり方が変わるといふとんでもない事を全く意に介していな
い横島に毒気が抜かれるルシオラ。

それでも告げられた言葉に頬を染めてしまつた。

「関係ないよ、ルシオラをより身近に感じられるなら、どんな苦勞
だつて厭わないさ。……いや、苦勞なんかじゃないな」

『……ヨコシマ』

続けて告げられた言葉にルシオラは遂に彼の名を紡ぐだけになってしまった。

その顔はこれ異常ないほどに真っ赤だった。

「ルシオラ、顔真っ赤だぜ？」

『ヨ、ヨコシマこそ真っ赤じゃない?!』

バカツプルめ。

「とにかく、ルシオラは気にする事ねーよ。もう完全に前が復活しない以上、仕方ないさ」

『……うん』

「……それで、結局ルシオラはどうなるんだ？」

『私はお前の精神領域で眠る事になるわ。基本的には沈んだままだけど、一定以上の力を解放した状態なら前との会話も可能になるわ』

落ち着いて事後確認をする事にした横島だが、ルシオラが告げた情報は彼に無上の喜びを与えた。

何よりルシオラと会話できるのが嬉しい。

「本当か?!なら常に一定以上の力を保てるようになれば常にお前も意識を覚醒できるんだな?!」

『え?ええ、そうだけど……言うほど簡単じゃないわよ?少なくとも上位上級以上の神魔にならないと』

元々神魔であるだけに事がどれだけ難しいか理解できるルシオラは、下手な希望を与えてしまったかと後悔した。

……が、横島にすればそんな事、屁でもない。

「ふん、ばーか！だったら死に物狂いに自分のレベルを上げるだけさ。お前と常に共にいられるなら……その程度の試練、どうって事ねえー！」

『……ヨコシマ、本当に馬鹿で明け透けなんだから。……でも、嬉し』

「俺の煩惱は並じゃねーのは、お前が一番よく知っているだろ？」
『うん！』

「……そこではつきり肯定されるのも悲しいかな」

例えどれだけ困難だろうと、やる事が決まっているなら我武者羅に突き進むのみ！そう決意する横島の意思は何よりも固かった。

それでも茶化すように言う横島にルシオラは胸が温かいもので満たされる。

「それじゃあ次だけど、俺はどういう風に変わるんだ？お前の因子を享けて魔族になるのはなんとなく理解できたけど」

『それなのだけど……、どうも単なる魔族になるようじゃないみたいな。ヨコシマ自身の因子もあるから半人半魔になると思ったのだけ』

「？それ以外にも何かあるっていうのか？」

『うん、ねえヨコシマ。貴方私以外に何か人外を宿した事ってあるの？』

問われた事に自身の過去を振り返る横島。

思い起こされるのは三つ。

一つは小竜姫の竜気を受け、横島の内から生まれた心眼。

一つは韋駄天の八兵衛。

一つは横島の霊力を糧に体内で生まれ変わった女蜴叉^{メドーサ}。

他にも吸血鬼にされたり、ネクロマンサーに操られたりしたが主だった因子の介入はこの三つの筈だ。

それを告げる横島だが、ルシオラは一つ一つ明かされる度に横島のトラブル体質に涙が出た。

『……たぶん韋駄天のそれは関係ないわ。あくまで一時の憑依に過ぎないから』

「俺もあいつの何かが残っているなんて想像したくねーからそれはいいけど」

『ヨコシマだものね。……残りの二つは間違いなく関係しているわ。特に両方竜神のそれというのが大きい』

「どついう事だ？」

『心眼とメドーサの体内に混じった因子は両方同じ竜の因子を少なからず含んでいるのよ？今回の膨大な祈りの力で、ヨコシマと私に関係するものは軒並みその存在を強化されたわ』

世界中から寄せられたルシオラを悼む黙祷は彼女だけでなく、横島にも少なからず影響を与えていた。

横島自身は人間だが、その体内に宿っていた二つの竜神のそれは活性化するルシオラの因子に後押しされる形でその存在を強化したのだ。

その結果、本来半人半魔で落ち着く筈の横島に更なる変化が起きている。

「じゃ、じゃあ心眼やメドーサが復活するって言うのか？」

『うん、こればかりは分からないわ。実際ヨコシマ自身が起きた時に判る事だと思うから、そつちで確認して頂戴。おそらくお前は三つの力を揮える存在になっている筈よ』

「三つって言う……、霊力と魔力と……後は竜気か？」

『ええ、小竜姫様の神気とメドーサの魔力が打ち消しあって、残っ

た竜気のみ貴方が揮えるようになる筈よ』

「えーと、じゃあ俺は結局一体どんな存在になるんだ？竜の力を持つって事は角でも生えるのか？」

一瞬、過去に出会ったイームとヤームを思い出してしまい嫌そうな顔をする。

小竜姫のようなりならともかく、余り人の姿から外れるのはやだなーと思う横島だった……見た目的に。

『ま、それも後で確認して……おそらくそれほど姿は変わらない筈よ。お前はお前のままでいて……この願いは今も有効の筈だから』
「…………ルシオラ」

今回の事がルシオラを悼んで捧げられた祈りの力によるものなら、彼女の願いを無視するような形で顕現する筈がないのである。
変わらぬルシオラの熱い思いにジンと来る横島。
見つめ合う二人だが、時間は無情に過ぎ行く。

『そろそろお目覚めの時間よ、ヨコシマ。また会う時を楽しみにしているわ』

「ルシオラ！……俺もだよ、必ずお前に辿り着いてみせる！」

薄れ行く互いの姿に、少しでも目に焼き付けようと互いを見つめ合う二人。

「ルシオラ、俺はお前を……………」

『ヨコシマ、私はお前を……………』

そして重なり合う唇の感触を感じたのもつかの間……………、二人の意識は別離の時を迎えた。

「……ルシオラ」

「！忠夫！大丈夫?!」

『お兄ちゃん大丈夫でちゆか?!』

『横島さん、体に違和感はありませんか?』

目を覚ますと目の前に玉藻とパピリオと小竜姫様の顔があった。
全員酷くやつれている。

……心配ばかり掛けているな、俺。

「ええ、特には。ちょっとだるいぐらいです……お手数掛けて申し訳ありません」

『何を言いますか！貴方には計り知れない恩があるのです！貴方が苦しんでいるのであれば手を貸すのは当然です!』

力説する小竜姫様に苦笑しつつも、傍にいた老師達に礼を述べる…

…返答は似たり寄ったりだったが。

……先ほどの意識下でのルシオラとの会話を思い出し、自身の体を確認してみる。

確認できた事は、この身は既に単なる人間の体ではないという事…

…どうやら角は生えてないようだ。

「……………（許すも何もあるかよ。お前のくれたものならなんだって喜んで受け取るさ）」

どうやらルシオラが俺に自身の全てを宿したようだ。

俺は声に出さずルシオラに礼を言った。

『む、どうやら御主は己の体に起こった事を理解しておるようだな。意識下で何かあったのか?』

目ざとく老師は俺の心の声に気付いたようだ。

「……ええ、ルシオラに会いました。あいつが自分の全てを俺にくれたんです」

『横島さんは己の体が魔族のものになったのを理解していたのですか？』

「いえ、小竜姫様。正確には魔族ではないですよ。ルシオラの話では俺の中には人と魔と竜の因子が存在するようです」

確認の為、少し力を収束すると今までとは違い三つの波長が感じられた。

流石に一つの力を束ねるよりも難しそうだが、極めれば途轍もない力を物にできるだろう。

『竜の因子ですか？……一体何処からそのようなものが』

「元は俺の体内に宿っていた心眼とメドーサの残り火とも言えるものですよ」

『なるほどの、祈りで活性化したルシオラの霊基構造に刺激され、眠っていたものも強化されたか』

「じゃあ、今の忠夫は竜魔人とでも言うべき存在なのかな？」

『えらく凄そうな名前でちゅね？……まあ、お兄ちゃんが無事なら私が言う事は何もないでちゅが』

『……あの、横島さん？横島さんが魔族になったのならルシオラさんの復活が出来るのでは？』

ずっと気になっていたのだろう。

小竜姫様がそう告げてくる……だがそれは。

「……それは不可能です。あいつは霊破片ごと俺の中に完全に融合

しましたから……もう二度と会う事は出来ません」

そう、二度と会えない。

『……そんな!?!』

「そんな顔をしないで下さい。パピリオやベスパには悪いけどな。

俺はあいつの鼓動をより身近に感じるようになったよ……この鼓動が在る限り俺は大丈夫です」

『気にしないでいいでちゅよ……二人が変わらず愛し合っているのであれば、私が口を挟む気はないでちゅ!』

「……ほんとに素敵な人だったんだね、ルシオラさんは……私も一度会いたかったな」

俺の心臓の辺りに手を置いてそう呟く玉藻。

……ああ、確かに紹介したかったなあ。

絶対に訪れない未来を想って、俺はそっと涙を流した。

「でもさ、俺が強くなって上位上級神魔クラスまで力を高める事が出来れば、常にルシオラと意識下で会話する事も可能になるんだ」

『!それは本当ですか?!』

『なるほどの!力の底上げで意識下に沈むルシオラの意識を活性化するのはやな?確かにそれならば可能じゃろっ』

「でもその上位上級神魔レベルってどれくらいなの?」

此处で神魔のレベルについて少し説明しよう。

神魔にはいくつかの位階と等級があり、それぞれ決まったレベルの基、分別されている。

位階とは、その者の立場の高さを表すもの。

たとえば小竜姫ならば中位に該当する。

等級とは、その者の強さを表すもの。

たとえば先にあげた小竜姫なら中級に該当する。

尤も同じ等級でも位階によって格差は存在し……ルシオラ達のような例外もあるが。

ちなみに齊天大聖の属する最上級は固定された存在なので、等級のみで位階は等級に含まれる。

こちらでも力量の格差は存在するが。

『つまり、少なくとも小竜姫を超える存在にならないといけないという事じゃな……ふむ』

『見たところルシオラちゃんの因子は受け継いだけど、力そのものはまだそれほど覚醒してないようぢゆね？』

「ルシオラが人界侵攻に向けて調整された特殊な魔族だったからなあ……例え覚醒してもそれだけじゃ足りないからもつと気張らないとな」

『ですが横島さんなら少なくとも位階は上位に達しませんか？……強さは修行で補う他ありませんが』

小竜姫が老師に確認を取る。

横島が為して来た事を思えば、神魔の類に属するようになった以上、上位に達するのはそれほど困難ではないと踏んだのである。

それを請けて老師はキセルを一吹き。

『確かに可能じゃ……有史以来の類稀な偉業を果たした横島ならな。じゃが、それには一つだけ厄介ごとが付いて回る』

『厄介ごとですか？』

『横島は今世界中で支持されておる……ある意味最高指導者並にの。つまりその域まで行き着くのはほぼ確定なのじゃ』

世界を救ったという事実を知られた横島は世界中から信仰とも言える支持を集めている。

その勢いは留まるところを知らない。

「え……？でも最上級クラスって、確か魂の牢獄とか言うので括られた固定の存在じゃ？」

「確かにそうじゃ。じゃが今現在、最上級は二柱分空席が出来ておる。そして御主はその席に座るだけの資格を手にしてしまつておるのじゃ」

横島に神魔の現状と可能性を伝えるのはある意味危険を伴うが、黙つていても容易く其処まで上り詰め楔になるであろう。

どちらにしても危険を伴うなら、せめて己の意思で覚悟を決めて欲しいと願う老師であつた。

「資格つすか？」

「御主はアシユタロスを倒す要になつた。そして世界を救つ選択をした……御主の気持ちは別としてもな」

「……………」

「それ故に世界の楔になりうる資格を手にしたのじゃ。それ故に御主が己の望みを叶えるという事は」

「望むところつすよ。例えばアシユタロスの野郎と同じ苦しみを味わう事になつたとしても、俺が求めるものは変わりませんよ……っーか、女好きの俺が最高ルシオラの女を諦めるとかありえねえすよ！」

「忠夫」

「お兄ちゃん」

「横島さん」

「決意は固い、か……いや、問う方が間違つておるか」

どこか切ない表情でこちらを見る玉藻達。

溜め息をつき、ある覚悟をする老師。

『横島よ、これから語る事は今神魔の上層部で検討されている事じや。はつきり言って情けないにも程があるが……聞いておいて欲しい』

「？」

小竜姫が老師の語るうとしている事に気付き慌てるが、その表情を見て改める。

語られるのは世界の実情と神魔のバランス状態、そして一度は否定されていたにもかかわらず、再び浮上してきた横島の楔候補の件。それを聞く横島はなんとも言えない顔をしている。

怒ればいいのか、悲しめばいいのか、絶望すればいいのか。

少なくとも玉藻やパピリオは憤慨しているようだ……小竜姫は己が事のように申し訳無さそうにしている。

『厄介ごとは二つ在る。一つは最上級クラス……最低で百五十万マイト程じゃが……に上り詰めなければ、足りない楔としての能力を補佐する為、結果的に石化してしまうという事じゃ』

「石化っすか」

『もう一つ厄介なのが、決して横島だけが楔になれば良いという事ではない、という事じゃ。ただでさえ微妙な神魔バランスをこれ以上刺激する訳にもいかんからの』

「……どういう事っすか？」

微妙な空気を感じたのであろう。

横島はこれから紡がれる言葉は決して自分には受け入れられない事だと、察しているのかもしれない。

『二柱分の楔を用意しなくてはならない現状で横島のみをそれにする訳にはいかん。つまりもう一人楔役が要ると言う事だ……候補者は玉藻の嬢ちゃんだ』

「『』!?!?」
「ッ、ふざけるなあ!?!」

その怒りの波動の余波で目の前にあった湯呑が弾け老師にかかるが、彼は気にしなかった。

その怒りは正当なものだし、不甲斐ない自分はこの怒りを正面から受け止めなくてはいけない……己の不甲斐なさで自滅したいぐらいだが。

「俺は良い!土台この身はルシオラに救われたものであり、この世界はルシオラが護ったものだ!俺自身その世界が危ういというなら是非もない!」

「……お兄ちゃん」

「だけど、玉藻は違うだろ!やっと、やっと幸せを掴もうとしているんだぞ!それを奪うとはどういう見だ、こらあ!?!」

「……忠夫」

「あんたは斉天大聖なんだろ!?!天に等しいというなら……何とかしろよ!?!?!」

「……横島さん」

「……すまぬ」

項垂れる事でしか返答できない老師に幾ばくか頭が冷めたのか、苦虫を噛んだ顔ながらも落ち着きこつとする横島。

そして深呼吸の後、静かに聞く。

「ふう、……期限は?」

「……最長で十年、それ以上は外世界との軋みを押さえる術はない」

「ッ?!?!……くそっ!?!」

横島は告げられた刻限に、今度こそこの世の理不尽さを呪った。そして頭を冷やしてくる、と言い出て行く。

「忠夫!?!?!?! 私様子を見てくる!?!?!?! 老師、私は少なくとも貴方の事、尊敬しているわ。だから気にしないで」

妙神山に來た当初と同じような精神状態の忠夫を心配した玉藻はその後を追った。

そして静まり返る室内。

小竜姫もパピリオも何とも言えない表情をしている。

此処まで落ちぶれた様の老師を見た事ないのだからそれも当然かもしれないが。

「……本当に、情けないものじゃ。横島のいう通りじゃわい。玉藻の嬢ちゃんにすら氣遣われて……まさしく老いぼれじゃな」

「私如きが言える事ではありませんが、落ち込んでいる暇があるのであれば彼らを導く為……最上の計画を打ち立てるべきではありませんか?」

「そうでちゆよ?年若い二人が足掻いているのに……猿爺は己の情けなさを嘆くだけでちゆか?」

己を貶める様にあえて苦言を言い渡す二人。

有り体に言えばそんな彼を見ていたくないと言うのが本音だろうが。

「ふふふ、厳しいのう。じゃが確かにそうじゃな。時間が有限なれば、それこそこんな風袋を晒している暇などないのう」

「そうです!情けないならそれを払拭すべく最大の努力と毅然とした態度で臨むべきです!」

「その意気でちゆよ?お兄ちゃんと玉藻ちゃんの幸せを實現させる為にも!少しの時間も無駄にするべきではありません!」

『うむ（……世話をかけたな、二人とも）』

表情を改め奮起した老師を更に促す二人に、彼は苦笑しつつも心の中で礼を告げる。

そして少しでも横島達が幸ある時間を掴めるように計略を練った。己の持つ経験と知識を基にした最高の計略を。

老師達が奮起している頃、妙神山の奥地にある小さな滝壺に横島はいた。

頭を冷やす「滝に打たれるというのが何とも横島らしい考えだが、その胸中は未だささくれている。

自分は良い、何だかんだ言ってもこれまでの情けない行い故の結果だと受け止められる。

だが、玉藻は違う。

彼女は本当にただ平穩を求めていただけなのだ。

それなのに何故そんな彼女がこんな下らない事に巻き込まれなければならない？

老師は十年の刻限が有るといったが、それにしただって遊んでいたらいいという訳じゃない筈だ。

最上級の莫大なエネルギーを受け止めるべく、更なる鍛錬にほぼ全ての時間を費やさなければならず、更にそれでも勝率は確実ではないのだ。

……やっと生まれ変わってこれからだって言うのに、その全てが修行に費やされるなんて間違っているだろ？！

落ちてくる水流を弾き飛ばす横島。

もっとも直ぐに冷やしていた筈の頭が再度沸騰してきたのに気付き、心の波を落ち着けようとするが。

其処に玉藻がやってくる。

「……忠夫」

「……玉藻!？」

周囲に気を張ってなかった横島は少なからず驚くが、直ぐに気を取り直すと彼女に頭を垂れた。

「……ごめん、玉藻!俺の厄介ごとにお前を巻き込んでしまって。謝って済む事じゃないだろうけど」

「………」

自分に対し頭を垂れ陳謝を述べる横島の姿に、玉藻は言いよつのない悲しみと怒りが込み上げてきた。

何故、忠夫が謝るの?これは神魔のミスとも言える事。ただの間である忠夫がどうこうできる事ではない筈

思えば、出会ってからこの男は此方を気遣ってばかりで、気を休めている時といえば食事時や休憩の時だけのような気がする。

何故世界の被害者である貴方がここまで他人を気遣わなければいけないの?

玉藻は考えれば考えるほど、何故だが胸の怒りが大きくなっていった。

そしてそれは目の前の横島に向けられる。

「……横島忠夫!!!」

「!?!」

「その情けない顔を今すぐ止める！もつと屹然とし、もつと胸を張れ！！」

「……………玉藻」

此方への呼びかけに驚く横島。

だが、目の前の玉藻が涙を流しながらも、此方を奮い立たせようとしているのが手を取るように分かったので直ぐに実行した。

玉藻はそんな横島に更に近づき、その頬を叩く。

パンツ！

「！？」

「貴方はいつからそんな偉そうな人間になったの？」

「……………え？」

「貴方が私を気遣ってくれるのは嬉しいわ。でもね、大きなお世話よ！私の幸せは私が決める。貴方は私と共にいる事を誓ってくれればそれでいい」

「……………玉藻、それでいいのか？何千年という時を経てやっと平穩を得られるかもしれないのに」

「それこそ関係ないわ。過去の記憶なんてあつてないようなものだし、大事な今は今よ。それなのに貴方ときたら、大事な時間に周りの空気を重くしちゃって」

「……………うう」

「老師は私達の為に最善を尽くしてくれてるって言うのに、上層部の輩は知らないけど少なくともあの方は尊敬を抱くに相応しい人の筈よ……………猿だけど」

「ごもつともです……………申し訳ない」

「それにね、貴方と生きられるなら永遠も私にとっては油揚げに勝る蜜となるわ」

「……………玉藻」

玉藻は自分が言葉を発する度に縮こまってゆく横島を見て少し溜飲を下げた。

彼女にとって横島は他の何よりも優先するべき人物であり、例えどのような事になるうとも共に居られるなら是非もない。

横島の傍にいる事が既に彼女の幸せになっているのだから。

「理解したようね？ならさっさと御免なさいしてきなさい！見るにも耐えない様相だったわよ？」

「うう、了解しました……まるでおかんや」

「なんか言った？！」

「何でもありません　ッ！」

その後、横島は老師に土下座して謝るが、彼はそんな横島に己こそ不甲斐なく申し訳ないと謝り通しだった。

結局、その後に現れた玉藻が二人に説教する形で事なきを得たが……小竜姫やパピリオは彼女の背に怒れる霸王の幻影を見て震えていたとか。

どうやら妙神山の真の最強はこの時より入れ替わったようである。

第四章 祈りが届けしは永遠の別離と永久の愛の調べ（後書き）

12 / 4 修正

終章 刹那の愛の新たなる一歩（前書き）

終章です

今回が一番長いです

グダグダ感が否めませんが読んで貰えたら幸いです

誤字脱字、文章の構成等で可笑しな所があればご指摘下さると嬉しいです

終章 刹那の愛の新たなる一步

横島が意識下でルシオラと再会し、三つの因子を持つ人外になつてより三年。

老師との確執も解消し、以前以上に厳しい修行を己に課すようになった横島は飛躍的にその素質を開花し始めていた。

もとよりある天下一品の収束能力。

両親から受け継いで最近開花し始めた優れた理解力と応用力、行動力。

ルシオラより授かった蚩魔としての能力と知性。

更に竜の因子による更なる強靱さと生命力。

念密に絡み合い溶け合つたこれらの要素を横島は巧みに自らの血肉にしている。

そしてその過程で、横島はある意味心身を共にする相棒とルシオラと同じくらい愛情を捧げる女性を手に入れていた。

今、横島は日課の周天法によるチャクラ増強を成している。

なお神魔とは人や妖怪がこのチャクラを開放して、存在を一段上の位階にした者の事だ。

それを横島は既に魔族と同等の位階に居るにもかかわらず有している。

それははつきり言つて異常だ。

言うなれば横島は今現在持っているこのチャクラを開放すれば、更なる位階に上がれるという事なのだから。

老師はこの利点に目をつけ、開放するよりもまず更に鍛え増強する事で繰り上がる位階を更に乗せできるように仕向けた。

お蔭で今現在横島の全チャクラはこの上なく強靱で、一端の霊能力者が霊視すれば横島の中心線に燦々と煌く七つの印が見える筈だ。

『うむ見事だぞ、横島。では、もう一周させてから朝餉を取るとしよう』

「分かったよ、心眼」

既に慣れた周天法をこなしつつ、頭上より掛けられる声に返す横島。そう、この心眼こそが改めて得た相棒である。

嘗てと違うのはバンダナではなく己の額に直接現れた事ぐらいで、以前の記憶も保有していた。

この周天法を始めた頃に額に現れた心眼には大層驚いたものだ。

もともと種族の隔たりのない横島だけあって直ぐに懐かしく思い、昔自分の身代わりになった事を責めた。

無論感謝の念はそれ以上にあつたし、情けなかった自分の責任でもあつたのだが、其処は言つたもの勝ちの要領だ。

現在彼は横島の現状を知り、少しでも役に立つべく奔走している。

横島の意思とは別経由で霊力を練る事のできる経絡を持つ彼はそれを日夜磨いているのだ。

……いざという時、主である横島の事を補助できるように。

『そろそろチャクラの許容量も限界に迫ってきておるな。既に常人の数倍に相当する霊力がそれぞれに籠められておる』

「ああ、竜魔人と化したお蔭でそれだけの許容量を得る事はできたけど、流石にそろそろ限界だな……これ以上は練つた霊力が溢れるだけだし」

『うむ、私の方も既に鍛える余地はそれほど残されておらん。これはそろそろチャクラ開放の時が迫っておるか?』

「ああ、そうかも……でも、一つ気になっているんだよなあ」

『む?何か心配事でもあるのか?』

「いやな?チャクラを開放するって事は人の身を捨てるって事だよな?それ自体に括りはねえけど……今有している霊力はどうなるんだ?」

チャクラを開放する事で人は解脱し、神魔の一員となる事ができる。然し既に魔の因子を持ち、三つの力を束ねる術を極めつつある横島にすれば、態々人の因子を捨てる利点が思い浮かばないのだ。

無論、変わりに莫大なパワーアップが果たせるのは理解しているが、この希少な能力を捨てる意味はあるのか、という疑念は尽きない。

『そういう事が……心配しなくとも人の因子の代わりに、より強大な神の因子が宿るだけだ』

「神の因子が？」

大霊障の真相が明かされて以降、人界では横島忠夫と言う存在を神聖視する傾向が高まっている。

……人のまま神と同等の信仰を得た人間・横島忠夫として。

本来、人が人の身のまま神に近づくのは赦されざる事だが、神魔の失態を悉く覆した横島は何処までも特別だった。

『うむ、つまり霊力に代わり神通力もしくは神霊力がお主の力となる』

「なんつーか……あれだな。ご都合主義というか、なんとというか」

『それも当然の結果だ。チャクラを開放する以上、その開放したチャクラが変異する因子が生まれるのは当然であろう？そして御主が師事するのは神族だ』

「小竜姫様や老師に接しているからそっちの属性に転化するって言う事が」

『うむ……こうして会話しつつも見事に御しているな……本当に成長したな横島よ。私は嬉しいぞ』

「……前が情けな過ぎただけさ……さて、やるべき事も済んだし飯にしよっぜ」

『うむ』

心眼の言いつけ通り、更に一周させて高まった霊玉を吸収した横島は宿坊へと戻る。

宿坊には朝餉を用意している小竜姫と玉藻の姿があった。

ちなみに現在此処妙神山にヒヤクメはいない。

魔族のジークと共に人界で何かと世界を奔走している横島夫婦の補佐をしている。

三年ほど前に行った事実公表の後も世界中で改革を行っているので、横島が老師に頼んで護衛を兼ねた補佐をつけて貰ったのだ。

本来ありえない待遇だが、横島に待ち構えている未来を察して特別に受理された。

「あ、忠夫。朝餉前の修行は終わったの？」

『おはようございます、横島さん』

「ああ、ついさっきな。おはようございます、小竜姫様」

『すみませんけど、パピリオを呼んできてくれませんか？』

「分かりました」

どうやらまだ寝ているようであるパピリオを起こすべく彼女の部屋へ行く。

その後、皆が揃った後で朝餉と相成った。

「ん、今日の味噌汁は玉藻作か。うまいぞ」

「ありがとう」

味噌汁に手をつけ具が油揚げなのを確認した横島はそれが玉藻の作だと気付き、上手に出来ている事を褒める。

一年ほど前から小竜姫に料理を習いだした玉藻は上手くできた事に安心して礼を述べた。

竜魔人と成った横島と魂の契約を結び、日々を共に過ごす内に横島

への思いを深めていった玉藻。

現在は共に愛を囁き合う間柄になっていた。

当初はルシオラへの愛が有る為悩んでいた横島だったが、見かねたパピリオが活を入れたのだ。

『ルシオラちゃんの事を思うなら、変に遠慮する方が失礼でちゅよ？ルシオラちゃんはお兄ちゃんが玉藻ちゃんを愛した所で、文句は言うような懐の狭い女じゃないでちゅ！』

そんなパピリオの言葉に横島を自分がいつの間にかルシオラを理由にしていた事に気付き反省。

改めて玉藻に交際を願い、結ばれた。

ちなみに現在の玉藻は女子大生風の容姿をしている。

一部、ルシオラや小竜姫が反感を持ちそうな部位があるが……あえて語るまい。

一言、横島の煩惱を大層満たすものだと言っておこう。

『横島よ、どうやらチャクラ増強の行は完了の目処がついたようじやな』

「はい、もうこれ以上は不要かと……パピリオ人参も食べないといけないぞ」

『うー、分かったでちゅ』

『玉藻さんの方もチャクラ開眼も全て終了しています。心身共に鍛えられるだけの事はしました』

『ふむ……小竜姫、お茶を』

『はい、老師様』

それぞれが思い思いに食事をする中、事実確認をする老師。

横島のこれ以上ないほど高まった霊体の様相に頃合と感じたようだ。それを受けて小竜姫も玉藻の状態を告げる。

『ふう……ではそろそろチャクラを開放し位階を上げようかの。ルシオラの嬢ちゃん意識の浮上も問題なからう』

「分かりました……では今日は午前の行は中止にして、精神を落ち着ける事にします」

『うむ、それがいいじゃろう……玉藻の嬢ちゃんも一緒にな』

「分かったわ。忠夫からの力の供給に吞まれないように気を引き締めておかないとね」

『大丈夫ですよ、玉藻さんなら。今までの成果を存分に生かしてくださいだされば、間違いはない筈です』

『……人参不味いでちゅー』

「……プツ」

午後の用件を確認していた横島達だが、人参に苦戦しているパピリオに思わず笑いを零してしまった。

パピリオの言葉に噴出してしまった横島と釣られて皆も笑う中、パピリオはその様にへそを曲げて憤慨する。

その後、何とかパピリオを宥め、身を清めた後、瞑想に入る横島達。

『老師様、横島さんはどれほどの存在に成るでしょうか？』

『……分からんというのが正直なところじゃ』

『今のお兄ちゃん強化前のベスパちゃんと同程度（7100マイト）の霊力と魔力・竜気を保持していまちゅ。チャクラ開放時、本来なら全霊力の半分の十二倍に成る筈でちゅが』

『今の横島さんは全てのチャクラに規格外の保有霊力……所持霊力と同等のものを宿しています。それに霊力・魔力・竜気を全て同レベルで別々に保有しています』

『つまり実際はベスパの嬢ちゃんの三倍に値する霊力を保有しておると見て良いという事じゃ。しかも全チャクラが臨界点まで既に充填されているが故に……そのままの霊力が倍増に反映される』

横島は現在二万千三百のマイト数を誇る。

これは霊力・魔力・竜気の合計値だが、全て一個人が有しているものなので一括りになるのだ。

そしてチャクラを開放するという事は、保有霊力の半分の1.2倍の霊力を得られるのだが、横島は全チャクラに臨界に達するほどの霊力を充填している。

これにより本来なら全保有霊力の半分である所を、保有霊力全てに適用する事が可能になったのだ。

おまけに余剰分が加算される……つまり。

(7100 + 7100 + 7100) 1.2 + 255 , 600 +
マイト

となる訳だ。

『つまり人界では素で25万強の霊力が揮えるという事でちゅか？』
『おそらくの、今世界は横島を後押ししてある……もしかするとそれ以上かもしれんが』

実は現在人界では世界の現状と横島が行っている事を世界中で報道している。

計略を練った老師が竜魔人となった息子に会う為にきた百合子に言付けていたのだ。

『百合子殿。息子さんの後押しを更に強力にする為、これらの事実を世界に向けて報道しておいてくれんかの？』

「こ、これをですか?! し、然し、いいのですか!? これは神魔の特級に値する極秘事項では?」

『確かにそうじゃ。じゃが構いませんよ。これは間違いなく彼の助

けになる……ならば例えどのような叱責を受けようが構いませんよ」
「……老師様。分かりました、必ずや世界に知らしめます」

こうして人界では今まで以上に横島に対する祈りの波動が送られ続けられている。

『玉藻さんは通常の解脱ですから、基となる4000マイトの半分の十二倍ですから、24000マイトと言うところでしょうか？』

『そうじゃな。じゃがあの子は横島と繋がりが有る故に、更に其処から位階が上がる』

『……確かお兄ちゃんの四分の一が供給される筈でちゆから、63900+24000=87900マイトでちゆか？』

『いや、力とはより強い方が優先され塗り潰される。じゃからこの場合は63900マイトじゃな』

次いで、玉藻の憶測が告げられる。

どちらにしても自分よりえらく上の位階に上るので小竜姫は啞然としていたが。

『……ではこれより、横島忠夫と玉藻の解脱の儀を執り行う。各員、持ち場に就き結界を張るのじゃ！』

あの後、横島の実情と現行の状況を知る神魔や知人が集結した。

人界からは横島忠夫の両親と雪之丞。

忠夫が竜魔人と成っても変わらず接してきた者達。

神父やピートも来る予定だったが、人界で世界に今から行われる事の詳細を説明している。

神界からは最近パピリオと仲の良い天竜王子。

ヒヤクメは一旦神界に戻って、茶々が入らないように警戒している。魔界からは家族の契りを交わし、関係を修復したベスパが来た。

またワルキューレとジークは魔界で過激派などを警戒している。
これに小竜姫達、妙神山縁の者達を加えた総勢八名＋忠夫と玉藻が
いる。

天竜とベスパ、小竜姫とパピリオがそれぞれ対となつて忠夫を囲む。
神魔合一の円柱状の結界を施し、忠夫達から解放された靈力が少し
でも彼の内に留まるようにする。

更にその外から最終安全弁として、老師が天空を貫く八卦の封印結
界を張った。

ちなみに、これらの結界は透明なので人界からは妙神山で行われて
いる事が粒さに確認できる。

これも人界で報道されている事が真実である事を証明する為の処置
だ。

解脱の際、忠夫に吸収される外部からの信仰力はこれらの結界には
邪魔されないので問題はない。

寧ろ、忠夫から発せられる変異時の莫大な力の波動から妙神山を護
る為に張ったようなものだ。

……何気の中の神魔達が危険なような気もするが、其処は気にした
らいけない。

何より彼らもこの時の為に研鑽を磨いてきたので覚悟の上だ。

『老師様準備は万端です。横島さんと玉藻さんも準備が整いました』
「すげーな。途轍もねー波動だぜ？しかも横島は更に強い力を持つ
て生まれ変わるんだろ？」

「まあ、あの子がドンだけ凄くなつても、家の息子であるという事
実は変わらないけどね」

「ああ、馬鹿でスケベな息子であるのは一生変わらんよ」

「馬鹿とはなんだい！スケベなのもあんたの遺伝子のせいだろうが
！」

「ヒイ　　ッ！堪忍やあ！許してくれえー！百合子おー！」

準備完了を告げる小竜姫。

外野では見学している者達が思い思いに喋っている。

……一部見苦しい所があったが。

「何やっているんだか……お袋達は」

「いいんじゃない？変に緊張してられるより、こっちの方が気楽だわ。それにお義母さん達らしいし」

「ま、確かにそうだけども……それより、気引き締めるよ？玉藻には俺の約四分の一の力の供給があるんだから」

「うん、分かっているわ。老師達の憶測から判断するに……大体6万強だったかしら？」

「場合によってはそれ以上だけだな？俺は合体やアシユタロスの野郎を摸した事があるから、ある程度は慣れているけどよ、お前は初めてだろ……此処までの位階は」

「うん、だけど平気よ？……忠夫が傍にいてくれるなら」

そして、なんだか甘ったるい雰囲気醸し出す横島達。

……周囲の者達は砂を吐いている。

『……横島と玉藻よ、では始めるぞ？』

「了解」

『まずは玉藻より始める。御主はこれより神族の一員となる訳じやが、そのような事は気にせず、自身を律する事に全霊を掛けよ』

「ええ、理解しているわ。本よりこの身は忠夫のもの……神族に転化したからって私自身は何も変わらないわ」

『ふふふ、玉藻には余計な世話じゃったかのう……では、始めよ！』

何気に惚気られた老師は苦笑しながらも解脱を促す。

それを受け、玉藻は全身のチャクラを最大に廻し、昇華させてゆく。

立ち上るオーラはまるで蓮華のように花開き、頭頂のチャクラが開放された瞬間、そこには光の柱が築かれる。黄金に染まるそれはやがて玉藻に収納され……消えた。

佇む玉藻の様相は少しかり変わっていた。

その身が放つオーラが飛躍的に増したのは当然として、容姿も変わっている。

服装は転化と共に変わったのかまるで天女の羽衣であり、背中の中ほどで纏まっていたナイントールの髪は膝裏まで伸びて金糸の如く輝いていた。

玉藻の周囲には極彩色の珠が九つ浮かび、それぞれ違う色彩を放っている。

そして額には蒼く輝く宝石が埋まっていた。

『……我、此処に転化せし者。名を、狐星神・九重玉藻と改める所存であります』

『……我、齊天大聖の名の下、受諾する。狐星神・九重玉藻よ、その転化を祝福しよう』

『ありがとうございます、老師』

見事転化した玉藻に祝福の言葉を送る老師。

傍にいる横島は今まで以上のその美しさに目を奪われていた。

玉藻は当然気付いているが、その視線が嬉しいので黙っている。

『さて、では横島よ。今度は主の番だ……見惚れる気持ちは分らないでもないが、気を引き締めろよ?』

「う!……了解しました」

老師はそんな惚けた横島に呆れたような視線を投げかけ、注意を促す。

慌てた横島は恥ずかしながらも身を正し、呼吸を整える。
それを確認し、改めて玉藻に視線を送る老師。

『分かっているとは思うが、玉藻も気を引き締めるようにな。今御主が纏う倍以上の供給もじゃが、それ以上に横島が発する桁違いのオーラに飲み込まれんように』

『ええ、気をつけるわ。繋がりがあるから吹き飛ばされる事はないと思うけど……呑まれてしまえば、そこまでだからね。万全に期すわ』

『うむ』

玉藻と老師が会話する中、横島は静かにこれまでを振り返っていた。それはルシオラの死から始まり、自分自身人ではなくなった事を経て、玉藻というルシオラに負けない最高の女性を得るに至る大戦後の事だった。

横島自身、ここ数年は今までの中で最も充実した日々だったと断言できる。

だから周りがなんとまあおうとも、横島は己を幸せ者だと誇れるし、これからもそう在りたいと願う。

その為にも、今回の件は絶対成功させねばならない。

薄く目を開いた横島はその瞳に強い意志の光を宿らせていた。

『……では、横島よ。始めるのだ。周りの者達も気を抜いてはならんぞー！』

『『『『了解！』』』』』

『……ふう』

結界を維持している神魔達は更に気を引き締め、見守っている者達も手に汗握りその時を待った。

やがて点りだす横島のチャクラ。

それはその身に宿すオーラからすれば酷く弱々しい物だったが、それは一瞬だった。

直ぐに暴風と違っていいほどのオーラが生まれ結界を軋ませる。やがて結界が持ち堪える事が困難になり掛けた時、それは起こった。一瞬前まで荒れ狂っていたオーラがピタリと止み、横島をほんの僅かに大きくしたぐらいの範囲に凝縮されたのだ。

それを感知した老師は怖気を感じた。

信じられないほど凝縮されたそれは間違いなく最上級のそれであり、それを収束しているのが今の横島だと気づいたからだ。

『……なんて奴じゃ』

紛れもない賞賛の意とそこまでの覚悟と力量を身に付けざる得なかった横島に対する申し訳なきが混じった言葉は……しかし、誰にも聞かれる事なく消えていった。

やがて収束されたそれは膨れ上がり、昇華されていくチャクラと共に鳳凰のように光の粒を撒き散らしながら……天空へと昇ってゆく。そして立ち昇るは虹色の光柱。

それは先ほどの玉藻のものを遙かに上回り、結界ギリギリの所まで展開した。

直ぐ目の前まで迫った桁違いの力の奔流に結界維持者達は肝を冷やしっぱなしだ。

もっともそれ以上に横島に対する惜しみない賞賛の念を抱いていたが。

それも次第に横島に向けて収まっていき……遂に終結を迎える。

横島は己の傍で膨大な力の供給に耐え切りぐったりした玉藻を抱き寄せる。

その様相は玉藻と同じで変化していた。

服は両肩の出ている深緑色の中華服で、背に太極図が描かれている。

剥き出しの両肩には拳大の珠が埋まっております……右肩に渦巻状の光が収まった透明色の珠を、左肩に巴紋の瑠璃色の珠を抱いていた。額の心眼は縁取られ、その周りに4本の線模様が浮かんでいる。両耳には棒状のピアスが煌いており、その上には尖った竜角が生え、髪は薄緑色に染め上げられ光っていた。

『……我、転化せし者。竜魔神・横島忠夫、……字を太極天とし此処に再誕する事を宣言します』

『……我、齊天大聖の名の下受諾する。竜魔神・横島忠夫よ、その再誕を祝福しよう』

『ありがとう、老師』

改めて生まれ変わった横島に祝福を捧げる老師。祝福を捧げながら横島の告げた字に苦笑を零す。

【太極天】

万物を収める者の意を持ち、まさに世界を救った横島には相応しい字である。

老師が苦笑したのは、横島がそれを告げる時少なからず顔を顰めたからだ。

おそらくこの字を決めたのは玉藻だろう。

その時の様が目に浮かぶようで老師は再度苦笑した。

ようやく落ち着いたので横島の腕の中で一息つく玉藻。

それぞれその身はオーラで光り輝いており、傍によって祝いの声を掛ける皆が眩しそうにしていた。

『とりあえずそのオーラを収めよ。眩しくて直視できんぞ』

『あ、すみません。……っと、これでいいのかな？』

『ふう、忠夫からの供給が凄すぎてそこまで気が回らなかったわ』

落ち着きオーラを収めた横島とそれに引き摺られる様にオーラを仕舞う玉藻。

眩しさはなくなったがその存在感は圧倒的であった。

老師のように熟練した者でもないのに完全には霊圧を抑えられないのだ。

……と、そこに近づく一人の影。

「……よく頑張ったね、忠夫。更に立派になって母さん嬉しいよ」

『……お袋、大丈夫なのか？結構霊圧掛かっていて体に負担があると思うんだけど』

「ふ、母親を舐めるものじゃないよ？お腹痛めて産んだあんたの力なんか臆する私じゃないわよ」

『いやいや、そういうレベルの問題じゃない筈なんだけどさ……まあ、お袋が普通じゃないのは今に始まった事じゃないけど……底が知れねえよな』

『流石お義母さん！尊敬するわ』

「ふふふ、ありがとう玉藻ちゃん。貴女も更にいい女になったわね。これからも家の息子を頼むわよ？」

『任せて、ルシオラさんと一緒に賤けるから！』

『た、玉藻お〜。そりゃねえだろ？これでも、玉藻とルシオラだけを愛しているんだからさあ〜』

何の違和感もなく近づき、親子の会話をする百合子に戦慄と尊敬の念を覚える神魔一同。

……紡がれる台詞には笑いを誘ったが。

儀式も無事終わり、その後は宴となった。

小竜姫と百合子が腕を揮って数々の料理を作り、老師と大樹が秘蔵の御神酒と持ってきた祝い酒を開け、天竜やベスパ等が横島達を称

える。

揮われる料理の数々は横島や雪之丞が競って口にし、玉藻や小竜姫が二人に御神酒を相伴していた。

台所ではベスパが百合子に料理指南を受けている。

天竜とパピリオは料理を口に行っている横島や玉藻の傍で二人の変化した姿をつぶさに観察し、老師と大樹はそんな皆を眺めながら酒を飲み交わしていた。

和気藹々と宴が進み夜半過ぎになると老師と横島夫婦そして小竜姫以外は酒や疲れで眠りについていた。

『老師様、無事儀式も終わって一安心ですね』

『うむ、ヒヤクメ達からも特に動きが無かったとの報告が来ておる。油断は出来んが、少なくとも今の横島達なら大抵の事には対処できよう、わし等も居るしな』

「忠夫は本当に立派になりました。老師様達には本当に感謝の念が絶えません」

「まったく。馬鹿な我々の愚かな育て方で歪んだ息子が自ら決起し、此処まで辿り着けたのは貴方がたのお蔭です。本当にありがとう」

『その様な事はござらん。貴方達は立派な親御さんじゃよ。元は不甲斐ない我ら神魔の尻拭いをさせてしまったのが原因』

『そうです。そのせいで横島さん達は更なる困難に巻き込まれて、我々はなんとお詫びしてよいか』

「それに関しては何も言いませんよ。忠夫が納得しているのなら問題ありません」

横島達は今回の解脱でそれぞれ予想を遥かに上回るオーラを手に入れていた。

現状の横島達のマイト数と最終目標のマイト数は下の通りである。

忠夫：現在値…… 60万マイト
最終目標値…… 600万マイト
玉藻：現在値…… 15万マイト
最終目標値…… 150万マイト

それでも横島は現在の十倍ほどの力を得なければならぬし、玉藻も現在の十倍の力に耐えられるだけの強さを手にいれなければならない。

玉藻に至っては現状でも危うく吞まれそうだったので苦勞は耐えないだろう。

「それにあの子達ならきつと為し遂げると信じていますから。この上ない深い愛を抱き、絆を育むあの子達ならきつと」

「はい、それは我らも同じ思いです。真に相手を思いやる事が出来、為すべき事を愚直なまでに遣り通す事が出来るあの人達なら」

「我々はその者達を害するものから護り、行く道を照らしてあげればよいかと」

「ええ、何人たりともあの子達に害する者達を赦すつもりはありません……ですから老師様方はどうかあの子達の先導を頼みます」

「お任せを……彼らに活を入れられた身としましても、これ以上情けない失態は晒す気もございません。必ずやこの大任勤めて見せましょう」

寄り添いあいお互いを抱きしめたまま眠る横島達を眺めながら大人達は再度誓いを立てた。

本来十数年から数十年単位で為し遂げるチャクラ開眼の行を僅か数年で為し遂げた横島達に先往く者として負けていられないと奮起しながら。

……実は浅い眠りにしか入っていなかった横島達はまどろみの中そ

れを聞き、込み上げる嬉しさから涙を一粒零していた。

時は流れて、運命の刻日。

横島と玉藻は時にはすれ違い、時には励ましあい、お互いを深い思いで支えあつて幾つもの試練を乗り越えて来た。

意識下で二人は繋がっているのだから救いとなつた。彼女の助言は二人にとってこの上ない救いとなつた。

老師が課す難題を物ともせず、目標に向けて踏破するその様は、まさに天地を支える者に相応しく屹然としていた。

……だが、運命は残酷だつた。

楔の宿命の譲渡が行われる時が訪れるまでに、二人は目標に達せられなかった。

幾つもの試練を乗り越えた！

耐えがたき苦痛も悲しみも乗り越えてきた！！

時を無駄にせず、出来る限り以上の事を為し遂げてきた！！！！

……だが、辿り着けなかった。

横島は最上級の資格を既に達している……然し450万マイルと揮わなかった。

玉藻は当然供給される側なので95万マイルと此方も揮わなかったが、そもそも既に限界に来ていた。

元より無茶な試みである事は分かっていたが、妙神山は重い空気に晒されている。

……その中で玉藻はそれほど落ち込んではいなかったが。

『やるだけやって、頑張れるだけ頑張つて、それでも辿り着けなかったんだもの。悔しくない訳じゃないけど、現実を受け止める度胸

『ぐらいはあるわ』

そんな言葉を漏らす玉藻に横島はまたも理不尽な運命に憤りそうになったが……彼女の震えている指先を見て考えを改めた。

玉藻は自分に責任を感じさせない為に怖いのを我慢して気丈に振舞っている。

なら俺がするべき事は何だ？

時が来るまで慰める事か？

自分が土壇場で無理やり二柱分負担し、玉藻を枷に囚われないようにする事か？

……違う。

あいつはそんな事望んでないし、気丈に振舞ったとはいえ……あれもまた本心だ。

……なら俺に出来る事は。

横島は運命の刻日が迫る中、暗闇で内面に没頭する……その脳裏にはルシオラの事が思い返されていた。

そして時は来た。

神界に赴き、横島と玉藻の現状を伝えてきた老師は肩を怒らせて帰ってきた。

出迎えた小竜姫がその形相に驚き、しりもちをつくほど。

そんな小竜姫を気にせず、独り言のように呟く老師。

『わしは昔神界で争いを起こし、ブツちゃん様に諭されてからそれなりに上の方々を敬い付いてきたつもりじゃ……そんな中でも頭にくる事はあったが』

その形相とは反して目尻には涙が溢れていた。

『じゃが、今回ほど頭にきた事はなかったぞ?! 足らぬ分は二人を苦行石に封印し、無理やり搾り出すというのじゃ!!』

『な!? なんですか、それは!? 単に石化するだけではなかったんですか?!』

『肝心要の時に役立たずのくせに、理に適えば恥も外聞もなく利用しようとする! 怒りを通り越して呆れてしまったわ!!』

苦行石とはそれに封印した者にあらゆる苦痛を与えエネルギーを採取するものである。

そしてその採取したエネルギーを対象に与え、半永久的な自己霊力増幅器とするのだ。

本来は遙か昔に拷問用に開発されたものだが、それを今回の補助に使おうという。

その余りの理不尽さに小竜姫は怒りで米神の血管が破け出血した。

『おそらく人界で極秘情報を報道した事に対する仕打ちだろうが、それならば我に下せばいいものを!! 何処までも日和よって!!!!』

『な?! アレは彼らの手助けの為になされた事! それに対してそのような反応を返すとは!! 其処まで腐ってますか神魔はツ!!!!?』

『……じゃが、小竜姫よ。わしは怒るだけで結局何も出来ん。斉天大聖などと名乗っておるくせにのう。情けない事この上ないわい』

『そんな事ねえよ、老師』

『そうね、老師ほど尊敬できる方は他にいないわ』

『……御主ら』

いつの間にか傍には二人が佇んでいた。

手を握り合って、此方に向けて微笑みを浮かべている。

『俺らは別にかまわねえよ、別にそいつらの為に協力する訳じゃねえけど』

『そうよね、忠夫とルシオラさんが護ったこの人界の為になるって言うから協力するっただけよ』

そついう二人の握り合った手は震えていた。

それは怒りからか恐怖からか、それとも悲しみからか。いずれにせよ、それを起こしたのは……我々神魔だ！

恥知らずの我々だ！！

『……じゃが、御主らはこれからだというのに！』

『やれやれ。だからそんな時化した顔するんじゃねえよ、老師』

『そつそつ、何時も見たく飄々としていてくれなきや』

わしの気持ちを思ってたか、二人は震えを押さえ、気丈に笑って見せた。

互いを愛し合いわしらに無上の敬愛を注いでくれる二人。

計り知れぬほどの傷を負い、それでも立ち上がり素晴らしいほどの成長を遂げ、これからだというのに！

……わしは何も出来ぬ、二人の代わりをする事も二人を癒す事も。

『……すまぬ、……すまぬう！』

何が神族じゃ！

何が斉天大聖じゃ！？

此れほど己を不甲斐なく思ったのは、初めてじゃ！！

老師は膝をつき顔を手で覆い、途切れぬ涙で床を濡らした。

だが、忘れてはいけない。

目の前にいるのが横島忠夫だという事を！！！！

『それに俺を誰だと思っっているんだ？最高の女であるルシオラは俺をこう呼んだぞ！？世界最高のワイルドカードと！！！！！！』

『え？忠夫？！』

『御主、何をする気だ？！』

横島はそれに答えず、己のオーラを最大限まで増幅し四つの双文珠を生み出し、左肩の巴文珠を発動させた！

巴文珠とは横島がオーラを最大限まで高めた時のみ使用できる切り札中の切り札で三つの文字を刻められるだけでなく、双文珠の実に二十倍もの出力を誇る。

そして、それに刻まれし文字は…… 魂／分／離 の三つ。

『我が最たる力よ！今こそ顕現すべき時！！我が魂よッ！汝が居場所は此処に在らずッ！！』

『こ、これは横島の魂が分かれた様としておる！さ、三割もの分霊を作り出す気か？！』

『さ、三割ですか？！』

小竜姫は分霊に籠められた魂の容量に驚く。

本来、分霊とは如何に強力な存在であろうと一割が限度だ。

それを越えると本体の方に崩壊の危険性がある。

かつてルシオラが為した霊其構造の譲渡で三割ならまだしも、切り裂くように別たれる分霊の場合は非常に危険だ。

『忠夫何する気？！私は平気なんだから貴方まで無茶しないで！！』

『馬鹿抜かせ！俺は諦めの悪い男だぜ？この程度の逆境乗り越えて見せる！！^{ルシオラとタマモ}最高の女達の恋人である俺に出来ねえ事なんてねえ

！！！！』

横島が危険を冒そうとしている事に気づいた玉藻が止めるように叫

ぶが……彼は取り合わない。

そうしている間にも事態は進み、分かれた分霊を取り囲むように浮遊する三つの双文珠。

文字はそれぞれ 譲／渡 融／合 固／定 の三つ。
残りの一つがまず玉藻に吸収される。

その文字は 増／強、玉藻の霊体の許容量を増やし、更に強化を施す。

そして分霊が玉藻に吸収され、その存在を完全に玉藻の物とするべく 譲／渡 融／合 固／定 の双文珠が順番に効果を発揮してゆく。

全てが終わった時、そこに佇んでいた玉藻からは230万マイトの相当するオーラが発せられていた。

『これは……、は！忠夫？！』

『……へ！ざまあみろ！！せ、成功、だ ガフツ！』

『た、忠夫 ツ！？』

呆然としていた玉藻だが、傍で倒れ伏そうとしている横島に気づき、駆け寄る。

横島の方は吐血するも、そんな玉藻を見やり、会心の笑みを浮かべる。

そんな彼は310万マイト程までオーラが減衰していた。

『……なんて奴じゃ。横島の分霊の方が完全に玉藻に融合されとる。あそこまで強力な分霊が融合したら玉藻の方が意識を無くす筈なのに』

『……いえ、横島さんの分霊が玉藻さんに乗っ取る筈がございませんよ。愛故に。あれは成るべくして成った結果です！』

『……ふふふ、本当にワイルドカードじゃな。わしらの心配や上層部の思惑なんぞ、あっさり蹴散らしてしまっておった！』

『全くです！本当にどこまでも非常識に最高な方ですね、ふふふ』
寄り添う二人を見詰めながら、呆気に取られていた老師達は次第に
頬を緩ませていった。

吐血した時はまた心配したが、今はそんな事もない。

何故なら玉藻が抱きしめる横島からピンクのオーラが急上昇しだしたからだ。

……大方抱きしめる玉藻の柔らかな感触に煩悩を働かせたからだろ
う。

この後の展開を予想できた二人はとりあえずこの後に控えている……

……楔の宿命を譲渡する儀式の準備……に取り掛かる事にした。

既に二人に悲壮感はない。

代わりにあるのは変わらぬあの二人とのこれからへの期待のみ……

背後から聞こえる玉藻の怒り声と横島の謝る叫び声に二人は笑みを
深めた。

『本当に忠夫は非常識で馬鹿で、スケベで空気クラツシャーよね？』

『いきなり唐突に何言い出すんだよ玉藻！……って言うか空気クラ
ツシャーって何だ？』

『雰囲気読まないからじゃないの？まあ、ヨコシマだし。そこら辺
はもう諦めるしかないんじゃない？』

『ルシオラさん？！二人して酷いぞ！俺が何をしたーッ！』

意識下で繋がり会話をする横島と玉藻とルシオラ。

あの後、無事楔の譲渡が終わり、恒例の宴が開かれた。

今回は横島所縁の神魔全員と両親、そして今も杯を交わす間柄の友人
全員が来た。

何気にグーラーたちや猫又親子まで来ていたりする。

妙神山の桜が舞い散る中、御座を敷き料理や酒を口にする皆は殊更
晴れやかな表情をしていた。

ちなみに人界では、その日横島忠夫が更なる偉業を果たし世界を護
る一柱になった事を称え、世界共通の祝日となった。

なお、玉藻の事も報道されたので日本政府は過去の行いを世界中か
ら追及されていたりする。

……最早どうでもいい事だが。

その後、皆が雑魚寝する中、こうして意識下で会話し始めたわけだ。

『別に何もしてないけどさ、ルシオラさん？』

『ええ、グーラーや美衣さんにお酌してもらって、鼻の下伸ばして
いたなんて事もなかったし』

『あ、あれは別に鼻の下伸ばしていた訳じゃなくてだな。久しぶりに
会ったから懐かしんでいただけだよ』

横島は妙神山に来てより人界に下りた事は一度もない。

修行に身を費やす横島にとって、たまに訪ねて来る友人と休憩時や
食事時に言葉を交わすぐらいが娯楽だった。

そんな横島にとって先ほどの宴は本当に懐かしさを感じさせた。
自ら望んだ事とはいえやはり寂しかったのかもしれない。

『それより玉藻。体の調子はどうか？』

『ん？平気よ。忠夫に貰った分霊は完全に一体化しているわ』

『……というか、この場合ヨコシマの方が不安定になっているのを
心配すべきよね？』

『俺は平気さ！何てったって玉藻に癒して貰ったからな！』

『……スケベ』

儀式前の玉藻の感触を思い出し、にやける横島に二人は呆れた視線

を返すのみだった。

『それにしてもようやっと落ち着く事が出来るんだよな、俺達。何だかんだであつという間だったけど』

『そうよね、まあ暫くはこの位階に慣れるべく鍛錬をするべきだろうけど。私達どうなるのかな？』

『老師が言うには、上層部の愚か者達の影響が来ない此処に落ち着く事になるらしい……っか、老師よっぽど今回の決定が頭にきたのか、キーヤン達に文句言いにいつていたぞ？』

『キーヤン達自身はそっちに加担してなかったんだけどね。下も押さえきれんとは何事じゃって……お義母さんもそんな老師を煽るし』

宴の席で上への文句を愚痴る老師に同調したかのように言う百合子には近づきたいものがあつた。

……もっともパピリオだけは構わず懐いて百合子を喜ばせていたが。

『お袋といえ……親父もだけど……パピリオに甘いよな？前からお袋達が来る時は妙に甘えさせていたし』

『お義母さんもパピリオが可愛くて仕方ないんじゃない？格好が子どものそれだから』

『私はこんななりだから甘えるのもなんか恥ずかしいし……魅力的ではあるけど』

横島達はベスパと家族の絆を結んでから両親とも同じように接するように仕向けてた。

元々甘えたがりの所があつたパピリオはもとより、ベスパも百合子の発する独特の雰囲気結構すんなりと甘えている。

ちなみにルシオラも横島が先の宴で顕現させて邂逅を済ませた。

その時の百合子とパピリオとベスパはルシオラに縋り付いて大泣きし、顕現の効果が切れるまで離れなかつたほどだ。

『あの時は恥ずかしかったわ、いくら宥めても離してくれないんだもの……まあ、悪い気はしなかったけどね』

『お袋はずっと気に病んでいたからな。俺としてもやっと願いを叶える事が出来てほっとしている』

『でもあの時のルシオラさん、完全に存在していたわよね？どういう事？双文珠でも顕現は出来なかったわよね？』

『あれは俺が最大規模で発動させた巴文珠の効果だよ。俺自身とルシオラへの負担も大きいし、早々出来ないけどな』

本来横島とルシオラは既に一心同体になっている。

ありえない事だが……もし仮に転生の輪に入っても別たれる事が無いほどに。

それを超出力で横島の内外から力を発揮できる巴文珠で無理やり分離するので、双方にとって身を引き裂くような痛みが伴うのだ。

さっきは丁度区切りも付いたしという事で、ルシオラの了解を取って実行に移った。

『まあ、何はともあれ二人とも。これからよろしくな？』

『ええ、此方こそ。ルシオラさんの意識が此方へも来られる様になったから三人で愛し合いましょ？』

『もちろん！何の障害もなくなったのなら、遠慮する方が可笑的いからね。久遠の愛を奏でましょ？』

『おう、やっと念願が叶うんやな〜！美人の奥さん二人も手に入れて、俺は三界一の幸せ者や〜！』

『クスクス』

本当の素を晒し喜ぶ横島に二人は笑みを零す。

そして三人はそのまま眠りの世界へと旅立った。

翌朝。

目覚め一番に目に入ったのは玉藻の寝顔であった。どうやら抱き合ったまま眠っていたらしい。

しばらくそれを何となしに眺めた後、そつと抜け出した。

冷水で顔を洗い、体の凝りを解す為武舞を踊っていると老師がやってきた。

『おはよう横島、朝から性が出るのう。どうやら分霊の後遺症もないようじゃし、何よりじゃ』

『老師、おはようございます……切り取った分を充足しようと体中が騒がしいですけどね。大体350万ほどで落ち着くと思いますよ』

『じゃろうな……御主がアレを実行した時には肝を冷やしたぞ。まあ、それぐらいの事をせねば覆す事など出来なんだだろうが、な』

『まあ、俺としては如何すれば、玉藻と共にいられるかという事しか頭にありませんでしたから……ルシオラは元より承知していたみたいですけど』

『ふむ、思いの強さが生んだ奇跡か……我ら純正の神魔では早々出来る事ではないな』

『そうですかね？……ところで老師、勅命ですか？』

『……気付いておったか。その通りじゃ、御主達にとっての初任務じゃな。わしとしてはもう少しゆっくりさせてやれと言いたい所じやが』

横島達には最上級の神魔になって、楔の役目の他にもするべき任務があった。

それはあらゆる次元の世界に赴き見聞を深める事である。

両者共にその実力だけで最上級に上り詰めた為、経験が乏しいという欠点があった。

他の者はそれなりの経験と何より宇宙意思が基から添えた者達だけに、一応問題はないのだが新参者の忠夫達は別だ。

最上級という立場にいる以上、どうしてもある一定の経験は必要なのである。

もっとも今まで横島が経験してきた事は人間にしては途轍もないものだが。

ちなみに横島達が訪れる世界は基本ランダムで選ばれるが、対象世界からの一定の制約を受ける事が前提となっている。

『構いませんよ、彼女らと共にいられるなら。もっとも、俺らの平穩を乱す輩が現れるのなら……正しく無へと還してやりますけどね？』

『そうか……なら良いのじゃが（何だかんだで、逢瀬を邪魔される事に腹を煮え返らせておるようじゃな）』

何気に米神にはつきり井桁が浮かんでいるのを確認した老師は苦笑を浮かべた。

ついさつきしばらくは鍛錬だろうと予測していた分……事の性急さにちよっぴり苛立ったのである。

『とりあえず朝餉じゃ。御主は相方を起こしてまいれ……そう急がんでもいいからの』
『分かりました』

こうして太極天こと竜魔神・横島忠夫と狐星神・九重玉藻、そしてルシオラの意識体の新しい生活がスタートした。

待ち構えているのはどんな騒動なのか……それを知る者はいない。

終章 刹那の愛の新たなる一歩（後書き）

11 / 14 修正

エピソードがく消え逝く希望と残されし希望（前書き）

申し訳ありませんでした！！

五時間も遅れてしまいました（汗）

エピソードぐく消え逝く希望と残されし希望

神魔最高指導部会議場。

其処では名だたる偉神達が忙しなく空間を弄っていた。

『サツちゃん！そちらはどうですか?!』

『あかん!?ゲートも冥界チャンネルも異常に歪められとる?!これじゃ、けつたいな所にしか出られえへんで!!ブツちゃんとアツちゃんはどつや?!』

『こちらもです!?!歪曲された空間に更に10万を超える防壁が張られています!?!』

『マジか?!こんな事する暇あつたらもつとマシな仕事せんかい!?!』

『全くです!横島さんは無事でしょうか?』

『実力面では心配ありませんが……人質がいますからね』

『……最悪の事態も考えとかなとな。業腹もんやけど』

サツちゃんの言葉に場が酷く重々しいものになる。

しかしそれも仕方がない事だった……全ては己らの失態が全ての原因なのだから。

時は少し遡る。

いつものように上層部のたらい回しで異世界を巡ってきた横島と玉藻、それに付随していたルシオラの意識と白蛇姫ことメドーサ(?!は妙神山へと帰還していた。

ちなみにメドーサはふとした切欠で内に眠っていた因子から芽吹いたものだ。

当初は馴染めなかった意識だが、日頃の横島達のいちやつきぶりに感化され、いつの間にか仲良しになっていた。

異世界を巡り、眷族になったり従者になったりした連中と再会を祝いながら宴を開いていた横島だが、ふと気になる気配を人界に感じる。

「……？ヒヤクメ、わりいけど人界の方を見てくれないか？今心眼のやつ眠っているからさ。なんか嫌な予感がするんだ」

「分かったのね……？これは、一体？ツ？！百合子さんに大樹さん？！」

「親父達がどうしたんだ？！」

驚き声を挙げるヒヤクメに詰め寄る横島。

他の者達も異変を感じ心配げに見詰めている。

「百合子さん達が変な格好をした連中に襲われているのね！傍にいた雪之丞さんが応戦しているけど……状況は芳しくないのね！？」

「なッ？！雪之丞が苦戦するだど！？」

竹馬の友でもある雪之丞の実力と現状を知るだけにその報告を疑った。

しかしそれも束の間、両親と親友が危険に晒されているなら疑問などどうでもいい事だ。

直ぐに立ち上がると横島は人界に向けて転移した。

S I D E 百合子

私達はその日G Sの規約改定会議に出席していた。

同伴、と言うより護衛に忠夫の友人である雪之丞君が付いてくれていたのは、後で思い返せば幸運な事だったのだろう。

8時間に及ぶ会議を終え、帰宅した私達を待っていたのは謎の集団による誘拐未遂だった。

当初は規約改定に反発する者達の暴走かと思ったが、それは違うよ

うだ。

「なんだこいつら?! 異様に靈力がでかいぞ!?!」

『汝、無知なり。これは靈力ではなく、神靈力』

『ハッ! こんな野郎に言ってもしょうがねえだろが、これは魔力つて言っんだ』

「神靈力に魔力だとお?! 手前等神族に魔族かつ?!? どうしてこんな暴挙をする!?!」

『知れた事、信仰を一身に受けるかの太極天が煩わしかった故。やつと上手い具合に最高指導者の目が散漫になったこの機会逃す訳にはいかない』

『あいつのお蔭で俺達は日に日に信仰力が目減りしていつていっている。』

ふざけてるだろ? 最上級とはいえ高々新人のあいつに信仰を根こそぎ奪われるなんて?』

「……馬鹿じゃねえの? それって要するにお前らの働きが足りなかっただけじゃねえか。横島も不平不満は言うが、きつちり成果を出しているぜ? てめえら如きに馬鹿にされる云われはねえッ!!!」

雪之丞君が応戦しながらも息子への嘲りを罵倒した。

数が多く相手も強大故にかなり劣勢だが、雪之丞君には息子の加護がついている。

非常時に最上級神魔である太極天の力を一部使えるという破格の加護が。

これにより雪之丞君は人間でありながら上級神魔とも互角以上に戦う事ができるのだ……何せ世界でもっとも真摯に信仰されている一柱の加護なのだから。

……しかし、息子への逆恨みからの行動か。

と言う事は狙いは私達を人質にする事ね……それは絶対避けなくてはならないわ。

命は惜しくないけど、私達が捕まると忠夫が好きなように弄ばれて

しまつのは目に見えているから。

「クソツ！やられはしないが数が多すぎるツ！」

『ふむ、流石に太極天の加護を受けし者。これだけの攻撃を受けてびくともしいとは』

『全くだ……くくく、だがそれも此処までだがなツ』

「ツ！？百合子さんツ！大樹さんツ！」

状況を見極めようとしていた私達の背後で急に湧き上がる気配ツ！？振り向くよりもその場を離脱する事を選んだ私達だが、その影は私達を搔つ攫ったツ！

「て、てめえらあ！その人達を離せえ！？」

『くくく、吼えるなよ雪之丞よお？せつかく俺が出向いてやったんだからよお』

「なツ？！お、お前はっ！？」

『忘れてはいないよなあ……同門だったんだからよお』

「い、陰念ツ！？」

『その者は魔族になりかけのまま彷徨っていてね、折角だから少しばかり手を加えてみたのです』

『そしたらなんだか面白い事になってな？お前達への執着心で溢れかえったって事さ！笑えるだろっ！？泣きながら許してくれえって、助けてくれ雪之丞う横島あつてなあ！！クハハハツ』

「ツ、てめえら黙れっ！！それ以上口を開くなっ！！！」

私達を捕らえている影は顔を顰めなくなる様な声を出しながらも……

……どこか哀愁が漂っていた。

……しかし不味い。

このままでは完全にお荷物だ。

私は夫にどうにかならないか視線で尋ねたが、向こうも同じようだ。

最悪自ら命を絶てばいいだろうが、その後忠夫がどういう行動をとるか容易に想像出来るだけに決断できない。思考が袋小路に入り込んだ頃、唐突にその場に顕れる気配！それは良く知る愛おしい息子のものだった。

『お袋達を離せえッ！！（バシユッ！）ッ！？こ、これはっ！？』
一直線にハイスピードで私達に接近した忠夫は、しかし何かに阻まれ近づけなかった。

『……やつと来ましたか。無駄ですよ？貴方の超加速や文珠への対策を施していないと思いませんか？』

『そうそう無駄だぜえ？アシユタロスの野郎が残した宇宙の卵による無敵結界が張つてあるからなあ！』

『ッ？！（あの結界かッ！しかしそれでもどこか一部に穴がある筈、こいつら程度にあれを更に改良出来る訳ねえし）』

『横島！あの影は陰念なんだっ！どうにか出来ないか？！』

『ッ！何とかしてみる』

『くくく、何とかしてみるなあ？人質がいる事忘れていないだろうなあ？！』

『少しでも抵抗したら……あの者達は影に潰させますよ？』

そう言った途端、私達を圧迫する影。

「ぐっ！？」

「きゃっ？！」

『親父！お袋ッ？！』

『さあ、抵抗せず我々の手向けを受けなさいっ！』

『やっ！と晴らせるぜえ！この鬱憤をよお！？』

「く、腐ってやがるッ！」

そして始まった……私達にとって悪夢の一時間が。

S I D E O U T

S I D E 齊天大聖

わしらは今猛襲を受けている。

横島が転移した数瞬後、この妙神山へと押し入って来た者達によって。

『くっ?!こやつら自爆覚悟で飛び込んできよるっ!』

『こつちもですッ!しかもレポートや転移が出来ません!』

『……ッ!分かったのねえ!この周りには大戦時に使用された宇宙の卵の結界が張られているのね!』

『あれですか?!?ではどこかに穴がある筈です!ヒヤクメ、早急に見つけて下さい!』

『もうやっっているのね!』

皆が各自手を尽くすなか、わしは状況の悪さと目の前に浮かぶ映像に苛立っていた。

そう映像だ。

横島が転移し、此方が襲撃を受け始めた頃になって突然映し出されたこの映像はリアルタイムで横島の現状を映したものだ。

其処には人質を捕られ、無抵抗で攻撃に晒される横島がいる。

『(ギリッ!)此処まで腐っておったとは、この騒動が治まったら一柱残らず灰燼にしてくれるッ!』

『当然よッ!忠夫をあんな目に遭わせるなんてッ!?百合子さんの今の気持ちを思うとあんなクソ野郎共、生かしておけるもんですかッ!……!』

『お兄ちゃん、お母さん、お父さん……赦さない、絶対赦さないッ
！！』
『横島さんッ……一度ならず二度までもッ！下郎共……楽に死ぬる
と思うなよッ！？』

それぞれが怒りと憎しみで敵を屠りながら、ヒヤクメの解析を待つ
て早一時間を過ぎようとする頃、漸く発見される結界の穴。
わしがそれを即刻ぶち破ると迫り来る愚か者共を蹴散らし外へと飛
び出した。

……だが、既に時は遅すぎた。

S I D E O U T

S I D E 忠夫

あれから一時間が経とうとしている。

俺は無抵抗のまま全身を打ち据えられ砕かれ斬られた。

もつとも、最上級に位置する俺だけにこの程度ではくたばりはしな
いし、見た目ほど酷くはない。

俺がこうして我慢している間に必ず老師やキーやん達が手をつつて
くれる筈だから、俺は何も抵抗しなかった。

……だが、やはり俺はどこまでも馬鹿だったようだ。

あのお袋や親父がこの状況を黙って見ていられる筈がないという事
に気づかなかつたのだから。

「（このままでは駄目ね……どうにもあいつらにはまだ奥の手があ
るようだし、あなた）」

「（分かっている、俺達はこちらまでだが忠夫にしてやれる最後のプ
レゼントだ……潔く散ってやるとしよう）」

「（御免なさいね、あなた……愛しているわ）」

「（謝る必要なんてあるものか、百合子……愛してるよ）」

「忠夫ッ！貴方の好きなようにやりなさいッ！！」

「馬鹿息子ッ！遠慮は要らんッ！このクソ野郎共をやっつけちまえッ！！」

『お袋？！親父ッ？！何をする気だっ！？』

お袋達の叫びに嫌な予感が体中を駆け巡る！

次の瞬間、お袋達は血を吹いて……事切れた。

……いつ頃からか、常備していた自決用の毒を飲んだのだ。

『……？おふくる？おやじ？』

「……ッ、なんてこったッ！？クソッ！！」

『な、何という勝手な真似をッ！？』

『畜生ッ！これだから下等な人間の行動は読めないんだッ！！』

真っ白になった頭の端で耳に障る声が聞こえる。

……うるさい、静かにしろ。

『しかし、その行為も無駄です！我らには取って置きの兵器があるのですから！！』

『喰らうがいい！史上最強の滅びの光をッ！！』

「ッ？！な、なんだありゃあ？！」

青い顔でそれでも微笑んで事切れた両親の顔が目について離れない。

違う、お袋も親父もそんな青い顔はしていない筈だ。

そしてまたも耳に障る声が響いてくる。

……うるさい、黙れッ！！！！

『黙れえ！！！！！！』

俺が放った一振りはその処にいた全てのクソ野郎共の殆どを消滅させ

た……文字通り灰燼も残さずに。
残りのクソ共も斬刑に処した。

俺は静かにお袋達の亡骸に近づくと結界と未だ捕まえている影を無造作に退け被う。

それによつてあれほど強固だった結界と萎縮していた影は呆気なく消え去り……最早物言わぬお袋達が解放された。

『馬鹿だよな、俺。お袋達が行動を起こさないと事ある筈なのに……ごめん』

俺は自身の力でお袋達の汚れを払って抱き上げると呆然としている雪之丞に歩み寄った。

『……すまない、雪之丞。陰念をどうにかする気が起きなかつた』

「い、いや！いいんだ、俺の我侭だつたし……百合子さん達があんなになつたのにそんな事してくれなんて言えねえよ」

『そうか……わりいけど、お袋達をこの髪の毛と一緒に埋葬してくれ……俺はあれを何とかしないとイケないからな』

そついつて自身の髪の毛を切り取り雪之丞に渡す……これを一緒に埋葬すれば俺の加護でお袋達は再度夫婦として出会える筈だ。

……例え世界が滅びようとかだ。

そして紅蓮に染まつた天を睨む……見上げるその先には真っ赤で巨大な太陽の如き珠が迫っていた。

S I D E O U T

神魔最高指導部会議場ではこの上なく重い沈黙に包まれていた。周囲を覆う異変は既に解除されている。

しかし目の前に映る映像によつてそれが既に遅すぎたと気付かされ

ただ。

映像には迫り来る滅びの光を何とかしようと、横島が自身の全てを護りの壁へと変換し始めている……最早後戻りできない段階にまでそれは進行していた。

『なんて事だ……あんな物まで持ち出すとは!?!』

『もう神魔はお終いやな……いや、そんな事はええんや。それよりもよこつちになんか出来る事はないか?』

『そうですね、今ならまだ記憶と因子の転送が可能な筈……それを持って過去へと希望を残しませんか?』

『より良い歴史を作ると言う事ですね?それはいい事です』

『我々も記憶を過去に送って横島殿の手助けを最大限に致しましよ』
『う』

『そんじゃ、よこつちに念話を送るで?』

『我々は残った過激派共を極限まで痛めつけ、苦行石に封印しましよ』
『……サツちゃんも早く来てくださいね?』

『わーとる!わいの分も取って置けよ?』

サツちゃんが念話を開始したと同時に他の指導者は一斉に粛清へと乗り出した。

替わってこちらは老師。

彼は今呆然としていた。

目の前では愛弟子にして孫のように可愛がっていた横島が徐々に体を光の粒子へと変換していたのだ。

そしてそれだけでなく、世界に向けて声を張り上げていた。

『地球に住まう愛しき住人達よ!我が名は太極天!貴方達に信仰されている神魔の石柱だ!……貴方達も今起きている事に戦々恐々としているだろうが安心するといい!この災厄は私が食い止めて見せ

る！！』

辺りで騒いでいた人間達も横島の勇姿を見て騒ぐのを止め、祈りの体勢に入った。

『私はこれ以後姿を見せる事はないだろうが……健やかに生きてくれ』

それで世界に向けての発言は終わった。

周りで祈っていた者達や雪之丞は呆然とした顔で涙を浮かべながら横島を見ている。

かく言うわしもそうじゃ……結局わしは何もできなんだ。

『そういう訳で老師？これ以後の事は貴方に任せます、老骨に沁みるでしょうけど……たのんます』

『……横島』

『よこつち、ちょっとええか？』

『？サツちゃんか？』

『こつちもようやつと通信可能になったわ……キーヤん達は既にクソ共の肅清に行ってもうたから簡単に言うけどな、よこつちの記憶と因子を過去に送って、もっとええ歴史に変えへんか？』

『……それは』

『猿神もそう思うやろ？より良い人生をよこつちが送るんや』

『確かに良いですな……過激派のクソ共も最初から見張るのでしょ
うっ』

『当然や！で、頃合見計らって苦行石に封印するなりにして静かにしたる！』

『くくく、いいですな……実にいい！！横島よ、此処で散るのはもう止めはしない。だが、この案に乗れ！それがわしの願いじゃ！』

『……はあ、分かったよ』

横島は老師の懇願に頷くと自身の記憶と因子を模写し、特殊な封印を施した巴文珠を時空転送術で送ると雪之丞へと向き直った。

「……雪之丞！お前に施した加護はそのままにしておく！それはお前の死後、お前の認めた者に受け継がれるようにしておいたからこれから先の人界を守ってくれ！……頼む」

「……分かった。お前の事は子に孫に伝えていく……例え世界が滅んでも世界を渡ってでも、またお前に会って見せるから、その時はよろしくな！」

「雪之丞……ああ、いつかな！」

横島はそれを最後に力の解放を始める……と、其処に飛び込んでくる複数の人影。

玉藻達だ。

「忠夫！私達絶対また会うからね！例え世界を渡ってでも絶対に……！」

「そうでちゅよ！ルシオラちゃんだけに美味しい目はさせないでちゅ！」

「横島さん……いえ、横島様……どうか御無事で……！」

「眷族の方達も同じ気持ちですよ！勿論私も……！」

「ッ、……そんな事あったりめーだろが！？俺が折角手に入れた美女や美少女を手放す筈がないだろうが！！例えどれだけ時間が掛かろうと取り戻して見せるさ！！俺の煩惱は宇宙一絶対不可侵の物だぞ！！！！ワイルドカードの底力を舐めんなよ！！！！！」

横島はそう言うのと最後の仕上げとばかりに全身を光に換えて天へと上っていった！

そして滅びの光と激突し一瞬の拮抗の後、共に消し飛んだ……残滓すら残さずに。

煩わしい光が消えた先には……真っ赤な夕陽が悠然と輝いていた。

その後の事で記する事はそれほど多くはない。

過激派の神魔は悉く限界まで痛めつけた後、苦痛を与え続ける苦行石に封印処理され、それ以後姿を見る者はいなかった。

妙神山は暫し静かになったが、このような様では横島に怒られると言う事で以前のように賑やかな風景へと変わっていった。

『鬼門！また負けたでちゅか！？いい加減解雇しまちゅよ！！』

『ど、どうかお許しを！パピリオ様！』

『なんじゃ、また修行者を通しおったのか？』

『そうみたいですね……でも仕方ないと思いますよ？』

『……確かに、あいつに掛かっちゃねえ』

『？何故じゃ？』

「修行を受けに来た伊達雪之丞という者だ！先代を乗り越える為、力を貸してくれ！！」

老師の疑問に答えるかのように言葉を発したのは、横島の親友と瓜二つな男であった。

その身からは、懐かしい波動が僅かに漏れている。

『！……なるほどのう。では久々に念入りな修行を課してやるとするかの』

『駄目です、まずは私からですよ？』

『皆で鍛えればいいじゃない……それぐらいの素質はある筈よ？』

滅亡への時間は神魔にとっせしてみればほんの僅かな時間でしかなかったが、それでも此処妙神山では最後まで賑やかな空間が彩られていた。

……ちなみに、世界が滅びる間際、玉藻達や雪之丞の血筋、そして眷属達は異世界へと渡り、横島との再会を願う。

そして人知れず暮らしていた筈の美神家は横島家と同じように襲撃を受け呆気なく全滅し息絶えていた。

その死に様は惨たらしいものであったが、人目につかなかった事が唯一の救いか？

ただ一つだけ、太極天の散った場所に倒れ伏していた筈の魔族が一柱、消え去っていた事だけは終ぞ誰の記憶にも残らなかった。

世界はただ太極天のみを信仰するようになり、世界の護りはやがて弱まっていったが、其処に住まう人々は最後まで笑顔に溢れていたとか。

愛を知り、愛に生きた一人の人間の話は後にこの世で最高、最後のバイブルになった。

そして物語は過去へと渡る……今度こそ真のハッピーエンドを迎える為に……！！！！

エピソードが、消え逝く希望と残されし希望（後書き）

8 / 23 少し加筆。

10 / 4 他作品の為に少し修正。

11 / 14 修正

？よこつち生誕記念（前書き）

文章ファイルに埋もれていた残骸です。

チエツクは一応しました。

可笑しな点が多々あると思いますがご容赦を。
それではどうぞ。

~~~~よこっち生誕記念~~~~

プロローグ〜慟哭を乗り越えて〜

横島忠夫（17）職業ゴースト・スイーパー

かつて己のあり方に適応できなかった一柱の魔神・アシユタロスが起こした反乱にて打開策を持ち、魔神殺しを果たした陰の功労者。そして報われる事なく愛する恋人・ルシオラを失った男。

反乱の後、度々命のあり方について考えるようになった彼は、今までの自分の行いを思い返し情けなくなつた。

姉妹で争う事になつた原因は自分だし、ルシオラが自身の命を持つて俺を生き留まらせたのも俺が何も考えずに飛び出し攻撃を食らつたからだ。

選択の時も結局ルシオラにつらい言葉を吐かせる破目になつた……自分がアシユタロスを倒すなんてほざいた癖にである。

覚悟を決め覚悟の意味さえ気づかず、ただ愛する女の命を食らつた男。

情けないにも程がある。

今更反省してもルシオラは生き返らないが、彼女の愛した男が無様に燻つていていい筈がない。

……だからといって煩惱を捨てれば言い訳でもないが。

今は亡き恋人を想い忘れず、けれど彼女に括られず周りに流されず……俺らしく生きればいい筈だ。

俺に出来る事、俺の可能性を追求していく事が今の俺がすべき事だと思つ……言つは易しだけ。

「結論、結局自身を鍛えなくちゃ駄目つて事だよな。今まで他人任せに生きてきたからなあ、妙神山に行つて小竜姫様達に師事しよう

かな……今は台風一過で依頼もないみたいだし」

思い立ったが吉日という訳で事務所に報告に行く事にした横島。

「ちゃーす！」

「あつ、横島君。いい所に来てくれたわ……これから妖怪退治に行くわよ！」

扉を開けていざ用件を言おうとしたら、慌ただしく動き回っている美神とおキ又がいた。

「へっ、依頼つすか?!台風一過でしばらくない筈じゃ」

「政府からの依頼なのよ、大金が私を待っているわーっ！」

目を金にして仕事仕度をする美神に何故か嫌な予感がする横島だった。

「で、どんな悪事を働いた妖怪なんですか?あと俺たちだけで退治するんすか?」

気になった横島は聞いてみた。

「さあ、わからないわ。まあでも、政府が依頼するぐらいだから性質の悪い妖怪なんでしょ?退治はもちろん私達だけよ。儲けが減るじゃない!」

結局判らない事だらけだが準備を急かす美神に怒鳴られ、渋々用意する事にした。

(……駄目だ、やっぱなんか流されてしまうなあ)

強気に出られない自分に嫌気がさす横島。

現場に着き、そこで自衛隊がいるのを見て嫌な予感は一層に大きくなった。

（そもそもどんな妖怪かも聞いてないし問答無用で退治するって言うのも気に入らないよなあ……どうしようか？）

配置場所に向かいながら考えにふける横島。

もう流されて行動するのは止めと決めた端からこんな事態である。

（此处で選択を間違うと自分の決意も嘘になってしまう。例えどうなるかと直感に従い行動するぞ……美神さんや政府を敵にしても！）

隣のおキ又に気づかれないように意識下で決意し現場に向かう。

（俺は魔神にすら啖呵を切った男だぞ！もし美神さんや政府が間違った判断をしているなら！）

配置場所に着き、目標を待ちながら決意を更に固める横島。

単に美神の態度についていけなくなっただけかもしれないが、このまま美神の丁稚でいる気もなかった。

「……おキ又ちゃん、結界を消そう」

「え？何言っているんですか横島さん！？これを消してしまったら妖怪に逃げられてしまいますよ！」

突然、横島の言い出した事にびっくりするおキ又。

それに構わずさっさと捕縛結界を消す横島。

「ちょ、ちょっと横島さん！？いいんですか?!」

「……おキ又ちゃん、俺は俺の直感を信じて行動するよ。もう流されて行動する気はない!」

止めようとするおキ又に真剣な顔で告げる横島。

「横島さん?」

あまりにも変な、これまでと違う横島に混乱模様のおキ又。

「今回はあまりにも不可解な点多すぎる。自衛隊がいたり、政府からの依頼だつて言うのにGメンじゃなく、民間の美神さんの所きたり……拳句、確かな正体も分からず問答無用で退治するなんて俺には理解できない!こんな結界を張って傷ついた妖怪が掛かったら要らぬ敵愾心を持たせる事になる。俺の直感は敵じゃないって感じているんだ」

真摯に語る横島に呆然とするおキ又。

そこに響く銃声と続いて届く連絡。

横島は歯を食いしばり、じっと待った。

果たして出てきたのは子狐だった。

直感に従った横島は急ぎ文珠で子狐を複製し、ついで本物を癒の文珠と一緒にかばんの中へ匿う。

そして美神達が来る前に封印札に収めて焼却した。

「で、仕留めたのね?」

「札に吸引して焼却しました……あそこに」(……ッ!やっぱり、思ったとおりだ)

「そう、よくやったわ」

劣う美神を他所に横島は彼女と自分の決して相容れぬものを感じ始  
めていた。

「でも……その話からすると、別に退治しなくても良かったんじゃない  
？」

「ま、まーね」

おキ又の言葉に口を濁す美神。

その後続く違約金がどうの、仕留めたのはあんただのという言葉に  
横島の中にあつた美神への仲間意識は完全に無くなった。

（結局お金が第一かよ！？政府が神経過敏だからって何でも従えば  
いってもんじゃないだろ！？敵にすべきじゃないなら不必要な争  
いは避けるべきじゃないのか?!）

荒れ狂う己の内面を何とか抑えて帰宅を告げる横島。

「おキ又ちゃん、判つていると思うけど、さっきの事は内密にしと  
いてね？後、今日は一人で居たいから家には来ないでくれないかな」

擦れ違う際おキ又に告げる横島。

いつもと違う横島に不安になるも頷くおキ又。  
アパートに戻った後、まずこの妖狐の安全を確保しなければ、と思  
い予定していた妙神山行きを決行する事にした。

「もう、美神さん所にはいけないな……まあ、いい。どうせもう付  
いていけないと思つていたんだ。おキ又ちゃんには悪いけど潮時だ  
な」

一旦気持ちを決めると、次々に心の奥に押し込めてきた思いがあらわれ出す。

ルシオラ達の所にいた際、感じた隊長への不信感。

選択の際、目を逸らし声を挙げない大人達。

日常へ戻った際の周囲の反応に対する不満。

……碌なもんじゃないなあ。

「一度は人類の敵にされて敵諸共殺されかけたんだ、今度はこつちから人界を見限ってやればいい……って簡単に割り切れたら楽なんだろうけどなあ」

溜め息を吐き部屋を見回して特に感慨が沸かない事に苦笑した横島は、とりあえず両親にのみ報告する事に決めた。

Side YURIKO

「はい、横島です」

『お袋か、忠夫だけど……大事な話があるんで少しいいか？』

夕食の準備をしていた時、掛かってきたのは息子からの電話だった。少し前に起きた魔神の反乱の際人類の敵として報道され、その少し後実はスパイでしたと報道された時にはなんとも言えない気持ちになった。

だが、その時は何もしなかった……子供を護る筈の親である私が何もしなかった！

反乱が終わった後、電話越しに聞いた息子の声はそれまでと違いくちか虚無感の漂う危うい声色だった。そして語られるのはとんでもない内容ばかり……その話を聞き思った事はただ一つ。

あたしは何をしていた？！

それだけである。

周りの大人はどうしたとか、未成年に何させているのだとか思わな  
いでもなかったが。

それ以上にたった一人の息子があってはならない選択をしたのに、  
親である自分は何をしていたという気持ちの方が強かった。

『ついさつき政府からの依頼で妖怪退治をしたんだ。美神さんはお  
金に目がくらんで碌に確認もせず、退治一辺倒だったよ。俺はさ、  
嫌な予感がしたもんで秘密裏にその妖怪を匿ったんだ。結局、その  
妖怪は退治する必要なんてこれっぽちもなくてさ……俺も美神さ  
んが信じられなくてさ。これから神族の斉天大聖老師を頼って妙神  
山に行くんだ……老師なら政府も手が出せないからさ。ついでに俺  
もしばらく妙神山に籠ろうと思うんだ。だから電話した……アパー  
ト引き払うぐらいの気持ちだから』

黙っていた私に構わず話し出した忠夫の話の内容はある意味納得で、  
ある意味驚愕の内容だった。

大戦中やその後の忠夫への周りの対応を考えれば人間不信に陥って  
いてもおかしくないのだから。

それでも心の底で忠夫ならそれすら飲み込んで成長していくと勝手  
に思っていた。

息子だって一人の人間に過ぎないのに！

結局、私は思うだけで何も為そうとはしていなかった。

その結果がこれなのだろう。

「……そう。学校はどうするんだい」



あまりの自分の情けなさにいつもの張りのある声が出せなかった。今となつては私に出来る事なんて忠夫の望みを一つでも叶えてやる事ぐらいだ。

『……悪いけど退学するよ。今俺が求めているのは俺を根本から変える為の修行だけだからさ……今更かも知れないけどな』

「そう、かい……分かったよ。手続きはしておく……他に私に出来る事はないかい？」

涙が溢れるのを必死に我慢して、何とか言葉をつむぎだす。

『……ごめん、最後まで親不幸者だったよな俺って。親父にはお袋から言つといてくれ……さよなら』

告げられた別れの言葉に、切られた電話の音についてに涙腺が決壊した。

「あ、……あああつ、忠夫お　　っ！！」

切れた受話器を抱きしめ、ただ涙を流すしかない私だった。

Side OUT

「……泣かせちまったな、ほんと俺って奴は」

受話器を置いた横島は涙交じりだった母親の声を思い出して頂垂れた。

だがそれもつかの間、今自分がするべき事は後悔する事ではないと思ひ直し立ち上がった。

文珠を使いゴミと不要物を消滅させ、着替えとルシオラの霊破片だ

けを持ってアパートを後にする。  
目指すは妙神山。

Side YUKINOJYOU

ダチの恋人が死んだ。世界の存続と引き換えに。最愛の男の手で死んだ。

ダチが慟哭した。恋人の死を。己の無力さを。世界の理不尽さを。世界は助かった。一組の尊き愛を犠牲に。あつてはならない選択をダチに強制して。

世界は回る。偽りの英雄を祭り上げて。慟哭の生み出すものを気にもしないで。

「……行つたか」

俺は、アパートを出て妙神山を目指し走り去る横島を電柱の陰から見詰めながら呟いた。

俺は大戦直後からずっと横島を見張っていた。

それは別に誰かからの依頼ではなく余りにも危うく見えたからだ。他の連中も初めは気にしていたみたいだが、いつもどおりに振舞いだしたあいつを見て徐々に日常に戻っていった。

だが、俺からすればその判断が信じられない。

世界と恋人というあつてはならない選択をさせられた人間が元に戻るといふ不自然さが判らないのか？

ママを失った俺は世界が色褪せて見えた。

じゃあ世界以上の恋人を失った横島はどうなんだ？

俺以上に形振り構わず力を求めたりしないか？

俺は横島達のおかげで道を誤らずにすんだ。

なら今度は俺があいつを救う番だ。

……と、決意し他の連中が気にしなくなつた後も張り込んでいた。

そして現在。

あいつは予想どおり力を求めた。

けどそれは歪んだ気持ちではなく、恋人に誇れる自分を探す為のも  
のだった。

そして出会って間もない妖怪の為に全てを懸け行動を起こした。

「へっ！やっぱすげえよ横島、お前は。負の感情に囚われても、更  
に強い意志を持って乗り越えようとするんだから」

横島は行動を起こした。

なら次は俺だ。

あいつは俺なんかよりずっとすげえ奴だが、こんな俺でも役に立つ  
事がある筈だ。

ダチが全てを懸けて己を磨くというなら、俺はそんなあいつの邪魔  
になる事象からあいつを護るまで。

それがあの決戦で何も出来なかった俺のケジメだ。

……まずは、信用信頼できて俺には護れない部分を護れる味方を揃  
える事から始めようか。

やる事が決まれば後は行動に移すのみ、さあ忙しくなるぞ。

Side OUT

Side ????

揺れる布袋の中私は考えに浸っている。

火を噴く長筒を持った人間達に追われ、必死に逃げていた私は一人  
の男に出会った。

その男は私を見ると、一瞬苦虫を噛んだような顔をした後、なんと  
私そっくりな狐を取り出した。

そして私を袋に入れると追ってきた女に私を退治したと報告した。

とりあえずこの男が私に危害を加えない事が判ったので大人しくしている事にした。

一緒に入れられた珠が放つ癒しの霊波も心地良いものだし。

どうやらこの男はあの女の所で働いていたようだ。

もっともそりが合わず辞めるみたいだが。

しばらくして誰かと会話していたようだ、その中に出てきた斉天大聖という名に度胆を抜かれた。

確かその名は神界でも有数の仙神のものだった筈。

この男は一体何者なのだろうか。

まあ、私の安全を確保する為に全てを捨てる覚悟までしているみたいだし、信じると思いますか。

これからどうなるか判らないけど、たぶんこの男と共にいる限り幸せになれそうな気がする。

埒もなくそう思いそっと目を閉じた。

## Side OUT

第一話　己が覚悟はいかほどばかりか

既に薄暗くなり始めた山道を壮快に駆け上りながら先ほど感じた霊波を思い返した。

「あれって雪之丞だよな。最近たまに感じていたけど、……心配かけていたかな？」

大戦後、友人達が気遣ってくれているのに申し訳なく、俺は以前のようなふざけた態度で誤魔化そうとした。

その誤魔化しに皆が普段どおりの生活に戻っていく中、あいつだけ

は変わらず俺に接してきた。  
おそらく最近の俺の行動も把握している筈。  
なら、あいつがしそうな事と言えば……、

「……得がたき友人、だな」

不甲斐ない男である俺からすれば勿体ないくらい出来た友人だ、バトルジャンキーではあるが。  
なんとなく穏やかな気持ちになりつつも、本来慎重に進まなければ谷底に転落という道とは言えない道を短縮する勢いで跳び掛けて行く。

「こんな事が出来てもあいつは救えなかった……なら俺に必要なのはもつと精神的なものか？基礎さえ碌に修めてない俺が言えた事じゃないだろうけど。だからって俺らしさを失くしちゃあ意味ないしなあ」

埒もなくそんな考えに浸っている内に妙神山の門である鬼門達の顔が見えてきた。

辺りはもう真つ暗である。

「なんとか着いたか、早くこいつを休ませてやらないとな」

妖狐の入ったかばんを揺すらないように持ち直して鬼門に挨拶する。

「夜遅くにすまん、横島だけど老師は人界にいるか？」

「ん？おう横島ではないか。老師様か？今は居られる筈だぞ、まあ入るが良い」

知った仲故か特に気にする風もなく門を開ける鬼門達。

礼を言つて入つていくと奥から一人の少女が走つてきた。

『ヨコチマーツ?!』

横島の姿を確認した少女はそのまま抱きついた。

「!パピリオか。元気だったか?」

『パピは元気でちゆよ!ヨコチマはどうしたんでちゆか?もう夜中でちゆけど』

よほど彼に会えたのが嬉しいのか目をきらきらさせて尋ねている。

「ちよつと老師に相談があつてな。後、できればしばらくの間此処にお邪魔させて貰おうと思つてきたんだ」

『ほんとでちゆか?!じゃあ早く猿爺のここに行くでちゆ!』

思つてもいない言葉に顔を綻ばせ、手を引いて連れて行くパピリオ。それに苦笑する横島。

「まあ待てよ、小竜姫様にも挨拶しなきゃならないだろ。夜分に押しかけてきたんだから、まず管理人の小竜姫様にお伺いを立てなきゃ」

言っている事は至極当然の事だが、それを横島が言つと話は別である……つまり。

『……ヨ、ヨコチマ?何か悪いものでも食つたでちゆか?そんな常識的な事を口にするなんて!?!は?!い、医者でちゆ!医者に診てもらつでちゆ!』

「どつという意味じゃあーっ!?!俺がまともにしとつたらいかんのか

あーっ!？」

妹ともいえるパピリオのあんまりな言葉に涙流す横島だが……まあ、しかたない。

「仕方ない事あるかあーっ!」

地の文に突っ込み入れないでほしい。

ともかくそんな騒ぎを起こしていて小竜姫が来ないはずもなく、程なくして現れる彼女。

『夜中に何を騒いでいるのですか、パピリオ?……って横島さん? こんな夜中にどうしたんですか?』

鬼門達は何故連絡を入れないのでしょうか?

『後でお置きですね』と呟きつつ横島に尋ねる小竜姫。

「すみません小竜姫様。実は老師に相談というか、頼みごとがあったきました。こんな夜更けに来たのは今日とある決断をしまして、それを実行するのにジツとしていられなかったからです」

姿勢を正し、小竜姫を正面から見据えはつきり言葉を紡ぐ横島。

そんな横島に何かとてつもない事があったのでしようと結論つけると、座敷に案内すべくパピリオに声を掛ける。

『分かりました……他でもない横島さんの頼みですから老師をお呼びしましょう。パピリオ、横島さんを座敷に案内してください』

『分かったでちゅーさ、いくでちゅよヨコチマ!』

かつて入った事のある仮想空間に似た座敷に案内され、程なくして

老師を伴った小竜姫が現れた。

『ふむ、横島よ久しぶりじゃな。わしに頼みごとがあるとの事じゃが？』

キセルをふかしつつ、横島に目をやる老師。

そんな彼に緊張した様子で頼みを口にする横島。

「はい、お久しぶりです老師。頼みごとというのはこの妖狐の保護の事です」

かばんからじつと様子を伺っていた妖狐をそっと出し、抱きかかえつつ告げる横島。

『む、金毛白面九尾の妖狐か。そういえばそろそろ転生時期じゃったな。保護というのはどういう事じゃ？GSであるお主なら出来る事ではないのか？』

「はい、確かに普通ならそうなのですが……実は今日政府がこの子の退治を美神さんに依頼しまして、あの人は事前にこの子の正体も確かめずに退治一辺倒だったんです。それが気に入らず俺の独断で保護しました……したのはいいのですが、どうすればこの子が安全にこの子らしく生きていけるかと考えた結果老師の事が頭に浮かびまして」

今日あった事と自分の考えを素直に話す横島。

その横で同じ人間である筈の横島に気を許しているような妖狐を見つつ、パピリオが口を出す。

『随分酷い事をするもんでちゅねえ、人間は。ヨコチマの時もそうでちたが陰湿でちゅ……まあわたちのヨコチマは別でちゅけどね』



『ふむ、確かにそんな事があれば、この者が人界で暮らしていくにしても障害が多いじゃろうな……お主の言うように、わしの伝があれば迂闊に手は出せんじゃろうが』

未だ古い言い伝えに翻弄されている部分のある人界を思い、ため息をつく老師。

それに身内である筈の上司までそんな有様では、その者の本音はともかく部下にしてみれば頼れる存在が我々しかないのにも肯ける。

『まあ良からう。見たところその者の気質は穏やかなものになりつつあるようだ。此処でしばらく養生して現世を学び、正しく生きる術を身に着けるのならわしが何か言うつもりはない』

本来迫害してきた人間と同じ筈の横島に懐いてる事から、まだ見込みはあると判断した老師は要請を了解した。

「ありがとうございます！老師！」

まるで我が事みたいに喜び頭を下げる横島に苦笑しながらキセルをふかす老師。

その横で微笑ましく横島を見ている小竜姫。

そこでパピリオがさつき横島が告げた事を口にする。

『そういえばヨコチマ、今日から此処に住みたいな事を言ってきたがどういう事でちゆか？』

『え？どういう事ですか？』

それを聞いて尋ねる小竜姫。

「あ、はい実は」

そしてそれに返す横島は今朝方考えていた事をそのまま話すのであった。

Side PIETORO

僕は友を得た。

種族の垣根をものもしない友を。

僕は居場所を得た。

例え闇に属する者でも生きていける暖かな場所を。

友は恋人を失った。

種族の垣根をものもしせず敵味方すら越えた愛しき者を。

友は自分を失った。

闇夜を照らす小さなけれど確かな光を失った。

夕暮れ時、いつもどおりに先生と共に主に祈っていると雪之丞が訪れた。

あの戦い以降、横島さんにずっと張り付いていた彼が此処にくるといふ事は何かあったのだろうか？

「いらつしゃい、雪之丞君。今日はどうしたのだね？」

「ああ、邪魔するよ神父。ちっと大事な話があったな」

いつになく真剣な表情で切り出す雪之丞。

胸中に嫌な騒ぎが舞い起こる……何かあったのか？

「ふむ、どうやらただ事ではないみたいだね。奥で話そうか。ピート玄関を閉めてきてくれ給え」

「分かりました」

「まず話の前に確認するべき事がある。まあ、答えは聞くまでもな

いかもしれんが、事は秘密裏に行う必要があるからな」

向かい合って座ったあとそう切り出す雪之丞。  
先生は黙って先を促した。

「あんたら師弟は横島個人に対して他の全ての要請を無視してでも、手を差し伸べる気概はあるか？」

「横島君個人に対して?……全てというのは」  
「無論全ては全て。GS協会や政府なんかだ」

確認する先生にきっぱり告げる雪之丞。

その顔は真偽を見極めようとする表情だった。

「……かの戦いの時、我々大人は何も出来なかった。いや、しなかつたと言つべきか……彼に何かあつてその為にそれらと事を構えなければならぬのなら迷いはないよ。不甲斐ない私の様な者でも彼の力になれるのなら喜んで手を貸そう」

「僕もだよ、雪之丞。他でもない親友の為なら躊躇いはないよ」

そうだ、あの戦いで人類の敵とまで言われながら唯一戦果を挙げ、世界を選び救ってくれた横島さんの役に立てるのなら喜んでこの身を差し出そう。

「……分かった。これから話すのはあの戦いの後、横島が決意した事とその身にあつた事だ」

静かに語りだす雪之丞。

「あいつは己の不甲斐なさに絶望し塞ぎ込んだ……周りに対する関わり合い方はともかく、自身に向けて断罪の言葉を投げ続けていた。

俺はあいつが俺の時以上に闇雲に力を求めないかと心配して張り付いていたんだけどな……何の事はない、あいつは一人で立ち直った……すげえ奴だよ。未だその身を痛めつける事に躊躇いはないような危うい所は残っているみたいだけどな」

「……彼は今まで流されながら生きてきた風な所があったからね。現実の壁にぶつかって初めて決断したのがあの選択だったのだろう。今まで酷似した物はあったかもしれないが、全てを己で成そうとしたのはあの戦いが初めてだった筈だ……それ故に今までを悔やむのだろう」

「痛がりで怖がりだったあの人が、魔神相手に立ち向かうと決意した。ルシオラさんへの愛情が今まで成されなかった成長を促したんですよね。決意は悲劇で持って閉ざされましたけど、あの人のルシオラさんへの愛情は今も消える事なく燃え盛っているのですね」

流されて生きてきた横島さんが過去を嘆きながらも闇に落ちないのは、それだけルシオラさんへの深い愛情を未だ無くしていないからですよね。

「ああ、それであいつは妙神山行きを決意した……ここで他のそれこそ俺や美神を頼ろうとしないのはどこかで心が拒否しているからかも知れんな。まあ、単純に強くなる〃妙神山という考えかもしれないが……とにかくそう決意し報告の為事務所に行った横島を待っていたのは、政府からの依頼だった。金毛白面九尾の妖狐の退治のな」  
「な！？あの妖狐は退治しなければいけないような存在ではなかった筈だ！それを政府が依頼したというのかい？！」

驚き立ち上がる先生。

話によると伝承で語られているのは人間達が捏造した虚言のものだったらしい。

確かにそんな存在を殺せば恨みで更なる悪害を呼び込みかねない。

「ああ、本当だ。まあ、オカルトGメンはそれに対立して止めようとしていたらしいが……ともかく現場に着いた横島はこの決定に反感を持ったみたいでな、秘密裏に保護したんだ。で、嘘の報告をして誤魔化したんだが、その時美神がどうしようもない事を言いやがってな……どうもその時完全に横島の中で美神に対する仲間意識が無くなったようなんだ」

「どうしようもない事？」

「おキ又が美神に 退治しなくても良かったんじゃ と言った後にな。違約金がどうの、退治したのはあんただからだの……ああ、あと手負いのまま逃がす訳には行かないだの言っていたな」

……またですか。

あの人にとって命の意味はなんなのでしょう？  
世界と恋人の命をかけて選択した横島さんにとって、その台詞はとも認められないものでしょうね。

「……何を考えているのだ、美神君は」

頭を抱えて呻く先生……その気持ち分かります。

「さあな、もしかしたら横島が内密に逃がす事も計算に入れていたのかもしれんが……んな事横島にとっては意味ない事だしな。で、今朝考えていた妙神山行きをつい先ほど決行したんだ。齊天大聖老師なら保護できると考えてな」

「なるほど、詳細はともかく横島君にとっては妖狐を如何に安全に匿えるかが大事だったのだろうね。政府が関わっていて他の思惑を知らない状態なら、頼れるのは小竜姫様達ぐらいだろうし……オカルトGメンも結局は政府に強気に出れない所もあるからね」

そうか、確かに政府の下に存在するオカルトGメンじゃ、政府が退治を決定した存在を保護するのは厳しいかもしれない。

「んで、大事なのはこれからだ。あいつはどうもこれを機に人界との関わりを破棄する感じなんだ。完全にではないだろうが、アパートを出る前に母親に電話で学校を退学すると伝えていたからな」

「ツ?!……それは、本当かい?……だとすれば、彼は見限ったというのかい、人間を」

「そんな!?横島さんが?それに学校を辞めるって!？」

彼の中に生まれた絶望はいかほどなんだ!?

……でもある意味当然なのかもしれない。

人類の敵にされ帰ってきてからも疑われて、日常に戻れば今だ残る猜疑の眼差し。

そしてそれとは反対に敵であつた存在からかけられる労りの声。

横島さんの中の人間に対する価値観が暴落してもおかしくないのかもしれない。

「俺が懸念しているのはあいつが人間を見限る事じゃない……ある意味それも仕方のない事だからな」

「……それは、確かにそうだが」

「懸念しているのは周りのそれに対する対応だ。美神はあいつが放れるのを善しとしないだろうし、隊長さんも娘の精神状態を保つ為にも連れ戻すかもしれない。六道や政府はこれを機に取り込もうとするかもしれない……逆に何もリアクションを起こさないかもしれない、それが一番だが……美神は絶対動こうとする筈だ。これに対しては横島自身覚悟してるだろうがな。神父達に頼みたいのは今回みたいな政府や協会の暴走しそうな膿を引き吊り落としてほしいんだ」

確かに美神さんが横島さんを手放すなんて想像出来ない。

横島さんも何だかんだでこれから起こりうる事は想像しているだろうし。

「膿かね……確かにどこの組織にもそういう輩はいるものだが」

「この世界は横島の心を砕き、ルシオラの命を持って護られた。なら俺達はそれをより良い状態にするべきではないか？今回、護る側にいる筈の奴等が本来罪のない生まれただけの命を消そうとした……それを見てあいつはどう感じたろうな？」

「……なるほど、確かに恋人の命を賭けて護った世界に、そんな腐った輩がいる事は彼の中に芽生えた負の感情を爆発させてしまっかもしれないね」

「……横島にとつて世界はルシオラと等価ではなかった筈だ。あいつが世界を採ったのはあくまで恋人の意思を優先しただけなんだ。そんな世界が蹂躪されるような事がこれからもあれば……最悪あいつは二度と姿を見せないようになるだろうな」

「横島さんがいなくなるなんてつまらなくなってしまう……まあ、あの人の心を護る事が一番大事ですが」

「俺的にも戻ってきてくれるのが一番さ……けどな、あいつが苦しむくらいなら人界を見限ってくれた方が万倍ました！この世界を救ったのは間違いなくあの二人だ。あの二人が気持ちよく過ごせない世界なら戻ってきてくれなくても構わんさ。俺達がすべき事はこれ以上この世界を下らん事で腐らせない事だ」

……そうだな、横島さんとルシオラさんが護ってくれた世界なんだ。今度は僕達が彼の為にやれる事をしなければ！

「了解した。私はまず協会の在り方の見直しと政府の改善を呼びかけよう……かの戦いで真に成果を成した横島君のシンパは結構いる筈だ。彼らと連携して膿を暴こう」

「僕もお手伝いします。真に救われるべき存在を救えないのであれ

ば、弱者の救済なんて掲げてられませんかね」

「俺は横島の両親にあつて協力を求めてくる。その後は横島の許に赴い、て少しでもあいつの為になれる様協力するつもりだ」

「横島君のご両親かね？……確かに彼らなら政府にも顔が利く筈だね」

……確かにあの人達なら心強い味方になってくれるでしょうね。

「俺達はあの戦いで何も出来なかった。だが、あの戦いの傷跡は未だ塞がっていない筈だ。なら俺達は今度こそ行動を起こすべきだ。本当に腐ったやつらを駆逐し傷跡を出来の悪い瘡蓋になんかしない為にな」

そつだ、まだあの戦いは終わつてはいないんだ。

横島さんは世界を救ってくれた。

なら僕達はその救われた世界をその価値があつたといえるぐらい素晴らしいものにしなければ！

S i d e O U T

S i d e S Y O U R Y U U K I

横島さんが語られた事情はとても重いものでした。

命のあり方 その命題を掲げ、己の在り方を見直す為、老師に師事を請いたいとこの事でした。

自身に足りない基礎や知識の補填はもちろんの事、ルシオラさんが誇れる自分らしい存在になると決意したとの事です。

……かつてのセクハラ煩惱魔人だった頃の事を考えると途轍もない成長です。

『ふむ、事情は分かったが下界の暮らしはどうするのだ。家族や友



人の事もあろう」

「学校は退学します……お袋にその手続きも頼みました。友達連中には悪いですけど自分が納得できるまで元の暮らしに戻る気はありません……それにどうも雪之丞が動いてくれたみたいで、情けないですけど人界での事はあいつに任せます」

まさか人界での生活を打ち切ってまでの決意とは思いませんでした……どうやら並々ならぬ覚悟のようですね。

思えば横島さんはあの魔神に啖呵を切り、我々神魔ですら絶望の淵にいた所から血路を開き、悲劇に見舞われながらも終結に導いたのです。

この決意も当然なのかもしれません。

『む、其処まで覚悟の上か……よかろう、この妙神山に留まり己を鍛える為の糧を得る事を認めよう』

「ありがとうございます」

頭を垂れる横島さん。

その佇まいはあくまで静かで激情がうねっている筈の心中を察しさせません。

恐ろしいまでに己を律していますね。

『小竜姫よ、わしは最高指導者様にお伺いを立て、九尾の保護と人界からの干渉を断ち切る指示を出して貰いに行く。お前は横島たちの食事を用意した後、基礎鍛錬と修学の資料をまとめよ……まずは軽くで良いからの』

『はい、確かに承りました』

腕が鳴ります。

思えば彼が此処に着た当初光るものを見出したのも私でした。

なれば、今度こそ彼が試練を乗り越えられるように私の全てに賭けて鍛えましょう。

『横島と狐の嬢ちゃんは食事と温泉とって今日はもう休むといい』  
「これからお世話になります……どうか、よろしくお願いします」

本当に変わりました。

これはこちらにも気を引き締めて事に関わらなければいけませんね。

『うむ』

『さ、夕餉の支度はしておきますから温泉に浸かってきて下さい。  
パピリオ、いい機会ですからお背中を流してあげてはどうですか？』

『分かったでちゅー！さ、行くでちゅよヨコチマー！』

「ああ、今行くよ」

……かなり参っているようです。

いつもならここで「ワイはロリやないっ！」「とか、「ドキドキなんてしてへんっ！」「とか叫ぶ所なんですけどねえ。

それだけ追い詰められているという事ですね……まあ、いいです。  
今は彼らに美味しい夕餉を振舞う事が大事ですからね。

さあ、腕によりをかけて作りますよ！

『あれ？ヨコチマこれなんでちゅか？』

「だあーッ！？女の子がそんな所触っちゃいけません！っつて、触っちゃイヤッ！？わいはドキドキなんかしてへんーッ！！」

「……くーん（やれやれ）」

『……頭の理解が追いついていなかったただけでしょうか？』

どっとはらい

『よつち生誕記念』（後書き）

……余り冒険するもんじゃないね。

黒歴史なのであまり突っ込まないで貰えると幸いです。  
では。

11/14 修正

↑↑上の続きです↑↑（前書き）

第一部の前身となる物語……曰く、黒歴史の残りです。  
それではどうぞ。

〃〃上の続きです〃〃

第二話〃己を鍛えるということは如何なることか〃

「貴方がまず最初に修めることは落ち着きを持つことです。荒れた心や落ち着きのない在り方では修めるべきことも儘なりません。」

朝起きて早速小竜姫様との鍛錬を始めるぞと意気込んでいた俺は落ち着きを持つよう叱咤された。

ただ強くなるために来たのではないのだからと言われ胸が透く気持ちだった。

小竜姫様が告げる言葉に身を正した。

「理解したようですね。……当たり前のこと程忘れられ易いものです。」

常に己を律し己の矜持に反していないか一步一步確かめながら歩んでゆきなさい」

含蓄溢れる小竜姫様の言葉に耳を傾け一つ一つに肯きながら俺は自身の可能性に思いを馳せていった。

「……さて、前置きが長くなりましたがこれから鍛錬の説明に移りたいと思います」

鍛錬の説明が一通り終わりに軽く体を解して動きの錬度、靈力の把握具合などを確かめ終わった所で朝食の時間となった。

「そつえば、横島さん」

「？なんですか」

茶碗にご飯を盛りながらふと何かに気づいた小竜姫様がこちらを向いた。

「その子の名前はなんていうのですか？昨日は何だかんだで訊き忘れましたから」

そういつて俺の傍で差し出されたお揚げを齧っている妖狐をみた。そういえば名前まだ訊いてなかったよな。

俺がそう思い狐に顔を向けるとそれに気づいたのかお揚げを飲み込んでこちらに向いた。

そして当然光りだすと次の瞬間には中学生ぐらいの女の子がいた。

「い、化けた？！」

「……横島さん、妖狐ですから人型にもなれますよ」

余りに無知な俺に苦笑しながらも教えてくれる小竜姫様。うう、面目ない。

「……タマモ、私の名前はタマモよ。すっかり遅くなったけど、助けてくれてありがとう横島」

「あ、いや。俺は俺の意思に従っただけだよ。……そっか、タマモか。いい名前だな」

照れたように微笑みながら名前を告げ続けて礼を言うタマモ。うん、文句なしの美少女だ。

「ありがとう」

「タマモさんですか。ではタマモさん昨日の話は訊いていたと思

いますが、貴女にここ妙神山で現状を知り、教えを請う気概はありますか？」

小竜姫様がタマモにこれからの行動について尋ねる。

そういえば俺が勝手に決めただけどタマモの意志も確認しなくちゃいけないよな。

「私は昔のことは何も覚えていないし現世も把握していないけど、横島と一緒に居る為ならなんだってするわ。人間には怨みもあるけど少なくとも横島は全てを賭けて私を守ってくれた。

その恩義に報いる為にも私は正しく在り続けるつもりよ」

タマモが小竜姫様の目を見てはつきりと言葉を紡いだ。

って、俺と居る為？タマモは俺と居る為に正しく在ろうとしているのか、……なら俺はそれに相応しい男に成らないとな。

「……その決意しかと承りました。

では、横島さんもタマモさんもこれから師弟として共に励んでいきましょう」

『よろしく御願います』

何はともあれこれからだ。これまで置き去りにしてきた学ぶべき事を確りと自分の物にしなくちゃな。

……激情に任せて人界を捨てて友人にすら声も掛けずに出てきた俺だ。

その勝手がどれだけ人に迷惑かけたか計り知れないけど、それで起きる結果を全て受け止める覚悟で俺はこれから生きていくぞ。

Side TORAKIITI

友は戦場に立った。恋人のために。

友は選択した。全てを飲み込んで。友は去った。命の意味が軽いことを認めることが出来なくて。自分も戦場に立った。流れるまま。自分は眺めているだけだった。友の苦しみを見ているだけだった。自分は今岐路に立っている。何も出来なかった自分が何かを成せるかどうかの分岐点に。

エミさんとともに仕事の後始末をしていた時ピートさんは来た。始めはそれを単純に喜んでいたエミさんだったがピートさんの表情を見てすぐ身を正した。わっしも何か予感めいた物を感じたんだろうと思う。知らず姿勢を正し彼の言葉を待った。

「……横島さんが人界を捨て妙神山に己を鍛えに行きました。御両親に別れを告げ、アパートを引き払い学校も止め僕達に声も掛けずただ助けた妖孤を伴って行きました」

果たして語られた言葉はとんでもないことだった。あのエミさんも息をのんで立ち尽くしている。わっしも頭の中が真っ白になった。

「彼に張り付いていた雪之丞の話では政府の依頼を受けた美神さんのそれに対する判断と結果に対する対応で仲間意識が完全になくなったということです」

「……あの状態の横島に何を言ったのかしら令子のやつ。あれ以来表面上はともかく内面ではあのときの選択を常に考えていたはずよ」

これまで美神さんに執着していた横島さんが仲間意識をなくしたというのにも驚いたけどエミさんが語ったことはわっしの頭を横殴り



にした。

あの戦いのあとしばらくしてから普段の様子に戻った横島さんを見てああもう安心だと思っていたわっしはいったいななんだ？

何を持って安心だと判断したんだ？あの慟哭を訊いて元に戻るなんてなぜ考えた？

それでも己はあの人の友人か？！

「エミさんは気づいていたんですね。

……美神さんは大金に目がくらんで転生して間もない妖狐を退治一辺倒で対応しました。

横島さんが秘密裏に匿った後<殺さなくても良かったのでは>というおキ又さんの言葉に違約金だの殺したのはあんただの言ったそうですよ。

……ふざけたことにね」

なんだそれは、なんなんだそれは！？

「……今までの女のことはライバルだの商売仇だの思ってきたけど、そんなんじゃないかったワケね。

タイガー、これからはあの女とは一切関わりを持たないわよ。

ピート私たちは何をすればいいのかしら？」

エミさんは考えるまでもなく即決した。

それでこそわっしのお師匠さんだ。

そういえば横島さんが出て行ったということはオキ又さんは大丈夫なのだろうか？

「……先生が協会やGS関連の腐った部分を矯正するため会長にのし上がることを決意しました。

雪之丞は先生が伝手の少ない政府関連を何とかするために横島さん

の御両親と連携するためパイプを確保しに行きました。横島さんの御両親は政府に顔が利くそうですので。

僕は先生のアシストをしつつオカルトGメンの内部調査を秘密裏にしています。

エミさんはエミさんの思う通りに動いてください。

これは各個人の意思を尊重して行っていることですから」

「神父も腰をあげたのね。

……ならば裏の世界を調べるわけ。

資料はあつて困るわけでもないしね。私は私に出来ることからやっていくワケ」

「それでいいと思いますよ。

人の出来ることには限りがありますからね。焦らず煮詰めていくことが大事だと思います」

「わっしもエミさんのお手伝いに徹しますケン。精神感应能力なら役に立てる筈ですさかい」

「もちろんタイガーには手伝ってもらおうワケ。

あなたの能力なら手伝えることはいくらでもあるんだからね。

……まあ危ないことはさせないから、ピートも心配しなくてもいいワケ」

「……はい、其処は信頼してますよエミさん」

ピートさんの信頼の籠った微笑に顔を真っ赤にするエミさん。

なんだかんだで結構純情ですけん、うちのエミさんは。

つて、アタツ！照れ隠しに蹴らないで下さいエミしゃん！

Side OUT

「……横島さんは本当に何も知らない状態で此処まで来たのですね。体の動かし方も霊力の運用法も、まあ一から鍛えることが出来るということは変な癖がないとも言えますからある意味都合なんだし

ようけど」

食休み後早速駄目だしを食らったがこれからなので気を引き締める。そして教わる事無駄にしないため一言も逃さない為の態勢をとる。小竜姫様はそれを見て微かに笑みを浮かべた後内容を告げた。

「さて、まずはチャクラを開く鍛錬を実施しましょう。

今の時代この鍛錬を行う人は滅多に居ませんが」

「チャクラっすか？」

チャクラって言うとアレか忍者が術を使うときに廻すやつのことかな？

「そうです。

合計七箇所あるチャクラを一つでも多く開眼できる様に頑張りましたよ。

横島さんぐらい若ければまだ結構いいところまで開けるはずですよ。チャクラは一つ廻すことが出来ると靈力の回復量が倍に増えます。二つ目以降は靈力総量も倍に増えます。最終的には十二倍まで増やせます」

「じゅ、十二倍っすか?!百マイトなら千二百マイトっすか!?!」

「いえ、その計算は間違いです。

人は普段から約半分の靈力を心身の防御に回しています。

そしてチャクラを廻す時に流れる靈力は残りの攻勢チャクラのみです。

故に十二倍で百マイトの場合は約六百マイトということですよ」

いやそれでもすげー!まあ、そこまで開眼出来たらだるうけど。

ツ!いや!全開眼を目指し頑張るんだ!

「……そうですね、横島さん。自分は出来ると信じていることが大切です。始めから出来ないと思っていたら出来ることも出来ません。その気持ち常に忘れないように」

「はい！」

俺は今まで自分ほど信じられんものはなかったけど、これからはそれじゃあ駄目なんだ。

ルシオラが信じてくれた自分を信じ己にある可能性を引き吊り出すんだ！

「さてそれでは今から横島さんの中で眠っているチャクラを目覚めさせる為に霊力による刺激を与えます。横島さんは刺激を感じた部分を中心に霊力を渦巻くように廻してください。最初はチャクラと一緒に廻せないかと思いますが焦らず確実に物にしていきましょう」

……そうだ俺の欠点は焦りから来る自爆だ。

ゆっくり丁寧に実行するんだ。今の自分を少しでも越えるために！

Side TAMAMO

まずは体調が戻るまで見学していなさいと言われた私の目の前で、横島が小竜姫様の教えに従って霊力を練っている。

私は昔の記憶こそ余り憶えていないが力の使い方そのものはそれほど忘れてはいない。

その私の目から見ても横島の鍛錬中における熟練のスピードは桁違いだ。それは小竜姫様も同じみたいだが、はつきり言って異常なんてもんじゃない。

かの安倍 晴明すら此処までの者ではなかったのではというほどではないだろうか。

「横島っていったい何者なんだろ？」

……まあ、底抜けに優しくて頼りになるのはみていて少しは判るんだけど」

初めて一時間も経っていないのに既に第一チャクラを物にしつつある。

手探りな間は否めないが、それでもいざ目的の物を掴むと迷いなく実行し成功させている。

あ、小竜姫様もどこか呆れているみたいだ。気持ちはわかるけど。

「横島が何者か、か。ふむ、嬢ちゃん。知りたいか？横島に何があって此処までの者になったか」

「！」

知らぬ間に傍に斉天大聖がいた。び、びっくりしたあ。

「……訊いたら教えてくれるの？」

「お主次第かのう。」

あやつの抱えている物はある意味世界そのものだからのう。無論比喩じゃが。

闇に晒されながらも光を見失わず、かといって闇を否定するでもなく全てを担い受け止めた男じゃ。

半端な覚悟では聞けることではないぞ」

……でも横島と本当の意味で同じ空間に居る為には知らなければいけない気がする。

横島の抱えている痛みや苦しみを癒すには。

「聴くわ。」

横島の苦しみを少しでも癒すためにも、共に歩いていくためにも私

は全霊を持って受け止めるわ」

「……うむよく言った。なれば話そう、横島の味わった慟哭を。わしら神魔が如何に無力だったかを」

そして私は知った。横島の内にある光を。横島を覆う闇を。私は……。

Side OUT

「……後はその内で練成している霊玉を霧散させないように丹田に沈めなさい」

俺は座禅を組みつつ教えに従い練りに練った霊玉を丹田に沈めた。すると体の芯から内に眠っていた何かが目覚めるような感覚があった。

「……はい、それでよろしい。それでは今日は此処までです。」

それにしてもまさか初日で第一チャクラを開眼するとは。どこまでも非常識な存在ですね横島さんは」

「そりゃあないっすよ、小竜姫さまあ。これでも必死にやってんすから」

「うふふ。冗談ですよ。まあこの調子でこれからも頑張っていきましょっつ」

その言葉を持って本日の教えは終了した。とりあえずさっきの感覚はもうしないので俺は気にしないことにした。

「横島！」

「っと！？タマモ？どうした？」

息を整えていたら後ろからタマモが抱き着いてきた。

「横島！横島！横島！」

「お、おい？どうした！？って、汗かいてるからばっちいぞ、タマモ」

そう言い離れさそうとするがしがみ付いて一向に離れそうにない。其処に近づいて来る老師。

「少しばかり嬢ちゃんにはきつかったかのう、お主の事情は」

そついいタマモの頭を撫でる老師。ってあの戦いのことを教えたのか。

「何で横島は世界を憎まないの？何であの女に復讐しないの？なんで、なんで……」

俺の背中に張り付いて涙声で訴えるタマモ。つと、言われてもなあ。とりあえず俺はタマモを一度剥がし向き合って視線を合わせる。

「タマモ、俺にとってはな世界だの復讐だのってのは意味のないことなんだ。

俺が求めるものは唯一つ。ルシオラが愛し信じた男である俺が真に誇れる者になること。

はつきり言って寄り道している暇なんてないんだ」

涙を流しながら俺を見詰めるタマモを可愛いなあと思いつつ零れる雫をふき取ってやる。

「……横島はそれでいいの？ルシオラさんはもう完全な復活はない

んでしょう？

あの女が言ったっていう子供って言うのも確立の話だし」

「俺はその手段をとる気はないよ。」

俺が愛するルシオラを知ってなお愛してくれる人にそんなこと頼む気はないしな」

そうだ、仮に他の女の人と結ばれたとしてなんでそんなことが頼めようか？

生まれてきた子が俺のことを覚えていようがいまいがその子は俺の愛する子でしかない。

「それに俺が死んで転生したらまた逢えるかもしれないしな？

まあ、俺の因子が転生に必要なだけあるかが疑問だけど」

俺の中の俺自身の因子は精々三割だ。

残りは適合しているとしてもルシオラの因子なのだからどうなるかは判らない。

「！そんな！……なんで？なんで横島だけこんな目にあうの？

結局戦った者の中で何かを失くしたのは貴方だけじゃない。

唯一といってもいい戦果を挙げた貴方がなんでこんな目にあわないと……！」

激昂するタマモを抱きしめ諭すように自分の言葉を紡ぐ。

「俺の為に涙流してくれてありがとな。

……確かにルシオラを失ったのは悲しいし悔しいよ。

他の人たちの思惑とかも絡んでたからそれらに対しての怨みもある。でもさ、結局関係ないんだよ……悔しくても悲しみに暮れようともし、怨みでこの身を焦がしてもそれらではルシオラを失った俺を満たす



ことは出来ないんだ。

……俺が自棄になることがないのはそれだけルシオラがいい女だったって事だ。

なら俺がすべきは俺が俺自身をルシオラに相応しいと思うぐらい最高の自分に成れるようにする事だ」

「……すごいね、横島は。私なんてちよつと追われたぐらいで復讐だなんて思っただのに」

眩しいものを見るみたいに目を細め微笑むタマモ。

だけど俺はそんな眼差しを向けられていい男じゃない。

「……別に俺は凄くなんてないさ。

タマモは生まれたばっかなんだ。暗い気持ちに染まってもしようがないさ。

俺は唯それだけしか思い付かなかったただだよ。

復讐する度胸も怨み尽くす覚悟も持てなかったただけなんだ」

「其れこそ素晴らしい事ではないですか。横島さん貴方は己の負の感情を見事御したのです」

「うむ、普通あれほどのことがあれば修羅に堕ちても可笑しくなかったのだ。

御主は例え自身ではそう思わなくとも立派なのだよ」

「小竜姫様、老師……」

離れていた老師たちがいつの間にか傍にいた。そしてさらにそこに加わる人影。

「そつでちゅよ！

ヨコチマは、お兄ちゃんはルシオラちゃんが唯一絶対に信じて全てを託した男なんでちゅよ！

もつと自信をもつでちゅ！！」

つてお兄ちゃん？

「パピリオ、お兄ちゃんって……」

「お兄ちゃんでちゅよ。ルシオラちゃんは私にとってお姉ちゃんのようなものでちゅよ。」

その恋人であるヨコチマはおにいちゃんにちゅ

「パピリオ……はは、……確かにルシオラが信じた男がこんな様子や情けないよな。」

つてどうかいつの間にか俺が慰められてるよな？」

気づけば目の前のタマモは放って置かれたのが気に入らないのかむすつとしている。

その頭を撫でてやりつつ答える。

「まあ、そういうわけだ。俺は俺だよ。タマモも余り悩むな。これから楽しく生きればいいだけさ」

「横島……、そうだね」

「……話も纏まったようですし夕食にしましょうか？パピリオ手伝ってくださいな」

「はいでちゅ！」

「ふむ、今日の夕餉は何かの？」

夕陽が辺りを包む中俺たちは明日に向かうための英気を得るため屋敷に向かった。

伸びる影は一つとなりその強い絆を示しているようであった。

第三話 残ったものは何か

その日仕事も終わり家に帰ると待っていたのは泣き疲れて眠る妻だった。

慌てて抱き起こし事情を聞けば息子のやつが人界を捨てて修行の為妙神山に籠ったそうだ。

「忠夫のやつも思い切ったことをするなあ。まあ、あんなことがあれば当たり前か……、百合子」

「……うち等はほんとは情けない親や。勝手に期待して勝手に決め付けて、何様のつもりなんやろな？」

「……だから何もしないか？息子が苦しみ悲鳴を上げている中気付かなかつたからこれからも何もしないのか？」

項垂れたまま内罰的に呟く百合子に問いかける。こんな百合子は始めて見るな。

「うちは、……でも何をしたらええか……」

こりゃあ、かなり重症だな。……どうしたもんか？……ん？電話？

「はい、横島です。……おう、黒崎くんか。どうした？……ふむ、なるほど。……わかった、じゃあ彼に言っておいてくれ。横島が己ら全てを持って事に当たると！……ああ、今日これから急いで取り掛かる。……うむ、そっちも準備をよろしくな」

掛かって来たのは部下の黒崎君からだ。息子の友人が政府の腐った部分をどうにかするのに手を貸してほしいとのことだった。おそらく息子の決意に動いたのだろう。ならば俺に出来ることがあるなら喜んで手を貸そうというものだ。

「……百合子、忠夫の友人は動いたぞ？息子が護ったこの世界を少しでも素晴らしくする為にな。……俺は今から動くが、おまえはどうする？」

俺の言葉を受けはつとこちらを見上げる。その目は呆然としたものから強い光を宿す 紅百合 のそれに変わった。

「もちろん私も行くわ！……見つとも無いとこ見せたわね、あなた」  
「ふ、かまわんさ。だがこれつきりにしてくれよ？これから息つく暇もないだろうからな」

「ええ、当然よ！これまでの失態は全て塗り潰してみせる！私の全力を持って忠夫の護った世界を可能な限り綺麗にしてみせるわ！」

それでこそ俺の惚れた女だ。さあ、これから忙しくなるぞ！

Side OUT

俺が妙神山に着てから一年の時間が流れていた。

もつとも俺自身は老師の加速空間なども使っていたので実際にはそれ以上の時間が過ぎていたが。

「横島さんもだいぶその状態に慣れてきたようですね。一時はどうなるかと思いましたが……」

何時もの様に朝の鍛錬をしていると後ろから小竜姫様が声を掛けた。

「小竜姫様のおかげですよ。俺一人ではとても此処まで安定させるなんて出来ませんでしたよ。ルシオラの因子はともかく魔族特有の破壊衝動までは人の身のままで押さえ込むのは不可能ですから」

「破壊衝動の強制力に抵抗するのは至難ですからね。それも魔神の

系譜であるルシオラさんの因子から発せられる物ですから尚更です。私にしてみれば第四チャクラ開眼の時暴走したルシオラさんの因子を平然と受け止めたことに驚きました。それにその後あっさり己の身を半分とはいえ魔族の物に変換したことはもう啞然としましたよ」

そう俺の体は既に半分とはいえ魔族のそれになっている。

俺はチャクラを開く鍛錬の時うちに眠っていたルシオラの因子を靈力と共に練っていたのだ。

本来適合した因子が混ざることなどないはずなのだが、微量ずつとはいえ己の中で靈力の塊<靈玉>として馴染んでいった。

そしてその靈玉を自身に取り込んでいるうちに因子に僅かに含まれていた魔族の特性が強化されていったのだ。

始めは特に影響なかったのだが、老師の加速空間で一気に強化されていた特性が目を開き俺の身に襲い掛かった。

俺は始め何が起こっているのか解らなかったが老師がルシオラの因子が暴走していると教えてくれたので直ぐに行動に移した。

無論少しばかり物事を学んだといっても老師のその言葉だけで全てが理解できたわけではない。

だが、ルシオラの因子が苦しんでいると解れば俺にとって十分だった。俺はルシオラの因子が消滅などしないように俺の中に留め馴染ませることに全神経を集中した。

途中老師が俺のしようとしている事に気付き魔族になってしまおうぞと叫んだが俺にすればそんな事どうでもいい事だった。

何とか因子の消滅だけは抑えられたがその後の破壊衝動には参った。全く馴染みのない感覚だったので如何対処すれば良いか見当も付かなかったからだ。

淡くっている俺を見てどういう状態か気付いた傍にいた小竜姫様が状況に気付き己の因子を注入することで衝動は収まった。

状況に気付き己の因子を注入することで衝動は収まった。

現在俺の中には、ルシオラの因子7：小竜姫様の因子4：自分の因子3という状態で落ち着いている。

「俺にとって種族の在り方なんて在ってない様な物ですから。ただルシオラが苦しんでいる状況が我慢ならなかっただけです」

「……ルシオラさんは幸せですね。此処まで思ってくれる人がいるんですから」

そういつて儂そうな表情をする小竜姫様。一瞬ルシオラのそれと被る。気付いたら俺は小竜姫様の肩を抱いていた。

「小竜姫様だって俺にとって大事な人ですよ！俺にとってもルシオラにとっても命の恩人ですから。」

あのまま俺がこの身を衝動に任せていたら俺たちは老師によって封印されていて可笑しくなかつたんですから！」

そうあの時小竜姫様が因子を注入しなかつたら俺は間違いなく暴走していたはずだ。

そして半分とはいえ人の身のままの俺にはその暴走には耐え切れなかつたはずだ。魔族の強力な力に人の部分が耐え切れるはずがないのだから。

そうなれば老師が俺を死なせない為に封印するしかなかったはずだ。

「横島さん……」

「俺にすれば小竜姫様の因子を頂いた事に恐縮しているんですから因子を渡すということは己の身を削るということだ。いずれ回復するといつてもそう簡単に出来ることではない。」

「私は世界を救つた方と同じようなことが出来て私はうれしいです」

よ。貴方のお役にも立てましたし誇れることです」

そういう小竜姫様の表情はとても輝いていた。暫し見惚れてしまう俺。

「朝から何見詰め合ってたの？よ・こ・し・ま？」

ギク！！

突然後ろからした声に振り返るとそこにはタマモとパピリオがいた。二人ともジト眼である。

「あはは、いやー、小竜姫様と俺が半魔になった時のことを話してさー」

「うふふ、えー、横島さんとあの時のことを振り返ってましてー」

一見普段どつりの表情だが二人の米神に流れる一筋の汗をタマモは見逃さなかった。

「……まあ、いいけどね。猿爺が朝食はまだかあって言ってるわよ？」

「わたしもお腹すいたでちゅー！」

「いけない！じゃ、じゃあ急いで用意しますね」

そういつて早足で駆けていく小竜姫様。そういえば腹減ったなあ。

「……それで横島？調子はどうなの？」

「そうでちゅー！体は大丈夫なんでちゅか？」

腹を擦り朝御飯に思いを馳せていると二人から体の調子を聞かれた。

まあ当然か、三ヶ月前に半魔になって以来何かと不安定だったからなあ。

「ああ、もう平気だよ。ルシオラの因子も小竜姫様の因子も安定している。半魔の状態で全力出しても力の制御はもう完全だよ」

成りたての頃はそれこそ溢れる力に右往左往していたけど、今は魔力も神通力も霊力も安定して扱えるまでになった。

「まあ横島がそういうなら信じるけど、無茶はしないでよね」

「そうでちゅ、お兄ちゃんの体は今までにない在り方なんでちゅから何が起こつても不思議じゃないんでちゅからね」

俺の言葉に安心しつつも釘をさすことは忘れない二人。

「ああわかってるよ。もう皆を泣かす気はないからさ」

『判ればいいのよ(でちゅ)！さあ、御飯よ(でちゅ)』

同時に頷いて俺の手を取って屋敷に行く二人。俺は苦笑しながらも抵抗せず二人についていった。

Side OKINU

あれから一年が経ちました。横島さんは妙神山に籠り人界には一度も姿を現しません。

あの妖狐保護から一週間経つても来ない横島さんに焦れた私たちがアパートに行つて見た物はもぬけの殻の部屋だった。

慌てた私たちの前に現れた雪之丞さんが言った言葉は衝撃でした。

『あんたら横島を探してんのか？だとしたら無駄だぜ。あいつは人界に見切りをつけて妙神山に籠ったからな』



その言葉を受けた美神さんは始め呆然としていましたが我に返って雪之丞さんに詰め寄りました。

『じ、人界に見切りをつけたってどうということよ!?!』

そっぴい詰め寄る美神さんでしたがそれに対する返答に凍りつきました。

『どういふことも何も、此間の妖狐の件の際にあんたがあいつに言った言葉が決意させたのさ。世界と恋人を天秤に賭けさせられたあいつに生まれ変わったばかりの命を退治一辺倒に指示。殺したことに對して違約金だの殺したのはあんただの言い訳。あんたの内心はともかくあいつにとってしてみればとても許容できることではなかったはずだ』

その言葉に凍りついた美神さんをよそに私はどうしても訊きたいことを聞いた。

『あの横島さんはもう人界には戻ってこないんですか?』

雪之丞さんは美神さんに向けるものよりは若干緩めた表情で答えてくれた。

『さあな、少なくともあいつは俺以外に会うつもりは今の所ないみたいだ。妙神山の連中もその意思を尊重して人界に対して不干渉を宣言した』

雪之丞さんが言うには自身が納得するまで己を鍛え続けるとのことです。妙神山の皆さんはそんな横島さんに非常に協力的だとのこと

です。

雪之丞さんが唯一会えるのはあの戦いの後ずっと心配して近くにいてくれたからだそうです。あと人界のことは全て彼に任せているそうです。

『あいつが恋人を犠牲にして護ったこの世界で命を軽く見るような真似は少なくとも俺らの目に付く範囲ではゆるさねー。あんたはあんなのやり方があるんだろ？がそれに横島を巻き込むことは絶対にさせないからな、そのことを肝に免じておくんだな』

そう美神さんに言い立ち去ろうとする雪之丞さんに美神さんは言いました。

『……わたしはGSよ。妖怪を退治して何が悪いって言うのよ。政府も認めていた事だし、横島君は私の丁稚よ』

私はその言葉に呆然としました。

そこには以前感じていた輝かしい何かはなく、ただ自分の元から離れようとするものを離さないという意地の悪さしか見出せませんでした。

そんな美神さんに呆れたような視線を向け雪之丞さんははっきり言いました。

『言つたる。横島を巻き込むようなことは許さないと。これは俺だけじゃなくあいつの両親も唐巢神父も老師たちも決めたことだ。命の意味も見出さずただ金の為だけにGSをやるってんなら俺らの前から消えることだな。GSだからといってただ命を奪うことしか考えないようなら其処に誇りなんて微塵もないぜ』

その言葉を後に雪之丞さんは去っていきました。その日から美神さ

んは荒れ仕事には手がつかず私は気付けば事務所を辞めていました。美神さんから離れるのは心配でしたけどいい加減愛想が尽きたというにが本音です。

事務所を出た私が向かったのは唐巢神父の教会でした。そこで私は神父たちが行っている改革を手伝うべく精進しています。

次に会ったとき横島さんに対して胸が張れるように。

そしてつい先日隊長が事務所に戻ってくれないかと訪ねにきました。私が私はきっぱり断りました。どこか人任せな所があの人にも見えたから。

首を縦に振らない私の態度に説得が無理だと判断した隊長はとぼとぼと帰っていきました。

流されて行動するのは駄目だと思い断りましたがたぶん間違った判断ではなかったと思っています。

あの最後の日に横島さんも言っていたことです。私も自分を確り持って誇れる自分になれるよう頑張ります。

だから横島さん。いつか人界に来た時には覚悟してくださいね。今度こそ逃がしませんから！

S i d e O U T

S i d e K A R A S U

今私は美神除霊事務所の前にいる。これから私は美神君に最後の教えを授けに行く。

彼女がそれを素直に受け取ってくれるとは思ってもいないがこれは私がしなければならぬことだ。

彼女の師匠として彼女の目を覚まさせるのは私の義務なのだから。

「人工幽霊一号君。美神君に伝えることがあつてきた。入れてくれないかね？」

「これは唐巢神父。……所長はかなり荒れています」

「判っているよ。構わないから扉を開けてほしい」  
「了解しました」

此方を気遣う人工幽霊一号君の声に苦笑しつつも構わず開けるように促す。

果たして、開けられた先にあつたのは廃墟とまではいかないが十分荒れ果てていると形容できる有様の空間だった。

所長室にいることを前もって教えてもらっていた私は迷わず其処に辿り着く。扉を開け中に入るとうつ伏せの彼女がいた。

「邪魔するよ、美神君。……随分だらしない有様だね」

「……何しに来たのよ、神父。人の家に勝手に上がらないでくれな  
い」

返す声に張りはなく、此方に向ける目は窪み酷い形相だった。

「ふむ、一応声は掛けたのだがね。そんなことより君は何を荒れて  
いるのかね？」

「……あんた達の、あんた達のせいじゃない！人が依頼を受けて除  
霊しようとする横から邪魔してお陰でこっちは丸損よ！」

「それは君が意味もなく罪のない妖怪や霊を害するからだろう？雪  
之丞君が忠告したはずだよ。命の意味も考えずただ己の欲望に従い  
行動するならGSとしての誇りなどない、と。今の君はただの無法  
者だよ」

美神君は雪之丞君に忠告されてからも構わず依頼を受けては退治一  
辺倒で済まそうとしてきた。

その依頼内容は依頼者の勘違いや逆に対象が被害者の場合がほとん  
どだった。

恐らく美神君の除霊スタイルを知ってそれを利用するつもりでの依頼なのだろうが。

「……君に依頼してきた者の約半数が脛に傷を持つ輩だったよ。体よく利用されていたってことだね。」

美神令子に依頼すれば詳しく判断するまでもなく退治するだろうってね。かつての君は其処まで情けない所はなかったはずだ。自分の行動に誇りを持ち行動前にはきちんと事情確認を怠ることもなかったはずだ」

頂垂れたままの美神君に淡々と語っていく。かつての彼女は強引な所はあっても此処まで酷くはなかったはずだ。

「うるさいわね。……私がどういうやり方でGSやるのと私の勝手でしょう！私は世界最高のGSよ！」

「嘗てはだね。今の君はただのチンピラだよ。君は言ったそうだね。例え世界が滅びても私は生き残ってみせるって。だが君はあの選択の時まだ子供である横島君に選択を強制した。自分は答えられないといつて。そしてこの世界は横島君とルシオラ君によって救われた。そんな世界でも君は同じことが言えるのかい？」

「……私は……私は美神令子よ……」

「そうだね、そして私は唐巢だ。横島君とルシオラ君を犠牲にして生き残った愚か者たちだね」

虚勢を張るも私の返しに頂垂れる美神君。そうあの時現場にいなくとも横島君に選択を任せた時点で我々大人は全て愚か者だ。

「不貞腐れるのも意地を張るのも我を通すのももうやめよう。自分を大人だというなら己の全てに責任を持たなくてはならない。ましてやこの救われた世界で生きていくなら何も出来なかった我々大人

は少しでも良い方向に世界を動かさなければならぬはずだ。それがあの時選択を彼に任せた我々の責務だよ」

「……………」  
「私が言いたいのはそれだけだ。これから君が堕ちるか新たに生まれ変わるかは君自身に任せるよ。願わくば良き選択をすることを願うよ」

私はそういい美神君の元から去った。少なくとも私に言える事は全て言っただもりだ。

「……………人工幽霊一号君、出来れば彼女を見捨てないでやってくれ」  
「神父、私は所長と出会った時に決めました。ならば最後まで共にあることは当然ですよ」

私の願いにそう返す人工幽霊一号君に無言で頭を下げると教会に戻るべく踵を返した。  
願わくばまたこの場所にくる時は笑顔で訪れることが出来るように祈って。

Side OUT

第四話〈絆の再会と開陳〉

あれから更に四年経ち人界を去ってから実に五年の時間が経っていた。

雪之丞はたまに此処に来ては俺と対戦していき俺の変わらぬ姿に己を責める様な顔をする。まあその度にそんな顔するなと頭をコツいてやるが……………。

お前が俺の身に起こった変化に責任を感じるの筋違いだし俺自身なんとも思っていないのだから、といって。

今現在俺は第六チヤクラを開き、残すは最終チヤクラである第七チヤクラのみである。我ながら良くここまで出来たものである。

「せんせえー、ごはんでござるよー!」

座敷の方から俺を呼ぶ声がした。つい二年程前に雪之丞が連れて来た人狼族のシロである。

二年前

雪之丞とピートは唐巢神父や親父達の手伝いをする傍ら、己を鍛えるため定期的に各地の霊地に赴き己が霊力を高める鍛錬をしていた。その日も鍛錬を終え帰ろうとした所で恐らく気絶しているであろう男を担いだ女性に出会った。

雪之丞は何をしていると突っかかりそうになったがピートがそれを止めた。

「君、シロ君じゃないか？」

その言葉を受け振り返った女性は見知ったピートの顔を見て声をあげた。

「おお、貴方はピート殿。お久しぶりでござるなあ」

「うん、久し振り。……で、その男性は？」

とりあえず疑問を解消するため問いかけるピート。

「ああ、こやつは密猟者でござるよ。禁猟区の札があるのに森の動物を狩ろうとしてたので。その駐在さんに突き出す所でござるよ」

それを聞いて納得した雪之丞はシロのことをピートに聞いた。

「彼女は人狼族の犬塚シロ君。横島さんの弟子とっていいのかな？」

「はい！それでござる。霊波刀を習ったでござるよ」

「へえ！そうか、横島の。俺はあいつの友人の伊達雪之丞だ」

横島の弟子と訊いて嬉しそうに顔を綻ばせる雪之丞。対して先生と呼んで慕っている横島を友人という雪之丞に同じく顔を綻ばせるシロ。

「先生の友人でござるか！先生はお元気ですか？」

その言葉を受けた二人は微妙な顔をした。元気といえば元気かもしれないが現状を見るにそう言い切って良いかどうか悩む所である。

「どうしたでござるか？……は！まさか先生の身に何か？！」

黙った二人に何かを感じたシロが詰め寄る。

「……元気がどうかで言えば元気だ。……が、現状を鑑みて素直にそう言えるかといえば俺的には微妙なところだ」

「？どういう意味でござるか？」

「シロ君。君は横島さんの事を慕っている。そんな君が彼の現状を知れば絶対に冷静ではいられないでしょう。そういうことです」

「……い、一体先生は今何しているんでござるか？！」

「……ピート、こいつはあっちに連れて行ったほうが良いんじゃないか？見た感じこいつにとって横島は絶対的なもののようにだし」

「確かにそうですね。……実は最近オカルトGメンのほうで心霊捜査を認めさせようと色々動いてます。それ自体は良いんですが。こんな時に人狼族のシロ君が街中に行って彼らに見出されたら捜査協



力を要請されるはず。いくら優れた特性を持つとも彼女はまだ子供。超回復で大きくなりましたがさせるべきではないでしょう」

「なるほど。正義感が強そうなシロなら何だかんだで協力することになりそうだな。横島ならシロが危険な事に首を突っ込むのを善しとしないだろうし」

「?二人とも如何したでござるか?」

『……決まりだな(ですね)』

「へ?」

「シロ君、君は今人狼の里を離れているみたいだけど長期的に離れるのは構わないのかな?」

「?ある程度なら許されてるでござるが、基本的に長老の許しが必要でござる」

「それならその許しをもらうために今から里に行かないか?横島の所に留まるために」

「先生のところへござるか!いくでござる!」

横島の所と聞いて諸手を挙げて賛成するシロ。それを見てやはり決まりだなと再度頷きあう二人。

とりあえず駐在に密猟者を渡したシロは里に戻る事になった。雪之丞たちを連れて。

里の結界を抜け長老の下へ赴いた三人。とりあえず今の横島周囲の現状を説明する所から始めることにした。

「……と、いうわけです。今横島さんは妙神山で齊天大聖老師と竜神小竜姫様の下で鍛錬に次ぐ鍛錬に身を捧げています」

「……あの横島殿が。変われば変わるものですね。……いや、そのようなことがあれば変わらなすにはいられまいか」

「……せんせえ」

事情を聞いて過去の横島との違いに驚きそして現状ゆえに納得する長老達とただただ涙するシロ。

「もしシロが現世を学び成長するために村を出ているなら今は街中に行かない方がよい。色々混沌としているからな。それよりも妙神山に行つて横島と共に心身を鍛えてもらったほうが実りもあるし有意義だろう。シロ的にもな」

事情説明当初横島が成したこれまでにない戦果に喝采を上げていたシロ。

だが、その後語られたどのような存在でも早々体験し得ない絶望を聞き魂が死んだ様になった。

「……先生はなぜ世界を選ばれたのでござろうか？……人界に絶望しながらもルシオラ殿への愛を忘れず、人に敵意を向けるわけでもなく。ただ己を高める為に姿を消した先生。……先生が、先生だけが苦しむぐらいなら悲しむくらいなら世界なんて見捨ててくれたほうが良かったでござる！」

「……シロ」

「……シロ君。君が君の心の内でそう想うのは構わない。この上なく横島さんを慕っている君だからね。でもね、あの選択は横島さんが己の心を砕きながらもルシオラさんを裏切らない為に選んだんだ。それを覆すようなことは誰であつても口に出して言うことは許されないことだよ」

「ああ、勘違いするんじゃないぞ？あいつが選んだのはあくまでルシオラだ。ルシオラの思いを優先した結果がああ答えたただけだ」

二人の言葉を聞き流していた涙を腕で拭い二人に向かって頭を垂れる。

「お二人のご友人の選択を汚してしまい申し訳ありませんでした！」  
そんなシロに苦笑しながらもわかってくればいいんだと返す二人。  
その二人に感謝しそして長老に屹然と向き直る。

「長老！どうか某に先生の傍に留まる許可を下され！」

深く頭を垂れるシロにそつと吐息を吐く長老。

「頭を上げよシロ。……此方に見えるお二方の表情を見ていれば今の横島殿がどれほど素晴らしく在られるか判るつもりだ。それにあなたのその落ち着きの無さも何とかしたいと想っていた所だ。横島殿の所へ赴き徹底的に鍛えなおして貰ってくるんじゃない！」

「！有り難うございます！長老！」

苦笑しながらもシロを見詰める長老の眼差しはどこまでも優しいものだった。

シロのことを神父に伝えるというピートと別れ雪之丞とシロは妙神山へと足を運んだ。

妙神山への道のりは険しいものだが、この二人にとってはそれほど苦でもない様でシロがその異様な雰囲気怖気を感じたくらいで無事到着した。

「鬼門。雪之丞だ。開けてくれ」

「ん？おお雪之丞か。？そっちの女子は何者じゃ？今は許可無き者誰であるうと入れるわけにはいかんのは御主も知っていますよ」

雪之丞の背後に立っているシロに気付いた鬼門が問いたです。ちなみに現在妙神山は雪之丞以外出入り禁止になっている。

「拙者犬塚シロと申すものでござる。横島先生の一番弟子を未熟ながら名乗らせて貰っている者でござる」

「横島殿の弟子か。ふむ、右のどうする？」

「見た所純粹に横島殿を慕っている様子。あの方が弟子としているのなら試しも必要ないか？」

気付いた方もいるかもしれないが現在、鬼門達にとって横島は敬うべき者として認知されている。

「雪之丞殿、試しとはなんでござるか？」

「ん？あー、ここにいる鬼門を倒した者のみか中にはいつて試練を受けられるんだ。まあ、でもお前は横島の身内だし別に良いだろ」

「うむ、確かに横島殿の身内の方なら問題なかるう」

雪之丞の言葉に続くように鬼門も試しは必要ないという方向に決まったようだ。然しそれを聞いたシロはそれに待ったをかけた。

「ま、待つてくだされ！確かに某は先生の弟子ではありますが、だからといって決まりを疎かにするのは駄目でござる。貴方に勝てるかはわかりませんが、その試し拙者に受けさせてくだされ！」

「……聞いたか左の」

「聞いたとも右の。長年この門番をやっておるがここまで潔い言葉を聞いたのはいつ振りか！」

『よかるう！そなたの望み確かに聞き入れた！見事この鬼門を倒し資格を手にしてみせよ！！』

余りの感動にノリに乗った鬼門達はサラウンドボイスで試しの開始を告げる。その横で馬鹿でかい声に顔を顰めながら苦笑する雪之丞。

「……まあ、いいけどよ」

いざ開始というところで、

「なんですか騒々しいですよ鬼門？……あら雪之丞さんではありませんか。どうしたんですそんな呆けた顔をして？」

内側から開けられた門。そして門の前で構えていたゆえに門によって撥ね飛ばされ転げる鬼門。出だしを挫かれ躓くシロ。色々台無しである。

「あははは、なんか思い出すなあ。俺が最初に来た時も似たようなことしてなかったっけ？」

あの後微妙な空気の中最初に動いたのは後から来た横島だった。

『……何してんだ？雪之丞に小竜姫様。ってお前シロか？！久しぶりだなあー。さ、いつまでもそんなところで座ってないで中に入れよ』

そういつて中に連れて行く横島。残された者たちは気まずい空気の中何とか復活してそれぞれもとの位置に戻る。

『あー、まあとりあえず鬼門。ご苦労様。いつかいい事あるだろうから気を落とさないようにな？じゃ、俺中入るな』

『えーと、鬼門お勤めご苦労様です。今後も変わらぬ献身を期待していますよ？……そ、それじゃあ私はこれで』

『……………』  
『……………』

後に残ったのは冷たい木枯らしだった。……ちなみに今は夏真っ盛

りである。

「もう、笑わないで下さいよ、横島さん。私だって反省しているんですから」

昔を思い出して大笑いする横島に顔を朱に染めて抗議する小竜姫。シロは未だに固まっている。

「しかし、ほんと久し振りだな。つーかなんで雪之丞と一緒に来たんだ？確か面識なかったよな？」

「ああ、俺とピートが鍛錬に出かけた帰りに密猟者を担いで歩いてたこいつに会ったんだ。余りに不審に見えたんで俺が問いかけようとしたらその前にピートがシロだって気付いてな。色々あって横島の弟子なら此処に連れてった方が良くないんじゃないかって話になって今に至るってとこだ」

掻い摘んで話す雪之丞にフンフンと頷きながら相槌を打つ横島。

「長老にも長期滞在の許可を貰って来たから気にせずこいつを鍛えてやってくれ」

此処でやっと再起動したシロ。慌てて姿勢を正し横島に頭を垂れる。

「お久しぶりでございます、横島先生！此度は急な来訪御迷惑を掛けたかと存じますが如何か某をもう一度鍛え直して下さいませ！」

これでもかという位丁寧な言葉遣いで願いを言うシロ。横で雪之丞が俺らにいうより随分丁寧な言葉だなあ、と苦笑していた。

横島はそれを見て静かに告げる。

「シロ、表を上げよ。俺に師事するのは構わん。一度はそれを許可したんだからな。だが此処で学ぶからには俺に伺いかける前に通さなくてはならない人がいるのではないか？此方に居られる管理人の小竜姫様に」

その言葉を受けはつとするシロ。見れば目の前の横島は真つ直ぐな目でこちらを見ている。

それを受け更に頭を垂れ小竜姫に向かい直り態度を改めて陳謝を申し立てる。

「真に申し訳ありませんでした！己が立場を弁えず小竜姫様の御顔を踏み躪つてしまい御詫びのしようもありません！」

そういつて深く頭を垂れるシロに小竜姫はというと、ひどく困った顔をしていた。

小竜姫からすればシロが横島に一番にお伺いを立てるのは当然だと想っていただけに。

自分は確かに此処の管理者だし此処に赴いたからには最初にお伺いを掛けてほしい。

しかしシロは横島が連れたつて中に通したのだから先ほどの横島の言葉はある意味おかしなことなのである。

まあ、横島があくまで自分を立て様としている事は嬉しいがそれなら最初に中に通す前に紹介して欲しいものである。

「……まあ、其処まで畏まる事はございませんよ。さつき横島さんがあの場で紹介してくれたらこんな事にも成らなかつたでしょうし」

だから少し意地悪するのも仕方ないことである。

「う、……そうですね。シロすまなかつた。俺のお門違いだったよ  
うだ」

「い、いえ！例えご紹介されずとも此れほど神気溢れるお方なら名  
のある神様のはず。いくら先生を目の前にしていたとしても其方か  
らお伺いを申さねば成らなかつたのは明白でござる。某の未熟ゆえ  
お二方には恥をかかせたこと真に申し訳ありませんだ」

「……まあ、お前らにしろシロにしろ十分反省してんだろ。謝り大  
会でもあるまいに。それ位にしておけ」

放って置けばいつまで続くかわからなかつたので合いの手を入れる  
雪之丞。

「たしかにそうですね。さてシロさん貴方は此処に己が身を鍛える  
為に横島さんを訪ねて来たそうですが、横島さん本人も修行中の身。  
無論人に教えるのも経験になりますますが今はまだその段階ではありま  
せん。よって私が軽く指導するのですまずはそれで己を見直す様に」

チャクラ開眼の鍛錬もそうだが己に降りかかった半魔の体を完全に  
制御できるようになるまでは他のことに時間を割いている余裕など  
ない。

そう、一年経った頃に制御できたはずであつた神魔の因子だつた。  
が、実際にはまだ不安定なままだつた。

通常十の因子で構成される体に魔の破壊衝動を押さえる為とはいえ  
更に四の因子が追加されたのが今の横島の体だ。

半分とはいえ魔族のそれになつた故に供給過多に抛る身体崩壊は起  
きないが、それでも多いという事実には変わらない。

対処法は唯一つ。十の構成に詰めるのではなく十四の構成に体を拡  
げること、それだけである。

具体的にいうとより神魔に近い存在に成るという事である。



「判り申した。小竜姫様如何か宜しく御願います」

こうしてその日よりシロの妙神山滞在が始まった。

現在

「わかった、今行く！」

さて朝餉だ。今日は誰の作かな？

ちなみにここで食事の用意をしているのは四人。小竜姫様にタマモ、パピリオ、シロである。

小竜姫様は精進料理、タマモは基本的な日本食（お揚げは必ず付いてくる）、パピリオは意外にも中華と西洋料理、シロは肉料理が得意である。

漂ってくるのは秋刀魚の焼ける匂い。今日はタマモかな？もしかしたらシロとの合作かもしれない。

タマモとシロは出会った当初は険悪な所があったようだけど今はすこぶる仲の良い姉妹のような関係を築いている。

賑やかな食卓を終え寛いでいた俺に老師が一つの巻き物を渡してきた。

「横島よ。お主の提案していた例の件、最高指導者様方は条件付で承認しなされたぞ。その巻き物に記してある項目全てを成し遂げたら連絡を寄越せとのことだ」

俺はその言葉を受けて気を引き締めた。

「横島さん？例の件って何のことですか？」

向かいに座っていた小竜姫様が聞いてくる。見ればタマ王達も同じような表情をしている。あ、そういえばこの件は老師だけに告げていたからなあ。

俺は老師に確認を採るとその詳細を明かした。

「俺の今までの記憶と因子の情報を刻んだ太極文珠を過去の自分に転送することです。それによってルシオラが助かる未来を一つでも作ろうかと」

今の俺の霊力と半魔になることで再び生成可能になっていた太極文珠、更に内にある神魔の因子と完全同期することで行えるようになった時空転送術。

これらで過去の悲劇を回避できる未来を新たに作り出す為の布石にする。これを実行する許可を貰えるか老師に確認していたのである。

「……そんなことを計画していたのですか。……？自分自身が過去に行こうとは想わなかったのですか？」

「……確かに自身の手でもう一度ルシオラを助けるといいうのは魅力的です。でも所詮それは俺にとっては別のルシオラです。俺が助けなかったルシオラはもう完全に俺の一部として融合していますから」

そう、嘗て存在したルシオラの霊破片は現在では横島の内に融合している。

チャクラを開き霊力を練る鍛錬を繰り返す内に己の中にあつたルシオラの因子も強化されていった。

そしてある日今まで以上に霊力を練り上げ霊玉を丹田に生み出した時霊破片が飛来し霊玉と融合したのだ。

集中していた横島はそれに気づかずそれをそのまま吸収してしまい一気に残りの半身も魔族化した。

横島の身体ベースが魔族のそれに交換された時ルシオラの霊破片は完全に分離不可能になっていた。

霊破片があれば横島の子供に与えることで限りなく本物に近いルシオラを復活させることが出来るがそれも最早不可能になったという事である。

最も始めから子供云々は実行しようとは思っていなかったわけだが、それでも自分には最早ルシオラと現世で再び合間見えることが確実に不可能になったことも事実。

なら別の俺に俺の思いを託し例え平行世界だとしてもルシオラと結ばれる未来があっても良いのではないかと考えたのである。

「それに俺はこの時間軸に生きる横島忠夫です。過去に戻り違う行動をとるということは今までの自分を否定することになりますから」  
「なるほど、所で条件とは何だったのですか？」

巻き物なので一体どれだけ条件があるのかな、と想っていたが見ればそれほど項目はなかった。

「読み上げますね。えーと……、  
？チャクラを完全に開き解脱し、人界における猿神ハ又マンの後継者になる。

？上級神魔の最上位位階における 天 を授けるに足る存在となる。  
？金毛白面九尾の妖孤を正しく導き天孤の後継者に育て上げる。尚これに限り完遂を誓い後日成し遂げればよい。

？最終的に両世界共に最高指導部入りを承諾する。尚対象世界の横島氏は自動的に組み込まれる。

……以上ですね」

「……はあ、なんか凄い名称が出てこなかった？」

「そうでちゅねえ、最高指導部入りとか……」

「ハ又マン様の後継者とか……流石先生と言うべきなのでござろう

か？」

まあ、チャクラは元々全て開くつもりだし 天 っていう位階に上るのにどれだけ掛かるか判らないけど老師達に師事してゆけば叶うだろう。

「……老師の後継者って言うのはどういうことなんですか？」

「うむ、わしがこの妙神山の主なのは知ってしよう。それ自体は今後も変わらんが、わしがこれまで受け持ってきた上層部の依頼を受け持つことになるということだ」

なるほど、山神である老師が此処の責任者を退陣することはないと想っていたがそういうことか。

「じゃあ上級神魔最上位ってどれくらいでござるか？」

「単純に強ければいいという訳ではないですが、少なくとも格付けとしては既に横島さんは余裕で達してますね。先の大戦の功績だけでも十分ですが、のみならずいくつかの魔族も撃退してますから。故に後は心身を鍛えるのみですね」

「確かにのう。今の横島は外見は完全に神魔側にシフトしておるからチャクラを完全に開けば同時に達成できるじゃろう」

ちなみに今の横島の能力は以下のとおりである。

保有靈力4340マイト    チャクラ全開時（第六チャクラ/十倍）  
43400マイト    神魔同期（因子共鳴/十〜千倍）43400  
〜43400000マイト

「はい、横島さんは現在保有靈力を増やしている最中です。横島さんの今現在の保有量は許容限界の約三分の一です。これを最大まで増やし更にチャクラを完全開花させれば余裕で達成できます」

蛇足だが本来神魔にはチャクラは存在しない。チャクラ解放状態が神魔の通常状態に当たるのだ。

横島は神魔のベースを持ちながら人の霊気構造を内にいまだ保有している。でこれほど成長が早いのだ。

最もチャクラを完全に開花させ解脱したらその内に秘めた人の因子も昇華し完全に溶け込むのだが。

「じゃあ次、タマモちゃんを天孤の後継者に育て上げるってのはどういうことでちゅか？」

「うむ、そもそも妖狐というのは妖怪としてはともかく神魔の域まで上り詰める存在は稀なのじゃ。本来ならタマモがその位階に上り詰めるのは遙かなる時が必要じゃし、力を得る過程で大半は神聖さを失うものじゃ。じゃが現在においてタマモは妙神山で修練を積んで横島の傍にいたことがうまく働いてこれまでにないほど稀有な存在へと進化しかけておる」

確かにタマモは妙神山に来た当初よりも遙かに清んだ波動を発しているし霊力も転生したばかりだというのに既に下級神魔に匹敵する。

「でもこれはタマモの意思が絡んでいる。俺が判断するべきことじゃないし、タマモも窮屈な役職なんかには付きたくないだろうし」「何いつているのよ、横島。貴方はそんなこと気にしなくてもいいのよ。私がその後継者になれば貴方の望みが叶うって言うのなら迷いなんか無いわよ」

転生してからずっと傍にいたタマモにとって横島は何にも代えられない存在に成っていた。

僅か五年とはいえ転生前も含めて今まで生きてきた中で間違いなく一番幸せな日々を送っていると断言できる。

この幸せをくれた横島の為ならなんだってできる。そう思うタマモだった。

「……………、ありがとなタマモ」

本気で言っているのが判ったので謝らず感謝の言葉を送るだけにする横島。

「ん、どういたしまして」

はにかんだ笑顔で返答するタマモ。柔らかな空気が辺りを包む。

「…………ゴホン！それで最後の最高指導部入りというのは…………」

若干不貞腐れたような声色で辺りに蔓延しそうになったピンクな空気を吹き消すように進言する小竜姫。

ニヤニヤしてそんな彼女を見る老師とパピリオ。そして若干むすつとしているシロ。

「…………最高指導部って言うことやっぱりキーヤんとかサツちゃん見たいな方たちがいる所ですか？」

それを誤魔化すようにあえて無表情で問いかける横島。

「うむ、事実上神魔の頂点に居られる方たちを纏めて称する時の部署名じゃ」

「それって横島が入るには最終的って言うてもだいぶ先になるんじゃないの？」

確かに彼らは誰も彼も数十億マイトというとんでもない霊圧の持ち

主だ。いくら横島が急速に成長しているといっても限界はある。現在やっと万単位に到達したばかりの横島では役者不足というのが正直なところだ。

「確かに同じ位階にいるほかの者ではいくら偉業を果たしても無駄じゃろう。じゃが横島は普通の神魔とは決定的に違う所がある。それゆえにこの条件が提唱されたのじゃ。恐らくお主は神族と魔族の最高指導部の中間管理職のような立場を与えられるじゃろうな」  
「げ、中間管理職ってあからさまに苦労しそうな役職っすねえ」

悲哀溢れる中間管理職うっつと滝涙を流す横島。

「……それで、お兄ちゃんはどんな風に違うんでちゅか？」

横の兄を見ないようにしながら訪ねるパピリオ。だいぶ正視に耐えられない顔みただ。

「お主等も知っているとと思うが普通神魔という者はそれぞれ属する異界から霊的エネルギーを供給されて人界で動くことが出来る。神族は神界から魔族は魔界からという風にな。……だが横島は違う。横島はいわばこの人界が生んだ新しい種族だ。神族でもなく魔族でもなく妖怪でもなく人でもなく、何者でもなく何者にでも成れる者……故にこの世界何処にしようとその全てから存在エネルギーを得ることが出来、故に人界において横島に敵う者はいないのじゃ」

人界において神魔は約二十分の一のエネルギーしか発揮できない。それはどの位階にいる者でも同様である。  
然し横島はその制約を唯一受けずに動くことが出来る。更に神魔両界からも位階にあった分だけの供給がされる。

「……無茶苦茶でちゅねえ。流石お兄ちゃん。常識が通じない」

「……褒められているようにには聞こえない」

「最も人界で揮える上限も事実上存在しておるから際限無くという訳でもないかの」

世界を支える力の均衡を崩すほどの力が揮えないのはどんな存在でも同じだということである。

「……しかし対象世界、つまり記憶を送られる世界の横島さんもと  
いうのは一体？」

「それは簡単じゃ。最高指導部に入るということは他の同時時間軸の横島にも少なからず影響を与える。」

そしてこの世界の横島はその稀有な在り方から最高指導部入りは半ば当然の処置なのじゃ。そして向こうの世界の横島もこの世界の横島と同様の存在に成るのは確定しておる。この世界の因子を受け取るのじゃからな。それに向こうの世界では横島は最高指導部の援護を受けられる様になる筈じゃ。成ればその恩恵に答えるのは話の流れるにも当然じゃろう」

「……まあ、何はともあれこれで全部。タマモが受け入れてくれた以上俺がこれからすることは更なる鍛錬に励むことだな」

「ええ、保有霊力量を保有総霊力量まで増やすのはそう難しくはないでしょう。ただ最終チャクラである頭頂部のチャクラ（サハスラーラ）はあらゆる意味で開くのが困難なチャクラです。今まで横島さんはその出鱈目さで次々と開いてきましたでしたが今回に関してはそう直ぐには無理でしょう。じっくり腰を据えて鍛錬に励むことです」  
「お主等もこれまでが出鱈目すぎただけに焦るかもしれんが静かに見守るのじゃぞ？」

横島に語る小竜姫とその周囲の者達に聞かせる老師。

どちらも相手を思いやる気持ちがかこれでもかと言つほど感じられる



言葉だった。

「何はともあれ俺はこれから生きていくんだ。だから俺は俺に出来ることを自分なりに楽しみながらやるだけっすよ！」

夕陽に染まる中そう告げる横島の顔は嘗て何も知らなかった少年のそれではなく、何ものでも受け止める強さを感じさせる青年のものに成っていた。

？の上の続きです（後書き）

これは黒歴史です。

感情に任せて書きなぐった物ですので生暖かく見てもらえると幸いです（汗）

？くクロス編くネギま！

第一話 安息を手にするのは悪の純潔

とある国の浜辺。

少し離れて対峙する男女がいた。

一人は金髪のボンテージ衣装に身を包んだ美女、名をエヴァンジェリン=A・K=マクダウエル。

「人形遣い」「闇の福音」「不死の魔法使い」と呼ばれ恐れられているもの。

一人はローブに身を包んだ赤毛の男、名をナギ=スプリングフィールド。

「千の呪文の男」と呼ばれ魔法界本国でも英雄として多大な支持を受けているもの。

ふとした切欠でナギを追いかけようになったエヴァンジェリン。

そして今日ついにこうして対峙することになった。

話しかけてもまともに相手しないナギに痺れを切らしたエヴァンジェリンが強硬手段に出たのだ。

緊迫する空気、シリアスな両者の雰囲気。  
そして動き出す両者。

エヴァンジェリンが従者であるからくり人形・チャチャゼロと共に接近する。

あわや激突か！と思われたときそれは起こった。

エヴァンジェリンたちが最後の一步を踏み抜いた時その地面が消失したのだ。

落とし穴である。

「なっ…これは!？」

『落トシ穴ダ御主人』

「見りゃわかるッ」

そしてどうやら泳げないのであろうエヴァンジェリンとチャチャゼ口に対してナギはニンニクやネギを大量に投下し始めた。

更には嫌がつている彼女ら相手に棒で落とし穴の中身をかき混ぜるナギ。

ついにはエヴァンジェリンの幻術が解け本来の子どもの姿になる。

「ひっ…卑怯者　　！！うぷっ…き、貴様は（千の呪文の男）だろ…魔法使いなら魔法で勝負しろっ！！」

「…やなこった。俺は本当の所5・6個しか魔法知らないんだよ。勉強苦手だな。魔法学校も中退だ。恐れ入ったかコラ」

涙目で抗議する彼女に対して更に嫌いな物を投下し、大して自慢にもならないことを偉そうに語る男。

グダグダである。

そのままグダグダ感が溢れる会話が続くかと思われたが、ナギは唐突に魔力を高めると変な呪いを掛けて悪さの出来ない体にしてやるという。

高まる異様な魔力に怖気を感じ、呪文を適当に読むナギの姿に嫌な予感を感じたエヴァンジェリンは助けを求めて叫んだ。

そしてついには呪文が彼女を捕らえようとした時、それは起こった。

「登校地」…ドゴッ！！…ぷろんっ!？」

「いやあ…えっ?！」

突然誰かに蹴り飛ばされるナギ。

その脇で同じく誰かに助けられるエヴァンジェリンたち。

「な、何者だ?!俺を足蹴にしやがって!」  
「.....まるでチンピラだな。全く...嫌がる女子どもに呪いを掛けるのは男の風上にも置けない」  
「.....そうよね、少なくとも無理やりは駄目よね、合意の上なら別だけど」

何とか立ち上がったナギに答えたのは二人の男女だった。

一人は薄緑色の髪をポニーテールにし、黒いローブを纏ってナギに対峙している男。

一人は金糸の如く輝く髪を頭上で編み上げて団子にし、同じく黒いローブを纏いエヴァンジェリンたちを助けている女。

見聞を広めるために異世界へとやって来た横島忠夫と九重玉藻の二人である。

ここで少し時間を遡ろう。

訪れた世界の時は1988年。

またもや勅命を受け異世界へと赴いた横島たち二人。予め聞かされた事は大きく分けて三つ、魔法世界と呼ばれる火星で起こった戦争の詳細の記憶と旧世界と呼ばれる地球の霊的中心地麻帆良学園都市のこと、そしてとある者がこの世界に侵入していること。

キーヤンが言うにはこの世界はとても不安定で力を封印しただけは駄目だという。

つまりそれ以外にも何か自身身に起きるということであり、それを聞いた横島は溜め息をついたものだった。

そして降り立った世界で起こったことは二つ。

横島忠夫の半女体化と九重玉藻の狐化である。

特に横島は焦った。

幸い?男の象徴は無事だったが、それ以外が女になってしまったこ

とに軽く絶望した。

しかも文珠で男に成っても僅かな時間しか変化できず、二度落ち込んだ。

幸い玉藻の方は尻尾の霊力を身に廻すことで人体化を維持することが出来た。

もつともその状態では封印された力の更に半分までしか開放できないようになったが……。

「うう……何で今更女になんて成らんといかんのやあ。あんまりやあ」

「ほら、いつまでも落ち込んでないで。近くに人間にしてはでかい力を感じるわよ?」

「う?……確かに。しかもその傍に人外の気配もするな?戦っているのか?」

「とにかく行ってみましょう。どういう行動をとるにしてもとりあえず現状を知らないが始まらないし……」

「まあ、な。んじゃ行くか」

こうしてこの世界の実態を見に行くことに決めた二人だった。

もつとも先の場面に出くわし、ナギの所業に我慢できなくなった横島が飛び出したことで偵察は終わった。

そして現在に戻る。

「い、一体何なのだ?お前達はいったい?」

『御主人コイツ人間ジャーネーゼ』

「あら?よく分かったわね。偉いわ」

『コ、コラ!ナデルンジャーネー!』

「う、この感覚は……ポー」

『御、御主人惚ケテナイデ助ケロ!』

玉藻に頭を撫でられ照れ隠しに怒鳴るチャチャゼロと抱きしめられ忽然とするエヴァンジェリン。

玉藻は二人をあやしなから汚れを霊力の波動で洗い流し、片手で印を結んで洋服を出し着せ替える。

エヴァンジェリンは着せ替えが終わった所で正気に戻り急いで間を取り問いかける。

「た、助けてもらったことは礼を言おう。だが、お前達は何者だ？」

「私は九重玉藻。あそこでナギって男をあしらっている人のパートナーよ」

「な?! あ、あのナギが禄に反撃も出来ずに打ち倒されているだど？」

『スゲーナ! 動キガマルデ読メネー!』

少し離れたところで横島と交戦しているナギ。

だが動きは読まれ、牽制に放ったミサイルのような雷の射手も容易く弾かれそれでも撃ち込んだ雷の斧は横島の障壁の前に霧散した。

悉く自分の手が効かない横島に怖気つきそうになるナギ。

嘗てライフメーカーと呼ばれていた始まりの魔法使いの時とはまた違った威圧を感じた。

「くそ?! 俺の魔法が全く通用しないなんて何者だ、お前―ッ!」

「男は如何なる時でも女を護るもんだ……、くそみたいな奴ならともかくあのエヴァンジェリンとかいう子は違うだろう?」

「お前知らないのか? あいつは「闇の福音」「不死の魔法使い」と呼ばれている悪の魔法使いなんだぞ?」

「それがどうした? 例え相手が何者であろうと悪の道を行くものであろうと関係ないだろ?」

「な?!」

「自ら悪を語るものにも種類があるが……、少なくともあの子は真

に自分を悪だと断定している。それは自身が成して来た事を真摯に受け止めているからだろう」

「それがどうした!？」

「まだ分からんか? 例えその成してきたのが自身の身を護る為だろうと事実には変わらないから悪を名乗っていると云っているんだ」

「…まあ、見る限りお前に理解できるはずないか？」

先ほどのこいつらの会話から判断した結果を言ってみたが、どうにもコイツは自分の成したことは何でも上手くいくと思っっている節がある。

ある程度の自信はいい起爆剤になるだろうが、こいつのそれはある意味害悪だな。

此方を伺いながらブツブツとアンチヨコを見ながら呪文を唱えるナギ。

それを気にせず続けて告げる横島。

「どうにもお前は根本を理解していないみたいだな。ある程度闇の者への理解は持っているが最終的に優先するのは自分の判断のようだし?」

「その何処が悪いつて言うんだ? 俺はあいつが学園の警護をする傍ら、光に生きてみたらいいと思っ……」

「……やはり理解していないな。もういい、お前は眠っている」

「?! クソッ! 千の雷ッ!?!」

ナギは横島から圧倒的な気配を感じ、急いで渾身の力を込めた魔法を放つ。

横島は己に降り注ぐ雷を見て溜め息をついた。

「はあ、精霊達もかわいそうに……雷よ、我と共に在れ」



『?!』

横島が差し出した手に雷はまるで其処が己の安住の地であるかのよう  
に静かに巻きつき彼の腕に帯電した。

それを見たナギやエヴァンジェリンはあごを落とした。  
それも当然であろう。

キロ単位の巨大な岩石さえ融解させるナギの雷をまるで蛇か何かの  
ようにあやしたのだから。

横島はそれを気にせず素早くナギに接近すると反撃の手さえ出させ  
ないまま眠らせた。

冬ノ眠 の文珠でナギを眠らせ精霊たちを開放した横島は玉藻の  
元へと戻った。

その傍ではエヴァンジェリンがまだ呆然としている。  
チャチャゼロは主人を護るべく対峙するが横島はそれに取り合わず  
そんな彼女を抱き上げる。

「おー。可愛いなあ、始めまして。俺は横島忠夫って言うんだ。お  
嬢ちゃんは何んて名前かな？」

『ウウ。オ、オレハチャチャゼロ……』

玉藻の時は照れ隠しで怒鳴ったが何故か横島にはそんなことすら出  
来なかった。

玉藻はいつの間にかまたエヴァンジェリンを抱いている。  
彼女の顔は真っ赤だ。

それはさっきの横島の言葉を聞いたからでもあるが……。  
少なくともこの横島という男は自分の悪としての誇りを理解してい  
ると分かったからだ。

そして理解してなお自分の味方をしようとするこいつに興味が出て  
きたからだが……。

「さて、とりあえずナギの野郎は当分起きないからその間に状況整理しようか？」

だから横島がそう言った時エヴァンジェリンは特に反抗することもなく従った。

「ふーん。麻帆良ねえ？その世界樹っていうのは樹齢1000年を越えるって言ったよな？そんなもの結界で覆って異常が起きないと思っっているのか？」

「しょうがないんじゃない？人間の観念から見たら其処まで理解できるとは思えないし……立派な魔法使いなんていう者たちが暮らしているって言うのが……また、ねえ」

「ああ、そんな所に呪縛され力も祿に行使できなくなったらどんな目に遭うか分からん！それに、そんなことがなくとも精神的によろしくないのは分かりきっている！」

「だよなあ。少なくとも闇の真髄を理解していないナギが行っていることじゃないよな。……ふむ」

エヴァンジェリンにナギの言っていた警護する場所のことを聞き思ったことを言う傍ら、横島は今後のことを考えていた。

先ほどの戦闘の時文珠でナギの深層意識を探って理解したことがいくつがあった。

一つはエヴァンジェリンには悪いが、ナギは既に結婚していること。  
一つはエヴァンジェリンに掛けられる呪いの詳細。

うる覚えなので記憶自体が曖昧だったがあれ自体に力を封印できる力は無いということ。

一つは魔法世界の実情……戦争云々とはまた別の視点でのこと。

作られた世界である魔法世界のことを考えると繋がっているこちらの世界も異常が起きる可能性がある。

一つは京都で封印したりヨウメンスクナのこと。

ナギの記憶越しだからはつきりしないが封印時、人の魂と一緒に封印されていたように感じた。

それが事実なら荒御霊を封印していることも不味いが、共に封印された魂が同レベルの怨霊となる可能性が非常に高い。

最後に麻帆良学園都市の学園長のこと。

随分はつちやけている爺だ……同時に底の見えない所もある。

両世界の現状を見るに今は再び火が舞い上がる為の潜伏期間だろう。自分達がいることでどれだけ歴史が変わるかは分からないが、少なくとも記憶で見るとこの世界の中心は麻帆良だと思えた。

ならば……横島は思考の海から復帰し彼女らを見た。

「玉藻。その子と一緒に麻帆良に行ってくれ。着任は俺が何とかするから……たぶんあそこが中心になる」

「私だけ？まあ、忠夫のことだから考えに考えきつた末の決断だろうけど……」

「彼女には解呪できる呪いを掛ける。あの学園を治めている爺は厄介な性格をしているらしいから出来る限り本物……ナギが掛けたと納得できるようなものにならないが……」

「どういうことだ？話を聞いていると私が麻帆良へと行くことは決みたいだが……」

「言っただけだったが……俺達は外から来た。次元の違う此処と似て非なる世界からな……ああ、魔法界のことじゃないぞ？」

「！？異世界だと?!……い、いや。だとしたら納得できるか。少なくともこの世界でナギをああも簡単に下せる者などそういないはずだからな」

突然告げられたことに度胆を抜かれたが、相手から感じられる圧倒的なまでの力と先ほどのナギを打ち負かした様に納得する。

「……でだ、俺たちはこの世界に見聞を広げるためにやってきた。まあ、上が言うには異変が起こっているみたいだからその調査もだけど……」

「異変？」

「ああ、この世界の住人では絶対的に相対できない者が侵入しているんだ」

「気であるうと魔法であるうと科学兵器なんかでも倒せない怪物がね？」

「い、一体どんな奴なんだ、それは？」

「実体はないわ。精神体であり他者の魂に自身と同じ特性を持たせる寄生体よ」

「こいつは霊力という魂から生み出す力でないと攻撃は通らないし、存在する位階が高すぎる故に人が霊力を得ようと倒す事は不可能だ……例え君でもね？」

「?!」

「俺達はこの世界の中心は麻帆良だと見ている、そして魔法世界の現状や戦争の詳細も既に理解している」

「今世界は潜伏期間だと私たちは見ているわ……だから忠夫は世界の中心である麻帆良に行くように言ったのよね？」

「ああ、あそこに居ればいつかは動きがある筈だ。……さっきこいつの記憶を垣間見たが、こいつは何れ姿を晦ます」

「?!ど、どういうことだ？」

「詳細は判らんさ、戦争終結時敵の親玉に乗っ取られた師匠を探しに行く為かそれとも自身に何か起こると見ているか」

「……師匠といえばゼクトのことか」

「あとこいつ結婚しているぞ？アリカ姫だったか？」

「なあ……ッ?!!!」

「どうも君がこいつに執着しているみたいだったからさ……余計なお世話だったか？」

「無神経ではあるわね」

「うつ……でだ、という事はいずれ子供も生まれるだろう？」

「……なるほど、その子供がこの世界の騒動の中心となるといっわけね？」

「ああ、こいつが姿を晦ます以上代わりの求心力が現れる筈……英雄の子は英雄なんてクソみたいな考えだがこの世界に存在するのは……」

「……なるほど、読めてきたぞ。魔法使いを目指す子供は見習いになつたら修行に出る……その行く先が麻帆良というのだな？」

「ああ、世界が動き出す時例の奴も大きく動きだすはずだ。それがいつかは断定できんし、呪いの効果は極悪だから君には辛い目をさせる事になるけど」

「……玉藻と言つたか……、お前も共にくるんだな？」

「ええ、私もその麻帆良を詳しく調査したいし事前に打てるだけの手は打っておきたいしね。貴女と同じ呪いに掛かっていれば苦しみもほんの少しは和らぐかもしれないしね？」

「俺らは少なくとも君の倍近く生きているから……君の辛さも少しは理解しているつもりだ。君の間は君だけのものであることは分かっているけどね？」

「?!わ、私の倍近くだと?!」

「少なくとも1000年は生きているからね。まあ、私たちは連れ合いがいたから貴女の真の苦しみは理解できるとは言わないけど……」

「……事が終われば如何するのだ？私はどうなるのだ？ナギが既に愛する者を手に入れていた以上もうあいつに執着する気も起きない」

エヴァンジェリンは既に気付いていた。

まだ思いは引き摺っているが、ナギに対する思いが恋人に向けるそれではないことに思い至つたのだ。

助けられ自分を恐れずに接してくれた彼にぬくもりを感じたゆえの

行動だと。

それは雛が親鳥に接するのと同じことだろうと……。

玉藻はそんな彼女を優しく抱きしめている。

体から漏れる魔力の質からおよそ600年程度は生きているはず……、このおよそ10歳程度の体躯でそれだけの時を生きる事がどれだけ苦しいか分かる故に玉藻は労わった。

チャチャゼロは変わらず横島の腕の中でジツとしている。

横島の醸し出す心地よい靈気の波動が彼女をくすぐる感じがして若干もじもじしているが……（笑）

「君さえよければ俺達と共に来ればいいさ。今まで巡ってきた世界でもそういうのはいたしな？」

「私自身忠夫に救われた口だから信じてもいいわよ？この世界でも伝承は存在するでしょうけど私は元九尾の妖狐よ？……言っていることの意味分かるわよね？」

「……っ！九尾の妖狐といえば……、なるほど伝承のみで全てを判断せず己の感性で救うべきものは救うということだな？」

明かされた玉藻の正体にまたも度胆を抜かれるも、それに隠された事柄に直ぐ気付くエヴァンジェリン。

伝承では傾国の魔物として恐れられた九尾だが実際は違うことを彼女も知っていた。

そしてそれは自分の身にも当てはまる。

10歳の時無理やり吸血鬼にされ、その種族ゆえに悪と断罪されてきた彼女は九尾と共通する部分が多々ある。

平穏を求めて止まない者として、退屈は不死者にとってこの上ない毒だがこの者たちと共にいられるのであれば……。

「……分かった。その指示に従おう。同じ痛みを知るものが共にいてくれるのなら……、この先ずっと共にいてく

れるのなら……」

「ああ、誓おう。我、太極天こと竜魔神・横島忠夫が汝不死者・エヴァンジェリンと共にいることを……」

「誓うわ。我、狐星神・九重玉藻が汝不死者・エヴァンジェリンと共に歩むことを……」

「!!!!!!!!!!」

今度こそエヴァンジェリンは絶句した。

彼らの言葉から察するに目の前に存在する彼らは神の類であることになる。

この世界には神は存在しないか遙かに遠い存在だ。

その存在が目の前にいる。

しかも悪に属する自分を救剤しようとしている。

混乱する彼女を他所にそれは起こった。

シュウウ

.....ッ!

突如横島の体が煙に包まれたのである。

「な、何だ?!」

「ああ、そろそろ時間だったわね。私は問題ないけど、忠夫は力が強い分制約も大きいからねえ」

「制約?」

「そ、私たちが異世界に来るときにその対象世界からある程度の制約が課せられるの。強すぎる存在は世界にとって害悪になってしまう可能性があるからね」

「では横島に起こっているのは……」

「忠夫に課せられた制約は二つ。一つは私と同じで力が20分の1になるといふこと」

「.....ッ?!」

「もう一つは半女体化。これは制約というより罰ゲームみたいなものよね。忠夫からしてみれば」

煙が晴れた其処にいたのは玉藻に負けず劣らずの美女だった。変わったのは顔付きと体がはつきりと丸みを帯びたことのみ。醸し出す雰囲気は変わらず其処にあった。

『ウウ、ケムタカッターゾー！ツテ、女ア?!』

「ああ、ごめん！ごめん！こうなる前に離しておくべきだったわね。ふう、忘れていたよ時間のこと」

「？だがなぜ男に成っていたのだ？別に女のままでもいいのじゃあ」「私は男だからね。可能な限りは男でいたかったのよ……この制約は強力だから、早々出来ないけどね（涙）」

「……しかし、神か。まさか異世界とはいえ存在するとは」

「私らのいたところでは別に珍しくは無かったけどね……似たような世界もあったし」

「……それに20分の1つて事は、制約前の力は一体どれほどのもの何だ？」

「そうだねえ、一般人を1と仮定して君を……ああ、エヴァって呼ばせてもらうけど……エヴァの力を2万程度としたら私は350万程度で、玉藻は230万程度かな？」

「程度つて……（汗）ドンだけなんだ。今の状態でも二人とも10万を越えているということだろ？」

『半端ジャーナーナ（汗）』

「いいえ、さつきも言ったけど私にもあと一つ制約が掛かっているの。所謂狐化だけどね？私は尻尾の大半の力を体に廻すことで人型を保っていられるの」

「今の玉藻はさっきの数値に当て嵌めるなら……3万ぐらいか？」

「……どちらにしろ、私より上じゃないか」



『イジケルナヨ、御主人』

「それに俺らの上司は一億とかそんなんだぞ？」

「『……………』」

とにかく行動に移そうということになってナギに近寄る横島。  
チャチャゼロは頭の上に移動している。

「それで如何するのだ？」

「まず、こいつの記憶を正史と似たような感じに書き換えて事が終わるまで封印する。…で、俺がこいつになって学園にエヴァたちを届ける」

「なるほど彼の仕草や記憶を完全に模すことが出来る忠夫ならではのね。わたしはどうするの？」

「玉藻はエヴァを捕らえた後で拾った子ってことにして信頼できる旨を伝えればいいさ。爺もナギの言うことなら信用するだろうしエヴァの監視とかにすれば共に居られるだろ？」

そついいナギの記憶を書き換え模した上で変化する。

その完全な変身にエヴァは今日何回目か分からない度胆を抜かれた。続いてナギを封印し珠に収める。

「……………さて、んじゃ行こうか？ナギ様一行の凱旋だ！」

「……………本当にそのまんまだな。これは絶対分からんぞ」

「当然よ。記憶や考え方まで同じなんだから……………、エヴァもチャチャゼロも口を滑らさないように気をつけてね？」

「分かっている、まあ先輩の意見には従うさ。これから長い付き合いになるのだし」

『ケケケ、爺ヲ欺クノモ面白イダロウシナ！』

麻帆良学園都市。

アレから直ぐに赴いた先でナギに化けた横島とその一行は近衛 近衛門老と相對していた。

「つーわけで、こいつには呪いを掛けてある。結構強引に掛けたから俺にしか解けないだろうけど……」

「ふーむ、流石ナギじゃのう。警備の者が欲しいとは言ったが……まさか闇の福音とは」

「ふんっ！」

『ケケケ、爺アタマ斬ルカ？』

見事に騙されている近衛門老は唯彼の非常識さに驚いていた。

エヴァは不自然に見えない程度に不機嫌さを露にしていた。

チャチャゼロは爺の後頭部が斬りたいらしくうずうずしていた。

「物騒じゃのう（汗）」

「ついでにこつちの子もペアで使いな。途中で拾った子だけどな、結構使えるぜ？エヴァも懐いているし一緒に住まわしておけば変な気も起きないだろ？」

「九重環と申します。以後お見知りおきを」

「む？妖怪か？」

続けて紹介した玉藻に反応する近衛門老。

流石に人間ではない事に直ぐ気付いた……訳ではなくワザと漏らしているだけである。

ちなみに、玉藻では感ずかれる可能性もあるので環と改名している。今の彼女は12歳相当になっていた。

「ああ、死に掛けていたのを助けたんだ。そしたら懐いちゃっていな。こつちはこれから用事があるから連れて行けないって言ったら

恩返しがしたいつつうから……」

「なるほどの。承知した。お主が信頼しているのなら心配あるまい。……それでどうするのじゃ？」

「中等部にしといてくれ。……これで小学生にしたらへソ曲げてしまっからな」

「確かにのう（汗）……まあ、ナギが三年後戻ってくるまでじゃから我慢してもらっしかないの」

「ああ、何かあってくるのが遅れても環が同じ境遇でいてくれるから多少は大丈夫だろ」

「なんと！？彼女は自分から呪いを受けたのか？」

「俺も驚いたけどな。其処までする彼女が傍にいればエヴァも自分を律することぐらい出来るだろ？」

あくまで自然に対応し、近衛門に疑問を抱かせないようにする横島すでに、呪いの効果は近衛門も把握しているが結界のことを考え良しとする。

最悪ナギが遅れても力を揮えない状態で、しかもエヴァを宥めることの出来る環という人物がいれば大丈夫だと判断した。

「~~~~~」プルプル

話題のエヴァは涙目でプルプル震えている。

それは先の会話に怒りを感じているわけではない。

会話をしている彼らがこちらを見て肩を震わせ笑っのを我慢しているのが見て取れたからだ。

「……然し似合っているな！素晴らしく似合っ！……ぷっくっ」

「ホントじゃのう600万ドルの賞金首にはとても見えんわい……フオフオフオ」

「殺す……肉塊も残さず……」プルプル

然しついに我慢できなくなったのか笑い出す二人。  
そんな二人を睨むエヴァ。

「まあまあ、学校生活も楽しいものだって……経験ないんだろう？」

「私も同じ呪いに掛かってあげたのだから我慢しなさい。ナギ様の折角のご好意なのですから」

「うう~~~~~~~~」

ナギがそれを宥め環がそれに追従するのを見て近衛門は大丈夫だと確信した。

対するエヴァたちはあくまで演技だったのだが……多分。

「ふむ（これなら安心できるかのう）、まあ寮生活では何かと周りが煩いじやろうから外れの森にでも家を建てて進ぜよう」

「当然だっ！！誰が、ガキ共と一緒に暮らせるかっ！！！！」

こうしてエヴァと玉藻は麻帆良学園に入学することになった。

なお、エヴァは正史と同じ呪いを受けたが解呪が出来ることも確認済みなので安心して居る。

ついでに、魔力を抑えられても体調を崩さないようにお守りも渡されたので2重に安心だ。

また、チャチャゼロも基本は動けないが任意に動けるようになる道具も貰っているので拗ねてはいない。

これから運命の時まで玉藻から彼らのことを学んだり自分らの世界のことを教えたりして過ごすことになる。

ちなみにナギは適当なところで開封して放置した。

起きた後、一瞬体を強張らせたが特に気にすることもなくどこへともなく飛んでいったようだ。

横島はそれを確認した後、一路京都を目指した。  
リヨウメンスクナの現状を確かめるために。

## 第二話 絆を掴みしは乙女たち

横島唯魅。

横島忠夫の女性体の時の名前だ。

彼女は今直感に任せて走っていた……京都の山深くにある清水の源泉近くを。

エヴァたちと別れた後、予定を変更して先に魔法世界を見て回った横島は2年後当初の目的を果たすべくここに来ていた。  
ちなみに魔法世界へは転移する他の人に同化して入った。

此処に来たのは主にリヨウメンスクナを封じている京都周辺の霊的な物の状態を確認する為だが、途中から何故か嫌な予感がしてその予感がする方向に走り出したのだ。

進めば進むほどその予感が増すばかりだが、とにかく走った。

源泉を越え生い茂る木々を抜けた先で横島が目にしたのは2歳ぐらいの白い翼が生えた女の子を抱いた血塗れの夫婦らしきものたちを囲んでいる人外の群れだった。

人外たちは手にそれぞれ獲物を持ち、女の子を抱きしめ護っている夫婦を打ち据えていた。

瞬間、横島の意識は真っ白になった。

「貴様らあ

ッ！！！！」

『？！』

目の前が真っ赤になった横島は咆哮を上げて人外たちに切りかかった。

突然の乱入者に驚き、対処しようとするもその圧倒的な強さに彼ら

はなすすべなく打ち倒されていった。

しばらくして全てを打ち倒し、夫婦の元へと駆け寄った横島が目にしたのは既に息の引き取った夫婦とそれにすがり付いて泣く幼子だった。

「間に合わなかったか……、クソッ」

横島は静かに幼子によると彼女を抱きしめた。

驚き直ぐに暴れようとしたが横島から感じる暖かな鼓動と温もりに落ち着いていった。

しばらくそうしていた二人だが、横島は夫婦を弔おうと立ち上がった。

横島はそれを告げようとしてとりあえず彼女の名を聞いた。

「私の名前は横島唯魅。お嬢ちゃん、君の名は？」

「わ、わたしは刹那です」

「そう、じゃあ刹那ちゃん。ご両親を綺麗にして弔おうか？あのまじゃ可哀想だ」

「あ、あの。わたしの翼、きもちわるくありませんか？！まっしろで、目もあかくて……」

刹那は自分の背に生えている白い翼を隠すように抱きながらおらず尋ねた。

その様相は答えを聞くのが恐ろしい様なでも聴かずにはいられないと言った感じだった。

「ん？そんなことないよ。綺麗じゃない、天使のようよ。……それに、ご両親の愛情から生まれた貴女が綺麗じゃない筈ないじゃない」

「あ」

だが横島はそんなこと気にせず、唯賞賛した。彼女にとってそれは当たり前のことだから。刹那はその透き通る様な答えに心を打たれた。先ほどまで自身を震わせていた恐怖や痛みを全て洗い流してくれたその声に。

「おそらく掟だのを理由に打ち据えたのでしょうけど……」  
「……はい、あの……わたしは鳥族とのハーフで白い翼は不吉の象徴で……、おとんとおかんは今まで隠して育ててきてくれたのだけど」  
「刹那ちゃん」

刹那が告げることを遮り、名を呼ぶ横島。刹那はそれに答えるように目を向ける。

「誇りなさい。貴女のご両親は愛する貴女を守り通した。言葉を交わせなかったのは残念だけど……、貴女はその白さを誇りなさい。それは立派なご両親の愛の結晶なのだから」  
「……………」

瞬間涙が溢れた。

おそらくそれは刹那がずっと求めていた言葉。迫害を受けている時は辛かったけど、それでも両親のことは好きだった。

その親のことを誇れといってくれる、立派だといってくれる、そのことはこの上ない喜びを刹那に与えた。  
横島はそんな彼女を抱きしめると背中の翼を撫でた。

「刹那、貴女はその翼で大切なものを守れるようになりなさい。立派なご両親のようにな？」

「グス……うう……。……うん」

しばらくして泣き止んだ刹那は横島の言葉に従って両親の体を清めた。

周りの人外たちは横島が手を振るうと塵となって消えた。

刹那は驚いていたが横島は気にせず刹那の清めた彼女の両親を肩に担ぐと刹那に声を掛けた。

「とりあえず此処じゃあ何だから、もっと見晴らしのいい場所に埋葬しましょう」

「はい」

途中で源泉により清らかな水でもう一度洗い霊力で編んだ襦袢でその遺体を包んだ。

そして京都を見渡せる丘に辿り着くと穴を掘り遺体を収めた。

横島は双文珠を削り浄炎を生み出すと遺体に掲げ灯す。

あらかじめ施した隔離結界の中で燃える遺体を見ながら二人は黙禱を捧げ続けた。

しばらくし、強力な浄炎で遺骨だけになった彼らから一部を刹那に渡し埋葬した。

横島は石碑を置き刹那に聞いた両親の名を刻みその在り方を讃えた言葉を刻むと鎮魂の言葉を紡いだ。

しばらく二人で祈りを捧げていると刹那のお腹が鳴り彼女は顔を真っ赤に染めた。

それにくすりと微笑むと彼女に向き直った。

「それじゃあ、町に下りて食事にしようか？」

「え？……あ、あのよろしいのですか？！そのついていっても……？」

「？当然でしょ？刹那ちゃん私の妹になるんだから。立派なご両



親がいる以上親になるつもりはないけど……貴女の面倒ぐらいは見るわよ」

「……………あ、ありがとございます！あ、姉様とお呼びしてもよろしいですか？」

横島はその問いかけに一瞬くらつときたが、何とか持ち直していいよと言っておいた。

……………かなり男としてダメージを受けたが……。

その後、石碑の周りに災厄を退く结界を施すと刹那を連れてその場を後にした。

数十分後町に下り温泉宿を取ると、郷土料理で腹を満たした。

横島はとりあえず先にこの子の精神を安定させるのが大事とし、二人で温泉に浸かりゆつくりと休むことにした。

「お休み、刹那」

「おやすみなさい、姉様」

二人は同じ布団で抱き合うように入ると意識を落とした。

翌朝、朝風呂に入り朝餉を取ると今後のことを話し合った。

「刹那、私は調べなければならぬことがあるんだけど如何する？危険があるかもしれないから残ったほうが安全だし……ここにいれば終わったら迎えに来るけど」

「出来れば付いていきたいです。お邪魔なら我慢しますけど……」

「我慢なんてしないでいいわよ。じゃあ一緒に行きましょうか」

「はい！」

横島は刹那を連れて行くことにした。

元より残していくことには不安もあつたし大抵のことには対処できるから抵抗はなかった。  
そして赴く先はリヨウメンスクナが眠る大岩。

関西呪術協会の奥深くに鎮座する大岩の前に今二人は来ていた。

横島は刹那を横に侍らせたまま大岩を霊視していた……刹那はただ大岩の存在に驚いていた。

其処に在ったのは間違はなく人間の魂。  
それも複数の魂だ。

それらは共に封印されているスクナの霊体に絡みつき食い込んでいた。

しかも大岩にはこの世界には在り得ない異質な力が残っていた。

「この力の残滓は？既に種を蒔き始めているのか？……それにしても予想よりも酷いことになっているな。これは何とかしないと町にまで被害が出るぞ？……ん？」

疑問に感じたがとりあえず保留にした。

そして顔を顰めて現状を確認していると後ろに気配を感じた。

「誰です？！其処にいるのは！」

其処に現るは、関西呪術協会の長・近衛詠春。

彼は愛刀の夕凧を抜き身で構え此方を伺っていた。

横島はそれに慌てず静かに告げた。

「この大岩にはスクナ以外の者も封印されている。複数の……恐らく二人の人間の魂がね」

「?!何ですって？貴女が如何してそんなことを知っている？」

「私はナギの記憶を見た時、封印時に人の魂が引き込まれ共に封じ

られるのを確認した。記憶越しだったから確証はなかったけどね」  
「！貴女はナギの知り合いなのか？」

まさか盟友の名が出てくるとは思わず驚く詠春。

「正確には違うけど……私がここに来たのは本当に此処に人の魂が封じられているかを確認に来たんだ。もし事実ならトンでもない事になるからね」

「とんでもないこと？」

「此処に封じられているスクナの荒ぶる魂に引き摺られた人の剥き出しの魂はこのまま放っておくと強力な怨霊になる。レギオンクラスの……」

「な?!」

「しかも……見た所、封印が強引な物のせいかスクナと絡み合っている。これじゃあ今から開封して人間の魂だけを解放することも出来やしない」

横島が霊視した限りではスクナの深部にまで人間の魂が食い込んでいる。

これでは例え開封しても魂は開放されず逆にスクナに吸収されることになる。

かといってこのまま放っておけば、更に魂を犯されスクナに寄生する怨霊になってしまう。

そして、その怨念によって増幅されたスクナの波動が周囲に負の感情を増幅させる起因になる。

横島の説明を聞いた詠春は顔面蒼白になった。

唯でさえ、下の者を抑え切れていないのに更に厄介になる可能性が出てきたからだ。

「今の状態で出来ることといえば……食い込んでいる魂を少しずつ

でも離れるように仕向ける呪を施すことぐらい……かな？」

「そ、そのようなことが出来るのですか?!」

「まあね。然し厄介だ。どちらにせよ、もし次に復活するようなことがあれば前回の比ではないだろうことは間違いない。例え魂の剥離が上手くいっても……だ」

「どうしてですか?」

「既にスクナの魂は憎しみの念で力が増幅する方向で固定されてしまっている。これを弄るには開封するしかないが、それをしてしまうと人の魂が一気に吸収されてしまう」

今は封印されスクナと言う存在と人の魂が個別で固定されているが故に人の魂を剥離することも出来る。

然し一旦開封してしまうと活性化したスクナによって食い込んでいく魂は吸収され、その強い怨念によってどちらにせよ強力な存在となってしまう。

これを防ぐには少なくとも食い込んでいる魂を完全に別たなければならぬ。

つまり、スクナが強力な存在になること自体を防ぐことは不可能ということである。

「そんな……」

「しかも存在自体が強力になるからいざれ自ら封印を破って這い出てくるだろうね……さっき言った呪を施しても10年ちょっと……かな?」

「……ッ!ど、どれほどのものになるか特定できませんか?」

「この地にどれほどの負の感情が存在するかにも寄るけど……、一般人が1で最盛期の貴方を1万程度と強さを仮定したら前回は約2万5000程度かな?」

「……確かにそのようなものでした。ナギがいたので助かったので

すが……」

「剥離が成功した状態で……大体5万かしらね？場合によってはそれ以上よ」

「……………」

詠春は絶句した。

唯でさえ強力だった鬼神が倍以上強くなって這い出てくるのだ。

しかも、憎しみに染まっているということは前回以上に派手に暴れるかもしれない。

そうなれば関西は確実に壊滅だ。

「とりあえず呪は掛けておくわよ？想定した程度の強さなら問題なく対処できるから……いずれその時にはまた来るわ」

「な？！あ、貴女はそれほどの強さをお持ちなのですか！」

「別に誇ることでじゃないわ。鍛えていたらこの位階にまで上り詰めただけだし……、でも私を当てにはしないよね？場合によっては来られないかもしれないのだし」

「……………自らの精進を怠るな、ということですか？」

「当然でしょ？責任ある立場に就いているのであれば引き締める所は締め、護るべきものは何をもってしても護りとおすべきなのだから」

「……………耳が痛い話です。……………ッ！こ、此れほど強力な結界を容易く張れるとは……………」

話をしながらも横島は呪を掛け続けていた。

そして展開されたそれは目に見えて強力で大岩を完全に覆っていた。傍にいる刹那も目を見開いて驚いている。

「姉様凄い！」

「そう？ありがと。……………これでとりあえずは……………かな？この結界は

魂が完全に剥離し終わったら自然と解けるわ。おそらく鬼神が甦るとの僅差だと思っただけ……」

「ありがとうございます！私どもではこのようなこと気付くこともできなかったでしょう」

「別に構わないわ。京都の綺麗な町並みが怨念で溢れるのなんて見たくなかったしね……（それに囚われている魂の悲しみの波動も気になったし）」

その後、三人は今後のことを話し合うべく屋敷に戻った。

そこで出会う一人の女の子。

「お父様。遊んでえな」

「コレコレ、木乃香。私は今から大事な話があるんだ」

「え、いけずう。……ん？貴女はだれ？うちは木乃香いうんよ」

「え？あ、わたしは刹那……です」

「刹那……せつちゃんやな」

「え？」

「ちょうどいい。二人で遊んでくるといい。刹那も木乃香ちゃんも同じ年ぐらいの様だし……ね？」

「そうですね。そうしてきなさい。刹那君といったかな？木乃香のことを頼んだよ？」

「あ、はい！」

「（心眼、一応用心のため捕捉しておいてくれ）（承知）」

横島は駆けていく少女達の気配を見守って置くように相棒の心眼に頼んだ。

二人が手を取り合って掛けてゆくにしばらく眺めていた二人だが、しばらくすると横島がぼつりと言った。

「嫌な予感がするな……」

「え？」

「いや……、あの子……木乃香ちゃんのことだけど。かなり強い力を秘めているね？」

「ええ、やんごとなき血を引いているので極東では最高の魔力の持ち主です」

「裏は知らないよね？見た所魔力を垂れ流しているようだったし」

「はい、あの子には普通の女の子として生活してもらいたいのです」

「……言いたくはないけど、それは絶対に不可能ね。彼女はこのままいくと生贄にされかねない」

「……ッ！？い、生贄ですか？！何故そんな……」

横島は思う。

ナギの記憶を覗いた感じでは東西の仲は極めて悪く、冷戦状態だ。

そしてこの詠春は下の者を上手くまとめているようには見えない。

そしてそんな中で娘に普通の生活をさせようとしている。

親としては間違っていないかもしれないが……それはあくまで普通の環境であればの話だ。

このままいけば木乃香を護るために義父である近衛門を頼り東へと木乃香を行かせるだろうことは目に見えている。

そして麻帆良はこの世界の中心であり、此処には鬼神が眠っている。そしてキナ臭さも感じられる魔法界の元老院がこの状態を知ったら……。

……いづれ東西の仲の改善を魔法界本国より麻帆良の爺に要請する可能性が出てくる、そうならば……。

「貴方は今この関西呪術協会を纏め切れていない。そしてそれ故にいずれ内部で反抗の意思が有る者から木乃香ちゃんを護るために東へと行かせるでしょう」

「……ッ！た、確かに纏めきれいていませんね……情けないことです。それに確かにそうなるかも知れませんが……悔……」

しいですけど」

「そして、東西は冷戦状態。そんな中で長の娘が東に行けば更に火種は大きくなる。その起因となるものが此処には眠っているしね？」

「……………?!ま、まさか……………」

「そう、そして……………魔法界本国がいつまでもこの状態を良しとする筈がない。せつつくはず……………そうなれば」

今は誰も知らないことだが、いずれナギの子が麻帆良に行くことになれば……………。

余り考えたくないことだが、英雄の名は上手く使えば緩衝材になる。その逆もありえるが……………、何にしてもそうなると本人が裏を知らず力の制御も出来ないことは大きなハンデを抱えることになる。

それは相手にとっては都合のいいことで、此方にとっては最悪の可能性が出てくる。

「反乱の意思ある者に囚われ、無理やり力を引きずり出されたら……………」

…最悪彼女の霊体は傷つき重いハンデを抱えることになる」

「ぐっ……………」

「少なくとも鍛えていない彼女の無いに等しい制御力では内から出る魔力を抑えられず災厄を呼び寄せてしまう」

「……………私は間違っていたのでしょうか？良かれと思っしょうとした事は」

「さて？普通の親なら間違った判断ではないと思うよ……………でも貴方は此処の長であり下に対して模範的な態度を取るべき立場にいる者だ」

横島の告げる言葉に詠春は苦虫を噛んだ顔になってしまった。

結局自分は判ったつもりになっていただけなのか……………そんな暗い気持ちになってしまう詠春であった。



「少なくとも力の制御と陰陽師としての訓練はするべきね。今からでも力の制御を憶えれば、いざという時何かと役に立つ」

「そうですね……陰陽師になるのは？」

「陰陽師になれば下の反抗の意思も少しは収まるでしょう。いずれ爆発することは避けられないでしょうけど、貴方はともかく彼女自身への矛先は緩まるはず」

「……確かに。このまま何も憶えずに東へ行けば力に目覚めた時、自然と西洋の魔法を覚えることになってしまおうでしょうし」

「何にしたところで彼女の真の適正はあくまで東洋でしょう。彼女の未来はあくまで本人が決めることだが……少なくとも黙っていい顔しないでしようし」

「あははは。確かに木乃香はそういう子ですね。参りました、親である私よりよほど貴女の方がよく理解している。……本当に情けないですね」

「……詠春」

「はい？」

「人が寄ってこない道場はあるか？貴方がどれだけ訛っているか、

……私が見てやる」

「……ッ?!」

叩きつけられた鬨気に詠春は一瞬体を硬直させた。

そして思い知る。

自分がどれだけ平和ボケしていたのかを……。

だから詠春はその誘いをありがたく受け取った。

「御願います。どうやら自分は思っていた以上に腑抜けていたようです」

「よろしい。その気概があるなら貴方はまた返り咲くことも出来ましよう」

そうして奥まった所に行く二人。

道場に入った横島は即座に隔離結界を張り、靈気を練り上げ自身の持つ技の一つ“蛍光幻魔剣”を創り出す。

詠春は無造作になされた結界術と生み出されたその物質化した気の剣のようなものを見て絶句した。

自身よりも上段者であることは今までの仕草や体から発せられる圧倒的なまでの波動で分かっていたが、……どうやらそれ以上であるようだ。

「そういえば名乗ってなかったな。私の名は横島唯魅。今から貴方を叩きのめす者の名だ」

「……………。そういえば聞いていませんでしたね。唯魅さんですか……何処まで相手できるか分かりませんが……よろしくお願いします」

「ええ、来なさい！」

一瞬の対峙後、詠春は一気に詰め寄った。

縮地に近い速度で接近した詠春は即座に最大の気を込めた神鳴流の奥義を放つ。

「神鳴流奥義・雷光剣！」

「甘い！」

「は、速いつ！」

「剣筋が真っ直ぐすぎるわよ？……………紅燐剣ッ！」

繰り出された帯電する斬撃を高速の剣舞で弾き飛ばし瞬間移動の如く接近し靈気を纏った衝撃波で詠春を吹き飛ばす。

その流れは一部の隙も無く、技を繰り出すスピードも叩き込まれる一撃の重さも比較にならなかった。

また先ほど食らった衝撃波は体の芯まで貫通しており、刀を握るこ

とすら困難になっていた。

「くっ!?!……ま、まさかこんなにも呆気なく負けるとは……ッ!」  
「詠春。貴方の剣は真つ直ぐすぎる。今まではそのスピードや技の  
練度で何とかなってきたのだから……、もう少し身のあるフェイ  
ントを入れなさい」

「返す言葉もございません。想像以上に訛っていました。貴女と相  
対していなければ更に訛っていたでしょうね」

「理解できたならいいよ。(主!木乃香殿が溺れておる!助けよう  
としている刹那殿も溺れそうだ!!)……ッ?!」

「?どうかしましたか?」

「木乃香ちゃんたちが川で溺れている!転移して助けに行くぞ!!」

「?!は、はい!」

すぐさま転移し、心眼で見守っていた二人の場所に飛ぶ。

そこには流れの早い川で溺れている木乃香を羽根で飛んで必死に助  
けようとして引き摺られそうになっている刹那がいた。

横島は川に飛び込み木乃香を抱き上げると刹那にしがみつくように  
言って対岸に渡った。

「二人とも大丈夫か?」

「ごほっ!……うちは平気です。せつちゃんがうちを持ち上げてく  
れていたから息もできたし……ありがとな、せつちゃんとお姉さん」

「姉様、助かりました。でも……うち、このちゃんの事守れなかつ  
た……姉様に言われた翼まで使ったのに、大事な友達守れなかつた  
……」

「確かに今回は助けきることは出来なかったわね。……でも、今回  
刹那は思い知ったでしょう?大事なものを守るのがどれだけ大変か  
を……」

「うん……」

横島には刹那の今抱えている感情が手に取るように分かった。嘗て力を唯求めていた自身に重なるところがあつたから……。刹那の目には自身を責める色が見えたから……。だがそれはある意味危険だ。大事な者を守る為に懸命になる余り、大事な者の気持ち疎かにし兼ねない。だから横島は刹那がそうならない様に、心にそれを分からせるように噛み砕いて言った。

「刹那、貴女は今大事な者を守れなかったことを悔やんでいる。そして今度こそ守れるようにと力を求めている。……そうよね？」

「うん、うち守りたい！このちゃん守れるようになりたい！」

「その気持ちは大事よ？心の底からそれを願う気持ちがあるなら貴女は強く成れるわ。……でもね？それだけじゃあ駄目よ」

「え？」

「力だけを求めるのは危険なことよ？それは時として守るべきものまで傷つけてしまうから……」

「う、うちがこのちゃんを？」

「刀に鞘があるように、手に入れた力を治める強くしなやかな心が必要なの。木乃香ちゃんの体を守るだけじゃなく心も守れるようにね？」

「このちゃんの心……」

「唯修行すれば強くなるわけではないのよ。自分の心も強くして友達と遊んで心に余裕を持たせないと……本当に大事な時に力を発揮することなんて出来ないわ」

「修行に集中してこのちゃんのことを置き去りにしちゃ、駄目ということですか？」

「分かっているじゃない。そうよ、何事もバランスよくすることが大事なの。……人は一人じゃ生きていけないのと同じように一人で

出来ることも限られているわ」

「せつちゃん。うちもせつちゃんのこと守りたい！一人にしちゃだ！」

「このちゃん……」

「ね？刹那はいっぱい遊んで勉強して自分の身の丈にあつた強さを身につけたらいいのよ。それでも駄目な時は私たち大人が何とかするから……でしょ？詠春」

どうやら刹那もそして木乃香も大事なことに気付いたようなので、安心な横島であつた。

後ろに控えていた詠春にも同意を取り、彼にも覚悟を促す。

「ええ、先ほど不甲斐ない様相を晒した私が言えることではないかもしれませんが、大人の領分は我々が成します。全てを背負うなんて事はしなくともいいですよ」

「はい！」

「木乃香にも教えるべきことは沢山あります。二人で頑張るように、私も君達に負けないうよう頑張りますから」

「うん！」

こうして横島たちはなし崩し的に関西呪術協会の元で修行することが決定した。

もとより横島に今出来ることは情報の収集とこの世界での足がかりを作ることぐらいである。

ここにいればその両方が上手く手に入るはずなので留まることにした。

「それじゃあ、なし崩し的になつちゃったけど……詠春？私と刹那の両名、貴方の所にご厄介になつてもいいかしら？」

「此方から御願したいぐらいです。色々不足している私をご指導

していただけたら……と思っていましたし」

「それは構わないわ。……刹那にも落ち着いた場所でのんびりさせてあげたかったし、あの子自分を庇ってくれていた親を殺されたばかりなのよ」

「!?!?……そういえば刹那君は貴女の事を姉様と呼んでいましたが……」

横島はとりあえず今後のためにも少しばかり事情を説明することにした。

今の詠春は少し心持たないが、それも鍛えればいいこと。

とりあえずエヴァほどではないが絆を確保しておく必要があるだろう。

これから激動を迎える子ども達のためにも……。

「……………これから少しばかり、私のことを話すわ」

「貴女のことですか？」

「ええ、事情があつて今は余り話せないけどね？ 貴方も世界に名を馳せた一角の者。知っておいて貰ったほうがいいでしょう」

「……………何かが起こるといふことですか？」

横島の口ぶりからある程度の事を察した詠春が確認を取る。

それに頷き、ナギの記憶と事前情報、そしてこの目で確かめてきた魔法界の現状から自身が予測したことを交えて語ることにした。

「今この世界は変換期に向けて動き出そうとしているわ。先の大戦の残り火が再び業火になるために力を蓄えながらね？」

「先の大戦の残り火……ッ!? ま、まさかあの組織が復活すると？」

「ええ、【完全なる世界】の幹部の一人。アーウェルリンクスが暗躍している。どの程度まで盛り返すかまでは判断が付かないけどね」

「……ッ！残党が未だ残っている可能性は考えていましたが、まさか幹部が残っていたようとは……」

「彼らは人ではないからね……一種の端末のようなものと私は判断している」

ナギの記憶を見た横島でもまだ確実には理解できていなかったが、少なくとも彼らが人間以上に純粋な霊的存在であることは判明していた。

おそらくその存在の核を完全に消滅させるか、封印するかしないといくらでも復活すると思っっている。

「端末ですか？確かに人間味の薄いものたちでしたが……」

「まあ、それはともかく。私もそれだけならこうやって表には出てこなかったわよ。こう言っただけなのだけ……、その程度は貴方達で対処してもらわなくちゃいけないからね」

「？【完全なる世界】は問題がないと？」

「いいえ？あれも大概反則的な者たちではあるけど……、ある意味必然的なものでもあるからね。この世界のあり方からすれば……の話だけ」

「……？よく分からないのですけど？」

横島は詠春の疑問を受けて苦笑した。

たまに横島は外の観念で物事を判断し話してしまうので詠春の疑問も当然なのだから……。

だからといって此方の事情をつぶさに説明するわけにも行かない。

「ごめんなさい。色々端折っているから理解できないのも無理ないわ。余り気にしないで」

「それはそれで気になるのですが……。まあ、貴女の事情もあるのでしょうから今は聞かないでおきます」

「感謝するわ。――――それで、さっきの続きだけど。問題はそれだけじゃないから私が表に出てきたの」

「【完全なる世界】以外の問題ですか？」

「ええ、あれ以上の問題よ。今この世界には本来起こりえないことが起きているわ。さっきの鬼神の件もそうだけど……」

「あ、あれがですか？」

先ほど大岩で感じた異質な力――――おそらくこの世界に侵入した異形の物だろうが、それはこの世界のものでは対処できないものだ。

何せこの世界の理から外れているものだからだ。

横島やそれに連なるものならば対処可能だろうが、少なくともこの世界の者達ではそれ以前に力の大きさを既に対処不可能だ。

「今のアレは世界の理から外れているものだ。詠春たちのように気や魔力だけでは対処不可能な存在だからね。だから私が来た」

「世界の理から……、――――ツ！！！？ま、まままさか。貴女さまはあ？！」

「くすつ。それ以上は言っちゃだめよ？余り口外するべきものではないからね？」

「?!?!?!?」コクツ！コクツ！

目を見開きコクコクと首を振る詠春に横島は再度微笑んだ。

どうでもいいが、横島のそれは既に女の仕草そのものである。いいのか、主人公？！

何とか落ち着きを取り戻し、再度口を開いた詠春だが、口調を元に戻すように駄目だしを出され凹んだ詠春であった。

「ともかく、この世界は今後生まれてくるナギの子どもを中心とし



て動いていくはずよ。それがどういう方向性かはともかく……」

「ナギの子ども……ですか？」

「ええ、時期的なことまでは把握してはいないけど……暫らくするとナギは姿を消すわ」

「なっ?! どういうことですか?!」

「ある程度の読みはしているけど、確実ではないからね。……なれば次にこの世界の求心力になりうるのはその子供でしょう。愚かしくもね？」

「愚か……ですか？」

「英雄の子は英雄なんて考える者は屑よ？ 子供は子供……とは言えこの世界の今のあり方ではそれを覆すのは困難でしょうけどね？」

「……偉大なる魔法使いですか」

「そ、正義なんて物は語るものでも目指す物でもないわ。……土台からして矛盾しているんだから言っても無意味でしょうけどね」

「では？」

「ええ、その子は麻帆良へと行くはず。そして貴方の子や刹那なんかと激動へと巻き込まれるでしょうね」

「（流石……神に連なるお人だ。此処まで世界の行く末を見通せるとは……）」

「！詠春？ 出来れば心のうちでも出来るだけ考えないようにしてね？ 今のは意識が此方に向いていたから注意できたけど……世界には読心者もいるのだから」

「?! も、申し訳ありません！」

横島は謝り通しな詠春を見ながら、これはかなりきつめに鍛え直さないといけないかあと思っていた。

そんなことを思いつつ傍の川原で濡れた体を拭き終わり詠春の持ってきた服に着替え終えた二人の子どもに視線を移した。

二人はお互いの髪を整えておりその様は微笑ましさを感じさせた。

「まあ、なんにせよだ。子ども達が平和に暮らす為にも己が身を鍛える事を疎かにするのは愚かの極みだ。戦闘者なら尚のこと……な？」

「……はい。それは痛いほど思い知りました。貴女の間が赦す限りその教えを出来る限り吸収したいと思います」

「……ふむ、ならば彼女にその役は任せようかな？正直手はいくらあつても足りないからな……」

「どなたかお知り合いが？」

「私の眷属よ……名を【白蛇姫】って言ってね？結構邪法にも精通しているから貴方のその真つ直ぐすぎる剣も鍛え直せるでしょう。」

「……少しばかり厳しいでしょうけどね？」

「あ、あの……。貴女が目を逸らさなければいけない程なのですか？その方は？」

「ま、まあ死にはしないわよ、うん」

横島は【白蛇姫】……嘗てメドーサと名乗っていたころの彼女を思つて少し心配になったが、これも未来の子供たちの為と思つて目を瞑つた。

詠春は見事に煤けていたが……。

「ちなみにナギの子供が生まれて少し経つたらそつちに行くから刹那の事は頼むわよ？それまでは私が面倒見るけどね」

「……それは彼女が寂しがるでしょうね。随分と懐いておられるようですよ……木乃香にしても」

「まあ私としては嬉しいけど、出来ればあの二人にはお互いを支えあう関係を深めて欲しいからね。相性もいいみたいだし……」

「確かに、見ていて微笑ましいですね。……木乃香のあのような顔を見るのも久しぶりです。随分と寂しい思いをさせてきたようですね、私は……」

「これからは私が出来る限り遊びも修行も見てあげるから貴方は死

なないように頑張りなさい、ね」

「はい！……つて、ええ？！」

詠春は聞き逃せない事を横島の言葉に聞いたが確認する前に彼女は子供たちのほうに歩み寄っていった。

詠春が黄昏している間、横島は子供たちと遊んでいたのだった。

翌日、詠春は木乃香に裏の世界のことを話した。

さすがに血塗れた事は出来るだけ省いたが、それでも伝えなければならぬ大切なことは告げた。

木乃香は流石にまだ幼いので完全には理解できなかったが、傍にいる刹那や自分を優しく抱きしめてくれる横島と共に歩むため頑張ることを誓った。

何よりはじめて出来た友達が自分を守るために必死になっているのだ。

ならば自分も必死にならなければ……！そんな気持ちで胸をいっぱいにする木乃香だった。

「二人にはまず基本となる体を作ってもらおう。それと平行して物事の仕組みや何が自分にあつたものなのかを理解してもらおう……。焦ることはないから一歩ずつ頑張っていこう！」

『はい！』

二人にはとりあえず準備運動をしてもらうことにして詠春の所へといつた。

如来像が鎮座する祭壇がある道場で一人、詠春は座禅を組んでいた。襖を開け入ってきた私に気付くところらに向き直り姿勢を正した。

「さて、精神を落ち着けることは出来たようね？それじゃあ【白蛇姫】を呼ぶから少し待っていてね」

黙って頷く詠春を一瞥するとこの世界に来て始めてする眷属召喚の祝詞を唱えた。

『我は天を支える者。我は地を抱く者。我は神魔の括り無き者。陰陽を収め太極を翳す者なり。汝龍に連なりし白蛇の姫よ、我が召喚に応え顕われいでよ!』

祝詞を捧げ彼女が顕現する為の力場を創ると其処に眩いばかりの光が溢れ出した。

その光から生まれるのは、紫がかった銀色の髪を腰の辺りまで伸ばし青い瞳を輝かせた美少女だった。

もともと姿は子供だがその身から発せられるオーラは神聖なものだった。

「おや？久方ぶりの召喚と思いきや随分と変わった格好をしているわね、横島？そういう趣味に目覚めたのかい？」

「違うわよ！世界の制約でこうなってしまっただけ！罷り間違っても趣味なんかじゃない!！」

「……その割には随分と様になっているようだけど？」

「しょうがないでしょ！精神は肉体に引き摺られてしまうのだから

……、私だって早く戻りたいわよ！ブツブツ……」

「わ、悪かったよ。……それで用件は？」

自分でも気付かないうちはかなり染まっている事に気付いた為だろう、横島はしゃがみ込んであっちの世界に逃避してしまった。

陰鬱なその空気に流石に引きが入った白蛇姫は宥め謝った。

何とか復帰した横島は白蛇姫と同じく引きが入っていた詠春を示して説明した。

「今回はちょっと面倒なことになっていてね。その予防策の一環としてこつちにいる詠春を鍛え直そうと思うの。この人どうも小竜姫に似ていてね。」

「……なるほど、正道一辺倒って訳かい。それで私を呼んだって事ね。」

「そ、随分と鈍っているみたいだし腕はそれほど悪くはないんだけどね。私は他にも面倒見ないといけない子もいるしやらなきゃいけないことも多いから……。」

「相変わらずだね。人には他人に頼れって言うのに自分は背負い込むだけなんだから。そんなんじゃないか潰れちまうよ?。」

白蛇姫は変わらぬ主の様相に心配しながらも釘をさした。

彼女にとつて横島は恩人であり他の何より優先する者なのだから当たり前かもしれないが……。

「くすつ……心配しなくてもいざとなったら貴女達に癒してもらおうわよ。早々潰れるつもりもないしね?。」

「……………ゴホン!ま、まあ分っているのならいいのよ。」

……………それで期限と精度はどれくらいだい?。」

「……………今から少なくとも5年後まで、精度は可能な限り。壊さないようにね……………信じているけど。」

「OK!なるべく壊さないようにぎりぎりまで追い込む感じで作るよ!。」

「頼むわよ?貴女自身も出張る可能性があるぐらいだからね?。」

「……………ッ!了解。貴女の眷属として恥じない成果を挙げてみせるよ。」

告げられた言葉に彼女は改めて気を引き締めた。

今の横島が形振り構わず自分に助勢を頼むかもしれないという事実はそれだけ衝撃だった。

一方、詠春の方は交わされる言葉に顔面蒼白の体だった。覚悟は決めても心を引き締めても限度というものがあると改めて気付かされたのだった。

「さて、詠春。改めて紹介するけどこの子が白蛇姫。主に刺叉を使った高速戦闘が得意で、強さ的には前挙げた例で言うところ大体3万ぐらいかしら」

「……ッ！そ、そうですか。これからこの方に師事すればよろしいのですね？」

「そうよ。無論下をきちんと押さえる努力をなした上で……よ……例えいつか爆発するとしてもやったかやらないかでは物言いが全く違うからね？」

「はい、肝に免じておきます」

「子供たちの方はちゃんと別の護衛を付けておくから忙しくて構ってあげられない事はきちんと謝罪しておきなさいよ？」

「分かりました。何から何まですみません」

「別にいいわ、これぐらいはね。貴方がきちんと成果を挙げてくれれば文句はないわ」

横島はそういつと白蛇姫にとりあえずどの程度か試して詠春に目指す高みを教えるように指示するとその場を後にした。

ちなみに詠春は横島が去ってこちらを向いた白蛇姫の顔を見て思ったことを後にこう言った。

「アレは蛙を前に涎を垂らした大蛇だったと……」。

後ろのほうで悲鳴が聞こえた気がしたが横島は気にせず子供たちの元へと向かった。

準備体操をしていた場所に戻ると二人は…… おそらく体を

冷やさないようにだろう

走り込みをしていた。

幼いながらによく考えているなと感心する横島だった。

二人は横島に気が付くところちに駆けてきた。

「どうやら二人とも自分のすべきことを自分なりに考えて行っていたみたいね。偉いわよ」

横島に褒められた二人は頬を紅潮させた。

「さて、これで体の準備は整ったわけだけど……貴女たちには三つの力を修めてもらいます」

横島は自身が考えていたことを話した。

この世界にも人が気付いていないだけで霊力はきちんと存在する。

そしてこれから出会う敵には気や魔力だけでは対処できない可能性もある。

何より霊力を扱えるようになれば気も魔力も飛躍的に高まる。

これは霊力が魂から生まれるゆえの効果だ。

霊力を鍛えるということは魂を鍛えることに等しい。

魂の波動が強まれば自然と内から生む気の量も外から引き寄せる魔力の質も格段に上がるのは当然の帰結である。

「三つの力、すなわち気と魔力そして霊力です。通常この世界では体の内から生み出す気と自然から引き寄せ行使する魔力を鍛えます」

もとより神族の存在が確認されていない世界。

魔族の力の源でもある魔力はともかく、神霊力の劣化版とも言える霊力が発現しないのも当然かもしれない。

「然し貴女たちにはそれに加え魂から生み出す霊力も扱えるように

なつてもらいます。これを自在に扱えるようになれば他の二つが飛躍的に強くなります」

霊力を扱えるようにするのは何も他の二つの力の強化だけが目的ではない。

霊力が備える特性が一番の目的だ。

「霊力には先にあげた効果の他にも注目すべき特性があります。それは個人特有の特殊能力の開眼です」

「おー、霊力つて凄いなー」

「それつて姉様も持っていますのですか？」

二人が性格の現れた答えを返す。

木乃香は単純に驚き、刹那は更にどういふものが聞いてくる。

「もちろん持つているわよ？まあ、それは貴女たちが開眼した時に教えてあげるわ。さて、特性というからには物によっては複数現れることもあります」

たとえば自分のように収束が特性の場合は霊波刀や文珠というように……。

「貴女たちの特性が何かはまだわかりませんが、そもそも霊力の開眼はかなり厳しくその成長も緩やかです。ですから霊力の修行は毎日欠かさず決められた量だけ実行するようにします」

自分のように命がけの修行はさせるわけにもいかない。

とりあえず霊力に関しては常に負荷を掛けて発現し易い状態に持っていくことから始めることにする。



「だから基本は気や魔力の修行を中心に行い霊力は平行して鍛えます。……それじゃあ、二人ともまっすぐに立つてくれる？」

『はい！』

横島は二人を立たせその両腕と両足に霊力負荷の呪を施す。

当然いきなり強力なものは施さない。

精々常に動きに抵抗が少し掛かる程度だ。

ちなみにこれは体が慣れてくると自然に増量されるようになっていく。

「うっ、少しからだが重い感じが……」

「ほんとやっ、動きづらさを感じるわっ」

「それが負荷の掛かった状態よ。しばらくは辛いかもしれないけど我慢するように。霊力が発現するまではその状態で過ごしてもらおうから」

『はい』

初めて感じる違和感に四苦八苦しているのだろう、かなり辛そうだが言わなくてはならないことはまだあるのでとりあえず座ってもらうことにする。

「さて、霊力のことはこれぐらいで……次のあなた達が目指す未来の自分というものを考えるとうましよう」

「未来の自分……ですか？」

「そう、あなた達はこれから修行するわけだけど……どういう存在になるか、どういうことが出来るものになるかを決めておくことは大事よ？」

自身から己の可能性を狭めるのは愚かなことだが、だからといって何でもかんでも試せばいいというものでもない。

ある程度の得手不得手は特定できるし、体に合ったものというのは案外分かりやすいものだ。

「たとえば木乃香、貴女はその身に膨大な力を宿しているわ。貴女はその力を狙って来る者から身を守らなくてはならないけど運動は得意ではないでしょう?」

「うん、うち走るのは嫌いじゃないけどのんびりする方が好きやえ」

「これだけでもある程度は決められるわよね?たとえば前に出るのじゃなくて後ろで味方を守る結果を張ったり傷を癒したりする方が木乃香には合っているのが理解できると思う」

「確かにこのちゃんにはそのほうが合っているし安全ですね」

「逆に刹那は体力もあるし空も飛べる、気の量も見る感じそれなりにあるわ。つまり前に出て戦う直接戦闘型が合っているでしょうね。」

「……もつともそれに括る必要はないけど」

「このちゃんの前で私が守って、このちゃんは私の後ろで傷を癒したり守りを固めたりするのが基本になりますか?」

「セツちゃんと一緒やったら怖いもんなんてないよ」

「さつきも言っただけどあくまで基本ね?たとえばそれ以外にも木乃香が式神って言うものを操って自分を守って刹那は自在に動き回るとかね?型を嵌め込み過ぎるのだけはやめなさい」

『はい!』

とりあえず一気に言っても理解できなくては意味がないので此処までとした。

今日の残りの時間はどのようなものが存在しどのような術などがあるかを勉強することにするでしょう。

時間は過ぎ夕餉の時間となった。

本日長の家には他に誰もいないので横島が準備することにした。

料理はこれまでの経験でそれなり以上に出来るようになってきているので問題ない。

詠春はどうやら未だ扱われている様なので先に食すことにした。ちなみに夕餉は好評だった。

現在三人でお風呂に入っている。

.....ちなみに男のアレは見えないように術で隠してある。

「は、夕ご飯おいしかったな。精進料理なんて始めてたべたわ」「そうやね。姉様は本当に何でも出来て凄いです！」

「そう？貴女たちより長生きしているから出来るだけよ？そのうち時間があれば教えてあげるわよ。女は料理が出来るだけで一つの武器になるからね」

「それは楽しみやな。……それにしても姉さまの肌むっちゃきれくや、胸も大きいな」

「ちょ、木乃香。止めなさい、胸を揉まないで！」

「あわわわ、こ、このちゃん。あかんで、そないなことしたら」

急に後ろに回ったかと思うと横島の胸を揉みだした木乃香。

刹那は真っ赤になりながらも止めるように注意する。

横島は言っても止めない木乃香の頭を叩き向かい合って抱き上げるとお尻を叩く。

「おいたする子には罰を与えます。お尻叩きの刑で身をもって思い知りなさい」

「あ、ん、かんにんして、なあ。ひゃ！いたいよ」

「あわわわ」

十回ほど叩いて下ろすと木乃香は刹那の後ろに逃げた。

まるで盾にされた気分になった刹那は何ともいえない気持ちになっ

た。

「これに懲りたらさっきのようなことはしないこと!……ふ〜、もう怒ってないからこっちに来なさい。髪を洗ってあげるから」

「ほんま?」

「本当よ。さ、いらっしやい」

「うん!」

こうしてお風呂を上がり居間で寛ぐために行った先にいたのはすっかり寛いでいる白蛇姫とぼろぼろになつて虚ろな視線を彷徨わせている詠春だった。

横島は彼女にお風呂へ行くように促すと残った詠春に話しかけた。

「ふふふ、だいぶ参っているようね?初日からそれじゃこれから持たないわよ?」

「うう……死ぬかと思いましたが。まるで消えるように動くので捕らえることすら出来ませんでした」

「!へ〜、超加速も使ったんだ。なら見込みはありと見られたかもね?」

「超加速ですか?」

「そ、時間を止めて己のみ加速する技よ。本来は韋駄天族のみに扱える技なんだけどね?」

「じ、時間を止めるですか?!む、無茶苦茶だ」

余りに理不尽な存在に詠春は再度あつちの世界に逝ってしまった。傍にいた二人はよく分かっているようだったが、刹那が先ほどの女性が誰なのかを聞いてきた。

とりあえず自分の家族の一人と説明し、ついでだから二人の護衛も紹介することにした。

「刹那に木乃香。二人に紹介する子がいるからちよつと待っていてね」

『?』

『我は天を支える者。我は地を抱く者。我は神魔の括り無き者。陰陽を収め太極を翳す者なり。汝久しく愛すべき者久遠よ、我が召喚に応え顕われいでよ!』

横島の呼びかけに応え現るは一匹の狐。

狐は横島を見上げるとくうんと一鳴きし人型に変身した。

「主様?……今は女?また変装?」

「違つよ、世界の制約で女になつていているんだ。久しぶりだね、久遠。呼んだのは他でもない君の力を借りたいからなんだ」

「うん、わかつた。主様のお願ひなら何でも聞くよ。だからまた遊んでね?」

「ああ、しばらくは一緒にいられるよ。私が居ない時はこの二人を守つて欲しいんだ」

突然の狐の登場や人に変身したことに驚いた二人だったが、その余りの可愛さに直ぐ駆け寄つて抱きついたりその尻尾を撫でたりした。その久遠はというと、もうこういふ扱いに離れたのかジツとしている。

横島はそんな三人の様子を微笑みながら眺めていた。

「それじゃあ、クーちゃんはもう300年は生きているんだ」

「うん、主様と会つて崇りに取り付かれていたのを助けてもらったの。それからずっと一緒なの」

「ちなみに久遠は大人にも成れるよ?力を大量に消費するから滅多にしないけどね?」

「へへ、すごい!あつ、クーちゃん好物は何?」

「え〜と、油揚げと大福と甘酒？」

「じゃあ、明日は久遠の好物で朝餉を用意するとしますか」

「うん？」

こうしてその日は幕を閉じた。

なお、詠春は翌朝まで呆然としており翌日は寝不足で散々な目にあつたらしい。

翌日から刹那と木乃香は運動に勉強に遊びに一生懸命取り組んだ。

たまに紛れ込み木乃香を浚おうとする愚か共もいたが横島や久遠に完封無きまでに滅せられた。

お蔭でいつからかそんな輩も現れなくなり、より一層濃い時間を過ごすこととなった。

そして1年の時が過ぎようとする頃、ようやく二人の霊力が発現した。

それ以後もその特性を生かす方向で厳しい鍛錬は苛烈を極めていった。

詠春も2年になる頃には何とか様になってきたようで一安心したものだ。

ちなみにナギが近くに滞在している時は詠春もナギも誤魔化し鉢合わせないようにした。

そして運命の五年目、1996年……。

その日も朝から鍛錬をしていた。

既に木乃香は7歳の若さで玄武の守護獣を従えており霊力を練った癒しの祝詞も重傷者を軽傷程度まで癒せるようになっていた。

今は更なる守護獣の獲得と結界術の習得に挑戦している。

ちなみに霊力の特性は癒しであった。

刹那は私なりに改良した退魔と対人両方に対抗できる神鳴流剣術を

修めつつある。

既にくつつかの奥義と霊力の特性　刹那は風の性質を備えていた……を絡めた刹那オリジナルの剣技を開発しつつある。

二人の成長は早くそれでいて互いを気遣い心に余裕を持つことにも成功している。

勉学のほうも既に小学校卒業程度のものは修めている。

詠春はそれを知り負けてられないと組織改善に精を出している。

相変わらず世界を覆う暗雲は徐々に広がりつつあるようだが、此方も黙っているわけにはいかない。

だからこそ3年前、ナギが行方不明になったという噂を聞いておそろく翌年当たりに子どもが生まれているはずと当たりをつけた。

噂が流れ後継者が生まれていないと判断されれば子どもに目が向く危険性が減るからだ……。

もともと元老院当たりは把握しているかもしれないが……。

そして今年で子供も三歳。

そろそろ自我が発達して自ら行動を起こす時期だ。

私も向こうに行かなければならぬだろう。

「刹那に木乃香。大事な話があります。こちらに来てください」  
『はい』

ちなみに現在この二人だけは私が男であることを知っています。

……主に私の油断でアレを隠し損ねたのが原因  
ですが……（汗）

もともと何故かそれから更に私にまとわりつくようになったのは疑問ですけど……。

「何ですかお師匠？」

「大事な話って何？」

「私は今日から外国に行かなければいけないことになりました。前に話した英雄の子を見守る為に」

「!？」

「久遠や白蛇姫にはこのまま此方で貴女達や詠春を見守るようになっていますが……」

刹那も木乃香も驚き目を見開いた後俯いて震え始めた。

……女の子の涙は苦手なんだけどな。

「貴女達の成長を麻帆良に行くまで見守れないのは残念ですが……、変わらず精進して再会した時私を驚かせてくださいね？あと、向こうに行ったら彼女たちによろしく」

「姉様」

「姉さま」

抱きついてくる二人を抱き返しながらしばらくジツとしていた。二人なら大丈夫……、そう信じて。

その後、空元気ながらも精一杯の笑顔で送り出してくれたことには胸が締め付けられる思いだった。

次に行く先イギリスのウエールズ。

そこで待ち受ける英雄の残した子は一体如何なる存在か……。

横島は思いを馳せながらも離陸した飛行機の中で眠りについた。



？～クロス編～ネギま！（後書き）

黒歴史です。

突っ込みはご勘弁を。

ちなみに以降のプロットは以下ようになります。

ウェールズ編

ウェールズに着く唯魅、しかしそこで待っていたのは地獄だった。辺りを覆いつくす悪魔の群れ。

魔法使い達の魔法を食し魔法使い達を喰う悪魔達。

我に帰った唯魅が応戦するも助けられたのは一人の少女のみ。

そして少女を慰めている所へと飛来する三つの影。

一つは半身を闇に染めた白髪の少年。

一つは全身を返り血に染め薄く笑う嘗ての英雄・ナギ＝スプリングフィールド。

一つはそんなナギに抱かれた闇に覆われし少年。

少女はその抱かれた少年を見てネギツ！？と、叫び取り戻す為に駆け寄ろうとする。

しかし一歩遅く彼らは空へと消え去った。

日本編

悲嘆に暮れる少女・ネカネを連れ、詠春の元へと舞い戻った唯魅。事情を話し、予想を遥かに上回っている事を告げる。

……魔法界が既に例の寄生体に犯されつくしていることを。

唯魅は麻帆良へとネカネ・刹那・木乃香を連れて行くことにした。少なくとも世界樹を守り通さねばこの世界が終わりがねないと判断したからだ。

麻帆良に着き近衛門と会話。

魔法界の異変、及び復活しかけていた【完全なる世界】の黒幕すら

傀儡になった事を告げる。  
かくして麻帆良に世界防衛線が引かれることとなった。

……うん、無理が有り過ぎますね。

二話を書いて改めてプロットを考えていたら何故かこうなっていました。

当初はもっとほのぼのとした学園物を書こうと思ったんですが……

Orz

ちなみにこのよこっちは幾つかの異世界を旅した後のよこっちです。  
考えているのは、

とらいあんぐるハート3 IN リリカルなのはA's……久遠とざか  
らと闇の書の闇を眷属に

戦女神(VERITA)……エヴリーヌと契約を結びカファールと  
ミストラルを眷属に

の二つのみでした。

あと、白蛇姫ことメドーサが何故居たかという楔の任についた後、  
ふとした切欠で復活。

予めメドーサの原罪を調べ終えていたよこっちはそれを晴らしあり  
のままの彼女を受け入れる事で和解し眷族となった……ということ  
です。

なんにしてもこれは黒歴史の烙印を押したのでまた練り直してい  
か書きたいものです。

それでは、長くなりましたが次回更新でお会いしましょう。

7 / 1 2 1 : 3 0 ちょびっと修正(気になったもので)

## 序章 未来からの贈り物（前書き）

前話、刹那の愛の反逆の続編です。

これの前にも幾つか話があるのですが纏まりがつかないのでこちらを先に投稿します。

此処からTS?要素が混じるのでご注意ください。  
それではどうぞ。

## 序章 未来からの贈り物

横島忠夫、5才。

大阪府在住の男の子である。

昭和60年6月24日深夜0時現在、彼は既に眠りの世界の住人であった。

誕生日を控えた彼は明日を夢見て早々に布団に入っていた。

両親にプレゼントを催促するのは忘れなかったが……。

そんな彼が眠る布団の上空に一つの光が点った。

それは決して電灯の光ではなく、人魂の類でもなかった。

光は彼の上空で輝いていたかと思うと次第に降下を始め、終には彼の胸元へと解けていった。

光源が無くなり暗闇が再び室内を満たす間際、彼の頬に一筋の雫が……走った。

SIDE 百合子

私は横島百合子。

少し前まではスーパードールなどと呼ばれていた主婦だ。

朝を迎え朝食を用意しつつ、いつもの様に息子を起こしに入った私は頭が真っ白になっていた。

事は少し遡る。

息子の部屋に入りカーテンを開け、いざ息子を起こそうとした時違和感を覚えた。

それでもとりあえず起こそうと布団を剥いで声を掛け様とした所で違和感の正体に気付いた。

なんと息子が見知らぬ女の子になっていたのだ。

一瞬の自失の後、とりあえずこの子が誰なのか確かめる為起こそうとするが其処に更なる混乱の種が芽吹く。

女の子の額に瞳が現れたのだ。

その瞳は私を捕らえ確認した後深い悲しみの色を浮かべた。私はそれに気付かず唯呆然としていたが其処に声がかかる。声の出所は少女の額の瞳であった。

「私の話をどうか聞いてもらえないだろうか、百合子殿。この状況を理解できないのは当然だが、少なくとも私は全て説明できるだけの知識がある。どうか聞いて欲しい」

「……………ツ?! え? 目が喋った?!」

「いかにも、私は心眼。我が主である横島忠夫を導き、問いに答えるもの」

「つて……………じゃ、じゃあこの女の子が忠夫だって言うの?!」

「常識的な事ではないから信じられないかもしれんが……………な? それで……………聞いてもらえるのかな?」

未だ混乱の最中に在りながらも少なくとも目の前のこの奇怪な瞳が敵ではない事だけは理解した。

胸中の不安ははまだ健在だが、なればこそ目の前の瞳には聴かなければなるまい。

「まず、私は主に取り付いているのではなく彼の内から生まれ出たものだということを理解して欲しい」

「……………つまり、あなたは何らかの要因か力を受けて忠夫の中から発生したということ?」

「うむ、その通りだ。そしてその起因は深夜に起こったことで、その発生源は約30年後の……………未来だ」

「? どういうこと……………、まさかあなたが発生した要の原因が遙か未来からタイムスリップしたというの?」

「望んだ訳ではない事なのだが……………な。私は未来においても主の補佐を担っておったが、腐った連中の謀略により死に瀕したのだ」

流石に信じ難い事だったので聞き直したのだが、当たり前前の如く肯定された。

だが、その後に続いた言葉には明確な怒り……いや、憎悪が見て取れた。

その迫力は瞳だけだというのに自身が飲み込まれそうになるほど……。

そこでふと気付いた。

この心眼というものは忠夫のことを主といった。

そして未来において腐った連中とやらによって死に瀕したという。

それはつまり今の忠夫が未来において碌な目に遭わないと言う事ではなかるうか？

「……………ねえ、心眼さん？息子は未来においてどのような目に遭うのかしら？」

ならば今成すべき事は忠夫に起こりうることを知り対処することではないだろうか。

少なくとも親ならば子を守るのが当然であり人情だ。

見れば心眼はこちらの意図に気づいたのかまっすぐこちらを見ていた。

「……………これから語ることはあくまでも未来で起こったことであり、これから進む道筋とは決して交わるものではないとだけ先に言うっておく」

「それはそれだけ未来が酷いと言う事ね？」

「否！酷いなどと言うレベルではない。……………あつてはならないことだ」

「……………あつてはならない」と

そして語られる未来での出来事。



いつの間にか部屋に入ってきていた夫の大樹が心眼に聞いた。その目は強い意思が宿っており如何なる事でも成そうという気概が伺えた。

「今の主は未来から送られてきた因子を自らに取り込んだわけだが、その因子の七割程度が女性のものだった故にその影響を強く受けてしまったのだ」

「それはルシオラさんのことかしら？」

「それと契約の時に受け取った玉藻殿の物や竜の因子に含まれていたメドーサの物も……な。記憶の継承で彼女らに深い愛を感じた故に影響を強く受けてしまったのだ」

「……ある意味、当然の結果……なのか？ 未来への絶望を感じ身近の愛した者達の気配を感じたらそれらに縋り付きたくなるだろうし……な」

「そうね……、深く……深く愛していたが故に……忠夫は彼女達の物を自分に深く刻み込んだんだろうね」

「……ちなみに、主は完全な女性ではなく可笑しな物言いだが極めて完璧な両性具有体であるぞ？」

「……最後の意地かしら？」

「俺の息子らしいといえ……そこまでか？」

なんとなく張り詰めていた空気が軽くなる。

これも忠夫の人徳かしら？

「……今主は未来の情報を魂に刻みつけ己のあり方を未来のそれに少しでも近づける為に身体構造を再構築している。後1時間もしないうちに目覚めるはずだ」

「身体構造を再構築とはどういうことなのだ？」

「未来で主はこの世界を支える最上級クラスの神魔族へと転化して



いた。……貴方達でも理解できるだろう名を上げるなら唯一神教の教主やソロモンの72柱の魔神などだ」

「なっ?!?!」

「理解していただけたか?如何に主が偉大であるか?主はそれを僅か28で成し遂げたのだ。この信仰というものが薄れつつある世界で……だ」

私たちは驚いた。

それも当然であろう。

何しろ自分の子供が世界的に有名な神やそれに等しい魔神に成るといふのだ、それも今の自分たちと同じ程度の年齢で……。

一体どれほどの苦しみや悲しみがその身に起こったのか……。おそらく先ほど聞いたこと以外にも何かあったのだらう。

「主はもとより其処までの強さを継承できるとは思ってもいなかったが、それでも出来る限りの方法で逸早く強くなれる為の準備はした」

「つまり今忠夫は人間から神魔へと変わっているというのか?」

「否、今主がしていることは未来で開拓したチャクラ……力の回路……の記録を可能な限り写し取って強靱にすることだ。さすれば自身がチャクラを開き神魔へと成った時より高みへといける」

「でも神魔になると言うことは件の上層部と関係をもつ事になるのではないの?」

私達にとって神魔になること事態は忌避してはいない。

忠夫にとって恋人が魔族や妖怪である以上永遠はそれほど忌避する事ではない筈だし、少しでも長く幸せに暮らして欲しいというのが私の願いだ。

それよりも未来において碌な事をしていない上層部との関係が気になる。

「それは心配無用だ。神魔の最高指導部も主の記憶と共にこの時代へと記憶の継承をしている。愚か者共は常に監視されることになるだろう」

「なるほど」

「それに主は今度こそ楔の任に就くことはありえない。故に接触することもまずなからう……否、師である斉天大聖様がそのような者共を近づけさせる筈がない」

「それもそうよね」

「私から貴方達に頼むのは一つ。主を手助けなさるのはよろしいが自衛を忘れない事……、主は未来で真っ先に人質にされ死んだ貴方達が傷つく事を何より恐れている」

「……我々は未来でこの子の助けとなることは出来なかったのかい？」

「……如何に人間の手の届かない高みに行こうと、親が子を助けられないということは業腹物だ……」

未来において真っ先に死んだという事実は親である私たちからしたら認められないことである。

如何に存在力の桁が違うものたちが相手だろうと感情は納得できるものではない。

「貴方達は立派に親としての責務を果たされた……少なくとも主が真に悲しみに暮れた時、真っ先に立ち上がったのは百合子殿であり大樹殿だ」

「……でもその言いようではそれまではそうでもなかったかもしれないのね？」

「……まあ、高校に上がり17に成る頃までは何処にでもいる馬鹿で煩惱が強い少年だったことは確かだが

……（汗）」

「……煩惱つて（汗）……然し17までは極普通の息子がたった10年と少しで其処までの存在に成るとは……やはり我々は愚かだったのだろうな」

「ええ、才能が開花するのには時として時間が掛かるものだけど……それでもそれまでに全く導けなかったこともまた事実……情けないわね」

「ふむ……主が後年信条の一つにしていた教えにこういう言葉がある」  
『？』

「曰く、後悔も反省も全ては事を成してから……時間は有限、成すべき事を見誤るな……という教えだ」

心眼が述べた言葉にはつとずる。

まさに自分達を叱咤する言葉であるゆえの反応だ。

情けなさに絆されて更なる愚かさにも浸る所であったのだから……。だからこそ誇りに思える自身の息子を今度こそ支えるようになるうと決起した。

例え己のプライドを捨てようと泥臭くなるうと愛すべき者を守れないようでは意味がないのだから……。

「……心眼殿。息子……いや娘か？……がこの後起こそ行動を教えてもらえないだろうか。そして我らができる事柄を進言して欲しい」

「そうね。私たちはそれなりに強かな人間だけど、それでも全てを見通せるわけでもない。今度こそ不甲斐なさが露呈するようなことがないように導いてくれないかしら」

「うむ、それでこそ主のご両親だ。私の把握していることは全て伝えよう。それで少しは改善できるはず……真に優先すべきことは主が進言するだろうが……な」

その後忠夫が覚醒するまでの僅かな時間に私たちは今後の方針を話し合った。

S I D E O U T

S I D E 忠夫

「……………」

『！忠夫（主）！』

「！母さん、父さん……………それに心眼……………そうか状況は皆理解しているんだな」

「ええ、心眼さんに全て伺ったわ……………、貴方は如何したいの？私たちは貴方の意思を尊重するわ」

「俺らに出来ることは何でもするから遠慮せずに言え。お前はお前の進みたい道を進むがいい」

「主よ。ご両親は全てを受け入れていらっしやる。遠慮なく自身の考えを実行することをお勧めする……………」

こちらを気遣いながら接する両親と心眼。

受け継いだ記憶や感情を受け入れていた自分は自然と涙を流していた。

それは未来の出来事ゆえか、はたまた今此処にいることに対しての安堵か……………自身にも分からない。

「……………俺は強くなりたい。GSになるつもりはないけど、知っていることを見過ごすつもりもない。インチキ臭いけど……………な」

「それはやはりあの連中に係わる気がないということかい？美神とかいったかしら？」

「……………直接的には……………ね。それがどういいう影響を及ぼすかまでは把握できないけど、これは確定事項だよ」

「それに付いては何も言わないさ。聞いただけでも腸煮えくり返ったからな……お前の気持ちはどれほどか想像も付かない」

心眼から事の顛末を聞いたであろう両親は揃って憤慨していた。

まあ、人が早々経験することではないのだから当然かもしれないけど……。

自分的には既に割り切っていたりする。

記憶越しだし、実際会った時どうい感情が湧き出るか想像できないけど……。

「別にあの人たちに憎しみを持っていたりしないよ。既にあの人たちは制裁を受けているし……今の彼女らは向こうとは別物だから」

「……忠夫はそれでいいのかい？あの人達が同じ過ちをしないとは限らないのだよ？下手をすればそれ以上の可能性もある」

「そうだぞ？無理に感情を抑える必要はないし、変に期待する必要もないぞ？」

「うん、本当にこれで良いんだよ。無論常識的に考えて看破できないことをするようなら介入するべきだけど……少なくとも被害を出さない為以外での介入はしないよ」

「……なるほど、神の目線に立って行動する気はないということだな？……助けられる者は救うが」

心眼の解釈を受け納得する両親。

とかく先入観があるとそれだけで判断して逆にいらぬ出来事を起こしてしまう可能性がある。

自分本位なあの家の人達が早々変わる筈はないとも思うが、だからといって近づけば早々に巻き込まれるのも必至。

何より本人が納得していることをとやかく言っても仕方がない、ということ両親は渋々納得した。

「それじゃあ他は如何するのだい？具体的な計画はどういうものにするかは決めているだろうけど……」

「今の俺には封印が5つ在る。それぞれを解けるだけの力を手に入れば開封されより強くなれるんだけど……とりあえずそれを成すことが一つ」

現在の俺には未来の太極天としての因子が5つに別たれて封印されている。

それは主にチャクラに連動しておりまずはそれを開眼することが目標となる。

前もって出来る手立てもあるだろうが、何にせよ力が要することも確かなのだ。

ちなみに第一の封印は第三チャクラまで開放すれば開封される。

「一つは玉藻の保護。態々転生を待つ必要はないからね、ある程度力を取り戻したらそれまでに封印した悪霊や悪魔を変わりに封入して隠蔽した上で助け出す」

「玉藻ちゃんと言えば、貴方を常の支えてくれた子って話だったけど」

「玉藻は金毛白面九尾の妖狐なんだ。傾国の魔物なんて呼ばれているけどそれは全て人間の愚かな行いと捏造が原因で、本来は平穩を愛する優しい子だよ」

「なるほどねえ。まあ人間のすることなんて似たりよったりか……、何時ぐらいになるんだい？」

「うーん？少なくとも第一の封印が解けるまでは無理かな？だから5年は掛かると思うよ」

既に一度開拓した因子を含む故にチャクラ開眼は早いだろうが肉体を鍛え更に玉藻の代わりになる悪霊などを集めなくてはならない。

何より警備の厳しい殺生石に気付かれずに近寄り、復活と隠蔽作業をしなくてはならないのだ。かなり難度が高いだろう。

「一つは……知識の向上かな？はつきり言って学校行っている時間を捻出すことは難しいと思うんだ。だからお袋達に鍛えて欲しい。知識の継承は不完全なものだったから」

「……………そう、やっぱり時間的に厳しいのかい？」

「少なくとも大戦時にルシオラと同レベルの強さを得ることが出来ないと感じるものがあると思う……全てを上手く纏める為には……ね」

「大戦はやっぱり起こるのかい？最高指導者たちが事を把握しているのであれば事前に手が打てるのじゃあ……」

「或いは可能だろうけど……、キーやんたちは俺の思いを優先してくれたんだ。……………ルシオラを今度こそ守りたいという思いを……恋人に成る気はないけどね」

「ルシオラさんか……。会ってみたいわね、忠夫の命の恩人に」  
「未来においては過去の世界に跳んでルシオラを助けるとい考えはなかった。それは別物のルシオラだからね。だけど今回は違う。俺はこの時代の俺をベースにしているから……」

「なるほど……。やり直しは今まで築いたものを否定する行いだからな、受け入れることは出来ないだろう。ましてやあんな選択をした後では……な」

未来において人界を救うべく己を犠牲にした死の間際、キーやんたちから持ちかけられた今回の記憶と因子の転送。

それはあの時既にあの時間軸の世界崩壊がキーやんたちには見えていたのかもしれない。

「とにかく俺が優先してなすことはそれぐらいだ。細かな介入はあるだろうけど、基本は自分を鍛えることに費やすと思う」

「……なら貴方はそれに集中しなさい。私たちが雑務を片しておいてあげるから」

母さんがそういうのを聞いて俺は少し笑った。

「?どうしたんだい?何かおかしなこと言ったかしら?」

「いや……かつて未来で奮起して自分を妙神山で鍛えていた頃にお袋に言われたことなんだ……、今の台詞」

「……そうかい……」

母さんは俺の言葉を聞くと気落ちしたように顔を歪めた。

責任感が強い母さんのことだから未来での事を悔やんでいるのだろうけど……。

俺からしたらこの上ない素晴らしい両親だったことには違いない。

「……ところで、あなた自分が女性体になっていること気付いている?」

「……?」

母さんに言われたことが理解できず首を傾げる。

鏡を見てみるか?という父さん。

俺は訳が分からずその通りにするが……姿見を見た数秒後、絶叫した。

「ななな、何じゃこりゃー?!どうしてえ……ッ?!」

「主よ、気持ち痛いほど分かるが落ち着け」

「しし心眼!どうということなんだ?!」



「主は因子の中に含まれていたルシオラ殿たちの因子を強く受けて女性体にソフトしたのだ。……ちなみに下は両性具有だぞ、両方完璧に機能する……な」

「……………」

俺はそれを聞いた瞬間意識がブラックアウトしていくのを認識した。ルシオラの影響を受けるのは嬉しいけど、こういう方面では勘弁して欲しかった……ぐすん。

S I D E O U T

「?主?」

「あゝ、気絶しているわね。これは……、仕方ないけど。でもそういう意味なのね、完璧って。確かに珍しいわねえ」

「とりあえず……こうなつては色々変えなくてはならんことも多々あるから今日は自宅会議だな。会社のこともどうにかしなくてはならんし……」

「そうね……この子の名前も変えなくちゃならないし、何がいいかしら?」

この後再び目を覚まし再度落ち込むも母から改名を提案され蛸と名乗ることにした忠夫だった。

内心、銀ちゃんや夏子に出会えなくなるのは悲しかったがそれでもそれを顔に出すことはしなかった。

己の意志を貫くために……。

唯一人心眼のみがその思いを感じ取っていた。

こうして横島忠夫……改め横島蛸の新たな挑戦が始まった。

## 序章 未来からの贈り物（後書き）

次話からT.S.？要素が更に強くなります。  
受け付けられない方はご注意を。

## 第一章 愛しき者に目覚めの儀式を（前書き）

逆行した未来横島の因子と遺志を継ぎし幼い横島忠夫改め横島瑠が  
遂に動き出します。

TS？要素が徐々に強くなっていくので注意！  
ではどうぞ。

## 第一章　愛しき者に目覚めの儀式を

未来の因子との融合から5年は瞬く間に過ぎ去っていった。

蛭は自身を鍛えることや百合子達による教育を吸収することで費やした。

それは傍から見ても苛烈極まりないので、百合子が途中で間に入って止めることがあつたぐらいである。

だが蛭はそれを良しとしなかつた。

未来を知るが故に……如何に時間がないかを理解出来てしまふのだ。心眼に諭され自分達の認識が如何に甘かつたかを理解した百合子たちは己たちも更なる高みに行くべく仕事を奮起し上り詰めていった。今や紅ユリの名もその相方大樹の名も世界に轟き、経済の救世主とまで言われている。

もつとも二人はそれに驕ることなく更なる革新を起こすべく、自分達の愛する娘の願いを叶えるべく動き出す。

それは政権にまで影響を及ぼし、まさに世界の震源へとなつていった。

蛭が10才の誕生日を迎えそうになる頃には既に横島家は首都東京へと移り住み、百合子も独自の総合会社を立ち上げていた。

蛭は現在第一の目標である第三までのチャクラの開眼を済ました所である。

その身に宿る霊力は既に100マイトを越え、大戦時の実力は超えていた。

文珠は流石に発現してはいないものの霊波刀や様々な術には目覚め小竜姫の剣術を模倣した訓練も開始している。

未来では本当に何も学んでいない状態だった故に必要と判断したものは貪欲に吸収する蛭であつた。

SIDE 心眼

本日平成2年6月24日は我が主である横島 蛍の10才の誕生日である。

そして第一の封印を解除する日でもあった。

本来必要な条件であるチャクラ開眼を済ませているのだから開封されていても可笑しくはなかったのだが一つ問題が出た。

開封時に解き放たれるオーラが強力すぎて下手に解くと辺りが壊滅してしまうのだ。

故に事前に気付いた私が内と外から開封を抑え、安全な場所に赴くことにした。

それが此処妙神山である。

現在横島家は総出で鬼門の門の前に立とうとしていた。

「此処が妙神山で、あの門に取り付いている顔と両脇に立っている体が鬼門だよ」

「何とも凄い所にある修行場だな。此処に蛍の師匠の猿神八又マン様や竜神小竜姫様がおられるのだな」

「うん、おーい鬼門！横島忠夫……改め横島蛍が尋ねてきたことを老師に伝えてちょうだい！」

主は鬼門の前に立つと老師に訪問の旨を伝えるように話しかけた。

何気に口調も矯正されている主であった。

対する鬼門は二人して驚愕していた。

まあ、その気持ちはよく分かる。

未来の記憶が過去に来ると同時に最高指導者や老師様にも未来の記憶が送られてきているのだ。

そして両者は我が主である太極天の意思を尊重すべく前もって行動を開始し、いずれここを訪れることも鬼門たちには前もって伝えられている筈だ。

もっともそれがまさか此処まで強大な力を持つ幼子で女の子だとは

思いもしなかつたゆえに驚いていたのだろう。

「あ、ああ話は聞いておる。蚩殿だったな、入られるが良い」

「？試しは受けなくても良いの？」

「その必要はなかるう。老師様から前もって伺つておるし、お主の靈圧はこの人界でも滅多に見ぬほど強力だ」

「うむ、それにそなたは我らを傷つけぬ為にわざと靈圧をあげておるのだらう？その気持ちは伝わつておるよ」

「あゝ、バレバレ？……恥ずかしいなあ」

「ふふふ、お主の気持ちは我らにとって心地良いものだ。気にすることは無い」

「それじゃ、まあ……邪魔するよ？」

『うむ、ようこそ妙神山へ。その来訪を心より歓迎する』

こうして主たちが門を抜け中に入った時待ち構えていたのは銭湯の門構えだった。

だがそれよりも遙かに驚くべきものが其処には鎮座していた。

「！？ろ、老師？！何をなさつておるんですか？！」

「横島よ、すまなかつた！謝つて済まされるようなことではないし、済まされようとも思わんが……恥知らずな我ら神魔を嫌いにならんでくれ！」

なんと老師様が土下座をしていたのである。

「……またですか？老師。以前……いや以後になるのか？まあともかく、玉藻も言っていましたよね？老師や小竜姫様は別だと。斉天大聖の名が泣きますよ？」

呆れ口調で言う主。

確かに未来の様を把握している主からすれば今更なのかもしれないが……。

「じゃが……わしら神魔の犯した罪は余りにも重く、ましてや御主はその犠牲になったのじゃぞ?! 一言の謝罪もせずに顔を拝めるほど恥知らずではないわ……今更じゃがな」

「まあ、それで老師の気が済むなら別に構いませんけど……ね。そんなことより第一の開封の儀をしたいので結界を張ってください」

「……は?」

「……は?」

余りにもあつげらかんと自分と接する主に毒気の抜かれる老師様。

そして変わらぬそのあり方にますます未来で防げなかつた事に尚更内心悔しさが募つた様である。

もつとも何時までも停滞しているような方であるはずもなく何かを決意したような表情で顔を上げ……硬直した。

何を隠そう老師様は此処で始めて主の顔を拝んだのだ。

然し目の前にあるのは記憶にあるものとは余りにもかけ離れた女子のものである……硬直もするだろう。

自失状態の老師様に乾いた笑いしか漏れない主であつたが、いつまでもこうしては話も進まないので説明することにした。

「まあ、そうなるのも当然かもしれないけど……私は真正銘横島忠夫だよ?今はルシオラたちの因子の影響で女性体になつてしまつているけどね。(……)ってどうか、さつき蛭の名を伝えて貰つた筈だよな?」

「……は!……ゴホンツ!そ、そうか。

それだけ思いが強かつたということじゃな」

「まあね……流石に最初の頃は男として絶望しかけたけど。一応男

のあれもあるし……いいやつて開き直すことにしたんだ」  
「……御主らしいのう、ふふふ」

姿は変わろうともそのあり方は微塵にも代わりがないことを知った  
老師様は改めて相互を崩した。

目の前にいる者は間違いなく横島忠夫であり太極天の意思を継ぎし  
者だと……。

なればするべきことは変わるはずもなく決意もまた変わらない。  
老師様はそう心に決めると立ち上がり我々を奥へと誘った。

「それでは始めるとするか。ご家族の方は此方に、かなり強力な波  
動が発せられるので近くに居るのは危険です」

「はい、分かりましたわ。……ところで小竜姫様は如何したのでし  
ょうか？」

「あの者はわしの語った未来での出来事を聞いて自身を鍛えなおす  
べく奥にある修行場で苦行を己に課しています」

「小竜姫様は真面目だからなあ。もう少し柔軟さを憶えればいいの  
に……」

主は小竜姫様の相変わらずさに苦笑しながらも結界の中心で座禅を  
組むと気を静めた。

周天法を行う要領で高まっていた氣勢を沈めていき、ついには無我  
の境地へと辿り着く。

「うむ、見事な無我の境地じゃ。さすがじゃの」

「度々見ていたけれど……、やっぱり凄まじいわね」

「ああ、さすが自慢の娘だ」

観客が話し合っている中、主は私に呼びかけ自身の内にある封印の  
鎖を一つはずした。



瞬間、主を中心に膨れ上がる虹色のオーラ。

太極天の施した封印が放つ強力なオーラは主の内に埋没していた因子を目覚めさせ活性化させた。

目覚めるは金色の気配。

感じる主にとって忘れがたき愛する者の波動……私にとっても得がたき盟友の波動。

放たれるは誇り高き金色の妖の鼓動。

「ふむ、玉藻の契約因子が目覚めたか」

「うん、はつきりと玉藻の気配を内に感じる。これで玉藻を殺生石から開放できるね」

「ならばついでに五行術を覚えていけ。さすれば少なからず文珠の代わりとなるぞ」

主は身から溢れる妖の気配を完全に制御の下に置くと老師様の案に乗った。

確かに今の主は霊力が強いだけの人間だ……既にその最高峰にまで上り詰めようとしているが。

気配遮断や霊力隠蔽に優れているとはいえそれだけで万全であるとは言いがたい。

継承の際に受け継がれたのは私に元々備わっていた知識と未来の大きな記憶と因子のみ。

太極天としてその身に宿した能力のほぼ全ては最終の封印を解かなければ身に付けることはできない。

なればこの機会に少しでも戦術の引き出しを増やすことはとてもいい手だ。

「なら私たちは人界に戻って成すべきことをするから蛭はここでしばらく過ごしなさい。戻ってくる時には玉藻ちゃんを連れてくるのよっ」

「だな。俺達は俺達に出来ることをするからお前は老師様に鍛えてもらえ」

「……分かったよ、楽しみにしていてちょうだい。きっと気に入るからさ」

「ご息女のごことは責任を持って鍛え上げましょう。どうかご安心を……」

「はい、どうかよろしく御願いますね」

こうしてご両親は下山していった。

残った主はというと時間が惜しいとばかりに直ぐに修行に取り掛かった。

老師様が駆使する術を受けたりまたは口伝や解読を持って授けられたりしながら一つずつ確実にものにしていった。

老師様自身も未来より受け継いだ決して受け入れたくない事実を再現させない為にも、そして何より魂を賭して強くなり続ける弟子を導くべく己に活を入れた。

尚現在の主の容姿や能力は次のようになる。

横島蛭10才：現時間軸の横島忠夫に未来の太極天が己の因子を追加した状態

黒髪を背中の中ほどまで伸ばし一房にして赤いリボンで纏めている。顔の造詣はルシオラ殿と玉藻殿を足して割った感じ、目つきは柔和である。

身長：136cm

B/W/H：73/49/70

総霊力保存量：108マイト 150マイト（第一封印開封後）

チャクラ：第三チャクラ開眼

霊能力：霊波刀/霊波砲/式神操作/霊気の盾/霊気の籠手/霊視/ヒーリング/霊力隠蔽/神通足new/五行術中位レベルnew  
戦闘技術：剣術（小竜姫様の模倣）/気配遮断/格闘術（我流）

基礎能力Ⅱ 中学卒業程度の知識／家庭レベルの家事全般  
補足事項Ⅱ 外見が女性体に移行した為、作法や言葉使いを徹底的に  
矯正された（笑）

閑話休題

主は基本的な戦術は既に記憶や私の伝授で身につけている。

以前は使用できなかった霊波砲も苦心の末体得した。

今回老師様より伝授された五行術は未来では修めていなかったもの  
だ。

主の前世、高島は修めていたかもしれないが：未来においては位階  
を上げることを中心として取り組んでいたので手を付けなかったの  
だ。

「これは……手に馴染みます。特に土行術と木行術は使い易い」

「やはり前世が陰陽道を修めていただけに修得も早いとう。今御主  
が放った地龍系や樹雷系は中位の術じゃが、まさか一週間で修める  
とは」

地龍系：大地の龍脈に働き掛け様々な効果を成す

樹雷系：樹木の霊的力で大気を練り、雷を生み出して様々な効果を  
成す

「土行術と木行術が遣い良いのは御主の属性と玉藻と繋がりのお蔭  
じやろうな。玉藻は雷を扱うのも優れておったからかう」

「ああ、そういうことか……。ふむ、玉藻を開放する時に役立つの  
は金行術と土行術かな？」

「……横島よ。これを持っていくが良い」

当然のことだが主の玉藻殿を救うという意志は強く、細微に亘り自  
身の成せる限りのことを尽くそうとする様は見えていて微笑ましいも

のだった。

老師様はそんな主を見つつ記憶を継承してから考えてきたことの一つを成すべく主にとんでもないものを渡した。

「？これは……宝貝？……ッ！？ま、まさか対極図ですかっ！」

「うむ、如何にもじゃ……太上老君殿に御主と玉藻の事を相談したらえらく気に入られての……玉藻救出に限りだが借りてこられたのじゃ」

「……はあッ……無茶しますねえ。……まあ、折角のご好意ですから有効に使わせてもらいますよ」

「返却は次に来訪した時でよいぞ……ただし、使用はあくまで玉藻の開放時のみじゃ」

本来仙界の宝貝は基本持ち出しを硬く禁じられている。

それはその余りにも危険な能力や効果を封じるためなのだが、今回の対極図はその中でも最高位のものだ。

一切の空間を任意に組み替えることが出来る秘宝である。

確かにこれがあれば周囲を気にせず安全に玉藻殿を開放できるだろう。

然し……、これを持ってても異常がないということは主にも仙人骨があるということか……後ほど確認しておこう。

「……これで周囲の位相をずらして……金行術で磁気の手を持って玉藻の魂に呼びかけて、土行術で龍脈の力を玉藻に供給する……と」

「今の御主の能力だと精々30分といった所じゃろうな……それ以上は対極図を展開することは不可能じゃろう」

「……という事は、前もって玉藻の意識を覚醒させて力の受け入れ状態を作ってもらわないと駄目かな？……ヒヤクメの手

は借りられないだろうし」

「残念ながら今ヒヤクメの奴は来られん……神界で最高指導者の指揮の元で行動しておるからの」

「まあ何とかしますよ。……気配遮断と霊力隠蔽で近づいて……磁伝波導の術で魂を覚醒させて……私の中の因子とシンクロさせて、それからかな？」

老師様の言葉にはきちんと答えながらも自身の考えをつぶさに検討していく主。

ヒヤクメ殿がいれば今この場からでも呼びかけ最小限の覚醒を促した上で行動を開始することも出来るが……いない以上は自分たちで何とかするしかない。

何より未来で玉藻殿が時折零していた殺生石でいた頃の孤独と苦しさを知る私たちとしては逸早く開放して差し上げたい。

それを行う上で世間の玉藻殿に対する姿勢は気に入らないにも程があるが、怒りに任せて行動しても良い結果に結び付かない事は主は勿論の事私も十分理解している。

怒りの感情は主も私も既に未来で散々漏らしてきた。

今更そんな無駄な感情の結露は必要ない。

必要なのは強くしなやかな意思のみ。

特に私はルシオラ殿の意識が現在眠っている以上主を支える最後の砦だ……感情に流されるなどということがあっていい筈がない。

……絶対！

S I D E O U T

S I D E 蛭

「玉藻を開放した上で隠蔽はどうするのじゃ？見た所替え玉は持つておらんようじゃが？」

「ええ、始めは悪霊や悪魔を封印して玉藻の波動に似せる加工をし

「た後で替え玉にしようと思ったのですけど……ね」

私は修行する傍ら替え玉となるべく悪霊たちを封印していた。だが途中で気付いたのだ、これでは駄目だと。

自分は怖がりで痛がりだ……記憶を受け継ぎある程度は緩和されたし、いざという時はそんな情けない様など晒す気など微塵もないが、自分が嫌悪することを例え相手が悪意ある者であろうとやっていい訳ない筈である。

玉藻が心底あの状態にあったことを苦痛と感じていたことを知る以上他の者に代打をさせるのは、玉藻をあの状態まで持っていかせた者達の所業となんら変わらないことである。

式神を製作して妖力を与え変わり身にしても、いずれそれに意思が宿るかもしれない。

だから私はそれらと違う方法を考えた。

力を与えた式神が意思を発現する可能性があるならそれを無くせば良い。

ただ、きちんと制御されるように固定し変に暴走することがないようになければならないが……。

つまり……

妖力を砂に与える……石は意思に繋がるのでそれを砕いた砂に付与し意思の発現を無くす。

砂を状態維持の護符でもって固定し、これを替え玉とする。

これならば変に何かを犠牲にすることはないだろう。

それを老師に伝えたら何とも言えない顔をされた。

「……………御主は、何というか……其処まで考えすぎなくとも良いじゃろうに。まあ自身の手で第二の玉藻を生むかもと思えば仕方ないことかもしれないが……」

その後老師はしばし待てと言つと奥に消え何かを持って返ってきた。

「これは無心というものじゃ。万物には如何なる物であろうと少なからず魂が宿っておる。然しこれは例外的に魂が発生せず唯の無機質であり続けるという特性を持つておる」

そう言い老師は私にそれを渡した。

それは無色透明な珠で触っていないと其処にあることすら忘れてしまいかねない物だった。

「それに妖力を籠めて状態維持の護符を撒きつければよかろう。力を与えるということは何かしら方向性を与えるものじゃからな」

「ありがとうございます、老師」

「何……構わんよ。玉藻の嬢ちゃんの為じゃ、特に大事なものでもないからの」

その後、軽く術の確認をした後昼餉を採り温泉に入って就寝となった。

事を実行するなら深夜が良いとの事だからだ。

幸い殺生石の場所は覚えている。

五行術と共に習った神通足を駆使すればそれほど時間を掛けずに辿り着けるはずである。

私は玉藻との邂逅を待ち遠しく感じながらも万全を期すべく眠りに入った。

S I D E O U T

S I D E 齊天大聖

蛭が眠りに就いて少し経った頃わしの元に小竜姫が現れた。

わしは昼餉の余韻に浸りながら彼女を出迎えた。

「老師様？もう昼餉は取られたのですか？」

「ん？小竜姫か。ふふ、横島が自ら作ってくれたので……中々味わい深いものじゃったわい、うむ」

ちなみに作ったのは和風料理で山菜と山芋の汁物をメインに竹の子ご飯を用意した。

蛭は慣れた手つきで用意し、わしと二人で美味しく食した……あれは美味かった。

「横島！？そ、それは先日仰られたあの方の事ですか?!」

「そうじゃ、親御さんたちと封印を一つ解くために訪れたのじゃ。

親御さんたちは既に下山し、本人は夜に行う玉藻の開放に向けて寝ておる……起こすでないぞ？」

「そんな〜老師様、ご訪問されていたのでしたらおよび下さってもよろしかったのに……」

「知らん。余裕を持って行動できんお主が悪い。それにその様な暇もなかったわい」

その後なれば起床時にご挨拶を……と意気込むも叶わず。

蛭は既にわしに起床後直ぐに赴くことを伝えていたので、居間で待っていた小竜姫の前に現れることなく、気づいた時には去った後であった。

「 orz 」

「（横島の奴、小竜姫に気付いておったくせに放置とは……余程早く玉藻を開放したいようじゃな。……小竜姫も哀れな）やれやれじや」

SIDE OUT



蛭は殺生石を視界に入れられる藪の中に佇んでいた。

辺りは既に暗闇で覆われていた。

殺生石の周りには少しでも妖石に力が供給されないように結界が施されていた。

もつともどれだけ結界を施そうともいずれば自然に復活するのだが……。

蛭は各所に設置された監視カメラを確認し終えてから、まず金行術の一つである意思を伝達し覚醒を促す【磁伝波導の術】を地面の地下を通して殺生石に伝えた。

地下深くまで一度潜らせ届けられた蛭の意思は見事玉藻の魂を揺さぶった。

「……………だ…れ…？私…を…起こす…のは……………」

術を通して伝わる玉藻の意思に歓喜しながらも慎重に進めていく蛭。余り強い意志を発してしまえば感知結界に引つかかる可能性があるからだ。

「私は横島蛭。貴女を解放し家族に迎え入れる者よ……………今は結界越しだから強い波動を送れないけど、了解を得れば空間の位相をずらして大地の龍脈を貴女に送り込むわ」

「……………なぜ…私を……………？貴女は……………人間……………でしょ。……………人間は……………信じ……………られない」

「私は確かに人間よ？でもね、腐った奴らと同じに思われるのは心外よ？それに……………感じられない？私から貴女の波動を……………」

「……………ツ？！な、なぜ？！……………どうして……………確かに……………感じられる」

「これは貴女と未来で交わした契約の印。私は未来から送られてき

た自分の因子と記憶を元に行動しているの……詳しく話している時間はないから、とりあえずそこから出ない？」

「……分かった。貴女からは嫌な感じ……しないし、信じる」

「よかった。それじゃ今から寶貝を使って位相をずらした後、近くで龍脈から靈気を供給するから……。今の私じゃ半刻が位相をずらしていられる限界だからちよっと急ぐけど……」

「構わないわ……、でも寶貝って……？」

「斉天大聖老師から預かってきた対極図よ」

「……ツ!? あ、貴女……一体……何者!？」

「落ち着いて……玉藻を開放して一緒に暮らしたい唯の人間よ」

「……貴女。……いいわ、貴女のやることは全て受け入れる。……だから、やってちょうだい」

「了解」

玉藻の覚悟を聞いた蛭は対極図を起動させると殺生石周辺の位相をずらした。

間を置かず気殺をし、ずらした位相へと入った。

「……シツ! 土行地龍術、送魂琉転! 大地の力よ、かの者に力を与えよ! ……受け取れ玉藻!」

そして急ぎ印を組み、龍脈を呼び寄せ殺生石に供給する。

周りに不自然な靈気の空白が出来ないように慎重に配分しながら、それでいて限界まで龍脈から靈気を送る。

20分程過ぎた頃、殺生石から玉藻が這い出てくる。

それを確認した蛭は急ぎ近寄り、懐から出した札に包まれた無心を玉藻の納まっていた殺生石に封印する。

そして作業の綻びがないのを確認すると玉藻を抱きしめ気配遮断と  
霊力隠蔽を施し速やかにその場を離れる。

元の藪まで戻ると対極図を停止させ位相を戻す。

蛭は殺生石を確認して警報や異常が出ていない事を確認するとすぐ  
さま神通足でその場を後にした。

玉藻は蛭の腕の中で安らぎを感じていた。

それはこの人間から感じる自身と同じ気配のお蔭でもあったし、見  
上げる蛭の顔に見惚れていたからでもあった。

彼女はこれまでにない心地よさの中眠りに落ちていった。

**第一章↳愛しき者に目覚めの儀式を（後書き）**

ご意見、ご感想お待ちしております。

次回は13日ぐらいを予定しております。

## 第二章↳迷い子に愛の手を？（前書き）

初投稿から10話目です。

この話は比較的早くに上がりました。

やはり好きなキャラが絡むと話も直ぐ思いつくものですねえ。

出来はともかく（涙）

ではごっご

## 第二章　迷い子に愛の手を？

玉藻開放から時は経ち翌日

横島家では朝から百合子が精力的に動いていた。

場所は台所、テーブルの上には数々の油揚げ料理が並び彼女の横では大樹が慣れない手つきで稲荷寿司を握っていた。

明朝に家に着いた蛭は百合子を起こし玉藻の為に油揚げの料理を作るように頼んだ。

百合子は直ぐ了解の意を返し、対極図を展開した為極度に消耗している蛭を休ませた。

10才という幼さで見事ことを成し遂げてきた娘に発破を掛けられた百合子と大樹は二人が起きるまでに準備すべく行動を開始した。

「一体どんな子だろうなあ、玉藻ちゃんは。俺の作った稲荷寿司美味しく食べてくれるかなあ？」

「ん〜？まあまあじゃない？……それより蛭の消耗具合が気になるわ。どうせ無茶したのでしょうか……、大丈夫かしら？」

「あいつが無茶するのは今更だろ？大丈夫かどうかは俺達の働きにもよるんじゃないか？心配するのは当然としても今はこうしてやるべきことを成さないと……な」

「……そうね、心を込めておいしく作らなきゃ駄目よね？」

料理の数々が全て整い後は二人が起きるのを待つだけとなった時、大樹が百合子に問いかけた。

「なあ、百合子。俺達は蛭の行く先を照らすべく色々やっているけど……、些か風呂敷を大きくしすぎてないか？」

「あら、そうかしら？確かにこの時間軸では未来のように世界の守

護を担う役目には就かないし、大戦も速やかに終息するだろうけど…… 必要なことよ？」

「何故だ？確かに蛭に押し掛かる宿命は半端無いが、大きすぎる力は災厄も呼び寄せざるぞ？俺らだけで済むならともかく……」

「ふふふ、分かっているわね。確かに宿命を乗り越えるだけなら過剰な力よ？でもね…… 寄生虫は何処からでも寄ってくるものよ？」

「……なるほど……あの者たち対策か」

現在、百合子と大樹はあらゆる分野でその手腕を発揮している。

経済関係はもちろんのこと…… 法律関連や果ては他国との外交などにも顔を出している。

その卓越した判断力や行動力、決断力や分け隔てない対応は世界で絶賛されている。

最早横島家は日本という島国に納まるような存在ではなかった。

「既にザンスの王族や世界GS本部とも話は付いているから、来週からはGSの規約改訂を前提にした話し合いをしてくるわ」

「……それが通ればGSのあり方も改善されるだろうな」

「ええ、地価が高騰しているからって莫大な報酬を逐一払っていたら経済はいずれ破綻するわ。そうならない為にも今から世界規模で規約を定めなきゃ！」

内容は経済の革新だが、実質美神家や六道家に対する牽制である。変に勢力を拡大されても困るので押させられる内に行動を起こしたのだ。

既に美神家に対しては最高指導者がある対策を実行済みだがそれだけでは足りないといふんでいる。

百合子と大樹が顔を突き合わせて密談紛いのことをしていると蛭と

玉藻が入ってきた。

「朝っぱらから何物騒なこと話しているのよ……、まあ色々助かるけど……無理は駄目だよ?」

「おゝ起きたか蛭。何、碌でもない奴らが力を持つよりはいいだろ? 玉藻ちゃんも大手を振って街中歩けるようになるだろうし!」

「私たちは己の力量を見誤るようなことはしないわよ? 心配してくれるのは嬉しいけど……ね? あ、玉藻ちゃんおはよう」

蛭に抱きしめられながら眠りについていた玉藻は彼女と同時に目が覚めた。

嘗てないほど落ち着いて休めた玉藻は蛭に気を許していた。

蛭は玉藻を抱き上げると油揚げの料理を用意してもらっていることを告げこうして来たのである。

「きゅん」

「あゝ、母さん。玉藻はまだ念話でしか話せないの……ま、それもこれだけの油揚げを食したら変化できるようになるだろうけど」

「あら、そうなの……だったら早速朝餉にしましょう。お腹も減っているだろうし」

「きゅん!」

「是非とも! だってさ」

「ふふふ、いっぱい食べなさい……玉藻ちゃん」

その後玉藻は蛭たちに食べさせてもらったりしながらも大量の料理を制覇した。

復活したてで極度に消耗していた玉藻だが、絶えず蛭から供給される霊力と油揚げのお蔭で朝餉の後見事変化することが出来た。

その様相は蛭と同じぐらいの背格好だった。



「お〜！美人系だな！蛭はどちらかというところ可愛い系だから二人で並ぶと一層華やかだ！」

「本当！これは腕が鳴るわ〜！絶対ファッションショーしなくちゃね！」

「……………ねえ、蛭。私どうなるの？（涙）」

「……………大丈夫、死なば諸共……………よ」

玉藻は蛭と同じ暖かな雰囲気の人たちに安心していたが、それとは別に言い知れぬ不安が巻き起こっていた。

とりあえずしばらくはおもちゃになるだろう事は間違いないみたいである……………合掌。

幾つか着せ替えをさせられて黒のワンピースに落ち着いた所で蛭が話を持ちかけた。

「それです……………、玉藻の戸籍はどうなるの？前は九重玉藻って名乗っていたんだけど」

「ん〜、どうしましょうね〜。横島性でもいいけど、玉藻ちゃんが後々如何したいかによる訳だし……………」

「ねえ、蛭？九重って何？」

「ん？……………あ、そういえばまだきちんと説明してなかったわね……………ふむ」

蛭は玉藻の問いかけで未だ説明がなされていなかった事を思い出し、少し考える。

思えば両親は心眼の説明だけだし、玉藻は触りの部分しか事のあらましを告げていない。

自身の内面に意識を向け状態を図る。

霊力も体力も既に回復済みであることは把握しているが今から成すことが可能かを確かめたのだ。

「……………心眼、お前の補助を足せば文珠を作れないか？」

「ふむ、過去を見せるのだな？……何とかならう」

「じゃ頼む」

「任せよ」

念話で心眼の確認を取った蛭は掌に意識を向け、靈力を練る。

他の者はいきなり唸りだした蛭に啞然とするも何かを成そうとしているのが分かったので静観する。

玉藻は蛭の掌に収束する莫大な靈力に驚愕するも、蛭の額に大量の汗が浮かびあがったことに心配になる。

やがて掌に視認できる程の光が現れ文珠となる。

「……………ッ！ふう、何とか出来た。……いきなりで御免ね？玉藻はもちろん、母さん達にもそろそろ見せておくべきだと思つてね……私の記憶を」

「未来の記憶かい？その珠を使えばそれが可能なんだね？」

「……………ッ！？そ、それつてもしかして文珠？」

「！」

「玉藻正解、これが私の切り札の一つだよ」

刻まれる文字は【夢】。

自分の夢の中に誘うという訳だ。

本当なら双文珠で【記憶】と刻んで上映会と行きたかったんだけど……無理なのだからしょうがない。

「今の私にはこれしか作れないから皆に私の夢の中に入れてもらうことになる。……一つだけだから未来の所要部分しか語れないだろうけど」

「構わないわ。貴女にとって未来を思い出すのはとても辛いことのはず……それで如何すればいいの？」

「手を繋いで眠るの……眠りには私が導くから……」

「ん、じゃあ其処のソファに並んで眠るとするか？」

と、言うわけで四人は夢の世界へと入っていった。

そこで語られるのは魔神大戦の概要と世界の守護者の一員となるまでの内容だった。

問答無用で感じさせられる魔神や太極天の凄さに一同は声も出せなかった。

何より訪れた蜚の深層意識の世界は5才までの区間以降は黒一色に染められた世界だった事に悲しみを感じた。

もつともその中でも自分達両親や玉藻、未来でのルシオラに関する部分は煌いていたが……逆にそれが居た堪れなかった。

救った世界に安住の地を見出せず、更なる偉業を成すも理不尽な出来事に見舞われ続ける横島忠夫。

それでも絶望を抱かず唯前を向いて突き進む彼は光り輝いていた。

……もつともそれすらもやがて駆逐されてしまうが

……。

『……………』

「ん……これが私に受け継がれた太極天・横島忠夫の記憶だよ。ダイジェスト版だったからちくはくだったけど……ね」

「何……あれ……あんな目にあつて……あんな事があつて……何で……………」

「心眼殿に概要は聞いていたが……、実際に目で見ると桁違いだな……………此処まで他人を憎く思ったのは始めてだ」

「ほんまに……ふざけた連中や……怒りを越え憎悪も越える殺意つて言うのはこういふものなんやね……………」

「――八つ裂きにしてやりたいわ」

蛭が皆にどうだったか聞く為に顔を向けるも其処にいたのは泣き腫らす玉藻と黒くなった両親だった。

だが蛭は苦笑した。

先ほどの記憶はあくまでダイジェスト版であり、それ以前の情けない自分や愚かな自分を見ていないのだ。

謂わば横島忠夫にとって都合のいい所だけ見たようなものである。だからそれを言うべく口を開こうとした蛭だがそれは百合子によって制された。

「私たちだって馬鹿ではないわ……これ以前のあなたが馬鹿で愚かだったというのも想像できる。……でもね？そんなこと関係ないわ」

「ああ、奴らが成したことが事実である以上、前提条件など関係ない。……奴らは俺らにとって許されざる敵だ」

「母さん……父さん……」

抱きついて泣きじゃくる玉藻をあやしつつ、両親の気持ちに言葉がない蛭。

閑話休題

あの後なんとも言えない空気になったので玉藻の事は後日として今日は休むことにした。

玉藻は離れなかったのもう一度同じように抱き合って寝る事にした。

翌日、百合子は決意を新たにGS規約の改定を決定させるべく世界の重役会議に出て行った。

大樹も横島家が興した会社を更なる発展に導くべく指示を出す為先

ほど出社した。

蛭と玉藻はとりあえず今後の予定を立てるべく話し合うことにする。

「ねえ、蛭。貴女が強くなる為に修行しているのは分かったけど、ある程度の流れを見直しておいた方がいいんじゃない？」

「流れ……か。確かに、玉藻みたいに予め先立って救える存在がいるなら確認しておく必要もあるし……それじゃ記憶の確認と行きましようか？」

「うん。……あの美神とか言うのと鉢合わせにならない為にも……ね（怒）」

「ははは（汗）」

蛭はとりあえずノートに美神除霊事務所に入ってから出くわした主な事件を書き留めていった。

詳細は以下の通りである。

- ? おキ又ちゃんの解放
- ? ドクターカオス襲来
- ? ブラドール伯爵
- ? 美神妙神山で力を得る忠夫の悪戯で妙神山壊滅
- ? 机妖怪愛子来襲
- ? 悪魔パイパー
- ? 悪魔ナイトメア
- ? 天竜下界へメドールサ襲来
- ? 人工幽霊番号
- ? 唐巢神父雪女にやられる
- ? 韋駄天
- ? 人造人間テレサ
- ? GS資格試験
- ? ハーピー来襲

- ? 元始風水盤
- ? 猫又親子
- ? 中世へ時間移動
- ? 貧乏神
- ? 人狼ポチの人斬り、フェンリル
- ? 鼠のネクロマンサー
- 21 死津喪比女復活
- 22 ベルゼブブ、ベリアル
- 23 平安京へ時間移動
- 24 人造魔族ガルーダ、人食い精霊グーラー
- 25 月の魔力、大気圏落下による記憶喪失
- 26 悪魔グラヴィトン展示時呪いを掛けられた美神離陸する飛行機を巻き添えにする
- 27 ザンステロ
- 28 魔神大戦

「……………と、これで全部かな？細かな事件や忘れて  
いる事もあるかもしれないけど……流れは間違っていないはずよ」  
「……なんか、とんでもないわね。これほんの僅かな時間にあった  
ことなんでしょう？」

「ま、まあ……ね。幾つかは統合できるでしょうから減るけどね」  
そういつて更に注意事項を書き込んでいく。

統合できる事や気をつけることなどを併合したのが次の通りである。

? おキ又ちゃんの解放〓死津喪比女の退治が前提〓放置すると広い  
範囲に亘り地震などによる災害や神社などが壊滅する〓死津喪比  
女はおそらく説得不能？

? ドクターカオス襲来〓後々の事を考えて味方にした方が便利〓  
但し、文珠によるボケ防止や記憶層の確保が必要〓テレサに関して

は何とかする

? ブラドール伯爵〓思考が中世で止まっているが力は強いので動き出す前に介入が必要?

? 妙神山壊滅〓自分の暴走が根本的な原因〓美神が力を得るためにズルをするので小竜姫様に注意しておく

? 愛子〓時期はハツキリしないが学校で生徒が行方不明になる〓説得して生徒にしてもらう、もしくは自分で引き取る

? 悪魔パイパー〓放置は危険、ある意味危険度は死津喪比女以上

? 悪魔ナイトメア〓夢がなければほぼ無害? 見かけたら封印しておく。六道からの依頼による美神との共同作業

? 天竜下界へメドールサ襲来〓天竜を説得し安全に行動でOK? メドールサに関しては要検討

? 人工幽霊壱号〓先の事件でメドールサによって事務所が壊滅〓ならなければ事務所は無事〓人工幽霊壱号に関しては何とかする

? 雪女〓唐巢神父がやられるレベルなので介入して説得後保護する〓介入しないと美神によって死滅する?

? 韋駄天〓自分が憑依された〓特に問題はなかった? 介入不要?

? GS資格試験〓メドールサ介入〓先の件でメドールサをどうにかしても別の魔族が介入する可能性あり? 要検討

? ハーピー〓美神美智恵登場〓子供の美神を預ける〓人口幽霊の所に来る可能性がある〓移動は絶対必要? 放置は美神が他人を巻き込む可能性がある? 要検討

? 元始風水盤〓メドールサをどうにかしても別の魔族が介入? 放置は人界の魔界化〓要検討

? 猫又親子〓直ぐにでも説得して自分で保護可能? 場所をヒヤクメに感知してもらおう〓放置は美神に退治される可能性あり?

? 中世〓マリアの指針と美神の時間移動能力で飛ばされる〓ドクターカオスが存在していて味方に行っていたら何らかの手で自然と介入?

? 貧乏神〓放置は小鳩ちゃんが永久に貧乏神に取り付かれる〓試

練は知っているので不可能〓要検討

? 人狼ポチの人斬り、フェンリル〓放置は超危険〓予め介入可能? 要検討

? 鼠のネクロマンサー〓介入不要? 〓手は足りている?

? ベルゼブブ、ベリアル〓ワルキューレが美神の護衛に就く〓ワルキューレでは退治不能? 要検討

21 平安京〓美神の前世調査の為ヒヤクメが美神と過去に飛ぶ〓自分が介入して直ぐに戻れなくなった〓介入不要? 要検討

22 人造魔族〓先手を打たないと妖怪などが犠牲になる可能性大〓要検討

23 月、記憶喪失〓月が侵略を受ける〓メドーサ以外が介入する可能性あり〓要検討

24 悪魔グラヴィトン〓介入しなければ美神によって被害が出る

25 ザンステロ〓国王陛下暗殺未遂〓下手な介入は隠れ蓑にされる〓要検討

26 魔神大戦〓ルシオラたちが行動開始前に介入

「.....纏めれば少しは減ると思ったけど.....、  
そうでもないか。要検討の物が結構あるし.....」

「メドーサって言う魔族? が結構絡んでいるけど.....どうするの?」

「.....できれば味方に引き入れたい。あいつとは結局殺し合いばかりしていたから.....元神族のあいつが何故あんな事をしていたのかも気になるし.....ね」

「まあ、そこら辺は老師とかと相談した方がいいと思うけど。.....」

とりあえず、現在出来ることは.....猫又親子ぐらい?」

「それはヒヤクメの協力がいるからあいつが戻ってきてからだね.....  
何にしても一度妙神山に行く必要があるかな? 対極図も返さないと駄目だし」

「確かに.....私たちだけでは手に負えないわよね、こんなの」

「細かな所は老師たちも把握していないだろうし.....明日にでも行



きましようか？」

「そうね。……でも、無理しちゃ駄目よ？時間がないのは分かるけど……」

心配げに此方を見詰める玉藻の頭を撫でつつ蛭は日課の鍛錬をすることにした。

夕暮れ時、玉藻と二人で夕餉を用意し帰ってきた大樹と食卓に着いた。

「蛭も料理が上手くなったな。玉藻ちゃんも結構慣れた手つきだったけど……料理は得意なのかい？」

「ううん、蛭と契約したから少しばかり未来の私の記憶が流れ込んできたお蔭。完全じゃないから要練習だけど」

「なるほど……そういえば、蛭？玉藻ちゃんとの事はどうするんだ？」

「？」

「ほら、未来じゃ二人は恋人だっただろ？今のお前は主体が女性人格だけど……男の物もあるんだし、そこら辺は如何するんだ？」

蛭は大樹のいい様に飲みかけていたお茶を吹いた。

隣では玉藻が顔を真っ赤にしている。

蛭はむせながらも、ニヤニヤしている大樹を睨みつけた。

「な、何言っているのよ！た、確かに私の魂の主人格は男のそれだし玉藻の事は愛しているけど……その、私の外見はこうだし……」

「くくく……、それこそ関係ないだろ？周りの反応なんかどうでもいい事だしな？……玉藻ちゃんは、OKの様だけど？」

「……ぼっ」

玉藻は隣で蛍の言葉に感激して惚けていた。

蛍は二人の有様に頭を抱えて唸り出し終には知恵熱でぶっ倒れた。  
玉藻はそんな蛍に慌てるが大樹は気にせず玉藻に話しかけた。

「蛍はそのままにしておきなさい。……………玉藻ちゃん、君は君の好きなように行動しなさい。二人が合意の上なら私たちは何も言わないから……………ね」

「大樹さん……………」

「ん？お義父さんって呼んでもいいんだぞ？」

「うゝ（真っ赤）」

その後、正気に返った蛍が大樹をコークスクリューパンチで昏倒させ、未だ顔を真っ赤にしている玉藻を抱えて風呂に入った。

……………何気に手遅れのような気がするが、気にしたら負けなのだろう。暖まった二人は未だ蹲っていた大樹にお休みというと就寝した。

翌日、とりあえず妙神山に籠る旨を大樹に告げると家を後にした。  
とりあえず2年ほどの予定だ。

SIDE メドーサ

私はメドーサ。

恐怖公と呼ばれているアシユタロス様に仕えている竜神族だ、元……………だが。

私は今人界のGS共を掌握するべく手下になる者たちを探している。  
既に白龍寺という寺子は押さえた。

後はより素質のある者を見つけなければ……………まあ、所詮は人間。  
雑魚であることには変わらないが……………本当に面倒くさい。

「……………とはいえ、今の手勢じゃ心もとないし……………ね。少なくとも魔装術を完璧に習得できる程度の者を手に入れないと……………ん？」

不意に感じた人間にしては強力な波動。

私は何故かそれが気になりそちらに向かうことにした。

上手くすれば良質の駒が手に入るかもしれないと思ったから……もつともそれが私の転機になるとは想像の埒外だったけど。

「確か……こつちに感じたはずだが  
- - - - - いた」

上空から見下ろす繁華街の通りにそいつはいた。

妖怪と思しき少女を連れ、自身の身に纏う力を完全に制御している少女。

先ほど感じた波動は間違いなくあの少女のものだ。

完全に御しているにも拘らず波動が感じられたことは不可解だが……

…アレほどの逸材逃がす手はないね。

私は彼女らが通りを抜け山道に向かってのを察すると人氣が無くなるまで後を着ける事にした。

S I D E O U T

S I D E 蛭

私は今凄く困惑している。

何を……後頭部に感じる熱い視線のせいなんだけど……これって絶対メドーサのものだよな。

何で？何で今ここにいるの？何で私を凝視しているの？

- - - - - まあ、おそらく私の中の自分の因子に反応したんだろっけど……、まだ封印されているはずなんだけどもな。

……っというか、初っ端から計画が破綻してるし（涙）

「蛭？如何したの？」

「あゝ、そのまま聞いてね？振り返ったり変な挙動取ったらだめよ？」

「？判ったけど……何かあったの？」

「……後ろ上空にメドーサがいるの……、しかもこつちを凝視している最中」

「?!……なんで？」

「さて……とりあえず撒くことはできないだろうし、もう憶えられただろうから逃げるわけにも行かないし……」

私の中では既に彼女を殲滅する気は欠片もない……そもそも現時点では出来ないし。

何より自分の中にある因子の持ち主なのだ、出来れば仲間になって欲しい。

でも今の自分では適わないし……、玉藻もいるから戦うわけにも行かないし……賭けに出るか？

「……玉藻？ちょっと無茶しようと思っただけど……」

後の事頼めるかしら？」

「……ッ！……ずるいじゃない、その言い方。……」

「……はあ、いいわよ。貴女に着いて行くと決めたのですもの……覚悟は出来ているわ」

「流石玉藻！いい女ね！」

「（真つ赤）ふ、ふん！当たり前でしょ！……」

「……で、どうするの？」

「……このまま山道に向かって人気のない所に行くでしょ？その後メドーサと相対して彼女を私の中に取り込む」

「いつ?!そ、そんなことできるの?!」

「かなりしんどいけど……私の中に眠っている彼女の因子を無理やり覚醒することで可能になるわ。……封印された状態だからかなり厳しいけど……ね」

「其処は我がサポートする。我が内にある因子に掛かっている枷を一時的に緩め主が引つ張りあげれば何とかなる筈だ」

「！貴方が心眼？初めて顔合わすわよね？」

「うむ、この時間軸では初めてだな…玉藻殿。我は基本的に表には出ないようにはしておるからな」

「心眼は私の思考を読めるから……口を出さなかったのも何とかできるからだよね？」

「まあな。……出来れば無茶はあまりして欲しくはないのだが、言つて聞くような御主でもないし」

愚痴をこぼす心眼に愛想笑いをしながらも目的を果たす為に人通りを避けるように進む。

できるだけ不自然にならないように気をつけながら山道に入りしばらく進んだ所で振り返る。

S I D E O U T

山道に行く二人をついていたメドーサは急に振り返った蚩達に驚いた。

その瞳は強い意志を携えメドーサを見詰めていた。

「……………ツ?!……………なるほど、まんまと誘き

寄せられたつて訳ね。人間にしてはやるじゃないか」

「始めまして、と言うべきかしら……ね。メドーサさん？」

「?!私を知っているとは……何者だい？」

相対したメドーサはまさかの事態に軽く混乱した。

誘い込まれたのも意外だったが、まさか自分を知っているとは思わなかったのだ。

……流石に人間に負けるとは考えないので表面的には平静であった

が。

「そうね……愛の狩人って名乗りましようか？」

「ぶふう！な、何言っているのよ!？」

「ふざけているのかい!？」

「別にふざけてはいないわ。貴女を手籠めにするという意味では間違っていないもの……シツポリ逝きましよう?」

「……(汗)ねえ貴女?こいつはあれかい?俗に言うレズって言うやつかい?」

「知らないわよ(汗)」

問いかけられた玉藻は同じように汗をかいていた。

若干後ずさったメドーサだったが気を取り直して仕切り直した。

「と、ともかく!中々に腕が良さそうじゃないか……私に従うなら更なる力を与えるがどうだい?」

「うーん、私はそんなものよりメドーサが欲しいわ。(そろそろやるよ?心眼用意は良い?) (此方は万全だ、主よ)」

「私が欲しかったら従うことだね……私は安くはないよ?」

「貴女が誇り高いのは分かっているわよ?……私は……私は貴女を生んだ事もあるんだから! (縮地!)」

「ムツ?!来るかい……ツ!?!こ、この気配は?!ムゲツ!」

竜の因子を強制開放し縮地で接近するとメドーサの瞳を見詰めながら接吻を咬ました。

目を白黒させるメドーサに構わず強制開放した因子を活性化させメドーサを内に誘う。

「(こ、これは………ツ?!じ、自分の中

に誘っているのかい?! 一体何のつもりで?」

「(早く入ってくれないかな? かなりきついんだけど……)」

深い接吻をしながら相手の表情を伺い合う両者。

だが暫らくするとメドーサはにやりと笑った。

「(まあ良い、何者かは知らないが……私を甘く見たつけを払ってもらおうじゃないか) - - - - - ツ!」

「(！来たっ！心眼、誘導よろしく!) (任されよ!) ゲツ!」

蛭の体内に自身の全てを侵入させたメドーサは服を残して消え去った。

蛭は心眼にメドーサの意識の誘導を頼むと自身の記憶に付随する未来の記憶とメドーサへの気持ちを強く思い浮かべた。

S I D E   メドーサ

私は今困惑している。

正体不明の自身に似た波動を出す人間が私を内へと誘ったので懲らしめ更には新生する為策に乗ったのだが……其処で見たものは信じられないものだった。

辺りに広がる記憶の映像には、私と見知らぬ男が戦っているものからアシュ様のお姿まで映っていた。

数瞬の後これが未来の記憶だと判断した私だったが、展開される記憶の映像は私に途轍もない影響を及ぼした。

「何だこれは……、アシュ様の望みが死だと? そんな…… ツ?! この男、アシュ様の後釜にツ?! - - - - - ツ! ? 私の因子を有しているって言うことはこの少女が……」

次々と明かされる驚愕するしかない事柄……そして気付くこの少女の正体。

そして終焉、男が神魔の上層部によって謀略に嵌められた所で映像は終わった。

「どうだったかしら、メドーサ？私の未来の記憶は……ふざけた結末でしょう？」

「お、お前は……」

気付けば傍にあの少女がいた。

「アシユタロスは死を望んでいる……この時間軸では私は楔につく気はないからあいつには死ではなく永遠の眠りに就いてもらうけど……ね」

「……お前は何がしたいんだい？私を殺す気がないのは分かったし、そこらの神魔などよりも好感は持てるが……何が望みなんだい？」

「うーん？私は貴女が欲しいだけよ？知っただろうけど、私の魂は男のそれだからね。ましてや貴女は未来では宿命の相手、欲しくなっても仕方ないでしょう？」

「……（汗）いや、断言されても私には理解できないんだけど……しかし、アシユ様の望みが死とは……ね」

あっけらかんと言われるその言葉に私はたじたじになる。

……というか、さっき言ったことは本気だったんだね（汗）

「私としてはああいう人には生きて欲しいんだけどね。上層部には碌なのがないから……老師やオーディン爺さんなんかしかまとものいないでしょ？後はアモンさんとかね。キーヤんたちは別として」



「あゝ、なるほど。確かに……ね」

それには同意する。

私も散々上の連中にはいい様にたらい回しにされてきたから……ね。アシユ様だけが真摯に私に向き合ってくれた、だからこそ私はあの人に付いて来たのだ。

「私の最終目標はゆっくりのんびり心許せる人たちと悠久を生きることだよ。そのついでに上の碌でなし共にはそれなりの制裁を与えるつもりだけど……ね」

そう言った彼女は壮絶な笑みを浮かべていた……ゾクゾクする様な笑みを。

一瞬の間の後、私は言いようのない笑いが込み上げてきた。

この子はその上層部を鼻歌混じりに断罪するというのだ。これが笑わずにいられようか？

だが、その言われた事が本気であることは肌で感じられる。

今この子は私にも勝てない程度の強さしか持っていないが、おそらく後7年もすれば私なんか遙かに上回る程強くなるのは確実。

それにこの子の持っている切り札を使えば最上級すらいずれ下せるだろう。

「くくく、なまじ嘘ではないんだから凄まじいわね。……一つ聞きたい、貴女が憎しみを向ける相手は誰だい？アシユ様は憎くないのかい？」

「ん？アシユタロスは別に憎くないよ？ルシオラの生みの親だし、あいつの気持ちも少しは分かるつもりだしね……」

「確か……貴女はアシユ様の代わりを務めていたんだったわね」

「永遠の悪役って言うのがどれだけ辛いかは彼自身にしか分からないだろうけど……ね？」

永遠の悪役……か。

私も元神族であっただけにその理不尽さは判るつもりだ。死んでも死に切れず、悪の立場に縛り付けられるなんて最悪以外の何者でもないんだろうね。

この子はそれをきちんと理解している。

「それじゃあ貴女には憎しみを向ける相手はいないと？」

「……分らないって言うのが本当の所かな？ 未来では美神の女や神魔の上層部に煮え湯を飲まされたけど……今の私にはそんな感情をもっている暇はないし……ね」

「美神か……、確かにさっきの記憶どおりの奴なら最悪だね。人を虚仮にしたり利用したりすることなんか得意な嫌な奴らだ」

「近寄ると寄生されかねないから接触する気はないけどね」

「……確かにそうだろうね。私でもアレは御免だよ。……しかし、相手にもされないとは奴らもかわいそうだね」

そう、哀れだ。

私はもうこの子に対して敵意は持っていない。

だからこそ分かる、この子と共にあることが出来ないあいつ等はきっと碌な人生を送れないだろうと。

特にあの無理無茶無謀の美神令子はその性格が変わらない限り悲惨な目に遭う筈だ。

……どう考えても変わるなんて想像がつかないけど。

それが理解できるから記憶を見たときに感じたあの女への確執も綺麗に消えた……今の私にとってはまだ出会っていないしどうでもいい存在だからだが。

「そうかな？まあ、あの人たちのことなんてどうでもいいよ。――  
――それより如何するの？私としては貴女が欲  
しくて堪らないんだけど」

「――分かったよ、貴女に下ることにするわ」

「む！それは駄目！！」

「？何でだい？」

「下るなんて駄目！貴女は貴女の誇りを捨てる必要はないんだから  
！私は貴女に私の家族になって欲しいの！」

「？メドーサ？」

くくく、なんてこつたい。

今私は本気でこの子に見とれちゃったよ。

ああ、認めよう。

私は本気でこの子の事を好きになっちゃったよ。

この子の為ならプライドを捨てるのだって惜しくはない、本気で私  
を思ってくれているこの子の為なら。

「降参だよ。私は貴女に私の全てを預けよう。貴女ならアシユ様さ  
え救ってくれるだろうしね」

「なんだか分からないけど……メドーサの願いがそれなら私も同じ  
だから心配は要らないよ？」

「ああ、心配なんかしないさ。私も協力するしね」

「本当！？」

ぱあ！と顔を輝かせる彼女に私は頷いた。

ああ、本当にこの子に参っちまったんだねえ……と思いつながら。

S I D E O U T

## 第二章↳迷い子に愛の手を？（後書き）

次は6/16……早起きできたら7時まで投稿します。

無理なら19時過ぎに。

感想お待ちしております。

### 第三章↳迷い子に愛の手を？（前書き）

令子が3才ぐらい？の時と15才の時に時間移動した以外の時間移動の頻度、時期が謎で軽く混乱中（汗）

後気付いた点があればご報告くれると助かります。  
それではどうぞ。

### 第三章↳迷い子に愛の手を？

SIDE ワルキューレ

私は魔界第二軍所属特殊部隊大尉ワルキューレだ。

……私は今、とても困惑している。

私の目の前には魔界軍総括元帥のアモン様が居る。

唯目の前に立つただけで感じる凄まじいプレッシャーに私は膝が震えそうになるのを必死に我慢した。

しばし手元の書類を見ていたアモン様だが暫らくしてそれから目を離すと此方を向いた。

「ワルキューレ大尉だったな。これより話すことは三界全てにおいて最重要機密だから心して聞くように！」

「はっ！」

「お前にはある一連の事件に係わってもらおう事になる。今回の件ははっきり言って洒落にならん規模だ。お前が行う任務もその一角に過ぎん」

「……………」

「だが、その渦中にいる人物は我ら神魔にとって大恩人であり……偉大なお方だ」

「？それは一体どのようなお方なのですか？」

魔族の中でもかなり上位に居られるアモン様が敬う方とは一体？しかしその返答は信じられないものだった。

「うむ、横島忠夫様……今は蛭様と呼ぶべきだが、一人の人間だ」

「な?!に、人間ですか？」

「そうだ、言っておくが不敬な言動は赦さんぞ？かの方は大恩人であるだけでなく、我ら神魔の失態を何度も覆してくれたのだからな」

信じられないと叫びそうになる私を厳しい眼差しで睨んだ後、心からそう思っているのだろっ事を告げた。

「あの方は外から見ただけではそれとは気付かせないような方だ。お前の様に軍務に忠実なだけの者には理解できんかもしれんが、先方がお前を指名している以上お前に任せるしかない」

「先方ですか？」

「今回の事は神魔共同の作業になる。先方とは妙神山に居を構える齊天大聖殿だ。かの猿神は蛭様の師でもある故に今回の件を統括している」

「神魔共同……デタントに関係しているのですか？」

「うむ、今回の件の失敗は最悪……世界の崩壊にまで辿りかねないレベルだ」

「……ッ?!」

世界崩壊だと？

そのようなレベルの問題の渦中にいる横島蛭という人間とは一体。だが、それほどの問題であるならば確かに私如きのプライドなど塵芥であろう。

「一つ言っておく。蛭様は何れ神魔と成られる。本来なれば最上級にも容易く成られるお方だが、神魔に巢食う膿共を嫌い上級レベルに留まられる予定だ」

「!?!」

な、何と言ってお方だ。

人の身で最上級にまで上り詰めることが出来るなんて……一体どれほどの物を内包されているのだ？

「あの方は傷つき過ぎた……、我ら神魔も人間もあの方に背負わせた重荷は世界以上のものだ。あの方は悲劇に見舞われながらも決して諦めなかった。力も何もかも足りない時から足掻いて来た……私は最近思う。我々はこのままでいいのかと」

「アモン様……」

「……ふ、つまらん事を言ったな……許せ。お前の任務は此方に書かれていることだ。詳細は斉天大聖殿に確認を取り速やかに確実に行動せよ！あの方の負担を少しでも減らすのだ！」

「はっ！私の全霊を持って成し遂げて見せます！！」

「よし、行け！」

「ははっ！」

こうして私の任務は始まった……資料を読んだ限りでは私一人では対処できない。

以前の私であればそんなこと構わずに突貫していたであろう。だが、今はそんなことする気にはなれない。

私が任務に失敗すればそれだけ蛭様の負担が増えるのだ。

そのようなこと断じて許容出来る筈がない！

私のプライドなどこの任務には不必要な物だ。

例えばどんな手を使ってでも成し遂げて見せる！

だから蛭様……如何かその宿命を見事果たされて下さい！

S I D E O U T

S I D E 蛭

「蛭！しっかりして！」

「うん？……玉藻？どうしたの？」

気付くと私は玉藻に抱えられていた。

彼女は目を泣き腫らしたようで真っ赤にしていた。



……そういえば、私さつき精神に潜り込んでいたから表面上は死んだ感じになっていたのかな？……やば！睨まれている！

「そういうこと言う？貴女がいきなり倒れるから驚いたって言うのにな？」

「ご、御免！し、心配したんだよね？！」

「……まあ、無事のようにほしいけどさ……」

「うん、メドーサは味方になってくれるって。……」

「……そうだ、そろそろ産まないかね」

「？産むって？」

「メドーサを再構成して産むんだよ。今のこの身は結構霊力が豊富だからもう充填できているはずだし」

「主よ、今からメドーサを表に出すぞ？」

「分かったわ、心眼」

そういうと私は玉藻に背を向けてお腹に力を入れる。

……流石に嘔吐する姿を彼女に見られたくなかったからだ。

数瞬後、喉が膨らみ這い出てくるビツクイター。

その背を割って現れるのは若返り女子中学生程度になったメドーサだ。

「ケホッ！……ふう、これはやっぱり辛いなあ……喉がヒリヒリする」

「ん……かなり強力に再構成されたね……さつきまでの2割り増し程度かな？流石というべきか……」

「主の中にはあらゆる因子が含まれておるからな……その結果だろ」

「あなたが心眼だね？これからよろしく頼むよ？」

「うむ、共に主を助けていこう」

隣で行われる会話を他所に口を大きく開けて呆然とする玉藻。

まあ、いきなり私が蛇を吐き出して其処から若返ったメドーサが出てくればそれも当然かもな？

「うまく因子の共鳴が成功したみたいだね。私の中の因子と共鳴させたら強化できるのではと思つて実行したんだけど……」

「……無茶するねえ。……ところでそつちの固まつている子は？」

「？玉藻？」

「……はっ！ほ、蛭が蛇を吐いて蛇から若返ったメドーサが産まれて……どういうこと?!」

「あゝ、説明してなかったわね。メドーサに掛かっている指名手配を無効化するにはこれが手っ取り早かつたからね」

「貴女其処まで考えていたのかい？ありがたいけど、罪は償うよ？貴女と共にいる為にも」

その後玉藻に行ったことの詳細を説明し何とか納得してもらつた。今の段階でそれをするこの無茶さ加減を知られて怒られたけど……。

「しかし、金毛白面九尾の妖弧かい……。またとんでもない大妖怪を連れてくるんだね。貴女の事だから全てを受け入れた上でのことだろうけど」

「玉藻は玉藻だよ？自分勝手な人間の好きにはさせないよ？……捏造された伝説を信じて幼いこの子を殺そうとする奴らなんかにはね」

「きゅん、蛭っ」

「くくく、確かに伝聞に踊らされるような輩には分からないだろうねえ。結局人間も神魔も下種な奴らは変わらないって事か」

「駄目だよ、メドーサ？そんな汚い言葉を使うと自分まで汚れるから……」

「ん、気をつけるよ。それで……これから如何するんだい？」

私の言葉にふやけてもたれ掛かる玉藻を抱きとめつつメドーサの言葉使いを注意する……こころ辺は母さんの躰の影響かな？

それよりさっきの言葉、たぶん小竜姫様も係わっているあれの事でしようけど、小竜姫様はそんなそぶり未来ではなかったし……まあ今考えても分かるわけないか。

「うん？実は今日これからの事で老師に相談しに行くところだったのよ。神魔に係わることも多いから……」

「あの猿神にかい？というか、既に知り合っているのかい？」

「うん、私に掛かっている封印の一つを解くのにちよつと前に行っただ」

「ああ、なるほど。でもそれじゃあ私がいるのは不味いかい？」

自身に掛けられている指名手配はまだ解かれていないので私の迷惑になるかと懸念するメドーサ。

私の中で再構成して彼女が持っていたカルマをリセットしたがそれで全てが白紙になるわけではないのだ。

もつともそんなこと私にとってはどうでもいいことなただけ。

今のメドーサをして邪悪だ何だと断罪するような奴は赦すきないし……ね。

「ん？別にいいんじゃない？寧ろ貴女に小竜姫様の頑固な所を矯正してほしいくらいだよ？」

「くくく、貴女に掛かれば音に聞こえた神剣の名手も唯の頑固者か……いいね、その任務任された」

「でも蛭？それなら何でさっき唸っていたの？」

「ああ、それは白龍寺のことだね。……メドーサ？既にあそこは手に入れているの？」

「なるほど、あそこの事ね。手に入れているけど、まだそれだけよ？」  
「ん、じゃあ如何しようかなあ。アシユタロスの件までにも幾つか手勢の欲しい件もあったし……、陰念や勘九郎は放っておくと改心しないだろうし……」

未来で魔族の出来損ないになった陰念や魔族そのものになった勘九郎を思い出す。

雪之丞は方向性さえ間違わなければ修正は可能だろうけど……どちらにせよメドーサが既に入り込んでいるのならそれを利用しない手はないはず。

「メドーサ？白龍寺に雪之丞・陰念・勘九郎の三名は既にいるの？」  
「うん？確かそんな名前の奴もいたような？」

「もし居るのなら性格を矯正したいんだけど……特に力が全てなんて思っているようなら……ね」  
「矯正して仲間にするのかい？」

「ん、陰念はともかく雪之丞と勘九郎は結構いい所までいけるはずだからね。手が足りない時に手伝ってもらおうと思って」

雪之丞は友達だったし勘九郎たちが道を誤ると雪之丞が悲しむだろうから何とかしてあげたいし……あんまり記憶に左右されるのはいけないんだろうけど。

「それなら私と小竜姫で何とかしたらいいんじゃないかい？白龍寺は放棄して三人を妙神山で寝泊りさせたらどうともなるんじゃない？」

「なるほど！それなら小竜姫様も三人も矯正できるわね。メドーサで足りない所は老師にも手伝ってもらえば良いし！」

「……何気に老師を巻き込むつもりなの？」

「凄いやね、蛭ってば」

とりあえず話は纏まったので三人で妙神山に向かうことにする。道中、これまでの経緯やこれからの予定を検討しつつ私に手を握られた二人は苦笑しながらも仲良く山道を登って行った。

途中持つて来た弁当とお茶で休憩を挟みながらも昼過ぎには到着した私たちは鬼門の前に立った。

「鬼門」。蛭が来たって伝えてちょうだいな。後ろの二人は仲間だから気にしなくていいよ」

「あゝ、見間違いかもしれんが……もしかしてそちらの女子はかの指名手配されておる者では？」

「確かメドーサとかいったか？若干若いようだが……」

鬼門がメドーサのことを知っていることには本人も驚いたが私は気にせず会話した。

「うん、そうだよ？今は仲間になったから関係ないけどね。小竜姫様の頑固な所を矯正するのを手伝ってもらおうと思ってる？」

「……何気に凄いことを仰るな」蛭殿は（汗）」

「ま、まあ蛭殿がそういうなら入ってください（汗）」

若干引きの入った鬼門たちだったが、老師の認めている私が保障するならば門を開放してくれた。

私はそんな鬼門達に礼を言っただけで中に入る。

さて、小竜姫様？覚悟してね。

S I D E O U T

S I D E 小竜姫

私は妙神山の管理人を勤める竜神・小竜姫です。

長く続く此処の管理人生活にも若干の退屈を感じつつあるこの頃でしたが、5年ほど前に一変しました。

何時もは奥に籠ってテレビゲームなるものをしてる老師様が吼えたのです。

私はそのとき日課の素振りをしていたのですが、聞こえてきた咆哮が余りに悲しみや怒りの混じったものだったので急ぎ老師様の元に向かいました。

私はその時見た老師様を今でも忘れることが出来ません。

老師様の部屋に辿り着き其処で目に入ったのは、これ以上ないというほど怒りに目を染めた形相の老師様と立ち込める膨大な波動の嵐で破壊されつくした部屋でした。

あの方は入ってきた私に気付かず、辺り構わず力の波動を撒き散らし己を痛めつけていました。

私は必死に老師様に抱きつきその行為を止めようと思いました。

.....今考えるととても危ない行為でした。

何せ相手は神界でも屈指の武神。

例えば人界最高レベルの神族である私でも下手すると消滅していたかもしれません。

何とかその時は治まってもらえましたが……。

その後聞かされた話は想像の埒外でした。

なんと未来の記憶を継承したというのです。

.....一瞬老師様の痴呆を心配しました

が此方を見詰める相貌は恐ろしいものでした。

……少しちびつてしまったのは秘密です。

私は気を取り直して老師様の語る未来の情報を静聴しました。語り終えられた時には辺りは暗くなっており深夜になるうかという時刻でした。

然し私は動けませんでした。

……その語られた内容にある神魔の愚かさと醜さに……何よりその犠牲になった誇り高き恩人に対する申し訳なさに

その日から私は変わりました。

いえ、まだ変わったとは言えないでしょう、少なくとも恩人であり人の身で最上級に上り詰められたあの方のお役に立てるまでは……。己に課してきた鍛錬もより実戦に近いものにし、己の身を痛めつけてきました。

そんな鍛錬が続いたある日、お昼過ぎにまだ老師様に昼餉を用意していないことに気付き急いで用意するために居間へといきました。

……待っていたのは満足そうにお腹を擦る老師様でした。

聞けば件のあの方が来ていらしたとの事。

本人は既に就寝して起こしてはいけないということ。

……何故呼んでくれなかったのでしょうか、老師様の意地悪。その後起床時に挨拶をと思うものの、あの方は直ぐ旅立ち私の前に姿を現すことはありませんでした。

「あれから三日経ちますけど……後どれ程であの方は此処を訪れるのでしょうか」

あれから私は先日のようなことがないように表で鍛錬をしています  
があの方は現れません。

老師様が仰るには宝具を貸し与えたので暫らくすれば訪れるとの事。  
……門外不出の宝具を貸し与えるとは、老師様のあの方への対応は  
孫娘を贖済するそれですね……まあ、言った所で嬉々として認める  
だけでしょうけど。

そして今日も表の庭で鍛錬をしていると不意に感じた……魔族に似  
た気配を。

「……………ツ?!何者!」

私に急接近するローブを纏ったその者は刺叉を振り上げると襲い掛  
かってきた。

その手腕は恐ろしく早く正道を感じさせない邪道のものだった。

「くツ!?此処を神族の拠点と知っての行いか!」

「……………」

「答えよ、下郎!」

手にする神剣で応戦するも巧みに弾かれ逆に追い詰められる。

私は不思議だった、何故この神域である妙神山で此処までの動きが  
出来るのか?

そんな疑問を感じるも奇襲に次ぐ奇襲で私は徐々に疲弊していった。

「……………ツ!く、私を倒しても老師様が居ることを忘れるな!  
例えこの身が滅びようとも貴方の好きには決してならないというこ  
とを!」

「……………はあ、駄目だね……これは。

筋金入りだよ、蚩」

「!?!」



「其処を貴女に何とかして貰うのよ、メドーサ？」

「!!!？」

「それはいいけど……あの人、固まっているけど……どうするの？」

「!!!? - - - - - きゅー」

次々に現れるその者達に私はあまりの知恵熱で気絶してしまった…

…orz。

S I D E O U T

S I D E 蛭

「ありゃ、苛め過ぎたかな？小竜姫様あ？」

「駄目だね…これは、完全に気絶しているよ」

実は庭に着く前にメドーサに頼んで一度小竜姫様を打ちのめす事に  
したので。

奇襲とはいえ本拠地の此処で負ければ少しは身を入れて性格を矯正  
してくれるかもと期待して……。

- - - - - 結果は少しやり過ぎたみたいだけ。

小竜姫様を看護していると奥から老師が現れた。

「騒がしいのう、……ん？おゝ横島でないか。寶貝を返しに来たの  
か？」

「うん、後今後のことで相談に……こっちにいるメドーサのことも  
兼ねてね？」

「ほ！これは又、随分と無茶をしたようじゃな？」

一目見てメドーサの今の状態を看破した老師は相好を崩して相変わ  
らずな私に微笑みかけた。

彼女の在り方が変わっているのを把握したのだろう。

とにかく、話し合いをするべく居間へと移る。  
……流石に小竜姫様をそのままにするのは不憫だったのでメドーサに運んで貰った。

「なるほど、脱皮を利用したカルマの軽減か……よく今の段階でそれを行ったものじゃ。下手をすればそのまま乗っ取られたかも知れんぞ？」

「あははは、まあ確かに賭けだったけどね？一応私の中には彼女の因子も眠っていたし何とかなるかなあ〜って」

「蛩つてば詳しい説明もなくやったのよ？倒れた時には本当に心配したんだから！」

「私もそれには同意だねえ。共にある者としては心臓に悪いことは確かだし」

仲間から続けざまに出される駄目出しに凹んでいると小竜姫様が目を覚ました。

僅かに頭をさすり辺りを見回して数瞬後……あ〜なんかこの後が容易に想像できるなあ。

「！貴女はさっきの！？」

「はい！其処まで！」

私は神剣を抜きかけた小竜姫様の首筋に霊波刀を突きつけると溜め息を吐いた。

「落ち着くのじゃ、馬鹿弟子。わしが居るのに何血迷っておる」

「ろ、老師様！？え、ええっ！？」

哀れなほどおろおろする小竜姫様。

その横ではメドーサがニヤニヤし、玉藻がそつと涙を流していた。

なんだかなあ。

S I D E O U T

数分後、何とか状況を理解し蚩が横島忠夫の変化した者だと知った時には目に見えてうるたえていた。

なんでも老子の話で憧れを抱いていただけに、情けない今までの姿を見られたことにショックを受けたそうだ。

「小竜姫様……私は憧れを持ってもらうほどの者ではありませんよ。唯、守りたい者を守れず足掻いただけの者です」

「そ、そんな事はありません！聞けば上層部の愚か者達が放った滅びの光が落ちるのを一人で食い止めたとの事！その様な事を成し遂げた方が立派でない筈がございません！！」

「そうだねえ、滅びの光は太陽に匹敵する熱量を持った絶対破壊の光だからね、最上級であろうと止められる物ではない筈なんだけど」

「だが横島は止めた。過去に転送した記憶や因子以外の己に残った全てを守る力に変換しての……」

「ま、まあ老師たちはあいつ等に牽制されていて動けなかったし、キーヤンたちもそれぞれ縛られていて動けなかったから……ね」

未来で暴走した上層部の愚か者どもは何を血迷ったのか聖書級最終戦争で使用するような物を人界に落とすのだ。

その時老師たちは愚かどもの尖兵に自爆覚悟で特攻されてそれを防ぐのに手が一杯で人界には来られなかった。

キーヤンたちは人界への道に封鎖結界を張られてそれに手間取り来られなかった。

そして人界にいる力在りし者は太極天・横島忠夫だけであり、彼は両親を人質に取られて動けなかった。

……だが、そんな彼を動かした者がいた……他でもない彼の両親だ。

彼らは自分達を取り囲んでいる者の隙をつくつと自らの命を絶つた。彼らは死の間際、自分達の息子に励ましを送ると激高した周りの者に消された。

瞬時にそんな者共を屠るとキーヤんの送つて来た念話による提案に乗りそれを実行。

その後は己の責務を果たすべく自身を光に替え人界を守りきつた。その後の事は語るまでもなく……信仰を完全に無くした神魔は衰退し護りを失つた世界はゆつくりと滅びた。

「横島が世界中の信仰を一心に受け止めていたからこそできた荒業じゃな」

「ん、まあいいじゃない！今はそんなことよりこれからのことを考えなくちゃ！」

温かく見守る老師の視線に耐え切れなくなった螢は無理やり話の方向を変えた。

「それで……此処にくる道すがら考えていたんだけどメドーサの部下になる予定だった三人を此処で鍛えられないかな？小竜姫様も一緒に」

「ふむ、確かにメドーサが居れば小竜姫の真つ直ぐすぎる戦い方も少しは改善できるじゃろうな」

「あの、私は其処まで使えませんか？（涙）」

「別にそうは言いませんよ？唯、これから起こる戦いでは今のままじゃ少し役不足なだけです」

「あうう（涙）」

「……横島よ、それでは止めじゃ」

泣き崩れる小竜姫をあやししながら何とか雪之丞たちの妙神山預かりを決定。

白龍寺は妙神山の駐屯所にすることにし、諜報活動をしてもらうことに決定した。

雪之丞以外の者たちにも役目があるなら彼らも安心するだろう。

ついでにメドーサの指名手配をいつでも解けるように手配。

今はアシユタロスや他の魔族の目を誤魔化すためにそのままにしておくことにした。

「とりあえず、次の大きな目標は死津喪比女を単騎で打ち倒せる程度には成らないと。あれは放っておくと首都圏にまで届く大地震を引き起こすからね」

「死津喪比女といえはかなり強力な地霊だった筈、あれを単騎で倒すのは少し無理があるのでは？」

「私なら何とかそれも可能よ。まあ、文珠を完全に生成できるようにならないといけないけど……ね？」

「文珠?! 貴女様は文珠使いだっただのですか?!」

流石に力云々までは聞いていなかった為か非常に驚いている小竜姫。

「ふふふ、横島はそれ以上の使い手よ! 何せ……」

「老師い? いくら仲間内でもそう簡単に手を明かさないで下さいよ?」

「?!ゴ、ゴホンッ!……そろそろ夕餉の時間かのう」

いやに口が軽い老師に釘を刺す蚩。

首筋に感じた鋭い殺気に慌てて誤魔化す様はちよつといただけなものだった。

当然皆は知りたがるように視線を向けるが何とか誤魔化すことに成

功した……取り合えずだが。

「蛭様、どうか心行くまでご賞味くださいね？」

「小竜姫様あゝ、様付けなんて止して下さいよ」

「それは此方の台詞です！私如きに敬語なんて使わないで下さい！」

「ううゝ、老師（涙）」

「ふふふ、良いではないか。御主の本来の位階はわしと同格なんじやからのう？」

「それは別の時間軸のことです、今の私は別物ですよ」

涙目になりながら懇願するも終には聞き入れられず更には呼び捨てにするように押し通された蛭であった。

「それはそうと、明日にはヒヤクメが此処に来るから用があるのな  
ら言付けといたほうが良いぞ？」

「そうなんですか？分かりました」

その日はそれで解散になった。

尚、メドーサは明日雪之丞たちを連れてくるというて下山していった。

SIDE 蛭

明けて翌日。

甲斐甲斐しく起こしにきた小竜姫に恐縮しながらも何とか普通に接  
することができるようになってきた。

朝餉を食しているとメドーサが念話で昼頃に着くと連絡してきた……  
随分早いなあ、無茶しなきやいいけど。

朝餉を終え寛いでいるとお馴染みの軽い空気を纏ったヒヤクメが現  
れた。

「久しぶりなのね、小竜姫。初めまして、横島様」

「久方ぶりですね、ヒヤクメ」

「初めまして、ヒヤクメ様」

「プフウツ?! け、敬語なんて止して下さいよ。私は貴女様にそのような呼び方をされるような者ではないのね」

「ふふふ、お返しよ! 小竜姫のみならず貴女まで様付けするんだもの! せめて貴女だけでも」

「あうう〜(涙)」

「まあ、冗談はこのくらいにして……貴女には2、3やって貰う事があるから御願いな?」

「は、はい! お任せを!」

その後、先日のノートを見せて現在出来ることを探ってもらった。

その結果、猫又親子のみ現在地を把握することが出来た。

「美衣さんには此処で賄いをやってもらうことにしようか? 此処もそのうち人が多くなるだろうから手が必要だし」

「いいんじゃない? そのケイっていう子も此処なら安全に遊べるだろうし」

「ふむ、良いのではないか? 正直食事の用意をしてくれる者が増えるという事はかなり時間的にも助かる筈だし」

.....と、言うわけでやってきました森の中。

ヒヤクメにレポートで連れてきてもらったので楽チンだった。

目の前には記憶にある小屋が佇んでいる。

ヒヤクメが言うには小屋から此方を伺っているという。

「御免ください、猫又の美衣さん見えますよね? 住処のことでお話があるので出て来てくれませんか?」

「(横島様、直球で行きますか?!)」

隣でヒヤクメが何か慌てているが気にしないでおく。  
暫らくすると、まだ赤子であるケイを抱えた美衣さんが出てきた。  
その顔は戸惑いと不安に満ちていた。

「あ、あの……何故私の名前を？」

「私の名は横島 蛭、こつちにいるのは神族の調査官ヒヤクメです。  
私が貴女の下に来たのは貴女がいずれ人間に追われることを予知し  
たからです」

「私が人間に……？」

「はい、私たちは妙神山と言う神族の拠点に住んでいるのですが  
……賄いをする人が欲しくて貴女に目をつけたんです」

「私に其処に移れと？」

此方に敵意がないことに気付いたようで幾分か落ち着いて話し出す  
美衣さん。

流石に未来を知っているなどと言えないので当たり障りのない理由  
をでっち上げたが上手く信じてくれたようだ。

「妙神山なら暖かな寝床もありますし齊天大聖老師もいるので安全  
面では比較になりませんか？」

「か、かの有名な闘戦勝仏様がですか？！」

「ええ、老師の直弟子である私や竜神小竜姫は今色々行動している  
ので正直食事の用意する手だけでも欲しいのです。どうか決断して  
くれないでしょうか？」

「……分かりました。どうかよろしく御  
願います」

「良かった！あそこには妖怪もいますので仲良くしてあげてくださ  
いね？」

「はい！」



心配していた拒絶も特になく、無事提案を呑んでもらえた私はヒヤクメに指示し四人でテレポートした。

ちなみに小屋の中にあつた荷物はきちんと回収している。

妙神山に着いた後、老師と小竜姫に挨拶を済ませ小竜姫監督の料理指南が始まった。

……なんでも下手な物は老師様や虫様には出してもらっては困るとの事……いや、別にいいんだけどね（涙）

美衣さんが料理をしている間、玉藻がケイのことを面倒見ていた。

始め玉藻を紹介した時、まさか妖怪というのがかの大妖怪とは思わずひどく恐縮していた。

もともと玉藻の気さくさやケイを抱く柔らかな物腰に直ぐ和んできたが……。

「ん？……分かった。小竜姫、美衣さん！そろそろメドーサが来るみたいだから四人分追加してね？」

『分かりました！』

メドーサの念話を聞き届けた私は昼餉の増量を指示した。

「さて……美衣さんのことはこれでよし。……次は、ドクターカオスかな？」

「カオスって言うとおの錬金術師の？ボケがひどいって言う話だけど」

「うん、老師。何か記憶を保存する物ないかな？今のカオスは既に脳の記憶領域を全て占有しているから憶えた端から忘れてしまうのよ……トコロテンみたいに」

「それは何とも言えんのう。流石に全てに精通しているわけでもないし……本人に発明して貰った方が良くないか？」

「……ああ、文珠ね。ボケる前に若返らせ

て記憶層か何かを発明してもらえば……何にしても文珠か」

「横島様はどうやって文珠を会得したのですか？」

「ん？あぁ、老師の試練を受けてだよ？」

「いつ?!」

さり気なく告げたとつもりだったが、それを聞いたヒヤクメは固まった。

それも当然で、この妙神山設立以来誰一人として成し遂げた者のいない試練なのだ。

「うーん？文珠獲得の為にもやるしかないかなあ？今の私じゃ流石に厳しいけど……」

「横島よ、言っておくが今はまだ試練は受けさせんぞ？御主はもつと自身を労われ！そんなに焦らずとも何とかなると信じるのだ……わしなどに言われずとも気付いておるじゃろうが……な」

「老師……、分かったよ。その代わり、老師にもビシバシ働いてもらうからね？」

「ふふふ、お安いことじゃよ。御主の為に繋がるなら……な」

「（老師様って本当に横島様のことを大事に思っているらしいやね）」

閑話休題 . . . . .

小竜姫と美衣さんが昼餉を食卓に並べ始めた頃、メドーサたちがやってきた。

記憶と違い、まだ幼い顔立ちの雪之丞たちは辺りを見回しながら落ち着きがなかった。

メドーサはそんな彼らを叱咤しつつもどこか柔らかな物腰で接していたのが印象的だ。

昼餉も終え、雪之丞達にこれから行う修行の説明をすることにした。

「さて、貴方たち三人にはこれから此処妙神山で小竜姫・メドーサの両名と修行をしてもらいます」

「あの一」

「?どうしたの、勘九郎?」

「白龍寺の皆はどうなるのですか?結構財政が厳しくて僕達でもない働きの手が減るんですけど」

「ああ、彼らには妙神山の駐屯所として下働きしてもらいます。見返りについてはなんですが、食事やその他家事手伝いは私が手配してあるのでご心配には及びません」

「成る程……、後もう一つあるのですが……メドーサ師匠とどういった関係なのですか?」

「あれ?メドーサ、説明していなかったの?」

「あゝ、こんななりに成ってしまったからね。どう説明していいかわからなかったんだよ」

そういつて自身の体を見下ろし呟く。

……そういえばよく今のメドーサを見て前のメドーサと同じように認識したわね。

そこらへんを聞くと、どうも竜神というのは知っていたらしくそういう事もあるのだろうと考えていたそう。

「んゝ、簡単に言うと契約主って言う奴かな?私は家族として接しているけどね」

「つ、つまり蛭様は師匠の主ということですか?!」

「様なんてつけないでよ。まあ、そうなるのかな?」

「じゃ、じゃあ…あなたは師匠より強いと?!」

傍で聞いていた雪之丞が詰め寄ってくる。

その目はぎらぎらと輝いていて、何処か切羽詰まった感じがする

.....やっぱり力を求めているか、雪之丞。

「こつ言っているけど.....メドーサ？貴女からみてどう？」

「そうだねえ、現時点では私の方が強いわね。其処の小竜姫も蛍より上よ。.....けど、後数年もすれば蛍は此処にいる老師を除けば誰よりも強くなるわ」

「.....ッ！？ひ、人の身で竜神を超すと？」

「蛍は特別だからねえ。とんでもない宿命も背負っているから比べるのは無意味よ？貴方に世界は背負えないでしょ、雪之丞？」

「せ、世界？」

「蛍は神魔を超える宿命を背負っているの。.....この世界を守る為に.....ね」

一瞬、自分以上の素質を持つ私に嫉妬のような視線を向けたがメドーサの語る重すぎる事実とその視線はなりを潜めた。

メドーサはそんな雪之丞に溜め息を吐くが、私は苦笑して訂正した。

「メドーサ、それは言いすぎよ？誰しも自分の世界を背負って生きているんだから.....私の場合それが少しばかり大きかっただけよ？」

「.....はあ、貴女がそう言うのなら私はこれ以上わないけどね.....、出来ればもう少し上に立つ者としての威厳を持って欲しいけど」

「くす、それこそ無理よ。私は私だもの！」

「ふふふ、メドーサよ。横島にその手の話は無意味じゃぞ？わしももう諦めたわい」

「.....はあ」

頂垂れるメドーサに私はえへんと無意味に威張り、玉藻はメドーサの肩に手を置いて慰めていた。

ほんわかした空気が蔓延する中、これからの予定が決まった。

「それではチャクラ開眼の行を中心に靈的戦闘を伝授していくことでよろしいですか？」

「うむ、魔装術はリスクが高すぎるからのう。精神がもっと成熟し強靱に成ってからの方が良かるう」

「チャクラ……ですか？」

「蚩様、彼らにチャクラの有用性を示してあげて下さい」

「ん……分かった」

人界では既に廃れつつあるチャクラを開くという修行内容に勘九朗が懐疑的になった。

小竜姫はそれを覆すべく私にお願いする。

彼女の指示に従い今開けるチャクラを全て開いた。

瞬間立ち上るオーラ、目に見えて増幅された靈力は既に人の領域ではなく凄まじいプレッシャーを彼らに感じさせた。

「うわ！な、なんて靈圧！？」

「う、お、ぐうう」

「あわわわ、きゅう」

「ふむ、大体300マイトといったところか」

「くう……？そのマイト……って言うのは？」

「ああ、まだ此方では広まっていなかったのう。マイトとは靈力や魔力など全てに共通する単位じゃ」

本来の時間軸では魔神大戦の時にヒヤクメが口にしたことがマイトの始まりだった。

老師は未来の記憶があるのでつい遣ってしまったが気にせず通すことにした。

「本来人間の持ちうる限界値は聖人や魔人クラスで400〜500

マイトじゃ。通常の霊能者で200マイト程度が限界……かのう」

「そうですね……それも特殊な血筋に限りますが。今の蛍様がチャクラを開かない状態で150マイト程度ですから第三チャクラまで開いているのですね」

「うん、私は比較的チャクラが開き易いからね……15歳までには全て開ききるつもりだし」

「そ、それは凄いのね〜！普通其処まで到達するには数十年単位が必要な筈……横島様の限界値はいかほどなのね〜?!」

「あはは、別に誇るほどのものでもないわ。私の強さは半ば反則みたいな物だしね」

私は放っていた霊圧を沈めると苦笑しながらヒヤクメに言った。

ヒヤクメの言ったとおり本来此れほど直ぐにチャクラを開くのは異常以外の何物でもない。

老師はそんな謙遜の過ぎる私に溜め息を吐いているが……既に言っても認めないだろうと諦めているようだ、えへん（無意味に誇る私）。

「凄え！此処までの霊圧を放てるなんて！」

「ああ、チャクラするのは此処まで凄いのか?!」

雪之丞と陰念が蛍の霊圧から開放されると興奮して騒いでいた。

メドーサはそんな二人に釘をさす。

「最初にはつきり言うておくけど、貴方達はこれほどの物を手にするのは容易ではないよ。それでも此処に連れてきたのは他より可能性があるからよ？」

「……それは分かっていますよ、あの方が我々と違う次元にいることは。……それで我々は何処までいけますか？」

とはいえ有用性は確かなようなので勘九朗は己の潜在能力を知りたがった。

それに唸ってしまった私。

それは陰念が劣等感に晒されて自棄に成らないかと危惧したからだ。

「うーん、あんまりそういうことを意識しすぎるのは良くないと思うんだけど……力が如何にあるうとそれを律する精神がなければ無意味だしね」

「それは承知しています……悔しいですけど我々が如何に井の中の蛙で力に固執しすぎているかは今回のことで思い知りましたから」

「ふむ、そうだね、チャクラの開眼は如何に自身を受け入れ把握するか、そして如何に自然と一体化できるかに掛かっているからね」

妙神山で二柱の竜神の指導の下、精力的に鍛錬すればある程度の所までは確実にいけるはずだ。

問題は何処まで自分という者を受け入れられるかって所だろう。

ナルシスト気味な雪之丞や勘九朗はともかく陰念が何処まで食い込めるか……。

「私と老師監修の修行を小竜姫とメドーサの指導の下……今から七年間耐えられたら、素の霊圧は100マイルを超えるのは確実よ」

「そうね、チャクラが何処まで開けられるかは本人の努力と根性……」

「後何処まで自分を受け入れられるかによるわね」

「仮に第四チャクラまで開眼できれば……今の蛸様程度に成れるでしょう」

私たちの言葉を聞いた彼らは目に見えてやる気が目に宿った。

先ほど感じた圧倒的な霊圧は人界ではまず目にしないレベルである。やる気が増すのも仕方ないのだろうが……私はそんな彼らに哀れみの眼をひそかに向けていた。

「（知らないってことは幸せよね、南無南無）」

「蛭？何彼らを拜んでいるの？」

「え？あゝ、いや頑張ってるほしいなあゝと思ってね？ははは」

いぶかしむ玉藻を誤魔化しつつ私は彼らの無事を祈った。

その後、とりあえず私の修行を見学ということになったのだがその余りにも凄まじさに雪之丞たちは引きが入っていた。

もっとも既に退路は絶たれていた所以他们に逃げ道はなかったのだが……合掌。

S I D E O U T



### 第三章↳迷い子に愛の手を？（後書き）

朝のごたごたでかなり間違いを含んだまま投稿してしまいました（汗）

一応修正しましたがお気づきの点があれば指摘して貰えると助かります。

6 / 1 6 1 9 : 3 0 頃修正

6 / 2 7 1 8 : 4 0 一部加筆

#### 第四章↳迷い子に愛の手を？（前書き）

戦闘描写は難しいです。

なるだけ詳細に描きたいのですがなかなか上手くいきません。

動きのある文章を書ける様になりたいものです。

愚痴が出てしまいましたが……それではどうぞ。

## 第四章　迷い子に愛の手を？

時は経って2年後

その日も厳しい鍛錬を終え汗を洗い流し夕餉となった。

連日の規則正しい生活と整った環境のせいかこの頃になると三人は目に見えて清々しい波動を放つようになってきた。

本人達もそれには気付いているのか益々気合が入ってきている。

「三人とも中々のものに成って来たわね。そろそろ第二チャクラも完全に廻せる様になって来たでしょ？これで次のチャクラを廻せる様になったら飛躍的に強くなれるわよ」

「はい！蛭様たちの親身な指導のお蔭で段々と分かってきました」

「信じられないほど体に霊力が張っているぜ！これでもまだまだなんだからすげーよな」

「全くだ。自分を卑下していた俺でさえ此処まで強くなれるんだからなあ。蛭様には感謝の念が絶えんよ」

三人はその身に宿る強大な力を無闇に振るうことなく親身に自分達に接して鍛えてくれる蛭に心酔していた。

尊敬の眼差しを向けられる度に蛭は苦笑いしていたが……。

ちなみに今の蛭たちの霊力と戦闘方法は以下の通りである。――

――

横島蛭　180マイル　第4チャクラ　霊波刀を主体とした高速戦

闘／五行術による中距離戦闘術

鎌田勘九郎　79マイル　第2チャクラ　霊波砲と霊刀を使ったパ

ワータイプ

伊達雪之丞　70マイル　第2チャクラ　霊波砲と霊波拳によるス

ピードタイプ

陰念 60マイル 第2チャクラ 靈波を浸透させた影を操るトリ  
ツクタイプ

陰念のみパワーが足りないので蛭が方向性を示唆し攪乱戦闘方式に  
した。

それがマッチしたのか少ない靈力ながらも他の二人に模擬戦で勝つ  
こともある。

お蔭で変な劣等感も持たず和気藹々と鍛錬に励んでいる。

「老師、そろそろ試練を受けたいのですけど？あれがそろそろ飛ぶ  
はずなので……」

「む、もうそんな時期か。（それに関しては心配要らんのだが）…  
…まあ、良からう」

老師は立ち上がり居間を出てゆき、蛭も後に続く。

メドーサと玉藻も直ぐ後を追った。

「？小竜姫様、試練とは何なのですか？」

「この妙神山の最高難易度の修行です。未だかつて挑戦権を得た者  
はいません」

「ってことは師匠が最初の挑戦者なのか?!」

「あの方は特殊ですから……いずれあの方の秘密も明かされるでし  
ょうが……今はどういものか見学して覚悟を決めてください。も  
しかするとあなた方も受けられるかもしれませんから」

「（ゴクツ）……一体どれほどの物なんだろうか」

SIDE 齊天大聖

今わたちは仮想空間にいる。

横島の魂はかなり耐性があるから一年以上此処に留まることになる  
だろうか。

わしらは早速ゲーム対戦を行っている。

未来の記憶を継承してから全くやっておらんかったから久しぶりじや。

「ん？老師腕が鈍りましたか？切れが感じられませんか？」

「ふふふ、何のこれからよ」

隣にいただけでどんどん横島の魂が加速されていつているのが分かる。

本来自然と過負荷を与えられて出力を増すものだが、こやつは自ら率先して魂を痛めつけておる。

それでも表面上は特に変わった所は表さずゲームをやっておる。

「少しは休むということを憶えればいいものを……」

「ん？何か言いました？」

「何でもない……それより今日は汁物を食いたい気分じゃ」

「はいはい、それじゃあお雑煮でも作りましょうか……添え付けにナスの味噌漬けもつけましょう」

「うむ」

とりあえず、今しばらくはゲームと横島の作る食事を楽しむとしよう。

そして時は過ぎ、一年を経過する頃には横島にも余裕がなくなってきた。

まあ、それも当然じゃろう。

絶えず自分の魂を苛め抜いてきたのだから……。

流れ込んでくる横島の魂の記憶は何とも凄まじくわしでさえ引き摺られそうになったほどじゃ。

「ふむ、そろそろか？」

「そうですね……、封印の方も一つ解けそうなくらいには成りそうですよ」

「何じゃ、封印の方にも気をやっていたのか。通りで凄まじい波動を出しているはずじゃ」

「外では一分ぐらいでしようか？」

「その程度じゃろうな……さて、では出るぞりゃあッ！」

わしは如意棒で空間を割ると現実世界へと帰還した。

横島と二人して修行場にいくと扉の外に他のものたちが居座っていた。

「なんだ、皆して見学にきたのかな？これじゃ情けない所は見せられないなあ」

「ふふふ、では行くぞ？見事自身の潜在能力を引き出して見せよ！」

わしは如意棒を振り上げると一気に横島に接近した。

振り下ろし突き上げる如意棒を巧みに避け霊波砲で煙幕を張り霊波刀で斬撃を繰り出す横島。

霊波刀に込められた霊力は500マイトを上回り更にそれを極限まで収束することで1000マイト近い攻撃力を有するに至っている。本来戦闘中に此処までの霊力を圧縮するのは至難な業の筈なのだが難なくこなす横島にはほとほと呆れるしかない。

「相変わらず化け物じみた収束能力じゃなあ、三界探しても其処までの者はそうはおらんぞ？」

「老師には言われたくありませんよ！」

肉迫しつつ霊波砲で牽制して来る横島は次の瞬間、視界から消えた。辺りを探るも霊気も気配も感じられず、空気の流れすら乱れがない。

「むう、どこじゃ？此処までの隠蔽術を今行えるとは……流石というべきか」

「それほどでもありませんよ？」

「！グツ?!」

突然、斜め横から現れた横島に対応しようと動くもその前に霊波刀で斬りつけられる。

流石に不意をつかれたので傷を負ってしまつが気にせず追撃を繰り出す。

横島はそれを弾き霊力を限界まで練り上げ突撃してくる！

「来るか！」

「アアアアア………ツ!!!!!!」

「ムンツ!!!!!!」

激突するわしら。

巻き上がる粉塵と共に撃ち込まれる衝撃は中級のそれに匹敵していた……とんでもないのう。

煙が覆い、晴れた時には横島が倒れるところじゃった。

その手には10を超える文珠が輝いていた。

「ふむ、目的は見事果たせたようじゃな……流石に疲れたわい」

「蛭っ!? 老師、蛭は大丈夫？」

「心配いらんよ……疲れて眠っておるだけじゃ」

「良かった」

勝負が着いたと判ると真つ先に玉藻が駆け寄ってきた。

甲斐甲斐しいのう、出来ればわしも少しは労わってほしいものじやが。

わしは落ちていた文珠を拾うと確認する。

「む、双文珠もあるぞ?!まさか封印を超えて習得するとは」

「ということとは……この後封印を?」

「いや、今日はこのまま休ませよう。余り急かすものでもないの」

唯でさえ自身の身を削って無理無茶無謀を繰り返す横島じゃからのう。

12才という幼さでわしの試練を乗り越えるなど本来絶対でありえんことなんじゃが……な。

休める時は休ませなければ……

……ムツ!?

「……うっ、この感覚は……行った……か?」

「横島……今の感覚は。あやつか?(全く要らぬ合いの手を入れおつて!起きてしまったではないか!(怒)おそらく結界に弾かれて今頃呻いているじゃろうな)」

「ええ、間違いなく……何考えているんだか」

突如感じた時空震に気を失っていた横島も目を覚ます。

横島に確認を取るが実は先ほどの時空震、時間移動が成されたゆえの波動ではなく世界に張られた時間移動を阻止する結界にあの者が弾かれた波動なのだ。

記憶の継承と同時に世界に張られた結界は最高指導者たち謹製の物故に早々破られるものではない。

この事実を今はまだ横島に伝える気はない……親御さんには既に伝えてあるが。

今の横島は未来の記憶を基準に考えて行動しておる。



あくまで救える魂助けられる命のために……じゃが。

これから更に横島は精力的に動くことになるう……だが全てを横島に背負わせる気は一切ない。

親御さんもそれは同じであるの者は自分達で抑えると断言した故に今はまだ伝えないのだ。

時が来れば明かすが、今は影ながら補佐し要らぬ芽はわしらで潰す  
としよう。

今度こそ不甲斐なさが露呈しないように……の！

S I D E O U T

「蛭様！素晴らしかったです！」

「すげー、まさに次元が違ったよな！」

「……え、ええ目指すべき高みは遥かに遠いわね。でも目指し甲斐があるわ」

「流石に俺には無理だが……師があそこまで凄いと誇り高いよな！」

「凄まじいわねえ、さっきの猿神ほとんど手加減してなかったわよ？本来こういうのは手加減するものなんだけどねえ」

「さつき横島様は最高で2000マイトに匹敵する攻撃を行っていましたよ!？」

『2000マイト?!?!』

「そ、それって小竜姫様と同レベルじゃ?!」

『おお……!!!』

意識が覚醒し扉を抜けて皆の下へと向かった彼女を出迎えたのは溢れんばかりの賞賛であった。

蛭は皆に詰め寄られて困惑していたが、老師が疲労困憊な彼女を休ませるべく解散させた。

開けて翌日

修行場に蛭と老師の二人がいた。  
第二の封印を解くためだ。

「それでは結界を張るぞ」

「はい、私は気を静めます」

前回と同じく、無の境地まで至りその時を待つ蛭。

既に第5チャクラまで開眼している蛭はその身に宿る靈気を静かに沈めていった。

「よし、此方は完了じゃ。始めよ！」

「……………」

合図と共に開放する封印の枷……………太極天のオーラ……………を解き放ちつつ己の身から溢れる靈力を制御下に置いていく。

蛭の身から溢れるのは靈力と妖力と……………竜気であった。

放たれる三色の力は螺旋を描きやがて蛭に収束する。

光が収まると其処には一段と靈圧を増した蛭がいた。

「竜の因子が目覚めたか……………メドーサと契約したからかおう？」

「ん？違うよ？封印の順番は決まっているから……………次に目覚めるのは魔力だしその次は神靈力、最後にルシオラの意識だよ」

「なるほど。それでこれから如何するのじゃ？」

当初の予定だった文珠は習得したので行動を起こすのは把握していたが如何するのかはまだ聞いていなかった。

唯、ヒヤクメを連れて行動する事だけは決まっていたのでその旨は最高指導者に告げてある。

「まずはドクターカオスを引き入れる。その後、母さんの所に紹介して新しい部署を作ってもらおうわ……オカルト専門の……ね」

「ふむ、それで？」

「後は幾つかの雑務と危険な悪魔が見つければ封印してきます」

「……それならばこの符を持っていくといい。これはわしの任意状じゃ。これがあれば例えGSでなくともそれ以上の権力の行使が出来る」

そついうと老師は懐から赤い文字で斉天大聖の御印が描かれた符を取り出した。

実はこれも記憶継承と共に製作した人界で効力を発揮する御免状なのだ。

これがあれば人界でいう所のS級ランク以上のGSと同じ行使ができ、更に国の要請なども無視できるのだ。

「いいんですか？そのような物を借りても？」

「構わんよ、元より渡す気で作ったのじゃ。人界の方にもきちんと連絡は行っておるから有効じゃ」

「ありがとうございます……それじゃ、皆のことは頼みます」

「うむ、親御さんも心配しておるじゃろうから甘えてきなさい」

「ははは、まあそれなりに……」

こうして蛭は下山していった。

下りる前に門前で見送ったヒヤクメ以外の者は一様に更なる修行を己に課すことを決意していた。

それも蛭の放つオーラが一段と強まっていたからだ。

妙神山で修行している者にとって相手の位階を見抜くことは容易であるだけに尚更身に沁みるのだ。

ちなみに現在の蛭の容姿と能力は以下の通りである。

横島蚩12才

黒髪をポニーテールにし赤いリボンで纏めている。

身長：145cm

B/W/H＝75/50/73

総霊力保存量＝300マイル（第二封印開放後）通常時30マイル  
まで隠蔽

チャクラ＝第五チャクラ開眼

霊能力＝霊波刀／霊波砲／式神操作／霊気の盾／竜気の籠手／霊視  
／ヒーリング／神通足／五行術

戦闘技術＝剣術（小竜姫の直伝）／気配遮断／霊力隠蔽／気孔系格  
闘術（猿神直伝）／縮地

基礎能力＝高校卒業程度の知識／高レベルの家事全般

補足事項＝自身の因子と太極天の因子以外に玉藻の因子とメドーサ  
の因子を契約時に貰っている／霊気・妖気・竜気を使用できる／力  
は完璧に隠蔽しているので看破されることはない

SIDE 美智恵

「ぐうう……い、一体何なの?! 時間移動できないなんて。以前と  
いい今回といい……何が起こっているの?」

私は美神 美智恵……GSだ。

つい先ほど来るべき未来の大戦に備えて時間移動をして未来に行こ  
うとしたのだけど何故か弾かれてしまった。

訳が分からない私はとりあえず魔族から見つかからないようにその場  
を後にした。

「何がどうなっているのか分からないけど……令子、貴女は私が守  
つて見せますからね」

とりあえず既に死亡偽装してあるから表に出る事は適わない。

今しばらくはあの人の所で潜伏しているべきでしょうね。

S I D E O U T

S I D E 大樹

俺は今とあるビルの上上である人物を監視していた。

隣には俺たち横島家についてきてくれた部下の黒崎君がいる。

「大樹様、どうやらあの者は見事結界に弾かれたようです……今はその衝撃で呻いているようです」

「うむ、どうやらそうみたいだな。こっちの魔族もワルキューレ殿が封印弾で見事封印したみたいだ」

事前に老子様に世界を覆う結界と魔族を秘かに撃退する正規兵のワルキューレ殿の存在を知らされていた我らは、それらが旨く機能するのを確認する為こうして監視したのだ。

それもどうやら旨くいったみたいだが……やはり愚かしい行動を取るのには変わっていないか？

「む、どうやら魔族の追撃を警戒して身を隠すようです」

「ふむ……もつともその魔族はもう封印されたのだがな。……まあ、双方共に監視を緩めるわけにはいかんが」

「蛭お嬢様の負担を軽減するためにもあの者の動向は確実に掴んでいなければなりませんからね」

そう、相手がどのような者であれ大人である以上それに対応するのにも我ら大人であるべきだ……愛する子供に危険が及ぶ可能性がある以上見過ごすつもりはない。

無論、我が対処するのはあくまで人のみ……魔族相手に自ら向かうなどといった愚かな真似はするつもりはない。

老子様の話では未来で私たちは神魔の上層部に捕まった拳句、忠夫を自由にする為自ら命を絶つたみたいだが……失う辛さを人一倍知る忠夫にとってその行為は最悪だったはずだ。

家族の為ならどんな苦痛でも耐えて見せる蛍にこれから先の悲しみを背負わせる気は一切ない以上我ら大人が対処するべきはあの者だ。少なくとも同じ人間である以上は負けるつもりはない……絶対に！

「当然だな。大人の領分は大人が担うべきなのだから。……黒崎君にはすまないがこれからもあの者の監視を手伝ってもらおうよ？」

「構いません！……貴方様に教えられた未来での出来事は看破できないことです。何より世界を救う為に全てを投げ出した忠夫様、そしてそんな未来にしない為に奔走されている蛍お嬢様に掛かる負担を少しでも軽減できるのであれば是非ありません！あれほど幼い身でありながらあれほど苛烈な鍛錬を泣き言も言わずこなし物事の本質を正しく理解できるお嬢様を手助け出来るのであればこの黒崎、何を持ってしてもこの任務成し遂げて見せましょう……！」

「そ、そうか。ありがとう（汗）」

黒崎君は優秀だし我らに尽くしてくれるので未来の情報を量しながらも伝えたのだが……それを聞いて蛍の有様を見てからというものどうやら蛍に殊更心酔した様なのだ。

未だあの者の事に対処していることがばれる訳にはいかないのであくまで部下としてだけ黒崎君を紹介するが、彼は蛍をお嬢様と呼び丸で往來の従者か執事のようにだ。

まあ、蛍の理解者が出来るのは喜ばしいことだが……蛍にばれた時嫌そうな顔されるだろうなあ（汗）

埒もなくその様な事を考えていると私の傍にワルキューレ殿が降り立った。

「大樹殿。私はこの封印弾を老師に渡すのでこれで失礼する。……」

あちらの者は貴方様に任せますゆえ、よろしく」

「ワルキューレ殿、今回の件は本当にありがとう。流石に魔族相手では我らにできることなど知れているから助かったよ」

「構いませんよ。……未来でのあのような結末認める訳にはいきませんから。蛭様の為になるなら是非ありません。私はしがない兵士ですからね……」

自嘲する様に話すワルキューレ殿。

おそらく上から教えられた自身の有様を知ったことだろうがそれは我らも同じこと……気持ちは分かる。

「貴女は既に自身がすべきことを理解している。なれば己を卑下するのは止した方がいい……そんなこと蛭も望まないだろうしね」

「……そうですね、全てはこれから。……では大樹殿！ワルキューレは任務を果たす為に帰還します！」

「了解した。此方は引き続き監視の任に当たる。老師様によろしく」  
「は！」

飛び去るワルキューレ殿を見送り私たちは雲隠れしたあの者の追跡を開始した……失敗は許されない。

その後、あの者……美神 美智恵の監視を黒崎君と信頼の置ける者達に頼むと家に帰った。

今日は久々に蛭が帰ってくるのだ。

S I D E O U T

S I D E 蛭

ヒヤクメを連れ添った私はとりあえず一度家に戻った。

先立って連絡だけ入れていたので母さんも父さんも居た。

「蛍！久しぶりだね！元気だったかい？」

「うん、ごめんね……前もって籠ること言ってなくって」

「いいんだよ、……うん、見違えるほど綺麗になったわね！」

「……………それはあんまり嬉しくない」（涙）

「

「ははは、諦める蛍！お前はもう完全に女だよ。少なくとも外見や  
仕草はな！」

「……………ねえ、母さん？あそこでなんか言っている人が居るけど誰？」

「さあ、誰だろねえ？（笑）」

「ああ？！すまん悪かったからそんな事言わんでくれ〜！（涙）」

『ははは』

家族の団欒を展開する私たちと忘れられたヒヤクメが居ました。（

ひどいのね〜）

その後、オカルト部門を立ち上げるべく話し合った。

途中で黒崎さんが現れた時には驚いたけど。

何でも母さんたちに惚れ込んで自ら横島家直属の部下になったらしい。

……………でも、黒崎さん……………蛍お嬢様は止めてほしいです（涙）

話も一応纏まり私は早速ドクターカオスを迎えに行くことにした。

既にヒヤクメが現在位置を割り出しているので行き先は決まっている。

「蛍、ドクターを連れてきたら私たちは彼を世界GS協会の顧問にするべく動くわ。だから絶対ボケは直しておくんだよ？」

「判ったわ、これは責任重大ね。まあ、文珠の出力も格段に上がっているし何とかなるでしょ」

「彼の事務所として家が買占めた邸内に造るからそのつもりでな



？戻ってくる頃にはそつちに居るからそのつもりで」

「そういえば随分広い土地と屋敷を買い占めていたけど……六道家程ではないけど結構広かったよね」

「家は世界の横島だよ？これからの事を考えると必要だしね。貴女もお嬢様になるんだから素行に気を付けなさいよ？」

「……そこに落ちるんだね、結局（涙）」

閑話休題 - - - - -

此処は某国の地下鉄トンネル内。

あれから母さんと大量の料理を用意しそれを包んだ。

カオスがどうせ腹を空かせているだろうと言う読みの為だ。

私たちはヒヤクメのレポートで飛んだ後、探り当てた棲家へと向かっていった。

「ヒヤクメ、此処で合っているの？」

「ん、もう少し奥に隔離された空間がありますね。こっちです」

「さて、上手く事が運ぶかは交渉しだい……腕が鳴るわね」

「横島様はそういうこともお得意なのですか？」

「ん？まあ得意かどうかはともかく母さんに結構鍛えられたからね

……と、此処ね？」

辿り着いた其処は何の変哲もない壁。

しかし霊視すると扉が浮かび上がり取っ手が見えた。

蛸はまず扉を叩いて訪問を知らせることにした。

数回叩き開け放たれた扉から顔を出したのは記憶に懐かしい人造人間M-666名称マリアだった。

S I D E O U T

S I D E カオス

私はドクターカオス。

ヨーロッパの魔王などとも呼ばれている不死の錬金術師だ。

その日も完全な不老不死や若返りの秘法を編み出すべく研究しておった。

日夜衰えていく記憶力と格闘しつつ何とか事を成そうとしているのだがどうにも上手くいかない。

そんな時、あの少女は現れたのじゃ。

私の千年を越える人生に大きな節目を与えるあの少女が……いや、実際は男だったわけだけど。

「ドクターカオス、お客様のようです」

「誰じゃ一体？マリア丁寧に帰ってもらえ、私には研究という大事な仕事があるでな」

「イエス・ドクターカオス」

そういつて戻っていったマリアは数分後何故か客を連れて戻ってきた。

一人は10才過ぎの小娘、一人は不思議な様相をした娘……この波動は……神族か？！

まさかの訪問者に驚いていると小娘の方が話しかけてきた。

「御免なさい、ドクターカオス。突然の訪問で悪いけど私の家で働かない？貴方が今望んでいる対価を用意するから……ね？」

「む、私の望む対価だと？お主の様な小娘が用意できるわけがあるまい。私が望んでいるのは……」

「完全なる不老不死と若返りよね？」

「?!そ、それを知っていて何故さっきのようなことを言う!？」

私の言葉を遮って口にした言葉は正しく私の望んでいることだった。しかし解せない……それを知って尚何故先ほどのようなことを口に

するのか？

見れば小娘……横島 蛭と名乗った……がこちらを見て微笑んで  
いる？

「言ったでしょう？用意すると。流石に完全なる不老不死は無理だ  
けど若返りなら今すぐにも用意できるわよ？」

「な?!」

「私としても貴方には若返ってもらって一時的に脳細胞を活性化さ  
せ記憶層を作って痴呆になるようなことがないようにして欲しいか  
らね」

こやつは今なんと言った？

今すぐにも用意できるだと……一体どうやって？

その後続いた言葉はなるほど今の私の状態も把握しているのだろ  
う。

なれば先ほどの言葉も嘘ではないのだろう……確かに今の私は物忘  
れが激しく連れて行ったところで大して役に立てまい。

「……私に何を望む。横島 蛭よ」

「くす、流石稀代の錬金術師。ヨーロッパの魔王ね……私の言葉が  
真実だと分かったようね？」

「あれだけ言われれば嫌でも分かるわい……で？」

「貴方には横島家直属のオカルト対策事務所の第一所長と世界GS  
協会の顧問をしてもらいたい。……もっとも記憶層の完全確保と  
ボケの完治が前提だけだね？」

世界GS協会の顧問じゃと？

そういえばこの間片手間に世界情報を読覧していたらGS規約の革  
新が起きておったな。

あれにこの小娘が係わっておるのか？

……世界か。

「ふふふ、面白い。世界を相手取るか……良かるう！お主が私を若返らせられるのであればその申し出受け入れようではないか！」「交渉成立ね？じゃあ……受け取りなさい！」

そういうと蛭は私に向かって光る珠を投げつけた！  
その珠が私に当たった瞬間辺りは光に包まれた。

「 - ツ?!くうう、一体……?ん  
?。」

「どう?およそ600才若返ったはずよ?」

「お・おお……おお - - - - - つ?!!頭が……すつきりする、ゾ - - - - - ツ!!!!」

「はいはい、分かったから落ち着きなさい。……で、記憶層の方はどう?思いつきそう?」

「……うむ、何とかなるぞ。少しばかり材料が心もとないが……」

「そこはこっちのヒヤクメに探してもらうわ。この子はそういうのに特化しているから」

「なるほど、ならば……これらが必要分頼む!私は出来る範囲で作業を進めておこう!」

「そういう訳だからヒヤクメ?ちよつと行って来てくれない?私はドクターに説明しなくちゃいけないことがまだあるから」

「分かりました横島様、これぐらいなら3時間程度あれば集められるはずだから待っていて下さい」

ヒヤクメと呼ばれた神族はそういうと瞬間移動で消え去った。

しかし横島様……とは、あの神族はこの蛭という小娘に従っているのか?

いや、それよりこの脳裏に浮かぶ記憶は……まさか、そうか……そ

ういうことか！

「それでドクター？私の説明をしたいのだけど……いいかしら？」

「ふふふ、いや……その必要はないぞ？我が盟友よ。中世の頃にも会ったな、あの時は助かったぞ」

「？！そうか、若返って過去のことも思い出したのね？……でも中世？その時会ったのは私だけ？」

「いや、……と、今語るのは止めておこう。未来は不確定ゆえに面白いのだからな」

「！……確かにそうね。私もやきが回ったわ」

直ぐに私の言いたい事に気づき己の様を嘆く蜚。

ふふふ、我が盟友は相変わらぬようだ。

彼女の真の秘密はまだ聞いてはいないが、とんでもない内容である事は間違いないはず……私の頭脳がそう確信している。

あの見返りを求めず唯他人を救うことに一生懸命な蜚のあり方は、研究第一の私にとってマリア姫と同じぐらい衝撃を与えたものだ。なればこそ私も精一杯彼女を補佐しなければ……な。

「お主の事についてはいずれ機会を見て語ってもらおうとしよう。マリア、記憶層の完成を持ってこの住処は廃棄するから荷物を纏めてくれ！」

「イエス・ドクターカオス！」

「まあ、ドクターがそれでいいなら私は構わないけど。……さっきの文珠の効果は……大体三日は持つからその間に記憶層を作った後で本物の若返り薬を作りましょうね」

「私のことはカオスで良い。それと若返りもそう急がなくても良いぞ……記憶層さえ確保できれば余裕は出来るしの」

「うん、万が一を考えて出来れば早めに若返って欲しいわ……私としてはね？」

「まあ、そこら辺は後にしよう。今は記憶層の確保と住処の撤収が優先だ……お主は其処で茶でも飲んでおれ」

私はそういうと作業に取り掛かった。  
新たな時代の流れに乗るために……。

S I D E O U T

時間は経って夕暮れ時、ヒヤクメの頑張りもあって見事記憶層……正式名称【レ・コレクト】……を完成させた。  
その後、日本にある住処にも重要な資料等があるとの事で回収するために飛んだ。  
今は蛭たちが持ってきた食事を暖めて食しているところだ。

「うむ、美味しいな。久方ぶりのご馳走じゃ」

「それは良かったわ……マリアも食事できたらよかったんだけど」

「ノー・プログラム。ミス、蛭。私は、平気です」

「そういう意味じゃないんだけどね」

「？」

首を傾げるマリアに苦笑を更に深め何でもないと言って話を切り替えた。

「カオス、明日にでも事務所に行くわけだけどそれはヒヤクメに案内してもらってくれない？」

「む、お主は別行動か？」

「まあね。ついさつき覚えのある波動を感知してね……今からそっちに行ってみようと思うのよ。もし考え通りなら強力な味方が一人増えるかもしれないから」

「？横島様、それって誰ですか？」

「日本でも有数の呪術使いだよ」

蛭はそういって微笑んだ。

#### 第四章↳迷い子に愛の手を？（後書き）

細かな点、気づいた事があれば感想を添えて申し上げて貰えると嬉しいです。

次回は少し早めで6/21の8時頃です。



## 第五章↳迷い子に愛の手を？（前書き）

ちよつと詰め込みすぎた感のある……というか登場人物が多い第五章です。

それではどうぞ。

## 第五章　迷い子に愛の手を？

S I D E　エミ

私は小笠原　エミ、15才の……殺し屋だ。

今日も公安の依頼でターゲットを呪殺した後何時ものように手を洗っていた。

消えない汚れを落とすように……何度も、何度も。

そんな私に一つの転機が訪れた。

依頼完遂時に出会った幽霊の子供の言葉が私の体に巻きついていて呪縛を解き放ったのだ。

私は一人になって以来流したことのない涙をこぼした。

それは恰もこの身にこびり付いた穢れが洗い流されていくかのようで……何時までも流し続けた。

その後私は殺し屋家業を終わらせる為いつもは完殺する為に展開している魔方阵を一段階下げた。

横で使い魔のベリアルが五月蠅く言っているが知ったことじゃない。もう私はこんな世界とは縁を切るんだ……完全には無理でも。

………だけ

ど、現実は厳しく。

突如溢れる霊気の波動……そして現われる無数の幽霊達。

そしてベリアルは幽霊達に束縛され、私は先日の子どもの幽霊に囚われた。

私は一瞬この子を疑ってしまった。

だけど実際は違った。

死霊使いによってその感情を利用されただけだったのだ。

「ヒヒヒ！ひろいものデシヨウ！？この外見とセリフで、何人も呪術師がコロツとやられてマス！」

「前言撤回だ、クソ野郎……！！今日はまだ……………」  
「……………（その続きは言わなくていいよ？）……………ツ！？」

「ナ、何ですか?!この異常なまでの霊圧ハツ?!！」

私の台詞を遮る念話と辺りに突如押し掛かる圧倒的な霊圧。

でも、その霊圧は幽霊達を死霊使いの呪縛から解き放つのみで決して傷つけはしなかった。

『キキイイツ!?!ナ、何なんだこの霊圧はツ?!何で俺だけに牙をむくんだつ?!』

「ベリアルツ?!」

「ぐう……………み、身動きが……………ツ?!」

「!?!」

唯、ベリアルと死霊使いだけは別のようであるのでその凄まじい霊圧によって押さえつけられていた。

訳が分からなかった私だけど、其処に足音が響いてきた。

「何でつて、当たり前でしょう?貴方のような危険すぎる劇物は縛って金庫に入れて溶岩の中にも放り込まなきゃ」

『キキイイ?!そ、そんな事したら死んじまうじゃないかキイ?!』

「……………ツて誰だキイ?!」

「貴方は黙ってなさい……………そっちのろくでなしもねツ!」

「ゲツ!?!」

現われたのは一人の少女だった。

彼女はベリアルと死霊使いを一気に黙らせるとその身を封じた。

「全く、命を好き勝手弄くるなつてのよっ！……おいで」

『おねえちゃん、だれ？』

「ん？私は横島 蛭っていうの。君は？」

『ぼく、ぼくのなまえ。わからない……』

「そっか。……ねえ、君はどうしたい？このまま成仏したい？それとも何かしたいことある？」

『ぼくは……ぼくはさっきなにをしていたの？』

少女……蛭は子供の幽霊を招き寄せると色々訪ね始めた。

それは尋問のようなものではなく唯子供が如何したいか何を望んでいるかを訪ねているだけだった。

そして子供が口にする問い……それはありえないことだった。

残滓に過ぎないはずの幽霊が明確な意思を持った問いを告げる……そんな事が目の前で起こっていた。

「うーん、君はさっきそこのお姉さんとお話していたんだよ。君に助けてもらったお礼を言いたくてね？」

『おれい？』

「君は覚えていないだろうけど……確かに君はお姉さん、エミさんを助けたんだよ……そうですよ、エミさん？」

「……ツ？！え、ええ……私は君に助けられたワケ。

君の言葉があつたおかげで私はまともに戻れたのよ」

『……ぼくは、やくにたつたの？』

「！……それ以上よ！君の言葉は何物にも勝る最高の言葉だったわ  
！」

『おねえちゃん……ありがとう！』

子供はそういうと笑いながら天に昇っていった。

その微笑みは確かに意思ある笑みだった。

「……お疲れ様エミさん。貴女は間違いなくあの子を救えましたよ？私にはあの子の意思を強化することは出来ても真に救うことは難しかったですからね」

「……貴女なら浄霊する事もできたんじゃないの？それほど規格外な霊圧を発することが出来るなら」

「うーん？確かに強引にならできますけど……そんな相手の意思を無視するようなことはしたくありませんから」

「そう……それで私に何か用があるわけ？てっきり殺し屋家業をしていた私を捕まえに来たんだと思ったけど……私だけ何の束縛も受けてないし」

もっともこの子ならそんな事しなくてもすぐさま無力化できるだろうけど……ね。

だけど、彼女はそんな私をキョトンとした目で見た後笑い出した。

「あはは、そんな事しませんよ。エミさんがもう殺し屋家業から足を洗うのは既に把握していますし、貴女なら正しく呪術を扱える人に成れると思っっていますから……」

「……ッ！……そうかしら？盗みや体を売ることが嫌だったからって殺し屋になるような私が……」

「成れますよ」

「……」

自嘲する私に彼女ははっきりと言い切った……私の眼をはっきりと見詰めて。

私を見詰めるその瞳は今まで見てきた誰よりも圧倒的に深く優しく強い眼差しだった。

私はその眼差しを受けることがひどく罰当たりな気がして目を逸らそうとしたけど出来なかった。

「…………ふむ、そうですね。それじゃあ、私の家に来てもらおうかな？」

「…………え？」

「私の母さんなら貴女を今以上の良い女にしてくれますよ？これは絶対です」

「…………？……………ツ！？で、でも私は元とはいえ殺し屋でその悪魔を使役している身よ？！」

「元でしょ？家の者はそんな事にしませんよ？それにその悪魔は今から完全に封印しますから」

『キキイイ？！俺を完全に封印だと？！そんな事ツ……………』

「はい、黙っていてようねえ…………魔なる者よ！汝の永遠は無価値なり！今此処に意味ある礎を築き、汝に永久の束縛と刹那の墮天を与えよう！さすれば汝は真実に成ろう！」

『キキイイツ？！そ、その言霊はツ！？や、止める！』

蛭が唱えだした呪文にベリアルが焦りだした。

私には意味まで分からないけど、ベリアルの様子から尋常ではない物であることが分かる。

「汝は我の意思の元、封絶の彼方で踊れ！舞え！眠れ！！」

『キキイイツ……………！！』

私の前でベリアルが何の抵抗も出来ずに封印されていく。

あの本体は強力な悪魔が、例え呪縛されていてようとどうにかすることなど出来ない筈だった悪魔が…………。

蛭は封印して小さな珠になったベリアルを自らの影（！？）にしまうと此方を向いた。

「これで問題ないよね？」

にっこり微笑み問いかけてくるが、はつきり言ってこれは脅しといつてもいいんじゃないだろうか？

私にはその天使のような微笑が悪魔の微笑みに見えた。もつとも私に抵抗する気力なんてなかったのだけど。

「……………分かったワケ。貴女について行くわ」

「良かった！じゃあ……………」と、あのろくでなしをどうにかしとかなないと……………ね」

そういうと蛸は、唸り少し考えてからどこかに連絡を入れた。

その後とりあえずこの倉庫に残った幽霊達の残滓を鼻歌まじりに一つ一つを丁寧に浄化していった。

その様は花を愛でる乙女の様で……………冗談交じりにそれを言ったら蛸は盛大にずっこけた。

「……………ツ！？私・はっ！これ・でも・男・だっ！」

「……………ツ？！えっ？……………冗談でしょ？！」

その後どうして女の子にしか見えない格好をしているのかとか、女の子にしか見えない仕草をしているのかとか一つ一つ丁寧に説明された。

その様は見ていて面白かったが、一つだけ気になることがあった……………。

他でもない蛸に此処まで完璧な躰をする人がいる家に行って自分は大丈夫なのかということだ。

「……………死なば諸共だよ？エミお姉ちゃん？（黒笑）」

「？！あ、貴女それが本当の目的ツ！？」

そんな馬鹿なやり取りをしていると一人のやり手風のサラリーマンがやって来た。

「蛍お嬢様！お呼びに従い来ました！」

「？え、何で黒崎さんが来るの？私はてっきり父さんが来ると思っただけけど？」

「大樹様は現在百合子様様の作業を手伝っていますので……この程度の雑事はわたくしめに今後もお任せ下さい」

「そう？それならそいつを徹底的に今までの行いを吐かせた上で刑務所にでも放り込んでおいてくれる？能力は完全に封じておいたからもう悪さは出来ないだろうけど……ね？」

「承知いたしました。では、これで！」

これでもかかって言うほど丁寧な佇まいで蛍に接するその青年は死霊使いを担ぎ上げると去っていった。

……っていつかいつの間に能力封印なんてやったのかしら？

蛍は去ってゆく青年に手を振っていたが視界から消えると此方に向いていった。

「さて、それじゃあ行きましようか？貴女の新たな家に！」

「……ええ、そうね」

とりあえず、この子についていけば何かが変われるという確信めいた物はあったのでついて行くことにした。

私はもう一度子ども達の幽霊が消えていった天井を見上げると心の中でサヨナラを言い、その場を後にした。

生まれ変わる一步を踏み出すために……。

SIDE OUT



時間は深夜。

蛭たちは倉庫街を後にするととりあえず職質に会わないように速やかに帰宅した。

途中、人目を避けるために気配遮断や神通足を使ったが何とか無事に着いた。

もつともつき合せられたエミの方は様々な意味で疲労困憊だったが……。

家に着いた時横にいたエミは顎を落として目を見開いていた。

まあ、その気持ちも分からなくはない。

目の前に立つ屋敷はかの有名な六道家程ではないが大きく、しかしどこか親しみのある暖かなものだった。

その大きさは豪邸に等しいが今はまだ家族以外では黒崎ぐらいしか住んでいない。

たまに百合子たちの部下が泊まることもあるだろうが基本空き部屋ばかりだ。

もつとも意味もなく見栄で建てたわけではない。

蛭がこの先連れてくる助けた妖怪や知人などを住まわせるのが一番の目的だ。

そしてその第一号と第二号は既に到着しているはずだ。

「凄い屋敷ね……私なんかこんな所に住んでもいいのかしら？」

「ん？別に気にしなくてもいいんじゃない？今はまだ少ないけど、これからどんどん住人は増えてく予定だからね？」

「増える？」

「そうだよ？つい先日稀代の錬金術師・ドクターカオスとその助手の人造人間マリアの二人が住む事になったし、保護したりする妖怪なんかも住む予定だから」

「……あのヨーロッパの魔王が？」

啞然としているエミを他所に邸内に入り長い道を経て屋敷に辿り着くとチャイムを鳴らした。

出迎えたのはメイド服に身を包んだマリアであった。

「蛍お嬢様、お帰りなさいませ。ご無事で何よりです」

「ただいま、マリア。無事にエミさん連れてきたよ。母さんに伝えてきてくれる？直ぐに居間に行くから」

「はい、かしこまりました」

蛍の言葉を受け一礼して去っていくマリア。

どうやら既に一通りの教育を百合子から受けているようだ……何気に発声が流暢になっていた。

蛍はエミを連れ居間にいくと既に百合子と大樹が寛いでいた。

「お帰り蛍。始めましてエミさん。私は蛍の母の百合子と申します。こっちは夫に大樹です」

「始めましてエミさん。まあ、色々混乱しているだろうが楽しんでくれたまえ。マリアさん、お茶を」

「はい、かしこまりました」

「……すっかり板についているね、マリア。まあ、元々カオスの世話をしていたんだから違和感なんてないけど」

「私も助かるわ、マリアさん優秀だから」

和気藹々と話す蛍たちを他所にソワソワするエミ。

そんな彼女に気付いた百合子が合いの手を入れて会話を元に戻した。

「さて、エミさんにはこれから家族として此処に住んでもらう訳だけど……何か質問はあるかしら？」

「えっと……私は、その……元とはいえ殺し屋でしたけど宜しいの

ですか？」

「構わないわよ？既に貴女の経歴は把握しているけど、確かな証拠になる物は全て此方で抹消してあるから気にしなくてもいいわよ？」

「ああ、公安の方や君とそりの合わなかった叔母の方もきっちりけじめはつけておいたから心配しなくてもいい」

「エミ姉さん……だから言ったでしょう？そんな事私の家族の前には何の意味もない事だつて」

「うん……あと、家族に成るといのは？」

「貴女さえよければ横島の姓を名乗らない？そうすればより変なちよつかいを掛ける者も居なくなるしね？私としても娘が増えるのは嬉しいし」

「……母さん？娘が増えるってどういうこと？私はあくまで息子だからね？」

「まだそんな意地張っているのか？別に玉藻ちゃんやルシオラさんと一緒になるのに不都合はあるまい？」

「き・ぶ・ん・の・も・ん・だ・い・な・の！」

何処から如何見ても女のそれな蛸が男を主張する様は傍から見ていると笑いを誘った。

その後エミは特に小笠原の姓に拘りは持っていないだったので横島を名乗ることにした。

「さて……私からの質問だけど、エミ？貴女はこれから如何したい？」

「……私は呪術師です。これはきつとこれからも変わりません。ですからこの特技を生かせるGSに成ろうかと思えます」

「ふむ、良いのではないかな？今百合子が世界GS規約を改定しているが……それでもエミなら上手い事やれるだろう」

「？規約の改定ですか？」

「あゝ、母さん言っていたわね。今のGSあり方や報酬では何れ

経済が破綻するから根底から換えるって……成功したんだ？」

「ええ、ザンス王家も世界GS協会の幹部達も私の提案と改定内容に満足してくれたみたいでね……来月初旬に報道されるわよ」

「……ってことは、新規約が浸透して体制が整うまで大体二年ぐらいはあるかな？」

「そんなものね。ふふふ、世界が揺れるわよ？何せ今までぼろい商売として幅を利かせていたからね」（黒笑）

「百合子……（汗）」

不気味に笑う百合子に引く大樹やエミを他所に蚩は一人別のことを考えていた。

そして考えが纏まるとエミに向けてそれをぶちまけた。

「ねえ、エミ姉さん？今より更に強くなる為にも妙神山に行かない？ベリアルなんてものに頼らなくてもいいように」

「？妙神山って……確か、霊能者の修行場だったかしら？」

「うん、本来なら限界まで修行した者が行く所なんだけどね？今は特別にご招待します！」

「蚩？せつかく娘が増えたって言うのに私から取り上げるの？」

「か、母さん。別にその心配はないよ？老師に亜空間トンネルをこの屋敷と繋げて貰うから家族の団欒は確保できるよ」

「あら、そうなの？それなら良いわ！」

と、なんだか知らない内にエミの妙神山修行入りが確定した。

その後、夜も遅かったので軽く汗を流して就寝となった。

この日、エミは久しぶりにぐっすりと眠ることが出来た。

SIDE ????

私は、いつまでこうしていられるのでしょうか？

……！この波動は！？

……温かく、大きい……あの方なれば？

……いえ、あの方しか居ない！

今、私に残った……力を使って……どうか！この思い、受け取ってください！

……我が主よっ！！

S I D E O U T

S I D E 蛭

「？……ツ！？こ、この波動は？」

深夜、漸く眠りに落ちようかという時突如私に霊波が届いた。

それはどこか懐かしく、思い返せば記憶に付随していたある存在の物だった。

しかし、その者とは未だ出会っておらず向こうも知らない筈なんだけど……？

「……とにかく明日妙神山に行く前に確かめて見ましようか」

私はそう決めると先ほどの霊波の発信源辺りに目掛けて明日赴く旨を乗せた言霊を送った。

その後私はそれが届いたかどうかを確認することもなく眠りに着いた。

翌朝、カオスを連れてとある場所へと赴く私。

記憶を頼りに辿り着いた其処には記憶通りの建物があった。

「蛭よ、そろそろ説明してくれても良かるう？この建物は何だ？」

「あれ？分からない？」

私は頭を捻っているカオスを他所に屋敷に向かつて問いかける。

「さて、来てあげたわよ？ 洪鯖人工幽霊番号？」

「！？ 人工幽霊だと？ なるほど、これがわし以外で唯一成功した人工魂か！」

『……貴女は私のことを知っていますか？』

「ええ、多分他の誰よりもね？ それで？ どうして私に波動を送ったの？ あなたの事情は把握しているけど、私の事は知らなかった筈……」

『先日、海岸沿いの方から強大で暖かな霊波を感知しました。これまでにない優れた波動でした。貴女も知ってのとおり私は主を求めています。どうか……』

ああ、先日の倉庫街の時放った霊圧のことか……結構迂闊な行動だったかなあ？

……まあ、いいや。

過ぎたこと考えても仕方ないしねえ。

でも如何しよう？

「ねえ、あなたの本体ってその屋敷から移せたかしら？」

『……少しばかり手を加えれば可能だった筈です。あの……私の願いは……？』

「ちよつと此処に居を構えるのは不味いからね？ あなたが本体を他所に移しても良いって言うのであれば喜んで主になるわよ？」

『おお！ なれば屋敷に入って下さい。私の本体の移動手段を語りましょう！』

喜びを隠さず招く人工幽霊番号に私は苦笑した。

屋敷内に入ると薄汚れてはいるが掃除をして少し補強すれば使える内装が目に入った。

記憶に従って人工幽霊番号の先導を待たずに突き進んでいく。

「それで？居間に行けばいいの？それとも書斎？」

『……本当に私のことを知っていらっしやるんですね。あ、居間でいいです』

「了解」

辿り着いた其処には一枚の書類と水晶球、そしてコート姿の人影が佇んでいた。

「……なるほど、契約書にサインをし水晶球を手に取りあなたの靈魂を一時的に宿せばいいのね？」

『……出来れば私に説明させて欲しかったです（涙）』

「まあまあ、それじゃあ……と、これで後は……そういえば此処をあなたが離れるとこの屋敷はどうなるの？」

『別に如何もありませんよ？ただ私が此処から居なくなるので所有権が失われますけど』

「ふむ、それは勿体無いなあ……よし！此処の土地も買い取っておきましょう。ついでに隣の空き地もね（笑）」

私はそう決めると早速黒崎さんに電話をして土地の所有権などを横島所有の物にした。

その後、人工幽霊番号を自分に宿すと事務所にとって帰った。

「しかし蛍よ……何故態々私も連れて行ったのだ？」

「？この事務所に移すとはいえ元の彼を見ておくのも良いものでしょう？」

「なるほど。確かに……な」

『お、おお………ッ！！全身に素晴らしい密度の霊力が行き渡りました！今迄で最高の状態です！』

「それは良かったわ。基本私は出かけることが多いけどこの事務所には守るべき者も住まわせるつもりだから結界の方もよろしくね？」  
『お任せを！これほどの供給がされていれば従来の倍の結界が張れます』

「うん……さて、それじゃあエミ姉さんと妙神山に行ってくるからカオスは事務所でGS規約の方把握しておいてね。2年後、エミ姉さんと同時期に資格も取ってもらうから」

「任せておけ、頭脳がハッキリした以上そんじょそこらの者に負けるつもりはない！油断もせんがな」

意気込むカオスに頷いて私はその場を後にした。

家に戻るとエミ姉さんは母さんによって着せ替え人形になっていた。私は苦笑しながらも母さんに今から妙神山に行くことを告げてエミ姉さんを解放してもらった。

「うー、酷い目にあったわ。百合子母さんてば手加減なしに着せ替え人形にするから疲れたワケ」

「あんなの序の口だよ？まあ、その内代わりが増えるからそれまで我慢してね？」

「……………（涙）……………まあ、嫌じゃないけどね。百合子母さん優しいから」

そういつてくすぐったく笑うエミ姉さんに微笑み返して私達は妙神山に向かった。

SIDE OUT

SIDE 百合子

私は今ザンス王国に来ている。

隣には蛍が付けてくれたヒヤクメさんがいる。



今回の訪問はこれまでに行ってきた世界GS規約改定に伴う精霊石輸出の効率化を纏める為だ。

既に私はザンス王国において王室に招かれるほどに親しくなっているが油断はしていない。

未来においてテロが起こるくらいである。

用心に越したことはない。

「おお、ようこそおいで下さった。ミセス・横島。歓迎しますぞ」

「これは国王陛下自ら、お招き頂きありがとうございます」

「なに、貴女様のお蔭で我々は多大な恩恵と娘の精神の成熟を得られましたからな。この程度何ほどの事でもございません」

親しみのある笑顔で出迎えてくださった陛下や重臣たちと共に食堂へと行く。

そして既に用意されていた食事を取りながら近況やご息女の様子を語っていく陛下。

私はそれに自分なりのアドバイスを告げていく。

そして食事会も過ぎ、資料開示の為移動する際ヒヤクメさんが念話を飛ばしてきた。

そう、案の定潜んでいたという訳だ。

「陛下。少し離れた所に暗殺者が潜んでいます……お気をつけて」

「!?!?……了解しました」

その後出てきた暗殺者は不意を付けずあつという間に捕縛された。

私は自爆テロの可能性も考えそれを伝え何とか不発に押し留められた。

終息後、礼を述べる陛下達に自分の手柄ではなく娘が万が一を考え付けてくれた神族のヒヤクメさんのお蔭だと言っておいた。

それを聞いた彼らは驚き蛸とヒヤクメさんには是非御礼をと言ってきた。

たが断つておいた。

「娘はその様な事は望みません。陛下は既に知っておいででしょう。あの子は唯守りたいだけです」

肅然と語る私に陛下はそうであつたな……と、眩き目を伏せ小さく此処には居ない蛭に礼を呟いた。

さて、今のやり取りで分かつただろうが、既に陛下には蛭の宿命を教えてある。

その証拠となる映像を蛭に預かつていた文珠で見せたのだ。

これは私の独断だが、陛下は迫る危機の為に全面的に協力してくれることを誓ってくれた。

だからこそ私は自分の持てる全てを使ってザンスに貢献してきたのだ。

その後、甘えてくるキャラット王女の相手をしつつ陛下に娘の現状や世界の情勢を語った。

既にザンスは世界に向けて羽ばたき始めている。

世界GS協会も更に力を入れて規約改定に乗り出すだろう。

さて……、この時間軸では日本政府はどういう風に動くかしらね？蛭の記憶と変わらない動きをするようなら容赦なく叩くから気をつけることね（黒笑）

S I D E O U T

S I D E 雪之丞

俺の名は伊達 雪之丞。

白龍寺に世話になっていた者だ。

しかしある時、師匠である竜神のメドーサ様が俺と他二人を連れ出しました。

何でも妙神山という霊能者にとって最高峰の修行場に連れて行ってくれるらしい。

俺達は俄然喜んだ。

俺達は何より力を欲していたし、そんな所に連れて行ってもらえるということは優れた才能がある証拠だからだ。

虚弱でママに甘えていた俺が強くなることができる可能性を秘めた霊力……それを最高峰といわれる場所で鍛えられるからにはとことん強くなつて見せるぜっ！

そう気合を入れ向かった先は人外魔境な登山道だった。

まだ小童であった俺達にその道は険しく何度も落ちそうになったが何とか必死に着いて行つた。

そして辿り着いたその場所は巨大な鬼面を携えた門構えだった。

メドーサ様はとりあえずの腕試しだよ……と言つて俺達を鬼門という鬼と戦わせた。

結果は結構なダメージを受けたが何とか突破することが出来た。

はつきり言つて勘九郎が居なければまず無理だっただろう……癩だが、それが事実だ。

その勘九郎も結構傷ついていたが。

その後、通された先で俺達は出会つた。

運命に。

そう、正にそれは運命だった。

通された先の居間で昼食を前に雑談していたであろうその少女は其処にいた。

後で知つたことだが、その雑談相手は神界でも屈指の武神である齊

天大聖だつていうのだから驚いた。

字の通り天に等しい實力を持ってしている猿神を相手に気負うことなく自然体でいる少女は俺たちから見ても異質だった。

.....そう、未だ世界を知らず当り散らすことしか知らなかった俺達からすれば.....。

もっとも彼女はそんな俺達の現状などとつくにお見通しだったようだが.....。

とりあえず、勘九朗が予てより気になっていた白龍寺の皆のこれらを聞いた。

それに対する返答は安心すべきものだった..... もっとも俺は、つい先ほどまで彼らのことなど忘れていたのだが。

その後の質問.....メドーサ様相手にまるで対等に相対している様を何故か尋ねた。

相手は竜神であり、人が絶対的に適わない者である筈なのに.....彼女の在り方は俺には不可思議以外の何者でもなかった。

そして、それに対する返答とそれに続く言葉は俺の心を揺さぶった。

つい、彼女に殺気

混じりの視線を向けてしまつぐらいに.....。

力を求め、誰よりも強くなりたいと願う俺からすれば竜神すら打ち倒せるように成れると言う彼女の存在は認め難いものだったからだ。もっとも剣呑な雰囲気醸し出す俺はすぐさまメドーサ様に諭されたが。

詳細は語られなかったが、背負う物が誰よりも大きく険しい道のみが待っていることを知らされると俺は自然と彼女に対する嫉妬心が薄れていった。

そしてメドーサ様の後に続いた彼女の言葉が不思議と俺には尊く感

じられた。

..... 気負うことなく自然に紡がれるその言葉は、俺の中にあつた黒い物を洗い流していった。

それから先のことは特に語ることはない。

彼女の……師匠の底の知れない力の強さと心の強さ、そして俺たち自身の世間知らずの程が露呈しただけだから。  
だから俺は邁進する。

師匠についていけば俺の知らない世界が見えるだろうから。

だから師匠……俺を導いてくれよっ!?

「貴方の師匠はあくまでメドーサと小竜姫よ？私は姉弟子なんだから師匠なんて呼ばないですよ」

師匠 ..... ツ?!

S I D E O U T

S I D E 蛭

全く、雪之丞にも困ったものだわ。

私は師匠じゃないって言っているのに……。

「随分懐かれているじゃない。別に良かったんじゃない？師匠と呼ばせるくらい」

「駄目よ、エミ姉さん。師弟関係って言うのはきっちりしとかないと駄目なんだから。お互いの為にもね？」

「そんなもの？」

「そんなものよ？真の師を他所に他の者に浮気するような者に真の強さは得られないわ……未熟なら尚のことね」

「……そう（如何見ても蛭が師匠のように見えるけど）」

私は妙神山にエミ姉さんを連れて戻ってきていた。

既に修行内容は説明済みで主にチャクラの開眼と神楽舞、合気道の習得をしてもらっている。

エミ姉さんは既に自然にとはいえ第三チャクラを開眼済みなので第一チャクラから開眼するようにしてもらっている。

普段から何気なしにしていた靈気の練り方がチャクラ開眼に繋がっていた事を知ったエミ姉さんは何でもやっておくものねえ、と喜んでいた。

おそらく他のチャクラも比較的抵抗もなく開けるはずだ……もつとも、人に比べればというレベルだが。

チャクラ開眼の行は雪之丞たちと共にやっているので互いにいい刺激になっているようだ。

四人の中で最終的に多く開けるのはエミ姉さんか……条件付で勘九郎だろう。

神楽舞と合気道の方は小竜姫及び私と共に修練している。

呪術の一つとして既に呪的な踊りをする事で放たれる霊体撃滅波を習得していたエミ姉さんには合っていたらしくより軽やかな動きが可能となるだろう。

霊体撃滅波にしても他のチャクラを開眼すれば大量の靈力をより素早く練ることが出来るようになるので格段に強力になる。

おそらく最終的には合気道術で相手を翻弄し神楽舞の動きに呪的動きを絡めることで隙を見て撃滅波を放つという戦闘方式になるだろう。

後はどれだけエミ姉さんが自分の引き出しを増やせるかに全てが掛かってくる。

ま、エミ姉さんなら大丈夫だろう。

二年後の資格試験が楽しみだ。

S I D E  
O U T

第五章↳迷い子に愛の手を？（後書き）

次回投稿日6/24の7時を予定しております。  
ご意見感想お待ちしております。



## 第六章　未だ遠き未来への展望（前書き）

時間移動の詳細に判断が付かずちぐはぐな所が今後出てくるかも  
れませんが……見逃して貰えれば幸いです。  
それではどうぞ。

## 第六章　未だ遠き未来への展望

SIDE 蛭

さて、今回妙神山に戻ってきたのは何も工三姉さんを連れてくる事だけが目的ではなかった。

雪之丞たちに更なる方向性を持たせる案を老師と煮詰めること、それと今後の行動の指針を確かめることだ。

何だかんだで結局、例の要検討事項を確認していなかったのである。特に、二件の時間移動と元始風水盤、そしてフェンリルについては聞いておきたいところだ。

「老師い、居ますか？今後の件と雪之丞たちの強化案を煮詰めるために来ましたけど……」

「うむ、入るが良い」

老師の私室に入った私は早速例のノートを提示し確認に入った。

「改めて見るが……よくもまあ此処まで遭遇するものじゃな。一年にも満たない期間で経験することではないぞ？」

「ははは、まあそれも一種の霊的作用だったんでしょ」

「霊的作用とな？」

「魂の結晶を宿したあの人が、時満ちるまでに強化されるように……という宇宙意思とか？」

「……それはないじやろう。どちらかと言うとそれは御主ではないか？文珠といい、出会いといい」

「どうでしょうねえ、結局平安京時代に前世同士の出会い自体自分達は関与していませんし……そうなると結局あの悲劇の元は自分が出会ったのが原因でしょうし」

何度も考えたが、結局あの人に出会ったのが運の尽きだったのではないかと考えてしまう。

友達やルシオラたちとの出会いを否定するようで嫌だけど……。でも結局文珠がなければアシユタロス戦を乗り切ることは……。いや、そもそも戦うと考えること自体間違っているのだからうけど。

例え今構想している最終決戦様の作戦が正にそれに当てはまるとしても。

「それについては何とも言えんの。過ぎたことじゃし……。な。少なくとも、今回は御主が平安京に行くことはない」

「そうなのですか？」

「アシユタロスをあゝの時代で時間移動させるのは確定事項じゃがな。でなければ、究極の魔体を完成することに従事してしまうじゃろうし」

「そうですね。あれが遭ったからこそ更に強力な反則的な演算機が生み出されたのですし……。というか、演算機はいいのですか？」

「それについては最高指導者も悩んだそうじゃが、恐怖公の精神状態と御主の願いの為にも生み出す方向で決定された」

アシユタロスの精神状態か……。確かに、あそこまでの事をするくらいだ説得など既に時遅しだろうし。

確かに私の願いの為には必要だから……。ね。

それに魔体が完成してしまうと厄介だし。

「それなら私としても助かりますけど……。しかしそれならどの様にして時間移動させるのですか？」

「それは此方で遣っておく事じゃから気にせんで良い。少なくとも既に成されている事は確かなのじゃから……。な」

「うーん、気になりますけどそう言っつのなら」

「すまんの。御主だけに全てを任すわけにはいかんからのう。……」

そうじゃの、今暫らく黙っていたよと思っていたが……伝えておくか」

「？何をですか？」

此方をじつと見詰める老師の表情は何かを決意したが、それでも悩んでいるようなものだった。

「実は、例の者を狙っていた過激派魔族は既に封印完了しておる。ワルキューレの手によって……な」

「え？過激派魔族？ワルキューレ？それって……？」

「……混乱するのは当然じゃがな、実は最高指導者が記憶を継承した時に世界に時間移動を阻止する結界を張ったのじゃ」

「！時間移動を阻止？！ということは……あの者は今もこの時間軸に居る？」

「うむ、過激派魔族の追撃から逃れる時にそれは実証された。既にあやつの時間干渉能力は封印されておるよ。下手にあやつらに刺激されても困るから封印したのじゃ……ハーピーだけは別じゃが」

「それでは今何処に潜んでいるのですか？あの時点で時間移動が失敗したという事は死んだ様に偽装した後でしょうし……」

「それに関しては親御さんたちが奔走しておるよ。正確には大樹殿だがな」

「父さんがあ！？」

「ワルキューレも驚いていたぞ？見事な隠蔽能力と追跡能力、情報収集能力じゃと。ああ、後……流石蛭様のお父上だと言っていたな（笑）」

----- or z

父さんがそんな事をしていたのも驚いたけど、……ワルキューレエ、蛭様って何だよ……（涙）

何か悉く神魔の関係者から崇められている気がする（汗）

勘弁して欲しい……って、神魔だけじゃなかったか（涙）  
……っていうか、老師笑いなから言わないでほしい……殺意が沸く  
からく > < >

「！ごほん……と、とにかくじゃ、そういうわけだから御主も一人  
で全てを抱え込まん様に……な。大人の領分は大人に任せるのじゃ」  
「……ふう、分かりましたよ。私だって全てを自分だけで収められ  
るとは微塵も思っていないから。……ただ、父さんがあの者を追  
跡するなら過激派の魔族に出会う可能性も」

「そこら辺は対応済みじゃよ。ワルキューレ及びジークの両名が影  
ながら護衛する……ジークはまだ着任しておらんが。大樹殿自身も  
把握済みじゃ」

「そっか……ふう」

まあ、あの二人が就いているなら如何とでもなるかな？

父さん達には文珠も渡しているし……もう少し渡しておいた方がい  
いかな？

……いいか、初激は防げるだろうからもし襲い掛かってくる奴が居  
るようなら……その時は私が地獄へ送ってやる（黒）

「これこれ、何物騒なオーラを出して居るんじゃ。少し落ち着かん  
か……気持ちは分からんわけではないが」

「はい。……それで、その件はいいですけど。それなら中世に時  
間移動するのはどうなるの？カオスの言から行った様なこと聞いた  
んだけど」

「それなら心配要らん。文珠による時間移動は対象にならんからの  
「うーん、幾らなんでも臍履しすぎじゃないですか？助かりますけ  
ど……」

「遣るからにはトコトンやる……中途半端が一番危ないのじゃ。御  
主は気にせんでいいからトコトン遣れ」

「まあ、いいんですけどね……別に。ということでは中世には折を見ていく事にしようかな？今はまだ実力的に厳しいから無理だけど」

後は元始風水盤にフェンリルか……。

原始風水盤はメドーサがこちらに着いたからどうなるのか？

フェンリルはそもそもどうやって終結させるか？

「それじゃあ次に元始風水盤ですけど……、これってどうなりますかね？メドーサがこちらに着いて勘九朗もこっちじゃあ起こり様無  
いかな？」

「いや、それはないよ？」

「ッ！メドーサ？」

「玉藻がきつと老師と密会しているだろうから見えてきてって言われて来たけど案の定だったね」

「玉藻の嬢ちゃんも常に螢の事を考えて居るからう。きつとお主を此方に超越すと思っておったぞ」

「……って老師気付いていたんですか？」

「当然じゃ……でなければ此処にメドーサが入ってこられるわけあるまい」

それもそっか。

確かにメドーサが居た方が助かるし良いか。

「それじゃあメドーサ？何でそれはないよ……何て言うの？」

「私は元々アシユ様にある一定の任務を纏めて貰っていたんだ。だけれどね、それも一定の成果が出ていないと後続に任される事にもなっていたんだ」

「……後続」

「因みに誰かは知らないよ？螢の記憶からしたらデミアンかベルゼブブぐらいかしら？もう一人は弱すぎるだろうし」

「その二択ならデミアンだろうね。あくまで彼らならの話だけど……でもそうになると、もしかして大戦が早まる可能性もあるのかな？」  
「ああ、現れる端から倒していけばそれもありうるかな？アシユ様の陣営は秘密裏に動いているだけに人員も少ないからね」

「……ということは、ある程度痛めつけて逃す方向で行ったほうがいいのか？あんまりそういうのは好きじゃないけど」

「両名共にしぶといからそれもありじゃない？老師はどう思っているのかしら？」

「む？わしとしてはそこらに口を挟むつもりはないぞ？開戦時期は蛭のタイミングに合わせた方がいいじゃろうし、そうになると蛭の言った遣り方が一番良い様にも思うしな」

あんまり信用されても困るんだけどなあ。

やりたいように出来るのは良いけどそれって間違えたら其処までだしねえ……ま、するからには細心の注意を払うけどさ。

「それじゃあとりあえずそういう方向で……それで次にフェンリルだけ。前もって人狼の里に赴いて八房を完全封印した方がいいのかな？」

「それは難しいじゃろうなあ。例え小竜姫辺りにわしの書状を持たせて遣わしても向こうにも面子があるからかう」

「……面子ねえ。別に八房が無くなる訳でもないから其処まで問題に成らないんじゃないですか？」

「あの者たちはフェンリルの末裔じゃからな……わしら神族の言葉に従うと成ると色々納得できん者も現れよう」

はあ、面倒臭い。

「それじゃあ、結局フェンリルが復活するとこまで持って行くしかない訳ですか？ポチが動き出したら追跡するのも中々骨が折れます」

し下手に人員を増やしてもいけないし……」

「私もその件には手出しできないしねえ。私自身としては別に構わないんだけど……」

「後々の事を考えると止めておいた方がよからう。蛍の存在は後年のGS資格試験の折ある程度露出するから人間相手にはそれほど秘密云々は気にしなくても良いだろうが」

「アシユタロスにばれるといけませんから結局大々的には動かせんね。そうなるとう結局アルテミスに頼るしかないのかなあ？でも私は男だし」

「如何見ても女だけどね？くくく」

「私は男！……はあく。でも本当如何しようかな？シロには未来のような事はさせられないし……そもそも親父さんを死なせるつもりはないからシロが出てくることもありえないし」

それもヒヤクメの腕次第だけど。

何とか天狗との戦いで傷を負わない様にしないと……ね。

シロの話からすると手傷さえ負ってなければ負けはなかったはずだし。

「蛍や……今からそんなに煮詰めてもどうしようもないぞ？考えること自体はいいが……な」

「分かつてはいるんですけどねえ……それじゃあ今回はこれで打ち切っておきましょうか？」

「うむ」

「良いんじゃない？何か思いついたらその都度話し合いを開いたらいいんだしさ」

まあ、そうなんだけどねえ……アツ！忘れてた。

「老師？出来れば家と此処を亜空間ゲートで繋いでほしいんですけど」



ど？」

「ん？おお、そういえばそれがあつたのう。わしも考えておつたんじゃないが忘れておつたわ」

「それじゃあ繋げてくれるの？」

「うむ、一応使用制限はつけるがの。わしと御主が認めた者以外は通れん様にしておこう」

「うん、それでいいと思う」

さて、それじゃあ次は強化案だね。

一応幾つか考えてあるけど、やっぱりこれに関しては老師とも検討したほうが良いからね。

丁度メドーサもいるし一緒に検討してもらいましょう。

「さてと、次の件に行きましようか？仲間の強化案についてだけど。メドーサは何かある？雪之丞たちの底上げについて」

「うん、魔装術は駄目なのよねえ。そうになると、後は地道に強化していくぐらいしか思いつかないけど」

「ん？別に魔装術が絶対駄目って訳でもないんだけどね。まあ、少なくとも此処では駄目だろうから事務所の方で遣ることになるだろうけど」

「いいのかい？確かに雪之丞辺りはきちんと制御できていたみたいだけど……」

「わしには何とも言えんのう。神族として認めるわけにはいかんが……わし個人としては構わんし」

「老師はそういうでしょうね。それで老師には何か他に案は？」

「あるにはあるがあくまでそれを憶えられる下地がないとどうにもならんしのう。蚩なれば問題ないが……あやつらには難しいじやろうなあ」

「……って事は私の案だけ？」

「！蚩は何かあるってのかい？」

若干驚いたようにこちらを見るメドーサ。  
別にそれほどたいした物でもないんだけど……ね。  
とりあえず、話せるだけ話すことにする。  
……一部不確定な部分もあるから其処は除外するけど。

「まあね。先ず陰念にに関してだけど……彼には魔装術は厳禁です。  
いくらか自分という者を認められるように成りましたし、このまま  
いけばそれももっと確りした物になるでしょうけど」

「確かにね。最初は幸先不安だったけど……今はそんな所も矯正さ  
れつつあるしねえ。最も魔装術なんて物に手をついたら一気に元の  
もくやみでしょうけど」

「うん、だからそうしない為にも別の術を用意しました。それが影  
装術です。これは魔装術を参考にして作った物で所謂己自身を纏う  
術です」

「？それって潜在能力を引き出す魔装術と如何違うのかしら？」

「魔装術と違うのはあくまで己の影からシャドウを引き出すという  
こと。他の要因……この場合魔族の暗い部分による負の感情の増加  
などが無いのがこれの優れたところなの」

「ふむ、その為の魔法陣なりを御主が編み出したという訳じゃな？」

「うん、もつともこの術から得られる出力は魔装術よりは弱いけど  
ね……大体五割から七割程度のものよ」

「それでもリスクがほぼ無いって言うのは凄いいじゃないかい……よ  
くそんな術式を編み出せたわねえ」

「私だけじゃなく心眼にも手伝ってもらったけどね……それでこれ  
を授けても良いかな？私としては次のチャクラを開いた時ぐらいが  
丁度いいと思うんだけど？」

「良いんじゃないかい。あいつも敬愛するあんたから授かったらよ  
り邁進するだろうしね」

「うむ、時期的にも良かろう。無論確認は必要じゃが……それを憶

えることで更に修行の速度も上がるだろうしの」

どうやら了解を得られたみたいだ。

必死に考えただけの甲斐はあったかな？

さて、次は雪之丞だけ……実は何も考えていなかったりする。

あいつには魔装術でいいと思っっているし、欠点は飛行能力が無いところだけど……。

「次に雪之丞だけど……彼には次のチャクラ開眼と同時に魔装術に挑戦してもらおうと思っっている。雪之丞なら方向性さえ間違わなければ上手く御せるだろうしね」

「ふふふ、流石に未来でのライバル的存在だけあってそこら辺は信賴しておるようじゃな。確かにあやつなら大丈夫だろう……注意は必要じゃが」

「未来では老師の試練を乗り越えたぐらいだからねえ。それで雪之丞はそれだけかい？」

「ううん、出来れば飛行能力を持たせたいんだけど……如何すればいいんだろう？」

「飛行能力か……おそらくだけど、大丈夫のはずよ。未来では開花出来なかつたみたいだけど、私の血を媒介にしていた筈だから下地さえきちんと整っていれば目覚めるわよ」

「そうなんだ。それじゃあ尚更修行の密度濃くしないとねえ。……」

生かさず殺さず絶妙なところでコントロールしなくちゃね」

「……時々螢のことが分からなくなるよ、私」

「……気にするな、わしもじゃ」

ん？なんか二人が黄昏ているけど如何したんだろ？

まあいいや。

何にしてもこれで雪之丞と陰念は力的にはOKね。

母さんの話じゃこれからの資格試験には筆記試験や面接も加わるみ

たいだからそこら辺の教育もしなくちゃね……ま、其処は母さん辺りに任せましょうか。

さて、最後に勘九朗ね。

これが問題なのよねえ……色々な面で。

「最後に勘九朗だけど……うん」

「如何したんだい？」

「……ふむ、案はあるが何か問題があるということか？」

「流石老師……その通りなのよねえ。その問題さえなければ極めて有用な術んだけど……ねえ」

魂現纏心、それが術の名前だ。

魂を現し心を纏う術という意味なんだけど。

この術の肝は魂に見合った姿に変身する事でより強力なパワーを引き出せるようになることだ。

本来魂と肉体は密接な関係にあり他所から持つてくる必要などないのだが、大抵の者はそこまで持つていくこと自体出来ないのが現状である。

それを無理やり最高の状態に持つていくことが出来るこの術はまさに有用だろう……問題点を除けばだが。

問題は二つ。

一つは無理やりとはいえ魂により相応しい状態に持つていくが故に、下手をするとそのままの状態になってしまう可能性があること。

……出力が上がったまま固定されてしまうと寿命を磨り減らすことになりかねないのだ。

一つは魂の状態によっては魔装術以上に魔物のようなものに成り易いという事。

……三人の中でより明確に力を求める傾向のある勘九朗故に可能性はありうるのだ。

「……なるほどねえ……確かに問題だね。対象が勘九朗っていうのがまた問題を大きくさせているね」

「む、あやつに何かあるのか？あの三人の中では特に力を求める傾向にあったが同時に律する程合いも中々のものだった筈じゃが？」

「確かに此処に着てからはなりを潜めてはいるけどね。大丈夫と安心できるほどではないよ」

「まあね……寧ろそういう部分は陰念の方が成長しているよね？」

「ああ、私から見ても驚くほど精神が成熟しつつあるよ。強さはともかく人間として一番成長したのは間違いないくあの子だろうね」

あのありさまには本当に驚いた。

出会って少し経った頃も少なからず敬愛表現って言うか畏まった所があつたけど……今回戻ってきて色々出向いてくれた時の陰念は表情も言動も醸し出す雰囲気さえも立派な従者のようだった。

そう従者である。

おそらく小童姫のそれが少なからず影響しているのもあるんだろうけど、以前の様が微塵にも感じられないのには別の意味で反って不安を感じたものだ。

「ふむ、しかしどうするかな……一度膝を突き合わせて話し合ってみるかな？もしかしたらもう一つの可能性もありうるしね」

「もう一つの可能性？」

「うん、もう一つ……こっちはこっちで問題ありといえばそうだけど、まあ大丈夫でしょ……多分」

「それではとりあえず話し合ってからということですが今回の会合は仕舞いじゃな？」

「ん、それでいいよ。エミ姉さんは現状で問題ないしね……あ、そういえばヒヤクメは何時までこっちに居られるの？」

「あやつは最高指導者が呼ぶまではフリーじゃからおそらく来年辺りまでは自由の筈じゃ」

「そう、ならこのまま母さんと一緒に居てもらいましょ……危険も  
多いみたいだし」

此間ヒヤクメから遠距離通話で暗殺者を未然に防いだと報告があっ  
た。

そう度々は無いだろうけど……だからと言って気を抜くわけにもい  
かないからね。

その後私たちは解散し、私は早速勘九郎の元へと行った。

S I D E O U T

世界GS協会日本支部第一応接間。

今此処には若干頭が寂しくなり始めた男性と覇気溢れる女性がソフ  
アに座り向き合っていた。

女性の後ろには二十歳前後の女性が立っており女性に手ずから資料  
を渡している。

男性の名は唐巢、女性の名は横島百合子である。

百合子は後ろの女性……ヒヤクメから検案事項の調書を次々に確認  
していく。

検案事項……唐巢神父の通り名で有名な現S級のGSである彼の行  
動理念や研修内容、弟子に対する接し方などである。

もっとも百合子自身彼に対してはある程度既に把握済みであるし、  
彼自身を疑っているわけではない。

これはその弟子に対しての牽制なのだ。

S I D E 唐巢

私は唐巢。

教会を破門された神父だ。

今私は目の前に佇む一人の女性に圧倒されている。

彼女が何かをしているわけではない。

ただ、私の前で私が提出した書類を読んでいるだけだ。

「ふう、やはり貴方自身には問題ありませんね……ある意味そちらに非があつた方が対処もし易かつたのですが」

今彼女が読んだのはこれまでの助手や弟子の研修内容である。

彼女は世界GS協会において非常に重要な役割についており、またこれまでにない革新を成功させた女傑である。

その手腕は決して強引な物ではなく、誰しもが納得する方法で法令を通した。

例外はお金や権力に固執する者だけであり、彼女はそれらが発する言葉を完封した。

私は除霊をしても報酬を碌に受け取らないことで貧民層の人たちによくお礼を言われるが、彼女の革新はそんな私の行為など遥かに超えたものだ。

「美神美智恵に対する研修内容はどれも正しく行われており、またそれに対して彼女も若干強引な所はあれどほぼ完遂している」

「はあ」

「だからこそ彼女の行動が読めない。死亡偽装してまで行方を晦まし娘を放り出す意味が……」

「?!え?死亡偽装ですか?美智恵君は生きているというのですか?！」

「ええ、行方を晦ますこと事態は理解できるのです。彼女らは過激派魔族に狙われていますから」

「魔族?!それでは美智恵君は今大丈夫なのですか?」

「それに関しては大丈夫です。既に魔界正規軍が動いていますから……もつともこの事は彼女らには秘密ですけどね」

「……?それはどういうことでしょうか?なぜ?」

「簡単に言えば彼女は信用できないからです……私はある筋から情

報を得ていましたね、それ故にですよ」

「確かに美智恵君は強引な所や自己中心的な所が少なからずありましたが……」

しかしそれほど忌避するようなものでもなかった筈だ。

しかし横島女史は私のそんな考えを吹き飛ばすことを言った。

「私が先ほど言った情報……それは我が子の未来の記憶です。それ故に断定するのです」

「……………？未来の記憶ですか？」

「ええ、約5年後に起きる魔神大戦のね」

「魔神大戦……ですか？」

「美神令子さんの魂に癒着している魂の結晶という物を取り戻すために魔神が人界に侵攻してくるのですよ」

「なっ?!」

「美神美智恵はある程度は事前に把握していました。実際魔族にも狙われていましたしね。それはこの時間軸も……です」

「……………（ゴクツ）」

「しかし彼女は誰にも頼らず自分の手で魔族から娘を護ろうとした。神族の手を借りるなり何なりせずだね」

なるほど、確かに彼女なら自身の手で何とかしようとするだろうな。例えそれが無謀でも悪い意味で諦めが悪い所もありますからね。

「それについては何も言いません。それで万事他に被害も出さず収められるのであれば……ね。けれど彼女はある意味最悪の手を使っ  
た」

「最悪の手ですか？」

「世界を巻き込み自身が強行に得た権力を持って未成年さえ戦場に立たせ拳句、私の子をスパイにし人類の敵と報道され……敵諸共殺



しかけたのです。……例えその行動にどういう意味があったとしてもね？」

「?!」

「……美神家の者は時間移動能力を備えています。美神美智恵はそれを駆使して先回りし先手を掛けようとしたのです。もっとも戦果は芳しくありませんでしたけど」

「……時間移動能力！では先ほど言った死亡偽装というのは」

「全ての目を欺くためですね。まあ結果から見たらある意味では成果はあったでしょう……最終的に美神家のみ被害が無い状態で収まったのだから」

「美神家のみという事は……他には被害が出たと？」

「……世界中でね。……ちなみに、大戦を終結に持っていったのは私の息子と魔神の娘さんです」

「ッ！世界中?!それに収めたのは貴女のご息子と魔神の娘さん?……ですか?美智恵君ではなく?」

「……おや?確か横島家には娘さんしか居なかったはず？」

「ええ、今は故あって娘に成っていますけどね?その原因は未来の戦いの為です……息子が収めた戦いですけど其処まで行くのにもまた色々ありました」

横島女史は何かに耐えるように手をきつく握っている。

「息子は捕まっていた時に親しくなった魔神の娘に魔神を倒すと誓いを立て成し遂げる為に奮起しました。そして奮起する様を見て息子に可能性を見出した美神美智恵はスパイに仕立て上げた時とは打って変わって手を返したように持ち上げました」

「……それは」

「ええ、勿論緊急事態であるからには詮無き事でしょうけど。それ

から息子が死に掛けたり娘さんが息子に己の命を与え亡くなるといった事がありましたか……魔神を追い詰めました」

「魔神を人の手でですか？」

「ええ、そして……一度は魔神の手に渡った結晶を息子が取り戻した際、魔神からの問いかけられました」

「問いかけ？ 追い詰めた魔神からですか？ それは一体……」

横島女史は今度こそ沈痛な表情で目を伏せました。

そして明かされる答え……それは私に途轍もない衝撃を与えた。

「世界の安泰かそれとも恋人の復活というふざけた選択ですよ……  
誰しも目を逸らす中、息子は世界を選びました」

「……………」

今何と言った？

世界か恋人？

それを未成年である息子さんが？

「そしてその後も少しばかり騒動はありましたけど解決しました。

その後、息子は未成年という事で表には出されず、元の時間軸に戻っていった美神美智恵は……あの女は……」

「？」

「あの女は直ぐに顔を出しました、出産まじかなお腹を抱えて！ 幸せそうに……！」

「？……ツ！ な、それは本当ですか？！」

「ええ、本当ですよ？……丁度その頃、息子は死んだ恋人を思って憔悴していましたけどね？」

「……何てことだ」

何を考えているのだ？ 美智恵君は？！

「その後、息子の上司であった令子さんは言ったそうですよ？これでハッピーエンドにしないかって……ね？他にも碌でもないこと言っただけですけど」

「……………ッ！」

「一体美神家の者の心というか神経はどうなっているんでしょうねえ？私には全く理解できませんわ」

まさに言葉に出来ない心境だな……なるほど、私の所に来るはずだ。彼女らに研修を課し、師として接している私を如何にかする事で変化を促すつもりか……それほど期待していないみたいだが。

「美神美智恵はこの時間軸では時間移動能力を未来の記憶を受け取った神魔の最高指導者に封じられています。死亡偽装していたからには暫らく表に出てこないでしょうけど……娘が歪んでいくのを見ながらもね」

「……私が令子君の歪みを少しでも治すことで貴女達の助けになりますか？」

「……ええ、なりますわ。けど、無理だと思いますよ？魂レベルで歪んでいるでしょうから」

「しかし、遣るとやらないでは雲泥の差です」

「……それをなさるのでしたら事前に妙神山に行っておいて下さい。現状という物が分かるでしょう」

「分かりました」

……小竜姫様もこれに関しては知っておられるのであろう。

衰えだした私が若い彼女達に対抗するにはもっと力も要るだろうし、修行もつけて貰う事にしよう。

「それでは私たちはこれで……ちなみに現在は娘である蛭ですが、

未来の記憶と遺志を継ぎ世界を護る為に鍛錬を積んでいます。既に人界では適う者がいないくらいには強くなっていますよ?」  
「!」

彼女達は去っていった……起爆剤を残して。

……確か横島女史のご息女は現在12才程だった筈。  
世界で名を馳せている横島家の詳細は結構知られているが、まさかそのような強さを秘めているとは……それほど、ということなのであろう。

私も気合を入れないと。

大人として師としての責務は必ず果たして見せる!

S I D E O U T

## 第六章　未だ遠き未来への展望（後書き）

少し強引に話を持っていった感が……（汗）  
次回、投稿は6/27の7時です。

……そういえば今日はよこっちの誕生日でしたね、30才の記念という訳ではないですけど、本日中に黒歴史を一つ晒しましよ  
う。

ちなみに、活動報告で検討している物とは別です。

第一部の前身となる物ですので矛盾満載、誤字脱字、文体の可笑しさが止め度目なく溢れている物です。

話数はプロログから数えて5話（約3万6千字）です。

とりあえず、プロログと第一話のみUPしますね。

……UPされていなかったら自粛したと思ってください（汗）

一応あげる気はあります、続きはまた折を見てということ。

あと、これの続きは書きません……構想上無理が出てきましたから

（汗）

これでこっちの方が良いなんて言われたらと思うと（）（）（）；

。（）（）ガクガクブルブル

**第七章　始まる変革行き着く先は何処か（前書き）**

規約内容に矛盾や変な所があればご指摘下さい。  
それではどうぞ。

## 第七章へ始まる変革行き着く先は何処か

「……ですから、これからはGS業界により安全な除霊と適切な報酬制度を盛り込む為にも我々世界GS本部並びにザンス王国は新たな規約を制定することに決定いたしました」

今世界放送でGS関連の新たな規約などが報道されている。

規約の中で注目を受けているのが除霊依頼の際、精霊石等の消耗品が世界規模で提供及び保障されることである。

これは要するに莫大な報酬は高価な道具などが原因の一つであるという事から出てきた規約だ。

これを可能にしたのがザンス王国である。

近年において秘術により精霊石の産出に安定性を得たザンス王国は今回の新制度に大きく貢献している為、世界中から絶賛を受けている。

この規約と除霊時の新制度によって更に報酬が経済的になった。

これまではGS免許さえ持っていれば特に隔たりなくどの様な依頼でも請け負うことが出来たが、それ故に除霊事故も少なくなかった。これを改善する為に設けられた制度が除霊時のチーム制度だ。

除霊ランクにより必要員数を設定する事で危険を分散することが目的である。

無論、全てに置いて絶対などと言うものはないから必要に応じて特例なども出るだろうし緊急時などは別だが……。

とにかく危険性が削減されたことも事実故に報酬もそれに見合った額にまで落とすことが可能になった。

またこれに伴い事務所関連も見直されることになった。

ちなみに現在資格を持っている者も再選考が行われることになった。

言うまでもなく新制度を広めるに当たって不都合が出るようでは話にならないからだ。  
今回の再選考を受けない者は明確な理由がない限り資格剥奪になることが決まっている。

色々物議が醸し出されそうなものだが、少なからずGSの職に就いている者は自信在りし者という側面もあるので特に問題はなかった。……単にプライドが勝っただけとも言うが。

さて、実際の新規約であるが……一部を抜粋して此処に掲載してみよう。

#### 新GS資格規約

免許取得者はS級の認印がある場合と資格試験優勝者以外は一律D級からである

認印がある者もC級からである

但し、世界的に認められる功績をなした者には認印と同等の資格を与えられる。

D級からC級に昇格するには監査員若しくはA級以上のGSが認める除霊を一定回数達成する必要がある

また監査員は世界GS本部から選定された者が就く

C級からB級に昇格するにはB級の仕事を一定回数達成する必要がある

B級に昇格するまでは協会の他に監査員または査定したGSにも報告する義務がある

B級からA級に昇格するにはA級の仕事を一定回数達成する必要がある

A級からS級に昇格するには一定の霊力と世界GS本部の承認、一定以上の功績が必要

A級以上は格下の除霊を定期的に規定回数行う事

なお、上記全ての回数項目は各々の除霊タイプや霊力値によって変



動する

また、昇級するには上記の条件に加え、各級の条件を満たし、昇級試験を合格し、真実看破を使用した面接に受かる必要がある

S級は後継者育成の義務が発生する

除霊道具は世界GS本部からの支給される物を使用する（動作不良などを回避する為）

道具を必要としないGSは道具を使用するGSより報酬が一定値減額になる

但し、対象のレベルによる

もぐりのGSは発見次第即刻拘束される（拘束3年以上の上霊能封印）

無闇な除霊や人外への排他的攻撃は禁止する（協会による再教育の後、一つ降級の罰則あり）

違反者には状況に応じて免停から資格剥奪までの罰則あり

#### 新GSランク規約

マイトとは霊力や魔力の共通した単位である

D級…… 40マイト/何かしら霊的能力があること/成長の可能性が伺えること

C級…… 50マイト/有用な霊的能力+監査員の承認

B級…… 65マイト/有用な霊的能力

A級…… 80マイト/2つ以上の有用な霊的能力又は希少性の高い霊的能力

S級…… 90マイト/2つ以上の有用な霊的能力又は希少性の高い霊的能力+一定の功績+世界GS本部の承認

なおA級以下のマイト数は暫定である

上記以外にも面接、知識試験、除霊功績が必要

SS級…… 天災級のオカルト事件に対応できる能力保持者/GSに限らず、一定の神魔に認められ超人的な能力を持つ者に与えられるランク/これを持つ者はあらゆる拘束を無視でき、世界国家レベル

で行動できる

#### 新GS事務所開業及び除霊行動規約

B級以上のGSが二人以上で組みGS協会に保証を認められ開業資格試験を受かった者が事務所を開業できる

B級以下は協会から依頼を受け制定された人員を持って当たる制定された人員を揃えた状態でのみ任意に除霊できる

S級はA級以上を一人以上連れた状態で任意に除霊できる。但し、除霊ランクがB級以下の時は単独除霊が認められる

A級は同格者を連れた状態ならばA級の仕事までを任意に出来る。但し、除霊ランクがC級以下の時は単独除霊が認められる

B級はS級又はA級一人同伴でA級までの除霊ができる。但し、除霊ランクがD級以下の時は単独除霊が認められる

B級は同格者2名以上でB級の仕事までを任意に出来る  
C級はS級又はA級一人同伴でB級までの除霊が出来る

C級は同格者2名以上でC級の仕事までを任意に出来る  
D級（免許取得者）はGS協会の監査員またはA級の同伴の元D級までの除霊ができる

緊急時は上記の限りではない。但し、詳細を事後報告すること。その時証拠となる物もしくは証人が必要

違反時は罰則が与えられる。規約に則り1年からの免停もしくは免許永久停止処分

「……というわけで、今年度末までに現資格保有者は最寄のGS協会支部社に赴き再選考を受けられるように御願います」

再選考の呼びかけが再度流された所でその報道は終わった。

なお、資格試験の新しい制度についてはもう暫らく練った上で発表と相成った。

SIDE 玉藻

私は妙神山の居間で皆と一緒にテレビを見ている……ちなみにカラーテレビだ。

蛍が持つてきたらしい。

私は未だ世間を歩き回る気はないので此処で修行をして自身を高めることに従事している。

お蔭で既に蛍と同じ程度の霊圧を出せる様になっている。

チャクラも順調に開いて第四をこないだ開くことが出来た。

……お蔭で雪之丞から嫉妬混じりの視線を受けた、勘弁して欲しい。

「しかし、遂に新規約が配布されたわね。これからGSの常識も少なからず変わるわよ？」

「確かに、安全面の向上といい経済面での向上といい大分様変わりするでしょうね」

隣で同じくテレビを見ていたメドーサと小竜姫様が意見を言うている。

私としてはさり気なく人外への無差別な排他攻撃禁止というのが目を引いた。

先ず間違はなく百合子さんの仕業だろうけど……嬉しいことだ。

最近は亜空間ゲートも出来たので百合子さんたちがいる時は横島家の方に居るようにしている……エミさんも一緒だ。

「でも間違いなく荒れるよね……あの女？」

「荒れるでしょうねえ……周りに当り散らさなければいいのですけど」

「無理でしょう？それこそ在り得ないね」

私が零した例の者の今後を二人は肯定した。

不思議そうにこちらを見ていた雪之丞達に説明してあげると一応に

微妙に嫌な顔をされた（説明はあくまで概要部分だけだが）  
まあ、当然か。

とりあえず、これで三人も無闇に近づこうなどと思わないだろう…  
…あちらから来たならその限りでもないが。

「ところで玉藻さん？ 蛭様は何処へ？」

「ん？ あゝ、この報道会が開かれている所よ。暗殺テロの可能性も考えられたからね、ザンスの方にも後ほど飛ぶ様よ？」

「相変わらずまめだねえ、それくらい大人に任せとけば良いって言うのに… まあ、被害を出さない為には蛭が行くのが一番だろうけど」

「しかし玉藻様？ 蛭様がいくらお強いといってもまだ13才ですよ？ よろしいのですか？」

「陰念の言つとおりだぜ？ 師匠が常識外れでも限度つてもんがあると思うが… 何かあるのか？」

「ええ、蛭は老師からご免状を授かっているからね。ほら、さつき報道されていたランク制度であつたでしょう？ Sランクって言うのが… 蛭がそれよ」

「…なるほど、蛭様は何かの使命を帯びていましたしね。前もつて世界に通知されていても可笑しくはありませんか」

「そういうことだよ… で、勘九郎？ あんたさつきから随分清々しい顔しているけど… どうかしたのかい？」

メドーサが言うように勘九郎はまるで生まれ変わったかのように穏やかになっていた。

先日まではどこか空虚な所も微かにあつたっていうのに、今はそれも微塵に感じられない。

メドーサの言葉を受けた勘九郎はというと… それはもうこの世の春が来たと言いたげな表情をしている。

「はい！蛭様と先日自分について話し合っただのですが、その時に一つの道を示唆されまして……それは正に私にとって救いでした！お蔭で今までであった違和感もあと少しで無くなると思うと……ああ、待ちどうしいです！！」

「昨日の夜からこうなんだよ……一体何を言われたんだか」

「お蔭で気味悪くて眠れませんでした」

「……ということは、勘九朗？あんた蛭から例の事について聞いたんだね？」

「はい、ですからこれからはより自分を律し清く正しく行こうという所存であります！」

「（蛭が言っていたもう一つの可能性とやらが実を結んだって事か）そうかい、ならとことんやりな。中途半端が一番危険なんだからね！」

「勿論です！蛭様の行為を無にしない為にも絶対成し遂げて見せませわ！」

「一体何なんだ？」

「……私にも分からないけど、たぶん貴方達もその内蛭から声が掛かる筈よ？その時に無様な所を見せないようにしっかりと自分を持っておきなさいね。惨めに成りたくなければ……ね」

「ご忠告ありがとうございます、玉藻様。無論そのような事がないようにしますよ。お師様たちに恥を掻かす訳にも行きませんからね」「当然だな。期待に副えないようでは何の為に此処に居るのかわかりやしねえーし」

おそらく勘九朗の件はこの間蛭が零していた強化案に関係している事だろうけど、……何にしても蛭ってば少しは休むって事を憶えて欲しいわ。

「皆さんお昼ですよ？テーブルの上を片して下さいな」

「あ、美衣さん！す、すみません。私ったら今は手が空いていたっ

て言うのにまかせつきりで(汗)」

「ふふふ、構いませんわ。元よりこれは私のやるべきことですから……ケイも玉藻さんに面倒を見て貰っている以上これくらいは率先してやらないと」

美衣さんがワゴンで料理を運んで来たことで話は終わりとなった。

美衣さんの言うとおりケイは今私の腕の中で大人しくしている。

この子はとくに私と蛭に懐いているので美衣さんが忙しい時は大抵この通りだ。

私の修行は周天法が主なのでケイの面倒を見るくらいは問題ないしね。

「ところで老師様はどうなされましたか？」

「あ、言つてませんでした。が老師様は現在とある任で神界に赴いています。夕方頃にはお戻りになるのでそのつもりで御願いますね」

「分かりました……ではお昼の余り分はどういたしましょうか？」

「俺にくれ、美衣さん！2人前くらい楽に食つて見せるぜ！」

「はしたないわよ、雪之丞。まあ他の人はそれほど大食漢でもないからいいでしょうけど」

この後昼餉を終えた私はいつものように周天法に取り掛かった。

今は少しでも力を取り戻さないと……未来のように蛭に無理させるわけには行かないからね。

S I D E O U T

所変わって此処は先ほどの報道現場。

生中継で行われた報道は今しがた撤収作業が開始された所だ。

会見を行っていた世界GS本部長とザンス王国大使は現在隔離された部屋で蛭と顔を合わせていた。

「横島 蛭殿。此度はどうもありがとうございました。お蔭で余計な混乱を起こすことなく無事報道を終了させることが出来ました」  
「全くです。本当に横島家の方々にはどれほどお礼を言っていていいか  
百合子様といい蛭様といい全く頭が上がりません」

「あはは、別にいいですよ。私が好きでやったことですから……予想通りあの暗殺者はザンスの原理主義者だったわね。母さんの伝手で結構ザンス自体の利益も上がっている筈だけど、出る所は出るか……」

報道現場には蛭が予想したように暗殺者が紛れ込んでいた。

蛭はそれを未然に察知し、精霊獣を使用される前に無力化することに成功したのだ。

今は蛭の足元に縛られ猿轡をされた上で気絶させられている……当然精霊獣の指輪は回収済みだ。

「恥ずかしながら……今回の事は国王陛下も頭を悩ませてます。何しろ恩に仇で返したようなものですから……本当に申し訳ないです」

「気にしてませんでば。それよりもこの後ザンスの方に飛びますが此方はもう貴方達にお任せしてもよろしいですよね？」

「はい、勿論です。この者共は私たちが責任を持って拘束しておくのでお気にせずに」

「これ以上の失態は恥以外の何物でもありませんからね。必ずや押さえて見せましょう」

「お任せいたします」

蛭は彼らに暗殺者たちの処理と今後の警備を促し任せるとザンスへと飛んだ……おそらく此方が動いたという事は向こうでも何かが起こる筈である。

ちなみに暗殺者達が所持していた精霊獣の指輪は蛭がザンスへ持つ

て行くことになった。

SIDE 百合子

私と国王陛下は現在テレビを前に唸っていた。

それというのも大使から掛かってきた連絡が原因である。

報道現場に現れたザンスの原理主義者たちは事前に予測した蚩が何とか観衆に晒すことなく処理できたみたいだが、これで今度は此方が危くなる可能性が出てきた。

「全く情けない！恩を仇で返すとは！ザンス国民としての誇りはないのか?!」

「……国王陛下、原理主義者にはそんな事言っても無駄ですわ。彼らは彼らの思想で動いているのですから……それよりもこれからのことを警戒しなければ」

「そ、そうですね。幸い向こうはご息女のお蔭で事無きを得ましたが、此方にも近い内に現れるでしょう。だからと言って警護を増やせば良いという物でもありませんし……」

「ザンスには変装マスクがありますからねえ、人員の増加は隠れ蓑の増加にも繋がりますか……」

「現在は私が広範囲探知能力で常にチェックしていますから蚩様が到着されるまでのご辛抱です……あの方なればどれほど強力な精霊獣を繰り出されようと対処できますから」

「……それしかないのでしょうか？それでは余りにも我らが無能すぎる……」

「確かにそうかもしれませんが、今回の事をやり過ごせたらきつと良い方向に行きますよ？それだけの事を蚩様はやろうとしています」「？蚩は一体何をやるつもりなの？」

その後聞いたことは信じられないことであった。

私もオカルトの事はかなり勉強して身につけたけど今回蚩が行うこ



とはザンスの歴史に残ることだろう。

陛下も驚きの余り開いた口を塞ぐことすら忘れてる。

全く……あの子ってばいくら私たちが先を見越しても容易くその向こうに行くんだから。

「！異分子の反応あり！此方に向かってきています、数は三人！共に複数の指輪をしているのね！」

「早速きたか。外のボディーガードたちに連携して足止めをせよと連絡！決して深追いするな！」

「了解！」

ヒヤクメさんの能力で判明した暗殺者に対抗する為陛下が指示を出す。

連絡ではそれほどしないうちに虫が来る筈だからそれまで持たせることが出来たら此方の勝ちだ。

強行してくる暗殺者にボディーガードたちが接触してから一時間ほど経った頃。

陛下の指示の元深追いせずに牽制に留めた結果、暗殺者達は攻め込めず苛立ち始める。

その時更にヒヤクメさんが異分子の反応を告げる！

「……ッ！あちらは警備の層が薄いつ！」

「陛下！西側の守りが薄いです！このままではっ？！来た！？」

「……食らえッ！」

「くっ？！馬鹿者がっ！王の精霊獣よっ！！」

守りを抜け入ってきた一人の暗殺者が精霊獣を解き放つ！

陛下が応戦するが複数の精霊獣に苦戦している。

私は何とか暗殺者を無力化できないか様子を伺っているが流石にプロだけ合っつて隙が見当たらない。

このままではっ！

「……………ッ？これは……………来たッ！伏せて皆さん！」

『……………ッ！？』

ヒヤクメさんの指示の元一斉に伏せる私と陛下。

其処に放たれる暗殺者の精霊獣……………しかしそれが陛下に届くことはなかった……………

「精霊獣よ！仮初の主である私の意志に従いかの敵を討てっ！！」

……………ッ！

「愚かなる意思よ！私の前に屈しなさい！！」

「……………ガアッ?!?!」

……………駆けつけた蛍の精霊獣によってそれは押さえられ無力化されたから。

蛍は暗殺者を文珠で縛り上げ気絶させると此方に向いた。

「何とか間に合ったね、母さん」

「ええ、ありがとう蛍。助かったわ」

「おお、貴女が蛍様ですか。ご助力感謝いたします」

「どうも、国王陛下。残りの暗殺者達も他の精霊獣が無力化しているのももう安心ですよ……………後、一国の王が個人に対して様付けしないで下さい（汗）」

「何を仰るか！貴女様は救国の英雄ですぞ！その様なことを言わないで下さい！」

「……………はあゝ、分かりました（涙）」

「でも凄く早い到着だったわね？どういう経路で来たの？」

「ん？途中まではジェット機で来てただけだね……………間に合いそうにもなかったから半ばほどで精霊獣を合体させてそれに乗って飛

んできたの」

「なんと！精霊獣を合体っ?!そのような事が可能とはっ！」

「この子達は王族つきじゃないからパワーがありませんでしたからね?彼らの意思を確認後、文珠で合体させて存在を上乗せしましたね。……彼らには無茶をさせたわ、後でお礼を言わないと」

呆れたねえ……まさかそんな無茶をしたとは。

通りでふらふらしてるはずだわ。

「陛下、娘もだいぶ疲弊しているようなので休ませたいのですが」

「そうですね、蛭様のお蔭で危険はとりあえず引いたことですし…

…お前たち！至急精のつく物を用意いたせ！」

「はっ！」

「すみません陛下。何やら無理強いたみたいで……」

「何を言っておられますか、貴女様のお蔭で我らは被害もなく場を収めることが出来たのです！気にされなくてもいいですよ」

「蛭はもう少し図々しくなった方が良い位だね。下手な遠慮は相手に失礼だし」

「そんなものかな」

全くこの子は。

羨のお蔭で私たちには遠慮するような事こそ無くなったけど、どこか一線引いている所は変わらないからね。

だからって引き下がる私じゃないけど……ね。

とその時、おそらく蛭が使役していたであろうもう一つの精霊獣が現れた。

蛭様。敵精霊獣無力化完了致しました。此方が精霊獣の指輪です

「ありがとう。それは陛下に返上して頂戴……無茶な使役の仕方してごめんね？」

何を仰りますか！貴女様にお使い出来たこと心より誇りに思っております

「……そう。それじゃあ、大儀でした。貴方たちの働きに私は大変満足いたしました……元気でね？」

ははっ！

「……………はっ、ま…まさか下位の精霊獣がここまで流暢に話す事が出来るほどとは。蛭様のポテンシャルは如何程なのだ？」

「蛭様は神魔の領域に居られる方ですからね。人間と比べること自体間違いですよ？」

「ヒヤクメ様？余り私の事を化け物みたいに言わないで貰えませんか？」

「ほ、蛭様！敬語なんて止して下さいよ（涙）」

「どうしましょう？偉大なるヒヤクメ様にため口なんて利けませんし」

「蛭様（汗）」

相変わらずみたいだね、ああいう所は。

陛下も笑っていらつしやるし……ヒヤクメさんには悪いけどこれからもからかいの対象になって貰いましょう。

その後、用意された食事を皆で取り湯治で体を休ませた。

やはり相当無茶していたみたいでベッドに入るとあっという間に眠りに落ちた。

明けて翌日。

本日は急遽提示された民衆に対する発表の為、陛下が広場を見渡せるテラスに登場した。

そして民を思ふ陛下の言葉が紡がれた後今回の趣旨が発表された。

「さて、皆も知っての通り我らザンスは精霊の加護を受けて居る。

そしてその顕著な現れである精霊獣を使役しておるが……此度我が見出した新たな騎士が素晴らしい恩恵を与えてくれたのだ！」

そういつて騎士として紹介される蚩。

実はこのやり取りは昨夜蚩が実施することの確認を改めて取った後決められたことだ。

蚩としては余り世間には顔出ししたくないが、此処でザンスの国民の意思を統一しておくことは後ほど役に立つと判断したようだ。せめてもの誤魔化しの為陛下に見出された事にしたが、余り変わらないだろう。

「此方が新たな騎士、横島 蚩殿だ！皆も知つての通り彼女は我らの恩人である横島 百合子殿のご息女だ」

『おお〜！』

「彼女はその優れた霊能力によつて精霊獣の言葉を如実に現す事が可能なのだ。その結果我は王の精霊獣の言葉を受けることが出来た！」

『おお〜！？』

「蚩殿、王の精霊獣の言葉を！」

「承りました、王の精霊獣よ！顕われ出でよ！そしてその言葉を紡げ！」

召喚に応じ参上した、我が精霊獣の王である！愛しきザンスの民衆よ！我が精霊の神より受け賜った御言葉を告げよう、心して静聴するが良い！

『……………』

王が召喚するよりも神々しいその姿と心に響く声音に民衆は自然と静まり畏まった。

蚩は精霊獣を顕現する為に精神を集中して王の横で佇んでいる。

……精霊の加護を受けし民よ、汝らが未だ健在である事を私は心より嬉しく思う。さて、今回言葉を授けたのは他でもないお主達が住まう世界の為だ

王の精霊獣が精霊神の言葉を告げると言ったが、これは正しくその通りなのである。

もともと最高指導者の意思を受けた精霊神が代わりに告げたという意味だが。

これより数年後、お主達の住まう世界に嘗て無い危機が訪れるであろう……しかし嘆くことは無い。私の言葉を伝える為に現れた蚩様が必ずやお救い下さるであろう

精霊神の言葉に民衆がざわめき出す。

それも当然だろう……まさか目の前の幼い少女がその様な大任を務めるとは思いにもよらなかったからだ。

蚩様のことは本来未だ世間には公表しないべきなのだが……悲しい事に世界は混沌に満ちている。だからこそ今回は危険を犯しても、お主らザンスの民だけでも蚩様の手助けが出来るようにと今回言葉を伝えたのだ

精霊神の言葉が響く。

現在ザンス王国には最高指導者により結界が張られているらしい。急遽張られた物だが少しでも情報の露出を抑えるために施されたのだ。

民達よ、蚩様は世界を救うために現れた……いずれ神魔の上位に席を設ける方だ。今は信じ、少しでもこの方の助けとなってくれたら私は嬉しく思う

王の精霊獣が手を広げ力を込める。其処に宿るのは最高指導者が介入した神霊力。  
そしてそれは民衆に解放される！

汝らに祝福あれ！

「!? おお〜!!!」

極光を受けた民衆はその身に清浄な力を授かり、怪我をしていた者や病を罹っていた者は完治した。

民衆はこの祝福に驚き改めて目の前の蛍が救世に現れた者なのだと感じ入ったようだ。

私はいつまでも汝らを見守っている。蛍様、いずれまたお会いしましょう……では

精霊神の気配が遠のき、王の精霊獣もその姿を消した。

しかし民衆は未だ頭を垂れその場に畏まっていた。

「ザンス国民よ、私は前もって聞かされた身ゆえに今のお主らの気持ちはよく分かっておる。此方におられる神族の調査官であられるヒヤクメ殿に確認を取ったが間違いなさそうだ。故に私はザンスの全力を持って事に当たろうと思う」

「……ザンスの皆さん。私は未だ世界の危機に対処出来るほどではありません。しかし時が来る頃には必ずや世界を危機から解放して見せましょう! ……我が力よ! 彼らに祝福を!!」

「?! おお〜!!!」

蛍が王の精霊獣がしたように手を掲げ力を込める。

そして民衆が見守る中、それは解放された!

……結果、蛍の力は先ほどの祝福ほどではないが確実に民衆を癒した。  
最早民衆は疑う術を持たず完全に蛍のを受け入れたようである。その後、今回の事の箝口令が引かれ集まりは解散され民衆は時に備えて力を蓄えることになった。

「……はあ、色々大きさに言っただけ……あれってまんま洗脳だよね。いいのかなあ？」

場所は変わって応接間。

今は傍に陛下と私たちのみがいる。

「別に洗脳という訳では御座いますまい。世界の危機は必ず訪れま  
すし貴女様がそれを沈めるのも確定されたこと……なればそれを手  
助けするのに民衆の力を前借するのも宜しかろう」

「そうかもしれませんが、なんだかな」

「蛍はもつと人に頼ることを憶えないとね。未来での記憶が影響し  
ている所もあるんだろうけど……そろそろ現状を受け入れなさい」  
「……はあ、分かったよ母さん。……それにしても陛下は結構早  
い段階で私のことを知らされていたんですね？」

「うむ、最初百合子殿が訪れた時に……な。あれを見せられては信  
じない訳にはいきませぬまい」

「相手の力を借りるなら先ず此方の真意を誠実に示さなくては駄目  
だからね。最近は相手の出方ばかり伺って牽制ばかりするような輩  
が増えているけど……ね」

「相変わらず、母さんの先読みは凄いわね……恐れ入るわ」

ふふふ、母親を舐めるもんじゃないわよ？

あんたの手助けになるなら何を持ってしても成し遂げて見せるん  
だから。



未来のような事を起こさない為にもね！

S I D E O U T

場所は遠く離れて日本東京。

「~~~~~ッ！なによこれっ？！これじゃあ個人事務所を手に出さないだけじゃなくGSの醍醐味である莫大な報酬が手に入らないじゃない！！」

荒れて傍にあつたクッションに当り散らしているのは16才になつた美神令子である。

慕っていた母親に先立たれて暫らく不良然としていたが、気を取り直して母親の跡を継ぐべくGSに成ろうと決起した。

しかしその矢先に規約改定の知らせである。

それも令子が最も目当てにしていた報酬や自分の城を持つ為の事務所関連が悉く改定されていたのだ。

荒れた……それはもう荒れた。

しかし、いくら荒れようと現状が変わるはずも無く次第に沈下する令子。

かといって腹の虫は納まらないが……。

「……どうすればこの法令を出し抜けるかしら？少なくとも二人以上でしか開業できない以上暫らくは一人でするしかないけど、それにしたって個人では除霊することも出来ないし」

さっそく行動を起こすも考えるのは法律の抜け道。

性格が出ていると言ってしまうえば其処までだが……考えている事は駄目駄目である。

暫らくうねっていたが、とりあえず力を手にしないことには始まり

ないと思い立ち母親が師として仰いでいた唐巢神父の下に行くことに決めた。

最初の師である六道家は色々な意味で怖いから除外している。

「私は美神の女よ。何が何でものし上がってみせるわ！……今は雌伏の時、耐えるのよ令子！」

それでも悔しい事には変わらず持っていたぼろぼろのクッションを踏み抜きその場を後にした。

**第七章　始まる変革行き着く先は何処か（後書き）**

精霊神云々は此処だけの話です。

以後出てきませんのでご容赦を。

次回投稿は6 / 30の7時です。

## 第八章へ変化せし魂と目覚めし魂（前書き）

修行の情景をもう少し細かく描写できないか検討中です。  
何か上手い方法を思いついたら後ほど改訂するかも……？  
それではどうぞ。

## 第八章 変化せし魂と目覚めし魂

GS新規約報道が流される少し前……唐巢神父は妙神山に辿り着いていた。

既に顔見知りだった鬼門は小竜姫を呼びその来訪を告げた。

「あら、唐巢神父ではないですか？どう致しましたか？」

「小竜姫様、突然の来訪申し訳ありません。実は横島 百合子女史からこちらでご息女の事を聞いて置けと言われまして……未来で不甲斐ない様を晒したようにならない為に来ました」

「……なるほど、蛸様のお母上様からですか。よろしい、今は私の上司である齊天大聖様もいらっしゃいますのであの方からご指示を仰いでください」

「齊天大聖様ですか？！わ、分かりました……あ、後修行もつけて貰いたいのですが」

「ええ、いいですよ。おそらく明日からになると思いますから起きたら修行場までおいで下さい」

「はい、ありがとうございます」

SIDE 唐巢

私は今酷く萎縮している。

先日の横島女史の時と同じように。

目の前には猿神・ハヌマン様が佇んでおられる。

私はキリスト教徒だがこのお方が偉大なる高次元の存在である事に代わりがない以上敬うべき存在だ。

何でも老師様は蛸様を大層可愛がっておられるようで彼女のある意味障害となっている美神親子は憎き者と思われているそうだ。

まあ、実際に手を出されるような事はないそうだが……此処まで思われるなんて一体どれほどの方なのだろうか。

「唐巢よ、楽にするが良い。お主は他の大人共と違い蛭……いや、此処では忠夫というべきか……忠夫の為に尽力した。それは誇るべき事だ……未来での事じゃがな」

「は、はい」

「お主は今回あの者たちを少しでも矯正できるように此方に赴いたようだが、はつきり言ってほぼ不可能じゃろう。それほどあの者たちは歪んでおる」

「……………」

「無論あの者たちの全てが悪いとは言わんし、遣り様によつては少なからず改善されるかもしれん。しかし、それもまずは此方を観てからにしておくんじゃ」

そういつて老師様は私に珠のような物を寄越した。

それは記憶という漢字が浮かび上がっている陰陽模様の珠だった。

「それは双文珠と呼ばれる物じゃ。蛭の力の一端で、彼女にのみ赦された神器じゃ……ある意味それが未来の象徴と言ってもいいじゃろう」

「双……文珠？……ッ?!文珠ですか?!」

「そうじゃ、神器でありあらゆる事象を起こせる万能器じゃ。その双文珠は蛭のみ生み出せる物じゃ……神魔を含めての?」

「……………ッ?!」

蛭様とは一体どれほどの方なのだ?

神魔でさえ生み出せない物を生み出すとは??!

「それには蛭の未来、いや……本来の時間軸で起こった事が刻まれておる。横島 忠夫として馬鹿で愚かだった頃からの事が……な。

無論、蛭の能力云々については省いてある」

「……………（ゴクッ）」

「はつきり言つてそれを見せるのは業腹物じゃ、例えお主が蚩も認める大人だとしてもじゃ！……………心して見るが良い」

「は、はい」

老師様の発する氣勢に打ちのめされても何とか返事をする、言われたように文珠の力を解放した。

そして私は知る事になる……………横島 忠夫の人生とその後の偉業を。

気がつけば既に帳はおり、私は座敷で横たわっていた。

その身にあるのは酷い後味の悪さと懺悔すら意味がないと感じ入ってしまう思いだった。

横島女史が言っていた魔神大戦までも令子君の行いは酷いものだった。

老師様が言つたように忠夫君も酷かったし愚かな面が結構あった。しかし、忠夫君は令子君と違い己のあり方を自ら変えた……………換えざる負えなかった。

変わってからというものの忠夫君は凄まじいまでの存在となり世界を護る者へと昇華していった。

そして最後は世界を護り自らの命……………否、存在全てを消滅させた。

「何てことだ……………私の想像など陳腐な物だった。これは絶対に何とかしなければ……………絶対に！」

「あら、起きたのね神父」

「え？」

声を掛けられ振り返ればそこには記憶にあつた九尾の化身が居た。確か現時点では殺生石に封じられている筈では……………？

「確か、玉藻さんでしたか？」

「ええ、玉藻よ。ふふふ、何故私が今此処にいるか不思議に思っているんだけど……蛍が私をあのままの状態で放って置く訳無いでしょう？3年ほど前に解放してくれたわ」

「そ、そうなのですか」

「？何ビクついているの？別にとって喰わないわよ？……って、あぁ未来の記憶見たから自身に課せられた使命の重さを痛感しているのね？」

「ッ！……はい、恥ずかしながらあの者たちの師として情けなく思ってます」

「それが理解出来るのであれば良いんじゃない？とかく人間は責任とか義務とかを嫌がるから……それとね、貴方にある言葉を送ってあげる」

「？」

「後悔も反省も全ては事を成してから……時間は有限、成すべき事を見誤るな……これ蛍の信条の一つよ？」

「……ッ！正しくその通りですね、目が覚めましたよ」

「それなら良かったわ。蛍が信用する人間が燻っている所なんて見て居たくないからね。あ、そうそう夕食準備してあるから食堂の方にいらつしやいな」

この後、私は美衣さんと言われる猫又さんに食事を頂き客間で眠りに着いた。

今後の対策を練りながら……。

その後数日間、私は小竜姫様とメドーサ様（！）に実践を交えて鍛えてもらった。

住み込みで鍛えていた少年達は皆素晴らしい素質を開花させていた。中には未来で魔族になってしまった子もいたので今の在り様に感銘を受けたものだ。

まあ、メドーサ様を神族へと舞い戻らせるくらいの事を成し遂げて



おられるのだから詮無き事かも知れないが。  
私は改めて己の使命を果たす為に修行に身を入れた。

#### S I D E O U T

時は戻り、場所は唐巢神父の教会。

今唐巢は研修の為訪れた美神令子と対峙していた。

当初は以下に性格を矯正するかを考えていたが、老師すら匙を投げ出すほどの者を自分如きが出来る筈もないと方向転換、不正を出来ないように躡ければいいと思直した。

何より残された時間が限りなく少ないのだから。

結果現在自分の持てる全てを使いスパルタ教育を施している。

無論、唯痛めつけるだけでは後に反動でどういう行為に走るか分かったものではない……故に一つ一つ丁寧に説明しながら師として躡けた。

また、未来での事を知るが故に……そして規約が変わった事もあって研修中にする依頼を受ける時には協会を通し監査員を同伴し令子に除霊の厳しさをトコトン説いた。

お蔭で令子はその純然たる厳しさに大分グロッキーになっていた。

「神父、除霊って言うのはこんなに厳しい物なの？さっきのモラ  
ンクで言えばBランクなのよね？」

「新たに設定し直されたランクで言えばね。前のままならCランク  
だよ。もつとも前の設定は結構あやふやだったからね……よくそれ  
で除霊事故が出ていた」

「そうなの？！そういえば……神父は再選考後も変わらずS級ラン  
クなのよね？なのになんで監査員を連れていたの？」

「君が既にGS見習いなら別だが、唯の研修生だからね。こういう  
所も以前は結構緩かったから現場に素人を連れて行って死なせるな  
んて事が結構あったよ」

「うへえ……じゃあ神父は今回の改訂に賛成派なの？」

「？何を言っているんだい？はつきり言って今までが緩すぎたんだ。子供の遊びではないんだから締める所はきっちり締めるべきだからね」

「そんなものかしら？」

「それにね？報酬に目が眩んだり、報酬が価値だの言っているようでは二流以下だよ……GSなら霊を除くと言う事にこそ意味を見出し、尚且つ霊を敬う事を忘れてはいけない」

「霊を敬うねえ、霊なんて払ってなんぼだと思っけど……」

「……ふう〜、言っておくけど……その様な気持ちのまま資格試験を受けたら必ず不合格の上今後一切資格を取るなんて不可能になるからね？」

「いつ?!」

唐巢はそう言つと今日はこれで終わりと告げて解散にしその場を後にした。

「そういえば……資格を取る際には実技試験のほかに筆記や面接が在ったっけ。やばっ!?!」

令子は思わぬ懸案事項を思い出し急いで教会を後にした。

「ふう、やはり上手く伝える事は出来ないか……いや、まだ始めたばかり。反省も後悔も全てが終わった後だ!」

替わって唐巢は美神の在り様に頭を悩ませていた。

勿論直ぐに変わるなんて在り得ない事だが、未来を見ただけに時間の無さが見て取れるのだ。

だが唐巢は立ち止まらない。

この程度の逆境、超えなくてどうする……そう自らを叱咤し更なる

計画を練る為瞑想に入った。

SIDE 大樹

俺は今黒崎君と共にあの者のことを監視している。  
というのも、例の報道後動きを見せたからだ。

「大樹様、ターゲット協会関係者に接触する模様です。見た所百合子様の伝手を持っている方のようですね」

「ふむ、なれば問題なろう。百合子の奴は協会関係者にはあの者の危険性を可能な限り説いていたからな。世界を巻き込むような者を彼らが受け入れる事はあるまい」

そしてその予測は当たり、あの者は肩を怒らせて建物から飛び出してきた。

おそらく今頃協会では百合子の言っていた意味が真に伝わり対策を練っていることだろう。

「さて、黒崎君。次は何処に接触するかな？」

「おそらく軍関係者か、政府でしょうか？若しくはオカルトGメンの子飼いの者かと」

「子飼いの方は如何にもなるまい。政府も然りだ。特に政府はまだ腑抜けた所が目立つからな……あつちには百合子に任せるつもりだ。

問題は軍か……」

「私たちには伝手がありませんからね……あつても上にまでは届きませんし」

「こればかりは蛍が頼りか……クソツ！」

情けない……後悔も反省も後とは言うが、自分達の出来る事の少なさを思うと苛立ちが治まらない。

然しだからと言って燻っていていい筈が無いことも確か……。

「大樹様…… 蛍お嬢様を御思いであるなれば出来る事から成すべきかと。足りぬ手とは存じますが私も最大限に協力致しますので」

「黒崎君…… ふ、無様な俺としたことが。 - - - - -」

- - - - - よし！行くぞ、黒崎君！先ずはあの者と繋がりを持つ者を徹底的に洗い出すぞ！」

「はっ！」

ふふふ、燻るのは全てが終わった後だ…… 黒崎君、ありがとう。

蛍、父さん頑張るからな - - - - -

- - ツ！！

S I D E O U T

さて、大樹が親馬鹿な心の叫びを上げている頃…… ある屋敷では非常に重たい空気が充満していた。

そしてその屋敷の実質的支配者である女性は重い溜め息をついていた。

「困ったものねえ、まさかGSの制度が此処まで急激に変更されしかも罷り通ってしまうなんて」

女性の名は、六道 冥那。

つい最近まで日本のオカルト関係を牛耳っていた者だ。

しかし最近では事情が異なってきた。

少なくとも今までは己の持つ財政能力と交渉能力、そして六道の象徴である十二神将によって事を成してきた。

……が、これからはそれが通じない部分が出て来ることは確実だ。

資格取得の上での筆記試験はどうとでもなるし、実技試験は力押しで何とかなるだろうが…… 面接が危うい。

面接官をどうにかしようにも相手は世界GS本部会長が選出した人物……賄賂など受け取らないし不正などもつての外だろう。事務所にしてもB級以上が複数人という前提で保証と資格試験がある。

此方の保証は日本のGS協会なので如何とでもなるが、相方を探すのも難しいし資格試験も今回が初めてなのでどの様なものか見当もつかないので対策も練れない。

そもそもランクの昇級が一番難しいだろう。

娘の冥子は精神的に脆く直ぐ暴走するのでまともな除霊が出来るとは思えない。

その様な者を上に行かせるほど甘くないのは既に情報収集で把握済みだ。

「本当に如何したものかしらね」

見た目的には全然焦っている様には見えないが、本心はこれでもかと言うほど焦っている。

少なくとも次の資格試験が開かれる2年後には絶対出なければいけないだろう。

六道の行動は常に注目されているので延期など出来る訳が無い。

だが、今のままでは確実に落ちる……そうなれば周りはこちらを叩くだろう。

「困ったわね」

結局思いつくことなど無く時は過ぎていくのみであった。

閑話休題 - - - - -

ザンスで謁見やら騎士任命を終えた後、ザンスを後にした蛭は妙神山に戻ってきていた。

鬼門の歓迎を受け中に入った蛭は見知った気配の変わりように気づいた。

「これはもしかして達成したのかな？」

「おや？帰ったのかい蛭。お帰り」

「あ、メドーサただいま。今感じたんだけど、もしかしてエミ姉さんと勘九郎第一目標達成した？」

「ああ、見事第三まで開眼したよ。エミが意外に早くてねえ、こっちが驚いたぐらいさ」

メドーサの説明を受けながら居間へと行くと、其処にはこれでもかっつと言うほど晴れやかな顔をした勘九郎とそれを若干ウンザリした感じで眺めている雪之丞たちが居た。

「ただいま、皆」

『お帰り（なさいませ）、師匠（蛭様）』

「雪之丞、いい加減その呼び方改めなさい！勘九郎、達成したみたいね？明日にでもやるから今日はもうお風呂入って寝なさい」

「いいじゃねえか、師匠は師匠だしよ」

「はい！分かりました！」

「……勘九郎のやつ、スキップして行ったぞ？」

「蛭様、お帰りなさいませ。もう直ぐ夕餉をお持ちしますのでお待ちくださいね？」

「あ、小竜姫ただいま。別に急がなくてもいいわよ？皆はもう終わってたんでしようし」

賑やかに会話しつつこれまでの事を確認して行く蛭。

それによると、如実に変化の兆しがあったのは先ほどの二人と玉藻だそうだ。

ちなみに以下がそれぞれの現状である。

横島 蛭：320マイト第五チャクラ

玉藻：350マイト第四チャクラ

横島 エミ：95マイト第三チャクラ（第一チャクラと第二チャクラを開眼）

鎌田 勘九朗：92マイト第三チャクラ

伊達 雪之丞：85マイト第二チャクラ

陰念：75マイト第二チャクラ

SIDE 蛭

「へえ、かなり皆上昇したわね。雪之丞も陰念もあと少しで第三開きそうだし……何気に玉藻がいつの間にか結構伸びているし」

「エヘン」

「この子つたら蛭の為にも負けてられないとか言っただけで必死に周天法していたからねえ」

「へえ、ニヤニヤ」

「あ、こらメドーサ！何ばらしているのよ！蛭も口でニヤニヤ言わない！」

私は弟子達が寝入った後残りの皆で今後のことを話し合っていた。ふふふ、玉藻も可愛いわねえ。

まあ、その気持ちは素直に嬉しいよ？無茶して欲しくはないけどねえ。

「しかし蛭様、明日は如何なる術を勘九朗さんに授けるのですか？」

「あれ？聞いてないの？」

「？え、誰にですか？」

「雪之丞たちにはまだ言っただけで、他は知っているよ？」

「……………」

「小竜姫？」

「…………ぐすん」

結局その後、除け者にされて落ち込みいじける小童姫を慰めるので手一杯だった。

開けて翌日、修行場には早くも勘九朗が居た。

煌く笑顔で辺りにこれでもかっと言っただけで笑顔を振りまいているのは昨日と変わらず。

……よく考えれば、これは遣っていいのだろうか？

まあ、今更引き返せないけど……ね。

とりあえず私は勘九朗に術を授けるべく近づいていった。

S I D E O U T

S I D E 勘九朗

私は今歓喜で包まれている。

目の前に居る蛭様も喜んでいてくれる。

ああ、私は幸せ者だ。

私は此処妙神山に来る前から力を求めてきた、世界を見返すために……しかしそれもメドーサ様の契約主である蛭様に出会うことで、それに対して意味を見出せなくなった。

仲間である雪之丞たちは純粹に蛭様の強さを尊敬し憧れを持って接しているけど、私は内心恐れを抱いている。

齊天大聖様との戦いを見た時それは顕著になった。

あの方の内に潜む力はあんなものではない……もっととんでもない物だ！

そう私の第六感が叫び続けている。

それが分かってからと言うものの私の心は空虚に満ちていった。

それでも私は仲間と離れることも出来ず修行に打ち込む事で誤魔化



してきた。

そんなある時、私は蛭様に呼ばれた。  
そしてこんなことを訊ねられた。

「ねえ、勘九郎？貴方、自分自身の在り方を換えて見たくない？」  
始め何を言われたのか理解できなかった。  
だが言葉が頭に浸透してくると私はうるたえた。

「な、何を言い出すんですか蛭様。在り方を換えるだなんて……」  
必死になって暴れる胸の動悸を収めるので手一杯な私。  
其処に更なる爆弾が落とされた。

「魂現纏心の術……己が魂の姿を現し、心の在り様を纏い変身する術よ。この術、ある意味危険性を孕んでいるんだけど……別の使い方も出来るのよね」

「心の在り様を纏い変身……」

「確かに、力を求めるだけの心では醜い魔物になってしまっしその姿で固定されてしまう可能性すらあるわ……けど、使い方によっては自分の望む姿に変身出来るっていう事でもあるのよ」

「自分の望む姿……それは」

「そう、貴方はいつもおなべ言葉を使っているけどそれは別にふざけてやっている訳ではないわよね？貴方は心では女でありたいと思っっている……命を育む者でありたいと」

「……ッ！蛭様……貴女様は私の事を……」

はっきりと言われたその言葉は私の心を鷲掴みにした。  
女性でありたい……正しくその通りである。

私を生んでくれた母上様のように成りたい……母上様を見下した奴と同じ顔で居たくない、私はずっとそう思っていた。でも、そんな事を成すには私には無理だと思っていた。

ちなみに顔にメスを入れるのは産んでくれた母上様に申し訳が立たないので最初から考慮していない。

そしていつの間にか私は力を求める様になっていた……儘成らない世界に反抗する為に。

しかし今目の前に掲示された事は正に自分が望んでいた事だ。

「この術を授ける条件は四つ。一つ、心で明確に成りたい姿とその在り方をイメージ出来る様になる事。二つ、邪魔になる力に溺れた心を綺麗にしてその上で自分を認める事。三つ、チャクラをもう一つ開ける事。最後に、心を穏やかに清らかに保つ事……これは二つ目と被るかしら？」

「……私は、私は成れるのでしょうか？」

「成れるわ。貴方は私の友人でしょう。大丈夫、貴方なら必ずや成し遂げられます！」

「……………ツ、蛭様」

蛭様が真っ直ぐ私を見詰めながら私になら出来ると言ってくれた時……友人だと言ってくれた時、私の心には言い様の無い喜びが生まれていた。

それからと言うもの、私は己を自分の心を偽ることを止めた。

私は私だ。

他でもない自分が信じないで何に成れると言うのだ。

蛭様は信じてくれた……世界を背負って尚自身を貫いている蛭様が認めてくれたのだ！

これで出来なくて自分に存在する意味などあるものか！！

絶対に成し遂げてみせる、私を見守ってくれる方の為にも……母上様、見守っていて下さい。

そしてやって来た、その時が！  
前日直ぐに私の在り様に気付いてくれた蛭様が言われたように就寝し英気を養った私は早朝に修行へと顔を出し、瞑想をしていた。心にあるのは静かな水の情景。  
其処には波紋すらなく透き通った空色が映えていた。

「さて、術を授けるわよ勘九郎」

現れた蛭様が私を見つめて言った。  
その身を包むのは若草色の肩が開いた中華風の道着で背中に対極が描かれていた。  
そして何より驚いたのがその額に瞳が開いていたのだ。

「ほ、蛭様。その道着は？何よりその瞳は？」  
「？あゝ、これは私の正装よ。これはまあ、レプリカの様な物だけだ。で、額の瞳は心眼。私の相棒よ……ちなみに私は真正銘人間だからね？他の因子が混じって入るけれど」  
「私の名は心眼だ。勘九郎殿よろしく頼む」  
「は、はい！」

瞳に名乗られてビクついてしまった私。  
だって吃驚するじゃない！  
蛭様はそんな私を見て、すまなそうに謝ってきた。  
何でも心眼さんの手助けを持ってより精密に術を授ける為に普段は閉じている瞳を開いていたそうだ。

「御免ね？悪いけどもう一度瞑想して心を落ち着けてね、それから術を授けるから」

「……はい」

気を取り直して瞑想する私を他所に蛍様は地面に魔法陣らしきものを描き始めた。

何でも今回の術の効果を半永久的な物にするために用意したとの事。本来なら術を掛けそれを受け入れる事で自身もそれを発動する事が出来るようになるらしいが、私の場合は常時展開することになるので私自身に術式を刻み込むらしい……魔法陣はその補助だ。

暫らくして心が先ほどのように静かになった頃を見計らって蛍様が声を掛けた。

「さて、それでは改めて。勘九郎？これを受けたら後戻りは出来ないけど、いいのね？」

「はい、私に迷いも後悔もありません。どうか術を授けてください」「分かったわ」

頷くと蛍様は魔法陣を起動させ自身の霊力を全開まで高めた。

立ち上る霊力は心眼さんが言うには1300マイル近くまで高まっているらしい……正に別次元だ。

精神を集中している蛍様を補佐し術を展開する心眼さん。

「我心眼の名の下展開せよ魂現纏心の術式よ。かの者、鎌田 勘九郎に宿りてその効力を発揮せよ！」

浮かび上がった白い光の螺旋模様の何かが私の体へと纏わりついていく。

そしてそれが全身に行き渡った時、蛍様が力ある言葉を発した。

「我が名、横島 蛍の名の下に起動せよ！救世天蓋魔法陣！かの者の力となれ！！」

術式によって再構成される私の肉体。

事前に聞かされていた通り、変化後の姿と心の在り様をはつきりとイメージする。

そして術式は正しくその効力を発揮し私を母上様似の大和撫子風の女性へと換えた。

その少女となった私に収束する魔法陣……この魔法陣が私の内から術式の力を循環させ効力を半永久的に留める役割を果たすそうだと。全ての効力が発揮し終わった頃、修行場には心眼さんを閉じた蛸様と女へと変貌した私が佇んでいた。

「……どうやら無事成功したようね。見違えるほど綺麗になったわよ？……名前は如何するのかしら？」

「……母上様の名を借りて、九琉と。出来れば鎌田の姓も変えたいところですが、何かありませんでしょうか？」

「何なら横島姓名乗る？そういうえば陰念も名字なかったわよね？」

「よ、よろしいのですか？」

「ええ、構わないわよ……おめでとう横島 九琉。貴女の再誕を心より祝うわ」

「ありがとうございます、蛸様」

「あら、これからは家族なんだから様付けは禁止よ？」

「そんな、勘弁してください蛸様」

意地悪な表情で私には不可能なことを言う蛸様。

泣きの入った私を少しばかり眺めた後、皆に知らせる為に私を促した。

「さて、皆にお披露目と行きましようか？吃驚するわよ、皆  
「はい！」

修行場を後にした私たちは仲間の待つ居間へといったが、揃って腰

を抜かされた。

あのメドーサ様でさえだ……最も直ぐにどういうことか思い至りお腹を抱えて爆笑していたけど。

雪之丞や陰念など白目を向いて気絶したくらいだ……今度添い寝してあげましょうかって言っただけなんだけど。

玉藻様は腰こそ抜かされていたものの純粹に歓迎された……流石蛭様の相方だ。

小竜姫様は私のある部分を凝視していたし、エミさんは成された事の破天荒さに呆れていた。

何にしても最終的には皆に受け入れられたので一安心だった。

こうして鎌田 勘九郎改め、横島 九琉の人生がスタートした。

ちなみに魂と肉体の誤差が皆無になった為私の靈力値は130マイトまで跳ね上がっていた。

今の私には靈力値など如何でもいいことだけど、これで少しでも蛭様のお役に立てるのであれば本望だ。

S I D E O U T

九琉の事が受け入れられ少し経ったころ、カオスからマリアの設計図が見つかったとの報告を受けた。

それを受けた蛭は家に百合子が帰ってきているのが分かったので九琉とエミを連れてゲートを通った。

とりあえず百合子に九琉とエミの資格試験対策の勉強会と事務所関連の知識を授けてくれるように頼むとカオスの元へ行った。

「人工幽霊番号カオスは居る？」

『はい、今は地下の研究室で作業をしています』

「了解」

蛭は言われるまま地下へと下りると其処にはほぼ完成したテレサを

前にしたカオスが居た。

「ん？おお、蚩よ来たか。これからこの人造人間2号であるテレサの人工魂を作動するところだ」

「連絡を受けてからそれほど経ってないって言うのによく此処まで仕上げられたわねえ」

「うむ、マリアの性能アップのお蔭で作業が捗ってな」

「ふうん、これが秘術の言葉な訳ね……ん？……ちよつとカオス？」「なんだ？」

「此処の言葉の羅列可笑しいわよ？これじゃあ意思の自由度が高すぎて即効で反乱を起こされるわよ？」

「な、なんだと?!……ああっ!?!これでは確かにいかんっ!」

「危なかつたわねえ、それで修正できる？」

「う、うむ……これでよし。助かったぞ、蚩よ」

冷や汗かきまくりなカオスを横目に蚩はテレサを観察した。

「ところでこの子はどついうタイプなの？設計図が同じだからマリアと同タイプ？」

「いや、主に情報収集と探知能力を高めた所謂情報戦を得意とするタイプだ」

「なるほど、マリアで前衛を固め後方でテレサと共に支援という形ね？」

「うむ……では、作動させるぞ？」

放たれる力ある言葉が靈力に変換されていきテレサへと流れ込む。結界に守られ、雑霊が微塵にも混じらない環境で行われた生命誕生の儀は見事完成した。

「目覚めるわよー!」

「……動力源起動を確認、おはようございますマイマスター」

「うむ、良くぞ目覚めた。お主の名はテレサ……私がマスターの力オスだ。そして此方の横島 蛍をセカンドマスターに登録しておけ」

「了解しました、カオス様・蛍様」

「？何で私？」

「いざと言う時の為だ、何事も保険は必要だからな」

「そう……ところでテレサ？貴女の姉を紹介するから上に行きましようか」

「そうだな、マリアも待ちどうしくしておったからのう」

その後、心温まる姉妹の顔合わせが行われ百合子も自分をフォローできるレベルの助っ人が出来て喜んでいた。

百合子に新たな助手も出来たのでヒヤクメには蛍が自分の手伝いをするように頼んだ。

「それじゃあ、蛍様。私たちは百合子様に教えを請えばいいのですね？」

「確かに私もまだ知識が完全ではないワケ。百合子母さんならその辺問題なく対処してくれるだろうし」

「うん、無論時間がある時は鍛錬を欠かさずにね？少なくとも次回の資格試験までは気を抜かないように」

『了解』

「蛍も様になつているわね。……此方は私が責任を持って最高の状態にするから蛍は自分の事を優先させなさいね」

「うん、分かってる。……それじゃあ、マリアにテレサ？カオスの事もだけど母さんのフォローもよろしくね？」

『お任せ下さい、蛍お嬢様！』

「うん、もうそれで良いよ（もー諦めた）（涙）」

際限なく増えるお嬢様扱いする仲間には蛍はもう既に諦観の念を憶え



始めていた。

## 第八章へ変化せし魂と目覚めし魂（後書き）

6月最後の投稿です。

次回は7/3の7時に投稿予定です。

勘九郎に関しては当初からこうする予定でした。

名前に関しては特に括りはないのですけど。

別案が出ればその時変更する予定です。

あと明日7/1に黒歴史クロス編【ネギま】を投下いたします。

ご都合的な流れが目立つのでその部分に関しては目を瞑って貰えると幸いです。

投下時刻は未定です。

第九章 見守る者たちと語られる未来（前書き）

タイガーの口調が上手く書ききれません（汗）

広島弁は難しいです（涙）

修正すべき所があればご指摘御願いします……それではどうぞ。

## 第九章 見守る者たちと語られる未来

テレサ誕生から時は経ち、蛭は14才になっていた。

これまでの間に精神寄生体悪魔であるナイトメアを封印したりジャングルの奥地に住んでいたタイガー寅吉の能力を封印して精神を鍛える為に連れてきたりしていた。

当初蛭はタイガーを日本に連れて行くことに悩んでいた。

少なくとも大戦が終わる頃まではそのままにしておいた方がいいのではないかと思っただけだ。

だが結局蛭は連れてきた……何を思っただけは蛭自身にも分かってはいないが。

蛭はタイガーのその臆病な性格と引っ込み思案な所を矯正するべく家に連れて行った。

エミや九琉が居たのでかなり動揺していたが蛭はこれも修行だと言っただけに居させている。

今は母さんの下で日々扱われている。

ちなみに、弟子達の学業履歴は百合子の教育と高校から編入する事でフォローする事になっている（既に義務教育云々というレベルではない）

SIDE 小竜姫

妙神山管理人の小竜姫です。

え？知っている？……登場場面が少ないのでアピールしているだけです。

エミさんと勘九朗さん改め九琉さんが下山してから少しばかり静かになった妙神山でしたが、蛭様が戻ってきてからはまた以前の騒がしい雰囲気に戻ってきました。

本当に以前とは様変わりしてしまいました……楽しいですけどね？

現在私とメドーサ、玉藻さんの三人で弟子達の今後の修行を語り合っています。

蛭様は陰念さんに新術を授けている最中です。

ちなみに雪之丞さんは既に魔装術を会得しており、今は陰念さんの様子を見学しています。

蛭様が戻ってこられた際、お二人とも第三チャクラまで開眼してらしたので九琉さんに続き術を授ける事になったのです。

僅差ですが雪之丞さんが先に達成していましたので先に授けられたと言っわけです。

その際には人界に下り事務所の方で行われました。

ただ問題がありました。

蛭様を通した再構成とこれまでの此処での生活でメドーサはその存在が神族のそれに舞い戻っていたのです。

これには蛭様も参りましたが其処に老師様が魔界正規軍のワルキューレ大尉を連れてきたので事無きを得ました。

老師様が言うには現在蛭様のお父上であられる大樹様にはワルキューレ大尉の弟さんが付いているとの事。

状況も膠着しているので丁度いいから彼女を蛭様や私たちと顔合わせさせておこうと思いつたそうです。

蛭様は彼女を見た瞬間その手を取って術の契約主になってくれるように頼んだのです。

ワルキューレ大尉はそんな蛭様に恐縮しつつも喜んでその旨を呑みました。

こうして雪之丞さんは契約を終えその身に襲い掛かる凄まじい負の衝動に耐えきる事でとりあえずですが魔装術を物にしました。

その後、彼女は蛭様と少しばかり話されましたが、次に会う時はジークも一緒にね、と言っ言葉に微笑み頷くと元の任へと戻って行きました。

そして現在、蛭様は残る陰念さんに術を授けているという訳です。

「とりあえず周天法を軸に各人の能力を伸ばせる相手との模擬戦をさせるのが基本となるだろうね」

「そうですね、とりあえずは切り札となる物は皆さん得られたのですから……ね。後はどの様に成長するかですから」

「でもそうなると誰が誰の面倒を見るの？」

「そうさね……魔装術を使う雪之丞は私だろ？今はまだ飛行能力を開花させていないからねえ、そこら辺を刺激しつつ弄くってみるよ。陰念の影装術は変幻自在って蛭が言っていたから小竜姫がやったらいいんじゃないかい？」

「私ですか？」

「玉藻の幻術とぶつけるのも良いかも知れないけど、パワーさえ落としておけばあんたの場合……自身の修行にもなる筈だよ？」

「ああ、なるほど。奇襲奇策に弱い小竜姫様にはいい相手かもね」「うう〜」

話し合うのは良いのですが、こういう分野だとどうも常に私が弄られるパターンになります……未熟ゆえの罰かもしれませんが（涙）  
聞いた話ではメドーサも玉藻さんも蛭様との契約による記憶の部分的な共有化と蛭様の記憶そのものを見た故に私以上に私の欠点がかかるそうです。

それを聞いた時私はついずいと言いは非私もと名乗り上げましたが、傍にいた老師様に怒鳴られてしまいました。

何でも蛭様との記憶の共有や記憶の閲覧は通常のそれとは違い、凄まじい苦痛を伴い下手をすると存在の墮天が起こりうるそうです。

メドーサと玉藻さんが無事なのはあくまで元々契約していたり同因子を内に含んでいたからだそうです。

でなければ今頃お二人とも生きた屍になっていただろうとの事……  
一体蛭様の内面にはどれほどの物が渦巻いていらっしやるのでしょ

うか？

それから暫らく話していると三人は戻ってきました。戻ってきたお三方はそれぞれいい表情をしていた。

「いやー、思った以上に相性良かったよ。初めは魔装術の五割いけばいいかなと思っていただけど七割ほど迄持っていけるよ。これも日ごろの鍛錬の賜物でしょうね」

「ああ、スゲー迫力だったぜ陰念のやつ。初めはマスクマンみたいな感じだったんだけどよ、その後なんて言うか黒豹か？あの感じ……師匠の言葉を聞いていきなり更に変身した時にはビビッたぜ！」  
「蛭様が影装術の隠れた持ち味を教えてくださいましたからな。あれは何ていうか開放感が凄かった。正に何にでもなれそうな感じがしたよ。……尤もだからこそ自分をしっかり持たないと駄目なんだろうけどな」

どうやら成果は上々のようです。

陰念さんも今までにない晴れやかな表情です。

私は落ち着いたところで今話していた事を報告しました。

「ん、いいんじゃない？……ふむ」

「蛭様？」

「雪之丞も陰念も新しい力を手に入れた……切り札となるべき物を……そろそろいい時期かもね」

蛭様はそう言うのと立ち上がり私たちを眺めました。

「ちょっと待ってて事務所や家に居る連中を呼んでくるから」

蛭様はそう言うのと身を翻しゲートのある方へと歩いていった。

その時隣に居たメドーサと玉藻さんが立ち上がりました。

「?どうされたのですか、二人とも?」

「ちよつとね……玉藻あんたもかい?」

「当然」

「……だったら今回はあんたに任せるよ」

「ん、任せて」

「?」

玉藻さんはそうメドーサに言うつと直ぐに蛭様の後を追いました。

そしてメドーサはと言うつとまた元居た所に腰掛け寛ぎ始めました。

一体何なのでしょう?」

「メドーサ?先ほどのやり取りは一体?」

「………はあゝ」

メドーサは訪ねる私を一瞥するとこれ見よがしに深い溜め息を吐きました。

な、何ですか……物凄く失礼な態度ですね?!

サツと顔を紅潮させる私が文句を言おうとした所に声を被せるメドーサ。

「激昂するのは構わないけどね?小竜姫、あんたも蛭の手助けをしたいと本気で心から思うならあの子の考えた事ぐらい瞬時に分からない様では駄目よ?」

「えっ?」

「私も玉藻も常に蛭の言動や行動、表情を気をつけて見ている。そうすると分かるのさ、如何にあの子が自身の事を度外視しているかを……」

「それは……」



「今回もそうさ、まず間違いなくあれはそういう行動をする時の顔をしていた。ま、何をするかも大体把握できるけど……本当に自分の事は考えてないよ、あの子は」

正に理解しているという佇まいで語るメドーサ。

しかし私には未だ何をなさるつもりなのか分からない……何て事なの？

私は突然愕然とした。

自身の有様に……余りにも腑抜けている様に！

私は知った筈ではないの？

起こる悲劇を回避する為に尽力する筈ではなかったの！？

救世の大神人である蛍様の力になると自分の魂に誓ったのではないのっ！！？

「……………ツ私は一体何をしていたのっ！！！？」

「……………」

『……………(呆然)』

自身の有様を理解し激高する私、それを静かに眺めるメドーサと啞然としている雪之丞さんたち。

だけど私はそれらを視界には捉えてなかった。

そんな私にメドーサは溜め息を吐くと瞬時に出した刺叉で頭をこれでもかと言つほど強くブツ叩いた。

……………ゴソツ！！！！

「……………」

『……………(うわあ)(汗)』

「落ち着きな、未熟者！そんなんだからあんたは馬鹿なんだ！」

「……………ツ。メドーサ、痛いじゃないですか」

「お主が悪いわ、馬鹿弟子。あれほど気を引き締めよと言っておいたにも拘らず何たる様じゃッ!!」

「ろ、老師様っ?!」

いつの間にか其処には老師様が居られました。

狼狽する私を他所に老師様はメドーサに瞳で問いかけると彼女も直ぐ神妙な表情で頷いた。

それを受けて悄然と天を仰ぐ老師様。

この時私は本気で分かっていなかった……蛭様が行おうとしている事の辛さを、痛みを。

S I D E O U T

S I D E 玉藻

屋敷に行く蛭にすぐさま追いついた私は其処までやる必要があるのかと問いかけた。

蛭は完全に自分のやる事を理解している私に苦笑すると黙って頷いた。

私には蛭が何を持って雪之丞たちにそれをしようとしているのか分からない。

未来での友人ゆえか、それとも秘密を抱えているのが辛いからか。

だが、これだけは分かる。

少なくとも彼らの情を利用するような事は一切考えていないと言う事は。

「あいつ等は何をどう取り繕った所で首を突っ込んでくるのは目に見えているからな」

蛭が呟く……女言葉ではなく本来の口調で。

「俺が勝手に連れてきて係わっているんだからそれも必然だろうけど……な」

「……後悔しているの？妙神山に連れてきた事を」

「まさか。少なくとも勘九郎や陰念に関しては最良だと思っている、雪之丞は言わずもなだしな」

「ならいいじゃない……やれるだけの事をしてその結果不都合が生じたらまた違う道を示せばいいんだし」

「……さてな。まあ、やるべきと決めた事があるなら迷わず突き進むのみだけだな……俺は」

そう言うと蛭は扉を開けてゲートを潜った。

「……ただし、自分の事は度外視ででしょ？……馬鹿」

私は呟くと蛭の後を追った。

蛭が無茶を覚悟の上で突き進むと言うなら、私は常にその傍でそうならない様に気を配るだけよ！

その後、蛭は屋敷と事務所に散らばっていた者を集めると内容を告げた。

「悪いわね、皆。実はついさっき陰念も術の獲得が終わってね。いい機会だから皆に私の事を知って貰おうと思ったのよ」

「蛭の事？」

「蛭様のことですか?!」

「ほう、ついに教えて貰えるのか」

「蛭お嬢様の事……メイドとしてきちんと理解せねば!」

「蛭お嬢様の事ですか、最重要事項ですね」

「タイガー君は良いのかい？」

「……うん、タイガーはまだ自分を持っててないからね……受動的に動いている限りは付き合わせる気はないよ、危険だしね」

「そうかい、じゃあ私はあの子の面倒を見ているよ」

「うん、ありがとう」

蛭は残る百合子さんにタイガーへの伝言を頼むと皆を連れてゲートを潜った。

百合子さんは後に続こうとした私に近づくと囁いた。

「玉藻ちゃん、あの子の事宜しくね？」

「！……ええ、もちろん！」

私は百合子さんに微笑むとゲートに飛び込んだ。

常に先を行く蛭を見失わない為に。

S I D E O U T

S I D E タイガー

わっしはタイガー寅吉とゆいますけえの。

ジャングルの奥地で暮らしとった所を蛭さんに出会いましたんじや。何でも修行の為に世界を回つとるとの事。

わっしは極度の女性恐怖症じゃったがなんでか蛭さんじゃあ恐怖を抱かんじやった。

初めての事で随分感動したもんじや。

勢いあまって抱きついた時にやあけつり飛ばされましたが(汗)

何とか落ち着いて事情を説明したらなんと能力を封印してくれましたんじや。

喜び勇んで抱きつこうとしたら殴られました(涙)

その後これだけじゃあ根本的にやあ解決しとらんっちゅう事で東京に連れてかれましたんじや。

「蛍さん、わっしは何処へ行くんか？」

「ん〜？私のうちよ……そこで貴方は高校入学まで私の母さんに精神を鍛えて貰う予定」

「蛍さんのおかんか？」

「家の母さんは世界でも有数のやり手実業家だからね。貴方のようなタイプを制するくらいはお手の物よ」

「はあ」

「もつとも貴方のやる気や根性が一番大事だけどね？母さんは少なくとも今から一年は家に滞在しているから取り込める物は何でも取り込みなさい」

「其処までしてもらおてええんか？わっし如きが……」

「タイガー？その言葉二度と言っちゃ駄目よ？己を卑下する言葉は己自身を貶めるだけじゃなく、周りの人も貶す事に繋がるんだから。周りと比べたり自分を卑下するようじゃあ何時まで経っても能力の克服なんて出来やしないわよ」

「……ッ？！は、はいっ！」

あの時の蛍さんは静かじゃったが怖かったじゃ……じゃけえこそそれからあ一度も自分を貶めるような事は言ってんが。

そうして辿り着いた豪邸に驚き、そこにおった別嬪さんに暴走しかけ（蛍さんの制止の声ゆびせえ視線で踏み止まれたが）出て来た蛍さんのおかんの豪胆さに度胆を抜かされました（汗）

それから自己紹介の後、早速能力の説明とこれまでの生活や出来る事を話したんじゃ。

それを聞いた百合子さんは一瞬ギラリと目を光らせましたが、蛍さんが取りおおてくれて事無きを得ました（怯）

それで百合子さんに付いて暫らく精神を落ち着けることに従事しとつたんじゃが……いつの間にか屋敷にやあ百合子さんどわっししか居らんかった。

「百合子さん？皆さんは何処に行ってもおたんか？」

「皆なら蛭に連れられて妙神山って所に行つたわよ？貴方も連れて行くか悩んでいたけどまだ自身を確立していない貴方が知っても苦痛なだけかなとか言つて踏み止まっていたわ」

「？どうゆう意味か？」

「タイガー君は将来何に成りたいとか何をしたいとか決まっていな  
いでしょう？」

「そうじゃの。今わっしが考えとるんは能力をどうにかする事だけ  
じゃ」

「でしょうね。でもそれでいいと思うわよ？人には人の速度という  
ものがあるからね……その結果周りから取り残されていく様な錯覚  
を覚える人も居るでしょうけど」

「わっしはこのままでええんじやろおか？恩人じゃ蛭さんの役にも  
立てず迷惑ばかり立てとります……アタツ」

呟きながら鬱になっていくわっしを百合さんが引つ叩いて引き戻  
したんじゃ。

見りゃあ百合さんは酷く重たい溜め息を吐いotta。

「あのねえ、タイガー君？蛭は別に君の能力を当てにする為に連れ  
て来た訳ではないのよ？あの子が貴方に望んでいるのはただ一つ……  
…貴方が自らの幸せをもぎ取る事」

「……幸せを、もぎ取る？」

「そう、ただ得るのではなく自分の本当の精一杯以上……力の限り  
の努力をした結果得られる幸せを堪能して貰いたいのよ」

「力の限り……」

「誰かから言われてやったことや流されて行動した先にある幸せな  
んで望んで欲しくない……蛭はそう言っていたわ」

「……わっしは」

「今貴方に出来る事は一つ、少しでも能力を制御出来るようになる事。……但し！焦っては駄目よ？焦りは全てを台無しにし兼ねないからね」

わっしの目を見て真摯に語る百合子さんの言葉を受けて自分は確かに感じた、自分の中に確かな火が点るんをつ！

自分に勝てん者がほんまの幸せを掴める道理も無いじゃけえね！わっしは成し遂げて見せる、蛭さんがわっしの奮起を望むならわっしは自分の全てを持って応えて見せる！

S I D E O U T

蛭が妙神山の居間に戻ってくるとそこには昼餉が用意されていた。見た所人数分あるようだ。

「あれ？老師来ていたんですか？」

「うむ、向こうもようやくと落ち着いたのでな。過激派の奴らももう少し落ち着けばいいものを」

「懲りない連中ですからね……ところで、今から私の秘密を明かそうかと思っているんですけど」

「別に昼餉を取りながらでもできよう？」

「え？いや、文珠で記憶の開示をしようかと」

「駄目じゃ、口頭で話せ！文珠での開示は許さん！」

「老師……はあ、分かりましたよ」

蛭は老師が何を言いたいのかはつきりと分かっているだけに強く出れなかった。

周りの者達は神魔と玉藻を除いて意味が分からなかったようだが……いや、どうやら顔を顰めている力オスは気付いたようである……蛭の危うさに。

小竜姫は蛭が戻ってくるまでに教えてもらっていた。故にカオスとは違う意味で顔を顰めていた。

その後昼餉を取る中、蛭の秘密……未来での出来事……が語られた。今回開示されたのは魔神大戦とその後の世界情勢だ。

語られる荒唐無稽な話に観衆は頭を捻る事もあったが話が佳境にもつれ込むと揃って表情を険しくしていた。

そして締めくくられる世界の危機。

なした事、なされた事共にとんでもないものであった。

大戦の語りが終わりに近づきその後の変化を語る頃になると皆、蛭の表情が能面の様になっている事に気付いた。

語っている口調は普通、語られる事の中に嬉しい事があって嬉しそうに語る時も表情は能面のままだった。

そして太極天の終結を語り終え蛭への継承を語った時それは起きた。

「そして、太極天の意思と因子、記憶を受け継いだ私は……」

「……………ッ」

「蛭？……いかんッ！」

「ちいっ！油断した！」

「私が潜るから老師とメドーサはサポートしてっ！！」

「了解したッ！」「頼むよッ！」

突然昏倒した蛭に老師、メドーサ、玉藻の三人が逸早く反応し行動に移った。

倒れ伏した蛭を起こし因子を共鳴させるメドーサ、蛭の額に自らの額を押し当て目を瞑る玉藻、そしてそんな玉藻と蛭を真剣な眼差しで見つめながらも覚醒を促す呪を口にする老師。

他の面々は声すら掛けられなかった。

緊迫した空気が流れる中、暫らくすると玉藻の目が開かれ蛭の無事を告げられた。



「……ふう、何とか蛍の精神を引き上げる事に成功したわ。蛍自身も贖っていたから成功したようなものだけだね」

「うむ、助かったぞ玉藻。我ら神魔では蛍の深層意識に近づく事ができんからな」

「精神に介入するまでなら何とかできるけどね……どちらにしろ私らじゃあ無理だったろうさ」

一息つく三人に他の者は物言いたげな顔をしていた。

老師はそんな彼らに溜め息をつきながらも説明する事にした。

「……これから話す事はある意味蛍の生命線じゃ。心して聞くように」

『……………』

「今回蛍に起こった事は未来の太極天の意志との融合率が極端に上がってしまったからじゃ……構成因子に違いはあれど、根本は同じじゃからな。蛍にとって未来の事を反芻すると言う事は今の自分を未来の太極天と言う存在で塗り潰すようなものじゃ。……これがどれだけ危険な事が皆も理解できよう」

本来完成された人の因子にそれ以上の存在が介入すればその人間は塗り潰され消えるのが普通だ。

だが、蛍の場合は違う。

元が同じ存在ゆえにその形は尊重され、飛来した因子は極表層部分で再構成された。

しかし、その状況で事が進めば問題なかった融合も蛍の強すぎる感受性によって思わぬ方向へと進む。

なんと飛来した因子が避けていた深い侵食を自ら誘ったのだ。

本来男子であった忠夫が半ば女性体にシフトしたのもこれが原因だ。そして起こってしまった容姿すら変化させる融合は蛍の精神に爆弾

を成形してしまった。

深い繋がりを得て未来の太極天との相互性が深まった替わりに深く太極天の記憶を回想すると存在そのものがシフトしてしまうのだ。そう、最初に言った塗り潰しと言う現象が起こりえてしまうのだ……本来であればだが。

「蚩は今回再構成してから初めて未来の詳細を自身で語った。今までは他の要素を少なからず通しておったから事無きを得ておったが……な」

「蚩が太極天としての未来を語ると言う事は所謂自身の傷口を広げて相手に見せるようなものよ。」

そして蚩の傷口の凄惨さは言うまでも無いわよね？」

「今回老師が蚩の行動……文珠による記憶の開示……を避けたのは少しでもこれによるダメージを避けるためさね」

「……以前文珠で夢と刻んで回想したことがあったけど、あれはただ幾つかフィルターを通していたからね。……でも今回は違う」

三人が語る蚩の現状に皆は言葉が出なかった。

特に最近蚩を妹として可愛がっているエミや己のあり方を換えてくれた故に心底心酔している九琉はそれが顕著だった。

神魔は別の意味で言葉がなかった。

太極天の生前がどれだけ凄まじかったか深く知る故に、先ほど蚩が味わった痛みがどれほどか想像できないから。

「皆のものよ、今回蚩が秘密を語ったのは何もこの先の警告を促す為だけではない。力を持つ者の宿命を知って欲しかったからじゃ」

「力を持つ者の宿命……？」

「力を持つ者には幾つか種類がある。大きなそれに吞まれ驕る者・無闇に揮い周りを破壊する者・自滅する者・寄生され搾取される者・疎まれて滅ぼされる者……上げればきりが無いが、蚩はこつという者

になつて欲しくない故に語つたのじゃ」

「……正に私たちの事よね？」

「……ああ、師匠の力に嫉妬したり無闇に力を求めたり……な」

「……手に取るように解るな。蛭様に会わなければ俺は確実に自滅していただろうな」

「……私もそうね。律する事ができても間違いなく暗い何かに身を委ねていたかも」

「……わしもじゃな。研究に没頭する余り周りの事を気にしなさ過ぎることは儘あつた」

「……私もそうですね。心のどこかで人界最強の神族という謂れに慢心していましたし」

皆感じ入るように呟く。

實際陰念と勘九朗こと九琉は未来で悲惨な目に遭つているので洒落にならない。

ちなみに皆の将来に関しては語っていない……無意味だからだ。

「蛭は今迄もこれからも今語つた大戦をより被害を抑える為に奔走してある。蛭は勿論のことわしもお主たちに矢面に立てなどと言わん。じゃがどうかそれに行き着くまでの手伝いをしてやって欲しい」

老師はそう言つと頭を下げた。

これに驚く皆……天に等しいと自ら語る老師が人間に頭を垂れたのだ、当然だろう。

慌てふためく皆を他所に玉藻とメドーサはエミとカオスに声を掛けた。

「特に貴方達年長者には下世話な思惑を持つものたちから蛭を護つてほしいの。蛭自身気を付けてはいるけど限度もあるからね」

「私たち神魔や世間的に表に出られない玉藻では限度があるからね」

そういうと此方も頭を下げた……此方も驚きだ、特にメドーサ。言われた方の者達はと言うと一瞬驚きはしたが何を今更といった表情をしていた。

「頭をお上げ下さい、老師様。私たちが蛍様をお手伝いするのは当然のことですわ。……以前から感じていた御自身の事に余り関わらせなかったのもやっと理解できましたしこれからは如何様にでも扱き使って下さいませ」

「全くだ、今更だぜ老師。俺達が師匠を放って置く訳ないだろ？」

「蛍様の為になれるなら断る道理などありませんね」

「可愛い妹が自己の安全を考慮せずに突き進むなら姉として守ってやらないとね」

「盟友が籠絡される等ありえんじやろうが、だからと言って好き勝手されるのを黙っている道理は無いのう」

それぞれが思いを口にするると三人は嬉しそうに顔を綻ばせた。

その後、目を覚ました蛍に全員でプチ説教の会が開かれたのは言うまでもない。

……誰しも親しい者が危険を承知で無謀とも言える事をすれば怒りたくもなるだろう。

「ひーん、皆許して〜（涙）」

『許しません!』

閑話休題 - - - - -

憔悴した蛍が口から魂を覗かせているとエミが今後のことを話し合おうと提案した。

尤もな事なので同意すると確認事項が二つ挙がった。

一つは事務所のこと。

エミの他カオスと三人組はGSになる。

そして現規約で事務所はB級以上が二人必要である。

エミはその類稀な呪術の腕前をより強化している。

エミ自身の頼みで特許を出す事はしない手筈だがその洗練された手腕と鍛え上げられた人身把握術で問題なく段階を上がっていくだろう。

カオスは特例で研修が免除される予定である。

既に従来よりも強力で単価が安い破魔札や吸引札の量産に成功しており世界で絶賛されているゆえだ。

世界GS本部の重役会議で実演もこなしているので比較的早くに上り詰めるだろう。

問題は残りの三人であったのだがそれほど配置には問題なかった。

九琉は既に蛭の為になることをすると決めている。

それが事務所の所長になることならば成し遂げるだろうが既に所長枠は問題ない。

なればどうするか……と考え、結論は副所長となることであった。

カオスは世界GS本部との掛け持ちであるし、エミはどちらかという後衛だ。

なれば自分が前衛で雪之丞たちの統率を取ればいいと結論に至った。これには雪之丞たちも異論は無かった。

雪之丞は基本強い奴と戦えれば満足だし九琉の指揮なら問題ないと判断した。

陰念はもつと単純で、妙神山に着てからというもの身に染み付いた従者根性と蛭への傾倒で文句など出る筈も無い。

他の人員は基本事務所以外で行動しているので対象外である。

マリアとテレサは基本カオスと蛭のサポート……暫らくは百合子のサポートも。

玉藻は基本妙神山預かりで家の方にいることになる……まあ、同じ敷地内だから変わらないけど。

メドーサは妙神山に留まり己の修行と老師の作業を手伝っている。

ヒヤクメはそろそろ任務に戻るし、小竜姫は管理人として修行場から離れられない……少なくとも今は。

尚事務所の指針として人外との共存と心ある除霊（と美神と六道には係わらない）を掲げている。

二つ目は蛭の大まかな行動予定だ。

蛭は皆にも未来ノートを開示して考え合った。

「まず既に決まっているのが15才までにチャクラを全て開いて第三の封印を解いたら死津喪比女を封印しておキ又ちゃんを解放すること。たぶんGS資格試験より前になるかな？」

「今蛭は第5まで開けてたよね？」

「うん、もう直ぐ第6も開くよ。素の霊圧も350マイルを超えたとし、6を開けば一気に高まるからね……体の方ももっと鍛えないと」

「とんでもねーな」

「それで、それ以外では？」

「後は……他の要因が絡んでくるから何とも言えないけど、行動を起こす以外の時は此処に籠るよ」

「フェンリルに中世辺りは時を見てかしらね？」

「うん、特にフェンリルは出来れば行動を起こす前に説得したいけど……難しいかな？」

「神魔が介入できない以上蛭様に任せる事になりますが……オカルトGメンはどういたしますか？」

「出張つてきても犠牲者が増えるだけだからね……ま、それはともかく九琉？」

「はい、なんでしょうか？」

「最悪の場合、貴女に月の女神アルテミスを降臨させるかもしれないからよろしくね？」

「分かりました！」

前衛能力に優れた女性になった九琉なら或いは憑依も可能かもしれない

いしね、と言う蛭。

その後も事細かく事件の紐を解いていく……殆どが今現在では手が出せない事もあって確認のみで終わったが。

それも夜半過ぎには終わりその日は解散になった。

翌日から蛭は力を蓄えるべく斉天大聖の仮想空間に再度入った……

もっとも今度は魂ではなく肉体に負荷を掛ける空間で時間経過は外と同じだが。

そして蛭はそこで約一年籠る事になる。

## 第九章 見守る者たちと語られる未来（後書き）

家の小竜姫は少しアホの子仕様です……決して嫌いな訳ではありませんよ？

次回投稿日は少し早めの7/5の7時です。



第十章　差し出された手を取るは鎮魂の巫女（前書き）

設定事項がチラつきくどく感じるかもしれませんがご容赦を（汗）  
それではどうぞ。

## 第十章　差し出された手を取るは鎮魂の巫女

SIDE 美智恵

世界GS本部と主だった国々によって改定された規約は私にとって悉く不利になるものだった。

新制度導入に当たって資格免許の再選考が行われたが、既に鬼籍に入っている事になっている私には受ける事も出来ない。

また、娘の令子には強くタカビーになる様に育てた為か独善的な所が目立つ……結果、対等な仲間を作る事が難しいだろう。

その為当初の制度ならともかく現在の規約では事務所経営の前提すら満たす事が出来ないであろう事は想像に難くない。

また除霊「作業」においてもチーム性主体の現制度ではワンマンな令子には合わないだろう。

そして金銭面と安全面が向上した以上、足が遅い故にオカルトGMはその優位性が益々薄れてしまう。

「全く……何故こつても悉く悪い風に傾いていくのだから。協会の方にも相手されないし、このままでは決戦に向けて準備が滞ってしまうわ……」

秘密裏に協会の伝手を増やし権限の増加と来るべき時の為の準備を進めようとしたが何故か反応が宜しくなかった。

それどころか終いには拘束しようとする有様、危険を察し抜け出たがそれ以後近づけていない。

幸い軍関係の方はどうかある程度は契約を結べ戦力を蓄え始めているが……相手が魔族である以上それだけでは足りない。

神族に頼るうにも自身たちの安全性が考慮されなければ無意味だ。

世界の平和を第一に考えるなら命を差し出すぐらい如何でもないが、娘がそれに巻き込まれるなら話は別だ。

堂々巡りをする思考に頭を悩ませつつも私は最近すっかり姿を現さない魔族を不審に思いながらも警戒心が薄れていたのに気付かなかった。

その結果私は自分の周りで動き回っている者たちに気づく事がついで無かった。

「とりあえず今は軍の方と政府を優先させましょうか。時期を見て六道の先生を訪ねるのもいいかもしれないわね……余り借りは作りたくないけど」

埒もなく呟きながら私は今日も準備を進ませるべく奔走しました。

## S I D E O U T

平成7年6月24日、蛭15才の誕生日である。

宣言通り全チャクラを開眼した蛭は第三の封印も解いていた。

何気に新術なども身につけている。

エミヤ雪之丞たちもそれぞれの霊能やチャクラを成長させ、何より人間的にも成長していた。

現在雪之丞たちは百合子に学業の最終調整を施されている。

日ごろ適度に勉学にも励んでいたお蔭でそれほど苦にはなっていないようだ。

以下が現在の蛭たちの詳細である。

横島 蛭15才

黒髪を腰の辺りまで伸ばし赤いリボンで一房に纏めている。

身長：151cm

B/W/H＝81/53/78

総霊力保存量＝550マイト（第三封印開放後）通常時90マイトまで隠蔽

チャクラ⇨全チャクラ開眼

霊能力⇨文珠／双文珠／霊波刀／各種霊波砲／式神操作／霊気の盾  
／妖気の具足／竜気の籠手／魔力の仮面／霊視／ヒーリング／神通  
足／五行術

戦闘技術⇨剣術（小竜姫の直伝）／気配遮断／霊力隠蔽／気孔系格  
闘術（猿神直伝）／縮地

基礎能力⇨百合子の代打が出来るほどの知識／高レベルの家事全般  
補足事項⇨自身の因子と太極天の因子以外に玉藻の因子とメドーサ  
の因子を契約時に貰っている／霊気・妖気・竜気・魔力を使用でき  
る／力は完璧に隠蔽しているので看破されることはない

妖気の具足とは身体能力、特にスピードを高める霊的補助能力

竜気の籠手とは霊的能力の攻撃能力を鋭敏化する能力、ただし消  
耗率も上がる

魔力の仮面とは意識加速を促す霊的補助能力

これらは一見すると魔装術の様な外見になる

横島 エミ18才

総霊力保存量⇨110マイト

チャクラ⇨第三チャクラ開眼

霊能力⇨呪術全般（呪殺系は封印している）／霊体撃滅波／霊体貫  
通波／一般霊的能力（霊視とか）

戦闘技術⇨神楽舞／鉄扇合気道術／気配遮断／霊力隠蔽

補足事項⇨高校生として生活中／最近は着物を着用する様になっ  
てきた／百合子の経験則を身につけるために奮闘中

横島 九琉16才

総霊力保存量⇨133マイト

チャクラ⇨第三チャクラ開眼

霊能力⇨各種霊波砲／一般霊的能力（霊視とか）／霊気の盾／各種  
結界術

戦闘技術Ⅱ 剣術（メドーサ直伝） / 総合格闘術 / 気配遮断 / 霊力隠蔽  
補足事項Ⅱ 大和撫子風の女性 / 普段着に着物着用 / 現在高校生として基本横島家で生活している

伊達 雪之丞 15才

総霊力保存量Ⅱ 92マイト（魔装術展開時142マイト）

チャクラⅡ 第三チャクラ開眼

霊能力Ⅱ 各種霊波砲 / 一般霊的能力（霊視とか） / 霊気の盾 / 魔装術（収束度は未来の勘九朗レベル / 飛行能力は未発見） / 霊拳

戦闘技術Ⅱ 接近戦闘術（メドーサ直伝） / 格闘術

補足事項Ⅱ マザコン / 戦闘狂 / 妙神山の生活のお蔭で背は原作より高い

陰念 15才

総霊力保存量Ⅱ 85マイト（影装術展開時120マイト）

チャクラⅡ 第三チャクラ開眼

霊能力Ⅱ 影操術 / 影装術（15分の時間制限） / 一般霊的能力（霊視とか） / 各種結界術

戦闘技術Ⅱ 接近戦闘術（小竜姫直伝） / 格闘術 / 霊力隠蔽

補足事項Ⅱ 原作の顔の傷は無く規則正しい生活をしていたお蔭か黒髪に整った顔立ちをしている

ドクターカオス 1049才

総霊力保存量Ⅱ 123マイト

補足事項Ⅱ 現在は若返っている / 胸の魔法陣を両腕と両足に施した  
…… 脳細胞が活性化した為胸を晒す変態的行為に抵抗が出来たよう

だ（笑）

閑話休題

全チャクラを開眼した蛭は現在周天法による霊力の充填を行っている

る。

未来のように世界の後押しがない以上各チャクラを飽和状態にしておく必要があるからだ。

既に妖・竜・魔の因子を目覚めさせ肉体構造を強化している蜚ならかなりの充填ができる筈である。

昇華された膨大な霊力が蜚の身の内に蓄積されていく様を老師は感嘆の思いで見ている。

「ほう、かなり霊力の総保有量が増加したのう。……そういえば第四の封印はどのようにして解くのじゃ？第五はおそらく決戦間際じやと思っておるが」

「ん？第四も第五も充填式だよ？第四は現在の最大許容量に達したら大体700マイルかな？第五はルシオラと同程度になれば解かれるよ」

「そうなのか？と言う事は意地でもその位階になるまでは大戦を勃発させてはいかんのう」

「そういうこと……ふう、大体七割って所かな？さてそろそろ死津喪比女を封印しに行かないとね」

ちよつとそこまでといった感じで告げる蜚に老師は溜め息をつく。

「行くのは良いが幾人か供を連れて行くんじゃぞ？」

「分かってますよ、無茶する気もありませんから……九琉とテレサを連れて行きます」

「それと竜神の装具をしていけ。いざと言う時誤魔化す役に立とう」「了解。それはそうとして、玉藻が何処に行ったか知りませんか？」

「何じゃ聞いておらんかったのか？玉藻なら奥の神殿にて瞑想してるよ。暫らくは出てこんじやろうな」

「ありや、あそこですか。道理で念話も届かない筈だ……しかしよ

く入れましたね、今の段階で」

「玉藻もかなり力を取り戻しつつあるからのう。孤星神としての力を引き出すのに躍起になっておるよ」

「……無茶しなきゃいいけど。それじゃあ行ってきますね、玉藻が出てきたら言っておいて下さい」

「うむ、気をつけての」

蛭は老師に言付けるとその場を後にした。

S I D E テレサ

私はテレサ、人造人間であります。

マスターであられるドクターカオスによって造られカオス様とその盟友であられる蛭お嬢様に従う者です。

現在私と蛭お嬢様、九琉さんは車で人骨温泉に向かっています。

運転中の私は後部座席で休息中の蛭お嬢様を何と無しに確認しました。

連日の鍛錬にも拘らず特に疲労らしきものを感じさせない方ですが油断はなりません。

その思いは未来の出来事をお教えして貰ってからより強まりました……それは姉さんも同じようですが。

「蛭お嬢様の体にはこれといった疲労の蓄積は見受けられませんけど……こうやって人前で眠る所を御見せになるのは初めてですね」

「確かに、常に誰よりも先を行き事を終結させてしまう方ですが……」

「最近是他の方に任せる事も増えてきましたね」

「それだけ我々に心を許してくれているんですね」

「ええ、嬉しい事だわ。でも、だからこそ油断しない様にしないとね」

「ええ、勿論です」

蛭お嬢様のお顔をたまに拝見しながら九琉さんと語り合つ私。その時私の霊的センサーに引つ掛かるものがありました。

「前方1kmの所に高濃度の霊体反応あり！蛭お嬢様！」

「！……この感覚はおキ又ちゃんだね。テレサ、九琉……此処から歩きで行くわよ」

『了解！』

「あと周囲に不審者がいないか常時チェックよろしくね？」  
「ハッ！」

私たちは車を降り山道を登り始めた。

各人殆ど道具の類が必要ない為こういう時は助かりますね。

先導する蛭お嬢様を追いつつ私はより深い周囲の霊的探索を開始した。

蛭お嬢様の話では地下深くに死津喪比女の巨大な球根があるそうです。

地脈の吸収次第にも拠るでしょうがおそらく殆ど休眠状態の筈とのこと……油断は出来ませんが。

「……ッ！レーダーに感知！？これは……？」

「どうしたの、テレサ？」

「死津喪比女らしきものは発見したのですが……氷室神社周辺を囲うように蠢いています」

「？！どういうこと？おキ又ちゃんはまだ結界の要から解き放たれていない筈なのに？」

「！蛭様前方にそのおキ又さんらしき方がいます！」

九琉さんの警告にそちらを優先する事にした私たちはオロオロしているおキ又さんに近づいていった。



S I D E O U T

S I D E おキ又

私の名前はおキ又と言います。

三百年ほど昔に噴火を鎮める為人柱として身を投げ出した巫女です。本来私はその後地方の神様になる筈だったのですが、才能が無かつたらしく未だ神様になっていません。

成仏も出来ませんし、一人寂しく辺りを彷徨う幽霊としてこれまで過ごしてきました。

そんなある時のことでした。

大体今から5年ほど前になるでしょうか、深夜に突然辺りの空気が震えたかと思うと地脈の流れが僅かに変わりました。

それ自体はそれ以降変わらなずそのままでしたがその時から周りに不気味な物影が徘徊する様になったのです。

私はそれらを見るとひどく心が締め付けられたので近づかないようにしていました。

「……なるほどね。……はあ、私も焼きが回つたものだわ。まさかこっちに影響が出るとは」

目の前にいる三人の女性の内の一人横島 蛭さんが私の言葉に深く溜め息を吐いた。

三人とはいつも徘徊している落石注意の標識がある所で出会いました。

当初複数いらしたので見つからない様に隠れようとしたのですが、あっさり見つかり事情を聞いてもらうことになったのです。

それによるとどうも私はただの人柱ではなかったようなのです。

「蛭様、どういうことですか？」

「あゝ、玉藻を解放する時に龍脈を弄くっただけだね……騒ぎが起きないように結構遠くから掻き集めたのよ」

「……つまり、その遠くの内の一つに此処の地脈が混ざっていたと？」

「うん、おそらくその時に地脈の流れに変化が起きて封印の隙間から搾取される以上の霊力が伝わる様になったんでしょっね」

「では死津喪比女は……」

「間違いなく復活しているわね……大地震を起こせるほどではないようだけど」

己の失敗を悔んでいるようでしたが直ぐに思い直すと私の方を向きました。

「おキ又ちゃん？悪いんだけど少し霊核を弄らせてもらっわね」

蛭さんはそう言う私の霊核と呼ばれる物になにやら細工すると連れたって氷室神社という所に行きました。

不思議な事に普段私が近づくと反応する事があつた例の物影には出会いませんでした。

「御免下さい、宮司さんはみえませんか？」

「このような寂れた所へようこそ。私が此処の宮司ですが……如何なされましたか？」

「私は横島 蛭と言います。此方を……」

「何ですか？……こ、これは闘戦勝仏様の御免状？！！で、では貴女様はっ！？」

「私は直弟子の者です。今日は此方に封印されている地霊・死津喪比女を完全封印するべく来ました」

「死津喪比女……？確か家の古文書にその様な名が記されていた筈です」

「此方にいる幽霊のおキ又ちゃんはその地霊を鎮める為に人柱になった子なのよ」

「な、なんと！では貴女が我らご先祖様の恩人ですかっ！」

「え？え？え？」

「おキ又ちゃんは緊急事態で状況を把握する前に身を投げ出したからね、詳細は知りませんよ」

「そうでしたか」

「父っちゃん？誰か来ているべか？」

その時私そっくりの娘さんが来られました。

「此方に見えるのは仏様のお弟子様であられる横島 螢様だ。早苗や、お茶のご用意を」

「はい！」

「ふむ、宮司さん此処に居るのは貴方たち家族だけですね？」

「はい、妻と娘のみ此処で生活しておりますが」

「テレサ、周囲の状況は如何？」

「現在も此処を中心に蠢いています。地脈の流れに変化があった為か東京の方には手を伸ばせないようですが」

「……但し、その分此処が更に危険になったということね。……九琉、貴女は結界に籠ってもらう宮司さんたちを守って頂戴、近寄ってきた者がいたら全力で排除すること」

「はっ！」

「テレサは周辺の探索と球根の状態の監視、及び結界針での牽制を御願いな」

「分かりました！」

「皆さんとおキ又ちゃんは私の結界内で待機して下さい。死津喪比女を倒すまでは出ないように！」

「わ、分かりました」

「あ、あの……何やら私が係わっている事のようにですが、私は何

もしなくて宜しいのですか？」

「ええ、実はね此方で把握している限りでは貴女が封印の要である地脈の堰に戻ると霊体ミサイルにされてしまうからね」

「霊体……みさいる？ですか？」

「そ、地下深くにいる相手を滅ぼすにはそれぐらいにしか思いつかないでしょうからね」

「じゃ、じゃあ尚の事私が戻った方が……！」

蛍さんの言うことが正しいなら私はこんな所で呑気にしていい筈がない！

今はもう思い出すのも困難な昔のことですが、此処にきて少し思い出した事……皆を守りたいと思っていた。

「私が言ったのは通常での話よ？私たちは被害を出さない為の準備を終えてきたんだから」

「でも、私はその為に命を投げ出したのですよね？……なら、それを成すのが使命では」

「使命ねえ……ま、ともかく貴女は宮司さんたちと一緒にいなさい。悪いようにはしないわ」

蛍さんはそういうと準備に取り掛かりました。

その様子は焦りなど見受けられず、整然としていました。

「我、横島 蛍の名の下起動せよ火焰呪結界、邪なる者を退けよ！」

集められた私と氷室家の皆さんの周りに浄炎という炎で作られた結界が張り巡らされました。

「この中に居れば地霊である死津喪比女は手を出せません。くれぐれも出ないように！」

「分かりました、お気をつけて」

「九琉！此方の護衛は任せたわよ？決死の覚悟で特攻されては万が一もあるからね」

「はい、決して手出しさせませんわ」

「蛭お嬢様！奴が此方に近づいてきます！」

「気付いたようね、でももう遅いわ……此方の用意は既に出来ているのだから！」

そこに現れる多くのあの物影！

あれが死津喪比女……爬虫類を思わせるような胴体に葉っぱと根がくっついた様な外見のそれは此方を睨みつけました。

「見覚えがある小娘の気配がすると思えばまさか此方に戻ってきていたとはなっ！気付かなかったぞえー！」

「当然よ。おキ又ちゃんの霊核を弄って一時的に周囲と同調させたからね……今は時間経過と共に元に戻って貴女が気づいたって訳よ。手遅れだけ……ね？」

「貴様かえっ！厄介な結界であ奴を守っておるのはっ?!」

激高する死津喪比女を他所に蛭さんは何処吹く風の如く飄々としていました。

そして後ろ手にテレサさんに何やら指示を出し自身は珠の様な物を何処からともなく取り出しました。

「今よテレサ！」

「結界針フルバースト……ファイアー！」

「火炎呪よ！汝が敵を討ち滅ぼせっ！火炎葬魂呪！！（我が力の結晶よ、意に従って汝が使命を果たせ！）シッ！」

蛭さんの指示と共に放たれる結界を張る針が花たちの周りに炸裂す

る。

針を起点に張られた結界内に蛍さんの放った炎が充満すると次々に花たちは燃えていきました。

その際蛍さんは手に持った珠を無事である者に投げつけ埋め込みました。

『ぐわああっ……!!!!』

「どう？私の霊力をたっぷり込めた火炎呪の火葬は？その火は貴女を燃やし尽くすまでは消えないわよ？」

「お、おのれ！此処まで強力な霊力を容易く操るとはっ！花が多量に消えてしまっただぞえっ!？」

「その炎は貴女だけを標的にするからね……安全でしょ？」

「くっ……この場は引くっ、おぼえておいでっ!!!!」

残っていた無事な花達が一斉に地面へと消えていく。

傍で葉虫相手に奮闘していた九琉さんも全て倒し終え一息ついている。

「とりあえず、第一陣は凌いだわね。次が本番でしょうけど……その時が死津喪比女の最後よ」

「……花たちが球根付近で蠢いています」

「おそらく球根に送られる地脈のエネルギーを使って増量しているか強化しているか、そのどちらかでしょうね。若しくは両方か。テレサはそれらから離れる奴がいなか注意していて、ないと思うけど不意を打たれない為にね」

「了解いたしました」

「九琉もお疲れさん、如何だった？」

「やはり実践は違いますね。チャクラを必要以上に廻してしまいました」

「緊張具合が比じゃないからね。今度現れる奴はさっきよりも強く

なっているかもしれないからギアはそのままでもいいわよ。但し今度  
はきちんと自分のペースに持っていけるようにね？」

「はい、精進いたします」

「凄い呪力でしたね、まさかあれほどの呪を放てるとは」

「次はもつと派手になりますよ？今度は周りを気にせず放てる物で  
はないので木々にダメージを与えてしまえますが……」

「仕方ありませんよ、昔の強力な導師様でさえ衰弱させるのが精一  
杯でしたから」

花が開いたように笑う蛭さんの醸し出す空気は周りの雰囲気も癒す  
ようで何ともいい気分になれます。

「おキ又ちゃん、言ってなかったけどさっき霊核を弄ったのはこう  
いう訳だったの。焦ったあいつが一斉に来るようにする為だね？」

「はい、気にしていませんよ。蛭さんは私の事を粗雑に扱ったりし  
ませんでしたし」

「ありがとうございます」

につこり微笑む蛭さんの顔を見ていると心が安らぐ感じがします…

…？

その時何処からともなく響いてくる声がありました。

「！………どうやら、導師が気付いたようね。堰の方に行ってみまし  
ょう」

宮司さんが先立って行き着いた先に石造の地脈の堰がありました。

蛭さんはテレサさんに地面の方を確認させています……何かあるの  
でしょうか？

とそこに現れる人影。

『……おキ又ではないか。死津喪比女が騒いでおるがどういうことだ？』

「出たわね、導師の立体映像」

「！あなたにそっくり？！」

「ツ！まさかご先祖さまっ？！」

『！死津喪比女が此方に近づいてきよる！おキ又堰へと戻るのだった！！』

「ど、導師様……」

「あら、そんな必要ないわよ。あいつは私が完全に封印して持つていくから」

『？お主は誰だ？あ奴は強力な地霊、人間の手には負えん。こうするより他に方法がないのだ！』

「それは貴方の常識でしょ？それに私たちを含めないでよ。これでも私は斉天大聖の直弟子よ？あの程度の地霊ならどうとでもしてみせるわ」

『せ、斉天大聖？！！』

驚く導師様を他所に蛍さんは再び私たちの周りに火焰呪結界を施しテレサさんを残すと九琉さんと共に外へと飛び出していきました。私に微笑を残して。

S I D E O U T

今蛍たちの目の前には先ほどの比ではない花たちとより一層大きな花が一輪現れていた。

「随分賑やかなお出ましね？余りそのおぞましい様を見せ付けないでほしいのだけど？」

「随分な言い様だね。まあ私が怪物であることは致し方あるまい。私ほどに力を持った妖怪はそうはおるまい」



不遜な言い方をする死津喪比女、まあ事実ではある。

「力ねえ？で？その力ある存在である貴女は何がしたいのかしら？」

「決まっておる！人を作ったのもわしを作ったのも同じ天！なれば天が人を滅ぼそうと思うておるとのことじゃ！」

「どう、九琉？これが力に溺れた者の有様よ。傲慢不遜で見下す事しかししない哀れな存在……悲しいものね、私も同じかしら？」

「……蛩様」

「哀れじゃと？お主如きが何を知るといふのじゃ？！……もう良い、貴様から血祭りにあげてくれる！いけつ花たちよ！」

我慢の限界が来た花たちと葉虫たちが一斉に蛩たちに迫る。

社を背にしている蛩たちの前方と上空、左右全てが花で埋め尽くされるその瞬間蛩は溜めていた力を解き放った！

「力を持つ者の末路なんて腐るほど見てきたわ！我が意思よ顕現せよ、炎ノ竜！花を焼き尽くせ！！」

双文珠により生み出された炎の竜が花たちを焼き尽くす。

傍で葉虫たちを相手にしている九流を他所に蛩は大輪の花目掛けて走り出した。

その腕には輝ける籠手・竜気の籠手が纏われていた。

「ぐうう、一体何事かえ？！ツ？！貴様あ！」

「往生際が悪いわよ！力持ちし者ならそれ以上の者の前に滅される事を覚悟なさい！霊波刀・火竜！」

突き出す奴の手刀を掻い潜り、竜気の籠手により極限まで増幅された霊力と竜気で炎の霊波刀を生み出す！

生み出されたそれは正に竜が牙をむく様相を醸し出している。  
蛭は手に生み出した炎の霊波刀を大輪に突き刺し……籠めた霊力・  
竜気を暴走させ内側から決壊させた！

「お、おのれえ……わしは滅びぬ、何があっても生き延びてみせ……  
……」

「生きとし生ける者、何れ滅ぶものよ。例え神魔でもね……」

崩壊する死津喪比女。

蛭はそれを見ながらも印を組み土の行を発動させる。

そして心眼を開き竜神の装具を全開に発動させ地面を睨む！

「土行地龍術、隆氣爆碎！地よ、かの者を地表へと押し上げよ！！  
そして起動せよ、我が力！！」

放たれる天災とも言える術が地中深くへと浸透していき、本体である球根の真下で炸裂する！

同時に仕込まれていた文珠が発動する。

籠められていた文字は 根ノ絶、地脈からの供給はその瞬間止まった。

地脈の供給が絶たれただけでなく地表へと引き釣り出される事に死津喪比女は初めて恐怖をさらけ出した。

「何故じゃ、どうしてわしがこんな目に遭わんとならん！……気に入らん！全てが気に入らんぞええ！！」

錯乱し当たり構わず光線を乱射する球根本体。

蛭はそれを静かに見詰めつつ、更なる霊力・妖気・竜気・魔力を全開まで高め周囲に巨大な隠蔽結界を施す。

「もう休め、哀れな地霊よ。火行炎帝術！天照鳳凰波！！太陽よ、かの者に魂葬の還り火を！！」

蚩は錯乱する球根へと大炎の激流を放ち同時に双文珠を作り出す。

「我が力よ、かの者を導き浄化せよ！穢れを洗い流せ 浄／炎！」

放たれた白い浄化の炎は一瞬で炭化した球根を包み込み穢れを消し飛ばすと一粒の種へと変貌させた。

全開の力の行使に若干疲労の気配を残しつつも地表に落ちたそれを拾い己の影へと仕舞う蚩。

「凄まじいまでの力の行使でしたね蚩様……先ほどの種は？」

「あれは死津喪比女になる前の地霊本体の元よ。元々死津喪比女は東の京から流れ着く地脈に含まれた穢れた物を吸収した結果変貌した地霊だからね。こびり付いた穢れを浄化すれば良いって訳」

「なるほど、人の密集する所から流れてくる地脈ゆえに穢れもまた含んでいたという訳ですね」

「どの様な悪しき存在でも何かしら理由があるものよ、例外もあるだろうけど」

「その見極めを出来るようになれば一人前ということですね？」

「一概にそうとは言えないだろうけど……ね。さて、こっちは片付いたしおキ又ちゃんの所へ行きましようか」

辺りの気配を探って問題ないことが分かると蚩たちは堰へと戻った。

SIDE おキ又

蚩さんが出て行ってから少し経った頃、突然地面が大きく揺れどこかで何かが崩れる音を聞きました。

傍にいたテレサさんが先ほどの震源が蚩さんが行った事と言うと導

師様が唸りだしました。

『テレサ殿と申したか、一体蛭様は何をなされたのだ？』

「蛭お嬢様は五行術を使って地下深くにいた球根本体を地表へと押し上げました。また同時に地脈からの供給も絶って株分けが出来ない様にもしました」

『な、なんと！？あの地下深くに存在するあやつの本体を押し上げたですと？！一体どれほどの霊力があればそこまでの効力が実現できるのですか？！』

導師様が言うには例え強力な術である五行の力を使った所で人に起こせる規模は知れたものだということです。

「蛭お嬢様は神魔へと何れ成られるお方。既にその身は人の範疇を超えています」

「テレサ？人を化け物みたいに言わないでよ………なんか最近こんなのばっかだけだよ」

『？！』

唐突に現れた蛭さんは先ほどと変わりなく飄々としていた。

蛭さんはテレサさんの物言いに文句を言いつつも此方に来て微笑みしました。

「死津喪比女は倒したわよ。これでおキ又ちゃんは無事復活することが出来るわよね？」

『な、なんと！もう倒したのですか？！』

「焦らして追い詰めても良い事なんてないからね………火葬にして仕上げに浄炎で洗い流したよ」

「ざっと探索しましたが、残骸すら残っていません。復活することも株分けされていることもないでしょう」

『おお、では……』

「うん、後はおキ又ちゃんを氷の棺から解放することだけだよ」

『結果は無事、遺体も問題なし、地脈は操作すれば問題なし、括られたおキ又は無事、そして霊力の高い貴女がおられるならっ！』

「ええ、直ぐにでも行えるわ。幽霊としての記憶はほやけてしまっ  
てしょうけど、それもこれからの生活を思えば些細なこと……とは  
言えないかな？」

「15で死んで生き返るのだから丁度蛭様と同じ年ですね」

「んだら、私なら妹になるんべか？」

「あら、いいわねえ」

皆が祝福してくれる中私は戸惑っていました。

確かに私の幽霊としての記憶は寂しさが詰まった物ですけど、蛭さん  
たちに出会えたことも忘れてしまうのには抵抗がありました。

無論、蛭さんたちのご好意を無に帰すようなことは出来ませんが、  
出来れば私は……。

「あ、あの……。出来れば私、蛭さんと一緒にいたいんですけど……  
駄目ですか？」

「え？私？」

「はい、できれば貴女様と共に在りたいです」

「何で？氷室家ならきちんとして育ててくれるわよ？」

「いえ、別にこの方たちに不満があるわけではないんです。ただ、  
貴女様と離れるのがなんだか嫌で……」

「恩だとかは考えなくてもいいけど……そういうわけじゃ、ないみ  
たいねえ。……氷室さんたちは如何です？」

「我々はおキ又さんの意思を尊重できればそれで。ご先祖様の恩人  
と暮らせないのは残念ですが……優先すべきはおキ又さんの幸せで  
すからね」

「んだ、おキ又ちゃんが蛭様と居ることを望むなら好きにさせたら

良いんでねえか？」

「……ふう、私の回りは危険が多いから出来れば此処で静かに暮らして欲しかったのだけど」

「それじゃあっ！」

「ええ、いいわよ。これからは横島 キ又ね……おキ又とした方が  
いいかしら？」

紡がれた言葉は私にとって嬉しい物でした。

その後、蛍さん……いえ、蛍姉さんの霊波刀で氷の棺から解放された私の体は300年の時を経て再び命の火を取り戻しました。

ちなみに、姉さんと呼んだ時何故か蛍姉さんは地面に手を着き涙を流してましたけど……一体どうしたのでしょうか？

時は過ぎ、一週間後……。

私は横島家で百合子母さん指導の下勉強をしています。何でも弟弟子の方と一緒に学校へ通うことになるそうです。

ちなみに私、記憶の欠損は特に無かったみたいです。

膨大な地脈と蛍姉さんの正確な波動の伝達で上手く魂と肉体が重なり通常起こり得る霊体のずれが全く無かったのが要因だそうです。

「あら、おキ又は結構基本がきちんとしているのね？」

「そうですか？ 寺子で子供たちに漢字とか教えていましたからその為かもしれませんか」

国語と歴史とかの所謂文系は問題ないようです……その分理系は壊滅ですけど（涙）

復活したての私はまだまだ皆に迷惑掛けているけど……どうやら上手くやっていけそうです。

SIDE OUT

とある時の人骨温泉。

「何で行ってはいけないでありますかぁッ！せっかく山に登れると  
いうのにつ！」

「いえね？霊能者であられるお人が先日来られました……登山をす  
る方が来られたら登山を止めて貰うようにとの託を貰ったもので」

「霊能者でありますか？」

「何でも死人が出る卦が出たそうなのです。かなりはつきり出たそ  
うなので此方としましてはご遠慮して貰いたいのです……冬山でな  
ければいいそうなので出来ればその時にお越し下さい」

「……そうでありますか。分かりました」

こうして些細なことであるが一人の死が未然に防がれた事を明記し  
ておく。

第十章↳差し出された手を取るは鎮魂の巫女（後書き）

おキ又ちゃん復活！そして妹化！

サラッと倒してサラッと復活させてしまいましたが、完結後時間があれば増量したいと思っております。

次回投稿日は7/7の7時です……そろ目ですね。



第十一章 変革をもたらす物【前編】（前書き）

ついに始まるGS資格試験編。

一体どのような結末になるのか……それではどうぞ。

## 第十一章 変革をもたらす物【前編】

横島家におキヌがやって来て一層賑やかになってきたある日、ついに体制が整った資格試験の正式日時が発表された。

当初敷居が高くなり受験者の数も減るかと危惧されていたがそんなことは全くなく、安全性と物資の補給が確保されている事もあつてか例年に見ない受験者数になっている。

また合格後の除霊チーム確保の為早くも相方を探している者もいた。もつとも試験前からそういう行動に出る者は余り相手にされていないかったりする。

規約が変わり制度が一新された最初の資格試験なのだから何が起るかわかったものではない……焦りとも取れるその行動に同調できないのは当然かもしれないが。

「さて、三日後に迫った資格試験だけ……エミ姉さんとカオス、九琉に出て貰うからよろしくね？」

「任せて、準備は万端よ」

「うむ、今回はマリアと共に出るか……テレサは前回の戦いで動作系に不調があつたからな」

「チャクラの使用どうするのですか？」

「別に使うのはいいけど、貴方達なら使わなくても大丈夫よ。余り目立つのも良くないし強すぎる力は変な輩も寄せ付けるからね……手遅れかもしれないけど」

「使用は避けるワケ。ドクターが素で挑むんだから私たちもそれに習わないとね」

「ふふふ、別に遠慮せずとも良いぞ？」

リビングに集まった蛭と受験者達は当日の予定を話し合っていた。試験は霊波測定的一次試験と筆記試験が行われる一日目。

実技試験である受験者同士のトーナメントが行われる二日目。そして面接官による真実看破を用いた意識調査が行われる三日目。これらによって構成される資格試験に挑むことになる。

「貴方達なら霊波も筆記も問題ないだろうけど……問題は実技か」「初戦から私たちで潰しあうことはないと思いたいけど……ラブラスの目次第だしねえ」

「まあ、なるようにしかならんだろ。それよりも他に注意事項はないのか？」

「あとは、他の対戦者ね」

「何か問題が？」

「美神と六道の者が出てくるのよ」

『あ〜』

一気にウンザリした感じになる受験者たち。

自身たちには絡んでこないだろうが、間違いなく騒動が起きると予想できるだけあり今から憂鬱になるというものだ。

「今回の日本の資格試験官は全て母さんが選び抜き指導した者たちだから不正なんかは出ないだろうし見過ごす事なんてないだろうけど……」

「だからこそあの者達が暴走しかねないということですね？」

「そう、だからいざとなったら私か貴方達で理性的に止める様になしましょう。決してむきになったり挑発に乗ったりしない様にね……」

「まあそうそう事は起きないでしょうけど」

「ふむ、それは良いが……具体的にどういう事態が起こりうるのだ？お前さんのことだから幾つかは検討つけているのだろう？」

「まあね。あくまで可能性の話だからその所注意して欲しいのだけど……まず六道は筆記試験かな？」

「極度の緊張でプツンしなければ問題ないだろうけど……」

「ぶつつんで……何が起こるワケ？」

「式神が暴走して周囲を破壊するのよ……霊力が切れるまで。ちなみに下手に止める為に介入すると相手から友達発言される可能性があるわよ？」

「うげっ……勘弁してよ」

「実技や面接でも同じことが言えるかもしれないけど……まあ、協会に掛け合って筆記試験の会場と面接の部屋に入る時は式神とか封印して置くようにして貰うのが一番かもねえ」

「百合子殿ならそこら辺考えておるだろうが……一応言っておくべきだな」

「うん、わかった」

蛭は試験も近いので早速百合子に確認を取り詳細を詳しく述べると受理されるように掛け合ってくれることになった。

「じゃあ次は美神ですね」

「こっちは暴走なんて事はないと思うけど、いちゃもんつけるくらいかな？係わらなければ問題ないだろうけど」

「それはそれで嫌ですけど（汗）」

「実技は現時点でどれぐらいの物か分からないけど……油断は出来ないでしょうね」

「相手の話術や奇策に嵌らない様にするべきだな」

「あと、受験者じゃないけどもしかしたら美神 美智恵が乗り込んでくる可能性もあるわね」

「え？確かその者は鬼籍に入っているから表には早々出て来れない筈では？」

「確かにそうなんだけど……今回の規約改定で娘の合格を危ぶんでる筈だし、いざとなったら変装って手もあるしね」

「……なるべく手は明かさないう方が良さそうだな」

その後は各人いつも通りの日常に戻っていった。  
そこに気負いや不安はなく自分という物をしっかり持った者たちの  
姿があった。

所替わって六道家。

現在執務室では当主である六道 冥那が奮闘していた。  
相手は娘の冥子である。

「とりあえず、筆記と面接は何とかなりそうね」

「お母様？今話したとおりには問題は無いの？」

「ええ、あくまでとりあえずだけだね」

いくら知識の方はある程度大丈夫といっても不安はやはりあったの  
で、最終調整として自ら娘の能力を測っていた。

面接の方も現GS規約に沿った物を口に出るように教えていた。  
とそこに現れるメイドのフミさん。

「奥様、ただいま協会から新たな情報を受け取りました」

「あら、何かしら？」

差し出された用紙を確認する冥那。

それを見て母に尋ねる冥子。

「お母様？何かあったのですか？」

「どうやら、筆記試験と面接には式神や道具類などは一切持ち込み  
禁止らしいわ……まあ、特に問題ないでしょう」

「えっ?!」

ピシリッ!と固まる冥子。

何をかくそうこの冥子は幼い頃から式神と一緒にだった為、何をす

にしても式神がないとこなせなくなってしまうのだ。

「あうあうあう」

「ふむふむ、例年より結構受験者が多いのね」

フミさんが去った後に残されたのは焦る冥子とそれに気付かず資料を確認する冥名であった。

混迷が漂う中六道家にとっての分岐点が訪れようとしていた。

再度場所が替わり、此処は美神令子のマンション。

辺りにはGSに関する資料が散乱し、その中心で令子が机に向かって唸っていた。

知識はそれなりにあるが偏った部分があることを神父に指摘され試験でぼろが出ないように補充しているのだ。

「何で私がこんな必要のない知識まで覚えなくちゃならないのよ！」

脳のリソースが自分的には無駄な知識で占有されていくのが耐えられない令子であった。

「とは言え憶えないわけにもいかないし……問題は面接の方ね」

当初一時的な事だから嘘でも媚売っておけばいいかと思っていた令子だったが面接内容を確認した時それは不可能だと悟った。

何せ真実看破なんて物を適用するぐらいだ嘘なんて直ぐばれるし、買収なんて手にも乗らないだろう。

「だけど何事にも裏道はあるもんだからね。……後はどれぐらいの深度であれば掻い潜れるかって所かしら？」

何やら不審な事をしているようだが果たしてどうなるのか？

令子はその後筆記試験の最終確認をすると早々に寝てしまった。

それは己に対する自信の表れゆえかはたまた不安を紛らわす為か？  
その答えは三日後に出るであろう。

時は過ぎ、試験前日。

唐巢は現在日本GS協会の幹部となっていた。

その唐巢は日を重ねる毎に目に付く他幹部の不祥事に頭を痛めていた。

命を扱う職業の斡旋場所の職員であるにも拘らず妖怪を売買したり政府と癒着して不祥事を起こしたり……考えるだけで頭が痛くなるが、何より今までこれらの事に気づかなかった己を不甲斐なく思った。

唐巢は入手したそれらの証拠物件を百合子に渡すことで協会内部の浄化に努めていた。

次々明らかになり幹部が入れ替わっていく様は呆れと共に清々しさを感じたものと、後に唐巢は呟いていた。

唐巢は今日の試験で判定官をする為資料を確認している。

受験する者の素性や特性など確認することは山のようにあるからだ。

「受験者の数は例年以上のようだが……やはり飛び抜けた実力を持つていそうな者は少ないな」

確認できているだけで四人。

妙神山から白龍寺を介して受験する横島 九琉。

百合子女史が立ち上げた総合オカルト対策事務所からドクター・カ

オスと横島 エミの二人。

そして自分の弟子である美神令子である。

まず間違いなくこの四人で上位が固められるだろう。

……六道 冥子の名がないのは唐巢も彼女の事情を把握しているか

らだろっ。

「もっとも飛び抜けすぎた人はいるみたいだがね（汗）」

嘗て妙神山で拝見した彼らの実力を思い出し身震いする唐巢。

彼らは正に清く正しく自身を律しているし力を悪用するような事などないだろっから安心できるが……あれほどの力が無造作に放たれたらと思っつと。

「心配するだけ無駄なんだろうけどね……私には私のすべきことがあり、まだそれを完遂していないのだから」

とりあえず明日以降の試験で弟子が不正を行うようなら容赦なく不合格にしようっつと心に決めるのだった。

翌朝、横島家の正門前には任人全員と雪之丞たちが揃っていた。

もっとも百合子は早くから会場の方に向向っているし、大樹たちは美智恵監視の為昨日から居ない。

「さて、ついにあの者たちと正面から顔を合わせる機会が来たんだけど……基本、目を合わせない方針でいくからね」

「うむ、むしろ厄介ごとは御免だからな」

「エミ姉さんもあっつちから眼つけてくことはないと思っつけど……」

「ええ、大人の対応をするように心がけるわ。……もっともそれで逆に目をつけられる可能性もあるけど」

自分で言っつて嫌々と頭を振るエミ。

他の者も調査資料を見ているので容易く想像出来るから苦笑いしている。

もっとも今後自分達も可能性があるのを思い出すとそれすら引いた



が。

「今日の所は霊波測定と筆記試験だけだからね……分かっていていると思っけど」

「はい、霊圧は周りの最大と同じ程度に抑えておく……ですね？」

「そうよ、カオスは逆にそこそこまで露出しないと逆に怪しまれるだろうけど」

「そうだな、仮にも世界GS本部の顧問を務めることになる身なのだからな。精々注目されるさ」

「テレサは会場や周辺に不確定要素がないかチェックをよろしくね？」

「了解しました、最大レベルで常に警戒しています」

その時掛かってくる携帯。

「はい、如何したの父さん。……え、……分かった。ん、気をつけるね。……うん、それじゃあ」

「どうしました？」

「予想通り美神 美智恵が動いたわ。会場の方で父さんと合流するから皆も気を抜かないようにね？」

「！そうですか」

「確か時間移動は失敗しているのだからあつちは未来云々は把握していないのよね？」

「うん、少なくとも最新の2回は防いでいるからそうだと思いたいけど」

「確定ではない以上決め付けは良くないだろうな。ともかく目を合わさんように注意するだけだ」

カオスの忠告に頷きつつ蛍たちは会場へと向かった。

着いた会場は既に大勢の受験者で賑わっていた。会場に着くとカオスのみ別行動に移る……今回注目されている一人だからである。

「受験者数2152名、一応の合格枠32名。今日の霊波測定で現霊波数値と将来性を見極め篩いに掛け256名まで絞る」

「で、更に筆記試験で半数の128名まで絞るのですね？」

「ええ、以前なら霊波測定で128名まで絞っていたんだけど……霊波だけでなく筆記試験で知識を問い、様々な可能性を持って篩いに掛けるのよ」

「実技だけに秀でた者は今後生き残れないという訳だ……確かに無頼な輩を量産しても仕方ないワケ」

「一応の合格枠っていうのは何なのですか？」

「二日目の試合で一定の基準を通過してもその後の面接で落ちる可能性もあるからね……全員通れば32名だけど」

「なるほど……最後まで気は抜けないってことですね」

試験官たちから資料とグループ分けの札を貰っていると既に札を受け取ったカオスがインタビューを受けていた。

「GS協会広報課です！インタビューを……受験者中最年長者ですが、何故今になって受験を？」

「ふむ、今回の規約改定によってようやくとマシな制度になったかな。それに世界GS本部から顧問として招かれておる以上何かしら形を残さねばな」

「後、特例で面接と研修免除で更に合格時C級になられるそうですか……」

「既にわしは世界に強化破魔札や吸引札を開発して量産体制を整えているからな、近々見鬼君も改良する予定だ……これくらいは免除は当然であろう。別に知れた名だからと言って免除にした訳ではな

いよ  
「なるほど」

少し経って……グループ分けも終わり測定開始となった。

結果は言うに及ばず、三人共に合格した。

当初警戒していた美神 美智恵も会場外で様子を伺っているに留めていたようで蛭たちは監視の目を残しながらもゆったりと昼食を摂り筆記試験に挑む三人の英気を養った。

「カオスは心配要らないだろうけど……エミ姉さんと九琉はどう？」

「流石にドクターほどじゃないけどバッチシよ。百合子母さんの仕込みは半端じゃないからね」

「私も大丈夫です。百合子様には散々鍛えられましたから」

「この者たちのことなら心配は要らんぞ？仕込みの最中に横から拝見しておったがわしから見ても結構なレベルで纏まっていたからね」

「カオスのお墨付きなら心配は要らないか……問題は試験中ね。式神類は封印されるけど……素で暴走されると気が散る可能性もあるからね」

蛭がそう言うと受験者は一斉に嫌な顔をしたが余り気負ってはいないようだ。

ようは試験に集中すればいいだけのことなのだから。

「ま、起きていない事を気にしても仕方ないか……私たちはあつちを監視しているから貴方達は試験に集中してね」

『了解！』

筆記試験はその後無事行われたが、途中で約一名が担架で運び出された。

……プレッシャーで一気に知恵熱が出た六道 冥子が気を失ったか

らだ。

もう一つ蛭が物影で辺りを監視している時、黒崎が伝言を持ってくるということがあった。

「蛭お嬢様。美神 美智恵が黒服の男達を使っているようです」

「……やくざか、特殊な訓練を受けた軍の者って所？」

「はい、自らは動かずその者たちを使って情報収集をしているようです」

「まあ当然か。……分かったわ、後でその者たちの詳細教えてね？」

「はっ」

その後は特に問題もなく過ぎていった。

見事筆記試験を通過した者にはその日の内に結果が伝えられた……何気に早い行動である。

蛭たちはゆったり家に帰り明日に向けて早々に眠りに就いた。

……その晩六道家にて。

執務室で試験結果に戦慄している当主と怯える娘が居たそう。

二日目。

この日は多くの試合をこなすだけに早々に試験会場へと足を運んだ。会場は受験者の他に既に落ちた者や見学者でごった返していた。

カオスたち受験者は組み合わせが決定されるのを待っている。

「第一試合は128名、64試合が行われます。今回の審判長唐巢氏、組み合わせを決めるラプラスのダイスを振ります！」

「ラプラスのダイスはあらゆる霊的干渉を寄せ付けず、運命を示すサイコロある！このサイコロで決められたことは絶対公平かつ宿命あるね！」

唐巢神父がダイスを振る中、実況者と解説者の厄珍が会場の者に説明をしている。

運命の組み合わせが示される中、別の事に神経を集中している者たちもいたが特に何かが起きる事もなく対戦表が決まった。

「どうやら……身内で潰し合うことはないみたいだけど、見事に分かれたわね」

「蛍姉さん……皆さんは大丈夫ですか？」

対戦表を見て一安心している蛍におキヌが心配そうに聞いてきた。見れば傍にいるタイガーも同様になっている。

「心配しなくてもいいわよ、皆強いから。後は不幸なことが起きないように祈っているだけね」

「そうだぜ、おキヌちゃん。はつきりって俺たちは周りとレベルが違うからな！」

「……否定はせんが、少し落ち着け雪之丞」

安心するように言う蛍と戦いを前にして疼いている雪之丞、それを鎮めようとしている陰念。

余りのいつもと変わらぬその様子におキヌたちは安心したように一息ついた。

「それより早速試合が始まるみたい……まずはカオスからだね」

コートに上がるカオスの姿を目にした蛍が言う。

「どうやらマリアは温存するようだ。」

「ではまず注目の一戦。ドクター・カオスの試合を見てみましょう」

「対戦者はノーマルタイプの受験者のようあるね。ドクターの相手にはならんあるよ！」

神通棍を手にカオスの様子を伺っていた対戦者は厄珍の言葉に反応したのか一気に詰め寄り霊波を纏った突きを放つ！

「ふ、温いわ！」

「……ッ！ガアッ?!」

が、カオスは素早くかわすと右腕の陣を発動させ相手のテンブルを打ち抜く！

突き刺さった霊波は確実に相手の意識を奪い去り昏倒させた。

「勝負あり！勝者、ドクター・カオス！」

「見事な動きでした！まるで年齢を感じさせない華麗な体捌きです！」

「あの強力な霊波をテンブルに貰ったら溜まったもんじゃないあるね！」

賞賛する実況たちを他所にカオスはコートを降りた。

「強いのー」

「凄まじい霊波だな、しかもまるで消耗を感じさせない！」

「無駄がないな……勉強になる」

「お爺さんなのに凄いですね」

蛍の横で各々が思った事を口に出している。

蛍は未来との差異に苦笑が隠せないようだ。

「次はエミ姉さんと九琉の試合ね。えーと、エミ姉さんが4番コー

トで九琉が8番コートね」

それぞれ鉄扇と神通棍を手にコートへと上がる。

流石に霊刀だと万が一があるからと神通棍を用意した九琉だった。

「さてどんどん行きましょう。続いて注目の試合は……」

「あれある！4番と8番の試合！」

「おおっと！共に横島の姓を冠する美人です！横島と言えば最近世界的に支持を集めている実業家の姓ですが関係者でしょうか？」

「たまらないあるねー！着物姿がいいあるよ！」

暴走する厄珍を他所に横島の姓に注目する実況。

蛸は苦笑しながらも対戦者を確認した。

「……ま、問題ないわね。パワータイプが対戦者のエミ姉さんと式神使いが相手の九琉」

「エミ姉さんは大丈夫なんですか？あんな大きな人ですけど？」

「結界内は霊的な攻撃以外は無効化されるからね。あの程度の相手なら問題はないわ」

「問題は九琉か？どんな式神が知らんが」

「さて……？」

試合開始と共に霊波を高めるエミの対戦者。

「女だろうと容赦はしないぞっ！」

「……結構よ。さっさと掛かってきなさい」

資格を手にする試合で頓珍漢なことを言う相手にエミはウンザリしていた。

「侮るなっ！」

「甘いわよッ！ハッ！」

「うおっ？ガハアッ！？」

大降りのパンチを放つ相手の懐に入ったエミは合気柔術で相手を浮かすとその背中に霊波を撃ち込んだ！

神経を麻痺させられた相手は動くことも出来ずに呻くのみだった。

「勝者、横島 エミ！」

「呆気ないです！着物姿にも拘らず軽やかに決めました！」

「しょーもない相手あるねえ！」

「おおっと！注目のもう一つの試合も開始するようです！」

根暗そうな男が呼び出したのは一匹の大虎であった。

一瞬構える九琉だったが、式神の霊波を探った瞬間気が抜けたように目を半眼にした。

「一気に決めさせてもらうぞ小娘！我が大虎の餌食になるといい！」

「おお！これは巨大な虎です！対する九琉選手は女性にしては長身ですが明らかに倍はあります！大丈夫でしょうか？！」

「ピンチあるね！ぜひとも健闘して欲しいあるが傷物にはして欲しくないあるね！」

「ああ……はいはい、いいから掛かっておいでなさい。豊んであげるから」

「なめるなあ！いけえ！我が式神よっ！」

激昂した根暗男が式神を放つが九琉は焦ることなく佇んでいる。

あわや激突かっと言う所で彼女は手にした神通棍を横に尻ぐと大虎を打ち据えた！

大虎はその一撃で呆気なく消え去ると残っていたのは目を回した猫



の式神と呆然とした根暗男だけだった。

「式神に幻術を掛けて相手にプレッシャーを掛けるのはいいけど、少し靈視したら一発で見破れるような物出すんじゃないありませんことよ？」

「うう……お、おのれえ！」

「後もう少し余裕を持って行動しましょうね」

自棄になって突っ込んできた男を靈波を浴びせ気絶させると溜め息を吐いた。

「碌なものではありませんね」

「勝者、横島 九琉！」

「全く張り合いのない試合ばかりあるね！相手が美人のねーちゃんであるのが唯一の救いあるよ！」

「まさか張りぼてとは気付きませんでした。さて残す第一試合も後僅か、次なる注目の試合は何処でしょうか？」

第一試合が終わりお互い碌な試合でなかった事をエミと九琉が慰めあっていた。

その時、蛍の傍にいたテレサが警告を發した。

「皆様お気をつけ下さい。会場入り口付近に美神 美智恵が参りました」

「……娘の試合を見に来たわけね。ああ、あの男装のがそうね」

「あと反対側に昨日接触していた男達があります。どうやら受験者の実力を見ているようですね」

「……ふむ、戦力確保の為かしら？例え落ちても自らの陣営に入れることで育て上げ恩を売って駒にするとか？」

「ありえますね。かなりぴりぴりしているのが遠目にも分かります

「よ」

「駄目よ陰念、そんな露骨に視線を向けたら気付かれてしまつわ」

「っと、すみません」

「蛍姉さん、美神 令子って人の試合が始まるようですよ？」

見ればすでにコートに立っている令子がいた。

神通棍を片手に不適に笑っている様はらしいというべきか。

対する相手は拳士タイプのような。

「どうやら次の注目選手は9番コートの美神選手のようです。神通棍を持つ様が決まっています！」

「確か唐巢神父の弟子だったはずあるよ！これは期待できるね！」

試合開始の合図と共に睨み合いから始める両者。

片や両の拳に靈気を収束させ、片や神通棍に靈気を通し身構える。均衡を崩したのは令子の方だった。

拳を顔面で構えボクサースタイルをとる相手に靈波の突きを見舞う！

「喰らいなさいっ！」

「しゃらくせえっ！小娘があ！」

神通棍の一点集中の突きを横から左拳で打ちずらし右拳を叩き込もうとする対戦者。

カウンターが決まるかと思われた瞬間、令子は体を捻りずらされた神通棍を相手の足元へと打ち下ろす！

「なにっ！グワアッ！」

「舐めるな！三下！」

「ガハアッ！」

丁度脛に喰らった対戦者は呻き体制を崩した所へ更なる攻撃を喰らい沈黙した。

「勝負あり！勝者、美神 令子！」

「ふん！」

「攻撃の流れを掴んだ美神選手の勝利です！」

「容赦ない攻撃だったあるなあ！恐ろしいほど靈力が籠っていたあのよ！」

「色々見所もありましたが、これで第一試合は終了です！続きまして第二試合に移りたいと思います！」

「これを通過すれば明日の面接へと望みが繋がるね！」

試合会場が俄然盛り上がる中、会場脇で美神 美智恵を見張っていた大樹は新たな情報を手にしていた。

その情報を手にした大樹も届けた黒崎も共に無念そうな顔をしていた。

「……チィ！軍の中枢にまであいつの手が伸びているだと？しかも政府の軍関係者まで……一体何処まで手を伸ばす気だっ！？」

「最早そちら関係は止められませんか。後は蛭お嬢様があの方が動き出す前に事態を終結させてあの者の自爆を誘うだけです」

「……そういう意味ではこれは好機とも取れるんだろが。問題はそれまでに強引な行動に移らないかな」

「全くです。蛭お嬢様の負担を増やす事だけは絶対に避けなければなりませんからね」

事の厄介さに苦悩する大樹たちだが今は手が出せないので悔しい思いを募らせるだけであった。

さて、そんなやり取りが行われている間に第二試合も恙無く進んでいた。

エミたちや令子も第二試合を突破し第三試合も消化した。

「お疲れ様皆……こつちにご飯用意してあるから昼食にしましょう」  
「あゝ疲れたあゝ……結構あほな奴が多かったから精神的にだけど」  
「そうだな、ああいう輩の相手をするのは疲れるもんだ。何で筆記試験を受かるんだか」

「でも凄いです皆さん！他の人を圧倒してましたね！」

「そうじゃのー！見習いたい物じゃー！」

「この料理は蛭様が？」

「あとおキ又ちゃんと母さんでね。いつぱいあるからエネルギー補充しといて……これから本番だからね！」

「分かっているワケ……とりあえず最初の壁は準決勝ね、九琉か美神ね」

「私は準々決勝ですね……例の美神が相手でしょうね」

「わしは決勝かな？お主たちが美神か……まあ、お主達のどちらかだと思いが」

それぞれ検討しながらも昼食を摂っていく蛭たち。

ちなみに何気に凄いメンバーだが周りには他の受験生が同じようにお昼を食べているに加えて誤認識結界を張っているので目立っていない。

その後、休憩時間も終わり再びトーナメントが再開された。

次々に篩いに掛けられていく受験者達。

流石に此処まで試合が進むと戦闘レベルもそれなりになってくる。チャクラを廻せば瞬時に回復できるエミと九琉、マリアを温存しているカオスは別としてそれなりに疲労してきているようだ。

「さあ、トーナメントも中盤を過ぎベスト8が決まりました！次の試合から準々決勝となります！」

「そろそろペー配分の重要性が出てくる頃あるね！限りある靈力を如何に効率よく使用できるかも優秀なGSの条件あるよ！」

「なるほど、確かに各選手の表情に陰りが出ている方もいらっしゃる。さあ、どうなるのでしょうか！」

準々決勝である第五試合目…… 4組の試合が行われる。

なお優勝者はC級よりランクを開始できることになっている…… ともにその後面接で落ちれば資格さえ得られないが。

「さあ、第五試合最初の試合は注目のドクター・カオス選手です……？ おおっと、何やら審判に掛け合っているようですが？」

「美人のねーちゃん連れているけど誰あるかね？」

「えーと？ あ、情報が来ました。な、なんと！カオス選手一つのみ道具持込可能という原則を利用してカオス選手製作の人造人間M-666通称マリアを持ち込みましたあ！」

「な、あれ人造人間あるか？！流石ヨーロッパの魔王ある！」

「そんなのありー？！」

実況により明かされたとんでもない事実！厄珍が驚き令子が叫んでいた。

しかし人権登録されていない以上道具という考えは適用されそのまま続行となった。

観客席からは非難する声は上がらず、むしろ此処まで端正なロボットを作り上げられる事に感嘆の声を挙げていた。

試合その者はあつという間に消化された。

対戦者は善戦する暇もなく、近頃更にグレートアップしたマリアに気絶させられた。

「凄まじい運動性能と靈力攻撃です！唯のボディーガードではなく靈的な能力も持ち合わせているようです！正に隙がありません！」

「てつきり横島選手のどちらかが優勝かと思っていたあるが……これ  
れで判らなくなってきたあるな！」

「ドクター・カオス選手、優々の準決勝進出です！」

続く試合も終わり第五試合最後の組み合わせ……九琉VS令子。

今正にある意味未来での戦いの再現が起きようとしていた。

**第十一章 変革をもたらす物【前編】（後書き）**

あざとい切り方をしてしまいました（汗）

丁度一万字を超えてしまったので……。

次回投稿は7/10の7時です。

**第十二章 変革をもたらす物【後編】（前書き）**

GS資格試験後編です。

戦闘描写……要練習です（涙）

それではどうぞ。



## 第十二章 変革がもたらす物【後編】

SIDE 令子

GS資格試験が始まり私は全力を持ってそれに挑んだ。

一日目の霊波測定と筆記試験は何とか無事に通過することが出来た。

……ただ、幾つか嫌な事もあった。

まず最初に会場に着いた時、大量の式神を表に出していた変な子がいたので注意したら妙に懐かれてしまったこと。

そしてその子が実は六道家の娘さんだったこと。

最後に筆記の時横に座ったのがその子で途中で気を失ってちょっとした騒動に巻き込まれたこと。

「……嫌な事起こりすぎよ、全く！」

とにかく一日目は無事クリアしたので良しとすることにした。

そして肝心の二日目。

第一試合から舐めた三下が相手でイラついたけど直ぐに撃破して上り詰めていったわ。

気になったのが横島とか言う姓の女二人。

どっちも着物着てんのにそれを感じさせない動きには戦慄したものだっただわ。

何気に霊波も強力だったし。

あとドクター・カオス。

流石ヨーロッパの魔王なんて呼ばれているだけあって凄まじい霊力だったけど……第五試合開始と共に出てきたアレ……何よあの口ポツト!?

あんなのが罷り通るわけっ?!

でも予想に反して周りの反応は好意的でありマリア自身も優れた霊的能力を保持していた。

気を取り直して残りの試合を見るとあの横島 エミとか言う子は結構霊波を放出しているくせに疲労を感じさせていない……一体どれぐらいのスペックなのよッ!

もう一組はそこそこってどこかしらね……次は私の番だ。

相手は例のもう一人の横島……横島 九琉。

こいつも疲労らしきものは一切感じていないようだ。

「それでは第五試合最後の取り組み合わせ、美神 令子選手VS横島 九琉選手……始めッ!」

何にしても立ちふさがるとなら打ち砕くのみよッ!

美神の女に負けはないんだからッ!!

S I D E O U T

「横島だかなんだか知らないけど……私の前に屈しなさいっ!」

「……………」

「おおっと!美神選手早速果敢に攻めていきますが、九琉選手焦らず軽やかにかわします!」

「正に動と静あるね!火の様に全てを焼き尽くす感じの令子ちゃん」と水のように静かな九琉ちゃん……正に対極あるよ!」

同じ神通棍を手にしている九琉は雑ぎ払いを敢行する令子を難なく避け、先ほどと変わらず相手を窺っている。

そして数瞬後、九琉は神通棍を振り上げると霊力を更に籠め始めた!

「?!な、なんて霊力なの!」

やがて出力に負けたのか神通棍が変形した!

「な、なんと！九琉選手の神通棍が靈力の出力に負けたのか鞭状に変化しましたあ！これは凄いいい！」

「水のように静かだった九琉ちゃんの靈力がまるで津波の様な勢いで増幅されているあるね？！一体どれだけの数値をはじき出しているあるか！？」

「うそ……… っただけハイスベックなのよっ？！」

「…………… ツ！」

驚愕する周りを他所に九琉は撓<sup>しな</sup>る鞭を片手に一気に令子の懐に潜りこんだっ！

「ッ！は、速いつ！チィ！」

「…………… ふっ！…………… ハアッ！！」

迎撃する令子の神通棍に靈波の鞭を巻きつけようとすする九琉、そうはさせるかと更に靈波を籠めて何とか絡みそうになる鞭を弾く令子。距離をとり何とか態勢を取り戻そうとする令子に休息を許さず追撃する九琉。

「凄まじい攻防です！九琉選手令子選手に休む暇を与えません！」

「アイヤー！容赦ないあるねー！苛烈に攻撃しているにも拘らず冷静さを保っている九琉ちゃんは凄いいあるよ！」

「あぁっつと！そういうしている内に令子選手結界の隅まで追い詰められてしまいましたあ！？」

「くう！この、舐めるんじゃ…………… ないわよおー！！」

おされ気味だった令子が足を踏ん張り低空姿勢で一氣に困いを突破する！

しかし九琉は焦ることなく振り返りながら鞭を振り上げ打ち下ろすと令子を絡め採る！

「な、なにつ！」

「落ちなさい……ッ！」

「！？キャッ！！！」

九琉は一気に靈波の出力を上げると令子をスタンさせた！

「勝負あり！勝者、横島 九琉！」

「決まりました！善戦した令子選手でしたが一步及ばず敗退です！」

「終始責めた九琉ちゃんは凄まじいあるね！間違いなく次世代の一角あるよ！」

「九琉選手の準決勝進出でベスト4が決定しました！」

「対戦表は次の通りあるね！」

準決勝第一試合

ドクター・カオスVS鬼道 政樹

準決勝第二試合

横島 エミVS横島 九琉

「な?!鬼道?」

「蛭様如何かなされましたか?」

「師匠が動揺するなんて珍しいな?」

「え、ええあのカオスの対戦相手が知っている奴でね」

「あの式神使いの方ですか?」

「夜叉丸って言う式神使っておりますが……随分荒れた戦い方しておりましたノー」

「はあ、まさかあいつがいるとはねえ。名前見ていた筈なのに気づかなかつたとは……不覚」

「それであいつは出来るのか?」

「ん?今の時点じゃそれほどでもないかな?鍛えれば優秀な式神

使いになるだろうけど」

「……でしたら、危ういのでは？」

『？』

「いえ、例の美神の者に接触されて懐柔されてはと思ひまして」

『あ』

「確かに不味いわね〜（汗）私の知つての通りならあいつは父親の復讐心の元育て上げられた筈だから場合によってはコロツと騙されてしまうわよ」

「うげっ……それって滅茶苦茶やばいんじゃないあ」

「蛭姉さんあの人優秀なんですよね？」

「ええ、式神使いとしてはキャパシティさえ強化すれば最高の使い手になるでしょうね」

「……どうしますか？カオス様に連絡を取り懐柔して貰いますか？」

「……そうね。丁度六道も衰退していくだろうし、もう下らない親の復讐に付き合つて自分の将来を潰す必要もないんだし……ね」

「ではその旨を伝えておきます」

「お願いね」

蛭たちのやり取りを他所に試合開始の時は近づいていった。

偵察に来ていた美智恵は娘の敗退を悔みながらも相手の情報収集に余念がなかった。

またその様を監視している大樹たちは黒服たちも含めて嚴重に行動をチエツクしていた。

そして行われる準決勝第一試合。

「それでは準決勝第一試合、ドクター・カオス選手VS鬼道 政樹 選手……始め！」

「ふむ、ちと面倒なことになったな」

「爺さんや、ぼくの前に立ちふさがるなら容赦はせえへんで？」

「……だが人生の先輩として少し教育してやらんな。身を焦がす

情熱はそんな暗い物ではいかんという事を！」

テレサからの要請を受けて少し困惑気味であったカオスであるが鬼道の様子に腹を括ったみたいだった。

カオスは夜叉丸を差し向ける鬼道に対しマリアの霊的防御壁を展開させ凌ぐように指示した。

「やれ夜叉丸！死にぞこないの爺さんをいてこましたれ！」

「マリア！防御壁展開！夜叉丸を押さえ込め！」

「イエス！ドクターカオス！」

パワーでは決して負けないマリアは巧みに夜叉丸を押さえ込むと持久戦に持ち込んだ。

その隙にカオスは鬼道に接近すると両腕の陣を展開して高出力の波動で鬼道を拘束した。

「ぐ！何つー波動や？！ほんまに爺さんか？！」

「小僧……その身を復讐で染めるのはいかなものかな？六道もこれから衰退していく以上例え己自身に括りがあるうと無意味な物になるう？」

「な、突然何言い出すんや？！試合中やぞ！」

「確かにそうだがな……碌でもない輩がお前さんを取り込んで私兵にする可能性がある以上放っておけんよ。お主も自身の気持ちにけりをつけたいだろうしな？」

「？！……どういう意味や」

「お主、六道の娘にリベンジしたい気があるんだろうが……止めておけ。少なくともお主のキャパシティでは十二神将全てを吸収することは出来ん！アレは六道かそれ以上のキャパを持つ者にしか扱えんからな」

「……！な、何でぼくのやろうとしとることを……？」

「なに、少しばかり情報があるだけさ。それで如何する？わしの盟友の所に来れば本当の意味で強くなれるし如何に今の自分が矮小な者か分かるぞ？」

「……その盟友つてやつの所に行けば変わるんか？この復讐に身を落としたぼくが？」

「くくくく、その程度の復讐なぞあやつからしたら微温湯よ！お主も気付くだろう、如何に世界が広いかということを！」

「……分かった、言うとおりにするわ」

「なら試合再開だ！少なくともわしはお主より強いぞ？」

「なら勉強させてもらおうか！」

膠着状態だったカオスと鬼道及びマリアと夜叉丸が再び離れることで状況はまた元に戻った。

「何やら對話していたようですが一体何があったのでしょうか？鬼道選手の表情が先ほどまでとは違い随分晴れやかな物になっています！」

「たぶんドクターが何か説教したんではないあるかね？1000年を生きるドクターからしてみれば相手の十数年しか生きていない小童が暗い感情に流されては放っておけないのではないあるか？」

「なるほど人生の先輩からの忠告というわけですね？納得がいきました！」

対峙する二人と二体。

カオスは両腕の陣だけでなく秘かに両足の陣も起動させると一気に出力を高めて夜叉丸へと踊りかかった！

まさか夜叉丸の方へと行くとは思っていなかった鬼道は不意を打たれてつんのめった。

そこへ回り込むマリア！

「……………ッ！老骨には応えるが少し相手をしてもらっぞ？夜叉丸よ！」

「な！まさかそっちに行くとは……………って、うわぁ！」

「捕獲完了！霊波放出！」

「主と共に少し眠っておれ！ハアッ！！」

「……………アッ！！！」

共に捕らえられた鬼道と夜叉丸は抵抗する間も無く一気に霊波を浴びせられて沈黙した。

「勝者、ドクター・カオス！」

「決まったーッ！正に貫禄の勝利です！」

「見事な意思疎通ある！意表をついた良い作戦だったあるね！」

鬼道が気を失い構成が維持できなくなった夜叉丸が彼の影へと戻っていく。

カオスはマリアに命じると鬼道を抱き上げ医務室へと向かった。

それを確認した美智恵と大樹たちは一斉に動き出した。

「どうやら上手くいったようね。あっちは父さんたちに任せておけばいいでしょう」

「でもお爺さん結構無理しましたよね？」

「ご老体たあ思えん動きをしたらけえな」

「ああ、あの老体にあの出力は結構きついはずだぜ？」

「ドクターはチャクラを開いていないから回復も追いつかないだろうし……………決勝はきついかな？」

「まあ決勝まで行ったんだから後は善戦してくれたらそれでOKよ。エミ姉さんか九琉……………出来ればエミ姉さんに優勝して貰えたら一番すわりが良いんだけどね」



カオスは既にC級の資格を得ている。  
これでエミが優勝し面接に受ければ彼女もC級から開始できる。  
そうなれば元々事務所の所長を務める予定が上手くマッチするのだ。  
ちなみに九琉は副所長を勤める事になっているのでD級からの出発  
でも問題ない。

「さて続きまして準決勝第二試合です！共に横島の姓を冠する美人  
同士の戦いです！」

「良いあるね〜！眼福眼福」

コートの上で対峙するエミと九琉。  
共に不適に笑っているのが印象的である。

「九琉、貴女があれを倒してくれたのには感謝しているわけ」

「お気になさらず、私もアレを放置する気は一切ありませんでした  
から……：蛍様の為にも」

「でも此処は勝たせてもらうわけ。お互い全力でやり合いましょ  
う？」

「ええ、勿論です……：負けはしませんけどね？」

『ふふふふふふふふ』

印象的……？

「な、何やらコート内に不穏な空気が満ちてきましたかそろそろ時  
間です！」

「そ、それでは準決勝第二試合、横島 エミ選手VS横島 九琉選  
手……：始め！」

「行きますよ、エミ様！」

「来なさい、九琉！」

着物同士の乱舞が始まる！

黄色を主体にした蝶を散りばめた白色の着物で着飾り鉄扇で迫り来る神通棍を弾くエミ。

白色を主体にした蛇を巻きつけた朱色の着物で着飾り神通棍を打ち据え弾かれた反動で後に大きく跳ぶ九琉。

九琉は早速神通棍を鞭状に換え撓らせる！

対するエミは鉄扇に靈力を籠め芭蕉扇状にし前面で構える！

「エミ選手鉄扇を芭蕉扇の様に變形させました！両者早くも臨戦態勢です！」

「どっちも籠められた靈力が半端ないね！あんな物喰らったらひとたまりもないよ！」

九琉は神通鞭を振り翳すと一気に接近しエミの手前に振り下ろし怯ませると自身を跳躍させた！

一方エミは神通鞭の衝撃をいなしつつもゆらゆらと体を揺らし神楽舞を踊り始める！

「撃滅波は撃たせませんよ！撓れ！神通鞭！！」

身内ゆえに相手の行動は丸分かりである。

九琉は撃滅波の予備動作を察知しそれを中断させるべく空中から神通鞭を叩き込んだ！

「…………ふ、甘いわよッ！靈体…………貫通波ア！！」

撃滅波の踊りの中に貫通波の動きを混ぜていたエミはそれを放ち神通鞭の攻撃を弾き飛ばした！

そして続けざまに芭蕉扇を投げつける！

「ッ！まさか貫通波で迎撃するとは！？ハッ？！……………」  
クッ」

予想外の攻撃に体制を崩した九琉は何とか体制を整えながら着地する……と、そこへ飛来する強力な霊波を纏った芭蕉扇！  
慌てた九琉は側転して避けるも地面に激突した芭蕉扇の余波で体勢を崩す！

「私から目を離れたのが運のつきよ！霊体：撃滅波ア！！！」  
「な？！……………ッ！！！」

膨大な霊波の壁が眼前に迫り、それに贖うことすらできず飲み込まれる九琉！

一方エミは霊波を放出し続ける為に神楽舞を舞い続ける。  
その押し寄せる勢いの撃滅波の壁と結界に挟まれ霊波の摩擦熱で意識を一気に刈り取られた九琉に反応する術はなかった。

「……………九琉選手反応がありません！よって勝者、横島 エミ！」  
「ふう、結構しんどかったわね。これはまた修行しないと」  
「正に息詰まる展開でした！最後に放たれた霊波の壁は正に圧巻の一言です！」

「一瞬だけど霊波計が振り切れたあるよ？！どんだけね！結界が抜けなかったのが不思議なくらいある！」

「横島家の皆さんは共に優れた素質を遺憾なく披露しました！正に将来が楽しみな家名です！」

「これは次世代の代表は六道から横島に移行するあるね！間違いないあるよ！」

厄珍が結構命知らずな事を言っているのを聞いて苦笑する蛭たち。  
まあアレを見ればそう言いたい気持ちも分からなくはないが。

ちなみにエミの攻撃が結界を抜けなかったのは加減をし結界を利用したからである。

「さて十分の休憩の後、最後の試合……決勝戦、ドクター・カオス選手VS横島 エミ選手の試合が始まります！」

さて決勝戦の準備が整うまで別の視点を語ろう。

S I D E 美智恵

準々決勝で娘が負けた時、私はそれほど落胆はしなかった。相手の子ははつきりいってレベルが違いすぎたからだ。

私が相手でも何処まで粘れたか……試合ではなく己のフィールドであるならともかくあそこでは私でも危ういだろう。

だから私は娘が負けた後、もう一つの目的を果たすべく偵察を続けた。

自身の指示に従い使える私兵のGSを得る為に。

そして私は既に目星をつけていた。

この試験で注目を集めている横島家の者は論外である。

正直あの女傑に関係のある所に手を出す勇気が持てなかったし、此方に靡かないであろう事は何となく察せられたので除外している。

ドクター・カオスも同じである。

有名すぎるし、何より世界GS協会の顧問になるという情報があるからだ。

故に標的は一人。

未だ荒い所が目立つが素質は十分で何やら六道家に復讐心を持っている様子。

上手く操れば六道に恩を売れるし、あの子も此方の手に入る公算が高い。

「何としても手に入れないとね」

「死人が何をしておるのだ？ 確か美神 美智恵と言ったか？」  
「?!」

「急ぎ救護室へ向かおうとした私の前にドクター・カオスが突然現れた。」

「いや、鬼道を救護室へと運んだのは彼らだ…… 出会っても可笑しくはない。」

「しかしだ…… 何故私だと分かった？  
目の前の老人はそんな考えを見透かしたかのように鼻で笑った。」

「ふん、大方何故正体がばれたかといった事を考えているのだろうが…… わしの相棒のマリアには要注意人物の生体反応や声紋などが登録されておるのでな」

「?! 要注意人物ですって？」

「お主が世界GS本部に目を付けられている事は既に報告されている。…… ま、どうでもいい事だがな」

「……？」

「マリア行くぞ、こやつ如きに構っている暇はないからな」

「イエス・ドクター・カオス！」

老人は硬直している私には見向きもせず歩み去っていった。

老人の足音が聞こえなくなると私は一気に脱力してへたり込んだ。

「…… 何て気迫、アレがヨーロッパの魔王。噂なんて当てにはならないということね」

「何時だったか既にボケが始まっているなんて情報を聞いたことがあったが何て事はない…… 未だ健在ではないか！」

「まあいいわ…… 見逃して貰えるのならこの機会を逃す必要はない」

のだから」

私はへたり込んだ体を起こすと気合を入れ、救護室へと急いだ。

……が、私の目論見は既に瓦解していた。

何故なら向かった救護室のドアの前には何故か人だかりがあったからだ。

しかも中にはリポーターとカメラマンすらいた。

これでは近づく事などできないではないか！

私はいつそ特攻して掻っ攫ってやろうかという気持ちを抑えるとその場を後にした。

目的が叶えられないならこんな場所に居る必要などないのだから。その後、軍の協力者に解散を告げると私は街中へと姿を晦ました。

S I D E O U T

S I D E 大樹

「行ったようだな黒崎君」

「はい、ドクターが足止めしてくれたお蔭で準備が間に合いました」

「ああ、後で礼をせねばな……気にするなと言うだろうが。すまんが黒崎君はあの者の追尾及び監視を頼むよ？」

「はっ」

救護室の前でテレビ撮影班に扮していた俺たちは美智恵の気配が遠のいた事で一息ついていた。

現在部屋の中では百合子が鬼道君に今後の説明をしている。

あっちは百合子に任せればいいだろう。

「……いつまでこの状態が続くか、が問題だな。下手に隠れられて

も乗り出されても面倒だからな」

「大樹様、撤収準備完了しました！」

「ご苦労、今日はもう上がりで構わんよ。急な呼び出しですまんか  
つたな」

「いえ、気にしないで下さい。蛭お嬢様には良くして貰ってますか  
ら」

「そうか（すっかりお嬢様だな、蛭の奴）このふざけたやり取りが  
終わった暁には盛大にパーティーでもするとしようか？」

「いいですねえ、ならその為にも今は張り切って事を成さなければ  
いけませんな」

「うむ、今後ともよろしく頼むよ」

「はっ」

全く我々には過ぎた部下達だ。

これは是が非でも成功させねば……失敗する気など微塵もないが。  
蛭……お前は一人ではないからな。

S I D E O U T

「さあ、残す試合も一試合！決勝戦！！これより始まります！！！」

「勝ちあがってきたのはこの二人ある！稀代の不死の錬金術師、ヨ  
ーロッパの魔王、ドクター・カオス！！！」

「そして、世界でも有数の呪術師であり世界に貢献している横島家  
の養女、横島 エミ！！！」

「双方既にコートにて屹然と佇んでいます！立ち上る霊力の波動は  
他の追隨を許さず、その動きにも一分の隙もありません！！！」

コート上で対峙するエミとカオス。

二人は今、状況が上手くいっていることに喜んでいた。

……これで蛭に心配させずにすむと。

「ドクター、鬼道君の目はきちんと覚めさせたようね？」

「うむ、あの者は今百合子殿と面会しておる。最早心配いらんだろ  
う……例の者も追っ払えたようだしの（笑）」

「！それは最高に喜ばしいことなワケ（笑）」

『ふふふふ』

「何やらまたコート内に不穏な空気が満ちてきました（汗）それでは準備も整ったことですし試合を開始したいと思います！」

「GS資格試験実技の部、決勝戦！ドクター・カオス選手VS横島  
エミ選手……始め！」

始まる今大会最後の試合、双方幾多の試合を経ているにも拘らず現在には既に平常そのもの。

会場内の観客やGS関係者は確信していた……時代が変わると！

「まあ何にしてもよ、ドクターも早々表には出てこないんだからここでハッスルしてかないとね？錆び付く訳には行かないんだから」

「くくく、言ってくれるのう。無論全力で行かさせて貰うさ……マリアもな？」

「おゝこわ……負ける気は一切ないから覚悟することね？」

「そっちこそ」

合図が告げられてコート内を周回しながらも言葉を交わす二人。

徐々に空気が震えるほど霊気が満ちていく結界内……エミはチャクラを廻し、カオスはマリアに予備の霊力発生装置も起動させた。

鉄扇を霊波で芭蕉扇にし身構えるエミはカオスとマリアを静かに見詰めていた。

カオスも油断なく己の全てを出し切る為にエミに集中した。

「

ッ！行けっパンチRだ！マリア！」



「イエス！」  
「ッ！シッ！」

放たれた霊波を伴ったロケットパンチを僅差でかわしワイヤーを芭蕉扇で斬りつける！

しかしワイヤーは撓たわんだものの傷一つつかない。

「ッ？！一体どんな素材使ってるのよッ！」

「ふ、わしのマリアはわしの全てと言ってもいいくらい研究成果が籠かごっておるからな！それしきの攻撃ではビクともせんよ！」

「ならっ！」

「させん！マリア、ブレード！」

「イエス！」

「うわあ？！」

気を取り直して芭蕉扇の投擲で怯ませようとした所にマリアの霊波ブレードの斬撃が迫ってきた！

今度は大きく後方に飛び距離をとるエミ。

追撃をさせない為に髪に大量の霊気を通し飛礫にしてカオスに放つ！それを防ぐマリアを他所に神楽舞を踊り始めるエミ。

カオスも両腕両足の陣を起動させ機を窺う。

そしてついにエミの舞が終わろうとした時、マリアが跳躍して攻撃態勢に入る！

「おおっと！高く舞い上がったマリアと前方のカオス選手の二方向からの攻撃だあ！エミ選手どう対応する！？」

「片方を迎撃すると間違はなく片方にやられるあるよ！」

「喰らえ！殲滅破壊光線！！！」

「霊波ロケットアーム！！！」

繰り返される二つの攻撃を前にエミは行動に移した！

「上手い手だけど……引き出しはまだあるわよ！芭蕉扇・龍の拘束！！必殺！！極大霊体撃滅波アー！！！！」

マリアに向かって放たれた芭蕉扇が空中で分解しマリアに絡みつき拘束する！

籠められた強力な霊気により柔軟性を得た強い拘束は一気にマリアを無力化した！

そして前方の破壊光線に準決勝の時より更に練り上げ高密度にした撃滅波がぶち当たり一気に飲み込んだ！！

今度は手加減なしだ！

「ナ、ナニイ　　?!」

「おまけよ！霊体貫通波アー！！」

「ちょ、ちよつとは老体を労われえー?!!!」

迫り来る霊波を受け止めるも貫通波で後押しを受けた撃滅波はあっさりカオスを飲み込んだ！

霊気の爆発によって起こった煙が晴れるとそこには仰向けに倒れ目を回したカオスがいた。

「……意識はありません！この勝負、ここまで！勝者、横島　エミ！！」

「ついに、ついに決まりましたア　　！！優勝は横島　エミ

選手に決定です！！！！」

「凄まじいスタミナある！間違いなく今大会でもっとも霊力を放出した選手あるよ！」

実況がエミの優勝を告げ、この後審判員による順位発表が行われた。

以下がその結果である。

優勝：横島 エミ

準優勝：ドクター・カオス

三位：横島 九琉

四位：鬼道 正樹

同率四位：美神 令子

美神令子はその健闘から同率で四位に上がった。

「……はあ、何とか最高の結果になったね」

「スゲー試合だったぜ！俺も負けてられねえな！」

「修行だけでは練り出せない物だったな、あの気迫は。それにあの持ち手の使い方も見習わなければ」

「凄いのー！あの気迫見習わんとー！！」

「はわあゝ、皆さんで上位を占有しましたね」

「……どうやらカオス様も無事目が覚めたようです。安心しました」  
息を止めて見守っていた蛭たちは結果が出たことで一気に脱力した。選手達の健闘を讃えあっている皆を横目に蛭は選手の休息を速やかに行えるように皆に休息の準備を御願いした。

「さて、皆疲れているだろうから早く休めるように夕餉とお風呂なんかの準備をしましょうね！」

『了解！』

一人残った蛭は選手達が表彰され壇上から降りてくるのを迎えると先に帰った皆を追うように大樹の運転する車で帰宅した。

その後選手達を労わり暖かな夕餉とお風呂で休息させると早々と横島家の明かりは落ちた。

翌日、すっかり回復した三人は面接に赴いた。

もつともこれは特に記する事はない。

皆無事通過し、予定通りカオスとエミがC級からスタートし九琉がD級からのスタートとなった。

もつとも協議の結果、全員規定の除霊回数を半分まで免除される事に成った事は告げておくべきだろう。

「思ってもない幸運だね。これなら来年になるまでに事務所の開設を申請できるね」

「うむ、わしには特に助かるわい。研究もしなくてはならんからな……所であの鬼道とやらはどうなったんだ？」

「ん？今は母さんがその歪んだ教育で作られた考え方を矯正しているよ？」

「お前さんは会ったのか？」

「ええ、会うなり呆れた顔したから思いっきり霊圧上げて潰してあげたけど（黒笑）」

「……（汗）大人気ないのう」

「そしたら何かきらきらした目で見てきたから……母さんに性格の矯正をきつめに御願いしてきたの（笑）」

「……哀れな（涙）」

その後、合格記念のパーティーを開き皆で談笑した。

普段仕事や修行で身を磨り減らしていたので開放感溢れる集いとなった。

笑顔の絶えない横島家の者達はこうして明日への英気を養うのだった。

面接が終わった夜、美神家にて。

令子にとって厄介である筈の面接が終わった後、何時になく規則正しい行動をし家へと辿り着いたその時彼女はいきなり玄関先でしゃがみ込んだ。

「~~~~~ツ！ハアツ！あゝ、息が詰まるかと思った！あと少し解除が遅かったら間違ひなく精神逝かっていたわ！」

何かを吐き出すように声を張り上げる令子。

「でも、うふ……ふふふふ（黒笑）やっぱり上手くいったわねえ！ここまで上手くいくとは思ってもいなかったけど」

何を隠そう、令子は面接時己に強力な自己暗示を掛けたのだ。

何処から判定されるか分からなかったので家に帰るまで解けないようににしたのだが、危うく解けないほど深度が進行する所だった。

「実技で優勝できなかったのは業腹物だったけど……ふふふ、見てなさい！これからは私の時代よ！」

資格を得た令子はすっかり上機嫌になりその夜何時までも高笑いしていた。

……もつとも、D級における研修の判定を監査員がする事をすっかり忘れていた令子であった。

ちなみに、令子の行った暗示云々は全て見透かされており唐巢は指摘し不合格にしようとした。

だが、余り締め付けても厄介な事になると百合子に諭されてワザと見逃した事を明記しておく……ブラックリストには載ったが。

**第十二章 変革をもたらす物【後編】（後書き）**

次回投稿7/13の7時です。

感想お待ちしております。

### 第十三章 闇夜の孤独に愛の祝福を（前書き）

おそらくこの章だけのオリキャラが出てきます。  
それではさしあげ。

### 第十三章　闇夜の孤独に愛の祝福を

資格試験より既に半年が経過していた。

エミがA級にカオスと九琉の二人はB級へとなっていた。

除霊には本来監査員やA級以上の同伴が必要なのだがそこは蛭が同伴することで解決していた。

齊天大聖の直弟子であり御免状を持った世界唯一のSS級が同行することで全てが黙認されている。

これは世界GS本部会長自身が認知しているので問題ない。

そして晴れて横島家邸宅内にある事務所が世間に向けて開放されることになった。

正式名称は妙神山直轄横島総合オカルト対策事務所である。

所長にドクター・カオスと横島　エミ。

副所長に横島　九琉。

顧問に横島　蛭／小竜姫／メドーサ／玉藻（但し全て秘匿されている）

事務所管理人に人工幽霊番号。

経理に横島　百合子。

営業に横島　大樹。

事務員に横島　おキヌ。

以上が現メンバーである。

はつきり言って異常なまでに豪勢な面子である。

後もう一つ驚きの新発見があった。

蛭がいざという時の為にと取り寄せておいたネクロマンサーの笛をエミが吹く事に成功したのだ。

流石に未来でのおキヌほど明瞭には奏でられなかったが、それでも霊を痛めつけずに被う手段を得たエミはこれまでにない綺麗な笑顔を見せた。



恐らくあの子供の幽霊を成仏させる事が出来た事が原因だろうとエミは零していた。

エミ姉さんは此処に着てからも時折あの子供のことを思い出して祈りを捧げていたからそれによって霊との親和性が高まったのだろう……と蛭は呟いていた。

という訳で現在のエミのGSとしての分類は呪術師兼ネクロマンサーとなっている。

ちなみに効果の程は級で言うとB級の仕事で現れる霊程度までなら問題なく扱える。

これは今後修行と心の持ちようによって強弱する可能性を秘めている物だ。

無論エミはこの能力を大事に育てる決意をしている。

さて、そんな事務所であるが此度また一つの依頼が持ち込まれた。百合子の手によって。

「母さん？一応協会の方に通して貰わないと駄目なんだけど……これは唐巢神父？」

「協会の方は既に通してあるよ？世界GS本部の方だけど……A級の仕事よ」

「……ピートの所のことか、既にブラドールが目覚めたのかな？」

「ブラドールだど？お主あんな奴まで相手にしたことがあるのか？」

「未来では中世で頭の思考が止まったアホだったけどね？」

「……………（ピシリッ）」

蛭の言葉に硬直するカオス。

無理もない、少し前まで自分も似たような状況だったのだから。

硬直しているカオスを他所に依頼書に同封されていた手紙を確かめる蛭。

「拝啓、横島 蛭様。

此度は突然の依頼真に申し訳なく思っております。

地中海のブラドール島と言う小さな島が今回赴いて貰う場所です。

蛭様なら御存知かと思われませんが、件の内容はブラドール伯爵の事でありませぬ。

現在はまだ目覚めておらず被害は出ていないのですが、未来を知ってしまった以上は放っておけません。

しかし情けない話自分だけではとても対処できないのでこうして貴女様の御助力を頂きたく筆を執った次第で御座います。

どうか御協力を御願います。敬具 唐巢

蛭は手紙を読み終えて深い溜め息をついた。

「何でも堅苦しい言葉遣いなの？唐巢神父の方が年配者なのに？」

「しょうがないんじゃない？貴女の未来を老師様に双文珠で余す所無く見せられた様だし」

「いつ?!……老師いゝ(涙)」

「能力云々は文珠を使う事のみ伝えてあるそうよ？」

「はあく、ま……いいけどね。それで唐巢神父は何処にいるの？」

「空港の方で待っているわ。新しく取った弟子を迎える為にもね」

「ピート態々こっちに着たんだ……島が無事ならそのまま待っていればいいのに」

「そう言う訳にもいかないでしょ、あつちは頼んでいる立場なんだから」

蛭は百合子の言葉にそれもそうかと思うもやっぱりどこか納得がいかなかった。

その後、事務所に予定が入っていないことを確かめるとエミと九琉を連れて空港に向かった。

ちなみに百合子は仕事を終わらせるまでに鬼道の矯正を仕上げると言っていた。

空港内、ロビー。

空港に到着した蛸はロビーについた瞬間帰りたくなつた。

傍ではエミが腹を抱えて笑い、九琉が苦笑しながらも慰めていた。

その蛸の目線の先にある物……でかかど、御歓迎！蛸様ご一行と書かれた横断幕を掲げたピートと唐巢神父がいた。

それはもうでかい、優に5Mはある。

俯き肩を震わせていた蛸だったが、一気に横断幕に接近すると一瞬にして消し飛ばした……この間約0.5秒。

正に瞬間移動な動きと行動に唐巢とピートは本気で感心して拍手していた。

それにまたもや脱力する蛸……九琉は崇拜する者の哀れさに涙した。

「……唐巢神父、帰っていいですか？帰っていいんですね？帰りますね？」

「す、すみません！申し訳御座いません！出来心なんです！」

あの後場所を変えた蛸たちは軽く話し合う為に空港内の喫茶店に入っていた。

……蛸は先ほどの鬱憤を晴らす為に少しばかり神父をいじめていたが。

ピートは唐巢神父の低姿勢に驚いていたが蛸の先ほどの動きと何より斉天大聖の直弟子という事実には納得していた。

「まあいいですけどね……で、ピート？今島の方はどうなっているの？」

「あ、はい！今はブラドールの魔力により人の目に付かないようにされていましたが先生のお蔭で今は普通の島になっています。ブラド

「も先生の封印結界で状態が停滞したので今の所静かなものです」  
「但し何時まで持つか分からない結界だけだね」  
「とりあえずローマ空港に着いたらクルーザー借りて島に行きましょ……何事も用心が必要だからね」  
「分かりました」

用心が過ぎるとは思ったが、未来の事を思い一般人を危険かもしれない所に連れて行くのは気が引けたので納得して貰った。

……同じ目に遭ったら馬鹿みたいだし。  
その後自己紹介も終わり（この時ピートがヴァンパイア-halfであることも明かした）機上の人となった頃、オカルト業界とある動きがあった。

今回の資格試験の際、露呈した六道家の精神的未熟さをGS協会が突き出したのだ。  
試験会場へ式神に搭乗したまま出向くなどの行動も咎められた。  
結果、世界GS本部は一つの指針を六道家に言い渡した。

……大きすぎる力を持つ者の義務として精神鍛錬を課すことを。  
これには六道婦人も乗り気であった……何せまさか此処まで脆いとは想像の埒外だったからだ。  
但し、誤算も一つあった。

対象が娘だけでなく自分も入っていたことだ。  
直ぐに抗議したが……少し驚かされて動転する様を晒してしまい逆らうことは不可能となった。  
こうして六道親子は修行へと入ることとなったのだが、場所が問題だった。

対象が対象であるだけに下手な場所だと誤魔化されてしまう可能性もある、かと言って協会で行うにも無理がある。  
そこに提案したのが百合子だった。

曰く、権力を持ちすぎたゆえの弊害ならその全く通用しない所で

鍛えればいいと。

「しかし百合子殿、その様な場所早々ありはしないのではないか？」

「会長様？取って置き場所が一つだけありますわ」

「ほう、それは一体？」

「神族の拠点の一つ、妙神山ですわ。そこで齊天大聖様に手伝って貰えれば完璧ですわ」

「……良いのかね？その様なご大層な所で行っても？」

「はい、あの方は人界を見守ることを使命の一つとしております。

ですから今回のことも快く引き受けてくれましたよ？（黒笑）」

「そ、そうか（汗）ではその様にいたしましょう」

こうして六道 冥子及び六道 冥那は妙神山入りを果たした……拘束期間は二年である。

今回の件で横島家の底力の一端を感じ取った協会幹部達は日本才力ルト業界の実権が移り行くのを確かに感じ取っていた。

ちなみに冥子の父親は特に処置は無く現在も六道系列の会社を運営している。

執事やメイドもそのまま六道家で働いているが、冥子付きのメイドであったフミは共に妙神山に入ろうとした所を引き止められ百合子の元で再教育を受けている……メイドなどが傍にいれば精神鍛錬になどならないからだ。

閑話休題 - - - - -

一方その頃蛸たちは無事ブラドール島へと辿り着いていた。

警戒した襲撃も無く現在はまだ日が頂点へと昇ったばかりである。

「ふむ、島の空気は清涼なものね。とても吸血鬼の住む島とは思えないほどだわ」

「島の住人達も無事なわけ。どうやら騒動が起きる前に辿り着けた

みたいね」

「蛭様、ブラドールの居城にご案内します。此方へどうぞ」

「ピート……神父もだけど、私のこと様付けなんてしないでよ。お願いだから（涙）」

「そんな！貴女様が小竜姫様すら上回る位階へと上られる方である以上対等な言動など出来ません！」

「そうです！半分とは言え吸血鬼である自分の事を何事も無く受け入れて下さっただけでもありがたいと言うのにタメ口など聞けません！」

「……………orz」

師弟揃つてのいい様に蛭は今度こそ膝を着いた。

もう何度目かは分からないが自分はこんな扱いを受けた訳ではないというのに……目の前で如何に蛭が素晴らしいかを説く神父たちを他所に、蛭は九琉に慰められていた。

何とか持ち直した蛭が案内されたのは崩れかけた古城の一室。

巨大な棺桶が鎮座する薄暗い部屋だった。

周りには封印結界が施され、棺桶にエネルギーが行き渡らない様にしてあった。

蛭は一瞬それを見て顔をしかめ、しかし昔の所業を思い返して溜め息をついた。

「神父、結界を解除してください。私が一度話し合ってみます」

「え？このまま完封しないのですか？」

「するにしてみせないにしても……意思の確認はするべきですからね、大丈夫へまはしませんよ」

「……分かりました」

「エミ姉さんと九琉は周囲に被害が出ないように呪術結界と封魔結界を古城周辺に施しておいてくれる？万が一を想定しておかないと

「いかないから」

「分かったわ」

「分かりました」

「ピートはこれを持っていて、私が合図したらブラドーに意識を集  
中して」

「これは？」

「文珠っていうアイテムよ」

「解除完了しました」

「ん、風行旋龍術、風精流魂！風よ、かの者に命の息吹を満たした  
まえ！目覚めよ、古の真祖よ！」

蚩は古城に漂っていた僅かなブラドーの残滓を風術によってかき集  
めると増幅し棺桶へと注ぎ込んだ！

見る見る間に増加していく闇の気配に神父たちは警戒を強めながら  
も此処までの力を容易く行使する蚩に感嘆していた。

やがて重々しく開かれる棺の蓋。

這いずる様に出てくる様は正におぞましさを感じさせるものだった。  
しかし蚩はジツとそれを見ながらも次の作業に入っていた。

「……余を起こすのは誰だ、我が目覚めの時はまだ先のはず」

「おはよう、ブラドー伯爵。早速で悪いけど、ちょっと聞きたい事  
があるのよ」

「何？」

「貴方、息子さんのピートを和解する気はないのかしら？それと世  
界征服なんて事起こさない様に改める気はない？」

「ふん、下らん。余は世界の王として君臨する為に生まれたのだぞ  
？何故それを止めねばならん」

「あら？それでは何故人との間に子を儲けたのかしら？世界の覇者  
たるなら下等と見下す人間と交わろう何て思わない筈よ？」

「ぬっ」

自分の言葉に言いよどむブラドーに蚩は一つの可能性を改めて感じ取った。

未来では復活したてで有耶無耶なまま支配秩序崩壊を持って封印したが蚩は少し疑問に思っていたのだ。

誇り在りし者であるなら妥協などせず自らの力を強める筈だ……人の考えなど星の数ほどあるから絶対とは言えないけど。

しかしブラドーは子を生している……同じ吸血鬼ではなく人間との間に。

過去二回の人間への強襲を果たしているブラドーが情無くして人と交わるだろうか？

第一ピートの事を息子などと呼ぶだろうか？

憶測にしか過ぎないし妄想と言われてもしょうがないが、蚩はそこが気になった。

ルシオラや玉藻との愛の記憶がある故に。

「それに何故ピートを息子と呼ぶのかしら？例え自らの血を引いていようが下等と見下している人の血を有する者を情を持って呼ぶ必要はないはずよ？」

「……………」

「……どうやら記憶が濁ってしまっている様ね？ならば私が呼び覚ましてあげるわ！ピート！」

「！何をする気だ？！」

「愛を知る者として貴方の目を覚まさせてあげるわ！我が力よ、かの者の記憶を解き放て！ 覚／醒　！そして誘え、かの者の記憶野へ！ 同／調　！」

『……………ッ！』

発動する二つの双文珠、ブラドーの記憶を完全に呼び覚ます　覚／醒　そしてその記憶へピートを誘う　同／調　。



文珠の光を受けたブラドールとピートはそれぞれ意識を無くした。

「蛭様、二人はどうなったのですか？」

「今頃ブラドールは中世の頃を完全に思い出している筈よ、ピートはその頃を客観的に見ることになるわ……私の読みが当たっているならブラドールは奥さんを愛していた筈なのよ」

「蛭様はそこに賭けた訳ですね？」

「ええ」

「では何故結界を？貴女様なら一瞬で無力化できるはず」

「……種族って言うのは結構厄介な垣根でね、例え自身が気にしなくてもどうにも成らない事もあるわけよ」

「？」

「血の衝動って奴よ、例えどれだけ精神が強靱になろうと逃れられない吸血鬼の宿命って奴ね」

「……では結界を張ったのは」

「ストレスは発散させないとね？」

唐巢は今度こそ心より感じ入った。

蛭の言い様にもだが、何処までも相手の立場に立った考え方に……自分は封じることしか考えていなかったから。

弱者を助ける事を信条としているが結局自分は表面しか理解していなかったのではないかと。

しかし唐巢のそんな思考は蛭によってまたもや覆された。

「神父が何を思ったかは知らないけど、自身がなせる事以上を望む事は傲慢以外の何物でもないわよ？私はこんなあり方だから人よりは少しだけ多く抱えることも出来るけど……それだって完璧ではありえないしね」

「……蛭様」

「全てを救うなんて神にでも出来ないこと……でも強い意志とそれ

をなす為の準備を怠らなければ例え魔に属する者でも救いをなす事ができるわ……ルシオラのようにね」

「……………ッ！……そうですね、正しくその通りです」

蛭がルシオラの名を出したことに驚愕してより一層唐巢は自身の有様を恥じた。

その時倒れこんでいた二人に動きがあった。

『……………ッ！』

「！……どうやら気付いたみたいね……どうなったかしらね？」

緩慢な動きで起き上がる二人。

ピートは目を赤くし涙を流していた。

ブラドーも涙を流していたが此方は何かを悔むように歯を食いしばり手を強く握り締めていた。

「……どうやら私の予想はそう外れていなかったようね……気分はどう？ブラドー」

「最悪だ、余はいつたい何をなしていたんだ？妻のエミリーにそれほど誓ったというの……！」

「血の宿命ゆえじゃないの？」

「……確かにそれもあるかも知れん、だがそんなもの誓いの前には塵芥だ！神聖な誓いの前に宿命など乗り越えてしかるべきだと言うの……！」

自身の有様に嘆き怒り暴走した魔力が辺りを蹂躪し始める！

唐巢はサツと構えるが、蛭がそれを制した。

結界を張り終え戻ってきた二人も蛭の様子を見て静観する事にした。

「それで？どうするの？自棄になって世界征服でもする？」

「そのような事できるものか……そのような事をすれば今度こそエミリーに申し訳がたたん！……しかしこの身に巢食う真祖の魔力と血は今の余では抑えきれぬもの」

「……いえ、そうでもないわよ？貴方がさっき言ったことが事実ならね？」

「？」

「まあ、見ていなさい！……辺りに満ちし慈愛の魂よ、我が呼びかけに応え顕われいでよ！汝の願い今此処に叶えん！！！」

螢から放たれた極光を受け一つの存在がおぼろげながらも顕現した。その者は儂くも美しい女性の幽霊だった。

「……ツ？！ま、まさか？エミリー？エミリーなのか？」

「?!か、母さん?!」

「愛を知らぬ者に愛を教えし偉大なる魂よ、我が力受け今一度この者たちに祝福を与えたまえ！！！」

更に螢より供給されたエネルギーによりエミリーの霊は約700年ぶりに言葉を発した。

『……あなた、お久しぶりです。元気でしたか？』

「あ、ああエミリー、余は……余はあ……ッ！」

『あらあら、もう子供ではないのですからそのような格好を晒しては息子のピートに笑われますよ？』

「ッ……そうだな、余とした事が情けなかった」

『ふふふ……？あら、貴方がピートね。大きくなつたわねえ！見違えたわよ？』

「か、母さん……！ぼく、ぼくはあ……！」

『貴方は貴方よ？辛い運命を背負わせたかもしれないけど、私は貴

方の事を愛していますよ……可愛い坊や』  
「……………アアッ！」

何故か触れる母の霊に縋り付き声にならない声を挙げて泣くピート。  
エミリーはそんな息子を優しく抱きしめ愛しそうに撫でていた。  
ブラドールはその正に聖母像のような光景に涙を枯らすことなく流していた。

「エミリー、すまない……余はお前にあれほど誓ったのにまた同じ過ちを繰り返しそうになった」

「……………あなた、こっちにいらして」

ブラドールは逆らうことなくエミリーの前へと近づいた。

エミリーはそんなブラドールを見詰めたかと思うと、ペチリ……とまるで撫でるようにその頬を叩いた。

大して力の籠っていないびんたとも言えない物だったが、ブラドールにはこれ以上無いほど効いた。

「貴方が今するべきことは何？後悔すること？反省すること？違うでしょう？愛する息子を導き、領地の民を安住の地に導くことこそが貴方のやるべきこと……そうでしょうか？」

「……………そうであったな、正しくそうであった」

「貴方が私を変わず愛してくれているのなら……お願い、誇り高き貴方でいて」

「ああ、余に最高の愛を教えてくださいましたお前の為にも！何より我らの愛の結晶たる愛しき子の為にも！余は誇り高き者在り続けることを今一度誓おう……！」

「ありがとう、あなた。……………いつまでも愛していますよ」

そういつてブラドールに接吻と抱擁を交わすと消えそうになるエミリー

一の靈魂。

しかしそこに蛭が待ったを掛けた。

「ちよーっとまったあー！エミリーさん、私こと蛭と私の盟友の手であれば貴女を反魂の術で生き返らせることも出来るんだけど……どう？」

『いいえ、蛭様。私は人間……そして既に死した者です。本来生きている者とは触れてはならぬ者、貴女様のご好意でこうして家族と再会できたことは非常に嬉しく思いますが生き返ることはよろしくありません』

「ふふ、貴女ならそういうでしょうね……なら、ブラドールの守護霊になるのはどう？満月の夜、ブラドールの魔力が最高に高まる一夜のみ触れ合える守護霊は？」

『……ツツ？！そ、そのような事が？』

「どう？私としてはこの人の事を見守っていて欲しいんだけど？」

「……エミリー」

『……分かりました。私自身からも御願います、蛭様』

「ふう、良かった。愛し合っている者同士がその機会があるというのにすれ違うなんてあって欲しくなかったからね」

安堵の溜め息をつく蛭。

そんな蛭にこれ以上無いほど感謝の念を送るブラドール家族。

そして唐巢たちはこの光景に人外との共存の可能性をはっきりと確信した。

蛭は少し考えるように唸ると天井を見上げていった。

「……んじゃ、結界の方よろしくねえ？お二方？」

唐巢たちはこの言葉に動こうとしたが蛭はそれを止めると次の動作に移った。

己の内にある全ての因子を全開にし練り上げ昇華し、眼前に極光を放つ力の珠を生み出した。

蚩はそれをエミリーの霊核に触れさすと言霊を唱え始めた。

「……………ッ。……………この上なき慈愛を持ちし靈魂よ、汝愛を求めしかの者の守護を担え！さすれば汝、かの者の力あふるる時その恩恵を受けよう！汝はかの者を、かの者は汝を愛し続ける限りその絆は永久に続くであろう！！我は汝らを祝福する！全てにおいて祝福する！！世界の理よ！我、太極天の遺志を継ぎし者の名において新たな繋がりを受けいれよっ！！！！」

発せられる巨大な力。

人の身どころか神すら超え得る過ぎたそれはエミリーとブラドールの間に確かな繋がりを創り、確かな物とした。

世界がエミリーの靈魂の居場所をブラドールの傍と認識したからだ。部屋に溢れる暖かな光が薄れていくとブラドールの傍にいたエミリーはこの上なくはつきりと存在していた……………守護霊として。そして、それをなした蚩はというと仰向けで倒れていた。

『蚩（様）！？』

驚いた周りの者が近づくと蚩は弱々しく呟いた。

「あ……………気張りすぎた。……………ブラドール？私が此処までお膳たてしてあげたんだから……………必ず御しなさいよ？自分の宿命如き」

「ああ！勿論だ！恩に着る！」

「でないとちよん切るからね？腐腐腐腐腐（黒笑）」

「き、肝に免じる！（怯）」

「あ、あなたがんばって！（怯）」

「……………（汗）しかし蚩様、何故お倒れに？貴女様ほどの霊力の持ち

主なら何とか回復も追いついた筈では？あと、さっきの結界云々は？」

「ん？あゝほら、さっきピートもエミリーさんも触れ合っていたでしょう？エミリーさんほどの残滓になっていたらドンだけ靈波を纏つても触れられなかったからね。供給していたのよ……それと結界云々は秘密」

実はさっきエミリーの靈魂にピートが触れたのは蛭が膨大な靈力を注ぎ込んでいたからだ。

普通そんな事をすれば直ぐに靈力が枯渇するのだが、そこは蛭だけあつてチャクラを全開にして耐えた。

最もその後に変更する靈力を消費したので流石に供給が追いつかず倒れたのだが。

「また、無茶をしたわけ。……気持ち分かるけど……ね」

「子と母親が触れ合えないほど悲しいことは無いですからねえ。素晴らしい心づくしです」

「私が好きで勝手にやったことだよ……そんな事より九琉？背中が痛いから抱きあげてえ」

「はい、畏まりました」

全くこの方は何処までも自分が褒められる事を良しとしないなあ、と思いつつも……くすつ、と微笑んで蛭を抱き上げる九琉。

エミはそんな恥ずかしがりやな妹を誇りに思うと同時に、これからはもっとその行動を見守っていないといけないわね……と、自身に誓った。

「エミ姉さん？悪いけど結界解いておいてくれる？無用になったから」

「分かったわ……今度から無茶する時は事前報告してね？」

「……気をつけませう」（ ; ）  
「……その間が気に入らないけど、まあいいわ」

下手な口笛を吹いてエミの睨みから目を逸らす蜚。

嘆息しつつも私如きがいつて聞くような子でもないかと諦めるエミ。  
その後結界も解除され、島の住民もブラドーが改心したことに心から喜んだ。

そしてこの事は世界GS本部にも知らされ、蜚の行為と結果を絶賛された。

これからはブラドー島も迫害の対象にならないように世界GS本部が率先して対処するようになるとの事だ……支部の協会はともかく総本山である世界GS本部の者達なら安心して任せられるだろう。

事が終わりブラドーはこれからエミリーと共に己を律する修行に入ることとなった。

その表情は喜びと決意に満ちており必ずやなし遂げるであろう事は想像に難くなかった。

ピートはそんな父親に触発されたのかこの後直ぐ神父の所に弟子入りする気になっていた。

しかし自身の抱える問題の大きさにそれを良しとしなかったのが神父だった。

そこで蜚が妙神山での精神鍛錬と横島家での百合子監修の下の勉強会を提案した。

母に会え、父とのすれ違いも無くなったとは言え……まだ未成熟な感が否めなかったからだ。

ピートは恐縮しながらも喜んで受け入れた。  
こうしてブラドー島の出来事は幕を閉じた。

少し時間は遡って……。

どことも知れない白で埋め尽くされた空間。



そこには二人の人物がいた。  
双方共に光り輝いておりその顔は拝見できない。  
二人の前にはブラドー島が映っておりそれを眺めていた。

『いやー、危なかったですねーもう少して横島さんの力が感知される所でしたよ』

『ほんまや、ぎりちょんやっただな。よこっちも突然伝えてくるから焦ったわ』

『しかし、本当に自身以外のことになると無茶をしますねあの方は』  
『全く、最もだからこそとも言えるけどな』

『……そろそろあっちの方も済ましておいた方がいいかもしれませんね』

『そやな、不確定事項はさっさと済ましておくに限るからな』

『では、ヒヤクメさん呼び戻しておきましょう。彼女にはしっかり働いてもらわなければ』

『大丈夫と違うか？なんやかんやで、よこっちの為になるなら張り切るやるし』

『そうですね、一応守りの護符を渡せば最悪の事態は免れるでしょうし』

『んじゃ、そういうことで』  
『ええ、また今度』

白い空間にいた二人はそういうと姿を消した。  
後に残るは静寂な空間のみ……世界は再び一つの転換を迎え入れようとしていた。

家に帰宅した蛭はピートの紹介をすると共に聞き間違いと思いたい情報を得た。

「……母さん？冗談だよな？」

「あら、本当の事よ？今も妙神山で精神鍛錬という名の苦行を課されているわよ？六道親子が」

「……なんで？」

「今回の件で世界GS本部の幹部に精神的未熟な部分が露呈したからね。十二神将なんていう大きな力や日本を代表する名家がそんな有様では許されないと事……ね」

「妙神山を紹介したのは母さんだよ？」

「ええ、あそこなら権力を揮うことや自分勝手な言い分を押し通してきた子にはいい薬になるでしょう？」

母親の言い分に納得しつつもこれからのことを思うと頭が痛くなる蛭であった。

とりあえず鬼道とピートを生贄にしようか？と考える蛭であったがその考えは取り消された。

「別に心配しなくても出会わないわよ？彼女達は老師様の作った空間の一つで苦行を受けているから」

「あ、そうなんだ。それならピートと鬼道を生贄にしなくてもすむわね」

『ちよつとおー?!蛭さまあ（はあ〜ん）?!』

傍でなんとなしに聞いていた二人が当然の反応をした。

ピートは六道のことは知らないが生贄と言っ言葉に反応して、鬼道は百合子の矯正により最早六道に括りは持つていないが好き好んで顔を合わせたくないという意味で叫んだ。

蛭はそんな二人に笑いながら謝りつつ今後の計画を話し合いを始めようとした。

……と、その時である。

「蛭様！犬塚さんが天狗の所に！」

「ッ？！分かった直ぐ行く！レポートよろしく！」

「はい！」

突如空間を渡ってきたヒヤクメの報告で中断となった。

蛭は周りの事など既に意識の外にしヒヤクメに？まりレポートしていった。

後に残されたのは突然の展開についていけない者とある程度聞いていて思い至った者だけが残されていた。

天狗の住処手前。

犬塚は走っていた。

娘のシ口の病を癒す為に必要な妙薬を手に入れるために。

しかし前方に突如光が生まれ二人の女性が現れた。

「？！何者！？」

「！ふう、間に合ったあ……！」

「そしてみたいですねえ」

「？何者だ？拙者に何か用でもあるのか？拙者は今急ぎの用があるのだが」

「シ口の病を癒す為に天狗の妙薬を手に入れるからでしょ？」

「な、なぜそれを？！」

身構える犬塚を他所に蛭はそれを気にせず淡々と話した。

「私には未来がある程度見えてね、貴方がこれから天狗と戦う事で薬は手に入るけど手傷を負うのが分かっていたから止めに来たのよ」

「……未来が？拙者が手傷を？しかし、例えそうでも拙者は行かねばならぬ！」

「薬なら何とでもなるわよ、それよりも貴方が手傷を負って貰うと

困る事になるから止めに来たの！」

「……分かり申した。事情を聞きましよう」

やっと聞く体制になった犬塚に蛭たちは安堵の溜め息を吐いた。

「実はね、これから約二年後時期はハッキリしないけどフェンリルが復活するのよ」

「な、なんですよー?! あ、あのフェンリルですかっ?!」

「ええ、八房によって人狼がなりうる事ができる魔獣。私が貴方を止めたのはこれに関係しています」

「（ゴクツ）……続けてください」

「フェンリルになるのは人切りとなった犬飼、貴方は今回の手傷が元で里を奴が抜ける時に殺されます」

「!!!?」

「私は未来においてシロの師匠をしていました。あの子は父の死を悲しみ仇を討つため超回復をしてまで挑みました」

「!!!?!?」

「結果は最終的には月の女神・アルテミスを召喚し憑依した者が倒しましたが……シロの心には深い傷が残りました」

「……なんて事だ、では拙者はどうすれば?」

「今犬飼を如何こうしても意味はありません。未だ事は成していませんし説得を聞くとも思えません」

「確かにあ奴は人間をトコトン見下しているで御座る。長老の言葉すら聞かないぐらいですからそれは確かでしょう」

「ですから貴方には犬飼が里を出る時この文珠を発動させた後、できるだけ弱体化させなさい。無論命を賭してはなりませんよ?」

「これは?」

「私に事の起こりを知らせるものです」

「犬飼はどうなるのですか?」

「……改心するのであればそれで良しとしますが、フェンリルにな

つたなれば……私が屠ります」

瞬間立ち上る力の波動。

それは一瞬であったが犬塚ははつきりと感じ取った。

そしてそれが目の前の少女の力の一端に過ぎない事も。

「……分かりました、従いましょう。何よりあの子にそんな暗い感情を持ってほしくありませんから」

「ありがとうございます。これが薬よ。この文珠を飲ませれば例えどんな症状でも治るから」

「忝い！……後一つだけお尋ねしてもよろしいか？」

「？何？」

「シロの師匠となったと言いますが何の師匠なのでしょう？」

蛭はそれを受けて、くすつと笑った。

そして今の自分が作り出せる最高の霊波刀を編み出した。

それは高密度にして光り輝く見事な物だった。

「おおっ！？な、なんと見事な霊波刀！拙者の物等及びもつかぬ！」

「あの子の真つ直ぐすぎる猪突猛進な所を直すのには苦労するみただけだね（苦笑）」

「……ありがとうございます！必ずや使命成し遂げて見せまする！」

「ええ、お願いね」

「はっ、では御免！」

待たせている娘の為踵を返し里へと帰っていく犬塚。

蛭はとりあえず安堵した。

「良かったですね、無事聞き届けて貰えて」

「ええ、まだ安心は出来ないけどね？」

「あと、どうでもいいことですけど……」

「？」

「すっかり上の者に対する喋り方でしたよねえ、犬塚さん」

「……………」

「蛭様も自然とそう接してしまいましたしい、貫禄が出てきましたねえ」

「……………orz」

ヒヤクメの言に膝を屈してしまう蛭であった。

### 第十三章 闇夜の孤独に愛の祝福を（後書き）

……家の蛍ちゃんはどうどん黒くというか女帝というか……一体何処に行くのでしょうか？

私にも判断が付きません（汗）

次回投稿日は7/16の7時です。

#### 第十四章 思いの在り方と願いの強さ（前書き）

少し文章というか言葉使いが可笑しいかもしれませんが……いつもの事かもしれないが（汗）

今回は（この作品的には）普段表に出ないキャラに焦点を当ててみました。

それではどうぞ。



## 第十四章 思いの在り方と願いの強さ

SIDE ピート

僕が横島家に居候する事になり、蛸様が犬塚さんにお問い合わせから一週間が経ちました。

ちなみに僕は横島家の世界での立ち位置や蛸様の立場的な話は聞いています。

僕は此処に着てからというものの多忙の日々を送っています……その一部を紹介しましょう。

朝5時に起床……軽く体を慣らした後、霊力と魔力を練り合わせる鍛錬をします。

6時になったら朝餉を食し（此処に着てからというものの毎日きちんと食べてます）百合子さんの授業（学校で習うような事を勉強します）

8時に妙神山で師匠陣による各鍛錬（主に体の動かし方から霊力などの練り方使い方など）

12時に昼餉を食し、各自で自主訓練や休憩など。

3時から各弟子たちに合わせた特殊訓練（僕はまだ決められてません）か百合子さんの授業。

7時に夕餉を食し、弟子同士で組み手や模擬戦をし最後に師匠VS弟子の何でもありの試合。

9時にお風呂に入り居間で皆と団欒の後、11時にはもう寝ます。

これは今現在の一日の予定で、現在15才のお弟子さんたちが高校に入学する時には自分も入るそうです……結構楽しみにしています。

現在、午後3時百合子さんの授業です。

この方は忙しいにも拘らず僕たちの授業の時は必ず居てくれるので頭が上がりません。

偶にどうしても用事で外す時は蛸様が見てくれます……アレほどの強さを持ちつつこれほどの深い知識とそれを伝授する教養があるとは凄まじいです。

今僕はオカルト事情について習っています。

将来オカルトGメンに入りたい旨を述べたら百合子さんも蛸様も微妙な顔を成されました。

理由を尋ねると逆に質問されました。

「ねえピート君？貴方は何を持ってして弱者の救済を掲げるのかな？確かにオカルトGメンは弱者……此処で当てはまるのは貧乏な人なんかね？……を救う為にあるけど、貴方はそういう人を救いたいのかな？」

「それは……」

「真に弱い者……立場が弱かったり見向きもされなかつたり、切り捨てられたり……人外であるピートならどう行動するのが最も自分の考えと合っているかなんて直ぐに分かると思うけどな？」

「僕に出来るのでしょうか？」

「そういう問いは自分自身で出す物よ？まあ、あえて言うなら……自分の全てをしつかり受け入れて許し愛し妥協しなかつたらひよつとすれば出来るかもしれないけど……ね？」

「理想と現実是对立する物よ？だからこそ尊いし中々叶わないの……今の世の中ピートの理想は尊いけど、口に出して言う事じゃないわ」

「……難しいですね」

「挫折を知らぬ者に栄光はないって言うけどね……挫折を知り慟哭を上げ乗り越えて理不尽に真っ向から対抗し全てをねじ伏せても、平穩は訪れない時もあるわ」

そう呟く蛸様は儂く今にも消えてしまいそうだった……百合子さんはそんな彼女を痛ましそうに見詰めている。

しかしそれも束の間、ハツとして気を取り直すと言った。

「でもね、だからこそ捻じ伏せてやるのよ！理不尽な事も、報われない事も、悲しみも、切なさも、何もかも！諦めず終末が眼前に迫っても足掻きその末路をへし折ってこそ……真に夢を成せるし、成したことになるのよ」

「……蛭様」

「……私はまだなせていないわ。自分を受け入れる事も、認める事も許すことも愛する事も……ねえ、ピート。貴方に出来る？理想を諦めずに持ち続ける事が？」

「……」

「私はなしてみせるわ……全てを振り絞って私の願いは絶対叶えてみせる。例え……どんな事をしてでも、世界に反しても！」

「蛭、貴女……まさか」

「……母さん、生きるって愛しい事よね？素晴らしい事よね？私はあの人たちにもっと感じて貰いたかった……もっと、もっと感じて貰いたい！例えそれがあの人たちにとって余計なお世話でも……ね。安心して最悪の方法だけは避けるわ、そんな親不孝な事出来ないもの」

涙を溢れさせながら語る蛭様は女神様などよりも余程美しく仏様などよりも余程尊かった。

この時、啞然とした表情で顔を真っ青にした百合子さんが蛭様を見詰めていた事を僕は終始気付かなかった。

その後、しんみりとした空気が漂ったが……急に我に返った蛭様が顔を真っ赤にし、手をわたわたしながら解散を告げた。

別れ際一言告げてから。

僕は自分の軽さを痛感した。

決してこの気持ちは嘘ではないが、覚悟が足らな過ぎた事は間違い

ない。

自分を認める事ができていない僕に他人を救う事なんて夢のまた夢だ。

だからと言って他人が引いたレールの上で成し遂げられるほど軽い思いを抱いたつもりもない。

結局僕は流されていただけなのかもしれない……神父に出会い、その思いに感銘を受け自分もそうありたいと思い……僕はこの思いを僕の思いとして昇華できるのだろうか？

……だが、此処で燻る気はない。

さつき別れ際に言われた言葉は正に僕にとって常に実践しなければならぬ事だからだ。

身を切り刻む後悔も押し掛かる反省も全ては為すべき事を為してから……大切な時は限られていて、為すべき事を履き違えたら駄目だよ？

正に至言だ……特に直ぐ悩んだり塞ぎ込んだりする僕には。

それに自分は長寿だからといってのんびりし過ぎていたのかもしれない。

……雪之丞たちは日に日に強くなっていく、目の前に絶対的に敵わない者が存在していようと。

……負けていられない！

中々実現しなかりうが、障害が大きかりうが……全てを乗り越えて見せる！

この死に難い体は自分の望みを叶えるにはもってこいなだから。

SIDE OUT

SIDE 鬼道

僕は今瞑想している……額どころか全身汗だくや。

まぶたの向こうでは夜叉丸が力を加減したメドーサ様と組み手をしている。

今の夜叉丸は意志を封印し僕が自分の霊力と式神との繋がりでのみ動かしているんや……お蔭で夜叉丸の体を感じる動きの流れだけでなく痛みも全て僕が負担する事になっている。

もつともこうする事でより夜叉丸の事がより分かり夜叉丸にもっと自由度を持たせられる。

そうなれば夜叉丸の位階が上がり強力になる。

……今まで復讐やなんやと喋ってつき合わせてきた夜叉丸への謝罪を籠めて僕は全力で取り組んでいる。

「ほらほら！動きが鈍ってきてるよ？！その程度で本物になれるきかい？！もつと魂絞りな！！」

「ぐっ？！」

夜叉丸に介入している僕の意味が揺らいだからか動きが粗雑になつてきよつた。

慌てて態勢を整えようとするもメドーサ様は手を緩めず一気にのしに掛かる！

僕はそれにあえて逆らわず受けると回天し力の勢いを横へとずらす！それに態勢を崩されたメドーサ様の背後から動きを阻害する霊波を浴びせた！

「……………ツ！ハアツ！」

「フツ！甘いよツ！」

しかしメドーサ様は背中に霊波の盾を覆うと僕の攻撃を……跳ね返

した!?  
避ける暇もなく直撃を受けた僕はそのまま昏倒した。

僕が目を覚ましたのは風呂場だった……正確には覚まさせられたのは、だが。

メドーサ様によって湯船に投げ込まれたのだ。

「?!ツゲホツ!ブツ!……!……ツ!カハツ!……!はあゝはあゝ?」

「目が覚めたかい?もう直ぐ夕餉の時間だから早く体洗って出てきなよ?」

「メ、メドーサ様?いきなり何をっ」

「じゃあね?」

さっさと出て行ったメドーサ様に何か言う事もできず僕は悶々とした。

その後夕餉を取りメドーサ様に先ほどの技の事を聞いた。

「なんだい?……ああ、反障壁の事かい」

「反障壁でっか?」

「そうだよ、別に難しい物じゃないさね。試合の前にも言ったとおりあんたでも出来る事しかしない決まりだったからね」

「僕にも出来るんでっか?!」

「さっきも言ったけど簡単な物だよ。様は靈気の盾をレンズ状にして相手の技に翳すだけさ」

「で、でもさっき背中から……」

「そりゃ、出せるように訓練するだけさね。技自体は出来るんだ。

出す箇所なんて自分で括りを決め付けなきゃ出来るさ」

「括り……」

「靈力を手からしか出せないとか足から出したら駄目とかそんな決

「まり事あるわけないだろ？」

「そういつて先ほどと同じように背中から出したり頭の天辺に出したりした。」

「あんたが本当に本物になりたいならこの程度の括りに嵌っている暇なんてないよ？」

本物……そうや、僕は本物になるんや。

もう僕は父さんの操り人形でもないし、冥子はんと争いたいとも思  
うとらん。

でもまだ自分という物を確立できとらんへん。

どういう者になりたいかも決められとらん。

……こんな漠然とした思いじゃあ駄目なんやろうか？

「……ふう、あんたは夜叉丸と共に新生すると言ったね。ならそう  
やって一人で蹲っているのは正しい事なのかい？」

「ッ?!……夜叉丸、そうや。そうやった。思いの片翼を置き去り  
にしとつたら駄目やね……飛べる筈ないわな。ごめんな、夜叉丸」

『ヴヴ……ヴウ、ヴー』

傍におつた夜叉丸に謝ると、僕の手を取って握ってきた。

握手……やるか？

「くくく、式神の方がよっぽど確りしてるじゃないかい。そんな事  
じゃあその内主従逆転するよ？」

『ヴウ!』

「おおこわ!くくく……確りするんだね、自分を持つって事は容易  
い事じゃないよ?」

メドーサ様は威嚇する夜叉丸を面白そうに見詰めると僕に忠告を残して去っていった。

夜叉丸は僕の手を変わず握っている……優しく包み込む様に。

「とにかく、夜叉丸……これから一心同体で頑張ろうな？揺らぎやすい主やけど、かんにんな」

『グ……グウ……ン』

「夜叉丸？」

「……思いは揺らぐ物だよ、鬼道？夜叉丸はそれが分かっているから困っているんだよ」

「蛭はん！」

『グイグイ！』

「よしよし……揺らがない思いは確かに強いよ？でもね、固められた意思ほど脆くはないわ。揺らぐ事を受け入れいつかその揺らぎを束ねて全てを包み込む意志にすればいいと思うわよ？」

「……そんな大層な事、僕に出来るやろうか？」

「……………」

「蛭はん？」

何か苦虫を噛み締めたような顔をする蛭はん……僕なんか悪いこと言ったやろうか？

蛭はんは深く溜め息を吐くと夜叉丸に話しかけた。

「夜叉丸？貴方の主様は随分忘れっぽいようね？」

『グ……ン』

「夜叉丸もそう思うわよねえ」

『グイ』

な、なんか二人してえらい言われようしてはるみたいや……って言うか蛭はん完全に夜叉丸の言う事理解してはる？



「蛍はんは夜叉丸の言う事分かるんでつか？」

「ん〜？何となくだけどね〜……それで？貴方の言う事はそれだけ？」

「え……つと、さつきのは一体どついう意味でつか？」

「……はあ〜」

『……グイ〜』

「ちょ、二人してその反応ひどくない?!」

夜叉丸つ！何、肩竦めてるねん！

「貴方ね〜、さつき自分で何を改めていたの？貴方の今の言動は大  
事な片翼を蔑ろにするものよ？」

「?!夜叉丸を？」

『グイ〜グウ!』

「夜叉丸……僕は」

「貴方は決して一人で歩んでいるわけでもなければ一人で飛べるわけでもない。夜叉丸がいて夜叉丸の思いを重ねるから貴方は貴方で  
いられるんでしょ？」

そや、ついさつき一心同体で頑張ろうなって言ったところや。

「幼い時から支えあつてきた相棒を頼らないのはどつかと思つわよ  
？頼りすぎも駄目だけどね」

そや、僕の全ては夜叉丸とあつた。

辛い時も悲しい時も何もかも嫌になつた時も。

……思いが揺らぐ？

そんな事今まで何度でもあつたやないか！

その度に夜叉丸が支えてくれてたんやないかつ！

僕は今まで一体夜叉丸の何を見てきたんやっ?!  
それでもお前は夜叉丸の主のつもりかっ?!?!

「夜叉丸っ！御免っ！御免なあ！！」

『グイグイ』

「僕は今までお前の事ちゃんとみとらんかった！何度も助けてくれ  
とったのにつ！」

『グイー』

「支えてくれとった相棒の事なんもわかつとらんだっ！」

『グイーヴウー』

「……改めてお願いや、これからも一緒に歩んでいこう……相棒」  
『グイグイ!!』

夜叉丸が嬉しそうに飛び跳ねる。

僕の、いや僕たちの新しい一歩はこれからや！

「……でも、それも程度によるわよねえ？」

「?どういう意味でっか?って、夜叉丸？」

「夜叉丸もあんまり暑苦しいのも嫌よね〜」

『グイ〜』

夜叉丸を呼び寄せて同じ目線で語る蛭はんに同意するように何度も  
頷く夜叉丸。

つて、夜叉丸う〜それはないやろ〜（涙）

「さて、向こうでふれあい動物王国が放送されているから一緒に見  
ましょ」

『グイグイ』

そういつて蛭はんと夜叉丸は食堂を出て行った……って、カムバア

ツーク相棒う?! (滝涙)

何故か薄暗い食堂で俯いていた僕は一つの考えに思い至る。

……ふふふ、そうか本当に乗り越えるべき壁は蛭はんやったわけやね?

「僕は負けへんぞおー?! (涙)」

打倒蛭はんを誓った僕は愛しき相棒である夜叉丸を取り戻す為に急ぎ後を追った。

S I D E O U T

S I D E 蛭

ピートにしる鬼道にしる、本当に困ったもんよね……もうちよつと柔軟になればいいのに。

ちなみに夜叉丸は直ぐ外に待機させて分かれたわよ?

あの子が本気で鬼道から離れる訳ないじゃない。

今私は妙神山最奥の神殿に向かっている。

そろそろ玉藻成分を補給しないと枯渴しちゃうから……割と本気で

す。

……なんか最近電波をよく拾うわね? 疲れているのかしら?

神殿前、此処にはいつも修行場で召喚される者たちが門番として鎮座している。

中には剛練武や禍刀羅守もいる……此処にいるのは本体であり修行場で出るものより強力である。

此処を潜るにはこれら全てを服従する必要があるそれはあの小竜姫でさえ容易ではない。

……だからこそ、未来世界で小竜姫が禍刀羅守に舐められていたのだ。

そしてそれ故に私は驚いている、玉藻が既に此処を突破できたという事に。

ちなみに自分は通過できるわよ？

「珠斗羅<sup>たつら</sup>主止？玉藻は今も中にいるの？」

私は此処の門番の頭である竜戦士ストラストに玉藻の所在を尋ねた。

『はい、現在180時間経過しています。私共は出られるように言っただのですが』

「約8日か……いいわ、倒れたら連絡頂戴。それまでは玉藻の好きにさせてあげて」

『宜しいのですか？現在既にかなり消耗されていますが』

「いいわ、玉藻が決めた事なら遣り遂げるまでは好きにさせるわ。

責任は私が持つから老師が来ても止めさせないようにね？」

『ろ、老師様の行動を止める事は……』

「私の名を言えばいいわ。それでも止まらないなら……まあしょうがないわ」

『分かりました、ではそのように』

「うん、お願いね……玉藻成分はお預けかあ」

私はその場を離れると修行を再開する為に超重力圧縮空間に足を踏み入れた。

S I D E O U T

S I D E 齊天大聖

「……蛍の奴にも困ったものなのう」

『ろ、老師様。どうなされましたか？』

「ぶ、気にせずとも中には入らんよ。蛍が止めるように言ったんじ

やる？」

『は、はい』

「なれば止めんよ……二人とも無茶しよるもんじゃ。……いや、わしらが愚か過ぎるゆえか」

未来の記憶、感情、それらは蛭にとんでもない決意をさせたもんじやな。

……百合子殿から知らされた蛭の決意。  
まず間違いなく蛭は……。

「それ自体は良い、蛭の言うように例えそれが世界の理に反していようと成せるのであればわしも嬉しい事じゃ」

そう蛭の思いはわしにとっても同様の事じゃ。

それは世界の理なぞとは比べ物にならんほどの。

「しかし……しかしじゃ、それを成す為にお主自身が犠牲になるというのなら……何を持っても止めるぞ？絶対にじゃっ！」

その様な事、決して見過ごせん事じゃ。

……どうか、思い過ごしであるように。

「ふ、神族であるわしが祈る……か。世も末じゃの」

じゃが、本当に思い過ごしであって欲しいものじゃ……もう犠牲は十分じゃ。

願わくば、蛭に最高の加護がありますように。

SIDE OUT

蚩が修行空間に入った頃、神族の調査官であるヒヤクメは最高指導者に招集されていた。

ヒヤクメは目の前の途轍もない波動に竦み上がっていた。

「良く来てくれました。貴女にはそろそろ平安京に飛んでもらおうと判断しましてね」

「時間移動の防壁を張った影響かどうか知らんけど、ハーピーが美神 令子を狙ったんや」

「？確かハーピーはあの女が一度封印したのでは？」

「いやな、どうも本来の時間軸の時とは違って封印の効力が弱かったみたいなんや。お蔭で開封したハーピーは既に娘の方に当たりをつけて襲撃かましたんや」

「……では？」

「はい、貴女には魔族の行動を察知したと言ってその原因を調べる事を理由に過去へ飛んで貰います」

「既にハーピーは美神 令子と唐巢神父によって撃退されておるから安生やってや」

そういつてヒヤクメの前に一枚の札と金色の文珠が十個現れる。

「その札は最高結界符です。貼り付けておけば周囲一メートルにいる者は決して傷つきません……攻撃も出来ませんけどね？」

「その文珠はわいらの力を注いだ特別製や。死者蘇生なんかは出来んけど時間移動の足しには十分やろ。残ったらハヌマンに渡してんか」

「分かりました！必ずやこの使命成し遂げて見せます！！」

「ええ、頼みましたよ。ああ、それからアシユタロスは未来と同じぐらい飛ばすに留めてくださいね？」

「余計な要素は作りたくないからな」

「はっ！」

ヒヤクメに震えは既はない。

やっと自分の成すべき使命の時が来たのだ。神族の窓際調査官としての怠惰な暮らしを一新してくれた蛭様の為になることができるのだ。

救世の御人であり最高神さえ凌駕する偉業を果たした太極天様の意思と力を継ぎし蛭様の御力になれるのだ！

この大して力もない私が！！

「絶対、成し遂げて見せるのね！ヒヤクメの名に掛けて！」

ヒヤクメの意思は今までになく研ぎ澄まされていた。

SIDE タイガー

わっしは今妙神山の隔離された一室でとある者と対峙しとる。

わっしは資格試験でのみんなあり方とピートさんや鬼道さんの奮起を見て奮い立った。

自分も自分の手で何かを成し遂げたいと！

……無論、蛭さんや百合子さんに教えられた事は自分なりに理解しとる。

自分の歩む速度で頑張り、焦らず一つずつ自分の物にしていくつちゆう事を。

それにどうもわっしはこがあな体躯じゃにも拘らず荒っぱい事が苦手なようじゃ。

ほいでそりゃあ蛭さんも感じとったようじゃ。

同時に人それぞれじゃけえ体の大きさ云々で決め付けるんは善くないあつきりゆわれましたんじゃ。

それを受けてわっしは自分の気性にあつたもんを見つけるんが一番だと感じ入った物じゃ。

じゃけえわっしはまず自分に出来る事を検討してみた。  
自分に出来る事……そりゃあ精神感応能力。

こりゃあ相手に幻覚を見せたり意思の共有化が出来る。  
あと、半虎人化をする事でより強力な精神感応能力を揮えるが……  
ただし、これにゃあ制限時間があるんじや。

「わっしにゃあ荒事は向いとらん……加えて精神が不安定。能力は  
幻覚やテレパシー……最初にすべき事は暴走体質を何とかする事」

ここまで考えて一つん職種を考え付いた。

じゃがその為にゃあ精神をもっと成熟させてもっと見聞を広める必  
要性があるんじや。

……最もそれ以上に今のわっしにゃあ似つかわしゆうない職業なん  
じゃがのお。

「それでも！きょうびは百合子さんのお蔭様で知識量もそれを生か  
す術も思考速度も増強されてきた！後はそれを支える精神を鍛える  
だけ……なりゃあ！」

そう決意し、わっしはとある術を掛けてもろおた上でこの周りから  
隔絶された空間に入った。

とある術……対象の内面をさらけ出し対面させる術。

これを掛ける時、蛍さんや老師様に危険とゆわれました……止めと  
けとも。

……でもこの修行にゃあ甘えも逃げ口もあっちゃあならんから、わ  
っしは押し通った！

それからわっしは三日間昼夜問わず飲まず食わずで自身と対面した  
んじや。



わやななあ自覚しとる。

勇氣と蛮勇が違つのも知つとる。

自分の歩む速度でないのも承知してますけえの。

焦つとらんだあゆい切れん。

じゃが！それを押してでも成し遂げたいとわっしは思ったんじゃ！！  
心の底からっ！！

目の前のわっしと同じ顔をした自分がわっしに言葉を投げかける。  
もう何度目か判らん問答じゃ。

じゃが、何度だつちやってみせる……自分で決めた事じゃけえ！

「わりやあ女と見ると直ぐ暴走するクソ野郎じゃ、たいがい田舎に  
帰つて隠匿しろよ？」

「確かにわっしは碌でもないもんを抱えとる。でも必ず御してみせ  
る！」

「無理無理！われ如きにあの衝動が押さえられる筈なかる？」

「無理じゃない！例えどれだけ困難でも成し遂げて見せる！」

「はあ、判らん奴だの。わりやあセクハラの虎なんだぞ？人が猛  
獣の猛りを鎮められる訳あるまい」

「人いやあ猛獣使いもいる、わっしは必ずこの獣を飼いならして幸  
せを掴み取るんだ！」

「われ如きにやあ「うるさいっ！！如きとゆうな！！」むっ」

「わっしはわっしだ！他の何者でもない……タイガー・寅吉として  
成り立つてみせるっ！！！」

「　　ッ！ぐっ、出来るかの？われに？」

「出来るかどうかじゃあない！遣り遂げるんだ！」

「　　ッ！？チッ！ならやってみるんじゃ  
のお……精々泣き喚いて無様にならんことじゃ」

「泣き喚くし無様に地べたにも這い蹲る時もあるさ。でも、最後に  
やあ立ち上がって見せる！！！」

「ッ？！！」  
「ほいで自分の手で作り上げた幸せを謳歌してみせる！！それがわっしのありったけの思いだっ！！！」

わっしの目の前におった幻影はわっしのおらびと共に消え去った。  
でも分かる決して居なくなった訳じゃあないっちゆう事を。  
アレは心の弱さや醜さが産むもんじゃけえ。  
じゃけえこれからも自分の思いを忘れず精進していかんやあ！  
そっ心に刻んだ時、わっしは気を失って倒れた。  
もっぺん、誓いを口にしながら。

S I D E O U T

「……見事自身の闇を捻じ伏せたか。……ふ、どいつもこいつも無茶をするわい。わしももう年じゃな」

老師は隔離空間のタイガーが試練を成し遂げた事に気付き迎えに来た。  
そこにはこれまでにない成し遂げたという満足感漂う笑みを浮かべて気絶する彼がいた。

「本当に人間は面白い……こやつはどういう人生を歩むんじやろうなあ」

老師は空間を解きタイガーと共に居間へと転移すると美衣に食事の用意を頼みその場を後にした。

S I D E 黒崎

私は家族の団欒を取る為にご実家へと帰られた大樹様の後を継ぎ美神 美智恵の監視を勤めていた。

最近はその者ももっぱら資料集めに勤しんでいるようで何処かへと姿を晦ます事は少なくなっていた。

……決して油断は出来ないが。

資格試験の後、あの者が接触していた者の詳細を掴み別方向から圧力を掛ける為に奔走していたが芳しくないのが現状だ。

軍や政府の膿は未だ健在で百合子様も苛立っている。

あの方は子供たちの教育から世界情勢の改革まで幅広く受け持っておられるから当然の事かもしれないが。

最近百合子様につき従っている元六道家のメイドのフミがその多忙でありながらも的確な行動とその見事さに大きく口を開けながらひどく感銘を受けていたのが笑えた。

余程六道家では見られないものだったのだろう……もつと後ろ暗い事や強引な手引きなら見慣れているだろうが……な。

さて、今日もかなりの情報があの者の手元に流れていた……無論、横島家の情報は一部を除いてシャットアウトしているが。

「引継ぎも終了したし邸宅へと帰るとしよう」

最近はお嬢様のお料理がお出にならないので少し舌が寂しいですね。

幼い頃から百合子様の後についてお料理をされていてよく実験台にされたものですが。

お蔭で私の舌はすっかりお嬢様の味付けに馴染んでしまいました。大樹様の話では今日から再び修行に専念するとの事……なんでも超重力が働いている空間でご自身の肉体を苛めているとか。

……あまりご無理をされていないといいのですが。

「私が言ったところで止まるような方でもないですね……精々、今度お会いした時にお料理を強請って少しでも普通の空気で過ごされるようにするぐらいですね」

少し前にも蛍お嬢様のお料理を最近食べてませんね……と零したら、苦笑しながらも御作りになられましたから大丈夫でしょう。

邸宅に着き食事を済ませると大樹様に今日の報告をしにいきました。どうやら今日は百合子様もおられるようだ。

「大樹様、百合子様本日の詳細を報告に来ました」

「ああ、黒崎君か。入ってくれたまえ……フミさんお茶を」  
「かしこまりました」

執務室に入ると百合子様と顔を着き合わせてなにやら難しげなお顔をされていた……はて？

「？どうかされましたか？」

「ん？ああ、蛍の事でちよつとな。……どうやらあいつの思いは我々などとは遥かに次元の違ったものだったらしい。判っていた事だかな」

「蛍お嬢様の思いですか？」

「うむ、今日ピート君の将来の事について話し合っている時にあいつが零した事なんだがね……、正直それだけはなして欲しくないと思っただよ」

「当たり前でしょう？！何故そこまでの事をあの子がしなければならぬのっ？！」

「怒鳴るな。俺だって思いは同じだよ……あいつが己の死を賭しても成そうとする事を見過ごす気などないさ」

……？

蛍お嬢様の死？

「

ッ？！……どういっことですかっ！

な、何故蛭お嬢様がっ?!」

「……………あの子は言ったのよ、生きるって愛しい事よね?素晴らし  
い事よね?私はあの人たちにもっと感じて貰いたかった……………もっと、  
もっと感じて貰いたい!例えそれがあの人たちにとって余計なお世  
話でも……………ね とね。このあの人たちというのは間違いなく未来の  
太極天たる忠夫とルシオラさんのことよ」

「……………未来の太極天たる忠夫様とルシオラ様、ですか?」

そのお二方の事は聞いている。

世界を救い最後の時まで世に尽くし散っていった方達の事だ。

その事を聞いた時は深い感銘を受けたものだった。

「そして言葉の言いようから解る事……………恐らくあの子は事態が終結  
した際、その二人を己の命を持って復活させる気よ……………否定はして  
いたけど、可能性が無いわけではないわ」

「……………ッ?!」

……………ありえる、あの御自身の事をまるで顧みない蛭お嬢様なら。  
なんて事だ、その様な事決して認められない!

確かにお二方はとても尊い方たちだ、その再降臨はとても喜ばしい  
事だろう。

しかしその代償が蛭お嬢様のお命なれば絶対成されてはならないこ  
とだ。

お二方もその様な事お望みにならないはずだ。

「勿論私たちは阻止するわよ?老師様にも連絡済だしね……………例え嫌  
われても憎まれてもその様な事絶対させないわ」

「……………百合子様、不肖この黒崎も御手伝いさせて貰います」

「ええ、お願いね?あの子はあの子にもっと生きてもらいたい  
みたいけど……………それは私たちが蛭にもっと生きてもらいたいのと同

じなんだからね」

正しくそのとおりだ！

…… 蛭お嬢様、私の最も敬愛する貴女様の思いを踏み躪るのは不遜な事ですが、貴女様の損失は絶対阻止させて貰いますからね？  
御覚悟を！

S I D E O U T

こうしていくつもの思いが奏でられる中、時は過ぎ横島 蛭の16  
才の誕生日が訪れた。  
運命の時まであと少し。

## 第十四章 思いの在り方と願いの強さ（後書き）

……なんかどんどん自分の首を絞めてしまうような設定が増えていく（；；、）

だが諦めてなるものかっ！絶対完結させてみせるう！ ￥（）

……と叫んだところで今回はお開きにさせてもらいます。

次回は7/19の7時です。

## 第十五章　魂の叫びと決断する者たち（前書き）

陰念って名字ありませんでしたよね？

それはともかく今回は中々難産でした……それではどうぞ。



## 第十五章 魂の叫びと決断する者たち

SIDE アシユタロス

暗い空間の中浮かび上がる幾多の卵たち。

それを横目で見つっつ私は配下の土偶羅に現状報告を聞いた。

「土偶羅よ、人界の掌握はどうなっている。メドーサは上手くやれているか？」

「は、少し前に拠点となる寺子を手に入れたと報告がありました。そしてつい先日次のGS資格試験に行動を起こすとの連絡が入りました……どうも部下の育成に手間取っているようです。以後連絡はありません」

「ふむ、まあ人間を操り動かすにはそれなりに手間が掛かるからな。ただし資格試験とやらで成果が出なければ後続に権限を移すと伝えて置け。失敗は許さん！」

「ははっ！」

去っていく土偶羅から視線を外し再び卵達を見詰める。

1000年ほど昔、メフィストの転生体と神族の調査官によって500年ほど時間移動させられた結果作り出す事を決定したものだ。

あの時は煮え湯を飲まされたが今度はそうはいかん！

魔体の方は未完成だが……例の物さえ手に戻れば万事は上手くいく。あの装置さえ起動できればっ！

「此方の準備が整うまであと少し……ようやくだ」

一つの卵を光に翳し見詰める。

世界は美しい。

だがそこに住まう者たちは腐りきっている。

確かに進化し多種多様に富む生物達は大変貴重だ。  
だがその霊長類の長たる人類は欲望に溺れ罪に浸りきっている。  
そして神魔の最高指導者たちはそんな腐った人類の世界を護るため  
にデタントを推し進めている。  
その結果私レベルの魔族は死ねないだけでなく永遠の悪役を押し付  
けられる事になる。

-----ふざけるなっ!!!!

私は認めない……こんな茶番劇認めてたまるかっ!？。

例え世界が認めなくとも必ずや抜け出してみせる……この【魂の牢  
獄】からッ!!!!!!

例え……全てを踏みにじってでも……。

S I D E O U T

S I D E 陰念

明日から私たちは学校へと通う事となる。

……白龍寺にいた頃には考えられなかった事だ。

最もそれ以上に自分の変わりようの方が怪奇だが。

なお、それに伴い私にも姓が与えられた。

幼少の頃親に捨てられそれ以後姓を失っていた故に。

無論、白龍寺の和尚も自身の養子になるかと言ってくれた時もあったが……唯でさえ厄介になっている故に遠慮していた。

最初は蛭様が横島でいいんじゃない?などと仰ったが勿論却下させてもらった。

九琉は押し通されてしまったようだが、自分には過ぎた姓だ。

それで改めて考えて付けられたのが以下になる。

「陽導ひでひび 陰念いんねん」

太陽の導きの元、日陰にて祈る者……という意味だそうだ。  
姓に陰の対義語を入れる事で名を善い意味にして貰えた。

蛸様は適当に漢字をくっ付けただけと仰っていたが、私にとっては  
何よりの褒美だった。

なにより蛸様（陽）の導きの元、とも取れるのが良い。

私は雪之丞と共に鞆に授業道具を入れていく。  
既に使い慣れた道具は親しみが籠ったものだ。

「百合子様には感謝だな……まず授業にはついていける」

「羨ましいぜ、陰念。俺はどうも勉強が苦手だなあ」

「お前のは単に集中できただけだろう？百合子様もそう言っていた  
ぞ？」

「どうにも……な。まあ、折角の機会だ……学園生活を楽しむさ」  
同年代の他人との触れ合いがどういう物かは、実を言うとよく分か  
らないのが本音だ。

横島家でタイガーやおキ又さん（後同年代ではないがピート）と過  
ごす分には楽しいと感じるが、私ははっきり言って馴染めるだろ  
うか？

一度悩みだすと際限なく不安が押しよせてくる。

……こういう時雪之丞の性格が羨ましくなる。

鼻歌まじりに用意を進めていく雪之丞を見て溜め息を吐いた。

その時私の肩を誰かが叩いた。

「何黄昏ているの、陰念？」

「随分陰気がこもっていたわよ？」

振り向けばそこには蛸様と玉藻様がいらっしやった。

……何故か蛭様が玉藻様をおんぶしていたが。

「いえ……明日から学校に行くわけですが、自分が馴染めるかと考えるかどうかにも不安で」

「あゝ、確かにね。幼少から修行に明け暮れて付き合いもほぼ限定されていたからね」

「大丈夫じゃない？自分を偽らず素直に接すれば問題ないと思うけど」

「できるでしょうか？」

見上げる私を数瞬見詰めた後、蛭様は瞳を閉じながらある言葉を発した。

「……自分は自分にしかなれず、偽りは自身を歪め大言は自身を追い詰める……常に自然体であれ」

「それって確か？」

「主の信条の一つだな」

「心眼、久しぶりね」

「うむ、主が無茶する物だから必死に内側からフォローしておったものでな？」

「……うっ（汗）」

蛭様たちの会話を他所に私は先ほどの言葉を反芻していた。

……自然体……か。

確かにそのとおりだ……ようは普段と同じようにしていればいけないんだな。

もしそれで文句を言う者が居たとしても取り合わなければいいだけのこと。

……たったそれだけの事なんだな。

「蛭様、お言葉ありがとうございます。普段どおりに学友と接してみます」

「……うん、それでいいと思うよ？ 貴方は貴方。他の誰にも真似出来ない貴方だけの良さがいつかきつと見つかる筈よ」

「はい！……あの、所で何故そのような格好で？ 玉藻様どこか具合が？」

一段落した所で気になっていたことを訪ねると玉藻様が微妙な顔をされた。

「……この子が玉藻成分が無くなったあゝ、補給させてえゝって言うて離してくれないのよ（呆）」

「だって随分会えなかつたしいゝ」

「という訳で別に体調が悪い訳ではないから……心配掛けてごめんね？」

「あ、いえ……そういう訳だったんですか。そういえば蛭様、私たちが学校行くわけですが何か気をつけることはありますか？」

自身の肩口に流れている玉藻様の御髪に顔を寄せていた蛭様に尋ねた。

蛭様が学校に来られない以上学校で起こった事に第一に対処をするのは自分達だ。

蛭様は純粹に私たちに学歴を与えたくて今回の件を手配して下さった事は紛れもない事実だろう。

だが、何かをしてもらいたかつた事も事実のはず。

そしてそれは自分達で対処できる事であるはず……である以上より上手く対処できるように聞いておきたい。

「んゝ、最初の一年は特に何かあるわけじゃないんだけどね。というかバレバレ？」

「いえ、勿論蛭様がたのお心遣いの方も理解しております。ですが自身が前面に出て対処する以上詳細は知っておきたいですから」  
「……………だつて？」

蛭様はそつぽを向いて照れ隠しに一つ咳をつくとか何かを思い出すように半眼になった。

ブツブツと呟く蛭様の姿に玉藻様は溜め息をつきながらも少し待ってあげてねと御願いされた。  
そして少しした後……………。

「……………時系列の入れ替わりなんて早々起きないと思うけど、とりあえず気をつけるべきことは一つ。机妖怪の愛子っていう子だけよ」  
「机妖怪ですか？」

「ええ、己の中に異空間を持っている子でね……………青春が口癖の優等生な少女よ。悪い子ではないんだけどね」

「……………異空間を持っているということは、飲み込まれるという事ですか？」

「そう、あとね……………中に居続けると次第に洗脳されて外世界のことを思い出せないようになるのよ」

「うわあ、結構えげつなくない？」

「では早期にその空間から出る必要性がありますね……………」

「ええ、中には囚われている昔の人たちや愛子自身が学園生活を演じているわ。だから一刻も早く愛子を見つけ出し偽りの学園などよりも有意義な物がある事を悟らせる必要があるわ」

「……………それはつまり簡単にその行いを否定すればいい訳ではないということがあるか。」

「確かにその様な事をすれば自棄になって暴走する可能性がある……………ふっ、私がこのような考え方をするとはいな。」

「判りました、無理せず相手の立場に立ち対処します！」

「！ふふ、ええよろしくね？……でももし飲み込まれずに押さえる事が出来たら私か事務所の人を呼ぶようにね？」

「はい、他所ではなく蛭様関係の方ですね？」

「ええ、他所を呼ぶようにすると学校側が依頼料云々で渋るだろうしね……規約が改定されてもああいう所の考えは早々変わらないだろうから」

「なるほどねえ、確かに」

「後事務所の皆にも言っておくけど、もし学校側が愛子を受け入れなくても貴方達は味方についてあげてね……あの子は寂しがりやだから」

「はい、勿論です」

私の返答に蛭様は安心したように穏やかな雰囲気に戻った。

「あとは……あゝ炎の狐の事件があったわね。……って、あれってあの者が係わる可能性があるのよねえ。どうしようか？」

「あの者って……あああれね。それで、どつという事件なの？狐って？」

「学校に居たらいきなり魔法の箒が飛び込んできて拉致される事件……最終的にそのまま音速の壁にぶつかって箒は破損。炎の狐って言うのは箒の名前ね」

『……………』

何ですかそれは？（汗）

音速って……嫌ですよ？私は（汗）

「え〜と、箒に拉致されなければOK？」

「ええ、若しくは貴方達なら空を飛ぶ事も可能だから急ぎ離脱するかね？」

そういえば飛べたんだっただな。  
雪之丞よりは遅かったけど私も僅かながら飛翔する事が可能になった。

最も高速飛行なんかは無理であくまで補助的な能力だが。

「問題はおキ又ちゃんとタイガーよね？陰念か雪之丞・ピートが傍に居れば対処できるかもしれないけど」

「……あの子たちにはカオス謹製の結界護符と私謹製の飛行式神を渡しておくわ。少なくともこれで大丈夫でしょう」

「式神って創ったことあったっけ？」

「簡易の物わね？というか玉藻は記憶で見ただでしょ？あとで意思を持った子たちを作っておくわ」

まあ、蛭様が対処するなら大丈夫だろう。

その後も起こりうることを聞き対処できるように備えた。

……いつの間にか明日に対する不安は消えていた事に気づいたのは翌日の帰宅後だった。

S I D E O U T

S I D E 蛭

翌日、快晴の空の下家族総出で陰念・雪之丞・おキ又・ピート・タイガーの五人を見送った後、私はケイの面倒を見ていた。

「そういえば、シロは今頃如何しているかな？」

「シロ？」

「うん、人狼族の子でねケイより年下だったかな？」

「その子は此処に来るの？」



「ん？分からないな？暫らくして周りが静かになったら来るかも知れないけどな」

たまに会ってはいるけど、まだこつちには来れないからね……と呟いた後、ケイを抱き上げると朝の鍛錬へと赴いた。

既に第四の封印も解かれた今、後は時間経過と各種の力を均等に育て上げるだけ。

大戦時に少なくともルシオラと同程度のマイト数をそれぞれ確保しなければ、望みが叶わない公算が高い。

第四の封印を解き、霊圧が一気に1500マイトまで上がったがこれを6800マイトまであげると時間はいくらあっても足りない。

とっておきの秘策であるブーストとなる物も幾つか用意しているが、正直足りないのが現実だ。

ちなみにブーストとは、物の善悪に係わらず大きな力の結晶を自らの物とし熟成して吸収する事で霊圧の起爆剤にすることだ。

「……話の桁が違いすぎるのも問題だよな。あれらの熟成は既に完了しているけど……ヌルとフェンリルを足せばいい所までいけるかな？」

最もその場合犬飼を屠る事になるけど、仕方ないで済ませていい問題じゃあないよねえ。

「ん、今持っているのがナイトメアの魔核に死津喪比女の新芽、玉藻から吸収した九尾の怨念、メドーサのカルマ、ブラドールから吸収したカルマ、ベリアル魔核……後は悪霊から回収した怨念ぐらいか」

この後有用なのはさっき言ったヌルとフェンリル、ベルゼブブにデ

ミアン、パイパーぐらいかな？

「常にメドーサと玉藻から受けている霊的負荷は計算に入れないとして後一つ二つ欲しいなあ。こうなってくると平安京の悪霊道真の怨念を回収できなかったのが痛いなあ」

そうやって埒もなく考え事していると廊下の電話が鳴った。

「はい、横島ですが？」

「あ、蛭様ですか？唐巢です。実は妖怪の除霊が協会に舞い込んできたのですが、どう処理すればいいのか判断つかなくて連絡した次第です」

「妖怪？」

「はい、忠夫様の記憶に会った雪女です」

「……それって、時期ずれているわよね？それに今だと余程山奥に行かないと会えないよね？」

「確かにそうですが、規約が変わり申告しやすくなったのが原因の一つかと」

「そういえばあそこは昔から被害があつたんだっけ……丁度いいわ。私が同行するから神父が受けてくれない？そうすれば私があの子を改心させて保護するから」

あの雪女ならかなり力を持っていたはず……何とか契約を結んで私付きの精霊になって貰えれば。

「そうですね、分かりました。では明日の朝6時ごろにお迎えに行きます」

「ええ、分かったわ」

会話を終えると、私は先ほどの案を纏めるべく老師の元へと向かっ

た。

「……なるほどのう、何かしておるなとは思っておったが。それで？今現在ではどれほどまでいくのだ？」

老師の元へと赴き、これまで内密にしてきた事を明かした。

最初は呆れられたが事が上手くいくと判断されたのか言いたい文句は飲み込んで貰えたようだ。

「今現在確保している分を使えば少なくとも4200マイトは到達できる筈です。後、明日契約を結ぼうと思っっている雪女を確保できれば水属性が強化できますから少しは上乘せできると」

「ふむ、では残りをそれに足せば最終的には……」

「6200マイト往くかどうかですかね？残りの悪魔やフェンリルを足せばですけど」

「ちと足りんな……ふむ、小竜姫と契約してみんか？」

……小竜姫か、考えなかつた訳ではないんだけど。

問題は適合しすぎないか、なんだよね。

「大丈夫ですかねえ、かなり相性がよすぎると思っんですけど」

「やばいかなのう？」

「下手をするとルシオラレベルにまで同化してしまいます。それぐらい相性がいいんです」

「ん、それはいかんのう「やります！」「むっ?!」

「いつ?!小竜姫?!……って老師っ！今わざと通したでしょう!」

しまったみたいな顔をしているけど口がにやけていますよっ?!  
老師に詰め寄る私を他所に小竜姫はやる気満々であった。

「蛭様、私はルシオラ様の苦しみを理解できるとは思っておりません。そして私がどれほどの助力になれるかも判りません……ですが、それを承知の上でお頼みします！どうか、どうか私と契約を！」

さて、困った。

確かに小竜姫と契約すれば問題は飛躍的に解決する。

例えフェンリルを復活させず、事前処理しても何とかなる程度まで高められる。

しかしその代償が小竜姫の安否では割に合わない。

ただど贅沢いえるほど状況に余裕があるわけでもない。

……小竜姫の気概に賭けてみるか。

「判ったわ」

「！で、では早速！」

「ただしっ！手加減しないよ？貴女が踏み止まれないなら一気に吸収するからね？その場合決戦終結時演算機での摘出を行うまで貴女は例え何があっても手出しできない状態になるから」

「ッ！……構いませんっ！この身は既に蛭様のものっ！！如何様にもお使い下さいっ！！！」

……気迫は凄いけど。

「小竜姫？そういう言葉は使わない方がいいわよ？まあ、覚悟は受け取ったわ」

「ではっ！」

「ふむ、話は纏まったようじゃな」

「老師？」 < > < >

「うおっ？！」

何となしに声を掛けてきた老師に 下ノ劑 と刻んだ双文珠を翳すと発動させた。

「ッ?!ほ、蛭っ?!」

「勝手な猿爺は私の痛みを少し味わって貰います」 < > < >

「うぐっ、ぬう……だぁ……ッ?!」

「ろ、老師様?!」

老師はお尻を押さえると脱兎の勢いでトイレに駆け込んでいった。  
天罰觀面ッ!!

「老師様は一体……?」

「少し罰を受けてもらったただけだよ?」 < > < >

「ほ、蛭様?」

「んゝ、まあいつか」

「え?」

結局私も同じ穴の貉だし……ね。

私は呆然とした小竜姫を伴うと神殿へと赴いた。

この最も妙神山の恩恵が働く場所なら少しばかりは小竜姫の助けになるだろう。

神殿に入った私はすぐさま契約陣を展開し己の内の神族因子を剥き出しにした。

「これが私の神族因子よ。今はほぼ眠っているような状態だけだね?」

「これほどの許容量を示しているのにですか?」

「本来の数十分の一よ?まあ、だからこそ貴女との契約も踏み切ったんだけど」

「……ッ!確かに本来の許容量を發揮されていれば私な

ど一気に昇華されていたでしょうね」

「ええ、この状態で契約を結べば例えば後で許容量が増しても貴女の存在は維持されたまま保存できるからね」

本来のキャパシティーが発揮されていれば小竜姫など一気に昇華して私の内に消えてしまうでしょうね。

私は小竜姫の手を取ると己の神族因子に触れさせた。

「ッ！なんて暖かな波動……このような波動は初めてです」

「……始めておったか」

「あら老師？お通じは納まったのですか？」 < > < >

「うっ……悪かったとは思っておる。しかし手段を選んでおれんのも事実じゃろう？御主にとって小竜姫は最初の師であるから拒絶するのは理解できるが」

「………。もういいですよ、では始めるよ？」

「は、はい！」

最初の師……か。

そうだよね……別にいいけどさ。

「我、太極天の意思を継ぎし者・横島 蛭なり。汝の名と真名は？」

「私は竜神・小竜姫。真名は凜と申します。妙神山に住まう武神です！」

「汝我との繋がりを求めるか？」

「はい！」

「なれば汝が存在持ちて汝の全てを我に示して見せよ！」

「……………ッ！」

神族因子を介して小竜姫の全てが流れ込んでくる。

これまでの彼女の記憶が、感情が、痛みや苦しみをさえ。

そこにあつた記憶の欠片。

メドーサを姉と慕い、しかし竜神王の配下の一人によって計略に嵌められたメドーサに関する記憶を封じられた事。

(やっぱりそういうことだったのね)

以前メドーサのカルマを吸収した時に疑問に思ったことがこれで判った。

メドーサが無実の罪をさせられた時一緒に居て、それが誤解だと知っている筈の小竜姫が何故未来で初対面の様に接していたか。

幼少時に封印されてはメドーサの事を忘れていても仕方なかるう。

そしてメドーサはそんな神族に愛想を尽かしても仕方ないだらうね。何処にでもいるものだな、独善的な行いをする者は……私が言えることじゃないだらうけど。

「……………ッ、……………ッ！」

どうやら私と繋がる事で小竜姫も事の次第を把握したみたいね。

あまりの事に少し踏ん張りが緩んでしまったけどどうやら持ち直したみたいだ。

そして何を思ったのか背中に手をやると……逆鱗を触ったっ?!

「こ、これ小竜姫!このような所で竜化すればっ!」

老師が慌てている。

未来において、修行場で暴れた時も断末魔砲で撃たれた時も此処だけは無事だった。

しかしこの中で行ってしまえばその限りではない。

老師の警告を聞いても小竜姫に微塵も躊躇はなかった。

「私は武神・小竜姫！私の今も昔も未来も全ては蛭様のもの！受け取って下さいっ！私の全てを！！」

瞬間、巨大な竜と化す小竜姫！

未来では暴れるだけであつた彼女だが……私に迫つた瞬間、もがき苦しみ空中で唸りながらも止まつた。

これは別に私と認識して止まつたわけではないであろう。

私の内にある彼女では到底届かない位階の存在を感知したゆえの本能だろう。

「……小竜姫、魅せなさい。貴女の全てを、私が全て受け止めてあげるわ……他ならぬこの蛭がっ！」

「……………ツ！ガアツ！グオオ　　ンツ！！」

私の言葉に喉を震わせた小竜姫は一際大きな咆哮をあげると体全体が光りだした！

放たれる光は神殿全体にまで広がり視界を白一色で覆い尽くした。

「……………乗り越えおつたか、まあ根幹の問題を一つ解決すればそれも必然か」

「という事はやはりあの事が小竜姫の成長を？」

「うむ、強引な記憶の変換は精神に多大な影響を及ぼすからのう」

竜化が解けその角と霊圧を一回り大きくした小竜姫を見ながら老師は言った。

背も一回り伸びた小竜姫は立ち上がるとこちらに向き直り跪いた。既に契約の儀は済んでいる。

「我、此処に新生せしは竜神・小竜姫。主・蛭様、今後ともよろしく御願ひ申し奉ります」



新生といつても先に述べた以外は変わっていない。

まあ、より堅苦しくなったのが変わったと言えばそうなのかもしれないけど（汗）

「まあ、よく耐えたし成長した事は喜ばしいけど……その堅苦しさをどうにかならない？」

「天地天命に掛けて不可能で御座います」「あつっ！」

さり気なく？お願いしたが、すっぱり駄目だしされた（涙）

その後何とかプライベートの時だけでもと押し通し口調を改めさせた。

「しかし、小竜姫が竜化した時は焦ったが上手く事が運んで一安心じゃな」

「まーね。それこそ宇宙意思が働いてるんじゃないかって勘ぐる位にね、無論小竜姫の頑張りも認めているけど……都合が良過ぎるわ」

「そう疑うな……ご都合主義な感も否めんが、それぐらいでなくば到底事は上手く運ぶまい？」

「そうなんだけどねえ」

あの後、神殿を後にした私たちは居間で雑談していた。

小竜姫は新たな体に馴染む為メドーサと模擬戦をしている。

……ちなみに、背や霊圧は成長したのにある一部分が全く成長していない事に気づいた小竜姫は落ち込んだ。

その鬱憤も籠めて今はメドーサに八つ当たりしている……記憶を取り戻し照れくささや申し訳無さがあるからどう接すればいいか判らないからだと思うが。

メドーサには既に私から伝えてある……別段取り乱したりしなかつ

だが、大人しく付き合っているのを見る限りでは受け入れているのだろう。

「……ふむ、思いのほか上昇してるの？」

「ああ、小竜姫と契約した事で太極天の因子の中で打ち消しあっていた心眼とメドーサの力が解放されたのよ。思わぬ副産物という物ね……メドーサは神の属性に戻っているから魔の因子が若干弱まったけどそれも五の封印を解けば解決するし」

「なるほどの……それで結晶は使わんのか？」

「うーん、今使って置いた方がいいかな？」

「後になって不具合がでるよりかはいいと思うがな」

確かにそうだよねえ……まあ、いつか。

纏めて吸収した方が効率もいいんだけど……ね。

私は影から虹色をした力の結晶を取り出すと一気に飲み込んだ！

「……うえ、味はしないけどお腹が重いわ」

「流石に直ぐには吸収できんか」

「明日には全て吸収し終わっているでしょうけど……それじゃあそろそろお昼だから用意してくるわ」

私はそういうと久方ぶりの食事の準備を美衣さんとした。

昼からは玉藻たちと模擬戦をしたり今後の計画を練った。

そうして夕方になると帰ってきた皆を迎え学校の感想を聞き終わった……最も皆は私の放つ霊圧の増加と小竜姫の変化に目が行っていたみたいけど。

ちなみに今現在の蛭及び契約者達の現状は以下の通りである。

横島 蛭16才

黒髪を膝裏の辺りまで伸ばし赤いリボンで一房に纏めている。

身長：158cm

B/W/H＝84/54/82

総霊力保存量＝1500マイト 2700マイト（小竜姫契約後）

5400マイト（結晶吸収後）（第四封印開放）通常時150マイトまで隠蔽

チャクラ＝全チャクラ開眼

霊能力＝文珠／双文珠／霊波刀／各種霊波砲／式神創造及び操作／五色の装具（霊気の盾／妖気の具足／竜気の籠手／魔力の仮面／神霊力の霊衣）／霊視／ヒーリング／神通足／五行術

戦闘技術＝剣術（小竜姫の直伝）／気配遮断／霊力隠蔽／気孔系格闘術（猿神直伝）／縮地

基礎能力＝百合子の代打が出来るほどの知識／高レベルの家事全般補足事項＝自身の因子と太極天の因子以外に玉藻の因子とメドーサの因子と小竜姫の因子を契約時に貰っている／霊気・妖気・竜気・魔力・神霊力を使用できる／異種族の力は完璧に隠蔽しているので看破されることはない

妖気の具足とは身体能力、特にスピードを高める霊的補助能力

竜気の籠手とは霊的能力の攻撃能力を鋭敏化する能力、ただし消耗率も上がる

魔力の仮面とは意識加速を促す霊的補助能力

神霊力の霊衣とは霊的能力の防御力を高める能力

五色の装具とは全ての霊的能力を一纏めにして発揮した時使用できる規格外の装具である。また各能力が飛躍的に上がる。

玉藻 4000マイト 全チャクラ開眼 現在周天法による各チャ

クラ充填を主に行っている。

メドーサ 5500マイト（11万マイト） 地味に己の内面を日

々の修行で広げている。

小竜姫 4500マイト（9万マイト） 記憶が修正された事で全

体的に成長。

S I D E O U T

翌日迎えに来た唐巢神父と共に北海道へと飛んだ。

現地に到着後、目撃情報と心眼での探索により目星を着けた蛸たちはゆっくりと近づいていった。

雪の残る山岳地帯へと着くと辺りに真冬並の吹雪が吹き荒れた。

「来たわね……神父は前面に出ては駄目よ？」

「はい、分かっております」

吹雪が一層強まり一瞬後、そこには妖艶な美女が浮かんでいた。

白い着物を着流して此方を見詰める眼は何処までも冷ややかであった。

「小娘に曲がり角過ぎの神父か……小娘の方は凍らせがいがありませんね？」

「ま、曲がり角過ぎ……orz」

「し、神父（汗）」

無残に膝をつく神父に哀れさを感じる蛸。

雪女はそれに構わず此方へと飛来する。

「私は全てを凍らせる者。体も心も魂さえも……貴女も氷像になりなさい！」

咄嗟に神父に拒絶の結界を張り、自身は特に何もせず迎え撃つ。

覆い被さってくる雪女の眼を瞬きせず見詰める蛸。

凄まじい寒波が蛸を襲うがそれらは一切彼女の肌を凍りつかせはし

なかった。

「なっ?!何故?何故貴女は凍らないのっ?!」

「それが貴女の限界?それしきの冷たさで私は凍らせられないわよ?」

「ほざけ!」

自身の妖力を全開にした雪女が再度蛭に飛来する!

今度は自身に眠る魂の波動を前面に押し出し雪女目掛けて放射する!  
蛭の放った光の放射は容易く雪女の寒波を飲み込み逆に光へと飲み込まれる。

「.....ツ?!な、なにがっ?!ツ!

.....アツ」

雪女は一瞬の抵抗も許されず光へと消えていった。

次の瞬間辺りに満ちていた光が収縮し、蛭へと吸い込まれていった。

「.....い、今のは一体?」

「あれ、神父復活したんだ?さっきのは私の魂へと雪女を導く為の門みたいなものよ」

「魂にですか?」

「そ、彼女に私の全てを見て貰うためにね?彼女の自我が消滅しないように保護も掛けたけど」

「それは逆に辛いのでは?(汗)」

唯でさえ凄まじい記憶を持った蛭の魂である。

それに直に触れるとなると.....神父はそこまで考えて思考を放棄した。

考えると鬱になりそうだから。

「……そろそろいいわね、出てらっしゃい雪女」

蛍の呟きと共に蛍の内面から解放される雪女。

彼女の顔には先ほどまでであった冷たさや傲慢な所は一切なくただ憔悴していた。

「どうだったかしら、私の魂は？触れてどう思った？」

「御赦し下さい、愚かな私を。どうか御慈悲を……（涙）」

「ん〜ちつときつ過ぎたかな？……あんまり萎縮されても嬉しくないんだけど、私と契約してくれるのなら何もしいわよ？」

「……？その様な事で宜しいのですか？」

「私が生きている限りずっと拘束されるけどね？……まあ、事が済めば解放するけど」

雪女は蛍の魂に触れすっかり怯えてしまっていた。

その存在力もそうだが、冷える事なき思いの結晶は雪女にとって耐え難き物だった。

同時に蛍の暖かさに触れた雪女は興味も持ってしまった。

「……分かりました。このような身で宜しいのであれば御契約を結びます」

「言っただけでなんだけど、いいの？別に今後悪さをしなければ断つてもいいんだけど」

既に蛍にとって雪女の存在は絶対必要という訳ではない。

小竜姫との契約により飛躍的に高まった故に……であるが。

蛍の魂に触れた以上、これから人を襲う事もあるまい。

「いえ、私は貴女様の事を知ってしまった。その上で貴女様から離

れる事などできません」

「……分かったわ、それじゃあよろしくね。……と、貴女名前は持つてないのよね？」

「はい、特に必要ではなかったのよ」

「ん、じゃあ氷雨ひこめにしよう！これからは私付きの精霊としてよろしくね？」

「……精霊ですか？」

「私と契約を結べば一つ位階があがるからね、より精神世界に近い存在になるわ」

その後無事契約を済ませた蛭たちは、空気になっていた神父を連れて帰還した。

家に帰り今日の出来事を皆に語り、氷雨を紹介した蛭はやり方が強引だとか、また記憶の開示をしたとか散々説教された。

「……………何で？（涙）」

かくしてまた一人横島家に居候が増えたのでした。

## 第十五章 魂の叫びと決断する者たち（後書き）

メドーサと小竜姫云々は独自設定です。

例によって加筆は完結後に。

蛭のレベルアップの速さは目を瞑ってもらえると幸いです（汗）  
次回は7/22の0時です。

10/6 一部修正



第十六章 望むべくは明日への架け橋（前書き）

難産な上にまだ納得がいつていない話です。

前話もですが（汗）

何はともあれどうぞ。

## 第十六章 望むべくは明日への架け橋

SIDE ジーク

私は魔界軍情報仕官のジークフリード少尉です。

アモン様からの勅命を受け今現在人界で横島家の方々の護衛と過激派魔族の動向を探っています。

今回は驚くべき事に私専用の宝剣グラムの帯剣を許されており、これは本来ならありえないことです。

私を限りなく不死にする宝剣は最終戦争以外ではアモン様の御膝元に置かれているものです。

最もそれも今回の勅命を思えば必要だと判断できる事ですが。

我々神魔のみならず世界にとって必要不可欠な蛸様の手助けをする為ならば。

着任以来既に三体の過激派を封じているが勅命時に伝えられた魔族はその内一体のみです。

残るベルゼブブとデミアンは未だ姿を現しません。

最も現れたとしても我々は追い払う事しか許されていませんが。

姉であるワルキューレ大尉が勅命を受けた時とは些か事情が変わってきているのが現状です。

流石のアモン様たちもこれほど早くにあのメドーサを仲間に引き入れる事が出来るとは予想外だった様です……仕方の無い事ですけど。ちなみに伝えられた以外の封印した魔族はアシタロス大公の部下ではありませんでした。

……そう、かつて太極天様を謀った愚か共の部下です。

どうも未来で太極天様が因子を送る際の次元流に傍で倒れ付していた過激派魔族の一体が巻き込まれたようなのです。

未来の事と蛸様の情報を手に入れた奴らが人界を混乱させる為に行動を起こしました。

そして過激派魔族は常に監視されてはいましたがその部下までは手が回っていなかったのが今回の原因の一つです……まあ、被害は出ていませんが。

気など抜く気は全くありませんが厄介な事であることは変わりありません。

この事は蛭様にも御家族の方たちにも知らされていません。

御知りになれば蛭様は御気を病むであろうし、御家族は知る必要性など全くないからです。

そもそも腐った奴らの事である方達の心を騒がせるのは不本意なことだ。

未来での様な失態は絶対に起こしてはならない。

ただでさえ横島家の方たちには随分と世話になっているのだし。

「不思議な物だ、まるで人間であつた頃に戻つたような感じがする。

……それだけ此処が得難い理想郷だという事なのだろうな……絶対守らなければ！」

「力むのはいいがグラムをすっぱかすなよ？」

「！あ、姉上！？もうお戻りに？」

振り返れば姉上が腰に手を当て佇んでいた。

姉上はアモン様に呼ばれ魔界へと一時戻っていたのです。

「それで今回の召集は一体どのような？」

「うむ、どうやら未来より情報を得た過激派は封印刑に掛けられたそうだ。情報の漏れも今の所ないそうだからとりあえずは安心だろうとの事だ……時が来るまでは完全なる安心は無いがな」

「そうですか。何はともあれ喜ばしい事です」

油断は出来ないが大事に至る可能性が減つたのはいいことだ。

何はともあれ時が来るまでは此処を守り通すのみっ！

愚か者どもよ、お前たちの好きにはさせない……絶対につ！

S I D E O U T

S I D E 蛭

雪之丞たちが高校に通いだして早くも二学期が過ぎていた。

学校に通いつつも修行を欠かさない雪之丞と陰念、最近は学校の友達と遊びつつ家族として事務仕事を手伝うおキ又ちゃん、己のあり方を受け入れる為にたまに父親たちに会いにくピート、精神を鍛える為に自身と向き合いつつ人間観察をするようになったタイガー。それぞれが未来に向けて歩んでいた。

それ以外では、カオスが妙神山の防御設備を老師と共に強化している。

また、世界GS本部の顧問として霊障事件の難問をいくつも紐解いていた。

鬼道はより夜叉丸との繋がりが強くなると母さんの勧めもあり六道女学院の霊能科講師をする事となった。

当初は六道に関わる事を渋っていたが、子供たちを健全に導く為に熱血魂を發揮した。

その六道の当主と娘はというと未だ老師の空間で恐怖に対する耐性や暴走癖、性格を矯正する修行を課せられていた……元より拘束二年が言い渡されていたのであと一年は出られないのだが。

経過の程は性格の矯正と式神の扱い方に改善の兆しが出てきているそうだ。

エミ姉さんと九琉はGSのランク付けがA級のTOP1・2になった事ぐらいか。

流石にS級には早々なれないので日々精進を欠かしてはいない……最もエミ姉さんはその希少なネクロマンサーの能力で近々S級入りを期待されている。

業界では無理やりな除霊をしない所や小さな気配りが出来る所など、

力だけに囚われていない在り方が好評を博している。

そんな中一つの動きがあった。

雪之丞が次回の資格試験を受けたいと言い出したのだ。

これは別に不可能ではない。

資格を取る為の最低年齢にはなっているし実力も大丈夫、筆記試験も面接もまあ大丈夫だろう。

また、雪之丞が受ける以上陰念とピートも受けた方が除霊規約や経験的にもいいだろう。

それに来年を待っていれば時期的にランクアップが遅れて色々都合が出てくる可能性もある。

ちなみにこれは雪之丞自身が言っていた事だ。

確かに当初私は手伝って貰う為に修行を課したのだ……なればそれが揮えるように手配するのが義務という物。

「まあ、何だかんだで受けさせるしか答えはないんだけどねえ……はあ」

「いい加減諦めなさい。確かに大戦終結が大きな目標だけどそれ以後も人生は続くのよ？早めにこなしておくに越した事ないでしょ？」

雪之丞に了承を出す事を決めた後も渋った感じで呟いていた私にエミ姉さんが突っ込んだ。

「……まあ、そうなんだけどね。」

「それに、来年になればパイパーやフェンリル、原始風水盤や月世界なんてイベントが目白押しなのよ？メンバーの補強は急務なワケ」

「……そうだね、所詮私が強くて露骨に前面に出られない以上は必要か」

「そういうこと！私たちの強化は必然なのよ！……だから、今日は貴女の番ね？」

「……………？エミ姉さん？」

エミ姉さんはそう言うとその場からそそくさと立ち去った。  
どういうことだろう？

……………と、そこへ現れる母さん。  
手に大量の服を持っている……………全てフリルつきだ。

「あら？蛭、エミはどこに行ったの？」

「……………姉さんならあっちに行っただけど、何それ？」

「ん？政府の馬鹿どもが懲りずに馬鹿しようとしててね、それを抑えるのに苦労したから鬱憤晴らしにファッションショーをするのよ！」

「……………そう、じゃあ私はこれで「待ちなさい」……………離してくれると嬉しいなあ、お母様？」

「あら？せっかく可愛い貴女がいるんだからこれを逃す手はないじゃない、愛娘？」

『……………』

その後私は極刑を受けた。

フリルつきの色とりどりのドレスなんていう凶悪な拘束具によって

……………（涙）

しかも公開処刑だった（滝涙）

とりあえず観客の男連中は全員腹下しの刑にしてやったけどね？（  
黒笑）

翌日、雪之丞たちに次回の資格試験参加決定を知らせると最終調整に入った。

あと、知らせた時にメドーサが教えてくれた事だけ……………どうやら今回の資格試験で成果を出せなかったら後続に権限が移るらしい。

……………どうも未来より展開が速く感じられる、杞憂ならいいんだけど。

S I D E O U T

S I D E メドーサ

資格試験参加を許可しに来た蛭にアシユ様の命令の事を伝えると若干焦りが見えた。

まあ、本来の時間軸では来年に起こった事だし私は原始風水盤までは出張っていたからね。

だけど私としてはそれほど危険な状態とは思っていない。

確かに事は繰り上げられたように起こっているけど、ヒヤクメの話では時間移動させた距離はほぼ同じに出来たそうだ。

ならアシユ様の行動もほぼ変わらない筈……あの方が蛭の存在を感じ知っているならともかくね。

「問題はそんな事より如何に自身の位階をあげるかなんだよねえ。玉藻の様に開拓された下地があるわけでもないし……地道に負荷を常に掛けているから高まつてきたけど、あくまで中級としてだからねえ」

既に私の人界で放てる霊圧は5500マイルを超えている。

これは中級としては破格だが、あくまで中級だからねえ。

玉藻は未来の己の因子を蛭からコピーして自身に融合させる事によって爆発的に成長している。

この前までは3000マイル台だったのに既に4000マイル台に上り詰めている。

あの子も太極天と同じでかなり無理の聞く存在だったようだからねえ……末恐ろしいもんだ。

最もあの子は蛭の為にのみその力を揮うから頼もしさを感じるだけだね。

「蛭が完全覚醒すれば私の因子も増幅するから格好の起爆剤になるだろうけど……それに耐えられるだけのベースを開拓しなくちゃならないし」

少なくとも私と玉藻、そして小竜姫は今の倍ぐらいにはならないと駄目だからねえ……決戦時に備えて。

ん……決戦まで私たちの出番はなかったわよね？

例え神魔の手が必要になってもワルキューレやジークがいるし……やってみるか。

「そうと決まれば小竜姫を捕まえないとね……未だ微妙な雰囲気だけど」

私はもう過去の事なんて振り切っているんだけどねえ。

ま、いいさね。

その後私は雪之丞たちを鍛えていた小竜姫に近づくと問答無用で首根っこを掴んだ。

「ッ?! えっ? メ、メドーサツ?! 何を!?!」

「いいからついてきな! あんた達は学校の予習でもしてなさい」

私は呆然とする弟子たちにそう言い残すと騒ぐ小竜姫を引き摺りながら猿神の元へと向かった。

S I D E O U T

S I D E 齊天大聖

わしが部屋で過激派の動向を纏めた資料をチェックしておるとメドーサと小竜姫の気配が近づいてきた。

何やら騒がしいが迎え入れる為に資料を片すと二人が入ってきてよっ



た。

「邪魔するよ、老師」

「えっ、老師様？」

「なんじゃ？雁首揃えて？」

見ればメドーサが小竜姫の首根っこを持っておる。どうやら小竜姫は無理やり連れてこられた様だの。メドーサは小竜姫を離すと腰を下ろし姿勢を正した。

「悪いけど私たちに加速空間を創ってくれないかい？思いつきりきついのを」

「むっ……？」

「あんたなら知っている筈だろ？現竜神王がやった事のあるやつだよ」

「……なるほど、昇龍門の行か。随分古い難行を知っておるな？」

「昇龍門の行ですか？」

昇龍門の行。

それは太古の龍王が己が位を上げ龍神になる為に行った修行の事だ。最近では数千年前に今の竜神王が己の位階を上げる為に行ったきりである。

竜神には神族としての位階の他に竜としての位階もある。

最も位の低い一爪から最高の五爪までを指し、メドーサたちは三爪である。

最もメドーサは蛇神の側面が強いので竜化はしない……龍の一種である事は確かだが。

この行はその位階を高める物である。

「なるほど、それでどういう修行なのですか？」

「簡単に言えば己の龍の証を献上し極度に霊圧の高い場で献上した証を自ら生み出すという物じゃ」

「証ですか？」

「逆鱗よ。特殊な術により剥ぎ取るのさ……私たちにとっては激痛以外の何物でもないけどね？」

龍にとって逆鱗とは最も神聖な物であり守るべき物じゃ。

それを失うという事は半ば龍という枠組みを失う事に等しい。逆に言えば更なる枠組みを得る為には邪魔な物といえる。

これからこやつらがすることは自身にとって龍という属性を捨てつつ龍であり続けるという難行なのじゃ。

じゃが、これに成功すれば龍は己の位階を高められる……失敗は消滅を意味するがの。

「……消滅ですか？」

「当然だろ？龍が己を構成する最大の証を捨てるんだ……当たり前前の事よ」

「……正直小竜姫には乗り越える事はできんと思うがのう。お主はともかくの」

「だろうね。……別に見下している訳じゃないからそう睨むんじゃないよ、純然たる事実さ。……だけどね、この程度乗り越える事も出来ない様ならあの子の行動を阻止する事など出来ないよ？」

……まさか、メドーサの奴。

「お主、気付いておったのか？蜚のあの願望に」

「当然さね、玉藻の方が大分早くに気づいていたけどね……私はあんな事認めないよ、絶対！」

「……？何の話ですか？」

『……………』

メドーサの力強い言葉に頼もしさを感じたのも束の間、小竜姫の言葉に脱力した。

こやつは……わしは拳を作ると頭を叩こうとした。

小竜姫はそんなわしの行動に首を竦めて来るであろう痛みに耐えるため目を瞑った。

しかしわしは叩かなかった……否、叩けなかったというべきか。結局わしも百合子殿に教えられるまで気付かなかったのだから。

「……？ろ、老師様？」

「……ふう、メドーサよお主はいつ頃気付いたのじゃ？」

「私は一年ほど前だね……玉藻はもつと早くて三年ほど前だよ。あの子は本当によく見ている、初めてだよ心から敬意を持ったのは……勿論蛭とアシユ様を除いてだけだね？」

「そうか……わしは本当に耄碌したんじゃな、情けない。……ま、此处で悔むのは時間の無駄じゃが」

わしにそんな事をしている猶予などないんじやからな……蛭や玉藻に見つかれば怒られるじゃろうしの。

「あの〜？」

「小竜姫よ！」

「はいっ?!」

「お主も受けよ、この難行。そして自らの殻をもう一度破くのじゃ！」

「し、しかし私には乗り越えられないと先ほど……」

「……確かに乗り越えられんじやろう、その様な気持ちの持ち様ではな……しかし良いのか？その様では蛭が自らの命を絶つのを止められんぞ？」

「……ッ?!な、どういう意味ですか?!」

わしは話した。

蛍の願望を……太極天とルシオラの復活という願いを。

「例え蛍であろうとあの二柱を復活させる事は困難じゃ。例え演算機を使つてもの?」

「?何故ですか?聞いた感じだとどの様な願いでも宇宙意思に反しない願いなら叶えられる筈では?」

「確かにの……じゃが忘れてはいかん。あくまで蛍も太極天と源を同じとする者だという事を」

「横島忠夫というベースはあくまで一つ。そしてより世界に貢献した者は太極天だ」

「つまりじゃ、彼らの復活を願うという事はより宇宙意思に愛されている太極天に蛍という存在が乗っ取られるという事なのじゃ」

「そんなつ?!」

「それだけじゃないよ?恐らく蛍は未来のルシオラの因子とこの時間軸のルシオラを同化させる事で太極天と同等の存在にするつもりで筈さ……そこにルシオラ本人の意思は存在していない事は確かだろ?」

「蛍様がそんな事を?!勘違いではありませんか?!?」

「じゃがな?それぐらいしか二柱を復活させ世界に安定させる術はないのじゃよ……メドーサが気付いておつたのには驚いたがの」

「私だつてこれぐらいはね……そんな事より問題なのはだ、何故蛍がこんな強引な手をやろうと考えるに至つたかだ」

「……それは、太極天様とルシオラ様の思いに感化されてでは?」

「いいや、それはないね。それならば記憶を受け取つた時からそれに向かつて邁進する筈さね。だけどあの子と最初会つた時、最終目標はゆつくりのんびり心許せる人たちと悠久を生きることつて言つていたからね」

「つまりそれ以後何か蛍の考えを変えたということじゃな」

元々平穩に生きる事を望んでいた蛍がそれを放り出して自らを無くす考えに奔らせる事……まさか。

「？何か思い当たる事があったのかい？」

「……確証はないが、もし蛍が自分ではなく太極天に居て欲しかったと皆が思っておる……なんて考えておれば」

「……………ッ？！もしそれが事実ならあの子の心はささくれ立っている筈だね。成す事全て自身の終末へと繋がる事になるんだから」

「しかしあ奴は自分を律する事は恐ろしいほど長けておる。例えヒヤクメでも除き見ることは敵わんじやろうな……どうする？どうすれば「何馬鹿馬鹿しい事を言っているんですか！！！！！！」」

わしの言葉を遮るように怒鳴る小竜姫。

見れば全身にこれまでにないほどのオーラを纏い怒りに表情を染めている。

「それでも斉天大聖かつ！！蛍様が御自身を捨て去る御覚悟をしているというなら体当たりで踏み止まるように縋り付く位出来ないのかっ！！！！？」

「しよ、小竜姫っ?!」

「全身全霊でぶつかると事をせず止められる御方とお思いかっ！！！！？」

「……そうだったね、その通りだよ。自分達の思いも伝えず悩んでいたって何にも変わりはない……か」

「……全くじゃな。どうやらわしは老いばれ以下のようにじゃな」

……………情けないわね、未来で皆に言われた事や私の説教を忘れたのかしら？

不意に響く声。

見れば玉藻が此方を睨んでいた。

そして此方に近づいたかと思うとわしの胸倉を掴み目を覗き込んできおった。

「斉天大聖……天に等しいというけど、天に等しいだけに地べたの事には気づかないのかしら？昔の貴方は細々考えてから動くような輩だったかしら？」

「玉藻……わしは」

「私は弱いわ、だからこそ自らを鍛えている。最初こそあの子がそれを望むなら一緒に死んでやるのも良いかなと一時は思ったわ」

此方を睨みながら呟く玉藻。

その姿は屹然としておりその瞳に濁りは無い。

「でもね、やっぱり私はあの子と生きたいし愛し合いたい。太極天ではなくてね？その事を私はあの子に言っただわ……でもね、あの子は考えを改めようとはしなかった。私では近すぎるのよ」

「それでは我々だけではなく世界中の声が必要ですね」

「……言うようになったじゃない、小竜姫様」

「ええ、あまりにも情けないこの方の有様を見たものですから」

そういつて此方を睥睨する小竜姫……というかわわり過ぎではないかのう（汗）

やはり女子は怖いのが（汗）

「幸いザンス王国は一つに纏まっているからそれを起点に世界へ虫の存在を知らしめる行動に百合子さんたちは動いているわ。だから今私たちがするのは強くなる……それだけよ」

「そうですね、力無き思いも思い無き力も……須らく無力。なれば  
蛭様へのこの思い必ずや昇華して見せましよう!」

小竜姫はそういうとわしの首根っこを持って修行場へと歩んでいっ  
た。

……もしかしてわしこれからこんな扱いなのかのう? (涙)

S I D E O U T

S I D E 玉藻

全く……老師の腑抜け具合にも困ったものだわ。

小竜姫様のあの気迫にはちょっと驚いたけど、あの人ならああなる  
のは当然よね。

普段はちよつと抜けているけどこういう時は頼りになるから。

あの調子なら修行も上手く行くでしょう……後が怖いけど。

まあ、別に悪い事ではないしいわよね? ね?

さて、それはともかく私ももう少し起爆剤となるものを探さないと  
ね。

ことの真意はともかくもつと強くならなければならぬことには違  
いないんだし。

チャクラは全部開いたし充填もしている。

未来の因子をコピーする事で得た神族因子を強化することも順調に  
往っている。

だけどこれだけじゃあまだ駄目なのよねえ。

私はあくまでこの時間軸の玉藻でないといけないんだから。

「……散らばった欠片を探そうかしら? ……ヒヤクメさんに頼めば」

私は少し考えた後その場を後にした。

時間的猶予はそんなに無い事もまた事実なのだから。

S I D E O U T

妙神山で玉藻たちが動き始めている頃、蛭は百合子と行動を共にしていた。

百合子が蛭の同伴を必要としたからだ。

「母さん、それで何処に行くの？」

「世界GS本部よ。会長の進言で重鎮に貴女のことを知ってもらおうのよ」

「ふ〜ん、まあいいけど」

頭の後ろで手を組みながら先に行く蛭を眺めていた百合子は耐えていた何かに我慢できなくなり娘に声を掛けた。

「ねえ…………蛭。…………踏み止まってくれないかしら？この間言っていた事」

「ん？何の事？」

「ッ！この間ピート君を交えて話していた時の貴女が言った事よ！」

「…………ああ、あの事。？何で止めてなんていうの？」

「なんでって…………。貴女が自分の命を捨ててまであの二人を甦らせるなんて言うからっ！！」

蛭のあまりの応え方に激昂する百合子。

しかしそれを聞いた蛭は大口を空けて啞然としていた。

それはもう顎が落ちるのではというほど。

「はあ、はあ…………？何間抜けな顔しているんだい？」

高ぶった感情を鎮めつつ息を整えていた百合子は未だ固まっている



蛭を不審に思った。  
しかし次の瞬間蛭は爆笑した。

「……ぷっ、くくく、駄目、笑いを抑えること……出来ないっ！あははははははははっ！」

いきなり笑い出した蛭を啞然と見る百合子。

暫らくして笑いやんだ蛭は百合子を見ながら話し出した。

「はあ、腹が捻じれるかと思ったわ。あのね、母さん？どう考えたらそんな親不孝な事を私がするって思うのよ？って言うか、まさか母さん【も】とはねえ」

「なっ？！あのあなたの様子を見ればそう思うのが普通でしょうがっ！」

「？なんか可笑しかったっけ？」

「あんな泣き笑いしながらあんなこと言えばこういう結論しかないでしょうがっ！？」

「……ああ、あれ。アレは別にそういう意味で泣いていたわけじゃないよ？ただ、なんだかんだ言っただの二人がああいう結末で終わるのが気に入らなかつたから泣いちゃっただけよ？」

「……？それと私の言う事とどう違うと？」

「私は別に自分の命を掛けて復活させようなんて思ってもないわよ？せつかくメドーサや玉藻が恋人になつたっていうのに、何で自分から死ななきゃならないのよ？」

「え？え？」

あまりにあっけらかんと言う蛭に混乱する百合子。

それを気にせず更に言葉を重ねる蛭。

「大体ね？それじゃあ未来のルシオラを復活させる事が出来ないじ

やない！」

「え？それはこの時間軸のルシオラさんと融合させて……」馬鹿言  
つてんじゃないわよっ！！！！」

「何で私がルシオラを犠牲にしなくちゃならないのよっ？！」

「ほ、蛭？」

「大体私が今頑張っているのは現時間軸のルシオラを救う為よッ？  
！なのになんでその思いを帳消しにするようなことしなくちゃなら  
ないのよっ！！！」

百合子の語った方法に激昂する蛭。

だが、それも仕方あるまい。

ルシオラを救う為に頑張っているのにそれを否定するような事を言  
われては黙っている事などできない。

「2年半前ぐらいに玉藻が自分を犠牲に二人を復活させるのを止め  
て……なんて言ってきた時も驚いたけど、まさか母さんがそんなふ  
ざけた事を言うなんてね」

「うっ……ごめんなさい、母さんが悪かったわ」

珍しく愁傷に謝ってくる百合子に毒気を抜かれた蛭は溜め息を吐く  
とそれを受け取った。

「いいわよ、別に。母さんは唯私を心配して言ってくれた事なんだ  
から」

「……ありがとう。……でもそれじゃあどういう方法でルシオラさ  
んを？老師様はさっき言った方法でしか不可能って言っていたけど  
？」

「……ほう、老師が……ねえ」

「ほ、蛭？」

百合子が零した言葉に目を細めて呟く。  
不穏な物を感じた百合子は恐々と窺う。

「……まあいいわ。あつちは後でとして、ルシオラ復活方法だけど  
……ひみつね」

「え？」

「これは命を危険に晒す方法ではないから気にしなくてもいいわよ  
？」

「……なんか納得いかないけど、まあいいわ。それじゃあ太極天は  
？」

「あつちは単純よ。全ての封印を解き受け皿を作ったら演算機で更  
に魂の強度を高めて私の中で眠っている太極天の意思を目覚めさせ  
るだけよ。元が同じ魂とは言え複数の意思を管理する事は私と太極  
天に限っては難しくないからね……未来でのルシオラみたいな感じ  
ね？」

「……ああ、そういうこと。確かにそれなら貴女の存在を太極天で  
塗り潰すなんて事にはならないか」

「そもそも太極天自身がそうならないように細工してあるからね……  
それを私が無理やり深く受け入れる事でこんな状態になっ  
つたけど、これ以上の侵食はありえないから」

「……ルシオラさんたちの影響は出るけど、太極天自身の影響は出  
ないって事ね？」

「そういうこと……はあ、まさか皆がそんな事を思うとはねえ。こ  
れでも私の願いは ゆっくりのんびり心許せる人たちと悠久を生き  
る事 よ？本気の願いって言うのはね、本気だからこそ意味がある  
のよ？」

「悪かったわよ、そう虐めないで」

「へへん、母さんを弄れるなんて早々ないからねえ……どうしよっ  
かなあ？」

百合子は自分をいたずらっ子な目で見詰める娘に苦笑しつつも心より安堵していた。

少なくとも蛭が消えるような事はないと判ったから。心が軽くなった百合子は今晚には皆に訂正しとかないとね、と心に決め蛭の手を取り会議場へと向かう。

「まあ、ともかく行きましよう？未来をよりよくする為に！」

「ああ！誤魔化す気ね母さん！」

「気にしな―い、気にしない！皆が私たちを待っているわよ！」

繋ぐ娘の手を確りと握り締めながら百合子は歩を進めた。

未来への架け橋を作る為に。

此処は白き空間。

最高指導者の長であるキーさんとサツちゃんの集いの場だ。

二柱は先ほどまで蛭の様子を伺っていた。

何気にこの二柱も斉天大聖と同じ穴の貉だったようだ。

「…………はあ、どうやら杞憂だったようです。ハヌマンから聞いた時は如何するべきか悩みましたが」

「全くやな。まあ、ふたを開けてみればありえへんことでさわいどっただけやけどな」

「それは言わないでくださいよ……………というかサツちゃんもでしょう？それは」

「ふふ、ん、どうやらな。ま、何にしろ懸案事項が減った事はええ事や。これでアシュの方に専念できるな」

「ええ、過激派の者どもも正規軍と他の魔王や天使に見張らせてますからな」

「あいつらも偉い張りきつとるからなあ……………正直引くぐらいやで？」

「好いじゃないですか、それが空振りするようなら問題ですがそんな事もないようですし」

「まあな」

「何はともあれ、後一年」

「あんじょー往かせんとな」

二柱は空間に浮かぶ蛍を眺めた後、未来の為に再び動き出した。架け橋を護る為に。

**第十六章 望むべくは明日への架け橋（後書き）**

強引に纏めてしまいました（汗）

次回投稿日は7/25の0時です。

感想お待ちしております。

## 第十七章〈描いしは纏いの戦士達（前書き）〉

二回目のGS資格試験です。

それではどうぞ。

あと後書きにアンケートを載せてあるので宜しければお答え下さい。

## 第十七章 揃いしは纏いの戦士達

規約改定後、二度目のGS資格試験。

これに挑んだのは雪之丞と陰念、ピートの三人。

一日目を無難にこなし、二日目の対戦試合。

特に障害となる者が居ないトーナメントは順調に進み、当初気にしていた美神 美智恵も現れることなく身内同士で潰しあう事もなかった。

面白味のない試合が続きだれてきた頃に準決勝の第二試合が始まった。

先に決勝へと駒を進めた陰念は結界傍で雪之丞とピートの試合を見学していた。

「詰まらん試合ばかりだったが……漸く齒こたえがありそうな奴が来たな！」

「……相変わらずバトルジャンキーだなー（汗）」

目の前の生き生きした雪之丞に少し引きの入るピート。

最もそういうピートも結構乗り気だったりする。

自身のあり方を受け入れ故郷に帰る度に父親に扱かれてきた成果を發揮できるのだ。

そして周りには自身と共に在ってくれる友も居る。

ピートは今この時こそが自分という存在を曝け出す瞬間だと理解していた。

「ま、僕も今持てる全てを雪之丞に味わってもらおうべく……突貫するよッ……！」

瞬間立ち上る闇色のオーラと光のオーラ。



全身から噴き出す魔力とそれを統べる霊力の波動。  
ピートは完全にそれらを引き出していた。

「くくく、いい気合じゃねえか！こつちこそ味わってもらおうぜえ！」  
早くも結界内には両者の放つ霊波が充満しつつあった。

「……………結界大丈夫でしょうか？」  
……………一応前回は参考に強度を上げているから大丈夫だと思いたいけど、あの二人だから心配なわけ」

応援に来ていたおキヌとエミは若干引きつった顔で観戦していた。  
未来では勘九郎の邪魔が入らない限りピートのスタミナ勝ちが予想されていたが、この時間軸ではその予想は当てはまらない。

雪之丞はチャクラを開き魔装術の収速度は未来の勘九郎並み。  
ピートはチャクラこそ開いていない物のより深く吸血鬼の能力に磨きを掛け力の使い方を熟知している。

ちなみに蛭は解説者として厄珍の反対側に座っている。  
既にSS級相当の霊能者である事が通達されているが……………それ以外は極秘情報として伏せておいた。

「さあ準決勝第二試合！伊達 雪之丞選手VSピエトロ・ド・ブラドー選手の試合が間もなく始まります！」

「両名凄まじい選手あるよ！前回の横島選手たちに匹敵する物を感じるある！」

「二人とも鍛えられる部分は余す所無く鍛えてきたからね、かなり派手な試合になるかもね」

「蛭さんはお二人をご存知で？」

「ええ、まあ友人みたいなものでしょうか？力を揮う者としての指導も少しはしましたが」

実況席で会話がされている間も徐々に高まる結界内の霊圧。  
緊迫する空気の中ついに試合開始が告げられた。

「では準決勝第二試合、伊達 雪之丞選手V.S.ピエトロ・ド・ブラ  
ドー選手……始め！」

「おおおおっ！ハアッ！！」

「おおつと?!突然雪之丞選手変身しましたあ?!」

「アレは一体っ?!」

「あれは魔装術。魔族の血を媒介に己の潜在能力を発揮する術よ」

「ま、魔族ですか?!」

「別に魔族事態は悪い者ではないわよ?人界ではどうも誤解されて  
いるけど本来忌み嫌われる対象は闇の衝動に落ちた悪魔の方なの」

「?魔族と悪魔は違うと?」

「人に悪人、神族に悪神がいる様に魔族にも悪魔がいるわ。ようは  
その心が大事なのであって魔族というだけで悪と断ずるのは愚か者  
以外の何物でもないわ」

「な、なるほど」

生中継ではないとは言え多くの霊能者が集うこの場を利用して螢は  
魔族の印象を変えようとしていた。

曲がりなりにもSS級の権威は強力であるだけに多くの者が螢の言  
葉を真摯に受け止めていた。

中には馬鹿にするような者や嫌そうな顔をする者もいたが。

「凄まじい収速度だね……でも僕も負けていないよ?我が力と大い  
なる自然の力よ、今こそ一つになる時!ハアッ!!」

ピートが己の魔力と霊力を融合させまるで羽衣のような灰色のオー  
ラを身に纏う。

「な、なにっ？！お前も魔装術をっ？！」

「これは魔装術ではないよ、光と闇の融合霊装さ。相反する力を混ぜる事で莫大なオーラを身に纏う事ができる僕の奥の手だっ！！！」

「……くくく、おもしれえ！じゃあどっちがより上に往けるか……勝負だっ！」

雪之丞は全身から更に霊力を上乘せさせるとそれを推進力にして一気にピートへと襲い掛かった！

「至近距離から喰らえっ！連続霊波砲ッ！」

「喰らうかつ！バンパイアミストッ！聖魔光よ！我が敵に裁きの鉄槌を！ハアッ！！！」

繰り出される霊波砲を霧になることで避けたピートは融合された莫大なオーラを攻撃に転換して雪之丞に放った！

稲妻のように放たれたそれは目標を失い失墜しかけていた雪之丞に直撃した！

「グアアアアアアッ？！く、くそっ、まさかあの至近距離で霧になれるとはっ！だが、これしきでは俺を倒す事などできんぞっ！！！」

「……急所に直撃した筈なただけどな、流星は雪之丞といふべきか」

「は、速いつ！目で追う事ができないほどの戦闘スピードです！」

「ピートもかなり錬度を上げているわね……でもまだ甘いわね」

一見ピート優勢に見えるが、蛭はピートの融合具合が若干緩い物である事に気づいた。

そしてそれは雪之丞も直感で気付いた。

「相反する力を統べるには多大な集中力と体力がいるはず。……

狙いは、其処だアツ!!!」

「な、なにっ?!」

雪之丞は上空にいるピートの背後に回り飛び上がると、その背中に靈気の波動を強引に流し込んだ!

突然加えられた力にピートは力の均衡を保つ事が不可能になり融合していた力が崩壊を起こし爆発した!

咄嗟に離れた雪之丞は顔をガードし衝撃に耐えピートの様子を伺った。

「い、一体何が起こったのでしょうか!? 雪之丞選手がピート選手の背中に波動を送った途端爆発が起きましたあ!」

「あれはピートのコントロールしている力の均衡を崩したから起こった現象だね。意識しにくい背中に大量の力を加える事でコントロールを誤らせたのよ」

「なるほど! 莫大な恩恵を受けるだけにその制御もシビアだという事ですね? しかしピート選手大丈夫でしょうか?」

「咄嗟に内から波動を搾り出す事で直撃は避けられたみたいだけど… たぶんかなり消耗したはずよ?」

煙が晴れた其処にはかなりのダメージを受けたピートがいた。

しかし全身にかなりの傷を負ってはいるが目の輝きは些かも衰えていなかった。

「くっ…まさか此処までの確に弱点を突いてくるとは。素早い判断だね」

「思考能力もかなり修行したからな、師匠連中も厳しかったし。…こうしている間にもかなり回復しているな」

「何、ここらが限界さ…今はね。でも、もう少し付き合って貰うよ?」

「望むところ！」

ピートは両手に霊力と魔力を防御の分以外集め纏うと雪之丞に向かって走り出した。

雪之丞は油断することなく構えを取るとピートの両手の拳を迎え撃った。

ピートの攻撃は雪之丞の魔装術を片腕だけ綻ばすもカウンターで受けたダメージによりついに力尽きた。

「……ッ！流石だな、あの状態から此処までの攻撃を搾り出せるとは……満足いく試合だったぜ」

「勝者、伊達 雪之丞！」

「ピート選手果敢に攻めるも攻略できず敗退です！決勝に駒を進めたのは雪之丞選手でした！」

「最後の攻撃をあえて受けたのは雪之丞の覚悟の現れでしょうね……試合だからいいけど、実戦では褒められた行動ではないわ」

ピートの気持ちに付き合った雪之丞の行動を解説する蛍。

蛍自身としては別に構わないと思っっているが一応解説ゆえに模範的な答えを言っておいた。

実戦では僅かな傷が命取りになるのだから。

「ちえ、師匠は厳しいぜ」

「僕としては受けてくれた事に感謝したいけどね。確かに実戦であいづのは良くないよ？」

「解っているさ。実戦では相手の力を発揮させる事無く打倒若しくは無力化するのが好ましい……だろ？」

蛍の言葉に拗ねる雪之丞だが理解はしていた。

散々師匠たちに教え込まれたからだが。

「さて、10分後には決勝だ。どっちが勝つか……じっくり見学させてもらうよ?」

「へっ!俺が勝つところを良く見ておくんだな!」

雪之丞はそういつとタオルを取りにいった。

「なまじ冗談には聞こえないから凄いやね」

ピートは雪之丞の言葉に苦笑するとエミたちの所で観戦するべく足を運んだ。

「さて、残す所決勝戦のみとなりましたがどうなるでしょうか。前回と同じく同門の出である二人の対決に目が離せません!」

「この二人は共に横島家に所属する門下生ある!前回の美人の姉ちゃんといい素晴らしい逸材が揃っているあるね!」

「流石にこれで打ち止めだけどね?彼らには妙神山直属横島総合才カルト対策事務所でもらう事になっているわ……面接で落ちなければだけどね?」

「世界GS本部直属の事務所あるね。既に数々の難解な霊障を解決している事でも有名あるよ!」

厄珍が言うように横島家の事務所は世界GS本部の直属という事になっている。

これは前回開かれた会長会議で決められた事で、世界各国からの高難易度の要請を受け持つ代わりに認められたことだ。

強権により美神 美智恵が横島家に要請を出してこないようにする為の処置の一環でもあったりする……代わりに横島家に権力が集まりつつあるが。

「それではそろそろ決勝戦の方に移りたいと思います！」

「既にコート内で両者共に瞑想しているね。霊力の張りも十分……勝敗を分けるのは引き出しの多さか粘り強さか若しくはペース配分か」

「引き出しというと陰念選手でしょうか？未だ霊波を使った攻撃しかお披露目されていませんが」

「ん？二人はそれなりに互いの手を知っているからね……まあ、でも陰念ならあるかもね……とっておきが」

両者が霊力を練り氣勢を高めていく中、刻限はやってきた。

「それではGS資格試験実技の部、決勝戦！伊達 雪之丞選手VS陽導 陰念選手……始め！」

『おおおお ……ツ！ハアツ！！』

「おおつと？！両者共に魔装術を展開しました！」

「陰念のは魔装術ではないよ。影装術……己の影を纏い地力を上げ更に影になる術よ」

「影装術ですか！今回は先のピート選手といい何かを纏う選手が多いですね！」

共に己の力を底上げする術を展開した後、膠着状態へと入った。

少し前までの陰念ならばこれは自殺行為ともいえる行動だが、今現在は既に術の制限時間を克服している。

故に最初から展開しているのだ。

「中々上手くなっただじゃねえか、陰念！ちょっと前までは制限時間に悩まされていたっていうのによ！」

「日々鍛錬の賜物だ。蛭様への敬愛の念を忘れず常に精進を続けてきたからこそ此処まで来れた。……雪之丞、覚悟しろ！」

「……くくくくく、好い闘気じゃねえか！」

自身を圧迫する鬪気に更なる笑みを浮かべる雪之丞。

陰念は鬪気を雪之丞にぶつけると影装術の真価を発揮する！  
印を組み影操術で黒豹を3匹ほど造り上げると自身も黒豹へと変貌したのだ。

「な、なんと！陰念選手黒豹へと変身しました！」

「影装術の特性の一つは自分のイメージをそのまま自身の姿に反映できる事よ」

「カアアア………」

陰念は口から霊波砲を吐き出し地面にぶつけると煙幕代わりにした。

「くっ？！霊気の煙幕かつ！………！チイッ」

「コッコガアッ！」

煙幕の中、霊波によって雪之丞の位置を特定し影操術の黒豹と連携して爪や霊波砲で攻める。

同士の互いの位置は術自体で繋がっているので問題ない。

雪之丞は黒豹を視線で捕らえながらも攻撃はしなかった。

「クソッ！陰念本体の場所が掴めねーっ！影操術の奴に攻撃すると爆発しやがるしっ！」

そう、雪之丞が無闇に攻撃しないのはその為である。

修行の合間、互いの術の有用性を研究している間に幾つかは自身の身を持って知っているのだ。

故に本体以外には手を出さない……爆発の規模が結構洒落にならな  
いからだ。



「……影豹爆砕陣、また厄介な術を出したわね陰念」

「それはどの様な陣なのですか？」

「自身の霊波と似せた触れると爆発する黒豹で囲い攪乱しながら襲うというものよ」

「……容赦ない戦法あるな（汗）」

螢の説明に顔を青ざめさせる厄珍と実況者と観客。こうして話している間も黒豹の攻撃は続いていた。

「あーッ！うざってえっ！ハアッ！！」

雪之丞は手を下に翳すと霊波砲を撃った！

その勢いを持って上空へと飛び上がり爆風で黒豹の接近を阻む。

「くらえっ！連続霊波砲っ！！」

「だがそこには既にいない」

「?!」

上空から霊波砲で一掃しようとした瞬間、背後から陰念の音が響いた。

慌てて振り返ろうとした瞬間、光が視界を覆った。

「ッ！目がっ!？」

「沈めっ!」

陰念は雪之丞が体制を崩した瞬間、その背中に向けて霊波砲を放った！

「くっ！だがこの程度っ！」下は地雷原だがな？」「!？」

撃たれた雪之丞は何とか耐え切るも下で未だ健在だった黒豹に向かつて落ちていった。

刹那、コート上にひときわでかい爆発が起こった。

「あ………つとこれは決まったかあ………  
っ！？」

「いやそれ以前に大丈夫あるかっ？！」

「まあ雪之丞なら死にはしないわ。それに………まだ終わっていないわよ？」

「?!」

蛭の言葉に再び結界内を窺うところには先ほどより重武装になった雪之丞がいた。

魔装術のフォルムが重厚になっただけでなくその表面には赤く燃えるオーラが漂っていた。

「………ッ、ふう何とか間に合ったぜ！魔装術の発展系………爆炎装甲！！」

「ッ?!発展系だと?」

「ふっ、俺だつて闇雲に鍛えていたわけじゃあないさ!………さて、こいつを纏っている限り爆発は無意味だぜ?」

赤いオーラを撒き散らしながら陰念と相対する雪之丞。

対する陰念は焦っていた。

此方は攻撃を受けてはいないが霊力の方はどんどん減ってきている。いくらチャクラを廻せば回復できるといっても限度がある。

先ほどの黒豹には結構な霊力を練っていたし制御にもかなり神経を使っていた。

故にその限界は近かった。

「（まだだ、この程度で諦めてなるものかつ！）影よッ！集いて我が矛となれっ！閃裂影槍刃！！」

陰念は残った霊力を持って影を練ると巨大な黒い矛を造り出した。宙に浮くそれは正確に雪之丞を指しており練られた膨大な霊力がうねっていた。

「……随分物騒な物造り出したじゃねえか（汗）」

「まだ終われんよ……全てを吐き出したわけではないからな。我が渾身の一撃、受けるがいいっ！！」

陰念はそう叫ぶと矛を手にし僅かに残った霊力を持って影操術を発動させた。

そして一足飛びに雪之丞へと接近すると迎え撃つ彼ではなく影へと突き刺した！

「?!影につ？」

「くらえっ！影操術奥義、縛影爆刃！我が力を身動きの取れないまま味わうがいいっ！」

「ッ！う、動けねえ?!……………ッ、矛がつ!？」

身動きの取れなくなった雪之丞を他所に影へと沈んでいく矛。

陰念はバックステップでその場を離れると印を組み矛へと呪力を注ぎ込んだ。

「縛影爆刃……己の霊力で編んだ影の矛を相手の影へと突き刺し影縫いで身動きを取れなくし、矛が完全に沈み込むと同時に爆発を起こし肉体と霊体にダメージを与える術。防御力が意味を成さないあの術を雪之丞はどう対処するかしら？」

「なんとも恐ろしい術です！あぁっと、そう言っている内に矛が陰

念選手の後押しによってどんどん影へと入っていきます！雪之丞選手危うし！」

呪力を得た矛が一気に影へと入っていく中、雪之丞は爆炎装甲を普通の魔装術へと変換すると霊力を内で練り始めた。

そしてついに矛が影へと内没したと思いきや……足場が輝きだす！

ドゴオオオオオン！！

コート自体を吹き飛ばすその爆発は確実に雪之丞を巻き込んだ。

陰念はチャクラを何とか廻し僅かに回復した霊力を防御に廻して爆発から身を守ると油断なく状況を確認した。

「す、凄まじい爆発です！結界内は大丈夫でしょうか？！」

「あれは痛いあるよ！確実に直撃したあるね！」

「これで雪之丞が無事なら陰念の負けね。陰念にはもう力は残っていないから次の攻撃が対処は出来ないでしょうしね」

結界内に充満する霊気の爆発とそれによって舞い上がった粉塵による連鎖爆発はコート上を蹂躪した。

やがて煙も晴れ視界が戻ってくるとそこには何とか防御姿勢で爆発を耐え切った陰念と顔面防御の姿勢で全身血塗れになった雪之丞がいた。

疲労困憊の体ながらも慎重に雪之丞の様子を確認しようとする陰念。しかし、それは必要なかった。

「……ッ、な、何とか耐え切ったぞっ！それでもってこれで終わりだっ！！魔穿拳！！！」

「！！！！！！ガハアッ！」

雪之丞は突如腕のガードを下げたかと思うと一気に接近して陰念の鳩尾を捻りが加えられた霊拳で打ち抜いた！  
ギリギリの所で持っていた陰念にそれを耐え切る事ができる筈もなく静かに床へと沈んだ。

「そこまで！勝者、伊達 雪之丞！！」

「決まったあ………！！ツ！！優勝は伊達

雪之丞選手です！」

「よくあの爆発に耐えたあるねえ！どういう構造しているあるか？！」

「あれは爆発の間際に体内で霊力を練って霊体へのダメージを軽減したのね……結局勝敗を分けたのは霊力の配分かしら？影豹爆破陣の時にはもう少し攻撃に工夫を混ぜていたら違ったかもね」

後は耐久力の増強が命題かしら？と呟く蚩を他所に試合の最終結果が発表された。

優勝：伊達 雪之丞

準優勝：陽導 陰念

三位：ピエトロ・ド・ブラドー

なお、雪之丞はC級からとなる。

次の日の面接も無難に済ませた三人は明けて翌日意気揚々と事務所へと赴いた……敷地内だが。

「さて、これで事務所の人員はほぼ揃ったわけだけど……如何しようか？」

『……………はあ』

所員を集め今後の話し合いとなったが蚩の言葉に皆が揃って脱力した。

「……蛭様、今日は各員の割り当てと今後の予定を言うつのではなかったのですか？」

「あ、そうだったわね。んじゃ、まず割り当てから発表しましょう！」

九琉のツツコミに冷や汗を垂らしながらも誤魔化すように話を進めた。

蛭は応接間の机に置かれていた資料を配ると説明しだした。なお資料の内容は以下のとおりである。

妙神山直属横島総合オカルト対策事務所所属員名簿。

所長：ドクター・カオスⅡ A級 / 横島 エミⅡ A級。

副所長：横島 九琉Ⅱ A級。

顧問：横島 蛭 / 小竜姫 / メドーサ / 玉藻（但し全て秘匿されている）

事務所管理人：人工幽霊番号。

経理：横島 百合子。

営業：横島 大樹。

事務員：横島 おキヌ。

所員：伊達 雪之丞Ⅱ C級 / 陽導 陰念Ⅱ D級 / ピエトロ・ド・ブラドーⅡ D級

#### 除霊担当配置

総指揮官及び後衛：横島 エミ / （ドクター・カオス）

前衛指揮官：横島 九琉

前衛：伊達 雪之丞 / ピエトロ・ド・ブラドー

遊撃：陽導 陰念

#### 来年までの基本方針

基本方針は前年と変わらず。

雪之丞、陰念、ピートの三人はランク上げに専念すること。但し心ある除霊若しくは浄霊を心がける。

常に相手の立場に立って考え、しかし自分の考えもきちんとして持つ事！

「というわけで、三人は当面はB級を目指して頑張つてね？」

『了解！』

「カオスとエミ姉さんはこれまでどおりで、九琉は後で妙神山に行きましよう」

「？何かありましたか？」

「少し思いついてね、貴女には新術に挑戦してもらおう……真装術にね？」

「真装術……ですか？」

「そ、せっかく前衛組みが皆して装術を修めているからね。それに九琉はキャパシティーに大分余裕があるみたいだからそれを生かそうと思つてね」

蛭としては九琉に将来事務所を引き継いで貰いたいと思つている。

どうにもエミは百合子の後を継ぐ形になりうる可能性が出てきたからだ。

そしてこの事務所は世界で最も注目される事になるであろう事は想像に難くない。

故に九琉には更なる可能性を魅せてもらいたいと思つたのだ。

最も無理強いする気はない。

未来でその才能……というより能力で悲惨な目にあつた身としては同じ徹を踏ませるわけにはいかないからだ。

「真装術の特性はあらゆる可能性……というほど凄くはないけど、耐性や向性が増強する能力があるわ。その速度は微弱な物だけど錬度を重ねるほど自身と共に成長するの」

「……それは凄いですね。私に扱えるのでしょうか？」

「この術の契約条件は三つ。

? 霊力値が素で150マイト必要。

? 肉体と霊体の誤差が限りなく0に近い必要がある。

? 私こと蛭との契約ラインが引かれるので私を受け入れられない者には契約不能。

この三つよ。つまり貴女専用といってもいいものなのよ」

「蛭様……分かりました、謹んでご契約させてもらいます」

「うん、これに成功すれば何処に居ようと常時私に念話を届ける事ができるようになるから上手く活用してね?」

「はい」

「さて他の人……特に母さんと父さんは会社の方もあるけど後続が出てくるまではよろしくね?」

「なに構わんさ。仕事の合間に出来る事だからな」

「そうね、再来年には確実に手も空くだろうし……ね」

少なくとも両者の後続候補は考えてある……本人の意思を確認する必要があるが。

「んじゃ……次に今後の予定だけど、近い内に中世に飛ばうかと思っ  
っているわ」

「むっ? いやいよ行くわけか……わしが聞くのも可笑しいが、誰を連れて行くのだ?」

「ん、最初はマリアとテレサで行こうと思っただけだね。テレサ今整備中でしょう?」

「うむ、電気信号系統と霊力伝達系統の互換性を向上しようと思っ  
ての……オーバーホール中だ」

「だから、マリアと行くわ。未来じゃあ充電が不十分で苦労したけど  
今回はそんな事もないし武装もより向上しているでしょう?」

「……そうだな、それにの方が安全か。文珠の出力的に」

「ええ、既に私の霊圧は中級神魔のそれだけど時間移動はかなり精



密に行わなければならないからね」

「人造人間であるマリアやテレサならともかく人間が混ざると制御も困難になるか？」

「そういうこと」

「しかし師匠、いつの間にそんなに霊圧上げたんだ？つい此間までは確か1500マイルって言ってたよな？その時点でもスゲーけどよ」

「ああ、今まで集めてきた力の結晶を吸収したのよ。死津喪比女の新芽やベリアルルの魔核なんかをね」

「なるほど、今まで完全消滅を避けてきたのはそういうことですか」「別にこの為だけじゃあないけどね？太極天の封印は解きさえすれば後は吸収した物を吐き出しても問題ないから」

蚩は懸案事項が解決した後、吸収した彼らを解放して問題のない状態で復活させる心算だ。

容易く出来る事ではないが、これぐらい出来なければ自身が成そうとしている事など実現不可能だと自身に喝を入れている。

「それでカオスには過去の自分やマリア姫に手紙を書いて欲しいのよ、混乱や誤解をされない為にね」

「分かった、後で用意しよう」

「あと、メドーサがアシユタロス陣営から見切りをつけられたわ。

これからはいつどのタイミングでどういう魔族が来るか不確定だから気をつけるように」

「……なるほど、だから今中世に行くのだな？不確定要素が強くない内に」

「そういうこと」

「師匠、メドーサ様はどうなるんだ？」

「別にどうもしないわ……メドーサ自身は妙神山にいるから狙われる事もないしね」

「確かに、それなら心配無用ですね」

「さて、このぐらいかな？母さん達は何かない？」

「それじゃあ私から……家の事務所は基本世界GS協会本部の依頼を優先していくわけだけど、とりあえず再来年までは各自チームを組み依頼をこなして頂戴ね？特に三人は思いがけない突発的な出来事に対応できるように色々な依頼をこなす事を心がけてね？」

『分かりました！』

「あと蛭、ザンスの国王陛下が貴女にこれをつて……ザンスが誇る王の精霊獣石が宿る王冠の次に位階の高い女王の精霊獣石の首飾りよ。これは委任状ね」

百合子はそういつて精霊石が散りばめられた煌びやかだが落ち着いた雰囲気的首飾りと書状を差し出す。

「……そういえば騎士に任命されていたっけ。しかし、女王の精霊獣石ねえ（汗）」

「素晴らしい装飾ですね」

「わー、豪華ですねえ」

「ふむ、見事なカツティングだな。こればかりは真似出来ん」

「貴女は異国で自由に精霊獣を行使する事ができる権限を国王陛下並びに重臣たちに認められたわ。だから必要と感じたら好きに使いなさい」

「……まあ、一つの手にはなるか」

「私からは以上よ。貴方の方は何かある？」

「ああ、美神 美智恵のことだな」

百合子の確認を受けた大樹が前に出る。

「先日黒崎君の調べである者の協力者が政府中枢に複数人居る事が判明した。中には大臣クラスも居るとのことだ……嘆かわしいがな」

これで軍部の一定の掌握に加えそれを御する上もあつちに渡つちま  
つたつて事だ」

「ふん、まあいいんじゃない？ようはそれを揮わせることなく事  
態を治めたらいいんだし……大きすぎる力は諸刃の剣だよ？私には  
そこまでのものをリスクも無しに揮えるとは思えないけど」

「ふむ」

「それより私はそれらを掌握した過程が気になるわ。一体どうい  
う説明や説得で味方に引き入れたのか……もしかしたら未来を垣間見  
ているかもしれないね、何処と繋がった未来かはともかく」

「！それはつまり、あの者が本来の時間軸の美神 美智恵だと？」

「若しくはこの時間軸の未来から来たか……もしそうなら既に此方  
の手は読まれているでしょうからこれはないと思うけど」

「何にしても決め付けは良くないであろう。物事は柔軟に対応して  
こそ被害を抑えられるからな」

「確かにカオスの言うとおりだね……なら警戒すべきはイベントの  
起こりうる時だね、先回りか偵察か情報収集かはともかくね」

「そこら辺は我々とテレサ君とヒヤクメさん辺りで対応するしかあ  
るまい」

「まーね」

そんなこんなで話が終わった集まりは解散と相成った。

明けて翌日、早速真装術の契約を執り行う事となった。

この術式は蛍の血を媒介に行われる物でその魔法陣は精密かつ  
複雑な物だ。

何せかのアルテミスを召喚するものと同じ規模なのだ……お蔭で書  
かされた鬼門たちは疲労困憊の徹夜明けである。

「お疲れ様鬼門、後でおいしい物持ってくるから今は眠ってなさい」

『何のこれしき……でも今は御好意に……甘えさせて……貰います、

ぐー」zzz

「という訳で、契約を執り行つわよ」

蛭は返事の後死んだように眠りに落ちた鬼門を背に九琉に告げた。対する九琉は余りの大きさに口を大きく開けて呆然としていた。

「何と言うか……凄いですねえ。これほどのものが必要なのですか？」

「私の血を媒介に契約するからね、余計な物が九琉に混じらないように予め選別するのに必要なの」

「余計な物ですか？」

「そ、私の因子に付着している未来の情報が痛みとして貴女に襲い掛かる可能性があるからね。因子その物は私専用に調整されているから他人に渡つても恩恵は受けることが出来ないし」

言い終え九琉を中心に座らせ契約の祝詞を唱える蛭。

それと共に蛭の血を摂取する九琉。

瞬間魔法陣が光を放ち目まぐるしく効果を発揮し始める。

「……天は地に、地は天に全ては流転すべし。力は心へと返り、心は魂へと返る。太極天の名の元、我が力の恩恵をかの者に！目覚めよ、護星魂鎧魔法陣！」

光り始めた魔法陣の上空、九琉の頭上に対極図に似た魔法陣が出現する。

辺りを照らす光は魔法陣が静かに九琉へと浸透していくとやがて収束した。

「……無事成功したようね、九琉とのパスが確認できたわ。九琉、自身に纏う感じで霊力を発露して見なさい」

「は、はい！……ふう、――――ハアツ！」

気合を入れ靈力を発現するとそれは九琉の体に纏いつき瑠璃色の羽衣となった。

「これは……？」

「真装術は魔装術や影装術と違って魂の防御力を増加させ身の守りに上乗せする術なの。今の貴女の錬度で最適な防御形態がその羽衣なのよ」

「ではもつと錬度を上げれば？」

「最終的にどのような形態になるかは貴女のありようによるわ。例え形態が変わらずとも心配は要らないわよ」

「分かりました、精進します」

「それじゃあ私はこれからの準備をするから、九琉は雪之丞たちのことよろしくね？」

「はい、お任せを」

その後、蛭たちはそれぞれ自身のすべきことをこなす為に行動を開始した。

九琉は雪之丞たちの監修の為に。

蛭は中世へと飛ぶ為に。

## 第十七章〈揃いしは纏いの戦士達（後書き）

締めが緩いですね。

いつもの事ですけど（涙）

こちら辺は書き溜めていた章なのでまだよこっち側が主体になっています……改訂版をお待ちしていただければ幸いです（汗）

只今アンケート実施中！

宜しければお答え下さい。

アンケート内容

？逆行編改訂版を改訂前の物を残したまま掲載するかどうか？

？新作（現段階ではおそらく現実 横島憑依物）のご要望。

他にもご要望があればお書き下さい。

？少し先の話ですが、刹那の愛の反逆の第一部及び第二部のエピソード（各キャラのその後）以外で書き上げた方がいいと思われる話のご要望。

これは改訂版の時に反映される場合もあります。

次回は7/28の0時です。

感想ご意見お待ちしております。

第十八章 幻想溢れる過去への誘い（前書き）

中世編です。

マリア姫の口調がどうも上手く書けません（汗）  
それではどうぞ。

## 第十八章 幻想溢れる過去への誘い

SIDE 蛭

逸る心を戒めながらも依頼の確認をするべく協会へと足を運ぶ九琉と雪之丞たち。

そんな彼らを他所に私とカオスとマリアは事務所の一室で逆行の準備をしていた。

「といつても私自身は用意する物など食料ぐらいだ……それも母さん達が用意してくれたが。」

「しかし、随分と細かくなったのねえマリアの武装。従来の二分の程度まで縮小しているんじゃないの？」

「まあな。そしてその分武器の増量とより重厚な防壁を得るに至ったわけだ。霊力変換装置の方も高性能になったからバッテリー切れが起こる可能性もぐんと減ったしな」

「そういえば文珠で回復可能だったっけ……便利なものね。ところでさ、あの衣装はどうにかならないの？」

「……あればっかりはな、マリア自身が己の正装と完全認識しておるからな。この前も、蛭お嬢様のメイドとしてこの衣装だけは譲れません！……なんて言っておったからなあ（汗）」

「……（汗）」  
「まあいいのではないか？自己保身が向上するのはいいことだ、あやつらはアンドロイドだけあって己の保身を度外視する傾向が強いからな」

「そういえばそうね、未来でもそうだったし……大気圏突破の時とか特に。」

「まあ今回はそんなことさせるつもりは一切ないけど……ね。それはともかく。」



「……ふむ、やっぱり聞こえてこないわね。当たり前かもしれないけど」

「何のことだ？」

「未来じゃ中世に逆行する前に美神 美智恵のテレパシーを受け取ったんだけど……まあ、時期も違うし仲間でもないから届かないのは当然よね」

「ふむ、今回は此方が行く時を決めておるしあやつは係わらんからな。……なんだかんだ言って他人を巻き込んでいたというわけか？」

「逆行は私が充電中のマリアに触った事が第一の原因だけだね」

「それを知っていてなお止めずに巻き込んだわけだろ？ 娘を魔族との戦いになれさす為に」

まあそうなのかも知れないけどね……どうでもいいことだから必要以上には気にしないけど。

「ま、それはともかく準備は整った？」

「うむ、整備は万全、エネルギーも問題なし、過去のマリア安置場所の記録も問題なくインプットされておる」

「全て正常に稼動しております、蛍お嬢様はご心配なさらず」

「そこら辺は信じているわ、こっちも体力霊力共に万全。手紙と食料も持ったし文珠も十分あるわ」

「複数操作とイメージングも大丈夫か？」

「ええ、時空震はあまり起こさない方がいいから試してないけど複数操作なら10個は余裕よ。増やしすぎても余り意味はないからこれ以上は増やすつもりはないけどね」

「まあ、座標はマリアが担当するから今回は時間移動そのものを引き起こしたらOKだ」

「つまり 時/間 逆/行 移/動、あとマリアを伴う為の 同/伴 で良いわけね」

「それで十分だろうな……マリアよ、こやつから目を離してはならんぞ？ 監視の目がないとどうも無茶をするからな」

「ご心配なく！ 必ずやその様な事阻止して見せましょう！」

「……カオス（汗）」

恨みがましく見詰めるも知った事かとはかりにマリアに念押しするカオス。

自業自得なんだろうけど……目の前でやってほしくないなあ（涙）その後、残っていた者たちに出発の挨拶を済ませると私たちは過去へと飛んだ。

S I D E O U T

ICPO超常犯罪課イギリス支部社。

時を同じくして動き出す者が此処イギリスにも居た。

この日オカルトGメンに勤める西条 輝彦（27）は支部長に呼び出されていた。

昨夜も民間のトラブルに対応していた彼は些か寝不足気味だったが、上司を待たせるわけにもいかず出社した。

「おお、すまないね西条君。昨夜の急なトラブル対応で疲れているところを呼び出して」

「いえ、お気になさらず……それでどの様なお話ですか？」

「うむ、君も知ってのとおり世界GS本部が規約改定を実施したことは知っていますよ」

「ええ、前から民間GSたちの暴利には頭を痛めていましたからね。よくやってくれたと思っていますよ」

「ん、確かに民間GSの改善は喜ばしい事だ。しかしそれ故に我々オカルトGメンは存在の必要性を問われている」

「まあ、そうですね。いくら最高の装備が使われようと適度な

依頼料と安全性に装備の充実さまで備われれば身近で足の速い民間の方が喜ばれるでしょうね」

西条としては貴族である自分は社会に貢献するのが義務だと確信している。

そして此処数年で行われた民間GSの革新は西条にとって実に素晴らしい事だと思っていた。

そして例えその為にオカルトGメンの存在が危ぶまれようとそれも致し方無しと考えていたりもする。

「確かに世間のオカルト事情が明るくなるのは善い事だ。しかし貢献している我々の立場が危うくなるのは見過ごせない！」

「しかし見返りを求めるのはどうかと思われませう。豊かな我々が社会に貢献するのは当然ではありませんか？」

「……それは君が恵まれているからこそ言えることだ。家族を抱え養っていくという事は君が思っているほど楽な事ではない。ともかくだ！君には日本支部設立に従事してもらおうよ？」

「日本支部ですか？」

「これは君の師であった美神 美智恵君からの指示でもある。君が一つの支部を任せられる程度になったら日本へと送り出してくれという……な」

「先生の……指示ですか？」

「日本に居る娘さんの相方になつて支えて欲しいそうだ。娘さんの方も最近GS資格を取ったようだし好いんではないか？民間GSではチームを組まねば除霊も出来んから今のうちに此方に引き込んでおけば良い戦力にもなるだろうし」

「令子ちゃんですか……分かりました、それでは荷物を纏め次第支部設立に従事します」

「うむ、頼んだよ」

話が終わり退出する西条。  
暫らくして部屋の隅から現れる美智恵。

「これでいいのかね、美智恵君？」

「ええ、お手数掛けました。とりあえずはこれでいいですわ」

「しかし、未来の情報というものは凄いな……被害が出る前に靈障を抑えることができる等稀だからね」

「それほどでもありませんわ。それにこれに頼りきりになるのも良くない事です……己の靈感を磨きぬいてこそ真の靈能力者なのですから」

「確かにそうなんだがね」

「では失礼します……決戦の日までもう僅かですから」

「うむ、此方の戦力もその日までに集結させて置くよ」

「お願いします」

こうしてイギリス支部社で行われた密会は終わった。

果たしてこの美智恵はどこまでの未来を知っているのか？

部屋の会話を傍受していた黒崎は頭を悩ませる事となった。

S I D E    マリア

蛸お嬢様の能力により過去へと飛んだ私たちは現在カオス様の秘密研究所に居ました。

どうやら座標は問題なかったようです。

「マリア、現在時刻確認してくれる？未来では確か1242年11月2日だったはず」

「了解……外に出て確認してみます」

「外には誰も居ないのよね？」

「周囲一キロ機械反応も生命反応も霊体反応もありません」

「それじゃあ出てみましょうか」

蛭お嬢様先導の元外へと出るとそこは滝の裏でした。  
蛭お嬢様がしきりに頷いているところを見ると未来と同様だったようです。

私は現在時刻を測定すべく夜空を見上げました。

「……測定完了、現在時刻23時15分39秒……11月1日……  
西暦1242年!!」

「約一日更に遡ったってことか……ということは」

蛭お嬢様は御顔に手を当て考えに耽り始めます。  
では私は周囲を偵察しておくとしたしましょう。  
五分もしなかつたでしょうか？思考の海から帰還したお嬢様はとりあえず今日は此処で休む事にすると仰いました。

「明日の今頃村の近くにガーゴイルが接近する筈だからね……そいつをカオスのバロンが倒す前に意識操作するの」

「バロン……記録によれば私の前に開発された機械犬とあります」

「そ、貴女からこつちの意思に従うように信号送れない？」

「……恐らくは可能かと」

「それじゃあ今日はもう休みましょう。悪いけど此処と村周辺のサ―チは常に行っておいてね？」

「了解しました、お休みなさいませ蛭お嬢様」

「お休みマリア」

私は備え付けのベットで眠りについた蛭お嬢様の傍に腰掛けると早速サ―チを開始した。

此処は私たちにとって決して安全とは言えない土地。

蛭お嬢様の安全は最優先で確保すべき事柄……決して油断はいたしません。

翌朝、辺りに光が射す頃蛭お嬢様はお目覚めになりました。

私は蛭お嬢様に頂いた文珠のお蔭で万全な状態です。

明け方近くなつた時村から数キロ離れた所に巨大な反応がありました……恐らくガーゴイルでしょう。

それを告げると蛭お嬢様は今から行動を開始すると言い出しました。

「前回というか未来は深夜だったけどそれに合わせる必要はないからね、マリアは村周辺を探りバロンへと命令を送っておいてくれる？ 私はガーゴイルに村とは違う方向に行くように操るから」

「蛭お嬢様をお一人には出来ません！」

「大丈夫だって、別に戦闘なんてしないし今回の優先事項は村人の安全と又ルに情報を渡さない事だからね」

「……無理はしませんね？」

「くす、しないわよ。する所なんてないしね」

心配の念は尽きませんでした。確かに今現在はまだ大丈夫と判断し別行動を取ることになりました。

……一度決めたからには迅速に行動すべし、そう心に決め行動を開始しました。

S I D E O U T

今蛭の視線の先には怪鳥型のガーゴイルが徘徊していた。

蛭自身は完全に気配霊力共に隠蔽しているので察知される事はない。

「さて、マリアにああいった手前無茶は出来ないからね……手早く文珠で意識操作しますか」

蛭は意識下から双文珠を三つ取り出すとガーゴイルに向けて発揮し

た。

隔／離 操／作 の効果は直ぐに反映され、蛭はガーゴイルに緩やかに村への進行方向からずれるように指示を出した。そしてもう一つの双文珠をガーゴイルの背中に引っ付けるとその場を後にした。

替わってマリア。

村近辺まで近づいたマリアはバロンの位置を探り当て把握すると物影から信号を送った。

味方判別機能で味方と判断したマリアに近づくと指示を待った。

「バロン、我らの造物主で在られるカオス様の盟友蛭お嬢様の言葉をマリア姫に伝えてください」

「ア、ウツ!!」

「『私はドクター・カオスの盟友・横島 蛭、現在の問題を解決するべく訪れた者。是非、カオスの秘密研究所までお越し下さい』…ではお伝え下さい、途中人造モンスターと会わないように注意を」

「ア、ウツ!!」

指示を受けたバロンは速やかに実行へと移った。

バロンを見送ったマリアは蛭と再び合流するべく研究所へと戻った。

S I D E 蛭

あの後再び研究所で合流した私は姫を待つ間ガーゴイルをなるべく村から離すべく指示を送り続けていた。

夜も更け暫らくするとバロンと人の気配が近づいてきた。

「来たわね、マリア出迎えてあげて」

「了解しました」

「失礼する、此方にカオス様の盟友がおられると聞いてやってきたのだが」

「ようこそお越しくださいました、蛭お嬢様は奥に居られます」

「う、うむ。……お主どこか人とは違う感じがするが？」

「私はカオス様謹製の人造人間M - 666通称マリアと申します」

「人造人間?! 私と同じ名前？」

「カオスが貴女が亡くなった後につけたのよ、始めまして私が蛭よ」  
「? 私が死んだ後？」

「私たちは今から約750年後から時間移動できたのよ……此処に巣食う魔族・ヌルを封殺する為にね？」

「魔族?! あやつは魔族だったのか??！」

「ええ、此方が未来のカオスからの手紙よ」

私はマリア姫宛の手紙を渡すとバロンに歩み寄った。

「始めまして、バロン。悪いんだけどカオスへ信号送ってくれない? 戻ってくるように」

「ア、ウツ!!」

バロンが信号を送ったのを確認した後、改めてガーゴイルの位置を確認すると村からはずいぶん離れた所に居た。

城からも離れていることがわかったので迷わず私は自爆するように文珠に念を送った。

「! 遠方で爆発音を確認、蛭様？」

「今、仕込んでおいた文珠を発動させたわ。恐らくヌルはそこに向けて兵を仕向ける筈だからカオス到着と共に城へと攻めるわよ」

「……カオス様到着と共に爆破した方がよかったですのでは？」

「実際その方が都合いいでしょうね。けど念波が届くぎりぎりだった



たからね……ま、もし兵が城に戻ってきてもその時はその時よ」

その時手紙を読んでいた姫が顔を上げた。

「待たせたな、蛭殿。今回は我々の為に時間を遡ってまで来てくれた事、真に感謝する」

「ん、別にいいよ？ヌルには私も用があつたからね」

「お二人で来られたという事はそれだけで事足りると判断しても？」

「ええ、油断は禁物ですが特に問題ないはずです。……ま、何事も想定外の出来事は起こりうるものですから絶対とは言い切れませんが」

「それは仕方なからう……相手は魔族であるのだしな」

「蛭お嬢様、バロンがカオス様の信号を捕らえ此方に誘導開始しました」

「そう、それじゃあ出迎えるとしますか」

私たちは研究所を出ると遠方から飛来するカオスフライヤー一号を視界に収めた。

私たちは揃って向こうの視界に入る場所まで出向くと手を振って存在を知らせた。

カオスはすぐ気付き見知らぬ私に警戒するも傍にいる姫やバロンの存在に少なからず警戒を緩めた。

「バロンに私を呼び戻すように信号を寄越したのはお主か？」

「流石カオス、いい読みしているわ。姫手紙を彼に」

「うむ、カオス様此方を……750年ほど未来の貴方自身からの手紙です」

「なにっ!?!………っ、これはっ?!」

カオスが手紙を確認している間に私とマリアは必要な手順を確かめ

合っていた。

「……という手順ね、あんな危険物適当な手順で操作する物じゃないし。マリアはカオスの補佐ね？」

「しかしそれなら私がヌルを相手して蛭お嬢様が文珠で止めた方がいいのでは？」

「城内では出来るだけ文珠の使用は控えたいのよ……何処に目があるか分かったものじゃないし。この時代にはあいつが存在していないとはいえね？」

「それならばなおの事私と蛭お嬢様でヌルを相手してカオス様に止めに行つて貰つた方が宜しいのでは？文珠が使えない以上私という盾が在つた方が「マリア！……二度とそんな事言っちゃ駄目、貴女は生きているんだから」しかし」

「しかしもかかしもないの！ある程度の人造人間としての特異性を当てにするのはいいけど、そんな自分の命を粗末に扱うのは駄目！」「……僭越ながら蛭お嬢様が言えたことではないと思いますか？」

「うっ！……分かつたわよ、マリアと一緒にいきますう（涙）」

「くくく、随分やり込められているではないか……のう、盟友殿？」「カオス？」

気付けばカオスと姫が此方に來ていた。

手紙は読み終えたらしく騒動が起きないように消去したとのこと。カオスは何やら感慨深そうに私たちを見ている。

「しかし、よもや700年以上も後に盟友を得られるとはな……世の中分らん物だ」

「私としては安心しましたよ？カオス様の理解者が居られることは喜ばしいことですから」

「確かにな、理解者ほど見つかりにくい物はないからな……そういう意味では私は幸せ者なのだろう」

「あゝ、何やら感慨深そうにしているとこ悪いけど作戦に移るよ？」

なんだか放っておくといつまで経っても行動に移れないような気がしたので声を掛けることにした。

その後、姫を村に送り届け村人を村長の屋敷に集めると結界を施し行動に移った。

「それじゃあカオス、この見取り図を参考に地下の地獄炉を止めてね。出来るだけ早く」

「うむ、お主に貰った 隠 の文珠があればそれほど困難な事でもなからう」

「城内の兵はそれほどいないと思うけど油断だけはしちゃ駄目よ？」

「なに、バロンと共に颯爽と終わらせて見せるさ」

「ア、ウツ!!」

カオスはそういうと足早にその場を後にした。

「さて、それじゃあ此方も行くとしましょうか」

「了解！」

S I D E O U T

時は少し遡りガーゴイルが爆破された頃。

「む？ガーゴイルTFC02577の反応が南西方向で消えた……  
てつきり西の村辺りに潜んでいると思いましたが。聡明な姫の事村人を巻き込む事を良しとしなかったのでしょうか……？」

巨大なスクリーンの前で呟く目つきの悪い男……魔族であるヌルだ。

彼は領主の娘であるマリア姫を手に入れるべく偵察部隊を各所に放っていたのだ。

「まあいいでしょう。ドクターカオスも戻ってきているかもしれない  
せんし……お前たち！行って捕らえてきなさい」

「はっ！」

部下であるゲソバルスキーに捕獲を命じたヌルは未だ見ぬカオスを  
思い手を組んでくれることを願っていた。

時は戻り、ゲソバルスキーたちが何もない所で立ち往生している頃  
カオスとバロンは無事地下の地獄炉へと辿り着けていた。

「ッ！これかつ！何と禍々しい……以前の私なればいつかは作って  
みたいなどと言っただろうが、盟友の存在を知った今になっては何  
の興味も湧かん」

カオスの今の心境を例えるなら空虚な荒野といったものだ。

今まで研究一筋であったカオスだが、姫の存在で愛を知りそして今  
また得がたき盟友が手に入ると分かった以上……心にある種の空し  
さが漂っていた。

「私は今まで幾つもの謎の解明や発明をしてきたが、結局肝心な事  
を理解していなかったのやもしれんな……今更な事だが」

カオスはやるせない何かに歯噛みするが今はそのような時ではない  
と思いきり地獄炉を止めるべく行動を再開した。

S I D E 蛭

マリアに 隠／蔽 の双文珠を持たせ潜入した私たちは一直線に又

ルの元へと走っていた。  
既に城内の構造を把握している私たちにとってはさして迷うことな  
く辿り着く事ができた。

「さて、此処からが本番よマリア」

「気を付けるのはヌルの魔法と本性の足の攻撃ですね？」

「そ、魔法の方は 無ノ効 の双文珠を持っていれば大丈夫の筈よ。  
だけど足の攻撃は流石に無理ね……避けるか相殺するかしかないわ」

どうにもここら辺は記憶が曖昧なものだから詳しい種類まではハッ  
キリしないけど……まあ炎や雷って言うぐらいだから自然界の現象  
として考えれば何とかなるでしょう。

「マリア的には雷とかが危ないかもね」

「……在るかどうかは分かりませんが水の攻撃もですね」

「私は物理的なものかしら……ともかく、出会い頭でダメージを与  
えても恐らく地獄炉で一瞬にして回復するだろうから……まずは魔  
法の杖をどうにかする所から始めましょう」

「了解」

「あと、万が一に備え私は変身しておくわ」

「アシュタロス陣営に蛸お嬢様の容姿が漏れないようにですね？」

「そういうこと……ま、最終的には意味ないことになるでしょうけ  
ど」

「……？」

「ふふふ、今は秘密よ」

私たちは物影からヌルの姿を確認しつつ作戦の最終確認をしていた。  
最終確認が終わると私は双文珠で男の姿になった……つまり本来の  
姿だ。

「とりあえず、挨拶代わりに二人で攻撃を咬まそうかマリア」  
「了解しました」

俺とマリアは室内に佇んでいるヌルに向けて疾走すると霊波砲とバズーカを撃ち込んだ！

「ッ?!グワアッ!? - - - ツ、だ、誰ですっ?!」

「火行炎龍術、炎熱波ア - - - ツ!」

「クレイモアキーツク!」

「グワアアアッ!?!」

俺達はヌルの問いかけに耳を貸さず一気に勝負を掛ける勢いで突貫した。

ヌルは体勢を整える間も無く炎に巻かれるが無論この程度で倒せるなどとは思っていない……あくまで煙幕を作る為だ。

現に、炎の向こうで杖を振り上げようとしているヌルが見えた。

俺はマリアに目配せすると次の行動に移った。

「ええい、何者か知りませんがこの私を怒らせた事後悔なさい!」

ヌルは叫ぶと所構わず強制変化の怪光線を発してきた。

最もその程度の攻撃に当たる俺らじゃあないが。

「マリア!サイキック猫だましっ!」

「!なんですっ?!! - - - ツ?!!」

俺は回避しつつ此方に注意を向けさせた。

そしてヌルがこちらに向き直り怪光線を放つ直前……その目先に強烈な閃光を浴びせてやった。

「クツ?!目、目があ……」「これは頂きですっ!」 ツ!」

一瞬の硬直をついてマリアは見事変化の杖を強奪した。

とりあえず第一段階が無事完了した俺達は集結すると煙幕が晴れるのを待った。

黒煙の向こうから現れたのは苦々しく顔を歪めたヌルだった。

「随分舐めた真似をしてくれましたね……どうやら貴方達は私の正体に気付き退治しに来た悪魔払いの類ですね。愚かな事です、他の魔族ならともかく私に挑むとはッ!」

あくまで冷静そうな態度を保とうとするヌルにある種の感嘆を抱いたが、大人しく本性を現すのを待った。

「確かに魔族は本来人間界では殆ど力を封じられた状態でしか行動できない物です……貴方達もだからこそ倒せると踏んで乗り込んできたのでしょうか」

そうして待っていると次第に増して来る威圧感。

「甘い、甘すぎですっ!この偉大なる知力を持つ私はそれを克服しているのです!見なさいっ!」

叫んで瞬時に本性へとシフトするヌル。

蛸そのものに変身したヌルは確かに魔族としては破格のプレッシャーを放っていた。

「これが私の真の姿、我がおぞましき姿に恐れ戦くがいい!!今更許しはしませんがねっ!」

ヌルはそういつと足の一つを持ち上げ炎を放ってきた！  
流石にその攻撃は苛烈でまともに喰らうわけにはいかず回避と防御に専念する。

「私の八本の足には八つの力が宿っている！今のは火炎の足！次は雷の足！」

「マリア！」

「了解！冷凍ビーム！！！」

「ッ？！な、なにっ！」

「ハアアアアッ！」

雷を放とうとしていたヌルにマリアが対象を冷凍するビームを放つ！  
まともはその攻撃を受けたヌルは足の幾つかを凍てつかされて体制を崩した。

俺はそこに連続霊波砲をぶち込むとマリアと共にその場を後にした。

「グワッ？！………ッ、逃がしはしませんよっ！」

台所に着くと記憶にあるヌルの出現場所から見えない所に文珠で  
反 射 防 壁 を張り身構えた。  
やがて聞こえてくる壁を突き抜けてくる音。

「逃げてても無駄と言ったでしょう！！！」

レンガを切り崩し現れるヌル。

すぐさま先ほどとは違う足を持ち上げ攻撃態勢に入る。

「身の程を知れっ！喰らうがいい、氷の足！！！」

放たれる無数の鋭い氷の欠片……しかし、それらは文珠の結界範囲



まで飛ぶと一斉に反転してヌルへと襲い掛かった！

「なっ?! ナニイ . . . . . ツ!!!?」

次々にヌルへと突き刺さる散弾。

幾つかは相殺されたが半分以上がヌル自身へと突き刺さった。

その鋭すぎる氷弾はヌルの体内奥深く食い込み強烈な痛みを与えた。

「グワアアアアアアアアツ!!!」

蛭はマリアに警戒させたままヌルの周りに簡易結界陣を描くと呪文を唱え始めた。

「命は魂に繋がりにしものなり、魂は核へと至るものなり。汝が核は今此処に現れるべき時を迎えた……闇の祝福を受けし核よ、汝が居場所はこの手の中なり!!! 起動せよ、封魔天蓋魔封陣!!!」

蛭が呪文を唱え終わるとヌルを束縛する幾多の光の鎖が現れる。

それらはヌルを締め上げ、やがてその眼前に黒い結晶を作り始める。

「ガアアツ!?! な、何ですかこれはあ?!」

「それはお前の魔核だよ、お前自身を構成しうる……な」

「ば、馬鹿なっ?! 魔族の核を抜き取れるとは……貴方は一体、何者?!」

「お前が知る必要はない……何れ生まれ変わって悠久の彼方で会おう」

「あ、ああ……私が崩れていく……嫌だ、私にはまだやるべき研究があ……」

いくら地獄炉により供給を受け続けようと肝心の核がなければ存在

を保つ事など不可能。

ヌルは次第にその体を崩壊させ、ついには残滓さえ残さずに消え去った。

「今は眠れヌル……さて、カオスの所へと行こうかマリア」

「はい、忠夫様」

俺は魔核を影へと仕舞うとその場を後にした。

S I D E O U T

あの後人造モンスター工場を経て地獄炉へと赴いた蚩に戻った忠夫とマリアは未だ懸命に地獄炉を止めようとしていたカオスと合流した。

カオスは既にヌルを倒したのを知るとそれはもう悔しそうな顔をした。

「まさか地獄炉と繋がったままの魔族を倒すとはな……結局私は何の役にも立てなかったな」

「しょうがないよ、元々ヌルはこっちで倒す算段だったからね。カオスの行動はあくまで保険ってことで」

「まあいいけどな、無事魔族の手からこの地を取り戻せたのだから」「そういうこと。さて、それじゃあ地獄炉消滅させるよ?」

蚩はそういうと地獄炉周辺に文珠を配置し更にその周囲に双文珠で結界を張った。

その後、部屋から退避すると文珠を発動させ地獄炉を消去。

再度部屋に戻り、双文珠の結界を解除し、穴に封印石を嵌め込んだ。

「これで地獄炉に関してはOKね。後は人造モンスター工場を破壊

して村に戻りましょう」

「うむ、あんな物あつても仕方ないからな」

蚩たちはその後、工場を徹底的に破壊し痕跡を残さず消去すると村へと帰還した。

ちなみに帰還の最中、その道中に主を失った馬の群れと白い鎧の残骸、機能を停止している人造モンスターが在った……当然モンスターは破壊しておいた。

「カオス様！無事だったか！」

「姫、ヌルは此方の蚩殿が完全に滅しました故にご安心を！配下の者も既に力を無くしています」

「おお！それは本当か、感謝する蚩殿！」

「構いませんよ姫……できるだけ城は破壊しないようにしましたがモンスター工場と他数箇所は大分破壊しましたのでご容赦を」

「それこそ構わぬ！守るべき領民を守れて魔族を排除できたのなら文句などない！」

姫との会談も終わり、村人も晴れて結界から出た後深夜にも拘らず盛大な宴が開かれた。

宴は明け方過ぎまで続き、村全体が明るい空気で満たされた。

宴も終わり用事が全て済んだ蚩たちは元の時代に還るべく用意していた。

「……世話になったな蚩殿、マリア殿……自分と同じ名前を言うのも変な感じだな」

「くすつ、それもカオスのせいだよな？」

「うおうい？！そういうこと言うか？！」

「……マリア姫、貴女の考えがどの様なものかは詮索しませんがどうかカオスの事を今後ともよろしく願いますね」

「……うむ、任されよ。お主たちも達者でな」

「ええ、それじゃあ往くわ」

「おっと、待った。これを持っていけ……未来の自分から頼まれた物だ」

「ちゃっかりしているわねえ……それじゃあね！」

蚩たちはマリア姫たちに別れの言葉を告げると未来へと飛んだ。

その後、カオスは姫が存命の内はその地に留まり領民の為研究を重ねた。

そして姫の没後はM - 666に座標を刻み、己の記憶に封印を掛けた。

「……というわけだ、それからは世界を回り現在に至る」

「なるほどね……こうやって封印していた記憶を語れるという事はそろそろ蚩たちも戻ってくるかしらね」

「だろうな……っと、言っている内にきたぞ」

『結界に時空震を感知！蚩様にご帰還されます！』

「……………ッ！ふう、どうやら無事戻って来れたようね！ただいま皆！」

「ただいま戻りました！」

「お帰りなさい、二人とも！」

「よく戻ったな、蚩……マリアもな」

「カオス様、マリア姫よりメッセージです。『心はいつも貴方と共に』……微笑んで告げられました」

「……そうか、ご苦労だったな、マリア」

カオスはマリアの微笑みの中にはっきりとマリア姫の面影を感じ取っていた。

その日の夕餉は中世の話で盛り上がる事となったのは言うまでもない。

## 第十八章 幻想溢れる過去への誘い（後書き）

文珠は使わないといって結構使っている罨（汗）  
見逃してくれると幸いです。

次回からついに運命の17才編開始です。

次回は7/31の0時です。

感想誤字報告お待ちしています。

第十九章 迷走せし者に救いをそして善悪には捌きを（前書き）

横島 蛭17才。

ついに運命の年を迎えました。

それではどうぞ。

## 第十九章 迷走せし者に救いをそして害悪には捌きを

中世から戻り一段落が過ぎた頃、妙神山で動きがあった。

資格試験前から行っていた昇龍門の行を小竜姫が無事果たしたのだ。ちなみにメドーサは中世に行く前に完了していた。

「さて、まずはおめでとう小竜姫。無事上級の位階まで己が身を高められたみたいね。見違えたわよ」

「ありがとうございます！これも蛸様への思いがあればこそです！」

「ふふふ、ありがとうございます。……さて、それでは愚か者の処罰に入りましょうか？」

「……ッ！」

蛸は妙神山の一室で小竜姫とメドーサ、そして老師と再会していた。まず蛸は小竜姫の偉業を讃えた。

今の小竜姫は既に中級の位階ではなく一段上の上級へと位階を上げている。

それは龍としても同様で三爪から四爪へと位階を上げている……これはメドーサも同様だ。

最も強さ自体は最弱そのものだが、それでも一万マイルを優に超えている。

そして話は変わり、小竜姫から視線を外した蛸は向かいの壁へと視線を向けた。

そこには何故か老師が括られており、頭の緊箍児がぎりぎり締め付けていた。

「……で？何でまたああいうことを言ったのかな？かな？」

「わ、わしはその、それしか考えつかんだもんじゃからして……あたたたたっ！」

「私がどれだけルシオラ救済に身を入れてるか知らない筈ないわよね？同じ時を生きるルシオラを救うからこそ意味があるって言ったわよね？それなのに未来のルシオラを現時間軸のルシオラに融合させる？ - - - - - ぶざけてんじゃないよッ！！！」

「うう、すまなんだ」

「……メドーサもなんだよねえ？」

「うっ！……その、ごめんなさい」

「……。ふう、今後一切あんなこと言わないこと誓えるかしら？」

『誓います！！』

「……今回に限り許します。しかし次はありませんよ？特に老師」

『はい！』

散々苛めて気がすんだのか、老師の拘束を解くと元の穏やかな表情へと戻る蚩。

老師とメドーサ、特に老師は疲弊具合が酷かったが。

その後、話は玉藻のことに移る。

既に玉藻自身から欠片探索の事は聞かされているが、時期が時期だけに余り人界を徘徊するのは危険だからだ。

定期報告では既に二つの欠片を手に入れたらしい。

「ヒヤクメが言うには恐らく三つ目の欠片は見つからないだろうとのことです。場の空気で自然浄化されて既に存在していない確率が高いからというのが理由らしいですが」

「ありうるね、欠片はあくまで欠片だし」

「今探索している場所が終わり次第帰還することです」

「そう、それじゃあ話し合いは終わりね。小竜姫、強くなった貴女を見せて貰いましょうか」

「はい！」



蛭はそういつと小竜姫を伴って部屋を後にした。  
後に残った老師とメドーサは一斉に重い溜め息を吐いた。

「……まさかああいう事じゃったとはな、本当に糺録したわい」  
「私だつてそうさ。考えれば分かった筈なのに……ね」

老師とメドーサは蛭のことを知っているようで実は全然理解出来ていなかったことに呆然としていた。

しかしそれも束の間、直ぐに面を上げると二人で鍛錬場へと赴いた。  
嘆くのは何時でもできる、今は己を高める時……それを実行する為

SIDE 玉藻

私は今ヒヤクメさんのレポートで妙神山の門前に到着した。

鬼門に帰宅を告げ美衣さんにお茶を頼むと一息ついた。

結局欠片は二つしか手に入らなかった。

最後の三つ目はそのヒヤクメさんの目を持ってしても見つからなかった。

まあ元より完全体なんて目指す気はなかったけど（あくまでこの時間軸の玉藻であると言つ証が欲しかったというのが主題で、起爆剤云々は二の次）、後は地道に鍛えるしかないか。

「でもこの欠片たち怨念を持っていないのはどうしてかしら？」

「……おそらく時間経過と共に薄れて純粹な力の結晶になったのではないですか？」

「ん、まあ厄介なものが含まれていないのは好い事だけど……ね」

私は欠片を口に放り込むと一気に飲み込んだ。

欠片は在るべき場所に戻った為かあつという間に私と同化すると因子を活性しだした。

私は内から溢れ出す力を無理せず受け止めると徐々に慣らしていく。

流石に同種の存在による相乗効果は凄まじく、なんと尾が三本増えた。

「……まさか此処まで地力が増えるとはね。ッ！まだ湧き上がってくるわ」

「凄いですね。大体1万マイル位ですか？」

「どうかしらね。まだ御し切れていないからもう少し上げられると思うけど、もつと肉体の方を鍛えないとね…… 蛭が完全に封印を解いた時に来る供給に耐え切るためにも」

「余り無理はして欲しくないけどね…… 玉藻？」

「ッ！？……はあ、びつくりさせないでよ蛭」

私は突然後ろから抱きついてきた蛭に文句を言う。

蛭は気にした風もなく私の前に回りこむと額同士をくっつけた。

「ん、眠っていた玉藻の前の部分が七割ほど活性化しているね。

尾が増えたのは既に玉藻が玉藻として確立していたから上乘せされた結果ね」

「そういうこと、貴女の方はどうなの？此処にいるからには中世の方は無事済ませたんだろうけど」

「うん。ヌルの魔核も手に入れたよ、まだ熟成しきってないから吸収していないけど」

見た所蛭の方は八割がたというところだ。

結晶さえ手に入れば予定値は直ぐ達成できるだろうけどこの子の場合は更に五つの因子を充填しなければいけないから大変だ。

聞いた所によると小竜姫様もメドーサも1万マイルを優に超えているそうだ。

今は私が考えていた事と同じ自身のキャパシティー増幅を行っているとのこと。

「私も頑張らないと……というわけで、またしばしお別れね蛍」  
「うう、玉藻成分がメドも小竜姫も籠っちゃうし寂しいよ」  
「はいはい、事が済めば好きなだけ構ってあげるから」

私はもたれ掛かって来る蛍をあやしながらも目指すべき頂を視野に収めていた。

#### S I D E O U T

玉藻、メドーサ、小竜姫の三名が神殿の奥深くに籠ってから時が経ち、ついに蛍十七才の誕生日を迎えた。

蛍は日々各地を飛んで霊障を解決したり、結晶の元となるものを探したり、周天法でチャクラの充填及び各因子の拡張を行ったりしていた。

事務所の方も順調でエミがネクロマンサーの能力を磨き上げS級にカオスが世界に貢献する発明で名誉賞をとりS級へと上がっていた。雪之丞たちもそれぞれが目標のB級に達しており、新時代のトリオとして有名になっていた。

また、タイガーが能力の完全掌握を成し遂げ自分に対しての自信を勝ち得た。

今は霊障心理カウンセラーになるべく講座を受けたり、心の機微をより理解すべくいろいろな場所へと赴いている。

そして老師特製の空間で精神修行を課されている六道親子だが、先日ついに解放された。

成果の程は時間経過を見なければはっきりとはしないだろうが、老師曰く必要最低限のことは成したとのこと。

そして、事が起こったのは横島家に電話が掛かってきた時だった。既に六道家との契約を解除して横島家に雇われていたフミが電話を

取ったことから事件は始まった。

「はい、横島ですけど」

『あ、フミさんですか？九琉です。蛍様は見えますか？』

「はい、御在宅しておられますよ。少々お待ち下さい」

蛍を呼びに行こうとするフミ。

しかしそこにもう一つの電話が鳴る。

『すみません！蛍様は御在宅でしょうか？！』

「唐巢様でしたか。蛍お嬢様はいらっしゃいますけど少しお待ち下さい」

フミに呼ばれてきた蛍はとりあえず慌てている風だった唐巢からの電話に応答すると九琉の方に出た。

「はい、蛍だけど？」

『蛍様、学校の方に例の机妖怪が現れました。今現在、陰念とピートが境界を張って閉じ込めていますけどどうしましょうか？』

「……エミ姉さんをおかわすから貴女と二人で対処なさい。決して追い詰めたりしないようにね」

『蛍様は来られないのですか？』

「ちょうど今唐巢神父から電話があつてね。パイパーが金の針を手に入れたそうなのよ」

『ツ?!パイパーですか?!……お一人で大丈夫ですか？』

「マリアたちを連れて行くから心配要らないわ」

『美衣さんは連れて行かれないのですか？』

「確かに有効な手ではあるけど、根本的な解決にはならないからね。彼女はあくまで妙神山の家政婦だよ……これは私の我がままだけだね」

『……分かりました、では』

蛭は子機を置くとすぐさま行動に移った。

唐巢の話では美神 令子が秘密裏に手に入れた金の針をパイパーが奪ったらしい。

令子は今協会に拘束されているらしい。

元の時間軸より大分早いのが気になるがあいつが魔力の源を手にした以上いつ行動を開始しても可笑しくはない。

蛭はエミに事の詳細を告げるとマリアとテレサを伴って靈感のする方へと出向いていった。

SIDE エミ

蛭のお願いを聞いた私は現在件の机の前に立っている。

傍には九琉が控えており、陰念たちは教室の出入り口で結界を再構築している最中だ。

「……さて、どうしたものかしらね」

「全くですね、まさか受け入れが認められないとは」

「それだけ蛭……この場合は忠夫くんかしら？……が特別な雰囲気を作っていたんでしょうね」

「……今回の事は蛭様がいない弊害ですか。蛭様には言えませぬ」

全くよ、あの子がこの事を知ったら際限なく落ち込むでしょうね。

仕方がない……で済ませられないのがあの子なんだから。

……とにかく此処はスパッと済ませるわけ。

受け入れが認められない以上、変に未練を起こさせるより見切りをつけさせて家に来て貰いましょう。

「九琉、さっさと済ませてお昼を済ませた後、家に来てもらう事にするわよ？」

「……宜しいのですか？余り強引な手を使うのは」

「別に手荒な真似はしないわけ。そんなことすれば私が蛭にお目玉喰らうからね」

「……では？」

私は九琉に頷くと改めて机に向き直った。

このやり取りの最中にも机から此方を窺う視線は感じていた……故に率直に言う事にする。

「さて、机妖怪の愛子さん？少しお話ししないかしら？貴女の事は家の妹から聞いていてね、ある程度は理解しているつもりよ」

「……ッ?!」

「貴女が……確か高松君だったかしら？他幾人もの生徒を捕らえているのも知っているし、楽しい学校を作ろうとしているのも知っているわ……又聞きだけどね？」

「ッ?!」

「……でもね、そこに本当の青春があると思っっている？確かに此処の学校は貴女を受け入れる事には反対しているわ。妖怪というハンデはまだまだ重いからね……でもね、今貴女がやっていることは捕らえている彼らの青春を奪っているに他ならないのよ？」

「……」

「ま、貴女にも言い分はあるんだろうし貴女は学校に居場所が欲しいのよね？」

「……」

「もし貴女が捕獲している生徒達を元の時間軸に帰すのであれば一つ居場所を提示してあげるわ……今はまだ設立さえしていないけどね？」

「それって蛭様が老師様と世界GS本部の会長様を交えて考えていた町の事ですか？」

「そうよ陰念。世界中で受け入れられずに迫害を受けている妖怪や

他の人外を保護し結界に護られた人外の町……というより国ね……を創るっていう計画」

「……ッ！」

「既に設立する場所は確保されているし、保護した妖怪も幾人かいるしね。人数が増えれば子供も増えるだろうし、そうなると学校も必要になってくるからね？」

「……その話は本当なの？」

淡々と話していた故に真実味を感じたのだろう。

愛子は私に確認の為の一言を発した。

無論、あちらがこの話を受けてくれるなら誠心誠意を持って対応するまで。

「ええ、本当よ。この話は世界GS本部が保証し、猿神・八又マンであられる斉天大聖様が保障してくれるわ。さっき言った蛸って子はこの二方に多大なる恩と敬愛を受けているからね……必ず実現するわ」

「……出来上がるまで何処に居ればいいのですか？」

「ん？横島家か妙神山か……ま、横島家でしょうね。家なら妖怪の子供もそこに居る子供も居るから勉強会とかして過ごせばいいわ。出来たら家の会計をしてくれると助かるけど」

「……分かりました。お世話になります」

愛子はその姿を机の上に現すとお辞儀をした。

私は彼女に手を差し出し握手をする。

その時チャームが鳴り昼休みとなった。

私は予め用意していたお弁当を持ち上げると愛子に向き直った。

「さて、それじゃあ皆で中庭に行ってお昼ご飯にしましょうか。これは貴女でも食べられるご飯だから遠慮せず食べてね」

「あ、ありがとうございます！」

「ちつちつちつ、駄目よ？貴女はもう横島家の一員なのだからそんな畏まった態度じゃね？」

「そうですね、仲良くしましょうね。あ、私は横島 おキ又です！よろしく！」

さり気無く出てきたおキ又ちゃんが愛子の手を取り微笑んだ。

流星にこういうことには慣れたおキ又ちゃん。

あつという間に愛子の緊張を解すと一緒に中庭へと歩いていった。ちなみに机は雪之丞が運んで後をついて行った。

「さて、こっちは問題なく済んだけど……蛍の方は無事かしらね？」

「大丈夫ですよ、エミ様。何と言っても恋人の方たちを悲しませるような事はできないでしょうし」

「ふふふ、それもそうね。……ふう、それじゃあ私たちもお昼としましょうか？」

「はい！」

蛍、頑張りなさいよ。

SIDE OUT

その蛍は現在マリア・テレサと共に空を飛んでいた。

パイパーの気配は未だ安定せず微かに遠方から届く程度であった。テレサのサーチがなければ見失っていたぐらいである。

「……どういうことかしらね？方角的にはバブルランド遊園地から外れているし……やっぱりまだ行動を起こせるほど力が戻っていないだけなのかな？」

「いえ、既に幾人かは犠牲者が出ている模様です。中には協会の方



も居たようなのでおそらく蛭お嬢様を警戒しているのでしょう」

「記憶を盗んだゆえか……てことはやっぱり風船はあそこにあるわけだ」

「おそらくは」

「あいつの気配がする方で犠牲者は出ているの？」

「いえ、特にそういった痕跡はありません」

蛭はその言葉に数瞬考えるとバブルランド遊園地に乗り込む旨を告げた。

記憶どおりなら居場所も特定できているからだが……その案はテレサにより却下された。

「どうやらそうもいかないようです。おそらく下水道だと思いますが、多量のネズミが確認できました」

「……今まで微かにしか感じられなかったパイパーの気配もハッキリしてきたわね。勝負に出てきたって事？」

「しかし私たちは空高くに居ます。パイパーはともかくネズミ達はどのような理由で集結するのでしょうか？」

「ピエロが囿でネズミ達が本命か……何かの術の準備か、ここらへんに人はいないから人質を捕るためっていうパターンはないと思うけど」

「周囲一キロに人影はありません。都会のネズミは此処一帯に集結しつつありますけど」

「……周囲を覆って小さな音でも相乗効果で大きくなるって事？」

「ッ?!そこっ!」

突如湧き上がる悪寒!

蛭は咄嗟に霊波砲を放つ!

「ハズレーだよっ!でもってさっき言ったことは正解サツ!やれっ



待ったを掛けるパイパーに取り合わず一気に加速してその場を離脱する蛍たち。

行く先は勿論バブルランド遊園地。

S I D E 蛍

私たちはパイパーを振り切って遊園地に辿り着くと周囲をサーチした。

その結果やはり未来と同じ場所に魔力反応があった。

思っていたよりも魔力の反応が強いが、おそらく金の針を奪った際魔力を補給したのだろう。

「さて、どうするか。たぶんもう本体に戻っているだろうし……テレサ、パイパーの本体は移動している？」

「いえ、動きは見られません」

「マリア、弾は各種揃えているわよね？」

「はい、完備しています」

「それなら一気に突貫するのでしょうか、魔力の冠を纏えば怪音にもある程度抵抗できるし」

「私たちにはそもそも効きませんからね」

「そういうこと」

私たちは作戦を決めるとカートに乗らず飛行しながら暗闇へと入っていった。

やがて風船が浮いている池へ辿り着く。

見た所記憶にあるよりは少ないようだ。

そこに現れるパイパー……本体ではなくピエロの方だが。

「まさか此処まで辿り着くとは……だがちょうどいい、金の針は返してもらおうぞ！あれはおいらの物だ！」



「……魔力反応、完全に消滅しました」

「しかし良かったのですか？パイパーの魔核を確保せずに倒して？」  
「あら？知らなかったの？パイパーはこの金の針が魔力の源なのよ。  
だから金の針を熟成させて結晶にすれば問題ないわ」

老師に話した後、皆にも結晶のことを話しておいたので気になった  
マリアが尋ねてきた。

私はそれに答えた後、風船を割る作業に取り掛かることにした。  
幸い数はそれほどでもなかったので十分程度で済んだ。

「蛍お嬢様、此方に美神 令子の風船があります」

私はそれを聞き、少し意地の悪い顔をした。

その後、その場を去った私たちは協会へと赴き唐巢神父に報告する  
と家へと帰った。

S I D E O U T

S I D E 唐巢

今私は協会の一室で泣き喚いている子どもを前にし苛立っていた。  
目の前の子供はいうまでも無く令子君であり、子供になったのはパ  
イパーの力によるものだ。

「私の努力も結局は無駄だったという事か？まさか規約を無視して  
S級の依頼に手を出すとは」

私は泣き喚く令子君を部屋に残しその場を後にした……抜け出せな  
いように鍵はきっちり掛けたが。

「幸いパイパーは蛸様たちの手によって倒され金の針も戻り、令子君の風船以外は既に解放されたが」

そう、令子君の風船は未だ割られずに協会の重要金庫で保管されている。

これは厳罰に処する為の一環として会長が決めたことだ。

最もそう長い期間子供のみで拘束するのは論理観からして宜しくないから時機に開放する事になるが。

金の針も蛸様が活用する必要があるので三日と置かず開放される事になるだろうが。

「もしパイパーが協会の者を襲わず、蛸様に構わずその力を発揮していたらと思うと……ゾツとしないね」

幾多の悪魔を封印している蛸様の情報を手に入れたからこそ行動を慎重にしたパイパー。

最もそれが災いして何も出来ぬまま倒されたわけだが。

実際に揮われていたら一体どれほどの被害が出ていたか……考えただけで鳥肌が立つというものだ。

令子君は今回の件で一ヶ月の免停処分が決まっている（これ以上は時期的に不可能だった）

おそらくこの情報を美智恵君が聞き届けたら何かしら行動を起こすだろうがこればかりは見逃せない。

規約違反に対する罰則は当然として、それ以外にもパイパーに力を一時的とはいえ取り戻させたのは許されることではない。

百合子さんはオカルトGメンの方で動きがあつて近い内に日本にも支部が出来るといつていたが、おそらくそちらから何らかの催促が来るのではと思っている。

何せその人物が令子君の兄的立場にある男性・西条君だからだ。

忠夫君の記憶の中では独特の正義感を持つ男性だったが、令子君に

は甘い所もあつたからね。  
令子君を最終的にどうするかは会長と百合子さんが話し合っている  
がどうなる事か。

「何にしてもめげずに教育していくしかないのだろうけどね……老  
師様や百合子さんは間違ひなくこうなる事が分かっていたからこそ、  
ああいう態度だったのだろうな」

どれだけ努力しても報われないものもある、というのは分かつては  
いたけど……悔しいものだ。

「最も諦める気はないけど……ね。運命の時は近いのだから」

報われない努力でも無駄ではない筈だ。

私に出来る事はトコトンやりつくして見せる……それが忠夫君の人生を知った私に出来る贖罪だ。

S I D E O U T

S I D E 愛子

此処は天国のようだ。

私は横島家の邸宅に来たときそう思わずにはいられなかった。

邸宅には数こそ少ないものの色々な妖怪や半妖が居て、和気藹々と  
暮らしていた。

中には反目しあっても可笑しくない妖怪同士が仲良くしている  
場面もあった。

横島家の彼らは人外共存を目標に掲げ、除霊に関しても無理やりな  
事は極力しない方針を採っている。

現実的に不可能ではないかと一時は思いもしたが、その為に世界規模で規約を改定したと聞いた時にはあごが外れるほど驚いたものだ。

「本当に規格外な人たちよね、横島家の人たちって」

『そうじゃろうな、わしも悉く改心させられたからな』

「私は心霊兵器を生み出そうとしていた所から救い出されたしね」

「……ほんと規格外よね」

私の横には壺の精霊であるイフリートさんと食人鬼女のグーラーさんが居た……グーラーって言うのは種族名だけだ。

イフリートさんはなんでも悪さをして壺に閉じ込められていた所を百合子さんに拾われたらしい。

当初は願いを曲解して叶えノルマをこなそうとしたらしいが、蛭様が待ったをかけ自分の魂に触れさせたのだ。

あの人の魂に触れたイフリートさんは途轍もない衝撃を受け、以後此処に留まり周辺の人たちの小さな願いをコツコツと正しく叶える為に精進しているとのこと。

グーラーさんは南武グループって言う所から救助されたらしい。

何でも妖怪や精霊を自分達の好きなように操れる兵器にしようとしていた奴らに捕まっていたそうだ。

蛭様の進言で情報を得た百合子さんが外堀から徐々に埋めていってついにはグループを解体させたそうだ。

勿論その主だった者たちは御用となっている。

他にもグレムリンやキメラなんて怪物も大人しく過ごしている。

横島邸はかなり広く様々な環境を内包した土地なので妖怪や魔物たちもかなり過ごし易いみたいだ。

「どうやら馴染んでいるみたいね、愛子ちゃん」

「あ、おキ又ちゃん」

声を掛けてきたのは此処の養女になったという300年ほど前に人柱になって、つい最近まで幽霊であったという経緯を持つ女の子だ。



なんでも死津喪比女とかいう大妖を倒して人柱の任から解放されたらしい。

その死津喪比女もいずれ怨念を持たない状態で復活することだ。

「百合子母さんの話では近々例の人外の国を建国する為の一步を踏み出すみたい。まあ、妙神山の麓だからこれといった弊害は無いようですけど」

「確か世界でも有数の霊格の高い霊山……だったよね？山の麓だと水辺の妖怪とかはどうするの？少なからず水源はあるだろうけど」

「そこら辺は大丈夫みたいですよ。なんでも結構な湖があるみたいですし、場合によっては亜空間ゲートという物を繋げて必要な環境を整えるみたいです」

「そういえば斉天大聖様も御協力されていらっしやるのよね……本当に規格外だわ」

私はそういうと乾いた笑いを零した。

「あと、外国ですけどブラドール島っていう吸血鬼たちが暮らしている島もその対象になるようです」

「吸血鬼？っていうとピート君と関係が？」

「はい。島の領主でありピートさんのお父さんであるブラドールさんが最近真祖の血の衝動を克服したようで、次の目標である人外共存を目指す為立ち上がったそうです」

「島っていうことは船幽霊や海辺の妖怪なんかも過ごせるようになるわね」

「ええ、百合子母さんもそういつてましたよ」

本当に色々手を掛けているのねえ……妥協が無いというか、徹底的というか。

見た所好きでやっているようだから無理はしてないのでしょうか。

……学校づくりの際には私も協力しないとね。  
清く正しく楽しい青春を謳歌する為にも、今度は人の自由を奪った  
りしない普通の学校を作らないとね！

S I D E O U T

ところ替わって美神家。

三日ほど後に解放された令子は呆然としていた。

何せ一ヶ月の免停を喰らった挙句、オカルトGメンへの出向が義務  
付けられたからだ。

自分だけの城は持てず、莫大な報酬は得られなくなりそれどころか  
決まった賃金で大量の仕事をこなさなければならぬ様になったの  
だ。

せめてもの救いは、道具の制限が無い事とパートナーとして昔兄と  
して慕っていた西条が居る事だろうか。

何にしてもこれから窮屈な仕事場に缶詰になる事は間違いない。

令子はこれからの事を考え真っ白になっていた。

「何でこんな事になるのよー!？」

叫びは空しく室内に響くのみであった。

第十九章 迷走せし者に救いをそして害悪には捌きを（後書き）

また設定事項が増えてしまった。・ 1111

完結までに消化出来るか心配になってきました（汗）

次回は8/3の0時です。

それでは感想お待ちしております。

## 第二十章〈暗躍する者と邂逅する者たち〉(前書き)

これまでと見比べてなにやら矛盾点があるような気がする第二十章です(汗)

それではどしどし。

## 第二十章 暗躍する者と邂逅する者たち

SIDE 蛭

パイパーを倒し愛子が横島家に居候する事になってから一ヶ月が経った。

当初何故学校が受け入れてくれないのか疑問に思い、訪ねに行こうとしたけど愛子とエミ姉さんから止められて結局行かなかった。

その愛子は今、将来造る学校を構想しつつも事務所の会計を百合子に代わり受け持っている。

同じ年恰好の皆と共に行動できる事は愛子にとってとても魅力的だったようで生き生きとしている。

妙神山のメンバーも経過は順調で、存在の拡張及び修練は思いのほか進行している。

最もメドーサは後続に権限が移った事で今後どの様に事態が動くか心配していたが。

私はとりあえず、相手を傷つけず無力化できるようになってね、と無茶なお願いをして心配している暇がないように意識操作をした……メド自身気付いていたようだけど。

そして今日、メドの心配の種の一つ・元始風水盤の件が舞い込んできた。

発端は香港GS協会。

著名な風水師が行方不明になるという事件が相次いだからだ。

そこで起こりうる事の詳細を本部の方から前もって知らされていた協会は私の所へと連絡を寄越したのだ。

私はとりあえず相談すべく老師の私室へと赴いた。

「さて、ついに元始風水盤の件が舞い込んできたけど……どうしょ

う老師？」

「相手は間違いなく魔族かそれに類する者であるうな……問題は二つ。誰が後続として行動しているかという事とどうやって対処するかじゃ」

「まず私は行けないね……下手に裏切った事がばれると、ルシオラたちへの裏切り防止策が厳しくなるだろうし」

「そうね、メドは修行を続けてね。これは玉藻も一緒ね」

「そうね、そもそも私が表に出ると五月蠅い連中が来ないとも限らないし」

「では私が同行するのですね？」

「それはそれで問題があるんだよね、老師」

今の小竜姫は位階が上がっただけに未来のような妙神山に括られるだけの神族ではないが、強すぎる神族が前面に出てくるとアシユタロスへの対応も変わってくるはずだ。

それに小竜姫が相手をする間違はなく倒してしまうだろう……倒さなくても倒さない事を疑問に思われてしまうはずだ。

「ではどうするのですか？相手が魔族である以上、神族が赴くのは自然なことでしょうし」

「お主には枷をつける事にしよう。まだお主が妙神山に括られていない事を知られるわけにはいかんからな」

「パワーの方も従来まで落としたい方がいいでしょうね。今の小竜姫ならそれでも対処は可能でしょ？」

「相手にも由りますよ？まあ、倒す事が目的ではありませんから何とかなるでしょうけど」

という訳で、揮える力を従来の一割り増しまで落とし制限時間を五分としておく事になった。

「それじゃあ、次に香港に行くメンバーね。とりあえず事務所の戦闘要員は全員向かった方がいいかしら？」

「いいのではないか？いざとなったらレポートで対処すればよいのじゃし」

「……問題は他の組織・オカルトGメンだね。例の者たちが出張ってくる可能性はどれぐらいあるんだい？」

「美神 美智恵は動くだろうね……手柄を立てれば上手く活用できるだろうし、そうなると娘の方を動かして対処させるかもね」

「確かあいつは免停喰らっていなかったかい？」

「残念ながら先日解除されたわ……今は西条と共に現場に出ているみたい」

「百合子さんがそんな事を許したの？」

「……その気はなかったんだけどね、時期的な事と精神状態からこれ以上は不味いと判断したらしいわ。美智恵が強引に行動を起こしうる可能性もあつたしね」

私は溜め息を吐きながら質問に答える。

母さんもこれを言った時には苛立ちを隠せていなかったから。

「碌なもんじゃないね。……それで？蛭はどうするんだい？」

「蛭自身は姿を出すわけには行くまい……ついていくぶんには構わんが」

「文珠の使用も極力避けた方がいいですね。何処に目があるか分かりませんか」

「御主はどちらかと言うと美神の者の妨害に回った方がいいかもしれんの……対処は心得ておるじゃろうし」

「私の方は風水盤を止める事を最優先にするように行動しますね」

そういうことで私たちの行動の概要は決まった。

私は角状態になった小竜姫を伴うと事務所員に集合を掛けた。

「皆、今から元始風水盤の事件に対処する事になるからよろしくね」  
「！ついに動き出しおったか」

「相手は誰だろうね、デミアンたちかそれ以外か」

「蛭様は前面に出ないのですよね……ということは私たちが主軸になるわけですね」

「魔族が相手か……腕が鳴るぜっ」

「油断は言語道断、慎重かつ大胆に行動するべきだな」

「魔族ということは聖なる力が役に立つかな？ 邪悪な存在ならという注意書きがつくだろうけど」

私の一声に俄然力を漲らせる皆。

事務員であるおキ又ちゃんや愛子は事が大きいと感じて若干不安げの様子でいた。

ちなみにタイガーは此処にはいない。

最近はお母さんの後を着いてその行動を学んだり協会に赴いて霊障事件の被害者の実態を知る為に資料を閲覧したりしている……資料閲覧は唐巢神父に頼んで特別に見せて貰っているようだ。

「ちなみに此処に来る前に確認したのだけど、美神 美智恵とオカルトGメンも動いているわ……どうも美智恵が針を強奪してオカルトGメンに送ったみたい」

「裏で娘に行動を示唆しておると言う事か……手柄を立てさせる為に？」

「あつちに此方の情報を知られるのは避けたいわけ。でも鼻は利くだろうし……どうするべきか」

「香港の風水師の被害はどうなっているのですか？ 針が奪われたという事はまた被害が出ているのでは？」

「そっちは大丈夫のようよ……ただ、針を追って敵の一味が日本に来ているみたいだけど」



「それはオカルトGメンにですか？だとしたら不味いのではないですか？あそこの人員は少ないですから」

「そこら辺は判断つかないわね……たぶん乗り込んでくるのは特殊ゾンビの類だと思うけど。あつちに顔出すのもなんだしね」

「それよりも先に香港に渡って敵陣を崩した方がよくないですか？オカルトGメン側が針を奪われても元始風水盤さえ死守できれば問題ないでしょうし」

九琉の提案は確かに魅力的だった。

何よりオカルトGメンと鉢合わせる可能性が低いし遣り様によっては事前に敵の情報も手に入れられるだろうから。

問題はそうすると私がほぼ皆の後をついて行くだけになるということ……だけど、まあたまにはいいかな？

「それじゃあそうしましょうか……通信鬼を預かっているからこっちでの動きはヒヤクメに知らせて貰えるからね」

とりあえず相手の実態を少しでも掴まない事には対処も難しいからね。

私たちは話し合いを終えると香港に乗り込む準備を開始した。

おキ又ちゃんと愛子は皆の為にお弁当を作っている。

そして昼を向かえる前に準備を整えると私たちは揃って家を後にした。

S I D E O U T

ICPO超常犯罪課日本支部。

此処はオカルトGメンのオフィスである。

当初立地条件などにより上手く土地を確保できなかった西条はテナントを借り受け一時凌ぎをしていた。

当面の間は此処で活動するしかない予定である。  
ちなみに本来の時間軸において建設された場所は現在世界GS本部  
の宿舎になっている。

隣の元・洪鯖人工幽霊番号の屋敷はザンス王国の大使館として活用  
している……当初は隣の土地も使って立派な建物を建てようと百合  
子が提案したが、国王自らが断ったそうだ。

さて、オカルトGメンの一室では現在西条 輝彦と美神 令子が顔  
を突き合わせて一つの指令書を見ていた。

それは香港支部からの要請であり、オカルトGメン本部からの命令  
でもあった。

「これって、どういうこと？他所の国から要請が来るなんてよっほ  
どの事よね？」

「別紙と包装物を参考の上との事だが……！？こ、これはっ?!」  
「どうしたの西条さん？」

「……対象は香港に存在する元始風水盤の奪還だそうだ」

「元始……風水盤？……ツ！それって確か地脈の流れを  
自由に変えることができるっていう?!」

「しかも魔族が係わっているそうだ」

「ツ！それって不味いじゃない?!アジア一帯が魔界にされても可  
笑しくないわよ?!」

「ああ、それにこの荷物……やはり針だね、元始風水盤の」  
「ツ！それじゃあ此処に敵が乗り込んでくるんじゃないあ?!」

事の重大さが分かった二人は敵の襲撃に対応する準備と向こうに行  
く為の装備を準備し始めた。

破魔札マシンガンから始まり、普段は余り使う事のない高級な結界  
兵器や精霊石を豊富に使った武器を纏める美神。

此処で働き始めて暫らくした日に突如ストレスで倒れたりもしたが

現状が変わる事がなかったので数日後回復した。  
それからはこうして多額の道具で過剰な除霊作業をすることで気を  
紛らわせている。

ちなみにこれらの出来事は全て協会の方は把握しておりブラックリ  
ストのトップに輝いている……おそらく民間GSとして復帰する事  
は不可能であろう。

「ッ！この悪寒はっ?!」

「……どうやら敵が乗り込んできたようだね」

準備の手を止めて窓の外を窺う二人。

其処には奇妙な様相の団体がいた。

「あれは……なんだ?ッ!入ってくるぞ!」

「こんな狭い所じゃ迎撃できないわ!廊下に出て戦いましょう!」

神通棍片手に廊下へと出て迎え撃つ美神。西条も霊剣ジャスティス  
を手に後へと続く。

敵の集団は思っていたよりも素早く侵入してくると襲い掛かってき  
た。

「ハアッ!.....ッ!」

美神は敵の顔面に向けて神通棍を振り下ろすと激しく打ち据えた。  
しかし敵は怯まず依然其処に立っていた。  
但し顔の表面が顕わになっていたが。

「こ、こいつらゾンビっ!? .....って、なんであんなに  
素早く動けるのよっ?!」

「愚痴っても仕方ないだろう、とにかく迎撃しないとっ!」

暫らく二人で連携して何とか全滅させる事に成功する。  
辺りには10体程のゾンビの残骸が散乱していた。

「……ふう、何とか撃退できたわね」

「ああ、もう少し数が多かったら危なかったけどねくダツ！>ツ！  
？なんだっ！」

不意に後ろから聞こえた足音に振り向くと倒した筈のゾンビの一体  
が部屋へと駆け込んでいった。

そのままゾンビは針を掴むと窓に向けて身を躍らせた。

ガツシャアアアンツ！

「ツ！くそ、針を奪われたっ！令子ちゃん、急いで後を追うよっ！」  
「分かったわ！」

二人は急ぎ装備を整えるとオフィスを後にした。

暫らくして打ち倒されたゾンビの残骸が残る廊下に一人の女性が現  
れた……美神 美智恵である。

「……厄介なことになったわね。まさかせっかく奪取した針が奪わ  
れるとは……やはり人員不足を早急にしなければ事態には対処でき  
ないわね」

美智恵はそういうと懐から一冊のノートを取り出す。  
其処にはびっしりと文字が書き込まれており部分的には斜線で消さ  
れている。

「……しかし、この時期的なずれや人間関係の違いはやはり平行世界の可能性があるのかしら？」

そういつてページを捲り、元始風水盤と記されている項目を見る。そこには鎌田 勘九朗襲撃やら魔族が世界転覆を狙っているなど断片的な事が書かれていた。

しかし美智恵の調べたところ鎌田 勘九朗という人物は現在存在しないし今回の襲撃もゾンビのみだった。

「7年ほど前から夢で断片的に見てきた事を綴っていたけど的確率は半分つて所かしらね……大まかな所は大体あっているけど、やはりあの規約改定が一番決定的に違う所ね」

そういつてノートをパラパラ捲る美智恵。

「でも、もつと肝心な事は令子のパートナーたる存在の情報が一切見えなかったことよね……随分頼っているような所も感じられたからその人がいたらもつと助かったんだけど」

当初その存在は西条だとばかり思っていたが、断片的な夢を見る回数を重ねるにつれそれが違うと分かった。

令子が信頼の視線を向けているのは違う方向に西条の姿が浮かび上がっていたから。

最も美智恵はこの情報を全て宛にしているわけではない。

己の直感を一番に行動しているのだから……最近はどうも外れる事の方が多いが。

「何はともあれもつと令子の立場を安定させないとね……どうやら六道家はあまり宛にならないようだから自分が何とかしないといけないだろうけど」

美智恵は重い溜め息をつくとその場を後にした。  
物陰に潜んでいた影に気付かず。

S I D E 雪之丞

カオルン

現在俺達は香港島と九龍の間にある海底トンネルにいる。  
来る途中にオカルトGメンの動向を探ったがどうやらまだこちらに着いていないらしい……針は奪われたようだが。  
レンタルカーの車内で食事を済ませた俺達は侵入の手順を考えていた。

「さて、どうしましょうね。針は奪われて私たちと僅差でこっちに着きたいだからそれほど時間は無いはずよ」

「当初の予定通り僕のヴァンパイアミストで侵入すればいいのでは？九琉さんやドクターを先に侵入させれば罠があっても対処出来るでしょうし」

「私は影装術で影そのものになれば侵入できますから最初に入りますね」

「見たところこの先に結界の類は感知されません。熱源もありませんから大丈夫かと」

「……それで行くしかないか。私とマリア・テレサは後でこっそりそっちに飛ぶから三往復よろしくねピート」

「はい！」

どうやら当初の予定どおりになるみたいだ。

俺は未だこういう考え事は苦手な部類だから役に立てない。

まあ、その分戦闘では九琉に匹敵するものを持ちつつあるけどな。  
その後俺達は予想に反して何の妨害もなく内部に侵入できた。

「……テレサ、元始風水盤がある方角に熱源は感知できる？」

「……！三つあります。あとそこまでの通路にゾンビらしきものの熱源とこの少し先にガーゴイルのような物が存在します」

師匠の問いかけにさっと答えるテレサ。

いつも思っていたけど、こいつって本当に優秀だよな。

戦闘はそうでもないけど、後方支援と探索にかけては他の追隨を許さないレベルだし。

しかし三つの熱源か……一体どんな奴らなんだ？

「テレサ、その三つとは全て違う熱源を持つておるのか？」

「はい、そして全てゾンビのものとは違います。それ以上の霊的エネルギーを感じしました」

「……厄介ね、力の程はどれぐらい分かる？」

「流石にそこまでは……唯一つを除き他二つはそれほど高密度の物ではありません」

「その一つが魔族のものとして、残り二つは魔獣か何かかしら？」

「とにかく行きましょう、いざとなったら五分だけでも小竜姫が出張るから」

「分かりました、では行きましょう」

確かに実際見えなければ本当のことなど判らないからな。

俺達は慎重に歩を進めると明けた場所に着いた。

さつき言っていたガーゴイルって奴であるう石像が鎮座している。

前座に時間は掛けていられないから俺が霊波砲で撃破しようとしたらカオスに止められた。

カオスはマリアにバズーカを撃てと命ずると後ろへと下がるように皆に指示した。

結果ガーゴイルはあっさり破壊され、瓦礫の山となった。

「良くあれが魔力コーティングされているって気付いたわね？」

「なに、昔とつた杵柄って言う奴さ」

「魔力コーティングって事は靈的攻撃に半端なく強いって事ですか……ドクターのお蔭で無駄な消耗を防げましたね」

そういうことか……もっと対象を観察する癖をつけないと駄目だな。

「とにかく先を急ぐわけ……ゾンビの群れの後には正体不明の敵がいるんだし」

「特に靈的サーチの感触はしないから向こうから覗いているって事はないと思うけど……油断は出来ないわね」

師匠の言葉に頷きつつ先に進む俺達。

……しかし声はすれど姿は見えない師匠は何処にいるんだろうな（汗）

そして進むにつれ起き上がってくるゾンビたちの群れを倒しつつ走り抜ける俺達。

その途中でテレサが警告を告げる。

「！元始風水盤にもう一つ熱源が現れました！ゾンビのものと同じです！」

「……間違いなく針を奪ったやつね。他には付近に感知できない？」

「はい、周囲一キロ私たちと元始風水盤以外には熱源はありません」

「なら急ぎましょう、オカルトGメンが来る前に終わらせるのが一番だからね」

そしてついに辿り着いた其処にはテレサの進言どおり三つの影と一体のゾンビがいた。

一つは鳥頭の怪人、一つは三つ目のトゲ頭の怪人、そしてそれらを従えるように既に針が納められた元始風水盤の前に佇んでいる人影。



「厄介なやつらが揃っておるな……あの鳥頭はガルーダ、トゲ頭はサトリだな」

「それより問題は魔族の方よ……一体誰なのかしら？」

「……着物姿のようですが」

「ツ?! 着物って言った? もしかして烏帽子を被ってないっ?!」

「ええっと……はい、被ってますね」

「何? 心当たりでもあるわけ？」

「最悪、おそらくそいつは悪霊道真公よ……いや、考えようによつてはラッキーなのかな？」

『……………ツ?!』

「ツ?! だれだっ!」

「チツ、ばれたわけ。とりあえず手下から片付けるわよいいわね!」

「既に元始風水盤は微弱ながらも動いておる! パワーが増している筈だから気をつけるよ!」

「サトリはマリアを主軸にして戦いなさい! ガルーダは素早い上に強いから複数人で対処しなさい! ……ツ! あれはやっぱり道真! 道真は強力だから指示を出すまで決して近づいては駄目よ!」

『了解!』

「出て来んのか? なれば此方から……ツ!」

「そう焦るなよっ! ハアツ!」

此方に近づこうとした道真に向けて靈波砲を見舞うと手筈どおりそれぞれ相手に取り付いた。

サトリにはマリアとテレサが、ガルーダには俺とピートと陰念が相対した。

カオスは九琉とエミの姉さんと共に道真を警戒している。

さあ、此処からが本番だぜえ!」

SIDE OUT

SIDE マリア

雪之丞さんの霊波砲で上手い具合に分散したそれぞれの魔物を相手する私たち。

私とテレサは相手の思考を読むサトリに相対した。

相手の能力も私たちには通用しにくいようで善戦出来ているけど虫お嬢様の事を考えると早く終わらせなければならぬ。

「テレサ、時間は掛けられません！一気に決める為に以前から考えていたあれをしますよ！」

「OK姉さん！私たち姉妹の最高の技で仕留めて上げましょう！」

私はテレサに合図を送ると二人の人工靈魂を接続して一時的に一人以上の存在となる！

それにより完全に意識を読めなくなったサトリは混乱するが私たちは構わず攻撃を繰り返した！

「火と火が合わさり私たちは炎となるっ！黄泉の眠りに落ちなさい！サトリ！」

相乗効果で増幅した霊波を纏った私たちの同時攻撃はサトリを飲み込み消し飛ばした。

私たちは接続を解くとカオス様も元へと駆け寄り共に道真を押さえる側に回った。

SIDE OUT

SIDE 陰念

隣では早くもマリアたちが決着をつけていた。

隠し技には驚いたけど、確かに時間は掛けていられないのは確かだ。私たちは連携してガルダに攻撃を仕掛けるも元始風水盤の加護を受けている為か動きが捉えきれない。

「くそ！こいつ思った以上に速いぞ！」

「なら私は黒豹で翻弄するからピートが爆発で怯んだ隙に聖なる波動で動きを少しでもいいから止めるんだ。後は雪之丞の連続霊波砲で一気に決める！」

「分かった！」

私は素早く印を切ると黒豹を五体生み出しガルダを包囲した。

流石に動きの素早い黒豹の群れを避けきることはできず爆発で怯んだのか一瞬動きが鈍る。

それを確認したピートは溜めていた波動を一気にぶちまけガルダに更なる重圧を掛ける！

「これで終わりだッ！！連続霊波砲ッ！！」

完全に動きが止まったところに雪之丞の練りに練った霊波砲が大量に降り注いだ！

流星のガルダもこの過剰攻撃には耐えられなかったようで瀕死の体で倒れ伏した。

「というかあれでもまだ原形留めているなんてどれだけ頑丈なのだ（汗）」

私たちはガルダに一応の用心として捕縛ロープを巻きつけるとエミ様たちの下へと駆け寄った。

S I D E O U T

「ふむ、中々見事なお手前だな。褒めてやろう」

「ケツ！部下がやられたって言うのにのん気に敵を褒めるたぁいい身分じゃないか」

「あれらは所詮雑用係に過ぎんからな……とはいえ、礼はしておくべきであるっ」

「ツ！来るわよっ！」

道真が手に膨大な力を集約させて此方へと向ける。

――――とその時！

ドゴオオオオンッ！！！！

バラバララッ！！バシユッ！バシユッ！！

轟音が壁を突き破り飛来する大量の破魔札！

「何事だっ！？」

「オカルトGメンだっ！大人しく降伏しろっ！！」

『ゲツ！？』

現れた西条と美神に嫌そうな顔をするエミたち。

どうやら靈気の密度が濃かったため接近に気付けなかったようだ。

ちなみに蛭は元始風水盤の所で作業をしながらも同じく嫌そうな顔をしていた。

「あ、あんた達は、横島家のっ！？」

「たった二人で何しに来たわけ？」

「そうだな、お主たち如きに手が出せるような検案ではないぞ？」

「それに乗り込んでくるのはいいですが相手の確認は済ませたのですか？随分派手に登場しましたが」

エミ・カオス・九琉が呆れた口調で言う様に美神は嘔み付きそうに

なっただが、道真を見て体を硬直させた。

「こ、こいつら(怒)……ッ!?こいつは?!」

「令子ちゃん?どうしたんだい?」

「不味いわよ西条さん!あれは悪霊道真公!私たちが相手をできる手合いじゃないわっ!」

「な、なんだつて?!」

「(……) やっぱり確認せずに飛び込んできたのかよ、正義の使者が聞いて呆れるぜ)」

「(そういつてやるな、相手は坊ちゃん嬢ちゃんだからな)」

「(というよりあんな大きな穴を壁に開けて大丈夫なのでしょうかな?)」

啖呵を切りながらも正体を知つてすぐうろたえる様に雪之丞は毒を吐いた。

カオスはそれに苦笑しながらも嗜める……言っている事は貶しているのと同じ事だが。

それとは別にピートが洞窟の崩壊を気にしていた……今の所異変は起きていないようだが。

そんな彼らを他所に道真は其中で令子に目を向け大きく見開いた。

「き、貴様はっ!?アシュタロス様に泥を被せた不屈き者!造物主であられるアシュタロス様に背いた貴様は生かしてアシュタロス様の元へと連れて行ってやるっ!」

「げっ!?まっずっ!」

「アシュタロス?一体何の事だ?」

道真が美神の前世の事を語り始めるのを聞いて不味いと感じる美神と不審な物を感じる西条。

一方エミたちはどうするべきか決めかねていた。

蛭が知識を総動員して元始風水盤を弄っているのは把握済みだが、このままではオカルトGメンに協力しなければならぬことになることになってしまう。

しかしそれは杞憂だった。

突如、美神と西条の足元が光ったと思うと二人はその場から消え去ってしまったのだ。

言うまでもなく蛭の文珠である。

どうやら上手い具合に彼らの足元へ文珠を設置できたらしい。

最も道真はいきなり対象が消えた事で混乱していた……そしてその時エミに蛭からの念話が届く。

「ッ！……分かったわけ。みんな、道真を元始風水盤へと誘い込むわよ。後は蛭と小竜姫様が何とかしてくれるわ」

『了解！』

エミは蛭の指示を皆に伝えると陣形を整え突撃した！

「むっ！身を弁えずに来るか?!だがもう遅い、元始風水盤は間もなく本格的に作動する!」

「いいわねっ！九琉に籠めれるだけの霊力を送るのよ!」

「マリアとテレサは迎撃を!」

「……ふう、ハアアアアッ!」

姿を現したエミたちに気付き迎え撃とうとする道真。

エミとカオスがそれぞれ指示を出すなか、九琉は真装術を展開した。マリアとテレサが道真の牽制をする一方で準備の整った九琉に霊波を送るエミたち。

九琉は送られてくる膨大な霊波をチャクラを廻す事で必死に制御し

構える……そして脳裏に響く蛩の声。

いいわよっ！九琉っ！！

脳裏に響く蛩の声に従い、溜めに溜めた波動を一気に放出する九琉。道真はそれに気付いてはいたが目の前のマリアたちに翻弄され避ける動作が遅れてしまった。

「お、おのれえ！！この程度の攻撃なぞ受け止めてくれるわ！」

「ハアアアツ！！」

迫り来る波動を両手で持つて押さえ込もうとする道真。

その波動に後押しをするかのように波動を放出し続ける九琉。

状況は元始風水盤手前で拮抗しつつあったが、其処へ現れる一つの影が在った。

「愚かなる悪霊よ！太宰府天満宮に居られる神道真公の代わりに成敗してくれる！」

「……ツ！？神族だどっ！こいつらは貴様の差し金かつ！？」

「戯言はいいです、即刻膝きなさい！」

小竜姫は波動を押さえ込みながらも激昂する道真に取り合わず波動に自身の力を加える！

当然圧力の増した波動に押される道真……そしてついに元始風水盤上へと乗りあがる。

そしてそれと同時に作動する元始風水盤！

「はははは！ついに作動したぞ、これでアジア全域は魔界に変わるッ！」

「それはどうかしらね？」

「なにっ?! - - ツ、グワアアッ?!」

元始風水盤から放たれた波動は邪悪な波動ではなく聖なる波動だった。

清浄なる空気が満ちる元始風水盤の上で苦しむ道真に小竜姫が超加速で一気に詰め寄る!

「悪霊道真よ!今一時の間、神聖なる存在へと変化せよ!」

もがき苦しむ道真の腹部に蛭の 神ノ化 の双文珠を埋め込む!

文珠の効果は聖なる波動を放つ元始風水盤の後押しですぐさま効果を発揮する。

「はっ!私は一体なにを?」

「道真公、私は妙神山の管理人・小竜姫でございます」

「おお、貴女が名高い神剣の使い手ですか。……?はて、私は何を?」

「貴方は神道真から別たれた分身体であり悪霊でした。今は一時的に聖なる者へと変化していますが……いずれ元に戻ってしまうでしょう」

「- - ツ?!なんですとっ!で、ではどうすればっ!?!」

「この場において手は一つ、封魔天蓋魔封陣というもので貴方の核を一時的に抜き取り浄化して生まれ変わるしかありません」

「……分かり申した、存分にやって下さい」

一時的に正気に返った道真を説得し協力を仰ぐ小竜姫。

少なくとも今は神と化しているので道真はそれを真摯に受け入れた。小竜姫はその返答に頭を下げ、力ある言葉を発する。

「命は魂に繋がりしものなり、魂は核へと至るものなり。汝が核は



今此処に現れるべき時を迎えた……悪に囚われし核よ、汝が居場所はこの手の中なり！！起動せよ、封魔天蓋魔封陣！！！！」

発動する陣の影響は起動していた聖なる波動を放つ元始風水盤により強化される。

その結果、道真は一気にその存在を核に変換し姿を消した。

「……何とか無事片がつきましたね、お疲れ様です」

「助かりました、小竜姫様。それよりも早くこの場を後にしましょう……オカルトGメンが戻ってくる前に」

「九琉の言う通りね……針は外して妙神山に保管かな？」

「それでいいと思います」

蚩たちは一通り辺りをサーチして敵の生き残りが居ないかを確認した後、洞窟を後にした。

ちなみにガルダは小竜姫が針と一緒に担ぎ上げて一足先にテレポートで妙神山に運んだ。

洞窟に静寂が戻って半刻後、装備を更に充実し香港支部の同士を引き連れ美神たちが乗り込んできた。

もともと既に事は終結しており全ては無駄足となったが。

「あいつらが倒したというの？悪霊道真を？あいつは中級魔族に匹敵するやつだった筈よ?!」

「他にもいたということか？たとえば神族の助っ人などが？それなら先ほどの転移も納得いくが」

美神と西条は説明を要求する香港支部を他所に得体の知れない存在に不安を感じていた。

## 第二十章 暗躍する者と邂逅する者たち（後書き）

ま、纏め切れていない（汗）

……いつもの事ですかね？

なんだかどンドン改訂作業が難しくなってしまう方向にいつている  
ような気がします。

次回投稿は8/6の0時です。

感想誤字報告お待ちしております。

第二十一章 取り戻せしは尊厳そして愛の欠片（前書き）

時は来た。

## 第二十一章 取り戻せしは尊厳そして愛の欠片

妙神山最奥の神殿、その中心に一人の青年が佇んでいた。

周りには妙神山関係者、及び横島家関係者が啞然とした表情でその青年を見詰めていた。

青年はそんな皆を苦笑しながら見返し言葉を発した。

「それじゃあ改めて……俺の名は横島 忠夫。皆の知る蛭自身だよ」

忠夫の発する言葉に啞然としていた者たちが解凍したかのように一斉に叫びを上げた。

忠夫はそれに更なる苦笑を浮かべるもふとこれまでを振り返った。

S I D E 蛭

先の件から既に二週間が経っていた。

元始風水盤の件が終わり思っても見なかった悪霊道真の怨念が手に入った事によって心配の種は悉く消えた。

そう、これまでの結晶を吸収する事で霊力値も6800マイトを達成し何時でも第五の封印を解けるようになったのだ。

どうやら悪霊道真が元始風水盤で少なからずパワーアップしていた故に結晶の規模も大きくなっていたみたいなのだ。

封印を解いた後も各チャクラに過剰な充填をしなくてはならないとは言え、とりあえず最低限の用意は整った事になる。

そして私は今第五の封印解除と共に行おうとしている事を考えていた。

つまり……ルシオラの復活を。

無論完全に復活させるには未だピースが足りないけど、とりあえずの復活程度は可能であるはずだ。

それはともかく、この二週間の間にも幾つかの事件と判明した新事実があった。

まず事件が二つ。

一つは貧乏神の貧と小鳩ちゃんの件。

これは人間観察をしていたタイガーが貧乏神を侍らす小鳩ちゃんを見つけたのが事の発端だった。

詳しくは省くが元気のない彼女の事情を聞いたタイガーが事務所に案内する事でこれは無事解決。

貧は福の神になり小鳩ちゃんの母は横島家の一室で養生する事になった。

小鳩ちゃんは事務所の経理や雑用を手伝いつつ学校に復学することとなった。

もう一つの事件はオカルトGメンが報道で叩かれた事。

先の元始風水盤の件で西条たちはオフィスの廊下にゾンビの残骸をそのまま残し香港にいった。

それが不味かった……それを発見したビルの関係者が警察に通報したのだ。

そして鼻の利く雑誌記者がこれを知ったことでこの事は瞬く間に世間に知れ渡った。

当然西条たちは事件を解決する為に早急に行動を起こした結果だと発言したが、ではその成果はと訊かれて沈黙せざるおえなかった。

何せ自身に成せた事など何もないのだから。

この事で世間のオカルトGメンに対する評価は少なからず落ちる事となった。

次に判明した事。

これは特に重要な事であった。

美神 美智恵の情報源である。

これも先の事件の時に判明したのだが、美智恵の追跡をしていた黒崎さんがあの者の呟きを聞いた事で分かったのだ。

どうやら未来の事を断片的に夢で垣間見ているようなのだ。

断片的故に完全な物ではないし、既に未来とは剥離している部分が多々あるので余り役に立ってないみたいだが。

黒崎さんが言うには規約改定が最も大きな違いであり、それ以外の大きな出来事はほぼ同じようなのでその部分を持ってして軍や政府の関心……先見による自身の有用性……を勝ち取ったのではないかという事だ。

なんにしても厄介なことだ……特に断片的というのが。

一体どこまで知り得ているのか、何を知らないのか、今も夢を見続けているのか、予断は尽きない。

「ま、やる事は変わらないけどね……それじゃあ待望の封印解除やつちやいますか！」

私は意識を切り替えると最後の封印を解くべく自室を後にした……

そういえばこれも何とかしないとなあ（汗）

私は既に後にした部屋の少女然とした内装を思い浮かべてげんなりした。

横島家に居た皆を連れて妙神山に赴いた私は老師たちを集め最後の封印を解く事を宣言した。

ちなみにタイガー及びヒヤクメはいない。

タイガーは相変わらず協会に詰めているし、ヒヤクメはこの儀式中不穏な動きが無いが外を監視している。

「そうか、ついに完全開封の時が来たか」

「おめでとう蛭、それで封印を解いたらどうなるの？」

「ん？太極天の基本能力である二つの力が加わる事ともう一つは秘密！」

「秘密つて蛭、何か危険な事があるんじゃない？」

「別にそういうのじゃないよ、ただ皆が驚くようなことが起きるだ

け」

勘ぐる母さんの言を否定する私……というか少しは息子の事を信じて欲しいなあ。

私は溜め息をつきながらもジト目で母さんを睨むと宣言した。

「前もいったけど、私は親や友人を悲しませるような事はしないわよ……無茶な事はするけどね？」

「……できれば無茶な事もやめて欲しいんだがな」

「それを言っちゃあそもそも私が此処に居ることすらなかった事になるよ？老師たちや母さん達は実際記憶を見て知っている筈でしょ？」

「確かにそうじゃがな……あんな危険すぎる事を平然と実行に移してしまう御主だからこそ心配なのじゃ」

私や老師の言っている事は未来で玉藻に自分の分霊を譲渡したことで。

まあ、自分という物を保てなくなるかもしれない事を遣らかす太極わた天だからそう言われても仕方ないんだろうけど。

「ともかく！これから封印を解くわけだけど、そうなると玉藻・メドーサ・小竜姫の三名は私の供給を受ける事になるから注意しておいてね……今の段階では心配ないと思うけど」

「それはつまり蚩様が私たちを大きく上回るとい事ですね？」

「そ。大体……34000マイトってところかな。肉体的靈体的には限界まで鍛えてあるからもう少し伸びるかもしれないけど」

「……ということは大体8000〜9000マイトの供給があるとということかい？」

「それぐらいだね、本来この程度のマイト数で其処までの供給は起こりえないけど……私の核が規格外なだけに供給が成り立ってしま

うのよね」

「最上級の核だからねえ……むしろ蛭がストッパーになっていると言った方が正しいんじゃない？」

「……半端ねえな師匠たちは（汗）」

そばで聞いていた雪之丞たちはレベルの違いすぎる世界に眩暈を起こしていた。

最もそういう雪之丞たちも素で100マイトを超え、チャクラも第四まで開眼しているので300マイトまでは揮えるのだが。

「ふむ、なにはともあれ開封の儀を済ますとしようかの」

「そうだね」

「小竜姫、メドーサ、玉藻の三名も気を静めておけよ？」

『了解』

老師が三人に注意を投げかけながらも結界を構築する。

それはこれまでの物より強力であった。

なにせ開封されると同時に放たれる太極天の封力がこれまでの比ではないからだ。

私は老師が結界を構築しても暫らくは瞑想を続けた。

これから行う事はただの開封ではなく自身の望みを叶える第一歩目の行為なのだから。

無の境地に至り、更なる境地へと埋没する私。

自身が世界との境界線を保てなくなるのではというぐらいまで埋没した時、私は一気に封印の枷を解いた！

カッ！！

瞬間辺りを埋め尽くす強力な光の洪水。

予め皆には声を掛けるまで顔を伏せて置くように言っておいたから



よかったが、もし直視したら間違ひなく失明していたでしょうね。  
光は私を満たしながら徐々に収束していく。

自身の中でうねる光は内にあつた頑強な鍵を抉じ開け沈められていたルシオラの意識を解放する。

……さあ、今からが勝負の時だ！

私は浮上してくるルシオラの意識のある部分に導き、同時に自身に融合しているルシオラの因子をその部分に集結させる。

その際、体全体が強烈な痛みを訴えるが気合で押さえ込み一気に事態を収束させる。

「ハアアアアアアアアアアアツツ！！！」

私はルシオラの因子が存在していた所に自身の人としての因子以外を増幅し割り込ませる事で補うと未だ溢れていた光の奔流を強制的に自身に収めた。

高密度の靈気によって視界が見通せない結界の中で再構築されていく肉体と靈体……どうやら成功のようだ。

俺は思っていた以上の会心の出来に喜びを顕わにした。

「いよつしゃあつ！！！」

辺りに響き渡る俺の声……同時に聞こえてくる周りからの戸惑いを含んだ声。

……さあ、お披露目といこう！

SIDE OUT

老師を初めとする大勢の者が集まる神殿の中央にその青年はいた。  
老師たちは先ほど青年が言った言葉に未だ呆然としていた。

それでも聞かすにはいられなかつた百合子がその者に問いただす。

「皆の知る蛭って……どういうこと？」

「そのままの意味だよ。蛭の状態はあくまでルシオラの因子を強く受けていたから女性になっていただけだよ」

「それじゃあ、そのルシオラさんの因子は？」

「それはこの龍珠っていう宝珠の中に纏めてあるよ……意識の方もね」

そういつて右肩に埋め込まれている透明な珠を指さす。

百合子はそれを聞いていつか聞いた事を思い出す。

「もしかしてそれがルシオラさん復活の準備か何かかい？」

「お袋正解！まだこのままじゃあ完全には復活できないけど……この方法なら同じ時間軸だろうと両方のルシオラが存在できる」

そういつて優しく龍珠を撫でる忠夫。

其処にピートが声を掛ける。

「な、なんだか印象が随分と違いますね？」

「しょうがねえだろ？蛭の時の俺はこの時間軸の俺とルシオラの性格と太極天の影響で成り立っていたんだから」

「では今の忠夫様は？」

「今の俺は太極天の影響とルシオラの考え方が少し混じっているかな？基本俺自身が主体だけど、龍珠にルシオラの構成物質はほぼ移したから身体的な影響は無くなったってわけさ」

「ああ私の可愛い娘があ（涙）」

「俺の可愛い娘があ（涙）」

もう蛭にはならないと知って落ち込む横島夫妻。

「お袋に親父……（汗）」

「それで、ルシオラ様は今どのような状態でいらっしゃるのですか？」

「ルシオラは今龍珠の中で体を再構成している。ま、周囲から更にエネルギーを採取しているから一週間ぐらいすれば意識の方も目覚めるはずさ……あとは俺がチャクラを解放し存在値を上げれば、龍珠を核にルシオラが復活する。これは少なくともフェンリルの件を終わらせてからだな」

「しかし宜しかったのですか？ルシオラ様が再臨されるのは喜ばしい事ですが、決戦時に忠夫様の能力に不都合が出るのでは？」

太極天の能力の一つである龍珠がなくなるのは時期的に不味いのはと小竜姫が訊ねる。

太極天の龍珠と言う物がどういう能力を持っているのかは知らないが無くなると言う事は弱体化するのではというのが理由だ。

「その心配はないよ……っていうか、寧ろルシオラが龍珠を核に復活するのはどでかいメリットが増えるだけだよ。……そうだな、俺の龍珠が何か当ててみ？」

忠夫は小竜姫の懸念を否定すると逆に問いかけた。

右肩の透明な珠に虹色の渦がうねっているのを指しながら。

「龍珠が何かですか？……龍珠と言うぐらいですから気候や自然を操る事が出来る物ですか？」

「ハズレ、そんな安っぽい物ではないよ？老師はどうです？」

「む、ん……わしとしてはその名前より珠の中の渦が気になる。」

……その渦はまるで銀河のようにも見える」

「銀河ですか？……確かに、見ようによってはそうですね」

「……ッ！もしか、あれか？」

何かを思い出したかのようにハッと顔を上げる老師。  
それにニヤツとする忠夫。

「何か思い当たる物が？」

「……宇宙の卵か？形状は違うが」

「正解だよ、流石老師！これはあれの発展系にして強化版とも呼べるものさ……これには宇宙その物が入っている」

「……マジかよ（汗）」

「とんでもないわね（汗）」

「流石忠夫様……底が知れない」

レベル云々の範疇に収まらない忠夫の力に畏怖を改めて感じる雪之丞たち。

「なるほど、宇宙を核にするなら存在が同一視される事もないか」

「元々誰しも意識の底に宇宙コスモを持つてはいるけどね」

「それで忠夫？メリツトって何？というかそれは忠夫自身が使うものではないの？」

「この宇宙は俺と繋がっているんだ……つまり、その宇宙を内包する事になるルシオラは俺と同等の存在になるのさ。他の使い方もあるけどな」

「まさか……ルシオラ様も文珠使いに?!」

「そういうこと、流石に巴文珠は無理だけだね」

忠夫の言葉に啞然とする仲間達。

その言葉に秘められた可能性の大きさに気付いたからだ。

「とんでもないのう……御主は。今回は未来ほど力を持つ事はないというが、ルシオラの嬢ちゃんと協力すればそれ以上に容易くなれ

るではないか」

「ワイルドカードの名は伊達じゃないって事さ！……俺自身はまだ完全にその域にいるって訳ではないけどな」

強い眼差しで老師を見詰める忠夫は屹然としていた。

強い意志の籠った瞳を見て老師はこれなら大丈夫と判断した……その瞳から感じる物が蛍の時以上だったから。

「ま、何はともあれ……これからは忠夫としてよろしくな！」

「蛍様であろうと忠夫様であろうとその魂に違いがないのであればこの貴方様を思う気持ちは変わる事など御座いませんわ」

「ああ、師匠がその外見を変えようと中身が変わらないなら同じ事さー！」

「私の信仰は些かもゆらいではいませんよ、忠夫様」

「信仰って陰念（汗）」

九琉と雪之丞の言葉に頬を緩めながらも、陰念の余りの傾倒振りに若干不安になる忠夫。

「私も変わらないわけ、妹が弟に替わっただけだし……母さんのおもちゃの対象が減ったのは不安だけど（汗）」

「忠夫兄さん、これからもよろしく」

「わしも同じだな。たかが性別が替わっただぐらいで盟友を見捨てるような事はせんよ」

『我々も同じです、お嬢様が御坊ちゃまに替わっただけです』

「御坊ちゃまは止めてくれ（汗）」

姉であるエミと妹のおキヌと盟友のカオスに頷きながらも、マリアとテレサのあんまりな言いように止めるよう願う忠夫。

「僕も変わりませんよ、恩人である貴方様への感謝の念を忘れる」とはありえませんか」

「俺達は言うまでもないよな？」

「ええ、息子を護るのは親である私たちよ」

「ピート……親父……お袋」

まっすぐ見つめながら屹然と告げるピートと優しげに語る両親にグツと来る忠夫。

「わしもじゃ……と言つか今更じゃな」

「私が忠夫様の僕である事は決まり決まった事です！」

「あたしもさね。というか恋人として可愛がつてくれるんだろ？」

「そうよね。恋人の私たちに聞く事ではないわね」

「……ああ、そうだな」

師と半身たる者たちの言葉に頷く忠夫。

忠夫は思う。

俺には世界の祝福なんて要らない。

この暖かな仲間が家族が恋人がいれば……それだけで、何者にでも成ってみせる！

新たな決意を胸に忠夫は拳を握った。

「それじゃあ世界GS本部やザンス王国にその旨を伝えないとね。

協力してくれているんだから貴方自身がその身を証明するのよ？」

「ああ、分かっている。俺を受け入れてくれた人たちに報いる為にもきちんと筋を通してくるさ」

「知らせるのはそれらだけですか？」

「……美神 美智恵の事を考えるとその方がいいだろうな」

「未来を夢で見ている……でしたか」

忠夫が返した答えに九琉が思い出したかのような眉を寄せながらに咳く。

「断片的というが、どれほどの物なのか……横島家のことを嗅ぎ回らないところを見ると少なくとも忠夫様の事は抜けていると見るべきか？」

「そうでもないようだ……そろそろ此方にも手を伸ばしてくるさ、厄介なことに」

「……おキ又ちゃんのこととはどうなのかな？未来での美神除霊事務所と同僚だったから不審に思われなかな？」

「え？私もいたんですか？」

「ツ！（しまった）……悪いけど未来での各人の様相は語らないよ？意味がないことだしね」

「それは……そうですね、それじゃあ私はどうすればいいですか？」

おキ又は知りたそうな顔をしていたが、忠夫の苦渋する顔を見てそれを飲み込んだ。

忠夫は未来のことを思い出し若干顔を伏せて思った。

悪いとは思っけど……今回はあの人の影響を受けて欲しくないからな。

……未来ではあの後若いみそらで隠匿しちまったからな。隠していたであろう事柄なんかには思うこともあつたけど、それもあの事務所に居たからこそと言えるだろうしな。

せつかく普通の日常を得たんだ出来るだけ普通に過ごしてほしいと思う忠夫であつた……例えそれがエゴだとしても。

「横島姓だし通っているのも違う学校だからな……時期的なものもあるだろうけど、後大きな問題といえばフェンリルと魔族襲撃と月の件だけだし」

「だけって言えるのがあれよね（汗）」

「実際問題があるのはフェンリルぐらいだろ？魔族襲撃の件も逃がす必要もないんだし……最もそれをすると月の件がどうなるか不明だけど、それも早期に目標を達成したら待つ必要もないしな」

「そうよね、忠夫はもう結晶を必要とはしていないんだし」

「だからおキ又ちゃんは普通でいればいいと思うよ……拉致するよくな真似はしれないと思うけど、そこら辺はその子が対処できるだろうし」

そういつて忠夫はおキ又の肩に佇んでいる式神を見た。

彼が製作した鳥型の式神だ。

体長を1Mまで巨大化でき通常は霊波を隠蔽しておキ又の肩に乗っている。

見た目は普通の鳥と変わらないので怪しまれる事はない。

「はい、じゃあもしもの事を考えて出来るだけ皆さんといますね」

「それがいいな。……とはいえ、他の面子もそれなりに顔が知れているかもしれないからな」

「結構いるのですか？」

「……っていうかほぼ全員だな。何かしら係わっている人ばかりだから」

「それでは妙神山のほうで身を預かっている旨を協会に伝達しておいた方がいいですね」

「そうじゃな、それならばいざという時逆に向こうを押さえられよう」



こうしてこの日は解散となった。

仲間の身の保障の件はすぐさま小竜姫と百合子が本部に赴き通達した……忠夫は後日明かす事になっている。

少なくともルシオラの意識が浮上するまで籠るそうだ。

これにより身の安全は元より美神 美智恵の危険性がより深く協会内部で囁かれる事となったのは余談だ。

ちなみに現在の忠夫のステータスは以下の通りである。

横島 忠夫 17才

膝裏の辺りまで伸ばしていた黒髪を赤いバンダナでポニーテールにしている。

髪に含まれる膨大な霊力を無駄にしないために切っていない。

身長：178cm

総霊力保存量 6800マイト 35000マイト（第五の封印開放後）通常時50マイトまで隠蔽

チャクラ 全チャクラ開眼（充填率七割）

霊能力 文珠 / 双文珠 / 巴文珠 / 龍珠 / 靈波刀 / 各種靈波砲 / 式神創造及び操作 / 五色の装具（靈気の盾 / 妖気の具足 / 竜気の籠手 / 魔力の仮面 / 神霊力の靈衣） / 靈視 / ヒーリング / 神通足 / 五行術戦闘技術 剣術（小竜姫の直伝） / 気配遮断 / 霊力隠蔽 / 気孔系格闘術（猿神直伝） / 縮地

基礎能力 今まで培ってきた知識と太極天の知識 / 高レベルの家事全般

因子の割合 横島 忠夫 10割 + 玉藻 2割 + メドーサ 2割 + 小竜姫 2割 + 太極天 4割

意思の共有を残し自身の中で強化し続けてきたルシオラの因子を龍珠の中に移し存在を固定した。

忠夫の中にあるメドーサの因子は神の因子、小竜姫の因子は竜の因子、太極天の因子は主に魔である。

太極天の因子は基本魔で固定されている。

太極天の能力は検分の為訪れた異世界で得た能力を除きほぼ受け継いだ。

太極天二世として目覚めたので霊力隠蔽能力が飛躍的驚異的に上がっている。

S I D E 美智恵

私は現在自ら裏を頼り集めた大量の資料を見詰めている。

それらの中にはどうでもいい事から信憑性の無い物まであるが中には見逃せない事も書かれていた。

「やはり全ての事象は横島家を中心に動いているわね。……巧妙に伝手や他の機関を介してはいるけれど、規約改定以後はあそこが芯にいる」

美神家の行動に影を差した要因の一つである規約改定。

それにはザンス王国の精霊石関連と世界GS本部が中心となって取り組んでいたと思っていたのだけれど、それらを繋げたのは間違はなく横島家であることは最早疑いない。

……特に 紅ユリ と呼ばれている横島 百合子が厄介な存在だ。私も未来の事を夢身で知りそれを持って政府の重鎮を味方にしていくが、あちらは違う。

どうやら日本の政府には関係者を持っていないようだが、ザンス王国や世界GS本部には多大なる影響があるようだ。

「自ら立ち上げた会社の方の影響も各界に多大な影響を持っているようだしね……政界には余り係わってないようだけど」

そう、不自然なほど日本の政府には係わっていない。

それが何を意味するのかは分からないが、そのお蔭でこちらは横島家の目を気にせず動ける。

その結果、鬼籍に入ってなお結構自由に動いている。

「もつとも最近ではオカルト方面でも大きな影響力を持つてきたから厄介だけどね」

六道家の親子共々妙神山へと精神鍛錬のため送られた時には驚いたが、これにも横島 百合子が絡んでいる事が判明している。

しかも拘束期間を過ぎ、人界に戻った六道当主は横島 百合子に師事している。

あの六道当主である。

「……それも娘さんの精神安定及び暴走癖の緩和が成されたゆえでしょうけど」

あの年にしては余りにも子供過ぎる娘さんが立派に式神を操って見せれば感銘を受けても仕方が無いのだろうけど。

「まあいいわ。当てにならないのであれば元より近づきはしないわ。後が厄介だしね……それに駒も大分揃ってきたし」

海外のオカルトGメンに協力を仰ぎなんとかオカルト方面の部下も揃ってきた。

西条君に任せれた日本支部は前回のこともあり支持率が宜しくないが暫らくすればまた盛り返すだろう。

令子の方も仕事に折り合いをつけられるようになってきたみたいだし全てはこれからだ。

「指し当たって次に起こりうる大きな事件は人狼族のフェンリル狼の件ね」

夢で中心となっていた子は人狼族のシロっという子のようだ。

犬飼という人切りが行動を起こした後に人里へと下りてくるようだが……問題はその子が師事した人物だ。

相変わらず以前同様名前や顔がハッキリしない人物だが、いくつか判った事があった。

それはその人物が霊波刀を使っているという事とシロの先生となっていたということ。

先生云々はともかく霊波刀を使える人間などそう多くはないはず。

なれば今回の件にもし霊波刀を扱える人物が現れたら同一人物である可能性が高い事になる。

問題はフェンリル狼のような事件に係わるには今の規約だと既に他所の事務所に所属している可能性があるということ。

無所属でも他のGSと組んで出てくるかもしれないが。

私自身協会に目をつけられているから自身が乗り出すわけにも行かない。

「……でも協会の名簿を盗み見てもそれらしい人物はいなかった。

という事はその人物は令子が見出したという可能性もある。……駄目ね、どうしても手詰まりだわ」

かといって探すのを止めるわけにもいかない。

何せあの令子が無意識とはいえ頼ろうとするぐらいだ。

これから起こりうる令子の試練を考えるとどうしても必要な存在だ。

「……ここで考えていても名案が思い浮かぶ筈も無いか。今は他の懸案を纏める事にしましょう」

他の懸案事項……オカルトGメン日本支部の戦力拡大、これは先の海外支援で何とかなるだろう。

次に魔族の本格侵攻に対する策だが、一つは私自身の戦略級攻撃手

段。

これらの準備は既に整っている。所謂、膨大な電力を靈力に変換して放つ大技だ……その為に必要な空母も複数確保してある。

時間移動はあれから試す機会がなかったこともあって現在使用可能かは分からないが、電力変換が可能であるのは分かっている。

次に横島家のこと。

夢で見なかった規約改定を成したこの中心的存在はどう考えても異質だ。

私の靈感はこの存在に対して二つの判断を感じている。

一つはこの存在の核心に迫ればあらゆる事象が見えてくるというものの。

もう一つはこの存在に係われれば未曾有の危機に陥るというもの。

この二つが相反している物なら私は突貫してでも調べ尽くして見せるが、どう考えても悪い方向に事が進んでしまおうとしか考えられない。

とはいえ捨て置けはしないこともまた事実……西条君を介して探ってみるか。

最後に令子を基礎から鍛えなおす為の靈動シュミレーター。

当初は除霊作業を通じて令子を強化していこうと思っていたのだが、規約改定によりそれも不可能となった。

そしてなにより対戦相手のプログラムを打ち込む為のデータも不足している……それ以前に令子自身が鍛えられていないが。

「……やはり令子に試練を強制的に課すしかないわね。問題はどのような試練が効果的か」

現在令子は仕事以外の空いている時間は西条君に手解きを受けている。

それ故に対個人戦においてはそれなりにレベルアップしているが、

魔族相手では圧倒的に足りない。

最終的には私自身も出張る事になるから一定のフォローは可能だろうが、今の實力ではそれ以前の問題だ。

何よりあの子は神魔のレベルを正確に把握していないのが痛い。

経験が圧倒的に足りないのだ……いくら素質が凄くても磨かなければ原石のままだ。

「……妙神山に行かせるも紹介状がないし、神父に頼もうにも今の實力では絶対出さないだろうし」

……やはり私が厳しく叩きのめして育て上げるしかないか。

ある程度育ったら神父に紹介状を認めて貰うように進言させればいいんだし。

「そうと決まれば変装道具を取り寄せて臨時顧問として入れるように調整しないとね」

以前ドクター・カオスに正体を見破られたせいで既存の変装は出来なくなった。

またドクターに会ったら見破られるだろうが……まあ、会いはすまない。

私はオカルトGメン本部に連絡を入れると海外支援助到着後に臨時顧問が赴く通達をするように指示を出した。

運命の時は近いけど……最後に勝つのは私たち美神よ！

S I D E O U T

## 第二十一章 取り戻せしは尊厳そして愛の欠片（後書き）

よこっちついに男に戻りました。

とはいっても煩惱溢れる原作のようなよこっちには早々なりませんけど。

なお、改訂版では蛍化は無しにする予定です。

其処も含めてご意見お待ちしております。

次回は8/9の0時です。

感想等お待ちしております。

**第二十二章 放たれる意思と交差する思惑（前書き）**

此処から事態は急激に動いていきます。

纏めきれぬか不安ですが（汗）

それではどうぞ。



## 第二十二章 放たれる意思と交差する思惑

SIDE ルシオラ

私はルシオラ。

魔神アシユタロスに創造されし蚩を素体にした下級魔族だ。

魂の牢獄といわれる粗悪な監獄から逃れる為に私の造物主が起こした人界侵攻事件。

結果は……私も造物主も当初は予想もしていなかったようなものだった。

それを為したのが横島 忠夫という男。

私の心をつらえ、アシユ様の願いを叶えしもの……そして、世界と共に散っていった最後の英雄。

私の最愛の英雄。

私は今この時間軸の横島 忠夫の右肩にある龍珠から彼に話しかけている。

私は意識が戻った当初、酷い喪失感に襲われていた。

目の前にヨコシマと同じ存在であるタダオがいる故にその感情はより強かった。

「……何故私は此処にいるの？」

「それは君の恋人が望んだからだよ」

「……私はあの人と共に逝きたかった」

時を遡り掛けられた枷を悉く解く事に成功したタダオは喪失感に沈む私に対し完全復活の実現を宣言した。  
だけど私は断るつもりだった。

この時間軸は私が存在した時間軸ではないし、此処のルシオラに申し訳が無いからといって。

しかしタダオはそんな私に言った。

「決まっているだろ？ルシオラはルシオラさ。この時間軸のルシオラと別物なのは当然だろ？俺はお前は当然として、お前の恋人である太極天も復活させるぜ」

私は口を開けたまま啞然とした。

聞けばかの老師ですら思いつかなかった方法だという。

もっとも私のヨコシマは完全復活は無理でタダオの内に生息させる形になるそうだ。

「まあなんだ。これまで結構綱渡りだったからさ、その成功報酬ということで……なんちて（汗）」

そっぽを向きながらおどおど言うその様に私は私のヨコシマの影を見た。

……時間軸は違えど、やはり同じなのね。

そう思わずにはいられなかった。

「この時間軸のルシオラはどうするの？恋人にするの？」

「どうもしないよ……俺は既に玉藻とメドーサという素晴らしい恋人がいるんだ、小竜姫は微妙だけど。そりゃあルシオラを二人とも恋人に出来れば最高だし嬉しいし、俺として正しい行動だろうけど」

「煩惱魔人だし？」

「……俺はそれほどでもないさ、ルシオラの影響なのか恋人以外にはそんな感情芽生えもしないしな。尤も恋人にはその分強く出るけどな（汗）」

「……ごめんなさい」

私は謝らずにはいられなかった。

確かにタダオは優れた人物になれたかも知れない……でもあの溢れ

る煩惱も一種の魅力だった筈だ。  
それを私たちが混入する事で塗り潰してしまった。

「別に責めているわけじゃない。むしろありがたいことさ……どうやら俺の煩惱は桁外れのようだからな。いい感じにストッパーとなつてくれたさ……代償の女の子化は参ったけどな（汗）」

「タダオ……ありがとう」

「礼はこっちが言いたいぐらいさ」

タダオはそう言うとニカツと笑った。

腕白坊主のようなそれは正にヨコシマのものだった。

わだかまりや喪失感の消えた私たちは寝る間も惜しんで話し合った。

翌朝、タダオが仲間に私の意識の浮上を告げると彼らは喜びの表情で沸き立った。

その様は此方が恐縮してしまふぐらい盛大な物であった。

それは後で訪れた世界GS本部の会長会議でも同様だった。

この時間軸の世界GS本部では既に太極天とその伴侶である私と玉藻さんの存在は公認の物であり、崇め立てる対象となっていた……嬉しいけど、やっぱりとんでもないわね百合子さんたちは（汗）皆からのお祝いが終わった後、私とタダオは修行に入った。こぎつけた幸せを逃さない為に……大切な時間を謳歌する為に。

S I D E O U T

忠夫たちが修行を再開しだした頃、オカルトGメンでは一つの動きがあった。

「……てんで話にならん。これでよく霊能者を名乗れるものだ」

「ぐ……」

「ま、まさか……我々のみならずあの令子ちゃんまでがこうもあっさり倒されるとは。……彼は何者なんだ？」

オカルトGメン本部より派遣されてきた顧問が各人の実力を測りたいと言いつ出し始まった模擬戦。

顧問は海外派遣の者達を打ち倒し西条を下すと、相手の疲労を待っていた令子を疲れも見せずに打ち倒した。

その過程は無駄が無く、決して力任せではない華麗なものだった。故に下された者たちはこの顧問の実力に憧れを抱き精進する為に奮起するのだった。

……ただ一人、令子を除いて。

彼女はただ呆然としていた。

それも仕方が無い事だった……彼女の視点からしてみれば、だが。

GSとしてぼろ儲け出来ず、事務所も持たず、少し(?)欲を出した為に免停をくらい、挙句安い(令子主観)賃金で多くの仕事を受け持つ事になっていたのだ。

今回の事で自身の実力すら疑わしく思えてきてどうすればいいか判らなくなっていた。

そんな令子に近づく顧問。

令子は気付かず未だ呆然としていた。

顧問はそれを見て一瞬顔を顰めるも、彼女に冷たく言い放った。

「どうした、この程度の事で膝を折るか？そんな様では正規の所員として扱うわけにはいかんな……ふむ、美神 令子といったか。お前は暫らく私が指導してやる」

「……え？」

「お前は美神 美智恵の娘らしいがてんでなっていないからな。親に恥じないぐらいにはしてやるといつているんだ」

「ッ!? 貴方ママを知っているのっ?!」

「私は一時期彼女と組んでいた事があつたからな……で?どうする

んだ」

「……やるわ、私はこんな所で終わってられないのよっ！」

顧問はその言葉にニヤリと笑うと修行のカリキュラムを組むといってその場を後にした。

後に残された者たちはそんな彼を呆然と見送っていた。

「彼は先生の相方を務めたこともあったのか……通りで戦法に見知った物が垣間見えたわけだ」

西条が先の模擬戦を解析している間、令子は己の手をじっと見詰めていた……何かを思い出すように。

その後、仕事の傍ら顧問は常に一步先を行き令子の指導に熱を入れることとなる。

当初行き過ぎた修行に令子は再び膝を折りそうになったり西条が緩くするように進言したりもしたが、今では令子自らが進んで顧問の後について行っている。

令子曰く、彼からは何か懐かしい物を感じるかららしい。

こうして令子は美智恵の思惑通り少しずつではあるが魔族対策の戦法を仕込まれる事になる。

所替わって六道家。

百合子の下で強権を持つ者の在り方を改めて教わった冥那は六道の活動方針の転換を推し進めていた。

屋敷にいる住人は揃ってそのことを受け入れ清々しい表情で冥那に従った。

対する冥那はその有様に今までの己の所業を顧みて少々鬱になった。

「……私は一体何をしてきたのかしら。結局何も見えていなかったのね」

娘である冥子は妙神山から戻って以来、自身の制御力を向上する為に死の試練場に籠っている。

其処にいた初代当主は入ってきた冥子に隅に追いやられ冥子の修行を呆然と見ていた。

いまや冥子の頭を占めているものはお花畑でメルヘンな物ではなく、現実を受け止め改善するように努力し実行する大人のものになっていた。

「この程度では駄目ね、もっと皆をきちんと扱えるようにならないと……もうあんな理不尽な思いを皆に味合わせるのはいかなんだから！」

老師の冥子に課した苦行とは己の起こす行いが周りにどれだけの痛み苦しみ恐れを与えるか、どれだけ式神たちに悲しい思いをさせているかを延々と見せ付けらるというものだった。

他にもあったがこの苦行が冥子の意思を大幅に改善させた。

努力しようという行動力を、失敗を失敗のまま終わらせようとしないう改善する意思力を、相手を真に労われる心を養う事に成功していた。

娘が奮起する様はこれまでの自身に絶望し掛けていた冥那に発破を掛けさせるのに十分だった。

「負けてられないわね！あの子の親として先を生きる私がこの様ではいけないわ！」

新たな起爆剤を得た冥那は改めて己の心に誓いを立て、日本の各界の情勢を横島家と連動して改善していく事にした。

冥那は百合子の行動理念に触れ深い感銘を受けていた。

霊能分野についてはともかく上に立つ者としてのそれは酷く素晴ら

しい物だった故に。

当初は老師の指示ゆえに仕方なく付き従っていたが、今では進んで従事している。

これまでの後ろ暗い行動の罪を償うのはそれからでも遅くはないと思いつながら。

S I D E 百合子

私の息子の下に未来の記憶が舞い込んで以来、手がける事を避けていた日本の主要部にメスを入れるときが来た。

今までは美神 美智恵の目を晦ます意味もあり幾らかの情報規制と他の部署を通しての行動だったがそれもこれまでだ。

まあ、あっちも本格的に此方の存在に気付いたようだしつかつかしていられないけどね。

老師様の指導のお蔭で六道も正常化したようだし、気をつけるべきは美神とそれに連なる連中に絞られたのは大きな意味があることだ。あちらはどうやらオカルトGメンの戦力増強を図っているみたいだがそれ自体を阻止する気はない。

決戦以降にはオカルトGメン自体は必要なものだし、その為にはこれまでの有様では不足していたからだ。

尤も強引な増強は後々ややこしい事態を引き起こしかねないが。

「なにはともあれあつちはあの人に任せておきましょう。こっちはある意味もつと面倒な輩が相手なんだから」

日和見主義な連中やせせこましい策を弄しようとする連中は精神的にイライラする事請け合いだろうだから。

「と言つても……あんまり替わらないかな？」

少なくとも決戦まではあちらの方が大変ではあるだろうし。

「ま、いいでしょう。私は戦いの後の環境を早急に整えられるように手配する事に従事する事を優先しましょう……戦い自体をフオーロースするのはいくらでもいるでしょうからね」

戦いはそれ自体だけじゃなくその後も大事だからね。

中々目のいかない所だけど、疎かにするわけにはいかないからね。やる事を決め意志を新たにしたら私は最近良く気の利くようになって来たフミさんと彼女の元雇い主である冥那さんを伴い日本の改革に乗り出した。

まずは日本のオカルトに対する意識改革と政権の改善ね。

あっちが美智恵の未来の情報でどれだけの物を得ているかは知らないけど……負ける気はないわよ？

「規約改定から少なからず時間はあつたんだ……その上で未だあほな事を抜かすようなら、容赦はせえへんで！」

S I D E O U T

S I D E アシユタロス

私はもう何度目かも分からない実験を終え現実世界へと戻ってきた。その私の後ろで今しがた出てきた宇宙の卵が崩壊した。

「やはり、何か違和感がある。……ふむ」

来るべき時に備え幾つもの策を弄してきたが、未だ一つとして為されてはいない。

人界掌握として送り出したメドーサは事に失敗して行方を晦ましたし、平安の世で拾いこの時代で再び忠誠を捧げてきた道真は消え去った。



残る私の部下は今調整中の三体を除けばベルゼブブとデミアンのみ。幸い既にメフィストの転生体の居場所を把握済みだ。

後はその魂を手に入れるだけなのだが……何か違和感がある。詰めを見誤らないように幾度となく実験をしたが何故か違和感が拭えない。

「何を見逃している？……何かが足りないのか？……そういえば」

「そうだ、メドーサにしる道真にしる何を持って失敗したのだ？」

メフィストの転生体があればら関わっていると言う報告も記録もない。

別の何かが打ち倒したと言う事になるが、あの者たちは人間如きで如何こうできるような輩ではない筈だ。

しかし神族が動いたと言う報告もされていない。

元始風水盤では少しばかりそういう報告もあつたが確証は取れていない。

「一体何者がいると言うのだ？あまり不確定要素はあつて欲しくないのだが……それともこれが宇宙の反作用のあらわれか？」

私が行動に移す際に警戒した存在の一つ。

もつとも警戒し、ある意味もつともないであろうと思つていたもの。それが働いていると言う事か？

だがだからと言って今更行動を取りやめる気は微塵もない。

しかしこのままでは更なる妨害が起こりうる可能性も捨てきれない。

「……小出しせず一気に出すことにするか？」

今後予定していた作戦の数々。

メフィストの転生体の魂を捕らえる作戦、月の魔力を手に入れる作

戦、これらが私以外の手で為す残りの行動だ。

これらをデミアンたちに実行させ様子を見るか？

奴らだけでは心配だから造魔を数体つけてフォローすれば……この違和感の正体も見えてくるかもしれんな。

「決戦用の三体は今しばらく時間が掛かるからな、時間稼ぎの意味も含めてちょうどいいだろう」

私はすぐさまその手配をするべく、残っていた素体を使い手頃な造魔を造り出すと配下の者たちに転送し指令を伝えた。

「さあ宇宙意思よ、どう対抗する？」

私は決戦の準備を進めながら最大の邪魔者に問いかけた。

……心の片隅に思い浮かんだ今回の作戦も失敗するであろうという思いを誤魔化しながらも。

S I D E O U T

様々な思惑が蠢く世界。

しかし、事態はそれらの思惑とは外れた方向に秘かに動きつつあった。

その一つが今此処に始まる。

人狼の里、入り口付近の森。

其処には二つの影が激しく剣戟を打ち交わしていた。

「くくく、さすが里一番と評判の高い靈波刀使い犬塚よ！やりおるな？」

「犬飼！馬鹿なことは止めて八房を返せ！」

「そちらこそ馬鹿を言うな、拙者はこれより修羅に入り狼の誇りを取り戻すのだ！」

激しく打ち出される八つの太刀を華麗な体捌きと靈波刀を持って交わし弾き返す犬塚。

それに構わず更に詰め寄って剣戟を繰り出す犬飼。

周りには騒ぎを嗅ぎ付け集まった里の者たちが息を潜めていたが、余りの次元の高さに手が出せないでいた。

長老は手に銀の弓を番えていたが事前に犬塚に聞いた言によりそれを放つ気はなかった。

「……愚かなる者、犬飼よ。拙者が地獄への切符を切つてやろう！」  
「ぬかせ！それは拙者の言葉だ！」

交差する二人。

里人が見守る中、倒れ伏したのは犬飼だった。

蛭との邂逅から来る時に備えて鍛錬を積んできた犬塚に死角はなかった。

犬塚は倒れ伏した犬飼から八房を回収しようとしたが、それは為せなかった。

「…………ツ！ぐう…………さすが犬塚、拙者がこつも容易く切られるとはな。だが！拙者の行動の邪魔はさせん！さらば！」

「ツ?!ま、待て犬飼！」

「止せ、犬塚！」

近づいた犬塚に掴んでいた砂利を投げつけると怯んだ隙に脱兎の如くその場を去った。

犬塚は逃がさない為に追おうとしたが長老に止められた。

「あやつのははわしらの中では一番じゃ、たとえ手傷を負っていてもな。それよりもお主はかの御仁に連絡したのか？」  
「……あ」

犬塚は長老の指摘に数瞬呆けると慌てて懐から文珠を取り出すと発動させた。

「これで大丈夫です、しかし我らは我らで追うべきでしょう。人狼の問題なのでから」

「確かにの……かの御仁がせっかく世界の人外に対する印象と対応を改善して下さっておるのに身内から出してしまつては申し訳がたたんからの」

実は蛭、犬塚に会つて以来たまに里の外で話し合いの席をもつていたりする。

その場には長老やシロもいて、世界の現状や移り変わりを伝えていた。

そのため長老は蛭の思いに共感し、消極的な意見を出す事はなかったのである。

もつともそれはシロも同様で、幼いなりに蛭の意志の強さとそれを成し遂げるだけの実力に惚れ込んでいた。

結果、今回の騒ぎで里の目が散漫になっていた際にシロは里を抜け町へと走っていった。

それが蛭……今は忠夫だが……にある種の苦しみを少なからず与える事にも気づかずに。

同時刻、妙神山寛ぎの間。

修行を終え団欒を過ごしていた忠夫は突如頭に響く信号を受け取った。

「……………ツ!?これはっ!」

「忠夫様どうなされましたか?」

「ヒヤクメ!人狼の里にレポートだ!他の皆はオカルトGメンの動きやその他の対応をしてくれ!」

「分かりました!」

「それじゃあ行くのね〜!」

小竜姫たちに指示を出し急いでレポートする忠夫。

残された者たちはそれぞれ動き出した事態に対応する為それぞれ動き出した。

「犬塚!無事かつ!?!」

「ツ!……………え?」

急いで文珠の使用痕跡にレポートした忠夫はその目に飛び込んできた犬塚に無事を確認した。

しかし、急に湧いた気配に振り返るもそこにいたのは見知らぬ男、傍の女性は以前蛭と共にいたものだが。

目を白黒させる犬塚に疑問符を浮かべる忠夫。

「どうした犬塚?」

「忠夫様、人狼の方々にはまだ説明されていませんよ?男に戻った事」

「あ……………すまん、俺は横島 忠夫。嘗て蛭だった者だ」

「……………ツ?!ほ、本当でございますか?!」

犬塚は忠夫の言葉に問い返すが目の前の忠夫から感じる気配は蛭と同じ物。

それに気付いた犬塚は忠夫が犬塚の問いに答えるよりも速く臣下の

礼をとった。

急に膝をつき頭を下げた犬塚に驚くも直ぐに苦笑し頭を上げるように言った。

「……頭を上げる。俺は貴方にそんな態度をとらせるほど出来た人間ではない」

「そんな事ありませぬ！貴方様は拙者にとって正に神に等しき方です」

忠夫はなんだか知らない内に格上げされている事に驚き、それと同時に頭痛がしたのか頭を抑え呻いた。

「ア、分かったから頭を上げる。話が進まん！」

「はっ！」

「それで、犬飼は今どのような状態なんだ？」

「はっ、拙者の霊波刀を腹部に受け負傷した状態です。逃走から既に10分経過したかと」

「ふむ、……？おい、なんで里の皆が外に出ているんだ？」

「拙者らの剣戟に気付いて出てきたようなのです」

ふと周りを見た忠夫が周囲にいる人狼たちに違和感を持った。

いや、それ自体はいい……しかし、何か違和感を感じるのだ。

そしてその正体に気付く忠夫。

「……ッ！シロはどうした！」

「シロなら家で寝ておりますが？」

「馬鹿野郎！シロの性格を考えてみるっ、正義感の強いシロが逃げたあいつを放って置く筈ないだろうがっ！？」

「……ッ?!まさか」

忠夫の言を受け確認しに行く犬塚。  
しかし、其処にはシロの姿を確認する事は出来なかった。

「ツ?!そ、そんな」

「ちい、不味いぞ……ヒヤクメ!シロの現在地は分かるかつ!?オカルトGメンに接触する前に回収しないと面倒な事になる!」

「は、はい!探します!」

「犬塚!お前も呆けてないで急いで痕跡を追えっ!」

「しよ、承知!」

忠夫は周りに指示を与えるとこれから起こりうる事象を考え始めた。  
そんな忠夫に肩からアドバイスが聞こえてきた。

「タダオ?文珠で 召ノ喚 か 合ノ流 をやればいいんじゃない?  
?」

「……あ、そうかつ!」

忠夫はルシオラの言葉に自身の能力を思い出すと慌ててそれを使い  
その場から姿を消した。

「忠夫様??!」

残されたヒヤクメは途方に暮れたが行動を起こさないといけないと  
思い、駆け出していた犬塚や長老に同行を求めるとテレポートで忠  
夫の気配を追った。

同時刻、妙神山に新たな情報がはいつていた。

「不味い事になったぞ、月の方に魔族が襲撃を掛けているらしいの  
じゃ」

「なっ?!月の魔力の件ですか?!」

「まさか同時に起こりうるとはね……ちょっとお待ち、まさかと思うけど美神襲撃も起こってないだろうね?」

「……あり得るんじゃない?此処は未来とは違うんだし、そういう事も十分に起こりうるでしょうね」

「もしそうなら大戦までの事件が一気に起こっているということか?これは厄介というレベルではないぞ?」

老師の齎した情報とメドーサの気付いた可能性は混乱を起こすには十分すぎた。

しかし其処に玉藻が合いの手を入れ収める。

「私たちがすることはあわを食うことじゃないでしょ?忠夫の手を煩わさないように出来る限りのことをすることよ……違う?」

「そうですね……しかしどうしましようか?どの件にしろ我らは早々手が出せませんよ?」

「私はまず絶対的に手が出せないわね……裏切りがばれる訳にはいかないし」

「……月の方は私が行くわ。カオスとマリア……辺りを連れて行けば何とかなるだろうし」

月は神族も魔族も手の出せない中立地帯なのだ。

しかし玉藻なれば問題はない。

何れは神族になりうる可能性があるとはいえ、今は妖怪なのだから。

「いいのかい、玉藻?相手が誰かも分かっているに」

「ん?たぶん相手はベルゼブブ辺りでしょ……それ以外の不確定要素は分からないけど」

「そうじゃな。デミアンは特性を考えると美神襲撃の方に回るじゃろっし……問題はそれだけで済むかじゃな」



「そこら辺は考えても仕方ないわ……いざとなったら忠夫を召喚すればいいんだし」

「あゝ、そういえばその裏技があったね」

「そ、私たち契約相手のみに成し得る便利な裏技……もっとも私としてはやりたくないけどね」

そういつて顔を引きつらせる玉藻。

それを聞いて何かに気付いたのか同じく顔を苦笑いに染めるメドーサ。

「?どうしてですか?確かに突然そのようなことが出来るとあちらに知られては不味いかもしれませんが」

「そんな事はいくらでも誤魔化しが聞くわ……問題は忠夫と迦具夜姫たちが出会うことよっ!今の忠夫は理性的に動けてしかも強いからあつちが惚れまくる可能性が高いじゃない!!」

「……………ツ!!!!」

劇画状に固まる小竜姫。

確かにありうる……しかも相手は女ばかりの園で暮らしている人たちだ。

それに気付いた小竜姫は真剣に悩み始める。

傍で聞いていた老師は呆れを含んだ目でそれらを眺めていたが。

とにかく行動を起こさないと始まらないという事で急ぎ各所に連絡を入れて対応する彼ら。

しかしそんな彼らをあざ笑うかのように事態はさらに加速していった。

手傷を負いながらも月の魔力で徐々に回復している犬飼は手ごころな人間を見つけると所構わず惨殺するという手段に出ていたのだ。

そしてその余りに凶悪な行動はすぐさまオカルトGメンにも伝わる事となった。

連絡を受けた西条はすぐさまこの事件が霊刀殺傷事件と判断すると対策を練る為会議を開いた。

そんな中顧問として潜り込んでいた美智恵は今後どう動くかで悩んでいた。

SIDE 美智恵

夢見では最終的に月の女神を降ろした令子が打ち倒した事になっているが、既に記憶との誤差は当初の物より大きくなっている。

シロを見つけ対処しようにも夢見どおりならあの子は子供。

そんな子を使うとなれば周りからの反発もあるだろう……今はまだそんな争いを起こすわけにはいかない。

何より今の令子では降ろした女神の力を満足に使えるかどうか怪しい。

私の課した修行により対処法はそれなりにマスターしたが肝心の地力が足りないのだ。

やはり妙神山での修行が行えていないのは痛いハンデだ。

「顧問！どうしましょうか?!流石にこの犯人を放っておく訳には参りませんが、どうにもこの凶悪さが気になります」

「そうだね、この短時間で行われた凶行の数々……何より対象となった被害者から精気が奪われているようにも感じられるね」

「ッ?!ほ、本当ですか?」

「写真越しだし明確な判断はつかないけどね」

「もしそうであれば益々迂闊な行動は出来ませんね……かといって行動を起こさないわけにも参りませんし」

手詰まりの感が蔓延しだした頃、更なる事態が私たちを強襲した。

ドツゴオオオッ！！

オカルトGメンオフィスの入り口が突如爆発する。

突然の事にあわを食いながらも即座に対処しようとする彼らを頼もしく思いながら私は肌を刺す殺気に身構えた。

「まさか此処が襲撃されるとはね……：犬飼はどういう理由で此処に来たのかしら？」慌てるなっ！各自守りを固めて攻撃に備えろ！」

私は来るであろう犬飼の攻撃に構えを取ったがそれは覆された……相手の姿によつて。

其処にいたのは犬飼とは全く違う子供だったからだ。

「なッ?!（あれはデミアンツ?!何故今の段階で此処を襲撃する!?)何者だっ!」

「くくく、なに此処に美神 令子がいると聞いたのでね……：ちよつとばかり挨拶に来たのだよ」

「わ、私っ?!」

「ッ?!貴様人間ではないなっ?!令子ちゃんに何の用だ!」

事態が混乱していく中、私は夢の記憶との剥離具合に頭を痛めた。願わくばこれ以上事態が複雑にならないように祈りながら。

S I D E O U T

オカルトGメンが混沌とした頃、横島家でも慌ただしく事態が動いていた。

妙神山より情報を持ってきた玉藻の言葉は場を騒然とさせた。

しかし其処は歴戦の指導者である百合子の存在が大きく、瞬時にして騒ぎは収まった。

「しかしまさかそのような事態になるとはな。月旅行か……面白い！行ってやるうではないか！」

「そっちは玉藻ちゃんとかドクターたちでどうにかなるでしょうけど、問題は地上の方ね」

「百合子さん？何かあったの？」

いつもと違いひどく眉間にしわを寄せている百合子に違和感を感じた玉藻が尋ねた。

「実はねさつきあの人が連絡があってね、オカルトGメンにデミアンが現れたのよ」

「……メドーサの読み通りだった訳だ。これでフェンリル、月、美神襲撃の三件を同時に対処しなくてはならなくなっちゃったってこと？」

「そうでもないわけ。少なくともデミアンに関してはこっちにとつて有利に働くわよ？あっちもフェンリルの事は掴んでいるだろうから余計なちよっかいを出される心配が激減した筈だし」

「用心は必要だろうが……問題はさつき玉藻が言った不確定要素か」

「そ、確かにアシユタロスの陣営は配下自体は少ないけど造魔って言う手段があるからね………どういうレベルのやつを投入してくるか知らないけど」

一つの問題が少しばかり晴れても次から次へと溢れてくる問題に頭を痛める玉藻たち。

とはいえ、論議ばかりしていても解決するわけではないので行動に移る事にした。

「それじゃあ班分けだけど、さつきも言ったように月は私とカオス・マリアで行くわ。造魔は気になるけどそれはカオス謹製の道具で何

とかするわ」

「フェンリルは忠夫がいれば何とかなるような気もするけど、オカルトGメンのこともあるからね。事務所総出で行くわよ」

「デミアンの方はあの人とワルキューレさんたちが見張る事にするわ……基本手は出さない方針で行くけどね」

「決まったな……それじゃあ実行に移るぞ！」

『了解っ！！』

カオスの号令で一斉に動き出す横島グループ。

三者三様の三つ巴は今始まった……その行き着く先にあるのは混沌かそれとも別の何かか？

その答えを知る者は、今だいない。

## 第二十二章 放たれる意思と交差する思惑（後書き）

三つ巴（横島・美智恵・アシユタロス）……冒険しすぎた感があります（> < ; ;）

何とか纏めきって見せますが……不安だ（汗）

次回は8/12の0時です。

感想・意見等お待ちしております。

第二十三章 交差する思いと明かされる思い（前書き）

何とか辻褄合わせてみました。  
それではどうぞ。

## 第二十三章 交差する思いと明かされる思い

ふとした思いつきから弄したアシユタロスの策により混迷を見せ始める世界。

未だその事態を知らない忠夫は何かシロとの合流に成功していた。合流当初は忠夫の正体が分からず不審がってはいたが、其処は犬塚親子……正体がわかれば自身の不敬を詫びる為に土下座をしたから忠夫は驚き、其処にヒヤクメたちが合流したから更に焦ったりした。何とか落ち着きを取り戻した忠夫たちは犬飼の痕跡を追うべく追跡を開始した。

此処でシロを長老なりに任せて帰さないのは忠夫自身無駄だと分かっているからだ。

それにその際に犬飼に見つかったりすれば溜まった物ではないし。

そしてその際家の者を呼び寄せるのも忘れてはしなかった。

今の己が揮える力を駆使すればフェンリルすら打倒出来るとは言え、あくまでそれはフェンリルになった場合の事である。

それを防ぐ為にも犬飼の強さに対抗できる事務所の人員は適用するべきだろう。

やがて事務所のメンバーと合流した忠夫はヒヤクメを月班の方へ行かせるとテレサのサーチを元に探索を再開した。

「南西方向で三体の生命反応が消失ッ?!せ、西南西方向で二体の生体反応の消失確認!犬飼の可能性大です!」

「チイツ!やりたい放題だな……長老、これはお咎め無しの方に持っていていけそうもないですよ」

「分かっております……あやつには既に誇りなど微塵にもありませんからな。手間を掛けてしまいますが、何卒お願いいたします」

「拙者らが片付けられたらそれで済む話でしょうが、流石にフェンリル狼……狼王ともなると」



「気にする必要はありませんよ。人それぞれ役割つてもんがありませんから……だからシロ、その情けない顔は止める」

「?!」

「先生殿……拙者も何か」

「お前が今できることは何もないさ、悔しいだろうが。忍耐をつけることも大事だぞ？我慢しなくてもいいことはあるが、少なくとも今はまず親から色々学ぶべき時だ。お前の時代はもう少し先さ」

「そうだぞ、シロ。まだ拙者らの役目は終わっていないのだ……その役割を取ってくれるな」

「今回の件は我ら大人の不始末じゃ。次世代のお主は辛いじゃろうが、我らから人狼たる者のあり方を学ぶのじゃ」

「父上、長老……分かり申した」

項垂れながらも何とか飲み込もうとするシロに安心する忠夫たち。懸案事項を解決した忠夫たちは更なる犠牲者を出さない為に走る速度を上げた。

場所は替わって某国「星の国」

玉藻たちと合流したヒヤクメが世界GS本部の通知と神魔の協力要請の通知及び資金を提供する事で何とかロケットを確保する事に成功した。

既にマリアの接続調整は完了しており後は乗り込むだけとなった。

「迦具夜姫様、此方が今回の救援に駆けつける者たちです」

『侵略者達は凶暴で凶悪です。我々の主権を犯し、無法を続けており手がつけれません。どうか一刻も早い救援を』

「心配せずとも大丈夫だ……我々はそこの者とは出来が違うしな。

……それにジョーカーもいる」

「ま、ジョーカーを切るまでも無いと思うけどね……というかできれば切りたくないわね、想像以上の美人だし」

『は？』

「あゝこつちの事よ、気にしないで」

『では、よろしくお願いします。私は、月世界の女王迦具夜……』

迦具夜姫への通達も終わりついに乗り込む玉藻たち。

未来のように核を積んでいるわけでもないので調整は程なく済んでいた。

また帰還の準備も万全だ。

「こちらマリア！接続チェック良好！！カウントダウンよろしいですか？」

「いつでもいいわよ、マリア！」

「ついにときめきの月旅行か！胸が透くぞー！」

「ときめきつて（汗）」

発射されるロケット。

行く先は月面世界……渡るは暗黒の宇宙。

待ち受ける敵は果たして誰なのか？

予断を許さない戦いは今始まった。

SIDE 令子

突然乗り込んだきたガキは魔族だった。

そいつ、デミアンは小さいなりをして途轍もない能力を秘めていた。

何せこちらの攻撃が一切通じないのだから。

「あゝ！一体なんだって言うのよっ！こんな狭い所でじゃあ満足に動けないじゃない！？」

「一体外に出て迎撃するぞ！各員装備を忘れるな！」

「くくく、精々足掻くがいい……逃げられはしないがな」

不気味に笑うあいつに背を見せるのはムカつくけど今は我慢の時……  
…っていうか、最近こんなのばっかじゃない！  
あゝ腹が立つ〜！！

「しかし、顧問！外に出て迎撃するにも一般市民が巻き添えになっ  
てしまいます！」

「心配ない！既に通達して市民の退避は完了している！後はこいつ  
を殲滅するだけだ！」

「い、いつのまに」

着任の時から思っていたけど、この顧問で本当に何者なのかしら？  
ママと組んだこともあるって話だけど、何か違和感があるのよね？  
そんな事を考えながら外に出ると確かに周囲には人影が無かった。  
しかし別のものがいた。

「ゴガアアアッ！」

「なっ！？なんだこいつ、亀の化け物っ?!」

「（何故こいつが此処にッ?!）慌てるな！例え相手が強力でもど  
こかに弱点があるはず！それを探せ！」

顧問の言う指示に従い慌てて霊視ゴーグルで確認する。  
が、それを為す前に後ろからデミアンが現れた！

「くくく、私の歓迎はお気に召してくれたかな？さあ、次は私の相  
手をしてくれ！」

「チィ！（武装が足り無すぎる！）美神、西条！お前たちはそつち  
の化け物の弱点を探って突け！それ以外は地下に戻って装備を持っ  
てこい！」

デミアンの攻撃を華麗に捌きながら指示を出す顧問。

悔しいが私にはあそこまでの戦闘技術は無い……従うしかないか。しかし、事態は更に混迷を深める事になる。

騒然としていた現場に突如冷たい気配が舞い込んできたのだ。

「ん？何だこの気配は？」

「！？（まさか、このタイミングで犬飼が来たのかっ?!）」

「今宵は月が良く映える……八房も一層輝いておるぞ？」

「！そ、その刀は……まさか貴様かっ?!？噂の人切りは!？」

「ふ、中々美味な霊力を持ってそうだな……どれ、少し味見させてくれ！」

「ッ!?下がれ西条！」

「!」

ビュッ！キン！キン！キン！キキン！キン！キン！ザシュッ!!

「ぐわっ!?!」

「西条さんっ!?!ちい、精霊石よッ！」

「ムッ?!」

顧問の指示に後退するも一足遅く肩口を切り裂かれる西条さん。

私は咄嗟に精霊石を投げつけると倒れ伏した西条さんを下げさせた。

「どろしろっっていうのよっ、魔族に化け物に人切り……こんなの一

辺に相手できるわけないじゃない！」

「ぼやいてないで動けっ！死にたいかっ!?!」

闇夜の中、私の叫びと顧問の怒鳴り声が響いた。

S I D E O U T

忠夫たちが現場に辿り着いた時には既に犠牲者が屠られた後だった。

「くそっ！行動がいやに速い、テレサ！犬飼はどっちに行つた！」

「……！西方に向けて走っています！ツ？！その先にはオカルトGメンの建物があります！」

「ッ、靈力の高さに引かれたか？俺たちは隠蔽しながら行動しているからな……！仇になつたか」

忠夫たちは無用のトラブルを回避する為、普段から靈力隠蔽を心がけている。

今回はそれが仇になつたのだ。

「あと、オカルトGメン前に巨大な物体が出現しました！推定靈力値5000マイトです！」

「いつ？！どんな化け物だよっ！」

「少なくとも私たちじゃあ太刀打ちできないわけ……！どうするの忠夫？」

続けてテレサから齎された報告に忠夫とルシオラの意識は脳裏に浮かぶものがあり、他の者たちは余りの靈力値に騒然となった。

忠夫なれば問題ないだろうが自分達には無理であると思つたからである。

「……テレサ、そいつはどういう奴か判るか？」

「……なんとはいいいか、おそらく亀を媒介にした化け物でしょうか？」

「キヤメランか？……この異常事態はあいつの思いつきか？」

アシユ様ならやりそうね……たぶん作戦を妨害している者を突き止めようとしているんじゃない？」

「忠夫？」

「おそらくそいつはキャメランという造魔だ。亀を媒介に魔力の源を付与した、な。弱点はその結合部だ……そうだな、テレサがスキヤンして結合部に雪之丞の最大威力の魔穿拳を叩き込めば何とかなと思う」

「じゃあそいつは俺とテレサ、牽制役にピートが当たればいいか？」

忠夫はその言葉に頷き、これまでの事を考える。

少なくとも大きな事件は今回ので出揃っている。

そして向かう先には今まで邂逅を避けてきた美智恵がいる。

同時に、デミアンと墮ちた犬飼もいる……こつちが主題だが。

「そして犬飼は最早フェンリルになることは決定的か……よし」  
「忠夫様？」

事象の整理が終わった忠夫が決意に瞳を光らせるのを九琉は怪訝に思い声を掛けた。

しかし忠夫はそんな彼女を横に置きエミたちに指示を出す。

「姉さんは急ぎ帰って人狼族を保護した旨を協会に伝えてくれ。このままオカルトGメンと顔を合わせたらどうという手段に出られるか分かった物ではないからな」

「分かったわけ……私はそれだけ？」

「ああ、事務所に待機していてくれたらいいよ。姉さんは今回余り手が出せないだろうし」

「分かったわ」

指示を受けたエミは反転して協会へと走っていく。

それを見届けた忠夫は他の者へと指示を出していく。

「シロは親父さんに引っ付いている、できるだけ今から会う人間と

は視線を合わせないようにな」

「分かり申した」

「犬塚はシロを守ることに専念しろ……場は混沌としているからな、何が起こるかわからん。長老もですよ」

「委細承知！」

「承知しました」

「俺は場についたらそれなりの全力で事に当たるから……他の者はフオローを頼む！」

指示を出し終わった忠夫がチャクラを廻し始める。

そんな忠夫に周りの弟子達が騒ぎ始める。

「師匠が全力つて……いいのかよ?!」

「忠夫様が全力でするか?!」

「いいのですか?間違はなく美神 美智恵に目をつけられますよ?」

「構わんさ、文珠は使わんし全力と言っても1000マイルぐらいだ。事態は既に終局に入っている……ルシオラたちはまだ調整が終わっていないだろうが、居場所は既に掴んでいるんだ。今回の事が終わったら終結に向けて動くさ」

「え?しかしまだチャクラを充填できていませんよね?危険では?」

忠夫の発言に驚き、危険性を告げるピート。

確かに例え中級神魔を超える力を持つ忠夫でも魔神の本拠地に挑むのは無謀だろう。

しかし忠夫は大丈夫と言った。

「流石にこのままでは無理だがな、犬飼がフェンリルになるのは止められない以上……やつの魔核を奪う事にするさ」

その魔核で一気にチャクラを充填するのね?

「あと出来ればデミアンもな、二つ揃えば確実に充填は終わる……だから皆には美智恵ほかの邪魔を阻止して貰いたい、向こうはこっちの事情なんか知らないだろうけどな」

忠夫は仲間に説明を終えると長老たちに向き直った。

「そういうわけで、犬飼は俺が仕留める。……時間は掛かるだろうけど何れ真の狼の心を取り戻したあいつを復活させてやれるだろうから、今回は全て俺に託して欲しい」

「望外な事です。忠夫様、どうか犬飼をよろしくお願いします」

「ああ、任せな」

忠夫はそういうと五色の装具を纏い、心眼を解放する。

五色と言っても極彩な物ではない……若干光つてはいるが。

初めて見るそれに周りの者は驚くなか、忠夫はルシオラに語りかけた。

「まずはデミアンの方から片付けるからルシオラは封魔天蓋魔封陣を合図と共に展開してくれ。心眼は辺りを網羅して何かあったら進言して欲しい」

分かったわ

『了解した』

「陰念と九琉は悪いがオカルトGメンに死人が出ないようにフオロ―を頼む。最低限でいいからな」

「犬飼にはどう対処すれば？」

「あいつの持つ八房はほぼ全ての物が切れるが霊波を纏った物は切れない。だからお前たちは真装術・影装術を纏って対処しろ」

「分かりました！」

「それじゃあ行くぞ！！！」

『オオオオオッ！』



氣勢を上げ現場へと駆けて行く忠夫たち、今正に邂逅が行われようとしていた。

SIDE 九琉

私たちが場に到着した時、危うく美神 令子が殺される所だった。

幸い忠夫様の放った殺気と霊波砲で太刀筋を狂わせ髪を根元から切るに留まったが。

もつともその瞬間、フェンリル狼になるだけの十分な起爆剤は手に入れたのか喜びの遠吠えをあげた。

「チイ?!あの化け物を斬ってエネルギーを補充したかッ!」

見れば向こうで美神 美智恵が化けた男が傷ついたカメランを見ている。

なるほど、あんな物を斬れば流石にエネルギーは十分か。

「あ、あんた達!?!」

「.....ッ!（横島家の者?!やっぱり例の人物はあそこのものなの?)お前たち何者だ!此処は関係者以外は立ち入り禁止にした筈だぞ!」

「悪いがあんたらだけに任せたままじや被害が拡大するだけなんぞな!師匠!あれらは任せるぜ!」

「油断するなよ、雪之丞?いくら傷を負ったからと言っても未だ膨大なエネルギーを有しているからな」

「了解!」

警告を発する美智恵に雪之丞が馬鹿にしたように茶化す..... あんまり刺激しない方がいいって言ったのに、後でお仕置きね。

テレサさんがスキャンする中雪之丞とピートがカメランを攪乱する。

「……ッ！首上部に接合部発見！」

「了解！ピート隙を作ってくれ！」

「分かった！」

テレサさんの報告にピートと共に駆け出す雪之丞。

「ダンピールフラッシュ！」

「……ッ！喰らえッ！全力魔穿拳！！」

ピートと雪之丞の連携で見事分解されるカメラン。

見ればそれを見ていた美神が啞然としている……まあ、自分が倒せなかったのを年下が倒せば無理ないのかしら？

私と陰念は装術を纏い未だ八房を振るう犬飼に対応している……流石に直撃を受けるのは不味いからフェイントを混ぜてだけど。

「陰念！貴方では犬飼相手に接近戦は無理よ！影操術主体で戦いなさい！」

「……確かに、あの速度には黒豹でしか無理か。なら精々足止めに専念するさ！」

陰念は素早く印を組むと黒豹を五体だし影に紛れ込ませながら犬飼へと放った。

私は黒豹と連携して犬飼を牽制する。

時折足元から来る爆発に流石の犬飼も苛立ちを抑えきれないようだ。もつとも既に犬飼は何時でもフェンリルになれるはずだ……今フェンリルにならないのは更なる靈力を求めているからなのかしら？だが、それも次の瞬間までだった。

「ええい、鬱陶しい！グオツ！？クソツ……いいだろう、其処まで死にたいなら今から食い殺してくれるわッ……！」

瞬間膨れ上がる犬飼の気配！

「チィ！陰念退避するわよ！其処の二人も早く下がちなさい！」

「わ、分かっているわよ！西条さん掴まって！」

「す、すまない令子ちゃん！」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ……！』

現れたのは巨躯を誇る狼。

フェンリルは二重になつた目を歪に輝かせこちらを睥睨した。

「チツ！もう変化しやがったか！悪いがデミアンとやら！早々に決着をつけさせてもらうぞ！」

「舐めるなよ人間！その装備は神族の物か？どうにも邪魔が多いよ  
うだが……立ちふさがる以上無事で済むと思うなよ？」

忠夫様がフェンリルを見て舌打ちした。

流石にこの状況は不味い……かといって女神を降ろす魔法陣を書いている暇などない。

見れば美智恵は忠夫様を凝視している。

流石にあの靈圧に疑念を持ったようだ……軽く千を超えていますからね。

「行くぞ！連続靈波砲！！ハアアアアアアアアアアッ……！！」

どうやら忠夫様も気づいてはいるみたいですが、構わず膨大な数の  
靈波砲を放つ。

それは雪之丞のものなどよりも遙かに多く密度も高いものでした。

「なッ！？チィ！」

デミアンはその壁と言ってもいい霊波砲に慌てて内から巨肉の塊を吐き出す！

吐き出されたその恐竜のようなそれは霊波砲によって瞬く間に滅せられ忠夫様は霊波砲を放ちながらも接近する。

「終わりだデミアン！蛍光幻魔剣！！（ルシオラ！）」

封魔天蓋魔封陣！

「無駄だ！私にはいかな攻撃も通じはせんぞッ！……ムッ?!」

デミアンは体を切り裂かれながらも笑っていた……が、それも上空に展開された複雑な魔法陣を見るまでだった。

「なっ！？なんだあれはっ!？」

「貴様を冥府に送るありがたい代物さ！飲み込まれる、デミアン！」

「な、なに？グギャアアアアアアアアアアアアッ!!!!!!？」

忠夫様の作り出された魔剣に体を地面に縫い付けられたデミアンにそれを避ける事はできずまともに喰らってしまう。

「……………ッ!?なんて霊圧だ?!（それにあの霊波刀、形状は違うけど）」

『主！フェンリルの爪が!』

「ッ!?九琉避ける!!」

「え?!きゃああっ!？」

忠夫様の戦いに注目しすぎていた私はフェンリルの接近に気付かず一撃を喰らってしまった。

薄れいく意識の中忠夫様の声が聞こえたが私は其処で意識を失った。

「申し訳ございません……忠夫様」

S I D E O U T

S I D E 忠夫

何とか時間をかけずにデミアンを倒し魔核を回収できた俺だったが、こちらに気を向けすぎた九琉がフェンリルにきつい一撃を喰らってしまった。

見れば他の連中も大なり小なり傷を負っている……主にフェンリルの動きによって飛び散った瓦礫の破片によってのようだが。

幸い九琉の傷は命を奪うほどではないが戦闘は暫らく無理だな。

「陰念！九琉を事務所に連れて行ってくれ」

「分かりました」

「雪之丞、ピート！お前たちも事務所に戻れ！此処じゃ被害がでか過ぎるからな」

「？……ッ！そういうことか、分かった」

「長老達は俺に掴まってくれ、フェンリルと一緒に暴れてもいい所に飛ぶから」

「分かりました」

俺は息つく暇なく指示を出すとオカルトGメンの方に顔を向けた：

…爆弾を落とす為に。

見れば男に変装している美智恵が此方を注視している。

「さて、あれは俺が片付けるからあんたらは此処の被害を何とかし

ておいてくれ」

「……できれば説明を求むのだが？」

「ふっ、必要ないだろ？顧問さん……いや、美神 美智恵さんといつた方がいいか？」

「ッ!？」

「え？ママ?!」

「下手な変装は止めておいた方がいい。あれにしてもそうだが、全ては俺たちが片すからあんたは大人しく傍観しているんだな」

「……お前は何を知っているのだ？」

「それこそ答える義務は無いな。あんたみたいな独善的で自分勝手に娘を放つて置くような正義の味方には、な」

「-----クッ」

苦々しく俺を睨む美智恵に皮肉ってさういうと、長老たちが掴まったのを確認して飛んだ……暴れるフェンリルを伴って。

次の瞬間目に入ったのは人狼の里近くにある少し空けた場所。

俺はすぐさま押さえていた霊圧を解放し捕縛結界を構築する。

「哀れな落ち武者よ、今は眠りの時」

「ガアアアアアアッ!？」

「封魔天蓋魔封陣……お前の魂、今暫らく俺が預かる!ハアアアアッ!?!」

流星に存在が大きすぎるので一気には無理だったが、やがて光の中魔狼の核を残し消え去った。

俺はそれを回収すると夜の闇に映える月を見上げた。

「ふう、こっちは片付いたが……玉藻、無事でいるよ?」

S I D E O U T

SIDE 美智恵

フェンリルが先ほどの男に何処かへ転送されてから私たちは顔を合  
わせられずにいる。

西条君は既に病院へと搬送されている。

それよりも一体あの男は何者なのか……それが何より気になること  
だが、今は背後でこちらを凝視している娘の視線をどうにかしたい。  
……いや、そろそろ潮時なのかもしれないわね。

今回の事でフェンリルと襲撃事件は終結した。

あとは月の件だけどさっきの感じから彼らには神族の支援がありそ  
うだから向こうが片付ける可能性が高い。

そうなるかとは決戦のみ……なれば今からでも正体を明かしても  
っと密度の濃い修行をさせたほうが効率的だ。

思考の海に漂っていると背後から令子の問いただす声が聞こえてき  
た……覚悟を決めるとしましょうか。

「あの、顧問？ 貴方はママなの？」

「……ええ、そうよ令子。私は美神 美智恵よ、真正正銘ね」

「……ッ！ なんて？ なんて生きていて私から姿を消した  
の？ ねえなんで?!」

悲痛な声が私の胸に突き刺さる……ああ、確かに私は独善的だ。

娘を置き去りにして勝手に事を進めているんだから。

……今更だが。

私はマスクを脱ぐと令子と向き合った。

「……何を言おうと言いつにしかならないけど、私は魔族の襲撃に  
備えて姿を消そうとしたの」

「魔族の襲撃？ ハーピーの事？」

「その上司とも言つべき……貴女自身知っているアシュタロスの事

よ

「ッ！あれがこの時代にいると？」

夢見で得られていた情報は既にある程度整理してある。

今はもう夢を見なくなっただけ、アシユタロスが戦艦を用いて人界に侵攻してくるのは把握している。

其処から先は分からないけど……なれば其処までで押さえ込めばこちらの勝ちだ。

いくらアシユタロスが最上級魔族でも冥界チャンネルをそう長く閉鎖できる筈は無いのだから。

「ええ、いずれ戦艦を用いて人界に侵攻してくるわ……その時神族はエネルギー供給を絶たれて役に立たないの」

「いつ?!し、神族がいない状態で超大物魔族とタイマン張れって言うの?!」

「いえ、アシユタロス自身は戦艦のエネルギー源として眠っているわ……問題はその配下の魔族と造魔よ」

夢では三人いることまでは分かっている。

そして配下の造魔の特徴も……ただ、今回その内の一体が出てきたことが気がかりだが。

「詳細は判っていないけど貴女にはそれらに不覚を取って欲しくないからこれまで影から修行を課してきたの」

「今のままじゃ駄目なの？」

「全然駄目よ……魔族に対する対処法はそれなりに心得てきたみたいだけど、地力が足りないわ」

「地力……でも霊力値なんて早々上がらないわよ？」

「本当は妙神山へ行って欲しかったんだけどね……今の唐巢神父は妙に厳しいから紹介状をくれる訳が無いし、他の人は覚えが無いか



らね」

「妙神山？……確か靈能者にとって最高の修行場だったかしら」

「あそこで試練を受ければ少なくとも見積もっても今の一割以上は上がっていた筈なのよ」

「それは……すごいわね。あれ？そういえばさっきいた連中って妙神山直轄の事務所に勤めていなかった？」

そう、それも問題なのよね。

彼らが妙神山の神族と懇意なら私と私の娘の事は受け入れられないと思われるのだ。

何せさっき言われた事から察するに随分と嫌われているようだし、傍観している……なんて言うからには事情も把握しているのだろう。まあ、彼らが問題を解決してくれるならそれに越した事は無いけど……問題は私たちのその後の安全が確約されているかだ。

「さっきのあの男性が言っていたのは貴女も聞いていただろうけど、どうにも嫌われているみたいなのよね私……貴女はどうか分からないけど」

「あゝ、なんか分かるわ。少し前に妙神山からヒヤクメって言う神族の調査官が私の過去を調べる為に来たんだけど、随分素っ気無かったから」

つまり令子の前世が魔族であることを神族が知っているってことよね？

……これは益々妙神山に行けなくなっただわね。

何はともあれ今もっている手札でどうにかするしかないか。

「とにかく、貴女には近い内に都庁地下にある靈動実験室で特訓をしてもらいます。時間はもうあと僅かですからね」

「うう、やるしかないのね……分かったわ、ママ」

「よろしい、かなりきつめにいきますから覚悟するように！」  
「は、い、とほほ」

このあと私たちは再会の抱擁を交わし夜遅くまで語り合った……一  
時の平穩を娘に与える為に。

S I D E O U T

逆天号・エネルギー供給室内。

高密度の魔力水の中目を閉じて浮かんでいるアシュタロス。  
その目蓋がふと開かれる。

「む、デミアンがやられたか……今デミアンを通して感じた波動、  
人間の物のようだが桁違いだったな」

今回配下の者を動かす時につけておいたセンサーによってアシュタ  
ロスは状況を把握していた。  
もつとも部下にも秘密裏に施したものであったので詳細までは判らな  
かったが。

「神族の加護を受けた戦士か？あのしぶといデミアンを一瞬で倒す  
からには余程強力なパワーと実体を見極める目が無いと駄目なはず  
だが」

既に三体の最終調整も全て入力を完了しておりあとは待つだけとな  
った。

故にアシュタロスは魔力を少しでも貯蓄しておく為にこうして供給  
室でエネルギーをタンクへと送っているのだ。

冥界チャンネルを閉じれば自分とて魔力の供給を受けられなくなる  
のだから。

「感じた波動はメフィストの転生体のもものではなかった……どうやら要注意対象が増えそうだな。願わくばその存在が宇宙意思による反作用でなくて欲しいものだが」

アシユタロスは呟きもう一つのセンサーに注意を向ける。月の魔力送る役目を担っているベルゼブブの方へと。

「こちらにも結構な力の持ち主が近づきつつあるようだな……単に神族の加護を受けているだけの存在なら何の支障も無いが、油断は出来んな」

アシユタロスは再び目蓋を閉じる。

既に賽は振られている……あとは死力を賭して事に当たるだけ。勝利と祝福を受けるのは誰か、敗北と断罪を受けるのは誰か、決着の時は刻一刻と近づいている。

「……宇宙意思よ、私は諦めないぞ。私絶対に私を救ってみせる……絶対にだ」

アシユタロスは誓いの言葉を呟くと眠りへと入っていった。

世界は廻る、例えどんな思いが溢れていようと……悲しみが溢れていようぞ。

”願わくば……悲しみの慟哭が世界に鳴り響きませんように”

**第二十三章 交差する思いと明かされる思い（後書き）**

次回投稿は8/15の0時です。

感想等お待ちしております。

第二十四章へ収束していく物語行き着く先は未だ暗闇の中（前書き）

月編です。

## 第二十四章 収束していく物語行き着く先は未だ暗闇の中

玉藻たちを乗せた船は現在周回軌道にあつた。

そしてその頃月面では無数の魔族によつて破壊活動が行われていた。

「何度来ようと貴方達の好きにはさせません！即刻立ち去りなさい  
っ！」

「けっ、こんな所を任されたからには後がねえんだッ！俺にやよお  
！！」

警告を発する迦具夜姫とそれに突撃する膨大な数に増殖した八工の  
魔族・ベルゼブブ。

未来ではメドーサがアンテナの調整をしていた場面だが、ベルゼブ  
ブはそのようなことはせず月の連中へと攻撃を仕掛けていた。

「お行き！月警官たち！」

「アメエ！俺はお前らと違って鍛えられてるんだ！あんま調子こく  
んじゃないぞっ！」

迦具夜姫の号令で立ち向かう月の戦士達。

それを縦横無尽に立ち回ること撃破するベルゼブブ。

やがて無数のベルゼブブに翻弄されて打ち倒されていく月警官たち。  
迦具夜姫も悔しそうに撤退する。

「ふん、逃げ足だけは速いな……まあ、いい。地球からの援軍が到  
着するまでの暇つぶしもこれぐらいにしとくか」

ベルゼブブはそう呟くと地球を見やり口を歪めた。

SIDE 玉藻

先ほど迦具夜姫より敵の情報が送られてきた。そしてそれは予想通りベルゼブだった。

ただ、造魔の方は未だ姿を確認できていないが。

「魔力を送信するアンテナ型造魔だけかしら？」

「それは無いだろう、未来ではメドーサとペアだったんだ。流石に魔族一体でする任務ではないさ」

「そっちの方が楽でいいんだけど……来たようね」

『敵影無数に感知！このままでは激突します！』

「距離500になったら拡散精霊石砲を撃てッ！」

「……本体はいないようね、分身体を消し飛ばしたら降りましょう」

私にはあの集団に本体がないことが分かる……伊達に鍛えていないからね。

私たちは未来同様竜神の装具を身につけている。

私もカオスも後方支援型だけど何とかなるでしょう……メドーサはいないんだし。

問題は造魔ね……ヒヤクメの話では向こうにカメラランが出たらしいからこつちにはそれ以外が出る筈。

……マイト数3000オーバーの大物ばかりだからねえ、ベルゼブを倒しても油断は出来ないわ。

『来ます！拡散精霊石砲……発射！！』

「こんな事もあるのかと！！この日の為に開発した高純度の変換効率を誇る砲台だ！遠慮無く喰らえ！！ふははははっ！」

な、なんだっ？！グギャアアアッ！？

「魔族がいるって言うのに丸腰で飛んでいるわけ無いじゃない……間抜けね」

横で嬉しそうに名台詞を叫ぶカオスを他所に私は相手の馬鹿さ加減に呆れた。

そういえば、未来では核なんて使ったみたいだけど……なに考えていたんだか。

視界を埋め尽くす精霊石砲はベルゼブブの分身体を一匹残らず消し飛ばした。

「上手くいったみたいね。マリア、周辺に敵影感知されない？」

『探索可能範囲においては見受けられません。相手に超加速を使う者がいない以上大丈夫だと思われませう』

「分身体は消し飛ばしたが……月面には豊富な魔力が溢れているからな、すぐに分身体を送ってくるかもしれん」

そういえばそうだった。

メドーサと違ってあいつは分身体を作れるんだよねえ……メドーサにはビッググイーターがいるけど。

うーん、忠夫を今の内に呼んで置いたほうがいいかな？

「マリア？地上の方の経過はどうなったか聞いてくれない？」

『了解しました』

「横島を呼ぶのか？あやつを呼ぶのはいいが装備はどうするのだから、予備は無いぞ？」

「……そういえばそうだった。どうしよう？」

未来の記憶があるからすっかり忘れていたわ。

今の忠夫はまだ人間の範疇にいるからね、パワーや能力はともかく。

「まあ、呼ぶ前に調達してもらえば問題ないか」

『……ヒヤクメ様の返答によれば既に解決したとのこと。現在は人狼の里で今後の話し合いをしているとのことです』



「それじゃあリンクを繋げても問題ないわね……マリア周辺に敵影は無いわよね？」

『はい、変わらず』

一応の用心をしてから忠夫とのリンクを繋げる。

私たち契約関係にある者だけが使える絶対的な通信手段。

例外として真装術を契約している九琉も使える手だ。

「……忠夫、聞こえる？」

ん？玉藻か。ああ、聞こえる。何かあったのか？

「今のところは何もないわ、ただ状況が予測不可能へと陥る前に貴方を呼んでおこうかなと思ってね」

うーん、まあいいか。こっちの事は後日でもいいしな

どうやらまだ人狼の里で話し合いをしていたらしい……悪い事したかな？

「それじゃあ妙神山で竜神の装具を借りてきて頂戴、予備は無いからさ」

了解、たぶんそっちが迦具夜姫に歓迎された後に合流すると思うからそれまで気を抜くなよ？

「分かっているわ、まだあっちの全貌はハッキリしてないしね」

『これより月面に着陸します』

「それじゃあね、出来るだけ早く来てくれることを期待しているわりよ〜かい！」

リンクを切りロケットを下りる準備に入る私たち。

周辺に敵影は無いけど、逆に不気味ね。

「……基地に入る時紛れ込むつもりか？」

「ありうるわね、何せあの小ささ。分裂して騒ぎを起こせば高確率で紛れ込む事が出来るでしょうね」

「問題は今本体が何処にいるかだが……駄目だな、マリアのサーチではこれ以上の精度は無理だ」

『お役に立てず申し訳ございません、マスター』

「あ、いや（汗）別に責めているわけではないぞ？お前の武装からしてこれ以上の物は積めないんだからな」

カオスがマリアの謝罪に慌てている。

でも分かる、さっきのマリアの言葉はワザとだ。

普段はカオス様と呼んでいるマリアだけど、最近はふざけることも覚えたのかそういう時は決まってマスターと呼んでいる……気付いていないのはカオス本人のみだ。

その証拠にこちらから見えるマリアの口元は緩んでいた……マリアもやるわね。

「はいはい、ともかく行きましょう。向こうが空間を開く前に狐火の結界を展開するから何とかなるでしょう」

既に迦具夜姫には到着後合図と共に開けるようをお願いしてあるからな。

空間が開く場所と私たちの周りに展開すれば倒せないまでも発見できるでしょう。

「確かにそれなら何とかなるうが、靈力は持つのか？敵の陣営もまだ分かっておらんに無理はするべきではないぞ？」

「なんとかなるわ。それに忠夫も来るし」

『その忠夫様は連戦の後ですが？』

「う……まあ、どうとでもなるでしょ」

私は気ままずくなつて目を逸らした……といつか忠夫ならこれぐらいはどうって事ないでしょ？

……駄目ね、どうも思考がいい加減になってきているわ。取り込んだ欠片の影響かしら？

「そろそろ月面だぞ。マリア、ロケット外部にはいないのだな？」

『ロケット周辺には接近した形跡はありません、しかし月の魔力の影響で探索範囲が極めて狭くなっています』

「とにかく降りましょう。間誤付いていてもしょうがないし」

その後、装備の再確認を済ませた私たちは月の地表へと降り立った。ツ、なるほど……確かに凄いわね、この魔力の濃度は。

……私とはどうにも相性悪いみたいだけど。

私は自身の体を舐めるように狐火を展開するとカオスとマリアの体を包んだ……どうやら彼らの体にも引っ付いてはいなかったようだ。

「どうでもいいことだが、炎が纏わりついておるのに熱くないのは不可思議な感じだな」

「ご希望とあれば温度上げるけど？」

「結構だ！」

グダグダな感じながらも周囲を警戒しつつ合図を送る私。

開かれる空間……しかし予想に反してベルゼブブはやってこなかった。

「……あれ？読み間違い？」

「……どうだろうな。狐火を見て取りやめたのではないか？」

「ま、いいか。とりあえず入りましょ」

こうして私たちは休憩の一息を入れることがようやくと出来るよう

になった。

……さて、どうなるのかしらね。

SIDE OUT

SIDE 忠夫

玉藻からの要請が届いた後、俺は長老に後日話し合いを持つ旨を伝えて里を後にした。

転移で妙神山に帰還すると小竜姫に竜神の装具を用意して貰えるようにお願いする。

「やはり月へ行かれるのですね、余り無理はされないで下さいよ？」

「無理はしないさ、無茶はするけどな」

胸を張ってそう告げると横から頭を叩かれた。

見ればメドーサが額に井桁を浮かべながら笑っていた……ちょっとビビッたぞ（汗）

「そういうこと話威張って言う物じゃないだろ？言いたい事は分かるけどさ」

「へーい」

「忠夫様こちらになります」

「おう、って小竜姫のつけていたやつか？」

見れば小竜姫についていた装具が全て無くなっている。

若干頬を染めた小竜姫は俺の言葉に頷くと、甲斐甲斐しく俺の体に装具をつけ始めた。

いやまあ、いいんだけどさ……メドーサの視線が痛い（汗）

「ま、月に行くのは何も玉藻たちの援護だけじゃないさ。ベルゼブ

ブの魔核を確保したいのもある」

「もって事は他にもあるのかい？」

「月の魔力でルシオラの抜けた後の魔の因子補強が一番の目的かな。メドーサの因子は神族のそれに変わったし、小竜姫の因子が竜の因子を主体にするものとはいえ神の因子である事には違いはないからな」  
「なるほどの、今までの太極天のバランスと違ってきておるだけに魔の因子を補強する必要があるか」

「ああ、今までメドーサの因子と太極天の因子でバランスを取っていたけど仕掛けを発動させてルシオラの因子を剥離させたからな。太極天の魔の波動が弱まっている」

太極天は過去へと因子を送る際己の因子に一工夫していた。

己自身がこの未来を知りどのような行動をするか分かりきっていたから。

だからこそ俺の手でもルシオラの因子を龍珠に移すことができたんだ。

「……………そういうことか。道理であのような事ができたわけじゃな……………本当に先のことまで読んでいるやつじゃ」

「確かに人間に因子を……………例えばそれに長けた者でも……………自身の中で混じり合っている物を丁寧に剥離できるわけないか」

「そういうこと。最上級の太極天だからこそ出来た事さ、やる時はかなり複雑そうだったが……………さて、長々話してしまっただけどそろそろ飛ぶよ」

「うむ、玉藻によろしくな」

「油断するんじゃないよ、未来じゃ記憶を失った場面なんだから」

「そうですね、細心の注意を払って下さいよ？」

「ああ、分かっている。決戦も近いんだ……………記憶を失ってなんかいられないさ」

俺はそういつと玉藻の因子とのラインを活性化し双文珠を発動させた。

合／流

次の瞬間、周囲は中華な佇まいではなくSFチックな物へと変わっていた。

横を見れば玉藻がジュース片手に寛いでいた。

その向かいには迦具夜姫、その背後に朧と神無がいる……揃ってこちらを驚いて見つめていたが。

「……寛ぎすぎだろう（呆）ふう、突然の来訪申し訳ない。俺の名は横島 忠夫。玉藻の要請でこちらに飛んできた」

「……はっ、よ、ようこそ月神族の城へ。よく自力で入って来られましたね？」

俺は玉藻に呆れた視線を向けた後迦具夜姫に陳謝を述べた。

迦具夜姫の事情は聞いていたようなのでそれほど警戒していないようだ、流石にこの閉鎖された空間に入って来られたことを気にしていた……当然だろうが。

「ああ、俺は俺と契約している者たちに限って絶対的に不可侵なラインを持っているからそれを辿ってきたのさ。それより現状はどうなっている？」

「今のところ小康状態だ。ベルゼブもアンテナの方に姿を確認できた。造魔の方は未だ確認できておらんがな」

こちらは寝かされたマリアの整備を行っていたカオスが答えた。

「……マリアはどこか怪我したのか？」

「いや、月神族の技術を提供して貰えたのでな強化しているんだ」  
「これで情報収集面が強化されます」

どこか嬉しそうに語るマリアと額に汗を流すカオス。

……？何かあったのか？

見れば玉藻が声を押し殺して笑っていた。

「？ま、いいか。それじゃあ、どうしようか。このまま俺がアンテナに飛んで破壊後、各個撃破でもいいけど」

「それじゃあ私たちが来た意味殆ど無いじゃない。とりあえず造魔の方は私たちが受け持つわ。ベルゼブブの速さにはちよっとてこずりそうだし」

「ん、そうするか。あいつの魔核を手に入れる予定だからちよつどいいし」

「え？もういらんじやないの？」

俺は今後の予定を玉藻たちに説明すると行動に移った。

ちなみに臙たちは迦具夜姫の警護について貰っている……危険を冒す必要は無いしな。

何故か素直に聞いてもらえたが何故だろうか？

その直後、玉藻からの視線が痛かったが……別にナンパとかはしてないぞ（怯）

S I D E O U T

月面上魔力送信型造魔。

現在この造魔はアンテナの鏡面部を修正している最中だ。

周りではベルゼブブが分裂して月面に張り付いている。

不意にアンテナの影から二つの影が姿を現した。

双方球体状の巨大な浮遊物体だ……表面に大きな一つ目がある。

「グギャグギャ！」

「ゴモモモッ！」

「む、充電完了したか魔球たちよ。俺の方はまだ掛かるからアンテナの防衛を頼む」

地面に張り付いていた一体のベルゼブブが指示を出すと球体はアンテナ周辺に陣を張り、放電し始めた。其処に現れる忠夫たち。

忠夫は球体を見てそれが大魔球一号という造魔であることを看破した。

おそらくもう一つも同型であろうと予想を立てた忠夫は玉藻に弱点が水であることを伝えた。

「って、この宇宙空間でどうしろっていうの?!」

「ふむ。玉藻よ靈波砲を撃つぞ。それに合わせてウォーターカッターをマリアに放ってもらうからは各個撃破だ」

「あ、なるほど。靈波で水を保護するって訳ね!よし、それじゃあやるわよ!」

玉藻たちが迎撃に乗り出したのを見て忠夫はアンテナ上部に接近した。

それと同時に放たれるレーザーの嵐。

縦横無尽に放たれるそれは玉藻たちの所にまで届き彼らはあわを食って逃げ惑っていた。

そして其処に放たれる放電と収束された重圧なビーム砲。

「ちい、あつちは違うタイプかつ!?ってことは弱点も違うのか?」

「くう、なんて弾幕ならぬビーム幕よ!?あの造魔と合間って近寄れやしないわよ?!」



愚痴る忠夫と玉藻を他所に更に激しくなるビームと造魔の攻撃。  
忠夫は両手に霊力を籠め印を組み巨大な剣にするとアンテナのビームを発射している腕に向けて振り下ろした！

「オオオオオオツ！ シツ！！」

「グオオオオオツ?!！」

腕の内半数近くを切り取られたアンテナは悶え苦しむもすぐさま腕を再生させようとする。

忠夫は構ってられるかとはかりに鏡面に向けて霊波砲を発射しようとするが其処へ乱入してくる無数の影。

「ツ!?ベルゼブブかつ！」

「貴様！好き勝手やってくれているがそれもここまでだつ！！」

「月の魔力によりそれぞれがオリジナルと変わらぬ強度を得た以上好きにはさせん!!！」

「我ら蠅の王の軍勢の前に滅びるがいいつ!!！」

『オオオオオオオオオオツ!!!!』

無数の蠅が飛び掛るのを鬱陶しく思いながら避ける忠夫だが状況は刻一刻と悪化しつつあった。

アンテナの腕は再生し攻撃を再開するに加え無数に分裂したベルゼブブの一部が玉藻たちの方にも向かいつつある。

しかもアンテナは試射を開始した。  
最早一刻も猶予は無い。

「分身が死ぬだろうが仕方ないか……ハツ！」

忠夫は自身も分裂するとそのうち数体に超加速を使わせ一気にアン

テナの鏡面部に特攻させた。  
それにより分身たちは力尽きるも見事アンテナは爆散し幾匹かのベルゼブブの分身体も巻き込まれた。

「ナニ?! …… 貴様ア! 人間の分際でよくもやりやがったな! 許さんぞつ!」

「勝手に不可侵の地に赴き好き勝手に勝手したお前らが悪いのさ。さて、お前も此処で眠っておけ!」

忠夫は月面から魔力を吸収しつつ封魔天蓋魔封陣を起動させる。  
この陣は忠夫が心眼と共に開発した物だが、忠夫のスペックを持ってしても一日に二回が限度なのだ。  
それを月の魔力を使うことによって負担を無くしこうして展開しているのである。

「とはいえ、辛い事には違いないな。心眼、悪いがベルゼブブの本体を見極めてくれ! そいつに直接こいつをぶちかましてやる!」

「承知!」

展開したはいがいつものように相手を引き摺り込むほどの効力は引き出せなかった。

故に心眼に相手の真贋を見極めて貰いそれにぶちかます事にした。  
陣の効力によって近くを飛んでいた分身体が消されていく中本体のベルゼブブは何とか脱出できないかと焦っていた。

アンテナが壊された以上任務は失敗だし、帰れる当てもない。  
やがてその本体を捕らえる心眼。

「あっちか!」

「ハッ?! しまっギヤアアアアアッ!」

陣に囚われた本体が魔核を剥き取られ圧殺されると分身体は一斉に爆散した。

一方玉藻の方かというと、アンテナが破壊された直後大魔球一号をすぐさま下すももう一方の魔球に苦戦していた。

「くっ?!こいつ一体何が弱点なのよっ?!」

「属性は一通り試したがどれも効果なし。物理霊体共に効果のある攻撃をするも効果なし。……となると後は何かがある?」

「カオス様、あれは本体ではないのでは?」

「ッ!そうか、あの球体の方は投射体というやつか!?なれば攻撃が通じんのも分かる!」

「ってことは影に攻撃すればいいのね!ハアッ!」

マリアとカオスの会話で要領を得た玉藻は溜めに溜めた霊力を一気に影に向けて放った!

打ち抜かれた影は一瞬抵抗するも次の瞬間には飲み込まれ消滅した。同時に宙に浮いていた魔球は音も立てずに消滅した。

「どうやらそっちも終わったようだな。マリア・心眼周囲に敵影はあるか?」

「いえ、少なくとも周囲には一切見受けられません」

「うむ、敵性の魔力反応も無いな」

「それじゃあ一旦城に帰るか」

忠夫たちは疲れながらも意気揚々と月神族の城へと戻った。

迦具夜姫たちの労わりを受けながらやっと一息つくことが出来た忠夫は椅子に座って寛いだ。

その後、所用を済ませた忠夫たちは当初予想されていた妨害も無く無事地球へと帰還する。

SIDE 土具羅

わしはアシユタロス様に命じられたとおり、三姉妹の最終調整を終わらせた。

先ほどベルゼブブと繋がった通信機が沈黙した所を見るとどうやらあちらは失敗したようだ。

「ムッ?!……造魔の方もやられたか。これはアシユタロス様の言うように宇宙意思が働いているやもしれんな」

「土具羅さま?どうかしましたか?」

「なんかあつたのかい?」

「はふー、疲れたでちゅねー」

先ほどの通信機が沈黙するに続き、造魔の生存ランプも消えおつた。それを見てわしがアシユタロス様の懸念を考えておると三姉妹が入ってきた。

ふむ、どうやら訓練プログラムは終えたようだな。

「なに、宇宙の方に行っていた奴らが任務を失敗したのだ。これで残るは我等のみになってしまった」

「それって不味いですね。私たちはパワーこそ大きいけど経験が不足しているから」

「それこそ力任せでも粉碎してやればいいさ」

「それにしても不甲斐ない奴らでちゅねー」

ふむ、ルシオラがもっとも状況を把握しておるな。

パワーではベスパに負けるが頭脳面ではこやつが一番だな。

頭脳のルシオラ、パワーのベスパ、二人には劣るが可能性を持たせたパピリオ。

……上手くこやつらが働いてくれるといいのだが。

「とにかくだ。暫らく訓練をした後に冥界チャンネルを閉じるべく  
人界の拠点を潰しにかかるぞ」

『了解！』でちゅー！』

反攻まであと少し……アシュタロス様、貴方様は願いの成熟まで暫  
しの休息を。

S I D E O U T

S I D E 齊天大聖

月から帰った忠夫たちを見た時に初めに抱いたのは安堵じゃった。  
記憶を無くすという未来と同じ状態になれば、唯でさえ混沌として  
おる横島の因子がどう反発するか想像もつかんかったからじゃ。

あやつはそんなわしらの心配なぞ気にしてもおらんようじゃったが  
な（苦笑）

ともかくこれでアシュタロス戦に向けての準備が大まかにはいえ  
整った。

横島の因子は全て開拓されチャクラの充填も手に入れた魔核を吸収  
すれば問題無しじゃし、小竜姫たち契約者達の調整も既に済んでい  
る。

残る表面的な問題は美神の者達とアシュタロス陣営の動きじゃな。

「横島よ、美神の方はどうするのじゃ？美智恵に身を晒したようじ  
やが問題は無いのか？」

「ん〜？……ま、いいんじゃないかな？どついう動きを見せようが  
俺はルシオラたちが拠点を潰しにかかった直後に接触するつもりだ  
から……問題があるとすればルシオラたちの動きかな？」

「一応前もって警戒を強め防御設備を強化するように掛け合っても  
らっているけど……あつちは亜空間から現れるからね」

ふむ、空間の歪み……位相空間を逸早く察知しても攻撃を防げなくては意味ないしの……かといって、この妙神山に来るまで放置するわけにもいかんし。

とはいえ、ルシオラたちに拠点を攻撃させてしまえば其処を美神美智恵が叩きにくるかもしれんし……厄介なことじゃな。

「御主は戦艦に転移すると言っておったが契約者達はどうするのじや？チャクラを開いた後なればルシオラたちを抑えつつアシュタロスと会話をするぐらいは出来ようが」

「全員連れて行きますよ。ルシオラもね……ただ、ルシオラは龍珠状態での行動ですが」

「あちらのルシオラを刺激しない為じゃな？」

「ええ、このルシオラとこの時間軸のルシオラは別物ですから。同じ思いを持つてくれるにしてもそれは自然とでないという意味がありませんから」

幻影で誤魔化してもアシュ様やルシオラ本人にはばれるからね……例の技は別にこの状態でも出来るから問題ないし

チャンネルを閉じさせないという事は素のアシュタロスと対峙すると言う事じゃからな。

億を軽く超えるマイルド数（人界ではその20分の1じゃが）を誇るアシュタロスを相手にするには例の技、ルシオラとの同期合体は必衰じゃろう。

同期合体にはたとえ横島が行おうと出力にブレが出るものじゃが、自身の龍珠を核にしているルシオラとの合体なれば最低でも五百倍はかたい。

その出力はわしやアシュタロスは勿論のこと、最高指導者たちすら凌駕するじゃろう……正に人界の切り札じゃな。

「それよりも俺としてはどういふ決着で済みますかで頭が痛い……ア

シユタロスと同じ立場、じゃないな。地位に居たとはいえ、真の願いを知り叶える手を提示してもあいつが納得してくれるかは別だからな」

そうよねえ、アシユ様も結構頑固だから。何かいい説得材料はないかしらね？」

アシユタロスの説得か……わしとしては横島らの言葉以上の物はな  
いと思うが。

真の地獄を見、感じ体験した太極天の意思を受け内包している横島  
なればな。

「……いつそのこと、キーさんとサツちゃんの二柱にアシユタロス  
の前で土下座してもらおうか？」

「ぶっ?!」

「……それは面白いね、私としてもそれは有効だと思つよ？」

「そりゃいいね!あの最後に出てきて許す云々って言うのには私も  
カチンときたからね」

「確かに責任者としてあれはないですね。その案実行しましょう」

横島が唐突に告げたとんでもない案に玉藻・メドーサ・小竜姫が即  
座に合意を返す。

……気持ちはこちらからなくてもないが、容赦ないの〜(汗)

今頃あの二人はどういう心境じゃろうな(汗)

「あと問題としては、アシユタロスとナタナエル様を眠らせた後だ  
な。細かな戦後処理はキーさんたちに任せるにしても人界のことは  
別だし」

横島はナタナエル殿に対しては敬称で話す。

未来のあの混沌とした神魔の状況を何とかする為に自身を礎にした

あの方を横島は敬っているのだ。

それはともかく、戦後か。

神魔になる横島たちとはともかく横島家の今後を安全にする為には動かんわけにはいかな。

美神 美智恵の甘言に乗った者たちが下手な動きをすればとんでもない事になるやもしれんからな。

「刺激してもあまり良くない事が起こりそうな気もするし、自然と集まりを解散させる手はないかな？」

「なんじゃ美智恵は放置するのか？」

「あれは自身に被害が向かってこなければ基本のんびりしているタイプだからな。権力を与えたらどうなるか分からんけど」

「そうよねえ、それで未来でも苦労したし。バチカンに潜入して前知魔と取引しようとしたのには焦ったし……結局自滅したけど」

「我が身を省みないといえただ無茶するだけに聞こえるけど、それに他人を巻き込むのが前提になっているからねえ……勘弁して欲しいもんだ（嘆息）」

「業腹物ですが、やれることは周囲の者達を解散させて過ぎた権力が持てないようにするに留めるぐらいでしょうか？」

「母さんや協会の方も動いてはいるけど、それぐらいが限界かな？」

「ふむ、まあそっちは御主等に任せよう……問題は他にもあるしの……過激派だな、親父達を追い詰めたあのクソ野郎共！（怒）」

明確な怒りを顕わにする横島。

この者にとつては美神 美智恵より両親を死に追いやった過激派の輩の方が憎しみの対象なのだろうな。

例の次元流に巻き込まれてきた魔族は封印刑にて処理したが、情報を受け取った者たちは未だ健在だからな……監視はしてあるが、いつ暴走するか分かった物ではない。

封印刑の魔族のことは横島たちに告げておらんが、果たしてどうな



る事か。

……いつそのこと過激派ども全員封印刑に出来んものかのう。

「……ま、今の段階ではそっちを如何こうできるわけじゃないし。

早いとこ魔核を熟成させないと」

「行動を開始するのは少なくともそれから……今回の経過から見  
て微妙なところか？」

「多分、大丈夫だ。それよりヒヤクメ、逆天号が現れたら即知らせ  
てくれよ？」

「お任せを！必ずや攻撃前にご報告します！」

なにはともあれ、決戦まであと僅か。

今度は人界を留守にしておいたなどという事がないようにせんとな。

第二十四章へ収束していく物語行き着く先は未だ暗闇の中（後書き）

改訂版では朧や神無たちを動かしたいところです。

そして今回の事で改訂前の今作ではシロの出番も無くなりそうです

（汗）

共に改訂版をお待ち下さい……活躍できるかは微妙ですが（汗）

次回投稿は8/18の0時です。

感想ご意見お待ちしております。

第二十五章 邂逅せしは愛の道化師と反逆の魔王（前書き）

ついに邂逅する愛に身を奉げる者と世界に反旗を翻す魔神。

## 第二十五章 邂逅せしは愛の道化師と反逆の魔王

月の戦いが終わり人狼族との会談も済ませた忠夫は魔核を熟成する以外は特に行動しなかった。

それは漸く来るべき時が来たからか、それとも未だ見ぬルシオラを思ってたか。

ともかく事務所の同居人もそんな忠夫に声はかけられず、心配げに遠目で眺めるだけだった。

もつともGSたちは依頼をこなす事に大忙しだったが。

逆に妙神山では最終調整の為慌ただしく皆が動いていた。

ヒヤクメは世界を見通し続け状況の変化を逃さない為に最低限の休憩のみで頑張っていた。

契約者達は更なるキャパシティを得る為に己を鍛えていた。

老師は神界との連絡は向こうからの通達のみで対応し決して人界を放れようとはしなかった。

人界で横島家の護衛を勤めているワルキューレたちは気配を殺しジツと時が来るのを待っていた。

そんな横島家を配下の者を使って監視しながらも娘を鍛え続けている美神 美智恵。

少しでも忠夫の力になる為に国を挙げて祈りを捧げ続けるザンス王国。

そして、最終調整された体を馴染ませる為に訓練を続けるルシオラたち。

それぞれが運命の時に向けて大々的に動き始めた。

そして一週間後ついに忠夫が魔核熟成を済ませた。

SIDE 忠夫

ついに最後の魔核を熟成できた。

俺は即座にそれを飲み込むと各チャクラに染み渡るようにエネルギーを廻した。

それによつてすぐさま充填されるチャクラたち……各因子も最高値まで増幅された。

「いよつし！これで解放の準備とルシオラ再臨の準備が整った！」

「それではチャクラ解放の儀式を行うとしようかの」

老師の言葉に頷いた俺は母さんたちに連絡を入れた。

そして終結する仲間達と家族達。

母さんは此処に来る前にザンス王国へ今回の事を報告したそうだ。

今の此処の状況はザンス王国に生中継されている。

これで未来より圧倒的に少ないとはいえ、祈りの後押しも得られることとなった……ありがたいことだ。

俺の周囲では早くも老師が結界を構築している。

玉藻の解脱はともかく、俺のは他の神魔たちでは抑えきれないからだ。

今回は世間に知らしめる必要も無いので結界は内部の出来事を写さない物だ。

既に玉藻の儀式は終わっており、嘗て転化したばかりの狐星神以上のオーラを發揮している。

その姿は狐星神と同様の物だ……尾の本数だけが相違点か。

「玉藻ちゃん綺麗になったわね」

「ああ、全くだ」

「ありがと、百合子さん・大樹さん」

玉藻の姿を眩しそうに見つめながら可愛がるお袋達。

玉藻も頬を染めて嬉しそうだ。

「さて、次は御主じゃぞ横島」

「ああ、既に準備は整っている」

「ついに師匠の神魔化が行われるんだな！一体どれくらいのものになるんだ？」

「忠夫様は現在五つの因子をそれぞれ基本マイト数まで高めておられる。そしてチャクラも飽和状態になるまで充填されている」

「つまりチャクラを開放する時にマイト数がそのまま反映されるという事。これは玉藻様も同様だったわね」

「という事は、マイト数を5倍して更に12倍するという事ですか？」

結界の外で話し合っている雪之丞たちを他所に俺はチャクラを順に廻し解放していく。

今回は前回の比ではない上昇だから俺自身踏ん張らないとな。

目算では200万マイト以上だが、果たしてどうなることが。

徐々に高まっていくオーラ。

太極天特有の虹色のオーラは俺の体を駆け巡り巨大になっていく。

「そろそろ来るぞ！契約者たちは気をしっかり持つんじゃぞ！！」

『了解！』

俺の内から大きなオーラが二つ生まれようとしている。

一つは未来で鍛え上げた太極天のオーラ。

現在のそれは更に契約者達との繋がりにより更に複雑な物へと変貌している。

もう一つは右肩にある龍珠から生まれるルシオラのオーラ。

こちらは俺と同等の物になるのだから実質俺が支えるのは最終マイト数より大きい400万マイトという事になる……ある意味太極天の時以上の衝撃が俺を襲うだろう。

やがて俺の周囲でうねっていたオーラが爆発し柱を構築する。

それは天を貫きやがて俺自身へと還元されていった。  
自身を蹂躪するオーラを抑えつつも隣を見るとピヨッているルシオ  
ラが顕現していた。

「ルシオラ！」

「だ、大丈夫よタダオ……凄まじい衝撃だったわ」

見れば右肩の龍珠が新たに出来ている。

ルシオラに聞いたところ自身は別に龍珠となれる様だからこれはこ  
れでもう一つの使い方をしよう。

ちなみに姿そのものは未来の太極天と相違はない。

「どうやら無事済んだようじゃな……横島は約250万マイルと言  
ったところか、祈りは結構効いた様じゃな。それでどういう名を名  
乗る？太極天を名乗るのか？」

「少なくとも今は名乗りませんよ。演算機で太極天の意識を復活さ  
せてからです……名乗るとしたらですが」

「私もルシオラは名乗らないわ。この世界にいるしね……タダオが  
使っていた蛭を名乗るわ」

そのルシオラの言葉に苦笑しつつも俺は契約者たちの方を見た。

今回は契約者が三人という事で未来と違い一人につき俺のマイト数  
の12分の1……20万程度が供給されているはずだ。

「ふう、流石にきつかったね。……でもこれだけ力が張っていれば  
今まで以上に動ける」

「ッ、凄まじい波動です……忠夫様の御力は本当に凄いですね、も  
っと精進しなければ」

「転化してたからそれほどでもなかったわね、これからはこれを更  
に伸ばしていかないとね。何が起きるか分からないだし」

どうやら無事のようだ。

これで三人は揃って20万マイルとなったわけだ。

「それじゃあ忠夫、ザンスの皆さんに御礼を言ってくれろ？」

「分かった……皆様方、此度の御支援真にありがとうございます！これより私は魔神との邂逅を果たして参ります。ですので今しばらく世界の安泰を祈っていて下さい、御願ひ致します」

俺は中継のカメラに向かって言葉を紡ぐと頭を垂れた。  
それを持って中継は終わったようだ。

「……しかし今の言葉使い似合わなかったわね」

「……ああ、なんか鳥肌が立ったぞ」

「お袋……親父……はあ」

カメラの向こうで二人が喋っているのを聞いて俺は脱力した……俺だって似合わないのは分かっているよ！

「さて、それじゃあ私は龍珠になっているわね。もういつ事が始まったかも可笑しくはないんだから」

「ああ、分かった。まずは艦の制圧だな」

ええ、まずは向こうが話を聴かざる得ない状況を作らないとね。

特にベスパなんかは特攻体質だから

「ルシオラは何を考えているか分からないタイプだし？」

あっ、ひどい！

「あははは、でもある意味一番分かりやすく分かりにくいのはパピリオだよな」

そうね、あの子って子供のようで大人なところもあるから

「ルシオラたちの無力化は私たちがするわ」



「ルシオラは玉藻、ベスパは私、パピリオを小竜姫ってところかしら？」

「そうですね、実力や能力的に見てそれが一番でしょう」

俺たちは霊圧を鎮めて静かに話し合っている……手に 転/移  
同/伴 の双文珠を持って。

分かるのだ、時が直ぐ其処まできているのが。

玉藻たちは俺の傍で待機している。

他の皆は老師と共に此方を見守っている。

ただ一人、ヒヤクメのみが宙を睨み神経を鋭敏にさせていた。

時が……満ちる！

「ッ！来ました！場所は南米、未来の場所と同じです！」

「其処ならルシオラの記憶でいける！行くぞ！！」

『了解！！！！』

転/移 同/伴

瞬時に文珠を発動させ俺たちは転移した。

S I D E O U T

時は少し遡り、世界ではアシユタロス陣営に先駆けある一つの報道が為されていた。

『皆さん、始めまして。私はザンス王国の国王です。今回の報道は近い内……おそらく今日中にも現れる魔神について知らせる為行う事になりました』

これをオカルトGメンの食堂で聞いていた美智恵は目を見開き自身の計画が瓦解した事を悟った。

その隣では令子が身に覚えがありすぎる単語に驚いていたが。

『その魔神とは地獄の大公、恐怖公とも呼ばれるアシユタロスです。この魔神の人界侵攻は許せば多大なる被害が確実に世界を蹂躪するでしょう……しかし心配は要りません。我々には心強い救世主が居ます！……もつとも御本人にしてみれば自身と周りの幸せの為に立ち上がっただけと仰るでしょうが。』

世界中で流されるこの報道は最高指導者の影響でアシユタロス陣営には漏れる事はない。

もつとも彼らは現在亜空間に潜んでおり、なおかつ訓練に勤しんでいる故に知る由もないのだが。

『救世主様の御名前は横島 忠夫様……これより妙神山と呼ばれる霊山で行われる転化の儀式により神魔を超える存在になられる方です！』

霊能関係者は横島の名に驚きつつもどこか納得していた。

此処最近の世界に対する貢献の度合いやその真摯な態度には感銘を受けていたから……だから心より祈った、横島 忠夫の無事を。

『皆様もご存知でしょう！十数年前から世界で様々な分野において貢献してきた横島家の事は。そうです、彼らは此度の魔神侵攻を阻止し世界を護る為に布石を打ってきたのです！我らザンスも彼らには助けられました』

世界は納得する。

貧しい者だけでなく、真に弱い者の為に尽くし世界に新たな風を吹

きいれた実業家の姿を見てきたから。

見せ掛けでなく、本当に心の籠った行動という物を感じてきたから……だから心より祈った、横島 忠夫の安息を。

『かの御仁はこの侵攻を阻止し魔神を永遠の眠りにつかせた後、隠遁の生活に入ります。生まれてより十七年、5才の時より己を律し鍛え続け今や世界を護る最上級の神魔と同等の御力を得られようとしている忠夫様はやっとな平穏な生活を過ごす事ができるようになるのです……やっとなです』

世界は涙する。

幼き時より身を削ってきた彼を思つて。

平穏が隠遁の生活である事を申し訳なく思つて……だから心より祈つた、横島 忠夫の永久の平穏を。

『……只今、連絡が入りました。これより解脱の儀式を開始するそうです……世界の皆様、我々は今から祈ります。忠夫様を思い御力になれるように！これが最大で唯一の助力となりうるから！皆様！どうか御一緒に御祈り下さい！！御願ひ致します！！！！』

世界は震撼した。

一国の王が世界中の目を前に土下座をしたのだ。

故に世界はこの時一つとなつた……世界の守護神の力になれるように！

横島 忠夫の助けになれるように！！

そう、横島 忠夫の転化に当たって過剰のマイト数が得られたのは奇跡ではない……純然たる世界の意思であり想いの結晶なのだ！！

そしてこの後ザンスを通して世界に配信された横島 忠夫の転化し

た姿と言葉が再度世界中を震撼させたのは言うまでもない。

SIDE ルシオラ

その日はいつもと違って奇妙な気分が目覚めた。

何かが変わったわけではないんだけど、何かが変わったような気もした。

「そう、ありもしない何かが目覚めたというか、見つけるべきものがどこかで見つかったというか……なんなんだろう、この感覚？」

「いや、私に言われてもわかんないよ？」

「ルシオラちゃん……とうとう逝ってしまったんでちゅね、頭のいい人がなりやすいと聞きまぢゅが、まさかルシオラちゃんがあつちの住人になってしまふなんて」

「……パピリオ？貴女何か失礼なこと言っていない？」

「ルシオラちゃんが開けてはいけない扉の向こう側に逝っちゃったって言う話でちゅよね？」

「……少し、向こうでお話しましょうか？」

イヤ ……でちゅうう？！

全く失礼な子ね！

私はいけない子をデッキの物干し竿に干してくると朝食の砂糖水を口に含んだ……うん、美味い。

「あゝ、ルシオラ？パピリオは？」

「ん？なんかお外で遊びたいって言っていたからちよっとお外で涼んでもらっているわよ？」

「……さいですか」

ベスパはなにやらブツブツと呟くとタンパク質を手にエネルギー供

給ルームへと歩いていった。

あの子ってばいつもこの時間はあそこで食事するのよね。

アシユ様への感情は敬愛というより恋する乙女のそれよね。

アシユ様は私たちにとって親に当たるんだけど……ま、魔族にはそんな事関係ないしベスパが幸せならいいか。

さて、訓練は昨日で終わったからついに人界侵攻ね。

亜空間の味気ない風景はもうお腹いっぱいだし、早く通常空間に戻りたいものね。

……でもやっぱり気になるわ、今朝感じたあの二つの気配。

私と同じようでありながら決定的に違う何かを含む気配と、何故か引き寄せられる太陽にも似た気配。

「ま、いいか。なんとなくだけでも直ぐ見つけられそうな気もするし」

これが何を示すのかは分からないけど、一年の寿命を精一杯謳歌する為にも見つけてみせるわ！

それぐらいは許されますよね、アシユ様？

その後私は憔悴したパピリオを回収すると土具羅様の指示を仰ぐべくコントロールルームへと向かった。

「土偶羅様、今日のこれからの予定はどうなっていますか？訓練は昨日で終わりでしたよね？」

「む、ルシオラか。うむ、今日はこれより俗界の拠点を順に潰して冥界チャンネルを閉じていく」

「最初は判明している所からでしたよね？」

「というより近い場所からだな。南米からスタートし最後に日本という島国に行くことになる」

「神魔の動きはどうなっているのですか？妨害がありそうなもので

すが」

「それが不思議な事に見受けられん。接近した気配も感知できんし人界へ降臨した気配もない……一体どういうことなんだか」

それは可笑しい……今までの動きから少なからずこちらの事は向こうも把握している筈。

人界を見捨てるならともかく、信仰を糧にしている神魔がそれをよしとする筈はないと思うんだけど。

ただ確かに高位神魔が人界に降臨した形跡はなく人界に常駐している神魔ですら動きをみせていない。

まあ、亜空間からの計測だし、もしかしたら出ると同時に襲撃を受ける可能性もあるかもしれぬ。

「なんにしてもアシユタロス様の御力で動いているこの移動要塞・逆天号が早々墮ちる事はありえないがな！」

「油断は禁物ですよ、土偶羅様？世の中何が起きるか分かった物ではないんですから」

「分かっておる！言ってみただけだ！」

「なに騒いでるんだい？そろそろ通常空間に出る時間だろ？準備は終わっているの？」

「そっちはとづくに終わっておる。あとはお主等が席につくのを待つだけだ！さっさと着け！」

『ハイ』

いよいよね、人界侵攻。

冥界チャンネルの掌握、人間に転生したメフィストの魂の入手……そして今朝の気配の探索。

最後のは個人的なことだけど、絶対成し遂げて見せるわ。

SIDE OUT

南米ジャングル上空に現れる位相空間……そして徐々にその姿を現す移動要塞・逆天号。

現れた通常空間に土具羅たちが警戒していた襲撃はなく、ただジャングルの木々が生い茂っているだけだった。

「……どうやら襲撃は無いようだな。一体どうなっておるのだ？まあいい、お前たち早速近くの拠点から潰していくぞ！」

『了解！』でちゅー！』

「それは勘弁して貰いたいな、俺的には」

「…………ッ？！な、何者っ！？」

「悪を憎んで魔を愛する男・愛ラブ・シエスターの道化師参上！」

「善を慈しみ神を律する乙女・龍姫ドラゴン・プリンセス参上！」

「愚を捌き愛を抱く乙女・狐姫参上！」

「い、怒りを胸に抱き悲しみを癒す乙女・魔女メドちゃん子参上！って誰が

魔女メドちゃん子だーッ！？」

「な？……何者だ？」

「そこで素面に戻るなっ！恥ずかしいだろうがっ！あとこのカンペ書いた奴誰だーッ？！」

「そういう貴女も空気を読んで欲しいものですね、この駄蛇が」

「ひどっ?!」

突如乱入してきたのは顔をマスクで隠した珍妙な輩だった。

土具羅たちは啞然としていた……一人パピリオだけは瞳をキラキラさせていたが。

言わずもがな忠夫たちなのだが相手のペースを奪おうという事で急遽実行されたのがこの登場の仕方だった。

ちなみにカンペを書いたのは老師である。

忠夫たちは「掴みはOK！」という事でマスクを脱ぎ質問に答えることにした……若干戦闘前からメドーサがダメーシ受けているが、

まあ良しとしよう

「何者つて言つてもねえ……客かしら？」

「なんだこいつら？！何処から入ったんだ？」

「何処からでもいいじゃないか、お嬢ちゃん」

「？どこかで見たとような顔もあるでちゅね？」

「ふう、話が進みませんね」

「黙らんかっ！そしてお前らは何者だ！？この艦をアシユタロス様の物と知つての狼藉かっ！？」

土偶羅が好き勝手喋る者たちに怒鳴り侵入してきた忠夫たちに問い詰めた。

それを受けた彼らは目配せすると忠夫が代表して自己紹介を始めた。

「そうだな、まずは自己紹介といくか。俺の名は横島 忠夫。で、こっちは順に玉藻・メドーサ・小竜姫だ。メドーサと小竜姫は知っているよな」

「なっ、メドーサに小竜姫だとお？！」

「それって行方不明だったうちの構成員と妙神山の管理人じゃない！？」

「行方が分からないと思つたら裏切つていたつてことかい？！」

「あゝ、道理でどこかで見たと思つたでちゅよ」

驚愕と怒りと納得の叫びと呟きが響く中、本人達は苦笑していた。そんな中忠夫はどこか戸惑いながらこちらを見ているルシオラに視線を合わせると言葉を紡いだ。

「別に裏切つたわけじゃあないさ。メドーサはアシユタロスの本当の願いを叶えるべく自らの身を差し出しただけさ」

「私は今でもアシユ様を尊敬しているし神魔の中ではもっとも仕え



たいと思っっているよ……ただ、それ以上に忠夫が愛しく思えたんだよ」

「……ッ、それじゃああなたはその男に惚れたから陣営を抜けたって言うのかっ!? ふざけんな! アシユ様がどんな思いで「小娘が吼えるんじゃないよっ!」ッ?!」

「私が入シユ様の苦しみ悲しみ嘆き怒り……それらを知らずにいるとでも思ったのかい? 私はね、それを知ったからこそ忠夫についたんだ。唯一アシユ様を救える者だから、アシユ様の真の願いを叶えられる者だから」

「なッ?!」

アシユタロスの真の願い……その言葉はベスパを釘付けにした。

そんな中、忠夫は視線を土偶羅に向け宣言した。

「つー訳だから俺は行かして貰うぜ? アシユタロスの元によ? 土偶羅?」

「い、行かせるわけないだろうが! お前たちこやつらを止める!」

忠夫がエネルギー供給ルームへと足を進めたのを見て土偶羅が慌ててルシオラたちに指示を出した。

それに答えるように立ち塞がるうとするも玉藻たちが先手を取りその動きを封じた。

「悪いけど、貴女たちの相手は私たちね? 忠夫とアシユタロスの会話は邪魔させないよ?」

「そういうことです。忠夫様の従者たる私たちが相手をしますよ、お嬢様方?」

「私たちはどちらかというと言いたいんだけどねえ、まいいか。ベスパって言ったっけ? あんたは私が相手してやるよ」

悠々と自分達の前に陣取る玉藻たちにルシオラたちは自然と気圧されていた。

土偶羅はルシオラたちが役に立たないのを見るとせめて自分が止めて見せると特攻するも、忠夫に抱えられてしまい身動きが取れなくなった。

「はいはい、暴れるなつての。大人しく俺とアシユの所へ行こうな  
あゝ」

「コラ！離せ？！離さんかつ！」

やがて扉の向こう側へと消えて行く忠夫たち。

対してコントロールルーム内は静寂に包まれたように動きが無かった。

ルシオラたちも直感で分かってしまったのだ……目の前の存在が自分達とは比べるまでもなく強大であるという事を。

「……とはいえ、貴女たちも知る権利はあるわよね？アシユタロスが真に何を望んでいるか」

「え？」

「それじゃあ行きましようか。私自身最終場面を裏方で終わらせる気はないからね」

「そうですね。忠夫様の相方として傍にいなければ」

玉藻たちはルシオラたちの背後に一瞬で回りこむと拘束し先を促した。

行く先は忠夫と同じエネルギー供給ルーム。

SIDE アシユタロス

おかし。

私は水槽の中で困惑していた。

既に人界侵攻は始まっている筈なのに一向にエネルギーの消耗が感じられない。

侵攻前に攻撃を受けた様子もない以上、拠点を潰していないからかもしれないとも思ったが僅かの消耗すらないのはおかしい。

飛行には別のエネルギーを使っているとはいえ、この大質量の逆天号を浮かすのには私の魔力を僅かばかり使う筈なのだ。

『どういうことだ？確かに亜空間から出た筈、なれば侵攻を開始して拠点の一つや二つ落としていてもおかしくない筈なのに』

「その疑問には俺が答えようか、アシユタロス」

『ッ?!誰だ!』

見ればいつの間にか私の像の前に一人の男とその者に抱えられた土偶羅がいた。

男はこちらを静かに見詰めつつなにやら感慨に耽っているようだ。しかしそれより気になるのは、この者からは人間の匂いも神魔の匂いもしないということだ。

「長かったなー、お前の長さ比べれば塵芥以下だろうがそんなもの人それぞれだしな」

『何をしに来た……お前は何者だ?』

「アシユ様!ご無事ですかつ?!」

「忠夫ー? 私たちにも聞かせてねえ、最後だけ仲間外れは嫌なんだから」

「……なんだ、皆来たのか。いいけど口は挟むなよ? 大事な話なんだから」

問いかけた私の言葉に続いたのは部下であるベスパの声だった。

その後にも残りの部下と三人の見知らぬ人物が入ってきた……いや? 一人は行方を晦ましたメドーサの気配だ。

……一体どうなっているのだ？！

「まずは自己紹介からかな？俺の名は横島 忠夫。なんて言ったらいいかなあ、お前の後釜と世界の理不尽さを経験した者というべきか？」

『私の後釜だと？』

「そう……魂の牢獄に縛られた永遠の悪役ってやつさ」

『……………ツ?!?!?!』

「魂の……牢獄？」

こいつは一体……何を知っているのだ？

「まあ、俺は悪役まで引き継いだわけじゃなかったけどな。俺は俺の未来の因子を受け取った元人間さ」

『……………未来、だと？』

「そつだ、お前が理不尽な世界の在り方に反抗を起こし人界に攻め入り、魂の結晶を手にいれコスモプロセッサで世界のあり方を換えようとした未来さ……結局、それも失敗に終わり究極の魔体も敗れてボロボロになりながら漸く死を認められたんだけどな」

………そういうことか、この者は私のやる事すべてを知っているという事か。

さっきの言葉からすると、この者が私の抜けた穴を埋める人柱になったという事か？

「俺の目的は幾つか在るけど、まず一つがお前を死ではなく永遠の眠りに就かせること。この際、お前と縁のある熾天使ナタニエル様も眠りに就く」

『なに？どういうことだ』

「お前が神魔を滅ぼしたり唯死んだだけでは世界の護りが失われて

結局全てが滅びに向かうんだ。これは例えどのように世界を構築しようとならない、というか変えられないしな……ある意味、これが世界の宿命だな」

『世界の護り……異世界や平行世界との接触や融合を防ぐというあれか。しかしあれは代わりの代役を用意すれば問題あるまい』

「言つたる？どのように構築しようとならない、変えられないと仮に変えられて護りの力を支える者が代わっても結局は悪役をそいつに押し付けるだけで、そういうのは単なる汚物の押し付け合いという奴だ。それを担う苦しみや悲しみ怒りを知るお前は他の者に押し付け愉悅に浸るか？」

透明な瞳をこちらに向けて問いかける男。

その瞳にもし怒りや侮蔑の色があれば私も反論したであろう……しかしこの者にはそのような物はなかった。ただ、聞いただけ……そんな感じだった。

「まあどつちでもいいけどな。それにお前も警戒している宇宙意思というのは存外ふざけたものでな？全ての準備が整い、いざその考えを浮かべるだけで陰湿な邪魔が入るぞ？思わず血管がぶち切れるくらいの出鱈目な物がな」

『そういえばお前は未来の記憶を持っているのだったな……参考程度に聞かせてくれないか？どのような邪魔が入ったのか』

「ん？例えばさつきまでなかった筈のバナナの皮で滑つたり、突然一斗缶が飛んできて頭に直撃したりだな。馬鹿らしい物だが効果的だった……あれは見ていてこんなのあるかと思つたもんだが（苦笑）」

「……………（啞然）」

「だからナタナエル様と同時に永遠の眠りに就かせるのさ。そうすればお前は下らない神魔の争いに巻き込まれずに済むし世界の護りも継続し神魔バランスも崩れず宇宙意思の介入もないから……お

前もなりたくないだろ？道化にはよ」

なんなんだそれは、そんな出鱈目な介入があつていいのか？

しかし確かにこの者の言うやり方ならその馬鹿らしい介入もあるまい……なるほど、経験の賜物か。

『しかしそれには一つ絶対に必要不可欠なものがあるだろう』

「コスモプロセッサーに必要な魂の結晶だろう？とりあえず一回だけなら代用品はあるさ。それで起動し魂の結晶を入手すれば後は問題ないだろ？」

『代用品？！そのような物があるのか！？』

純粹な魂の塊とも言つべきあの結晶の代用品など早々用意できる物ではないと思うが……宇宙の卵でさえ負荷に耐えれず起動できないというのに。

「俺の能力を使えば反則気味だが補える。この龍珠をこの双文珠で強化すれば一回だけだが耐えられる」

『龍珠に双文珠？双文珠というのは文珠の発展系か？龍珠とはいつたいなんなのだ？』

「龍珠は宇宙の卵の発展系で強化版だ。これを更に強化することで宇宙の卵では出来なかつた事ができるようになる」

-. -. -. -. ツ!!

どんな出鱈目な能力だツ!?

この男の内包している力はどれほどの物なのだツ?!

見れば部下の者達も啞然としている……無理もあるまい。

「ん？どうした？」

『お前は一体どのような存在なのだ？それ程の物を有する事ができ

るとは……少なくとも私たち最上級にすら滅多に出来る事ではないぞ?!」

「ああ、そういうことか。能力でいえばまだ他にもあるけど、マイト数で言えば人界で250万つてところさ。揮える力はその数十倍だけだな……文珠はこれ以外にも強力なのがあるから」

「いつ?!」

「に、にひゃくごじゅうまん?!」

「数十倍だと?!」

「すっごーい!?!」

なるほど、少なくとも最上級クラスのマイト数はあるわけだ。さっきの双文珠……あれが少なく見積もって基本マイト数の十倍ほど発揮できるなら先ほどの発言にも嘘はあるまい。

「とりあえず文珠の詳細は置いて、あと俺には因子が5種類……転化したから今は4種類だけど……ある。神・魔・妖・竜の4種類がな。この意味、お前なら分かるだろ?」

『……ッ?!……そういうことか、確かにそれでは如何な世界でもお前に敵う者はいないな。例え冥界チャンネルを閉じようとお前には関係ないのだから』

だからこそこうまで強気に出れる訳だ。

チャンネルを閉じようと閉じまいと勝てる要素があるなら慌てる必要などないのだから。

「なに言ってるんだ?俺が言いたい事はそんなことじゃないぞ?俺は神の意思で動いているわけでも魔の衝動で動いているわけでもないという事さ。善悪に囚われない者だといいたいんだ」

『……そうか、すまなかつたな』

「なんか調子狂うな。ま、ある意味では間違っていないけどな。だ

「からこそプレゼントできる物もあるんだし」

『なんのことだ？』

問いかけるもそれは後でな、と言って土偶羅へと向き直る。

「さて、そういうわけだから南極の到達不能極に行くぞ。あそこが一番コスモプロセッサーを使うに相応しいからな」

「な、何勝手に言っておるのだっ!？」

『構わん、土偶羅よ。横島のいう通りにするのだ……どうやらそれが一番のようだしな』

「アシユタロス様……了解いたしました」

そう言っ出て行く土偶羅。

それを見送ってこちらに向き直る横島。

「さて、今回協力するに当たってお前に要請する事が幾つかある。

全て聞いて貰うぞ？」

『構わんよ。このふざけた牢獄から抜け出せるならな』

「まず一つ、俺にも一度コスモプロセッサーを使わせて欲しいという事。これは俺の中に眠っている未来の俺を目覚めさせる為の準備を整えるのが目的だ」

『む、そのような事をしても良いのか？一つの存在に同時に二つは存在できんぞ？お前ほど強大なら暫らくは持つだろうがいずれはどちらか、若しくは両方が消滅するぞ？』

ましてや同じ存在が同じ体に二つ同時に宿るなど二重人格ぐらいしか不可能の筈だ。

「俺は別さ。俺は二重人格にならずに二つの意思を完璧な状態で保持する事ができるんだ」



「……本当に規格外だな（呆）」

「ほつとけ！二つ目、これはルシオラたちの意見も聞かないといけないが……彼女らに掛かっているコードの解除と寿命の延長、俺的には絶対叶えて欲しい事だけだな。うちにいるカオスに頼めば出来るが出来るならお前自身に解除して貰いたい」

「えっ！？私たち？」

「どういうことでちゅか？」

「……………」

「それぐらいは今すぐやっておこつ。寿命はコスモプロセッサの方が早いから後だな、ムンツ！」

「……………ッ！」

私の念を受けて三人に掛けていた裏切り防止策の監視ウィルスを消去する。

三人は戸惑いながらも事情が分かると私に向けて嬉しげに感謝の言葉を呟いていた……結局は私も同じ貉だったのかもしれない。

「ルシオラとパピリオは問題ないだろうけど……ベスパは違うだろうな、そうだろう？」

「……………どういうことだい？」

「お前のことだ、愛するアシユタロスと共に眠りたいか思っているんじゃないか？」

「……………」

「別にそれに対してとやかく言う気はないし人の意思を操れるなんて露ほどにも思っていないけどな……一度腹を割ってこいつと話し合ってみる、いいだろアシユタロス」

「……………ああ、勿論だ」

「そついうわけで俺たちは外に出るぞ？」

横島は他の者達を連れて外へと出て行った。

……思いやった行動なのかもしれないが、これではベスパが緊張して話せまいに（呆）

私は一時的に艦へと余剰のエネルギーを注入しておくとして衣服を纏い外へと出た。

……愛しき娘の思いを聞く為に。

S I D E O U T

## 第二十五章〈邂逅せしは愛の道化師と反逆の魔王〉(後書き)

次回で最終章です。

その後IF編へと続きます。

IF編のもう一つはめどが立っていませんが(汗)

次回投稿は8/21の0時です。

感想ご意見アンケート回答等お待ちしております。

最終章↳刹那の愛は永遠になりて（前書き）

最終章……… 始まります。

## 最終章 刹那の愛は永遠になりて

忠夫たちがベスパを残しコントロールルームに戻った後、ルシオラやパピリオは忠夫たちに様々な事を聞いた。

今までアシユタロス陣営の妨害をしていた事や事前に罪を負わなくてもいいように手を回したことなど、相槌を打ちつつもよく其処まで出来たものだと感じたものだった。

特に吸収した魔族や妖怪をいずれ復活させると聞いた時、パピリオはえらく喜んでいた。

自ら短命であつたゆえに思うところがあつたのだろう。

「一応アシユタロスの願いを叶えた後のルシオラたちの処遇だけど、特にお咎めとかはないから安心するといい。一部厄介な輩がいるけどそいつらはいずれ何とかするしな」

「……いいの？ 私たちがしようとした事はとても許されることじゃないと思うけど」

「文句なんか言わせないさ。キーヤんやサツちゃんにもそこら辺は認めさせているしな」

「……キーヤんにサツちゃんって（汗）」

「お兄ちゃんすごーい!？」

「ッ!？ お、お兄ちゃんって?」

忠夫はパピリオが言った言葉に硬直した……主に湧き上がる喜びで。パピリオは問いかけられていけなかったかと申し訳なさそうに謝ろうとした。

「あ、いや。嫌じゃないんだ、むしろ嬉しいよ。パピリオみたいな可愛い妹なら大歓迎だしな!」

「（パアアアッ!）ほ、本当?!」

「ああ、兄妹の契りでも結ぼうか？」

その後、デッキに出て太陽に向かってそれぞれの誓いを立て兄妹の契りを交わした二人はベスパが出てくるまで仲良くゲームステーションで楽しんだ。

その後ろではルシオラが今までにないほど明るく笑っているパピリオを見て微笑んでいる。

暫らくして、目を赤くしながらも何かを吹っ切ったベスパが出て来た。

「待たせたね……父さんと思いの限り話し合ってきたよ。横島？父さんが呼んでいたよ」

「分かった……お疲れさん」

忠夫はベスパの肩を軽く叩くとアシュタロスの元へと赴いた。

「……お疲れさん、か。確かに疲れたね……生まれて間もないけど、多分あれだけ涙流す事はもうないだろうね」

「ベスパ……大丈夫？」

「ベスパちゃん、目が真っ赤でちゅよ？」

「……大丈夫さ、失恋しちゃったけどね」

無理をした笑いではないけれど、力の籠っていないその笑みは儚さと美しさを彩っていた。

それはきつと恋をし愛を感じたベスパだったからかもしれない。

SIDE 忠夫

「……アシュタロス、どうしたんだその顔は？（笑）」

「……分かってて聞いているだろう、君（怒）」

俺は部屋に入ってアシユタロスの顔を見た瞬間、吹きそうになった。何せあの顔にくつきり紅葉を咲かせていたからだ。

俺は何とか笑いを堪えつつもあえてそれを尋ねた結果、あいつは憮然とした表情で返答した。

……結局、俺は笑いの衝動を抑えきれず腹を抱えながら転げまわったが。

「……さて、それで何が聞きたいんだ？」

「……思いつきり笑ったな（怒）」

「いいじゃねえか、相応の罰さ。可愛い娘を悲しませた、な……だからこそあえて受けたんだろ？」

「……そうだがね」

「で？」

「君は先ほど言葉で私の未来を大まかに知らせたわけだが、文珠を使って知らせた方が早かったのではないかね？」

「ああ、俺としてはそれでも良かったんだがな。文珠での記憶の開陳は皆に禁じられている、精神が引き釣り込まれてしまうからな……」

……今ならある程度は平気なんだけど」

さっきの時も文珠でやろうとしたら三人からきつい視線が飛んできたんだよな（汗）

「なるほどな……余程酷い未来みたいだね」

「ん〜、一部の馬鹿の行いを除けばそうでもなかったけどな。35

才の時……… 実質は圧縮された時間の中で生きていたから5000才以上だけど……… 馬鹿でくそつたれな神魔上層部の暴走を食い止めた結果死ぬまではほぼ平和だったしな」

「神魔上層部の暴走？……… 過激派が何かしたのかね？」

アシユタロスは怪訝な顔で聞いてきた。

まあ、自分が為そうとしていた事が為された後の世界でそんな事が起こると思ってもいなかったのだろう。

普通あれだけの事が起これば世界の安定維持に追われ暴走などとしていられない筈なのだ。

俺は事の詳細を話した……結果、アシユタロスは米神を押さえて呻いた。

「……まさかそんな馬鹿なことを仕出かすとはな、しかも元を辿れば逆恨みか」

「ああ、俺は基本未来で敵だったやつらでもそれほど憎んだりはしてねえけど、あいつらだけは別だ。明確な殺意を持って甚振りたいたいと思っているよ」

「……だろうね。しかもそれはいずれ実行するのだろうか？」

「ふん、当然だ！あんな輩は害悪にしかならねえからな」

「それを聞いて安心したよ。人を滅ぼす云々だけならともかく、美しいこの星を滅ぼしかねないような事をする輩は許せないからね」

「……お前も未来では最後に理性を捨てて魔体を持って地球を蹂躞しようとしたけどな？その行動理念はともかく」

「ぐっ？！……ま、まあ、追い詰められた者がすることなど似たり寄ったりと言う事だろう」

冷や汗を掻きつつ誤魔化すように言うアシユタロスをジト目で見ながら俺は大戦の詳細を語る事に決めた。

意味のないことかもしれないが、やはりルシオラのことは知って貰いたかった……親として。

アシユタロスは俺の瞳が何かを決意した事に気づき態度を改めると聞く姿勢になった……故に語った、ルシオラの行動を。

「……そうか、ルシオラが。……やはりあのような物で心までは押さえきれないという事か。いや、私自身魂の牢獄という物に囚われ



ながらも反抗を決意した事を考えると当然の帰結なのかもしれんな」

自嘲しながら呟く魔神。

其処に響く未来のルシオラの声。

私は私の意思に従い行動したのです。アシユ様が自身を蔑む必要はありません

「…………ツ!?まさか、未来のルシオラなのか?」

突然響いた声に驚くアシユタロス。

そしてそれに答えるように実体化する<sup>ルシオラ</sup>蜚。

「はい、未来のルシオラです……今は蜚と名乗っていますが。貴方に反旗を翻し惚れた男につき計画を瓦解させる要因の一つになった親不孝な娘です」

「…………ふ。気にする事はない未来の娘よ、むしろ誇らしい気分だ。

絶対的な暴力を魂の輝きで覆したお前は私の自慢だよ」

「…………アシユ様、ありがとうございます」

穏やかに会話する親子に俺は心底現状を嬉しく思った。

確かに未来では碌でもない目に合ったりしたが、この光景を見れただけでもその甲斐はあったと思えた。

「ところで君はうちのルシオラと会わないのかね?」

「知ってのとおり私はヨコシマの恋人です。だからと言ってあの子がそれに引き摺られて此方のタダオに恋するのだけは止めて欲しいので」

「俺もそんな事情で恋されても嬉しくねえしな」

「なるほどね、なら私も黙っていよう」

「ああ、頼む。あ、それとな向こうに着いてからになるがさっき言

ついていたプレゼントをお前に贈るよ」

「そういえば言っていたな……一体何をくれると言っただね？」

「それは秘密さ。気に入るかどうかは分かんが、まあ憂さ晴らしぐらいはできるんじゃないか？（笑）」

「……ふむ、では期待して待とう」

その後、俺はルシオラたちにせめて最初で最後の家族の団欒を過ごさせるべくアシュタロスを皆の前に押し歩いていった。

……戸惑ったり、どうすればいいか分からず混乱するアシュタロスを見て俺は遠慮なく笑ってやった。

もともとその後、取っ組み合いになって玉藻たちに揃って説教されてしまったが（汗）

「間も無く目的地に着きます！」

「どうやら障害は無い様だな……ま、今こんな事になっているとは向こうも気付いていないだろうけど」

少なからず未来のように艦隊が秘かに集結しているかもと危惧していたがそれはなかった。

しかしそれは違う意味で否定された……玉藻によって。

「そんな事はないわよ？少なくとも世界中で現在貴方が魔神アシュタロスと戦っている事は知らされている筈だから」

「いつ?!」

「百合子さんがザンスの国王陛下と共謀して世界に認識させたのよ、貴方と横島家の在り方を。この後の平穩の為にね……あの者もそれは聞いている筈だから」

「そういうことか、確かにそれじゃあ下手な行動はできんよな」

「それにこれなら向こうも自然と集まりを解散するでしょう？美智恵の処遇がどうなるかは分からないけど……そこら辺が懸案事項か

しら？」

確かに、追い詰められたあいつがどういう行動に出るか……未来のような行動だけはして欲しくないんだがな。

最後らへんでは旦那さんと思いき人すら利用していたからなあ……業の深いことだ。

「到着しました、南極到達不能極です。アシユタロス様」

「うむ、では行こうか」

「ああ」

ま、此処まで来たら美神云々はもう関係ないことだしいいか……仮にこれ以降動きがあるなら余程の愚か者だしな。

俺は思考を打ち切りこれからの作業の為に力を練り上げ始めた。

S I D E O U T

忠夫たちはアシユタロスの先導の下、バベルの塔深部にある吹き抜けの広間に来ていた。

既に土偶羅魔具羅は宇宙処理装置の基盤に組み込まれている。

そして皆が見守る中忠夫は右肩から外した龍珠を最大霊圧で作りに出した双文珠でもって 強/化 した。

ちなみに肩は龍珠を外すと同時に普通の肩に変わっている。

「ほれ、これで一回限りだがコスモプロセッサーを使えるぞ。間違った使い方だ誤れば最低でも一週間は待たんと次の龍珠は作り出せんから注意しろよ？」

「うむ、すまん。……というか一週間でこれほどの物を作れるのか(汗)」

「中身を考慮しなければな、完全な物を作ろうと思ったら一月は掛

かる」

「……大して変わらんとと思うが、まあいい。土偶羅！宇宙処理装置  
起動！！」

「了解！！」

「……そういえばこの空間で起動して周りが崩れないか？」

「心配は要らないよ、この空間は歪曲しているからね……実際の空間は見た目より巨大だ」

起動したところでふと気になったことを聞いた忠夫だがその心配は杞憂だった。

そして完成する宇宙処理装置。

「さて、それではどうするのが一番かな？」

「ん？魂の結晶を此処にはいかんか？……美神よびごんの 令子も来てしま  
うか？」

「……おそらく大丈夫の筈だ。しかし仮に来てしまった場合はどう  
する？」

「その時は眠らせて俺がフォローするからお前が抜き取ればいい。

その後速攻で送り返せば問題……ないよな？」

「それで行くか……よし！コスモプロセッサーよ、魂の結晶を此処  
に！！」

ヴァアン！！

SIDE 令子

私たちは報道から暫らく経った今も混沌とした中にいた。

何せあの後政府の高官達や軍部の統括官などが押し寄せてきたから  
だ。

話を聞くにママが裏で取引をし、魔神との決戦の為戦力と強権を無  
理して集めていたらしい。

しかしそれも先の報道で魔神の事自体は真実だったが、他の要因で無用になったのだ。

こうなるとママの指示の元無理をして戦力を集めたり権力を与えた事が無意味になってくる。

当然体面を気にしたり責任や義務を背負うのが嫌いな日本の政府はママに当たる事になった。

軍の者たちにしても職務の種類ゆえに体面は気になることだし、無意味な行動は税金の無駄遣いと叩かれる事となる……今回の状況は周りも分かっているのですこまで叩かれなくてもいいが。

少しでも事態を明確化する為にママを表に出し対処するしかない。

そしてそれに答える筈のママは見事に煤けていた。

どうにも政府の高官が言うには美神の者にしか今回の事には対処できないと言っただけ。

それまでに未来の情報で先回りし信頼を得ることとそれを信じさせたようだけど……流石にそれは無理がありすぎると思っただけ。

「ま、私を守る為に無理をしたんだろうから私にとやかく言えることではないけど……」

煤けながらも対応するママを見ながら呟いた私だが、突然体が……

正確には胸元が……光りだした。

あわを食う私とそれを見て焦ったように此方に駆け寄るママ、突然の事態に腰を抜かす情けない高官たち。

事態は刻一刻と進むなか、私は胸から何かが抜き取られるような感覚を受けた。

「な、何これ?! 胸が焼けるような……何かが抜き取られるようなっ!」

「れ、令子ッ?!」

光が一層強くなった次の瞬間、私は気を失っていた……何がプツリと切れてしまったような痛みを感じながら。

S I D E O U T

S I D E アシユタロス

鍵盤を叩き実行命令を入力した後、十数秒後に結晶は我が手に現れた。

通常ならすぐさま現れる筈なのだが、何かあったのだろうか？

「随分……というほどでもないが、取り寄せに時間が掛かったな？」

「そりゃ、あの美神が係わっているからな……言っておくがあれを普通の人間と思わん方がいいぞ？何せ未来では魂が消滅したと思われる後もしつこく残留してコスモプロセッサを逆操作して甦ったぐらいだからな」

「……本当に人間か？（大汗）」

私のふとした疑問に答えてくれる横島。

しかしその答えはとんでもない物だった。

なるほど、横島が引き寄せてしまうかもしれない事を警戒する筈だ……そんな人物が此処に来てしまえばどんなイレギュラーが起こるか想像も付かないからな。

私は結晶を装置に組み込みながらも冷や汗を掻いていた。

「あれはもうメフィストだとかそういう次元の存在ではないぞ？俺にしたところでこれだけの力を得ても係わりたくない部類だからな（汗）」

「そのようだね（汗）……よし、これでいい。まずは君から願いを叶えたまえ……私としても未来の君とは一度語り合いたい」

「分かった。それじゃあ入力してくれ、俺の存在強度を今の倍にす

るように……今の俺に足りないのはそれだけだからな、時間が惜しいからこれで代用する」

「分かった……コスモプロセッサーよ、横島 忠夫の存在強度を倍にせよ！！」

バアアン！！

入力と同時に光りだす横島。  
直ぐ効力を発揮したところを見ると問題は無い様だな。

「……………ッ、ふう、ん……………十分だな。これなら太極天の意識を解放しても無問題だ、心眼！最終封印を解除してくれ！俺は深層意識下で太極天と少しばかり話をしてくる」

『了解した！』

……………暫らくした後、意識下から舞い戻ってきた横島は此方を向きにやりと笑った。

『久しぶりって言うのは可笑しいか……………始めまして、俺が未来の横島 忠夫。後に太極天を名乗ったお前を打ち滅ぼし者だよ』

「……………やはり少しばかり違うな、先ほどの横島とは重圧が断然違う」  
『そりゃ今はまだ俺の方が経験値が高いからな……………もっとも俺は今後余り表に出るつもりはないけど』

「未来の私はどうだったか聞いていいかな？実際に戦った君に聞きたい」

『戦いって呼べる物ではなかったけどなあ（汗）……………未来のお前は怒りと悲しみと遣る瀬無さに身を焦がしながらも表面には出さず出向いてきた。もっともいざ戦いの時になると色々引っ掻き回されてぶち切れて虚仮にされて……………最後は全ての感情すら捨てて魔体と同化し散っていった』

「……………。道化か、確かにそうだな。何万年何億年の思いも一つの意思に反しただけで呆気なく汚されてしまつとは…………惨めなものだ」

心がささくれるのは随分前からあることだが、今感じているこれはそれらとは桁が違うな。

結局は全て宇宙意思の下管理されるという事なのだろうな…………我々は。

「…………ん？分かった、アシユタロス！なんかお前にプレゼントがあるみたいだぞ」

そう言った太極天は一瞬目を閉じ横島に代わった。

「……………そういえば言っていたな、憂さが晴らせるとか？」

「ああ、晴らせるぜ……………所詮代理だけだな。そういうわけだから、今からその準備をするよ」

横島はそう言つと懐から出した蛸ルシオラの変化した龍珠に語りかけた。

「そういうわけだからやるぞ？」

いつでもいいわよ！

「同ノ期 合ノ体 ……！」

「…………ツ！これは力の完全同期かつ！？しかしこのレベルでするということとはッ！」

二人がすることに気付いた私は戦慄した。

ただでさえ超絶的なマイト数を誇る二人が力を同期するということは想像を絶する事だからだ。

本来このレベルでは不可能な事だが彼ら二人で行つ上では問題ない



のであろう。

少なくとも三界全てを敵に回しても完全勝利を手中に収めることができる筈だ……世界の力量限界があるし制限時間もあるから実際には無理かもしれないが。

そして横島が光り輝き弾けた後……其処には世にも美しい存在が降臨していた。

「……素晴らしい！何と言う美しさだ……これが愛のなせる御業かッ……！」

「なんて波動だい……？それにしても余り威圧感を感じないけど？」

「忠夫は力の制御が大の得意だからね……こっちにプレッシャーをかけないように調整しているんですよ」

文珠と同じ色合いの髪を靡かせ、白と黒の見事な調和で成り立った衣を纏い、額に心眼を見開き髪と同じく文珠色の瞳を開いた横島は此方を見た。

瞬間、全てを投げ出し平伏してしまいそうになるほどその視線は強烈だった。

もつともそれに気付いたのか若干視線に籠る力を緩めたようだが……とんでもないな。

「待たせたな……それじゃあプレゼントというほどの物でもないけど。あ、皆は俺の後ろに来てくれ余波で吹き飛ばかもしれないからな」

横島は他の者を自身の後ろに移動させると上空を見詰め言葉を発した。

「見てるんだろ？ 来い……！」

その絶対無比な言霊が発せられた瞬間、私の前に二柱の存在が腰を抜かして存在していた。

この者たちは……ま、まさか。

『よ、よこつち酷いで！いきなりこんな乱暴な呼び方するなんて！』  
『？』

『そ、そうですよ！此方にも準備という物が！？』

「五月蠅い、黙れ」

『ひい』

「さつきからのそつちの状況は把握済みなんだ、言い訳はするな」

『は、はい…』

こ、これが最高指導者の長の姿か（汗）

た、確かにこの威圧を直接受けては反抗しようもないだろうが……  
な、情けなすぎる。

「ね、ねえ、あれってもしかして」

「ルシオラさんの思っているとおりの存在よ……私的にはどうでもいい存在だけどね」

「じゃ、じゃあやっぱり……横島って一体（汗）」

「未来での対応の仕方が気に入らなかつたから今回此処でけじめをつけさせるんだってさ……実質あいつ等には叱る存在がないも同然だからな、今回の件はいいお灸になるさね（笑）」

「お兄ちゃんすっごーい！！」

「そうですよ、忠夫様は凄いです！」

ルシオラたちも驚いているな……しかし横島の連れは皆凄まじい胆力を持っているね（汗）

「んじゃ、煮るなり焼くなり好きにするといいよ。こいつらも 承  
諾済み だから」

「ちよ、其処までは認めてへんで?!」

「そ、そうですね?! そんな事したら珠のお肌に傷が出来るじゃないですか!」

「……キーやん、キモイ」

「ひどっ?!」

「……いや、よしておこう。こんな情けない姿を見ただけでも十分だ、触つて感染したくはないしな」

「こっちもひどっ?!」

暫しの間、横島と二人で言葉攻めにした後二柱の額に「覗き魔」と書いて送り返した……ああ、胸が透く思いだ。

ちなみに二柱は暫らくの間目が死んだ魚のようになっていたとか。

「まあ、あれは余禄だ。本当のプレゼントはこっち……我が最たる力よ、今此処に顕現せよ!! 座ノ交ノ換 !!!」

「?!?!?!」

ひたっていた私に横島が左肩から外した巴模様の珠を押し付ける……

…瞬間、私が内側から懐かしい何かが甦ってくる感じがした。

そしてその感覚は光の洪水が私を飲み込む事で最高潮に達した。

シヤラン!

そんな音が聞こえた。

眩しい光も収まったようなので目を見開くと横島の背後にいた者たちが口を大きく開けて目を見開いていた。

不思議に思い横島に視線を移すと彼は双文珠を使い大きな鏡を作り出した。

「見てみな今の自分の姿を……それが本当のプレゼントさ」  
「?……ッ?!こ、これは!?!」

鏡を覗き込み自身の姿に驚き、挙げた驚きの声に再度驚いた。  
そこには遙か昔になくした女神だった頃の自分が写っていた……女神・イシュタルの姿が。

「……な、何故このようなことを？」

「お前が永遠の醒めない眠りに就くといっても悪を云われる姿で永遠に眠るのもどうかと思ってな」

「し、しかしこの溢れる神気、これではバランスが崩れるのでは？」

「それも大丈夫、ナタナエル様はさつきキーやんに渡した幾つかの双文珠でお前と連結していたから既に魔族に転化しているよ……事前に承諾して貰っていたしな」

「しかし神界などで魔族に転化すればかなり苦しむのでは？熾天使が墮天するのはその際たるものの筈だが」

自身が座天使だった時に墮天した時の想像を絶する痛みを思い出し顔面蒼白になる。

しかしそれすら覆された。

「そこら辺はサツちゃんが最高威力の双文珠でフォローしているよ。その為にさつき呼んだんだし」

「……………」  
「だからお前は美しき女神として永久に眠るといい……ま、もし何らかの作用で目が覚めたとしてもその時にはもっとマシな世界にしておくさ」

そういつてニカツと笑う横島はひどく印象的だった。

と、其処に響く弱々しい声。

タダオ、そろそろ限界、

「ルシオラ!? しまった時間を掛けすぎたかつ!?」

「えっ? 私?」

突然光りだした横島は光が収まると<sup>ルシオラ</sup>蚩を排出していた。

「なっ?! わ、私?!」

「ル、ルシオラが二人?!」

「ルシオラちゃんが分裂したでちゅ!?」

『あちゃー』

驚くルシオラたちと天を仰ぐ横島の仲間達。

そして合体が解除された状態で固まる横島たち。

最初に動いたのは当然ルシオラだった。

「ちょ、ちよつと貴女誰? 私と同じ姿してい……るけ……ど?」

「え〜と……? ど、どうしたの?」

ある一点を見詰めて固まるルシオラ。

ある一点……蚩の胸部を。

「……ねえ、貴女」 < > >

「ひゃ、ひゃい!」

「なに? そのふざけた胸は……私と同じ顔をしながらなんで其処まで自己主張が激しいのかしら?」 < > >

「ちょ、い、痛い痛い!? 掴まないでえー!」

「あー、あれはルシオラちゃんじゃないでちゅね。ルシオラちゃんがあんな大きな胸をしている筈がないでちゅから」

「パ、パピリオ……なんて命知らずな（汗）」

蛍の胸を掴んで引つ張っていたルシオラはパピリオの言葉に表情を無くすと音もなく彼女の背後に忍び寄り……拳骨を落とした。

「  
ツ?!?!?!」

突然の強烈な痛みに悶えるパピリオを他所に蛍へと振り返ったルシオラが問いかけた。

「貴女は未来の私ね？」

「え、ええ（怯）正しくは太極天がいた時間軸のルシオラね……今は蛍と名乗っているわ」

「……その胸の事も気になるけど、貴女は何故今まで姿を見せなかったの？」

「私がヨコシマ……太極天の恋人だからよ。貴女がタダオに惚れるかは貴女の意味次第だけど、少しでも私の影響を受けて欲しくなかったからね」

「……………」  
「下つ端魔族は惚れやすい……私が未来で言った言葉よ」

「……………」  
「ツ！そうね、確かにそうだね……確認なんだけど、貴女はこの時間軸のヨコシマに愛情を持っているの？」

「ええ、持っているわ。無論タダオに宿っているヨコシマも同時にね」

「……………」  
「欲張りなのね」

「ふっ、私は世界に反旗を翻した魔神の娘よ？欲望には忠実であるようにしているわ」

「ふふふふふふ」

「ふふふふふふ」

『ふふふふふふ』

……………(汗)

我が娘ながら、よく分からない恐怖を感じるね(汗)

「おい、アシユタロス(汗)あれどうにかしろよ、いつまで経っても作業が進まないぞ?」

「君が止めればいいではないか。君の恋人なんだから?」

「あんなこえー所に首を突っ込めるかつ!?!」

「私だつて怖いものはあるッ!」

「威張つてゆーな!」

「きみこそっ!」

不毛な言い合いはルシオラが此方に声を掛けてくるまで続いた。

「あのー、アシユ様?」

「む?どうしたのだルシオラ?」

「そろそろ作業を進めた方がいいのでは?」

「ふむ、そうだな。……君の方は良いのかい?」

「はい!私は私ですから!遠慮なくアタックさせてもらいます!」

「だそうだよ?」

「……それでいいのか?俺はもう複数の恋人を持っているぞ?」

「あそこにいる人たちよね?」

「ああ、玉藻にメドーサに小竜姫……そして其処にいる蜚だ」

「だったら問題ないわ!私は誰にも負けるつもりはないから!」

「……やっぱおっかねーな、魔神の娘さんは(汗)」

「……それは同感だ(汗)」

その後、ルシオラたちの寿命も枷を解除した……結果パワーは下がったが、これで少なくとも数千年は軽く生きられるだろう。

それ以上生きるのなら横島の眷属なりになれば問題ないだろうしな。

「……いよいよだな。永かった、やっと眠りにつけるのだな」

「おめでとう御座います、アシユタロス様！この土偶羅これまでお仕え出来て大変光栄でした！」

「うむ、これまですまなかつたな……理不尽な思いをさせた時もあったが、これからも息災でな」

「ははあ！」

「アシユ様、おめでとう御座います！」

「アシユ様、おめでとうでちゅ！」

「ああ、ありがとう娘達よ……私の都合で悲しい思いをさせてすまなかつた、これから幸せにな」

『はい（でちゅ）！』

土偶羅とルシオラとパピリオが願いの成熟を祝ってくれた……これまで理不尽な事もしてきた主だというのに良く仕えてくれたものだ。

そしてその後ろから出てくるベスパ。

その瞳は先ほどの悲しみに暮れる色合いではなく、透き通った美しい眼差しだった。

「……我が造物主、アシユタロス様。これまでの永きに渡る苦しみの旅、ご苦労様でした。どうか安らかにお眠り下さい」

「……ああ、ベスパ。我が最愛の娘よ……私を愛してくれてありがとう、私も愛しているよ」

「ッ、はい、アシユ様！私も愛しています！」

涙を流しながらもしつかり私を見詰めながら言葉を紡ぐベスパ。そしてルシオラの元へと戻る。

代わって出てくるのは横島……なぜか苦笑している？



「どうでもいいけどよ、結局お前はアシュタロスで通したんだな……女神としての名は紡がないのか？」

「……横島よ、どうかそれはお前が紡いでくれ。永久の眠りに誘う命令と共に」

「……。分かった、その大任引き受けよう……。我が友よ！」

「！……。ありがとう、たった一人の友よ」

私に向かって友と言った横島はコスモプロセッサの前へと歩いていった。

その歩みは緩やかだが、一步一步確かに刻んでいった。

「……遙か遠い地で刹那の時を過ごした恋人達がいた。彼らは自らの不運に飲まれながらも、決して諦めず戦い愛を勝ち取った」

玉藻とルシオラが私の右側で跪いた。

「愚かな者たちの暗躍で死に見舞われながらも護るべき物は護り、更なる未来を世界に刻む為に彼は自身の全てをこの地へと送った……願いと祈りを籠めて」

メドーサとベスパが私の左側で跪いた。

「その祈りは世界を更なる平穏へと導き、願いは祝福を齎した。そしていま、此処に豊穡を司る美しき女神が永久の眠りに入る……世界を愛し、悪を憎んだ彼女に祝福あれ」

小竜姫とパピリオが私の後ろで跪いた。

そして再び蛍が横島と同期する！

「魔神アシュタロスの魂より生み出されしコスモプロセッサよ

！女神イシユタル及び魔神ナタナエルに永久の眠りと安らぎを与え  
たまえ！！！」

紡がれる私の名……アシユタロスとなってより封じられてきた我が  
真名。

そしてこの身に注がれる安らぎの波動と眠りの気配。

「……………おやすみ、またいつか会おう」  
「ああ」

閉じゆくまなこに最後に映ったのは微笑む横島だった。

……汝行く道に祝福あれ。

S I D E O U T

S I D E 忠夫

安らかな表情で消えた女神イシユタル……この名はこれからも紡が  
れる事はないだろう、だけどそれでいいのかもしれない。

俺は双文珠に 消/滅 と刻んだ。

其処にかかる玉藻の声。

「ね、ねえ、忠夫？これであれの行動を阻止できないかな？」

「……………出来るだろうさ、けどしないよ。これはあくまであいつが命  
懸けで生み出した物なんだ。人界の瑣末な事に活用していいもので  
はないさ」

「……………そっか。そうだね」

「……………土偶羅、其処から出ないとお前まで消えちまうぞ？」

「ちよ、ちよっと待ったー！？出る、出るからもう少し待てー！」

「締まらない奴だねえ」

土偶羅が出たのを確認した後、俺は結晶だけを抜き取りコスモプロセッサーを消滅させた。

そして続けざまに皆を伴って外へと転移する俺。

その一瞬後、崩れ去るバベルの塔……俺というあいつに代わる支柱が無くなつた結果だ。

「忠夫様？その結晶はどうするのですか？」

「ん？こいつか？こいつはこうするんだ！ 魂たちよ！安らぎの彼方へと旅立て！！」

言霊の力を受け結晶はその結び付きを解かれていき空へとかえっていく。

俺はそれを眺め見送つたあと皆に向き直つた。

「さて、それじゃあ妙神山へと帰るとするか！ルシオラたちも来いよ？今後の説明をしたり希望も聞かないといけないからな」

「ええ、分かっているわ」

俺たちは逆天号をミニマムサイズにすると双文珠で転移した。

その後の事で語ることはそれほど多くはない。

元より決められていたこと故にルシオラたちは特に罪を問われる事はなく揃って妙神山でデタント推進の一環として生活している……三姉妹揃つてだ（もっともルシオラは俺と一緒にいる時間の方が多いが）。

ベスパもどうやらアシユタロスに思いの丈をぶつけきつた事で姉妹との絆を大切にすることにしたい。

その中でベスパはワルキューレとパピリオは天竜と友好を結んだ。

事務所は俺が予想したとおり九琉が取り仕切る事になった。

エミ姉さんは母さんの後継として日夜勉強に精を出している……た

まに外に出では笛を吹き清らかな音色を響かせていたりもする。  
カオスとマリア・テレサは今も変わらず横島家にいる。

もつとも研究は気が向いたらという程度で日頃は邸宅の住人の悩みなどを聞いて相談に乗っている。

雪之丞たち三人とおキ又ちゃんと愛子・小鳩は事務所で働いている  
……学校にGSに一生懸命だ。

タイガーや鬼道は夢を叶える為日々人との触れ合いを大切にしつつ  
勉強を頑張っている。

母さん達はこれまでよりかは緩やかに世界を見守りつつ行動している。

気になる美神 美智恵はというと、六道家と同じ苦行を受けていた  
りする……そのレベルは段違いだが。

オカルトGメンは西条と令子に任せ、美智恵は老師の特殊空間で拘  
束無期限で修行をさせられている。

令子は未だ問題行動はあるものの唐巢神父が矯正係を名乗り出た事  
で人界に留まる事になった。

もつとも、だからと言って楽な修行ではないが。

美神家に踊らされた日本政府及び軍関係者は軒並み更迭され一時期  
は経済にまで影響を及ぼしたが今は平和なものだ……今回外国に影  
響を及ぼした故の賠償金問題は未だ健在だが。

そして俺と俺の恋人達はというと……異世界を旅していたりする。

発端は恋人達の希望が始まりだった。

嘗て太極天が異世界で見聞の旅をしていたのを思い出した皆は自分  
達もしようという結論になりこうして世界を周っている。

もつとも俺自身どこかにいるであろう未来の眷属たちを探す為にも  
予定していたのだが。

「……ふう、今日も無事過ごせたな、世は事もなし。いいことだ」

「な〜に黄昏ているのよ、夕ご飯できたから下りてきなさいよ」  
「ん〜分かった! ……夕焼けだわ」

逆天号のデッキで空を眺めていた俺と蛭はルシオラに呼ばれて下に降りようとした。

その時目に入る真っ赤な夕焼け。

「昼と夜のすきま……短い間しか見れないけど、きれい……か」  
「されど日はまた昇る、刹那の時間は永久に続き……真実の愛は永遠、形は変われど思いは永久に紡がれる」

「タダオ……その言葉」

「……蛭、これからもよろしくな!」

「……ええ、こちらこそよタダオ!」

こうして刹那の愛の記憶は永久の調べへと紡がれていった。

**最終章↳刹那の愛は永遠になりて（後書き）**

とりあえず完結です。

締めが緩いのはいつもの事と言う事で（汗）

感想ご意見お待ちしております。

次回I F 編

投稿日8 / 24の0時です。

その?…ああ、蛭とまつ（前書き）

IF編です。

かなり可笑しな事になっていきますのでご注意を……何に気をつけたらいいか判断つきませんが（えー  
それではどうぞ。

その？…ああ、蛭さまっ

妙神山最奥の神殿、その中心で一人の女性が両手を地面に着いて頂垂れていた。

周りには妙神山関係者、及び横島家関係者は困惑しながらも彼女を見詰めていた。

女性……蛭は暫らくすると何かを諦めたかのようにのそつと起き上がった。

「……封印は完全に解けたよ」

ぼそつと呟かれた言葉を理解した老師が怪訝な顔をする……ならば何故そんな顔をするのかと。

それに気付いた蛭だが、彼女はその煌びやかな色合いになった御髪をへたらせながらもう一度呟いた。

「……ルシオラの復活準備も整ったよ」

その言葉を聞いた老師は更に困惑を深めた……いい事ではないのかと。

そんな老師を含めた皆に蛭はぼそぼそと説明を開始した。

なんでも封印を解くと同時に肩にある龍珠へとルシオラの因子を移動させ浮かび上がってくる意識も同様にしたそうだ。

そしてそれは成功した。

今はまだ顕現するだけの力が溜まっていないから出てこれないが蛭がチャクラを解放したら同時に降臨するとの事。

そんな説明をされた。

『……？何が失敗したんじゃない？見た所なんも問題ないようじゃが』



その老師の言葉に皆が一斉に頷く……否、玉藻だけは何か気付いたのか額に手を当て天を仰いでいる。

「……そういう事、なのね？確かにそれなら頂垂れるのにも納得できるわ」

『え？玉藻は理解できたのかい?!』

「私は蛍の恋人よ？これぐらい理解できないとねえ〜?」

驚くメドーサに挑発するように微笑んで言う玉藻。

それを受けて直ぐにむっとするメドーサ。

玉藻はそんなメドーサを放って蛍に近づくとその両手を包み込んだ。

「……ルシオラさんの因子の影響が貴女自身の因子にまで出ていたのね？それ自体は嬉しいことだけど……それによってやろうとした事が不可能になったのね？」

「……玉藻は分かるんだ？」

「そりゃ、私は貴女の伴侶よ？これぐらい気付くわ……私は気にしないって言っても駄目かしら？」

「……でもさあ、女同士だよ？」

「くすっ、それこそ今更よね？今までしてきた事を思えば、ね？」

玉藻の艶を含んだ言葉にこれ以上無いほど赤面する蛍。

一方、今の言葉でやっと理解したメドーサが近づき声を掛ける。

『なるほどねえ、確かにそれなら貴女が茫然自失になるのも分かるつてもんだね。でも気にしなくていいじゃない……少なくとも貴女の恋人はそんな事ぐらい気にしないわよ?』

「メド……」

『玉藻じゃないけど……確かに今更だしねえ』

「あう」

此処で殆どの者が状況を理解できたようだ。

そう、蛍はこの開封を機に男性体へと戻ろうとしたのだ……が、結果は見ての通り。

太極天の様相をしてはいるものの逆にそれがより女性らしさを強調することになってしまっていた。

ルシオラの因子が抜け出た為なのかより丸みを帯びた姿態は女である玉藻達から見ても魅力的だった。

「……という事は忠夫に戻る気だったのかい？」

「……で、もう戻る機会は一生涯無いと？」

状況を整理する皆の中で百合子と大樹が何やら呟いていた。

しかし次の瞬間二人は喜びを露わにした。

「じゃあ！これからも娘として可愛く着飾ることが出来るのね?!  
でかしたわルシオラさん!!!」

「よっしゃあああつ!!!永遠の愛娘ゲツチュウウツ!!!ヒヤハア

ツ!!!!!!」

これでもかとはしゃぎながら大喜びする二人に周りはドン引きである。

蛍に至っては再度項垂れていた。

「……………orz」

「ああ、蛍すっかりしてっ！」

『……………難儀なものだねえ』

とりあえず玉藻に慰められ何とか立ち直った蛍が未だ暴走していた

両親を強制的に黙らせてその場を鎮めた。  
それから暫らく経ってルシオラの意識が表に出てきた時一悶着起こったがどうにか落ち着いた……互いに精神的ダメージを負ってだが。

ただ蛭は太極天の意識にも同じ苦しみを与えてやるうか、などと黒い事を考えていた。

さて、こうして今後も女性体として過ごすことになった蛭だがその精神に影響が無かったわけではない。

何せずと男に戻る機会を心待ちにしていただけにその反動は凄まじい物だった。

基本的な心の在り様や恋人達に対する接し方などは変わらなかったが、周りに対する態度は一つの方角転換が起こっていた。

此処で幾つか例を出そう。

まずこれから語るのは犬飼が遁走した後、犬塚によって呼び出された蛭が合流した時のことだ。

ケース1：フェンリルの場合

「犬塚！無事っ！？」

「ッ！蛭様！」

急いで文珠の使用痕跡にテレポートした蛭はその目に飛び込んできた犬塚に無事を確認した。

急に湧き上がった気配に振り向く犬塚の目に映るのは以前より更に女性らしさが増した蛭の姿。

一瞬見惚れるも直ぐに気を取り直して跪く犬塚。

それは傍にいた長老や里人も同じだった。

今の蛭にはそうさせる何かがあったからなのだが。

「犬塚、犬飼はどういう状態なの？」

「は、手傷を負わせはしましたが未だ健在です」

目の前に跪く二人に然して疑問を浮かべず状況を聞きだす蛭。

「ふむ……ん？なんで里の者が出てきているの？」

「拙者らの剣戟に気付いて出てきたようなのです」

ふと周りを見た蛭が周囲にいる人狼たちに違和感を持った。

いや、それ自体はいい……しかし、何か違和感を感じるのだ。

そしてその正体に気付く蛭。

「ッ！シロはどうしたの！？」

「シロなら家で寝ておりますが？」

「馬鹿者！シロの性格を考えなさいっ！正義感の強いシロが逃げた犬飼を放つて置く筈ないでしょうがっ！？」

「ッ？！まさか」

蛭の言を受け確認しに行く犬塚。

しかし、其処にはシロの姿を確認する事は出来なかった。

「ッ？！そ、そんな」

「仕方ないわね……我が力今此処に顕現せよ！ 召ノ喚 白ノ狼  
！！」

一瞬の停滞もなく双文珠によってシロを強制召喚する蛭。

突然召喚された方のシロは目を白黒させながらも目の前にいる敬愛すべき蛭の姿に喜びの声をあげる。

しかし蛭はそれに取り合わず瞬時に双文珠を再度取り出しヒヤクメに声を掛ける。

「ヒヤクメ！犬飼は何処にいるのかしら？」  
『は、はい！えくと、あ、居ました！』

蛍はその瞬間ヒヤクメを伴い転移した。

そして場には呆然とした人狼達が残されるが、その数分後再び蛍が転移してきた……その手にボロ雑巾のような犬飼を引き摺って。

傍にいたヒヤクメは顔面蒼白の体だ……よっぼどの物を見たらしい。シロは蛍が為した事に気づき、喜びの声をあげかけるが……しかしそれは蛍の次の声によって遮られた。

「……シロ、お座りなさい」

「……ッ?!」

低く発せられた言葉に瞬時に従うシロ……見れば犬塚や長老達人狼そしてヒヤクメも同じ様になっていた。

「シロ、貴女は何を考えて犬飼を追ったのかしら？未だ満足に靈波刀も顕現できず幼い身のなりで……心配する家族の事を考えなかつたのかしら?ん？」

「あうあうあうあうあう」

降り掛かる蛍の重圧に真っ青になるシロ。

蛍はそんなシロを横に今度は同じくうるたえていた犬塚に声を掛ける。

「お前もよ、犬塚。親ならまず子の心配をしなさい、いくら刀の腕を挙げようとそんな様では何も護れないわよ？」

「ハ、ハハアツ!!」

「長老も、ただ群がるだけなら野良犬にも出来るわ。誇りある狼の末裔ならもつと群れを護れるように鍛え上げなさい」

「ご、御尤もですじゃ……申し訳御座いません」

次々に平伏させていく様は正に女帝である。

ヒヤクメは蛭が開けてはならない扉を開けてしまったのではと戦々恐々とした。

そんなヒヤクメに声を掛ける蛭。

「ヒヤクメ、この馬鹿を老師の元へと搬送しなさい。こつこつ馬鹿は徹底的に現実を見せてやるのが一番だからね……覚悟なさい、犬飼<sup>けん</sup>？ふふふふふ」

犬飼はボロ雑巾の体になりながらも何とか逃げ出そうとしていたが、最後の言葉に全ての抵抗を止めた。

……格が、存在が違いすぎる。

真っ青を通り越して真っ白になった犬飼はそう思いながらも思考を停止した。

ヒヤクメはその余りの支配者然とした姿に逆らう筈も無く、すぐさま転移していった。

これが蛭に起こった現象の一つだ。

男に戻れないという事実は蛭にこれ以上無いほど衝撃を与えたのは当然の事で、自身が男でもあるという事実は恋人達との逢瀬で維持しているが、それ以外では遺憾なく発揮された……覚醒した遺伝子の発露が。

そう、蛭の中にある偉大なる母・百合子の遺伝子と愛の為に生き造物主に反抗した蛭魔の因子の影響と世界中の信仰を一身に受けた太極天の本質が絶妙に混ざり合い蛭の中で一つの存在を爆誕させたのだ。

女帝モードと言うある意味最強の存在を。

このモードは普段は蛭の中で眠っており、仲間内では滅多に顕れない。

これが最初に発露したのは先にあげたフェンリルの件だ。

これを一部始終見てしまったヒヤクメは以後蛭の機嫌を損ねないように尽力したとか。

当然肉体で持つて受けた犬飼は以後、訓練された番犬のように大人しくなったとか。

人狼族は蛭を絶対神として祭るようになったとか。

とにかくとんでもない存在感を誇る状態である。

さて、フェンリルの件を圧倒的スピードで解決した蛭は続けざまにデミアンの件も収束させた。

この件では先ほどのようなことは無くデミアンの魔核を摂取し美神美智恵を挑発する程度で終わった。

もっともその時あの支配者然とした底冷えする視線をただ一人一人身に浴びた美智恵は冷や汗が止まらないどころか膝を無意識に屈して頭を垂れてしまったのだが。

続く月の件も同様に早期解決させた。

封魔天蓋魔封陣を一回しか使っていなかったのでベルゼブブの魔核を速攻で抜いた後、造魔と纏めて葬り去った。

その余りの事態終結の早さに様子を探ろうとしたアシユタロスは啞然としたそうだ。

もっとも既に魔界の居城を捨て行動を開始した身としては引くに引けなかったが。

月の件を終え、何故か月神族を配下に治めてから悠然と帰還した蛭は老師の指摘する美智恵の今後の動きを大丈夫の一言で済ませ、今後の準備に取り掛かった。

最早蛭にとって美神美智恵は障害でもなんでもなくなっていたのだ……今後も女性体が主体になるということは蛭の考え方にも多大な

る影響を及ぼしていた。

当然一番の要因は女帝モードだが……月の魔力を支配下に置いた蚩には最早死角はなかった。

その後、チャクラを解放し自ら太極天を名乗る決意をした蚩の様相は神魔化したことでより神秘性を高め美しさが増した……蚩自身も既に割り切り受け入れより女性らしく振舞うようになった。

その姿を拝見した全世界の民衆はザンス王国と劣らぬほどの信仰振りを見せる。

蚩はフェンリルの時とは逆に女神然とした暖かな微笑みで持つて演説したからだ。

……結果、転化後であるにも拘らず更なる霊圧の増加が起こった……老師が戦慄するほどに。

ちなみに傍でその蚩の演説を聞いていたヒヤクメは余りの違いっぷりに戦慄を隠せなかった。

『（女帝モードだけでも凄まじいのに、女神モードまで搭載しておられるなんて……蚩様、恐ろしい御方なのね）。なんか女王様モードも搭載してそうだし』

「ヒヤクメ？」

『ひゃい！』

「……分かっているわよね？ふふふ」

『……モチロンドス、コノヒヤクメゼツタイノチュウセイヲモツテホタルサマニオツカエスルシヨゾンドス』

真つ青な顔をしながらも片言で返すヒヤクメに満足げに微笑む蚩……哀れなヒヤクメは既に虫の息だ。

その後、逆天号が亜空間から出る直前に気付いたヒヤクメが神速の報告をし、蚩は恋人達を伴って転移した。

ヒヤクメは転移する前に蚩の頭撫でを受けて陶然としていた……ど



うやら飴と鞭で飼い慣らされてしまったらしい。

ケース2：逆天号の場合

「……どうやら襲撃は無いようだな。一体どうなっておるのだ？まあいい、お前たち早速近くの拠点から潰していくぞ！」

『『了解！』でちゅ！』

「それは勘弁して貰いたいわね、私的には」

「ッ？！な、何者っ！？」

「悪を征して魔を愛する者・愛の伝道師参上！」  
ラザ・エバンジェリスト

『愚を捌き愛を抱く天女・狐妃参上！』  
フォックス・クイーン

『善を慈しみ神を律する乙女・どじっ子参上！』  
ナイチチちゃん

すかっ？！』

『怒りを胸に抱き悲しみを癒す乙女・魔女っ子参上！』  
メイドちゃん

っ子だーッ！？』

「な？……何者だ？」

『そこで素面に戻るなっ！恥ずかしいだろうがっ！あとこのカンペ書いた奴誰だーッ？！』

『そうです、って言うか私はナイチチじゃないですっ！訂正を要求します！！』

『そういう貴女達も空気を読んで欲しいものね、この駄竜に駄蛇が』  
『『ひどっ？！』』

突如乱入してきたのは顔をマスクで隠した珍妙な輩だった。

土具羅たちは啞然としていた……一人パピリオだけは瞳をキラキラさせていたが。

言わずもがな蛸達なのだが相手のペースを奪おうという事で急遽実行されたのがこの登場の仕方だった。

ちなみにカンペを書いたのは老師と蛸である。

蛸は「あれ？すべったかな？」と呟きつつもマスクを脱ぎ質問に答えることにした……若干戦闘前から小竜姫とメドーサがダメーシ受

けているが、まあ良しとしよう

その後、土偶羅達との会話を経て蛭は悠然とエネルギー供給室へと歩を進めた。

「はいはい、暴れちゃ駄目よ。大人しく私とアシユの所へ行きましようね」

「コラ！離せ?!離さんか?!」

「……黙りなさい、この　　口が」

「ヒイ?!」

煩わしくなった蛭が低く呟くと土偶羅は大人しくなった……主に恐怖とショックで。

蛭達が部屋に入った時、アシユタロスは疑問の声をあげていた。

『どういうことだ?確かに亜空間から出た筈、なれば侵攻を開始して拠点の一つや二つ落としていてもおかしくない筈なのに』

「その疑問に答えてあげましょうか?アシユタロス」

『ッ?!誰だ!』

アシユタロスが石像を介して見詰める視線の先には土偶羅を抱えた蛭の姿があった。

その姿は人ではなく神でもなく魔でもなく……それ以上の恐るべき何か。

『(何者なんだ?!私が此処までの恐怖を感じるとは!?)』

そして其処に飛び込んでくる彼の配下の姉妹と玉藻達。

そして蛭の自己紹介に驚愕するアシユタロス。

驚きが冷めない内に次々と明かされる情報に翻弄される彼はいつし

か蛭の前へと姿を現していた。  
……まるで導かれるように。

「君は一体何者なのだ？ 私は恐怖公などと呼ばれているが、その私  
がこれまでに感じたことがない恐れを抱いている」

「ふっ、別に大した存在じゃないわよ？ 只愛する恋人の為に必死に  
生きてきた者つてだけの存在だからね。強さ的には500万マイル  
つて所だけだ」

「ご、ごひやくまん?!」

「まあ、私は特殊な文珠使いで双文珠つて言うのと巴文珠つて言う  
文珠を使えるから実質その100倍は堅いけどね」

「……ツ?!」

「そんな事より貴方には私の相方として働いて貰うわよ？ この美し  
い世界を下らない輩に蹂躪させない為にね」

「……しかし私は」

「言ったでしょ？ 下らない輩に蹂躪させない為につて。貴方には豊  
穡の女神として世界に再降臨して貰うから」

「……は？」

蛭の言葉に呆然とするアシユタロス。

それもそうであろう。

未来では自身を悪という存在から解放しようとして失敗していると  
言われたばかりだから。

しかし蛭は平然と言い切った。

「大丈夫よ。貴方に代わってナタナエルが魔神として墮天すること  
を確約してくれているから」

「彼が？」

「既に南極到達不能極で待っている筈よ」

「……………」

突如湧いた悪からの解放への道に途惑うアシユタロス。  
それも神魔最高指導者達が施すような物ではなく同じ苦しみを味わった者からの提案だ。  
しかし此処でも蚩は自重しない。

「言つとくけど絶対に従って貰うからね？貴方は既に私の相方なんだから……あ、心配しなくてもキーヤンやサツちゃん達には手を出させないから安心してね」

『……分かった、従おう』

「本当?!よかったあ……従ってくれなきゃどうしようかと思つちやったわ、ふふふふ」

『し、心配しなくともきちんとして従います!だからその笑みは止めて下さい、御願います?!』

得体の知れない恐怖に恥も外聞もなく卑屈になるアシユタロス。

ベスパや土偶羅は最早涙目だ。

玉藻やメドーサそしてルシオラは乾いた笑みを浮かべ、小竜姫とパピリオはその凄さに目を輝かせている。

……肩のルシオラは蚩の影響を受けてか同じく黒い笑みを浮かべていたが。

そして到着する南極大陸・到達不能極。

合流した何故かアシユタロスと同様に卑屈なナタナエルと共にバベルの塔へと入る蚩達。

そしてコスモプロセッサを起動しルシオラたちの寿命を延ばしたり太極天の意識を復活させたりした後、めでたく魔神アシユタロスは女神イシユタルに熾天使ナタナエルは魔神ナタナエルへと変貌した。

本来天使が魔に堕ちる時、無上の痛みや苦しみなどが起こるのだが

諸事情により既に受け入れていたナタナエルには一切そういう事は起こり得なかった。

この後、ナタナエルは蛭に一礼した後アシユタロスの宮殿へと赴いていき、他の魔王達との会合を持った……魔界の蛆虫共を駆逐する為に。

一方残った蛭達はというと、龍珠のルシオラと合体した蛭が強制召喚したキーヤんとサツちゃんをイシユタルと共に苛め抜いて貶し捲くっていた。

『うう、酷いです。私も頑張ってお手伝いしましたのに』

『ほ、ほんまやで。わいも出来る限りの事したやんか』

『黙りなさい、犬共。キャンキャン吠えるんじゃないわ、鬱陶しい』

『は、はい』

『こ、これが最高指導者の長なの？情けなすぎますわ?!』

『現実なんてこんなものよ？だから私達で引つ掻き回すのよ、濁らない様に、ね。ふふふ』

『いいですわね……喜んで御手伝いさせて貰いますわ、ふふふ』

この上なく怯えるキーヤんとサツちゃん。

玉藻達は既に達観してしまっただのか平然としていた……ベスパヤ土偶羅はちよつと煤けていたが。

何気に女言葉に戻り蛭と同じく黒い笑みを浮かべるイシユタル。

今此処に世界を裏から操る真の支配者連合が生まれた。

『サツちゃん……私達どうなるんでしょうか？』

『知らんがな……ああ、蛭様凜々しいなあ。下僕と呼んで貰えんやるか？』

『ちよ、サツちゃん?!そっちに行ったら駄目ですよー?!いつちやだめえー!?!』

罵倒され捲くつて新たな扉を開けてしまったサツちゃんと一人正常な意識のまま蚩達に弄られ続ける事となったキーやんに幸あれ。

この後コスモプロセスにより女神イシュタルと魔神ナタナエルの存在を世界に認めさせ、今回の蚩の戦いは魔界に囚われていた女神イシュタルを救出する為のものへと記憶を書き換えた。

無論世界に存在するアシタロスに関する記憶や記録はばやかしたり封印したりすることも忘れなかった。

ちなみに完全に消さないのはアシタロスとして辿ってきた陰しく悪と呼ばれる道のりもまたイシュタルの物であり忘れてはならないものだからだ。

こうしてイシュタルは世界に歓迎され、アシタロスの記憶が表面上は無くなったお蔭で今までやってきたことを問い詰められる美神美智恵。

イシュタルは今までの悪行を償う為に精力的に働き世界を浄化することに邁進した……これによってGSの必要性も限定的なものとなった、少なくとも攻撃的な能力者は無用となることが確定した。

その過程で過激派共は悉く封印処理を受けその後姿を現すことがなかったのは余談である。

替わって美神美智恵は事態がまるで飲み込めずあわを食うだけで、要領を得なかった政府の者達は彼女を強制労働に就かせる事で矛を収めた。

後ろ盾が無くなり、家族も離散し、いつの間にか能力も無くなっていった彼女は解放された後も何か出来る訳でもなく大人しいものだった。

そして美神令子はというと、世界の澱みが出来難くなり霊能者の必要性が限定的になるといふ事態にあわを食った……何せ自分を一番生かせる分野が低迷すると言っただ当然だろう。

結果、茫然自失となった彼女はすっかり大人しくなり西条氏と静かに余生を過ごしたそう……もつとも金に執着を見せるところは変

わらず西条氏にとっては散々だったようだが、まあその内痛い目を見るだろう。

そして、我らが女帝女神蚩様はというと……最高指導者たちの下で上と下に睨みを利かせつつ恋人達と異世界探索を行っていた。

主に太極天時代に眷属とした仲間を再集結する事が目的だ。

今の蚩であれば例え時間軸が違えど見つけ出すことは難しくない筈だからである。

たまにイシユタルと連携して世界を見守りつつ異世界を探索する彼女は漸く訪れた平穏を謳歌していた。

世界は概ね平和に周っているようだ。

その? : ああ、蛭さまっ (後書き)

最後がグダグダなのは煌星クオリティー ……駄目だ、こいつh)

ry

すみません (土下座)

逆行編とIF編の最後はいずれ修正します ……多分。

ちなみにナタナエルは蛭の様相に早々忠臣へとジョブチェンジしていたので墮天の痛みなどありえませんでした (えー

IF編の後もう一つの人外の国編は無期延期になりました。

9月より始まる異伝もよろしく御願いたします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8027/>

---

刹那の愛の反逆

2011年6月14日08時19分発行